

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—28—

朝倉郡朝倉町所在狐塚南遺跡の調査

1994

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—28—

朝倉郡朝倉町所在狐塚南遺跡の調査



a、狐塚南道路全景



b、西部調査区全景



a、出土陶磁器



b、出土陶磁器

序

本書は、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて、昭和54年度から実施している、九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財の調査報告書であります。

九州横断自動車道関係の発掘調査は昭和63年度に完了いたしておりますが、今回の報告はこのうちの昭和60年度に行った朝倉郡朝倉町所在の狐塚南遺跡の調査についてのものであります。

調査に際しましては、地元の方々をはじめ関係各位のご協力をいただき、多大な成果をあげることができました。深く感謝いたします。

なお、本書が文化財愛護思想の普及、学術研究に役立つことを望みます。

平成6年3月31日

福岡県教育委員会
教育長 光安 常喜

例　言

1. 本書は、昭和60年度に福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて実施した、九州横断自動車道建設によって破壊される埋蔵文化財の発掘調査報告書で、九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第28冊目にあたる。
2. 出土遺物は、県文化課古木事務所・太宰府事務所および九州歴史資料館において整理したが、実施にあたり九州歴史資料館の横田義幸と岩瀬正信・豊福弥生・平田春美の協力を得た。
3. 出土赤色顔料の分析は、福岡市埋蔵文化財センターの本田光子氏と宮内庁正倉院事務所の成瀬正和氏にお願いした。
4. 掲載写真のうち、遺構写真は小池史哲が撮影し、遺物写真撮影には九州歴史資料館の石丸洋および北岡伸二の協力を得た。なお、航空写真は国土地理院提供の写真を使用した。
5. 掘図のうち、遺構実測図は小池、伊崎俊秋・小田和利・武田光正・日高正幸・高田一弘・樋口秀信・平嶋文博が実測し、遺物実測図は小池と、平田・若松三枝子・岡由美子・田中典子・棚町陽子・友永澄子・久富美智子・坂田順子が実測した。また図面の添書には豊福・原カヨ子の助力を得た。
6. 掘図で使用する方位は、座標北に統一している。
7. 本書の執筆は、小池と、IVを武田・VIIを本田光子・成瀬正和が分担した。
8. 本書の編集は、小池史哲が担当した。

本文目次

きつねづかみなみ
狐塚南遺跡の調査

I 調査の経過	1
II 位置と環境	9
III 縄文時代の遺物	13
1. 縄文土器	13
2. 石 器	14
3. 小 結	15
IV 弥生時代～古代の生活遺構と遺物	17
1. 住居跡	17
2. 壁穴住居の諸問題について	62
V 弥生～古墳時代の墓地遺構と遺物	69
1. 石棺墓	69
2. 木棺墓	81
3. 石蓋横穴土壙墓	89
4. 土壙墓	90
5. 墓地周辺の遺物	98
6. 小 結	99
VI 歴史時代の遺構と遺物	101
1. 掘立柱建物	101
2. 土壙墓	101
3. 築石土壙	118
4. 土 壙	128
5. 溝状遺構	242

6.	その他の遺構と遺物	264
7.	小 結	282
■	狐塚南遺跡出土の赤色顔料について	284
■	おわりに	288

図 版 目 次

- 卷頭図版1-a 狐塚南遺跡全景上空写真
 -a 西部調査区全景上空写真
 2-a 出土陶磁器
 -a 出土陶磁器

	本文对照表	
図 版 1	狐塚南遺跡周辺航空写真	1
図 版 2-1	狐塚南遺跡周辺遠景	1
2-2	狐塚南遺跡全景上空写真	1
図 版 3-1	狐塚南遺跡南側調査区全景	1
3-2	狐塚南遺跡南側調査区全景	1
図 版 4-1	南側調査区全景	1
4-2	出土縄文時代の遺物	13
図 版 5-1	調査中の住居跡群	17
5-2	西側調査区全景	17
図 版 6-1	4号住居跡カマド	20
6-2	5号住居跡カマド	23
6-3	8号住居跡カマド	25
図 版 7-1	14号住居跡	29
7-2	14号住居跡カマド	29
7-3	18~23号住居跡	33
図 版 8-1	19号住居跡カマド	34
8-2	20号住居跡カマド	36
8-3	21号住居跡カマド	37
図 版 9-1	24・25号住居跡カマド	40
9-2	27号住居跡内下層土壙	41
9-3	30号住居跡	46
図 版 10-1	30号住居跡カマド	46
10-2	32号住居跡	46
10-3	32号住居跡遺物出土状況	48
図 版 11-1	32号住居跡カマド	47
11-2	33号住居跡	49
11-3	33号住居跡カマド	50
図 版 12-1	37号住居跡カマド	53

12-2	42号住居跡	56
12-3	42号住居跡	56
図 版 13-1	42号住居跡柱穴	56
13-2	42号住居跡柱穴	56
13-3	42号住居跡入口部	56
図 版 14-1	42号住居跡入口部	56
14-2	42号住居跡遺物出土状況	56
14-3	42号住居跡遺物出土状況	56
図 版 15-1	43号住居跡	60
15-2	43号住居跡	60
15-3	43号住居跡入口部	60
図 版 16	住居跡出土遺物	19
図 版 17	住居跡出土遺物	56
図 版 18-1	北部墓地群南半全景	69
18-2	北部墓地群南半近景	69
図 版 19-1	北部墓地群北半全景	69
19-2	北部墓地群北半全景	69
図 版 20-1	1号石棺墓	69
20-2	1号石棺墓	69
20-3	2号石棺墓	69
図 版 21-1	3号石棺墓	70
21-2	3号石棺墓	70
21-3	3号石棺墓遺物出土状況	70
図 版 22-1	4号石棺墓	72
22-2	5号石棺墓	72
22-3	6号石棺墓	74
図 版 23-1	7号石棺墓	74
23-2	8号石棺墓	75
23-3	9号石棺墓	77
図 版 24-1	10号石棺墓	78
24-2	蓋石除去後の10号石棺墓	78
24-3	11号石棺墓	78
図 版 25-1	12号石棺墓	79
25-2	13号石棺墓	80
25-3	13号石棺墓	80

図 版 26-1	14号石棺墓	81
26-2	1号木棺墓	81
26-3	1号木棺墓	81
図 版 27-1	2号木棺墓	84
27-2	3号木棺墓	84
27-3	4号木棺墓	86
図 版 28-1	5号木棺墓	86
28-2	6号木棺墓	86
28-3	7号木棺墓	88
図 版 29-1	検出時の1号石蓋横穴土壙墓	89
29-2	1号石蓋横穴土壙墓	89
29-3	1号石蓋横穴土壙墓	89
29-4	同 鉄製品出土状況	89
図 版 30-1	1号土壙墓	90
30-2	2号土壙墓	91
30-3	3号土壙墓	92
図 版 31-1	4号石蓋土壙墓	92
31-2	5号石蓋土壙墓	92
31-3	5号石蓋土壙墓	92
31-4	5号石蓋土壙墓内遺物出土状況	92
図 版 32-1	6号土壙墓	92
32-2	7号土壙墓	94
32-3	8号土壙墓	94
図 版 33-1	9号土壙墓	94
33-2	10号土壙墓	94
33-3	11号土壙墓	96
図 版 34-1	12号土壙墓	96
34-2	13・14号土壙墓	96
34-3	15号土壙墓	98
図 版 35-1	16号土壙墓	98
35-2	墓地群出土遺物	72
図 版 36-1	歴史時代の遺構群	101
36-2	歴史時代の遺構群	101
図 版 37-1	1号土壙墓	101
37-2	2・3号土壙墓	101

37-3	4号土壙墓	104
図 版 38-1	5号土壙墓	104
38-2	6号土壙墓	105
38-3	7号土壙墓	105
図 版 39-1	8号土壙墓	105
39-2	9号土壙墓	105
39-3	10号土壙墓	105
図 版 40-1	11号土壙墓	108
40-2	12号土壙墓	108
40-3	13号土壙墓	108
図 版 41-1	14号土壙墓	108
41-2	15・16号土壙墓	109
41-3	17号土壙墓	109
図 版 42-1	18号土壙墓	109
42-2	19号土壙墓	109
42-3	20号土壙墓	112
図 版 43-1	21・23号土壙墓	112
43-2	21号土壙墓	112
43-3	22号土壙墓	112
図 版 44-1	23号土壙墓	112
44-2	24号土壙墓	114
44-3	25号土壙墓	114
図 版 45-1	26号土壙墓	114
45-2	27号土壙墓	114
45-3	28号土壙墓	114
図 版 46-1	検出時の1号集石土壙	119
46-2	1号集石土壙	119
46-3	1号集石土壙堆積状況	119
図 版 47-1	1号集石土壙堆積状況	119
47-2	2号集石土壙	120
47-3	3号集石土壙と3号溝	121
図 版 48-1	3号集石土壙遺物出土状況	121
48-2	11号土壙遺物出土状況	136
48-3	11号土壙遺物出土状況	136
図 版 49-1	16・71・72号土壙	147

49-2	62~70・80号土壤	166
図 版 50-1	15号土壤遺物出土状況	147
50-2	16号土壤遺物出土状況	147
50-3	16・71・79号土壤	147
図 版 51-1	72号土壤遺物出土状況	189
51-2	72号土壤遺物出土状況	189
51-3	94号土壤遺物出土状況	200
図 版 52-1	88号土壤	198
52-2	133号土壤	222
52-3	133号土壤堆積状況	222
図 版 53-1	150・151号土壤	232
53-2	150号土壤堆積状況	232
53-3	164号土壤	239
図 版 54-1	3号溝と93・94・96号土壤	249
54-2	1号製鉄炉跡	264
54-3	2号製鉄炉跡	265
図 版 55-1	土器埋納ピット	266
55-2	古錢埋納ピット	266
55-3	西端調査区	101
図 版 56	土壤墓出土金属製品・集石土壤出土土器	120
図 版 57	土壤出土土器1	136
図 版 58	土壤出土土器2	120
図 版 59	土壤出土土器3	172
図 版 60	土壤出土土器4	172
図 版 61	土壤出土土器5	189
図 版 62	土壤出土土器6	217
図 版 63	集石土壤出土石製品・土壤出土土製品・鉄製品	166
図 版 64	土壤出土石製品・古錢	136
図 版 65	溝状遺構出土土器1	242
図 版 66	溝状遺構出土土器・土製品	244
図 版 67	溝状遺構出土石製品・ピット出土土器・古錢	242
図 版 68	ピット出土土器2	266
図 版 69	ピット出土土器3・石製品	266
図 版 70	ピット出土金属器・玉類・包含層出土土器・土製品・金属器・石製品	266

挿 図 目 次

第 1 図	九州横断自動車道関係路線図 (1/780000)	2
第 2 図	狐塚南遺跡周辺地形図 (1/10000)	6
第 3 図	狐塚南遺跡周辺遺跡分布図 (1/50000)	8
第 4 図	狐塚南遺跡地形図 (1/2000)	10
第 5 図	狐塚南遺跡地区割図	12
第 6 図	縄文時代の土器実測図 (1/3)	13
第 7 図	縄文時代の石器実測図 (1/2)	14
第 8 図	住居跡配置図 (1/500)	16
第 9 図	1・2号住居跡実測図 (1/60)	17
第 10 図	3号住居跡実測図 (1/60)	18
第 11 図	3号住居跡カマド実測図 (1/30)	18
第 12 図	3～5・7号住居跡出土遺物実測図 (1/2・1/3)	19
第 13 図	4・6号住居跡実測図 (1/60)	20
第 14 図	4号住居跡カマド実測図 (1/30)	21
第 15 図	5・7号住居跡実測図 (1/60)	22
第 16 図	5号住居跡カマド実測図 (1/30)	22
第 17 図	8～12号住居跡実測図 (1/60)	24
第 18 図	8・13・14号住居跡出土遺物実測図 (1/4)	26
第 19 図	13・14号住居跡実測図 (1/60)	28
第 20 図	15号住居跡実測図 (1/60)	29
第 21 図	16・17号住居跡実測図 (1/60)	29
第 22 図	16・17・20号住居跡カマド実測図 (1/30)	30
第 23 図	16～20号住居跡出土遺物実測図 (1/3・1/4)	32
第 24 図	18号住居跡実測図 (1/60)	33
第 25 図	19～23号住居跡実測図 (1/60)	35
第 26 図	21号住居跡カマド実測図 (1/30)	36
第 27 図	21・24・25・27号住居跡出土遺物実測図 (1/3・1/4)	37
第 28 図	24・25号住居跡実測図 (1/60)	39
第 29 図	26号住居跡実測図 (1/60)	41
第 30 図	27～29号住居跡実測図 (1/60)	42
第 31 図	28・30・32号住居跡出土遺物実測図 (1/3・1/4)	44
第 32 図	30・31号住居跡実測図 (1/60)	45
第 33 図	30号住居跡カマド実測図 (1/30)	45

第34図	32号住居跡実測図(1/60)	47
第35図	32号住居跡カマド実測図(1/30)	47
第36図	33~36号住居跡実測図(1/60)	48
第37図	33号住居跡カマド実測図(1/30)	48
第38図	33~35・38・39号住居跡出土遺物実測図(1/3・1/4)	49
第39図	34号住居跡カマド実測図(1/30)	50
第40図	37・38号住居跡実測図(1/60)	52
第41図	37号住居跡カマド実測図(1/30)	53
第42図	38号住居跡カマド実測図(1/30)	53
第43図	39号住居跡実測図(1/60)	54
第44図	39号住居跡出土玉類実測図(実大)	55
第45図	40・41号住居跡実測図(1/60)	55
第46図	42号住居跡実測図(1/60)	56
第47図	42号住居跡屋内土壙実測図(1/30)	57
第48図	42号住居跡出土遺物実測図(1/3・1/4)	58
第49図	43号住居跡実測図(1/60)	59
第50図	43号住居跡屋内土壙実測図(1/30)	60
第51図	43号住居跡出土遺物実測図(1/3・1/4)	61
第52図	群構成と集落の有り様	63
第53図	北側調査区墓地配置図(1/180)	68
第54図	1号石棺墓実測図(1/30)	70
第55図	2号石棺墓実測図(1/30)	70
第56図	3号石棺墓実測図(1/30)	71
第57図	3号石棺墓館内玉類出土状況実測図(1/15)	71
第58図	3号石棺墓出土玉類実測図(実大)	71
第59図	4~6号石棺墓実測図(1/30)	73
第60図	石棺墓出土土製品・鉄製品実測図(1/2)	74
第61図	7・8号石棺墓実測図(1/30)	75
第62図	9・11・12号石棺墓実測図(1/30)	76
第63図	10号石棺墓実測図(1/30)	77
第64図	13号石棺墓実測図(1/30)	79
第65図	14・15号石棺墓実測図(1/30)	80
第66図	1号木棺墓実測図(1/30)	82
第67図	2・3号木棺墓実測図(1/30)	83
第68図	4~6号木棺墓実測図(1/30)	85

第 69 図	木棺墓出土土器実測図 (1/3)	87
第 70 図	7号木棺墓実測図 (1/30)	88
第 71 図	1号石蓋横穴土墳墓実測図 (1/30)	90
第 72 図	1~4号土墳墓実測図 (1/30)	91
第 73 図	5~9号土墳墓実測図 (1/30)	93
第 74 図	10~12・17号土墳墓実測図 (1/30)	95
第 75 図	10号土墳墓出土鐵製品実測図 (1/2)	96
第 76 図	13~16号土墳墓実測図 (1/30)	97
第 77 図	土墳墓出土鐵製品実測図 (1/2)	98
第 78 図	土墳墓出土土器実測図 (1/3)	98
第 79 図	墓地周辺出土玉類実測図 (実大)	98
第 80 図	墓地周辺出土土器実測図 (1/3)	99
第 81 図	1~3・5号土墳墓実測図 (1/30)	102
第 82 図	4・6~8号土墳墓実測図 (1/30)	103
第 83 図	土墳墓出土土器実測図 (1/3)	104
第 84 図	9~12号土墳墓実測図 (1/30)	106
第 85 図	13・14・17号土墳墓実測図 (1/30)	107
第 86 図	12号土墳墓出土青銅製品実測図 (1/2)	108
第 87 図	15・16・18号土墳墓実測図 (1/30)	110
第 88 図	19・20・24号土墳墓実測図 (1/30)	111
第 89 図	21~23・27号土墳墓実測図 (1/30)	113
第 90 図	25・26・28・29号土墳墓実測図 (1/30)	115
第 91 図	30~33号土墳墓実測図 (1/30)	117
第 92 図	1号集石土墳実測図 (1/30)	118
第 93 図	集石土墳出土土器実測図1 (1/3)	119
第 94 図	2号集石土墳実測図 (1/40)	121
第 95 図	3号集石土墳実測図 (1/40)	122
第 96 図	集石土墳出土土器実測図2 (1/3)	123
第 97 図	集石土墳出土土器実測図3 (1/3)	124
第 98 図	集石土墳出土土器実測図4 (1/3)	126
第 99 図	集石土墳出土瓦実測図 (1/3)	127
第100図	集石土墳出土石製品実測図 (1/2)	127
第101図	土墳出土土器実測図1 (1/3)	128
第102図	土墳実測図1 (1/60)	129
第103図	土墳出土鐵製品実測図1 (1/2)	130

第104図	土壤出土土器実測図2 (1/3)	131
第105図	土壤出土土器実測図3 (1/3)	132
第106図	土壤出土土器実測図4 (1/3)	133
第107図	土壤実測図2 (1/60)	134
第108図	土壤実測図3 (1/60)	135
第109図	土壤出土石製品実測図1 (1/2)	136
第110図	土壤出土土器実測図5 (1/3)	137
第111図	土壤出土土器実測図6 (1/3)	138
第112図	土壤出土土器実測図7 (1/3)	139
第113図	土壤出土土製品実測図1 (1/2)	140
第114図	土壤出土石製品実測図2 (1/3)	141
第115図	土壤出土土器実測図8 (1/3)	142
第116図	土壤出土土器実測図9 (1/3)	143
第117図	土壤出土土器実測図10 (1/3)	146
第118図	土壤実測図4 (1/60)	147
第119図	16号土壤遺物出土状況実測図 (1/15)	148
第120図	土壤出土瓦拓影1 (1/3)	148
第121図	土壤出土土製品実測図2 (1/2)	149
第122図	土壤出土土製品実測図3 (1/2)	150
第123図	土壤実測図5 (1/60)	153
第124図	土壤出土土製品実測図4 (1/2)	154
第125図	土壤実測図6 (1/60)	157
第126図	土壤出土土器実測図11 (1/3)	158
第127図	土壤実測図7 (1/60)	162
第128図	土壤出土土器実測図12 (1/3)	163
第129図	土壤実測図8 (1/60)	167
第130図	土壤出土土器実測図13 (1/3)	168
第131図	土壤出土土器実測図14 (1/3)	169
第132図	土壤出土土器実測図15 (1/3)	170
第133図	土壤出土瓦拓影2 (1/3)	171
第134図	土壤出土石製品実測図3 (1/2・1/3)	173
第135図	土壤出土土器実測図16 (1/3)	174
第136図	土壤出土土器実測図17 (1/3)	175
第137図	土壤出土土器実測図18 (1/3)	178
第138図	土壤出土土器実測図19 (1/3)	179

第139図	土壤実測図9 (1/60)	181
第140図	土壤出土土器実測図20 (1/3)	183
第141図	土壤出土土器実測図21 (1/3)	185
第142図	土壤出土土器実測図22 (1/3)	186
第143図	土壤出土土器実測図23 (1/3)	187
第144図	土壤出土土器実測図24 (1/3)	190
第145図	土壤出土鉄製品実測図2 (1/2)	191
第146図	土壤出土土器実測図25 (1/3)	192
第147図	土壤出土土器実測図26 (1/3)	194
第148図	土壤実測図10 (1/60)	196
第149図	土壤実測図11 (1/60)	199
第150図	土壤出土土器実測図27 (1/3)	201
第151図	土壤出土石製品実測図4 (1/4)	202
第152図	土壤実測図12 (1/60)	204
第153図	土壤実測図13 (1/60)	209
第154図	土壤出土土器実測図28 (1/3)	210
第155図	土壤出土土器実測図29 (1/3)	213
第156図	土壤実測図14 (1/60)	215
第157図	土壤出土土器実測図30 (1/3)	216
第158図	土壤実測図15 (1/60)	219
第159図	土壤実測図16 (1/40)	220
第160図	土壤出土土器実測図31 (1/3)	221
第161図	土壤出土土器実測図32 (1/3)	224
第162図	土壤実測図17 (1/60)	227
第163図	土壤実測図18 (1/60)	229
第164図	土壤出土土器実測図33 (1/3)	230
第165図	土壤実測図19 (1/60・1/40)	233
第166図	土壤出土瓦拓影3 (1/3)	234
第167図	土壤出土土器実測図34 (1/3)	236
第168図	土壤実測図20 (1/80)	238
第169図	土壤出土土器実測図35 (1/3)	239
第170図	土壤出土土器実測図36 (1/3)	240
第171図	溝出土土器実測図1 (1/3)	243
第172図	2号溝・8号溝断面土層図 (1/20)	244
第173図	溝出土土器実測図2 (1/3)	245

第174図	溝出土土器実測図3 (1/3)	246
第175図	溝出土石製品実測図 (1/2・1/3)	247
第176図	溝出土土製品実測図 (1/2)	248
第177図	3号溝実測図 (1/80)	249
第178図	溝出土土器実測図4 (1/3)	251
第179図	溝出土土器実測図5 (1/3)	252
第180図	溝出土土器実測図6 (1/3)	253
第181図	溝出土土器実測図7 (1/3)	255
第182図	溝出土瓦拓影1 (1/3)	257
第183図	溝出土土器実測図8 (1/3)	259
第184図	溝出土土器実測図9 (1/3)	260
第185図	溝出土瓦拓影2 (1/3)	261
第186図	製鉄炉跡実測図 (1/15)	264
第187図	2号製鉄炉跡付近出土土器実測図 (1/3)	265
第188図	古錢出土石敷ビット実測図 (1/10)	265
第189図	ビット埋納土器実測図 (1/3)	266
第190図	ビット出土土器実測図1 (1/3)	267
第191図	ビット出土土器実測図2 (1/3)	268
第192図	ビット出土土器実測図3 (1/3)	270
第193図	ビット出土土器実測図4 (1/3)	271
第194図	ビット出土土器実測図5 (1/3)	273
第195図	ビット出土瓦拓影 (1/3)	274
第196図	ビット出土石製品実測図 (1/2・1/3)	275
第197図	ビット出土金属器実測図 (1/3)	276
第198図	ビット出土玉類実測図 (実大)	276
第199図	包含層出土土器実測図1 (1/3)	277
第200図	包含層出土土器実測図2 (1/3)	278
第201図	包含層出土土器実測図3 (1/3)	280
第202図	包含層出土瓦拓影 (1/3)	281
第203図	包含層出土土製品実測図 (1/2)	281
第204図	包含層出土石製品実測図 (1/3)	281
第205図	包含層出土青銅製品実測図 (1/2)	282
第206図	包含層出土鐵製品実測図 (1/2)	282
第207図	蛍光X線スペクトル図	286
第208図	X線回折図	287

表 目 次

表1 3号石棺墓出土玉類一覧表	72
表2 16号土壙出土土錘一覧表	148

付 図 目 次

付図1 狐塚南遺跡遺構配置図 (1/200)
付図2 狐塚南遺跡弥生時代～古墳時代墓地群配置図 (1/60)

I 調査の経過

発掘調査の経過

昭和60年度には、甘木・小郡工事区では構造物工事から盛土工事へほぼ移行していく甘木市柿原採土場から本線内への土砂搬出は最盛期を迎えていた。朝倉工事区でも構造物工事がかなり進行していて、文化財対象外区域や調査終了地点での盛土工事に至っていた。そして朝倉工事区での採土場は朝倉町山田サービスエリア用地であった。狐塚南遺跡の所在する朝倉町入地のSTA.172.4～STA.174.0の第22地点は、試掘調査の結果や地形からみて、路線内全域に遺構が分布すると予想され、工事側からは盛土用土砂運搬路のネックとなっていた。

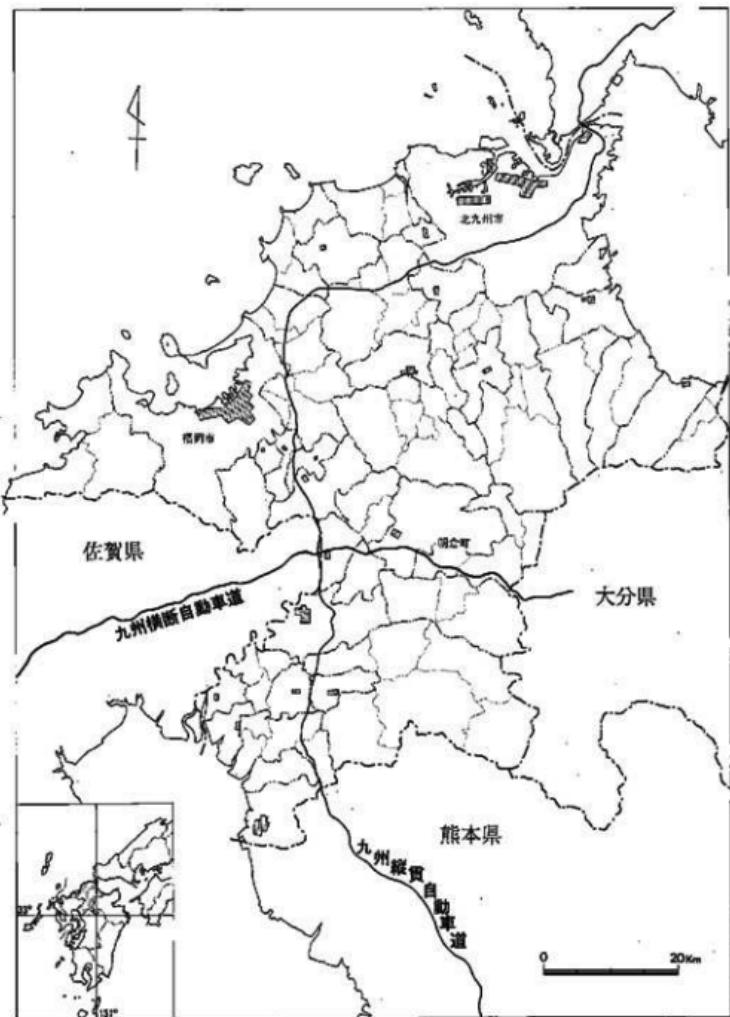
このような状況のなか、柿原採土場と地区の一部を残すが大半の調査を昭和60年4月30日に終了した班が、引き続き5月2日から狐塚南遺跡の調査にあたることになった。

重機を用いた表土剥ぎから始め、排土はかなりの量に達するためダンプカーで他地点に搬出した。作業員を投入しての発掘作業は、連休明けの13日から遺構検出作業を始めたが、火山灰土の黒ボクでの識別は容易ではなく、少しずつ削りながらの検出で、排土はベルトコンベヤーを繋いで排出したが、工事用の仮設道路を確保するため全面を一度に剥ぐことは叶わず、北東側に10m幅を残した。奈良時代前後の住居跡、中世後半前の土壤群・溝と無数の柱穴状ビットが発見されたが、5月27日に調査区横で電柱施設工事が始まるなど、工事も同時進行の状況である。

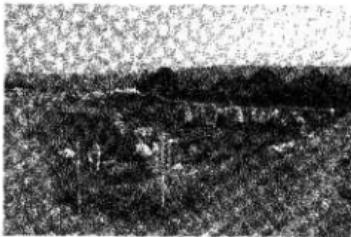
5月末からは仮設道路北側の表土を剥ぎ、石棺墓・土壤墓などの集中する墓地群に遭遇し、仮設道路下にも広がることも分かった。調査対象範囲の北西部を占めるが、この南側、現代墓地周辺は用地買収が片づかず、立入禁止範囲であったので様々な面でネックになっていた。最終的に対象区域全体を調査出来なかったのもこれに起因する。北側調査区部分は仮設道路切り替え時に是が非でも終了していなければならぬ場所でもあるため、ここでの調査を先行させることにしたが、カーブと坂を伴った部分に土砂を積んだ仮設道路のすぐ脇であるため、ダンプカーが通る度に砂埃が舞い上がり、作業は埃まみれの状態である。

6月10日に北端調査区のみの全景写真を撮影し、南側の調査区での住居跡・土壤群などの掘り下げ作業を並行させながら、翌11日から日曜日も返上しての実測・石棺墓解体などの作業は7月上旬までかかった。そして7月11日に工事区・工事施工業者の大木・梅林共同企業体と協議し、南側調査区の北東側仮設道路部分を7月17日から剥ぐこととなった。

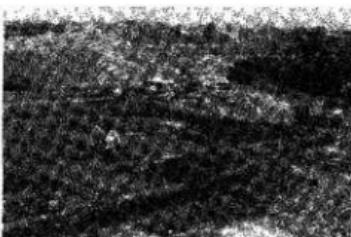
南側調査区と、奥道を挟んだ西側調査区では、南北側の切り替え工事用道路分を中心に掘り下げを進めた。6月20日に高所作業車のゴンドラから全景写真を撮影して、実測作業の主力は



第1図 九州横断自動車道関係路線図 (1/780,000)



調査風景 1



調査風景 2

こちらに移ったが、すぐ横で行われる、連日の墓地改葬に伴う人骨焼却の臭いにも悩まされる毎日でもあった。

7月23日から南側に仮設道路を通し、7月29日からは農道敷部分も表土剥ぎした。用地未解決部分は排土仮置き場として使用するのは許されていたが、剥ぐことはできない。北東部は、やはり奈良時代中心の住居跡、中世の土壤と、土壤墓の遺構が集中していた。

8月31日には大型台風が接近し、事前対策を講じていたが、遺構は水没し、トイレが飛ぶ、ユニットハウスが移動するなどの被害があった。9月2日に災害復旧をして、北東部の写真撮影のために清掃作業を開始し、9月7日に全景写真を撮る予定だったが降雨。北東側工事用道路工事工程が迫っていて、交渉で10日からの工事としたが、余裕は既に無く、ピット内や溝の水を完全に抜けないまま、9月9日に高所作業車から全景写真を撮影した。

9月13日からは、北側調査区の石棺墓・土壤墓などの墓地群の南側で表土剥ぎを開始した。墓地の緒きが次々と確認され、予想外にも木棺墓も発見され、約20基に達したが、これより南側を剥ぐことは叶わなかった。

採土場の方も、既に尻に火が付いた状況で、調査担当者の一人は8月から山田古墳群の地形測量調査に入っていたが、地形測量終了部分から表土剥ぎが出来るので、9月18日から重機を投入することにして、振塚南遺跡の墓地群は、また休日返納且つ降雨無関係で調査を実施した。9月17日に調査区全景写真を撮影し、日没まで実測を続けるを得ない。9月21日には、南側調査区の住居跡群部分も明け渡し、22日午後には降雨のなかボリューステルベースの方眼紙を用いての実測もほぼ終了した。そして、遺物の収納や図面の仮点検を済ませて、すべての調査が終了し、9月24日に明け渡した。

実測作業などには、他地点の調査担当者から種々の助力を得た。また、日々の調査では、住居跡遺構などに対し忍耐強く取り組む武田光正氏や、土壤墓などの遺構で執念のように土層観察を繰り返す橋口秀信氏などの、調査補助員の助力によるところが多い。現在彼らが第一線で

活躍される原動力は、ここでも既に培われていたと思う。

狐塚南遺跡では、調査対象面積5000m²のうち、調査実施面積は3420m²である。用地未解決部分は、用地解決と工事工程、文化財側の調査工程の間で、ついに調査を成しえなかつたのは、残念なことであった。

調査関係者

昭和60年度における、狐塚南遺跡の発掘調査関係者は次のとおりである。

日本道路公団福岡建設局

局長	今村 浩三
総務部長	安元 富次
管理課長	森 宏之
管理課長代理	佐伯 豊

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

所長	乗松 紀三
副所長	西田 功
副所長(技術)	中村 義治
庶務課長	徳永 昇
用地課長	岩下 剛
工務課長	後藤二郎彦
小郡工事区工事長	友田 義則
甘木工事区工事長	猪狩 宗雄
朝倉工事区工事長	小手川良和
杷木工事区工事長	山中 茂

福岡県教育委員会

統括 教育長	友野 隆
教育次長	安部 徹
管理部長	大鶴 秀雄
文化課長	前田 栄一
文化課長補佐	平 聖峰(現福岡県立美術館副館長)
文化課長技術補佐	宮小路賀宏(現九州歴史資料館学芸第二課長)
文化課参事補佐	栗原 和彦(現九州歴史資料館調査課長)
庶務 文化課庶務係長	平 聖峰(兼任)
文化課事務主査	長谷川伸弘(現小倉高等学校事務次長)

調査	文化課技術主査	井上 裕弘（現文化課参事補佐）
同	主任技師	高橋 章（現文化課参事補佐）
同	主任技師	佐々木隆彦（現九州歴史資料館参事補佐）
同	主任技師	小池 史哲（調査担当・現北九州教育事務所技術主査）
同	技師	伊崎 俊秋（現南筑後教育事務所技術主査）
同	技師	小田 和利（現九州歴史資料館主任技師）
同	文化財専門員	木村幾多郎（現大分市立歴史資料館長）
同	臨時職員	日高 正幸（調査担当・現小石原村教育委員会）
同	調査補助員	高田 一弘
		武田 光正（調査担当・現遠賀町教育委員会）
		樋口 秀信（調査担当・現佐賀県教育委員会）
		平島 文博（現三輪町教育委員会）
		田中 康信（現瀬高町教育委員会）
		柏原 孝俊（現小郡市教育委員会）
		佐土原逸男

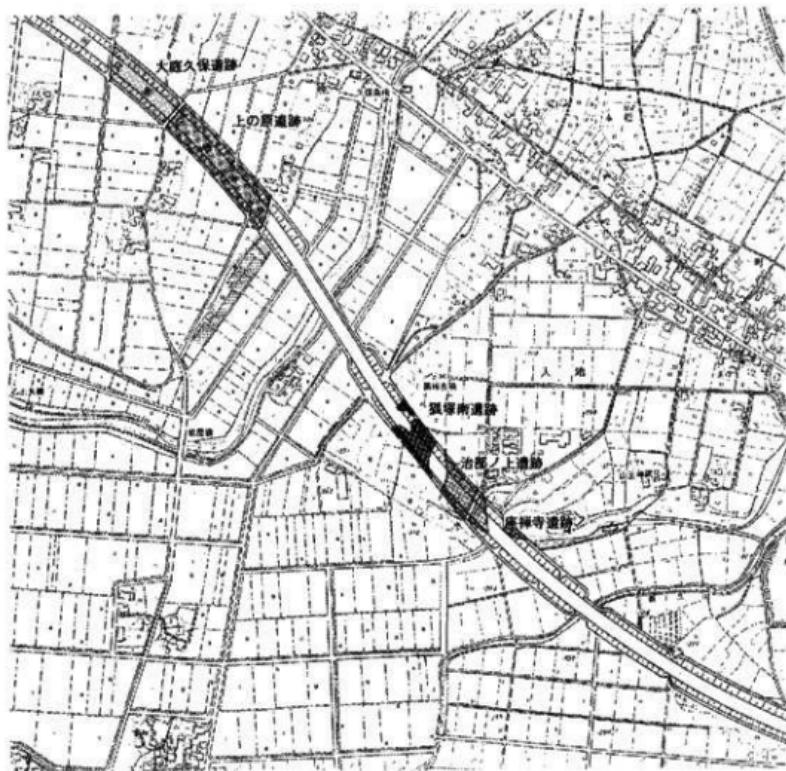
狐塚南遺跡の発掘作業には作業員として、地元朝倉町及び甘木市在住の、古賀藤夫・古賀チヅ・浦塙義則・仲山進・仲山シズカ・上野チエ子・上野ミツ子・森君子・石松芳子・古賀シズエ・井上シズエ・大盛アサ子・武内タツ子・福山法子・石松マサミ・目広子・吉松清子・田中澄子・菅原トミ子・一の宮通子・木下千寿子・諸岡フヨ・篠原清彦・牟田洋子・谷村京子・野田美知子・原野昌伸・高瀬岩男・江藤行忠・堀尾孝之の各氏が参加された。

遺物整理および報告書作成

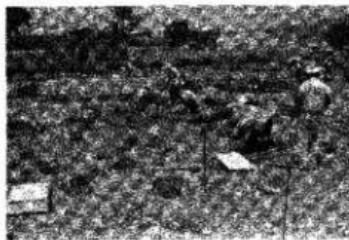
狐塚南遺跡出土の遺物は、発掘調査終了後に文化課甘木事務所で、水洗洗浄などの整理作業を経て、収蔵庫に保管された。

昭和61年度以降は、九州横断自動車道開通に向けて文化財の事前発掘作業は、休むことなく続けられ、遺物整理・報告書作成作業は先送りの状態であった。一方では、昭和62年2月に朝倉インターチェンジまで開通したが、平成2年度に開催される福岡国体までに道路整備を進めたいという意向もあり、県内各地で道路関係事業が進行した時期でもある。道路公團関係でも、椎田道路建設に関わる発掘調査がこの間に集中的に実施され、報告書作成業務量は雪だるま式に増加するばかりであった。

ともあれ、狐塚南遺跡に関わる報告書作成業務は、諸般の事情で平成5年度に実施されたこととなった。この遺跡から出土した遺物についての、復原整理作業は九州歴史資料館・文化課甘木事務所・文化課太宰府事務所において行い、報告書刊行のはこびとなつた。



第2図 狛塚南道跡周辺地形図 (1/10,000)



平成5年度の整理関係者は次のとおりである。

日本道路公団福岡建設局

局長	中島 英治（前任）	加藤 典史
次長	渡辺 国凡（前任）	三重野堅二
総務部長	三重野堅二（前任）	水田 章佳
管理課長	江良 信弘（前任）	九津見朝信
管理課長代理	塙本 文康（前任）	岡 芳則

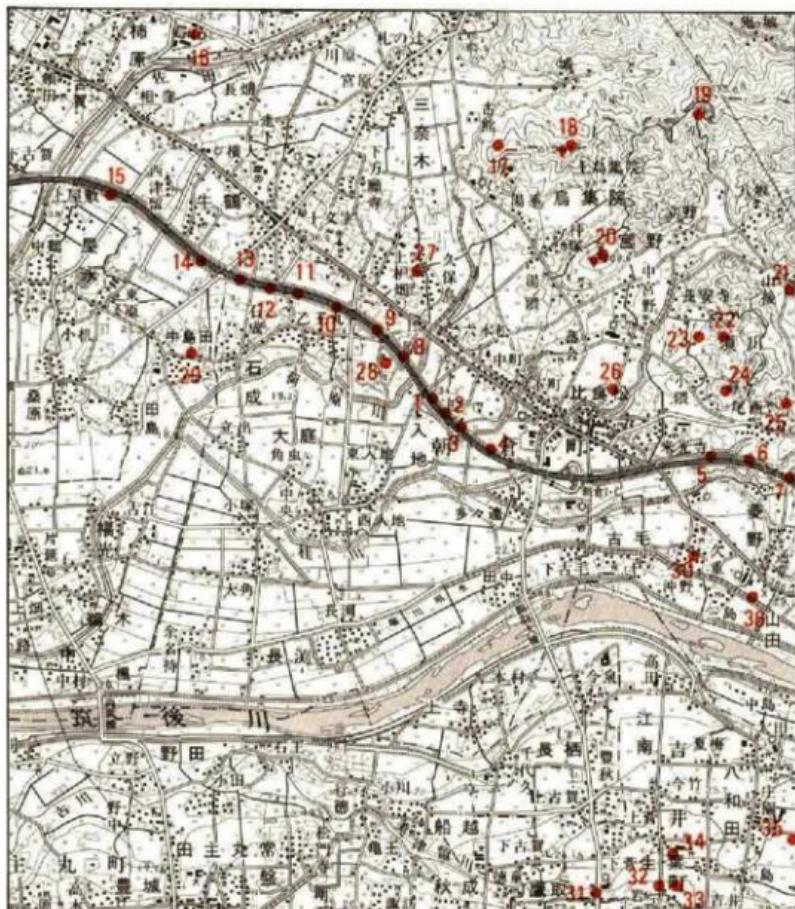
福岡県教育委員会

総括	教育長	光安 常喜
	教育次長	樋口 修資
	指導第二部長	丸林 茂夫
	文化課長	森山 良一
	同 文化財保護室長	柳田 康雄
	同 課長補佐	清水 圭輔
	同 室長補佐	井上 裕弘
庶務	同 管理係長	毛屋 信
	同 主任主事	安丸 重喜 久保 正志
整理	北九州教育事務所技術主事	小池 史哲（執筆担当）
	整理指導員	岩瀬 正信 豊福 弥生 平田 春美
遠賀町教育委員会文化財担当		武田 光正（執筆担当）

整理作業は、岩瀬整理指導員の下に中塩屋リツ子・小島佐枝子・石井紀美子・藤井カオル・祇上トシ子・武藤睦子・古賀陽子・高畠美智子が行った。遺物の写真撮影・焼き付け作業は九州歴史資料館参事補佐石丸洋の指導の下に北岡伸一・水ノ江明美・中島久美子が行い、金属器の保存処理は九州歴史資料館参考事補佐横田義章が担当した。また、遺物の実測・製図、図面類の整理整序作業には豊福・平田整理指導員の下に若松美枝子・闇久江・棚町鶴子・岡由美子・久富美智子・田中典子・坂田順子・原カヨ子・土山真由美・山崎綠・寺町恭代・小国みどり・古賀八重子・高島妙子・坂本恵津子・安永啓子・近藤京子・森綾子・徳永直子の各氏の手を煩わせた。

また、赤色顔料の分析調査には福岡市埋蔵文化財センターの本田光子氏と宮内庁正倉院事務所の成瀬正和氏の手を煩わせたほか、熊本県教育庁文化課の島津義昭氏から指導・助言を頂いた。

これら、関係者の皆様に感謝の意をあらわしたい。



第3図 狐塚南道路周辺遺跡分布図(1/50000)

- 1.狐塚南遺跡
- 2.治部ノ上遺跡
- 3.座禪寺遺跡
- 4.才田遺跡
- 5.長島遺跡
- 6.中妙見遺跡
- 7.原の東遺跡
- 8.上ノ原遺跡
- 9.大庭久保遺跡
- 10.西法寺遺跡
- 11.中道遺跡
- 12.石成久保遺跡
- 13.大環塙遺跡
- 14.塔ノ上遺跡
- 15.高原遺跡
- 16.柿原野田遺跡
- 17.古熊吉墳群
- 18.鳥集院1号墳
- 19.北八坂B古墳群
- 20.宮地嶽古墳群
- 21.赤林古墳群
- 22.長安寺塙跡
- 23.長安寺廃寺
- 24.小隈古墳群
- 25.上須田古墳群
- 26.八峯遺跡
- 27.久保島遺跡
- 28.上原遺跡
- 29.金川中島田遺跡
- 30.古毛遺跡
- 31.鷹取五反田遺跡
- 32.堺町遺跡
- 33.大庭遺跡
- 34.生葉1号墳
- 35.女塚古墳
- 36.朝倉三連水車

II 遺跡の位置と環境

狐塚南(Kituneduka-minami)遺跡は、福岡県朝倉郡朝倉町大字入地字狐塚2738・2739番地と字治部ノ上2693~2697・2699・2712~2715番地に亘る横断道路線内用地を発掘調査した。調査地点の約60m北側には県指定史跡の装飾古墳である狐塚古墳があり、狐塚古墳の南側に所在する遺跡として、狐塚南遺跡と呼称することにした。

遺跡は、朝倉山塊に源を発する荷原川と桂川に挟まれた扇状台地の南西端部に立地し、標高は27~30mである。このあたり一帯は、筑後川右岸の中位段丘崖を伴う地形で、遺跡の付近も沖積平野と5m以上の段差があり、1.5~2.0km南に流れる筑後川本流との間の沖積面では自然堤防上に集落が形成されている。

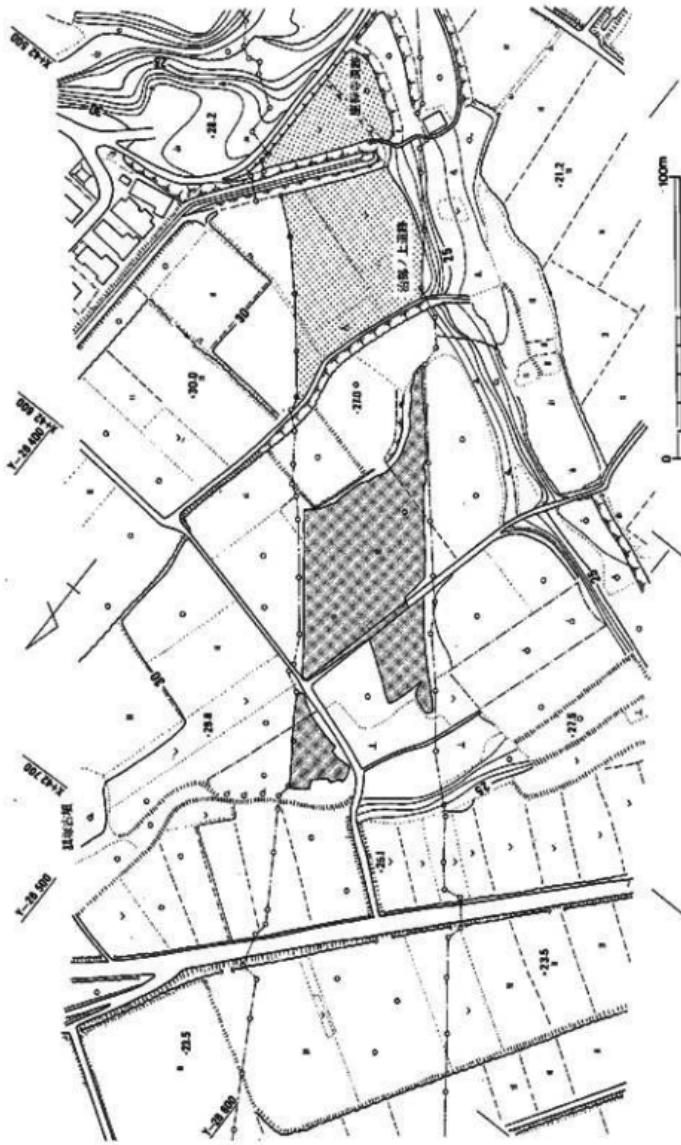
地質的にみると、遺跡の立地する段丘の表土及び表土下は黒ボク層で、火山灰起源の堆積土である。下層は八女粘土層が堆積し、さらに下は礫層である。八女粘土層は、灰白色粘土層部分と、その上に乗る鳥栖ローム層と呼ばれる黄褐色粘質土層がみられる。

九州横断自動車道は、甘木市から朝倉町西部では中位段丘上を通り、狐塚南遺跡とその南東側に隣接する治部ノ上遺跡や座揮守遺跡の占地する先端部から、沖積平野に降りて、朝倉インターチェンジに向かう。また、福岡市南部近郊と大分県日田市方面を結ぶ国道386号線は遺跡の約400m北側を北西→南東方向に走り、旧街道もその500~700m北側にある。朝倉町の中心部である比良松集落は桂川を街道が渡るあたり一帯に形成されていて、朝倉町役場は遺跡の約900m東側にある。土地利用では、段丘上は柿・葡萄などの果樹栽培と水田利用の米麦栽培、沖積平野では水田利用が主で、ビニールハウスによる博多方能葱、キュウリ・苺などの施設栽培も盛んに行われている。

歴史的環境

旧石器時代の遺跡としては、朝倉町菱野所在原の東遺跡でナイフ形石器などの包含層が調査されている。朝倉町山の神遺跡・上の宿遺跡でもナイフ形石器が出土していて、約21000年前のAT火山灰の降下の痕跡もみられる。また金場遺跡からは旧石器時代末期の細石器を含む文化層が確認されている。

縄文時代の資料は、横断道路の発掘調査によって急増している。早期の石組炉跡・集石構築が、原の東遺跡・金場遺跡・上の宿遺跡などで発見され、押型文土器の出土は朝倉町から杷木町にかけての路線内遺跡の過半数でみとめられる状況であり、狐塚南遺跡・治部ノ上遺跡か



第4圖 楊州南迴路地形圖 (1/2,000)

らも出土する。筑後川対岸の水繩山麓部の遺跡からも出土している。前期の遺構・遺物は狐塚南遺跡・治部ノ上遺跡・金場遺跡・上の宿遺跡・稗畠遺跡・外之隈遺跡・杷木町天國遺跡などから、中期の遺物は上の宿遺跡・稗畠遺跡などでみられる。後期は長島遺跡・上の宿遺跡・稗畠遺跡・杷木町の中町裏遺跡・上池田遺跡や、水繩山麓部の遺跡や吉井町月岡古墳周辺から出土し、浮羽町柳瀬遺跡で中頃から後半にかけての住居跡群が調査された。晩期の遺物も路線内の多くと、水繩山麓部の遺跡や吉井町塚堂遺跡などの筑後川自然堤防上の遺跡から出土している。堅穴住居跡・貯蔵穴・土壤などの遺構も多数調査され、当時の生活環境の復原に貴重な資料が多数得られた。また時期を特定し難いものの落とし穴状遺構の例も増加している。

弥生時代では、初期の遺跡として、文石墓4基や堅穴住居跡群などが検出された杷木町畑田遺跡がある。前期から後期の住居跡・貯蔵穴群は、中道遺跡・上の原遺跡・長島遺跡・原の東遺跡・鎌塚遺跡・長田遺跡・杷木宮原遺跡・中町裏遺跡・吉井町大碇遺跡・鷹取五反田遺跡などで調査されているが、近年マスコミを賑わせた甘本市平塚川派遺跡は筑後川支流小石原川の氾濫原の微高地に立地する。墓地では中期初頭～前半の木棺墓・堀棺墓が、大庭久保遺跡・上の原遺跡・原の東遺跡・上の宿遺跡・杷木宮原遺跡・中町裏遺跡などで調査され、後周末前後の墓地の調査も、長島遺跡・外之隈遺跡をはじめ多数実施され、狐塚古墳の北西側でも最近倉庫建設に伴って土壠墓などが発掘調査された。

座禅寺遺跡などでは方形周溝墓も調査されるなど、中位段丘先端部には同様な古墳時代前期の墓地が占地する。中期の大型古墳や前方後円墳は筑後川対岸の微高地などに、月岡古墳・塚堂古墳・日岡古墳などが築かれている。後期古墳は高位段丘縁などで古墳群を形成している。

奈良・平安時代の集落は筑後川右岸の中位段丘上の平坦面を中心に発見されている。中道遺跡・西法寺遺跡・大庭久保遺跡・上の原遺跡・長島遺跡・鎌塚遺跡・長田遺跡などがあげられる。大迫遺跡・杷木宮原遺跡・志波桑ノ本遺跡・志波岡本遺跡では同一規模で主軸方位が共通する大型の掘立柱建物跡群がみられ、朝倉横廣庭宮に属する可能性も考えられる。また、この頃の墓地としては、大環場遺跡・大迫遺跡などがある。

中世に属する遺構は、才田遺跡・長島遺跡・志波桑ノ本遺跡などがある。才田遺跡の土壤からは舶載陶磁器が出土している。

狐塚南遺跡の位置表示

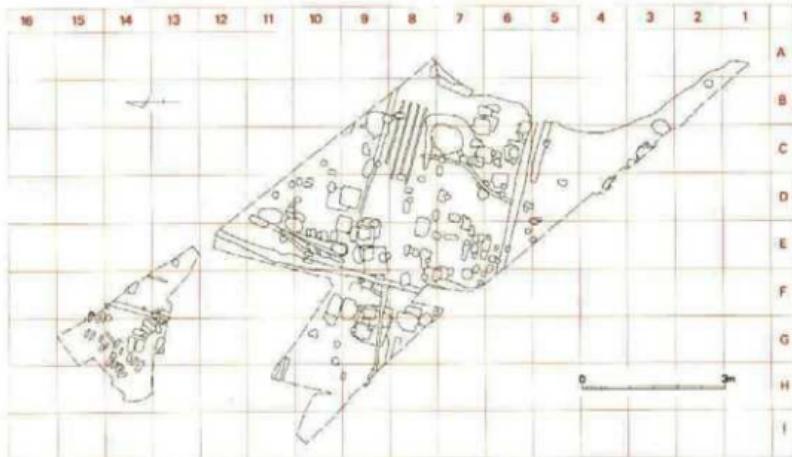
狐塚南遺跡の位置は、新平面直角座標系IIのX=42500, Y=-26480地点から北西方向に広がり、X=42650, Y=-26560地点付近に位置する。路線幅内の約150m区間である。

また、経緯度では、東経 $130^{\circ} 42' 53''$ 、北緯 $33^{\circ} 26' 57''$ 付近に相当する。

地区割の設定（第5図）

狐塚南遺跡では、遺構の密集度が高くて遺構相互の重複が予想された。このため、表土剥ぎ実施後に、公共座標に合わせた実測基準点の設置と地区割をすることにした。

地区割は、遺跡南部のX=42500, Y=-26480を起点として、10m刻みに、北へ1・2・3～16と数で、西へA・B・C～Iとアルファベットで区分して、1A区・2B区のように呼ことにした。たとえば1号集石遺構のある区画はX=42570, Y=-26530の北西側の10m四方で8F区に相当する。



第5図 狐塚南遺跡地区割図

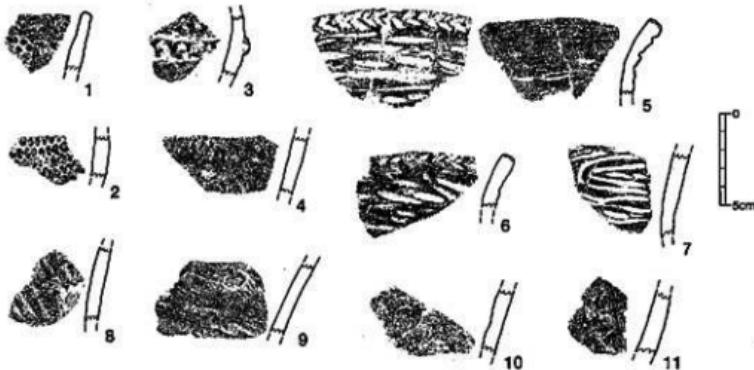
III 縄文時代の遺物

1. 縄文土器（図版4-2, 第6図）

まとまって遺構から出土してはいないが、古墳時代以降の住居跡集中部付近などの、ピットや住居床面などから数点の縄文土器が出土した。

1類（1~4）押型文のみられる土器片である。1は口縁部破片だが外面の口縁直下に山形押型文、その下に楕円押型文がみられる。胎土に砂粒・角閃石・石英粒を含み茶褐色に焼成されている。2は楕円押型文のみられる破片で一部に文様の筋があり、山形文風になっている。1と同様の胎土で色調も似る。3は凸帯に刺突列点が施され、凸帯貼付け部分以外には縱方向に山形押型文が施されている。胎土に砂粒・雲母を含み、暗黄褐色に焼成されている。4は器面の風化が進んでいるが、山形押型文がわずかに確認できる。胎土に砂粒・雲母・角閃石を含み茶褐色に焼成されている。

2類（5~8）沈線文のみられる土器片である。5・6は緩やかに外反する口縁部で、口唇端部は角張るが、内面側を先に外面側を後にした刻み目を施して、綾衫状の文様をなしている。口縁部外面は、横方向の短沈線を並べているが、破片の下部には細長い沈線らしいものもみられる。内面は横方向の条痕だが6では崩滅してよくわからない。7は文様の展開はよくわからないが、弧を描いた短沈線が加わっている。胎土には砂粒・角閃石を含みやや暗めの茶褐色に



第6図 縄文時代の土器実測図（1/3）

焼成されている。6は器面が風化しているが、沈線列らしい凹凸がみられる。胎土に砂粒・角閃石・石英粒を含み茶褐色に焼成されている。

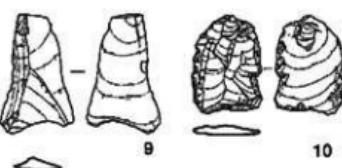
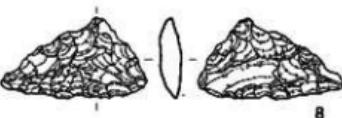
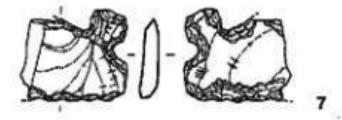
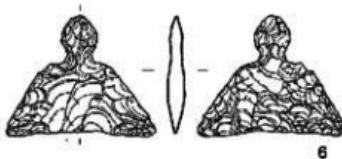
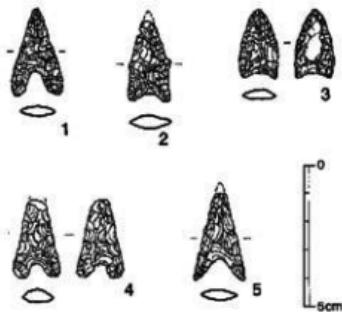
3類(9~11)条痕ないしは無文の土器片である。9の外面は二枚貝条痕かナデで調整されているよう、胎土に砂粒・雲母・石英粒を含む。10はナデ調整の洞部片、11は底部付近の破片で、雑なナデの痕跡がみられる。10・11は胎土に砂粒・雲母を含む。

2. 石 器 (図版4-2, 第7図)

石鎌、石匙などが古墳時代以降の住居跡内や土壙内、あるいは漆などから出土したが、それぞれの造様に伴うものではないので、ここで一括して取り扱う。

石鎌(1~5)黒曜石製の1~3と、安山岩製の4・5がある。3が主要剥離面を残している以外すべて全面に調整剥離が及んでいる。1はわたぐりの深い凹基式の石鎌で、長さ3.2cm、幅1.8cm、厚さ3.5mm、重さ1.4g。1号溝から出土した。2はわたぐりが浅い凹基式の鎌で、両側縁の中間に突起がみられる。先端を一部欠くが、現存長2.9cm、幅1.5cm、厚さ4.9mm、重さ1.9gを測る。6C区から出土した。3はわたぐりの浅い凹基式の鎌で、両側縁に丸みがみられる。長さ2.4cm、幅1.4cm、厚さ3.2mm、重さ1.2gを測る。東部の表探資料である。

4は先端を一部欠くが現存長2.8cm、幅1.7cm、厚さ4.6mm、重さ2.1gを測る。凹基式の鎌で、風化が進んでいる。16号土壙から出土した。5はわたぐりが深い凹基式で二等辺三角形の鎌。先端を一部欠くが現存長3.1cm、幅1.8cm、厚さ



第7図 純文時代の石器実測図(1/2)

3.8mm、重さ 1.3gを測る。124号土壙から出土した。この鎌も風化が進んでいる。

石匙（6・7）安山岩製の横型石匙で、6は三角形の一隅をつまみにしたような形で、刃部はやや内彎気味である。ほぼ全面に調整剥離が及んでいる。長さ5.3cm、幅4.3cm、厚さ6.1mm、重さ 9.4gを測る。13号土壙から出土した。7は半欠資料で、長方形の隅につまみがある形であろう。周縁部のみ調整剥離されている。現存長3.8cm、幅3.3cm、厚さ5.8mm、重さ 9.6gを測る。6C区のピット出土。

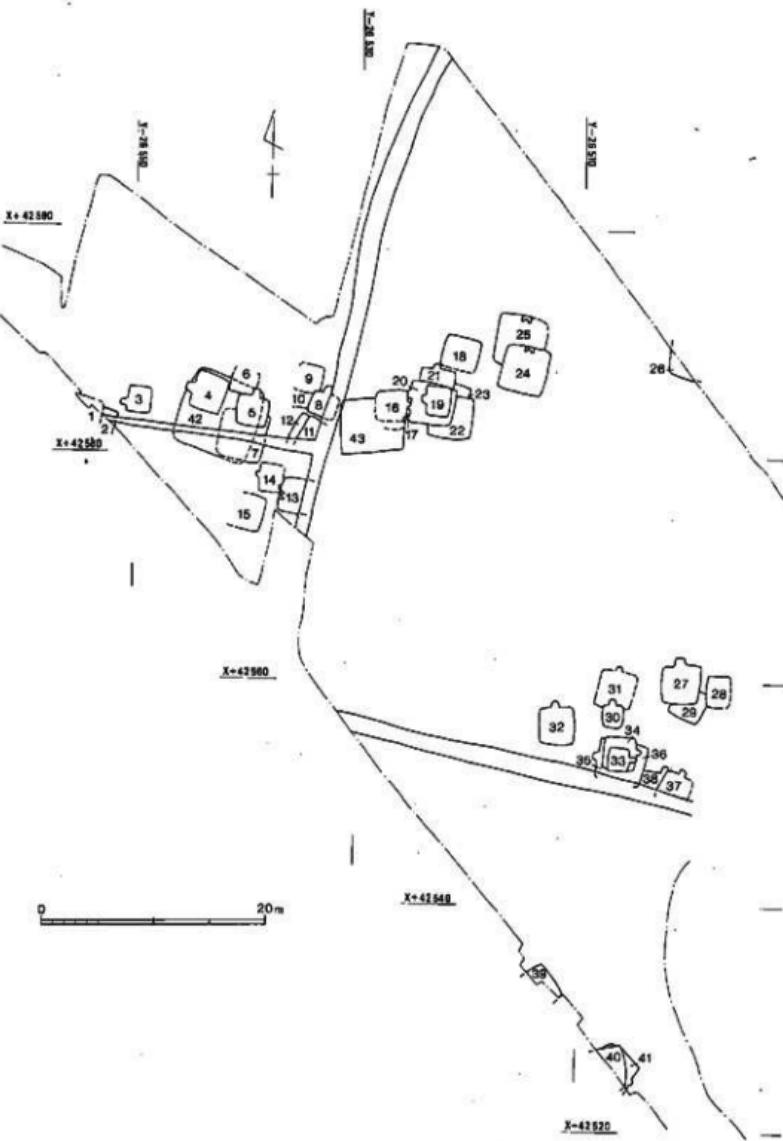
搔器（8）隅部が少しづつ欠損しているが現存長5.2cm、幅2.8cm、厚さ7.2mm、重さ 10.6gを測る。安山岩製の搔器で、偏三角形の石匙に似た形で、刃部は外彎する。7C区南東部出土。

使用痕のある剥片（9・10）9は流紋岩質の剥片、10は黒曜石の縦長剥片を利用している。9は長さ4.2cm、幅2.6cm、厚さ4.3mm、重さ 4.1gを測る。8号住居跡出土。10は一方の側縁に自然面を残すが、この縁も利用されている。長さ3.6cm、幅2.4cm、厚さ3.1mm、重さ 4.3gを測る。1号住居跡から出土した。

3. 小結

縄文土器では、1類の押型文土器に、小粒の梢円押型文を施文する例と、やや粗い山形押型文を施文する例がみられた。この山形文には刺突列点のある突帯を伴い、その特徴からして南九州地方の早期後半の手向山式土器に相当し、壺形の器形の可能性が高い。また小粒梢円押型文は早期押型文土器の中では古い様相である。

2類は、短沈線文を施すことから、曾畠式土器のなかに含めうる。口縁部外面に綾杉状の列点を施すのは前期の曾畠式土器によくみられるが、口唇上面に綾杉状の文様を施す例は特異であり、曾畠式に比して器壁の厚みがある。また、弧線を用いるのは曾畠式に先行する野口タイプなどにみうけられ、手向山式と共に共存する土器群のなかにも弧線を用いる例があるので、むしろこの時期を考えておきたい。



第8図 住居跡配図 (1 / 500)

IV. 弥生時代～古代の生活遺構と遺物

1. 住居跡

1号堅穴住居跡（第9図）

9H区で検出した堅穴住居跡であるが、2号住居に切られ、かつ大半以上が調査区外に伸展する。当初、貼床面もしくは床下層面を確認したので、一部拡幅を行った結果、最大壁高が13cmを測る住居跡と判明し、そして、当初の検出面が床下層面であることも分かった。

堅穴部の規模は不明となるが、調査区内で辺長が2.15mを測り、また、当遺跡では古い住居の方が大型規模になる傾向を有すことから、2号住居と同じか、もしくは、それ以上の規模になると推測される。平面形状は隅円方形になるが、壁小溝とカマドも検出していない。

國化可能な遺物は出土せず、時期比定は難しいが、後述のまとめで検討したい。

2号堅穴住居跡（第9図）

1号住居を切って築造した堅穴住居跡だが、1号住居と同様大半以上が調査区外に伸展する。中央部を新しい溝が走り、北壁の中央部が土壤に切られおり、遺在状況は極めて不良である。

堅穴部の規模は辺長3.8m以上を測り、中型以上の規模になると推定される。平面形態は隅円方形に復原されるが、調査区内には壁小溝とカマドは遺存していない。

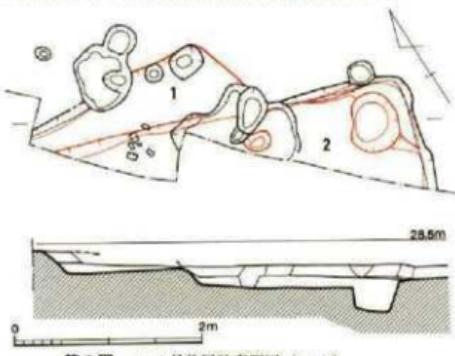
壁面は急勾配に立ち上がり、最大壁面は15cmを測る。床面下層には明瞭な掘り込みが存し、床面上より最大12cmの深さを有す。この床面下層で、北東隅に柱穴とは考えていない。

遺物は北壁際で若干出土したが、國化可能な品は存しない。

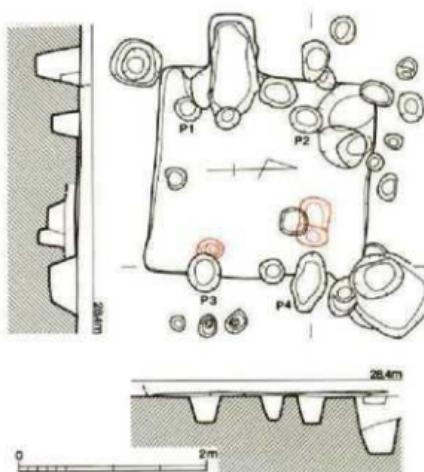
3号堅穴住居跡

（第10・12図）

9G区と9H区に跨る地点で検出し、突出型カマドを西壁に付設した超小型の住居跡である。辺長は、東西が2.0～2.15m、南北が2.3mを測り、床面積は5m²弱となる。壁高は最大で5cm程を測り、



第9図 1・2号住居跡実測図 (1/60)

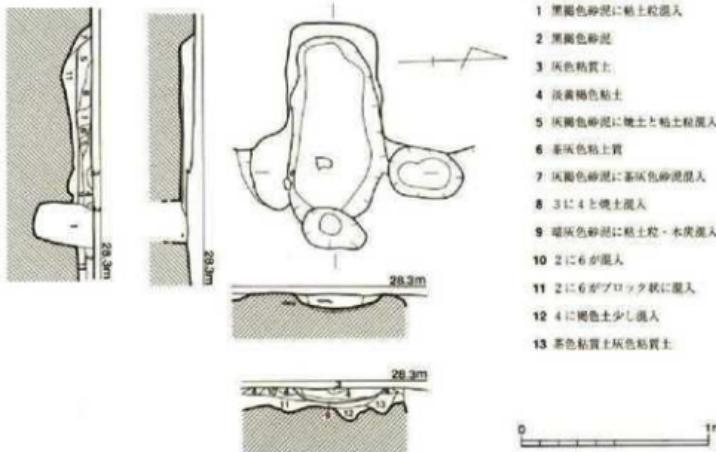


第10図 3号住居跡実測図 (1/60)

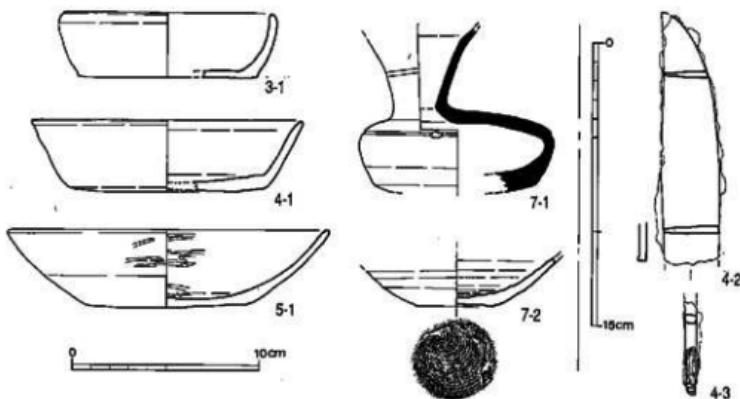
不良な遺存状況であるが、床面の硬化は顯著で、略水平な貼床である。

覆土が極めて浅いことから、住居内の柱穴は床面上で検出した状況と考えるべきであり、筆者は付記したP1～P4が主柱穴の可能性有りと考えた次第で、詳細な検討は後章で行いたい。しかしながら、調査時においてもカマヤあるいは産屋等の特殊の住居を想定して周辺部の柱穴も考慮したが、付随するであろう掘立柱建物も建てきれなかつたし、また、竪穴住居として他には適当な主柱穴も見当たらなかつた。

壁際の壁小溝は存しなかつたが、床面下層は5～10cmの掘り込みが略万遍なく認められた。住居の主軸方位はN 91°Wをとる。



第11図 3号住居跡カマド実測図 (1/30)



第12図 3~5・7号住居跡出土遺物実測図 (1/2・1/3)

カマド (第11図)

カマドは西壁の南寄りに付設しているが、突出部は、長軸が70cm、短軸が50cmの長方形の掘り方となる。黄褐色粘土を主体とする土を掘り方に貼付して壁体となし、竪穴部内にも30cm程が構として伸展している。火床面は、長軸が90cm、短軸が30~40cmを測り、やや不整形な長方形の平面形を呈し、床面よりも若干深みを有す。支脚は残存せず、位置も不明である。

出土遺物 (図版16, 第12図)

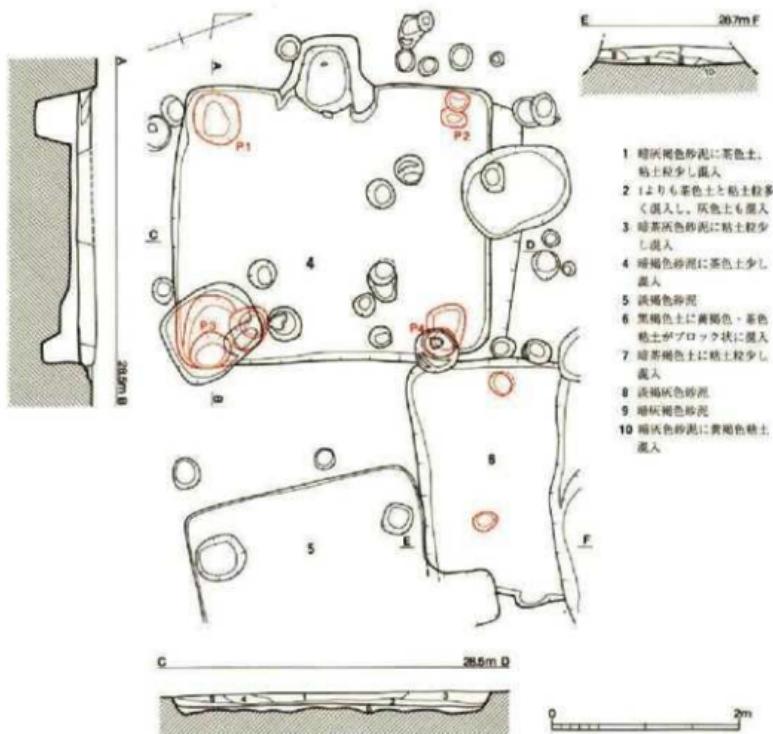
竪穴部内より圓化可能な遺物は出土せず、P3内より土師器が出土している。

土師器 (1) 復原口径11.2cm、復原底径9.8cm、器高4.5cmを測る杯身。平滑な底部より急勾配に立ち上がり、内等気味な口縁部に続き、口唇部は丸みを有す。調整は、口縁部と体部の内外面ともにヨコナデ、底部外側がナデ、同内面はカキ目か。焼成は良好で、茶灰色の色調を呈し、砂粒をほとんど含まない胎土である。

4号竪穴住居跡 (第12~14図)

9G区の中央に位置する住居跡で、カマドの一部が僅かに突出するも42号住居内に略納された状況で重複する。この様な状況から、床面下層は土層断面で確認したものの、全体としては明確に把握し得ず、圓化するまでには至らなかった。

南北の辺長が3.25m、東西の辺長が2.8mを測り、平面形態は隅円長方形を呈す。壁面は急勾配に立ち上がり、最大壁高は20cm弱を測る。壁面下に壁小溝は検出していない。床面は硬化が

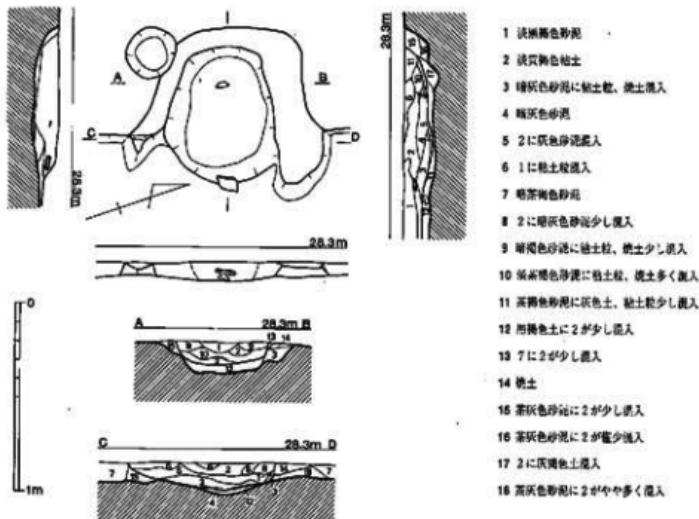


第13図 4・6号住居跡実測図 (1/60)

認められ、略水平な貼床である。主柱穴は四隅の壁際で検出したP1～P4が該当するものと考えているものの、この件に関しては後述で検討を行いたい。床面下層には10cm前後の掘り込みを確認したが、前述した様に固化するまでには至らなかった。主軸方位はN71°Wをとる。

カマド (図版6-1, 第14図)

西壁の略中央部に付設した突出型カマドであり、55cm程突出した長方形の掘り方である。壁体は粘土を壁面に貼付しつつ積み上げ、最大35cmが竪穴部内に袖として伸展している。袖部における最大幅は35cmを、突出部では20cm前後の壁体幅となる。火床面の規模は、長軸が58cm、短軸が42cmを測り、平面形態は橢円形気味となり、床面よりも僅かに窪む。支脚は残存せず、抜き跡も検出していないので、支脚位置は不明となる。



第14図 4号住居跡カマド実測図 (1/30)

出土遺物 (第12図)

覆土からは鉄器2点が出土しているものの、固化可能な土器は出土しなかった。

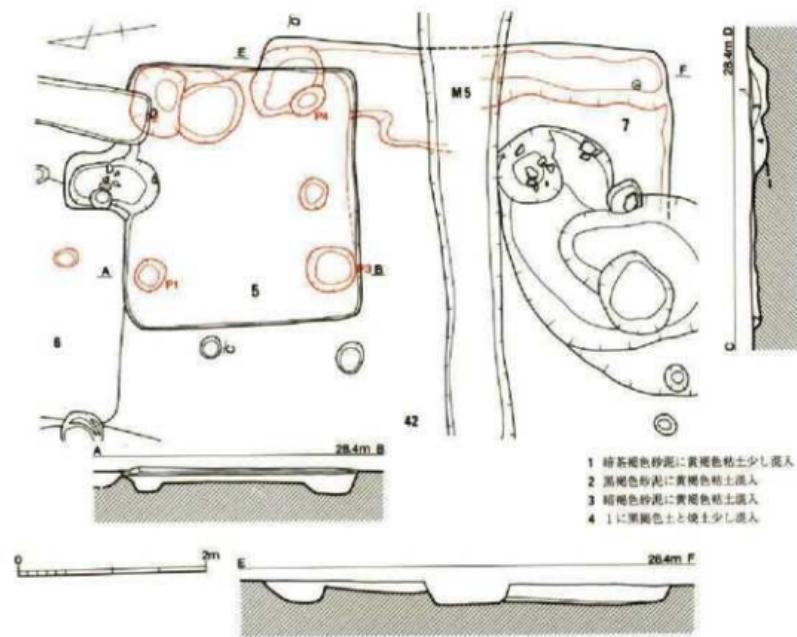
土師器(1) 柱穴P3より出土の杯である。口径が14.4cmに、底径が10.4cmに復原され、器高は3.8cmを測る。底体部より口縁部にかけて直線的に大きく外反し、口唇部は、尖り気味だが丸く仕上げている。底部の内外面がナデ、その他はヨコナデの調整である。明黄灰色を呈し、胎土は精良であり、焼成は良好である。

鉄器(2・3) 2は先端部が欠損していた様で、復原長は8.8cm程になろう。かなり使い込んだものか刃部は丸くなり、背の厚みは2.5~3mm。3は鎌の茎部と考えられ、3.2cm程が遺存する。断面は長方形を呈し、一部に鎧被がみられる。

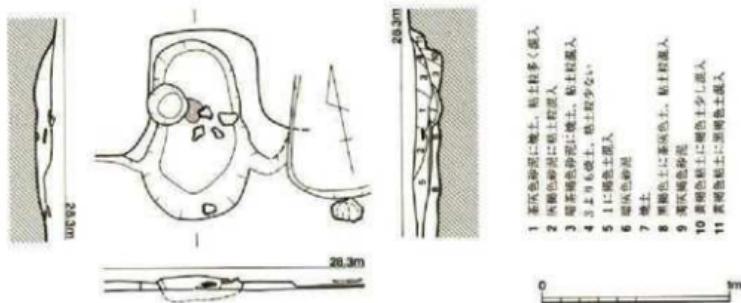
5号竪穴住居跡 (第12・15・16図)

9F区と9G区に跨がり、6・7号住居及び42号住居を切って造られた住居跡であり、北壁の一部を土壙に切られるも全容は窺い知れる。東西の辺長が2.6~2.75m、南北の辺長が2.35~2.4mを測り、規模としては小型の部類となり、平面形態は隅円方形となる。

壁面はやや急勾配な立ち上がりで、最大壁高が5cm程とやや遺存状況不良であり、壁面下に壁小溝は存しない。床面は硬化が認められ、略水平な貼床である。主柱穴は4号住居と同じ四



第15図 5・7号住居跡実測図 (1/60)



第16図 5号住居跡カマド実測図 (1/30)

隅のP1～P4を想定しているが、各柱穴はそれ程深くない。床面下層は10cm弱の掘り込みが認められたが、4号住居と同じく42号住居と重複していることから、明確な固化は出来なかつた。主軸方位はN10°Eをとる。

カマド（図版6-2、第16図）

北壁の略中央部に付設した突出型カマドである。豊穴部より70cm前後突出した掘り方で、粘土を貼付しつつ積み上げて構体としている。豊穴部内にも袖として若干伸展しているが、残りは良くなく、壁体の幅は15～30cmを測る。火床面は、長軸が76cm、短軸が35cm前後を測り、長楕円形の平面形を呈す。床面よりも5cm前後高む。略中央部周辺が顕著に焼土化し、かつ、その内側に、灰が遺存していることから、焼土化した部分か少し外側に支脚を設置していたと類推され、この周辺より出土した土師片が支脚であった可能性もある。

出土遺物（図版16、第12図）

カマド内の土器は固化不能だが、カマド右側で床面直上の品のみ固化可能であった。

土器（1）杯である。僅かに丸みをなす底部で、体部から口縁部は少し内擣気味に外反し、口唇部は丸く仕上げている。復原口径17.2cm、底径8.4cm、器高4.2cmを測る。調整は、口唇部がココナズ、内面と外面の中程より上方が磨滅しているがミガキで、底部外側にはヘラケズリ痕が認められる。焼成はやや甘い。胎土は砂粒を多く含み、赤褐色も認められる。色調は暗い橙色を呈す。

6号豊穴住居跡（第13図）

5号住居に南東隅を切られ、北半部も土壇に切られた遺存状況の悪い住居跡である。東西の辺長が2.4m前後であり、規模は小型の部類に属しよう。

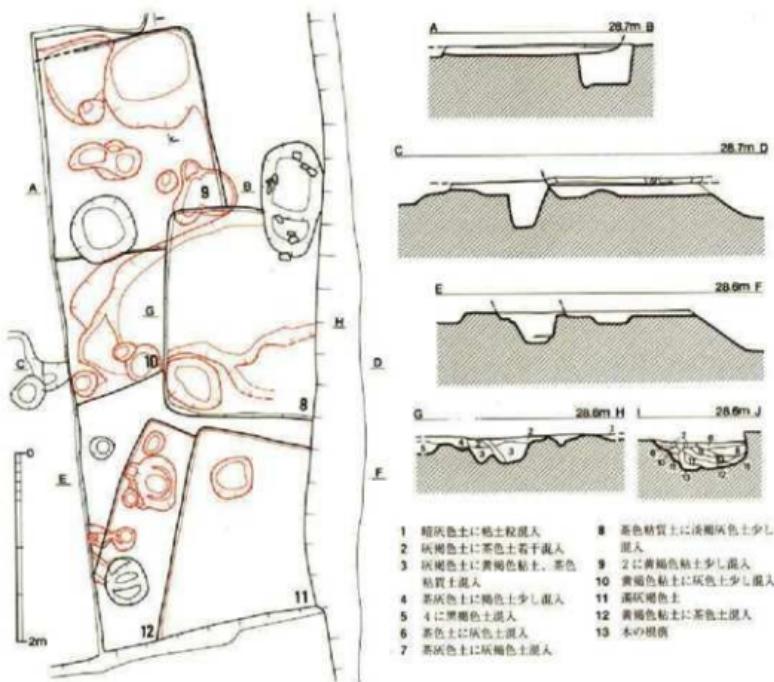
壁面はやや急勾配な立ち上がりで、最大壁高は15cm程を測る。遺存する部分に壁小溝は存しない。床面は硬化が認められ、略水平な貼床であった。主柱穴に関しては、豊穴部内の2つの柱穴は後世の所産と考えられるので、不詳と言わざばなるまい。

遺物で固化可能な品は出土しなかった。

7号豊穴住居跡（第12・15図）

5号住居に北壁を切られ、南壁も土壇に削平され、また、中央部が新しい溝で切られている。西側については、42号住居と重複していることから検出しえなかつたが、東辺の長さから類推すると、4居住居付近に西壁が存在したと思われる。

唯一検出した東壁から判断して、辺長が4.3m前後の規模になると推測され、当遺跡では規模の大きな部類に属しよう。平面形態も楕円方形と推測される。この様な結果になった要因の一つに、検出面が東壁側でも床面もしくは貼床部であった点が挙げられ、固化した大半以上は



第17図 8~12号住跡実測図 (1/60)

床面下層の遺構であった。この遺構は、幅が0.6~1m前後、深さが5~20cmの明瞭な掘り込みである。

主柱穴も不明である。カマド跡は検出していないが、西側で焼土等が遺存していないことから、北壁に付設されていた可能性が高く、5号住居に削平されたのであろう。

出土遺物 (図版 16, 第12図)

2は南東隅の上層で出土しているが、後世の所産でもあり、柱穴等の検出ミスの結果と考えられる。1は当住居周辺よりの出土品であり、共伴する品か否かは判断し難い。

須恵器 (1) 口縁部と底部を欠損した平瓶である。肩部は丸みを有し、一条の凹線が巡り、上方は屈曲気味に拡がる。肩部の凹線上に円形浮文を起想させる径0.8cmの粘土を貼付している。底部外面はナデ調整となる。頸部の内外面と肩部外面が灰かぶりで黒色を呈し、他は青灰色である。胎土に細砂粒を若干含み、焼成は良好。

土師器（2） 後世の混入品である。上げ底気味で、体部は大きく外及する杯である。底径4.0cmを測る。底部外面は糸切りで、他はヨコナデ調整である。胎土は精良で、色調は黄橙色を呈す。焼成は良好である。

第8号竪穴住居跡 （第17・18図）

9F区に5軒の住居跡が密集しており、その中で唯一カマドが確認された住居跡である。この付近は農道下に当たり、農道の東側に側溝が掘られており、当住居も東半部を溝で削平されていた。また、検出面は床面もしくは床面直上であり、遺存状況は極めて悪い。

南北の辺長が2.1～2.15mを測り、東西の辺長も2.5m前後と推定されるので、住居の規模は小型でも小さい部類となろう。壁高は無いに等しく、壁小溝も遺存しない。床面の硬化は認められ、略水平な貼床である。竪穴部内の床面上には柱穴は全く存在せず、周辺部にも該当する柱穴が存在しないので、主柱穴は不詳となる。

床面下層で掘り込みと土壠を確認したが、10号住居の床面下層遺構との関係は平面的に把握し得なかった。西南隅部の柱穴状遺構が主柱穴となる可能もあるが、断を下し得ない。

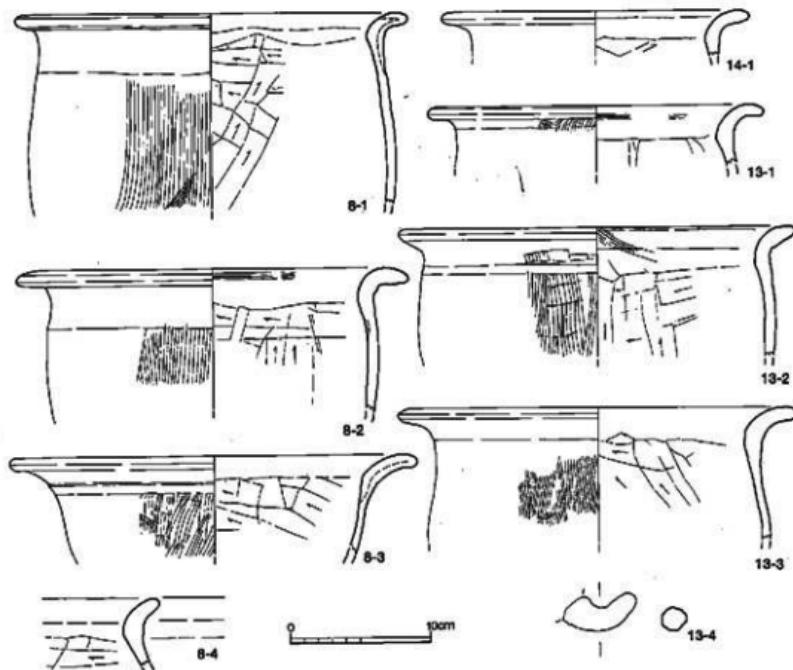
カマド（図版6-3）

北壁に付設した突出型カマドである。竪穴部より75cm程突出した掘り方となり、整体の構築法は3号住居等のカマドと略同じである。遺存状況が不良であり、竪穴部内の袖は残っていない。火床面は突出部が一段深くなる二段落ちとなる。内側が床面より6cm深くなっている、この面が本来の火床面と考えられる。更に5～6cm深くなる外側については、住居廃絶時における支脚の除去等の要因で生じたとも考えられる。カマドの主軸はN18°Eをとる。

出土遺物（図版16、第18図）

図化した品はカマド内より出土したものである。

土師器（1～4） 壺である。1は復原口径28.0cmを測る大型品で、胴部より下半を欠損する。胴部は僅かに膨らみ、口縁部は大きく外反する。口縁部の内外面がヨコナデ、胴部外面が粗いハケ目、同内面か縫・横位のヘラケズリ調整である。胎土は砂粒の他にも赤褐色粒を含み、焼成は普通である。内面が黄灰色を、外面が淡橙褐色を呈す。2は復原口径28.0cmを測り、口縁部は大きく屈曲する。調整は1と同じだが、口縁部内面に刷毛目が残る。胎土・焼成も1と同じで、色調は淡黄褐色を呈す。3は鉢とすべき品で、復原口径は29.0cmを測る。調整は1と略同じとなるが、頭部外面に一条の切れ込みが四線状に巡る。胎土は赤褐色粒の他に角閃石も含む。焼成は良好であり、橙褐色を呈すが外面頭部にススが付着する。4は小破片であり、図よりも若干直立気味になるかもしれない。胎土と焼成は3と略同じで、内面が暗灰黄色を、外面が淡黄茶色を呈す。



第18図 8・13・14号住居跡出土遺物実測図 (1/4)

9号竪穴住居跡 (第17図)

南西隅を8号住居に切られ、西壁側が不詳となる住居跡である。南北の辺長が2.35m前後を測り、規模は小型でも小さい部類に属すると考えられる。平面形態は隅円方形になろう。

壁高は3cm前後を測り、壁面下に溝は存しない。床面の硬化は認められ、略水平な貼床である。竪穴部内に柱穴を検出したが、主柱穴と判断出来るものは見当たらなかった。床面下層には7cm前後の掘り込みがあり、北東隅部で壁隅土壙(註1)を検出した。上端で1m前後の規模で、深さは25cm前後を測る。この西側にも土壙を検出したが、これは10号住居の壁隅土壙と考えている。

カマドは検出していないが、西壁側に付設していた可能性が高い。固化可能な遺物は出土しなかった。

10号竪穴住居跡 (第17図)

8・9号住居に切られて、南壁側の一部を検出したに止まり、遺存状況が極めて不良な住居跡である。9号住居内の土壌が当住居に付隨した場合は、辺長が3.5m前後の規模に復原される。当住居の検出面は床面もしくは貼床部であり、図化した大半以上は床面下層遺構である。

前述の壁隅土壌は、上端で0.8m前後を測り、深さは15cm前後となる。この他の床面下層遺構では掘り込みを確認したが、8・9号住居と重複しており、正確には把握出来なかった。主柱穴に関しても不詳であるが、壁小溝は存在しなかった。図化し得る遺物も出土していない。

11号竪穴住居跡 (第17図)

8号住居の南側に隣接する住居跡だが、東壁側を側溝に、南壁側も新しい溝で削平されている。さらに、検出面が床面もしくは貼床部であり、遺存状況は極めて悪く、カマド跡も検出していないし、壁面下にも溝は存しなかった。

主柱穴については、北東隅部で検出した柱穴が該当するかもしれないが、他の3ヶ所が上記の理由で喪失している以上、断定するまでには至らない。床面は略水平であり、厚さ5cm程の貼床であった。遺物も図化可能な品は出土していない。

12号竪穴住居跡 (第17図)

11号住居に大半以上切られ、南側も溝で削平された遺存状況が劣悪な住居跡である。検出面に関しても11号住居と同様に、貼床部と言うのが適当であろう。カマドと壁小溝も検出していないし、主柱穴に関しても2個の柱穴が該当するかもしれないが断を下しえない。

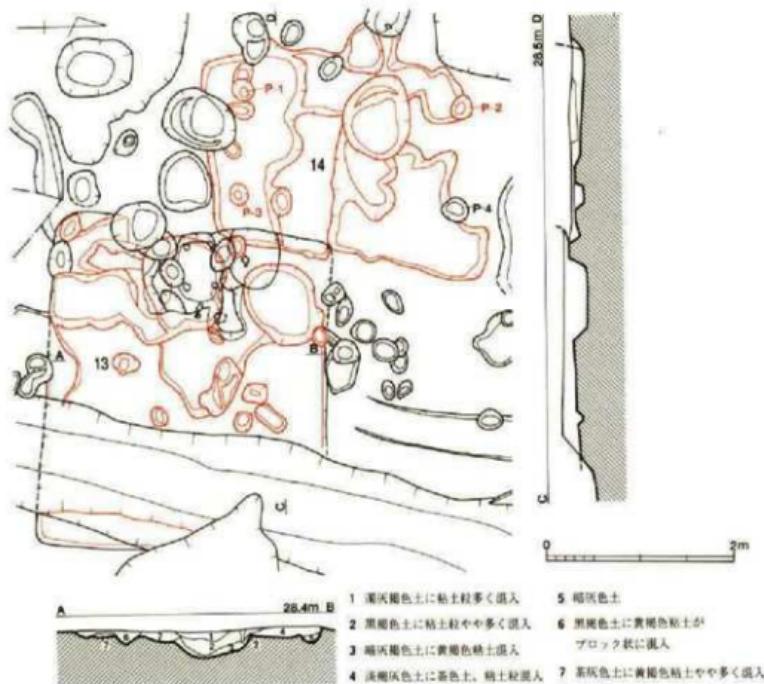
貼床部は3cm程遺存していたが、床下層では明瞭な遺構を検出していない。出土遺物も図化可能な品は存しない。

13号竪穴住居跡 (第18・19図)

8F区で検出した住居跡で、14号住居の一部を切ってはいるものの、東壁側が農道の側溝で大きく削平されている。検出面が床面であり、壁小溝も存在せず、遺存状況は不良である。

竪穴部の規模は、東西辺が3.5m程を、南北辺が3m弱を測り、床面積が10m²強に復原される。平面形態は円形長方形になると思われる。床面は略水平な貼床であり、貼床は厚さ5~15cmを測る。床面下層には掘り込みと北西隅部に壁隅土壌を検出した。この壁隅土壌は、上端で75~80cmを測り、平面形態が若干歪な橢円形を呈す。床面までの深さは25cmである。

西壁中央にカマドが認められたが、右袖脇にも焼土の散布が確認されたので、調査時は2軒の住居が重複していると考えていた。しかし、床面下層遺構の有様と、主柱穴も不明である点を考慮して、1軒の住居として報告しておく。主軸方位はN89°Wをとる。



第19図 13・14号住居跡実測図 (1/60)

カマド

西壁中央に付設した造り付け型カマドである。壁体は残りが悪く、旧態をほとんど窺えない。火床面は、長軸が60cm、短軸が35cm強を測り、平面形態は隅円長方形を呈す。床面より5cm程の埋みとなり、断面は若干舟底状を呈す。支脚は遺存せず、抜き跡も確認していない。右袖脇の焼土については、多量の焼土が散布しているのは認められたが、カマド跡と認定するまでは至らなかった。

出土遺物（第18図）

國化した4点は、3がカマド内より、2が床面上より、1と4が床面下層より出土した。

土師器（1～4） 1～3は甕で、頸部で屈曲し、口縁部は大きく外反する。口縁部の内外面はヨコナデ、腹部外面は刷毛目で、同内面はヘラケズリの調整である。1と2には、口縁部内面に刷毛目が残る。胎土は砂粒の他に赤褐色粒と雲母を含む。焼成は1と3が良好で、2は普通で

ある。1は復原口径が24.0cmで、内面が橙褐色、外面がにぶい黄褐色を呈す。2は復原口径が28.4cmで、内面が明橙褐色、外面がにぶい橙褐色で一部に煤が付着。3は復原口径が26.9cmで、赤褐色ないし茶褐色を呈し、口縁部内面にモミ痕が、外面に煤の付着が認められる。

4は窓か瓶の把手であろう。調整はヘラケズリで、胎土は精良である。淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。

14号竪穴住居跡（図版7-1、第18・19図）

13号住居の西側に位置して、南東隅の一部を切られている。検出面が床面もしくは貼床部であったが、固化した床面下層遺構で全容がおぼろげに分かる。

竪穴部の規模は、東西辺が3m前後に、南北辺が2.1m前後に復原され、小型の部類と言える。平面形態は隅円長方形になると思われる。主柱穴は竪穴部の平面形態と相似形になるP1～P4を想定しているが、柱穴の深さは20～30cm前後であり、主柱穴の深さとしては十分となる。

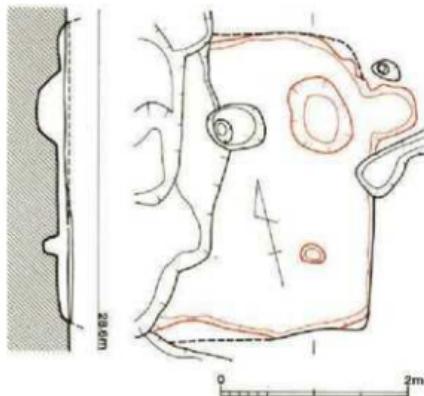
床面下層には、掘り込みとカマド近くで中央土壤（註2）を検出した。中央土壤は、長軸が0.85m、短軸が0.7mを測り、稍円形の平面形態となり、最深部で35cmを測る。

主軸方位はN83°Wをとる。

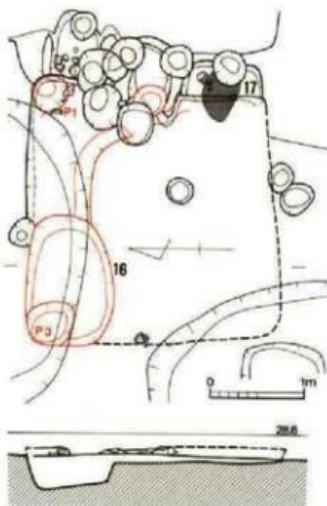
カマド（図版7-2）

西壁中央部に付設した突出型カマドである。

壁体は何ら遺存せず、火床面で旧態が類推される。突出部の先端は柱穴に切られているが、壁



第20図 15号住居跡実測図(1/60)



第21図 16・17号住居跡実測図(1/60)

面より40cm前後突出していたのであろう。火床面は長軸が45cm前後で、短軸が30cm前後になり、少し歪な橢円形を呈す。支脚及びその抜き取り痕も検出していない。

出土遺物（第18図）

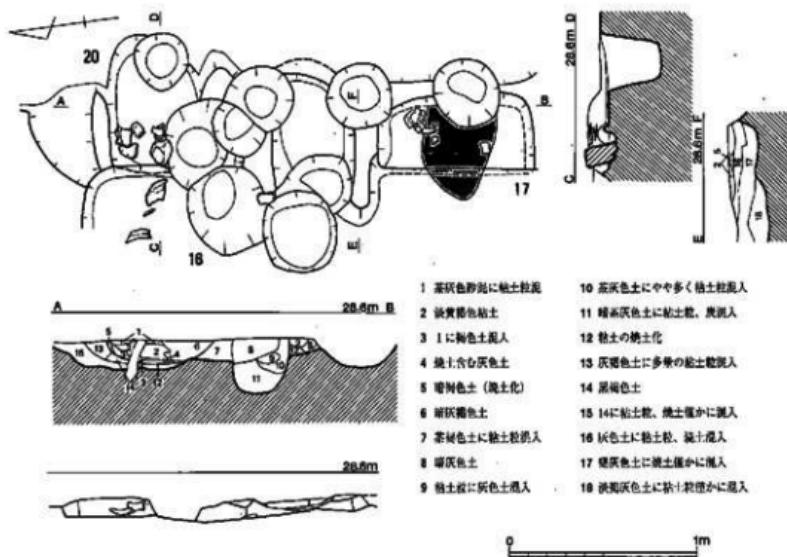
中央土壇より出土した品のみ固化したが、他にめぼしい品は出土しなかった。

土器（1）復原口径22.0cmを測る壺である。口縁部は大きく外反して、端部は丸く仕上げている。口縁部の内外面はヨコナダ調整で、頸部外面はヘラケズリとなる。胎土は、雲母・角閃石・赤褐色粒を含む。焼成は良好である。外面が淡橙褐色を、内面が橙褐色ないしこげ茶色を呈す。

15号堅穴住居跡（第20図）

8F区と9F区に跨がる地点で検出した住居跡であり、西半部を土壇に削平されている。また、床面も南西隅部のみ遺存し、他は床面下層遺構を固化したもので、遺存状況は極めて不良である。南北の辺長が3.2m前後と測り、住居規模は小型の部類に属す。

主柱穴は断面図に付した2個の柱穴が相当すると考えているが、柱穴の径が極端に異なるも



第22図 16・17・20号住居跡カマド実測図 (1/30)

の、堅穴部と相似する配置となる点を重要視したものである。

床面下層では10cm程の掘り込みが万遍なく存し、その他にめぼしい遺構を検出しなかった。カマド跡も検出していないし、図化可能な遺物も出土していない。

16号堅穴住居跡（第21～23図）

9E区で検出した住居跡で、17・20・43号住居を切っている。この住居周辺部は中世の包含層が広範に認められて、該当期に何らかの遺構が存在して当住居を削平したと考えられ、床面もしくは貼床部しか遺存しない状況になつたのであろうか。

床面下層遺構と遺物の出土状況から類推して、辺長が2.6m前後の規模にならう。主柱穴もP1とP3が伴うと考えているが、他の柱穴は検出していない。また、柱穴P3と重複する148号土壙は壁隅土壙に相当するかもしれないが、断定するまでには至らなかった。

カマド（第22図）

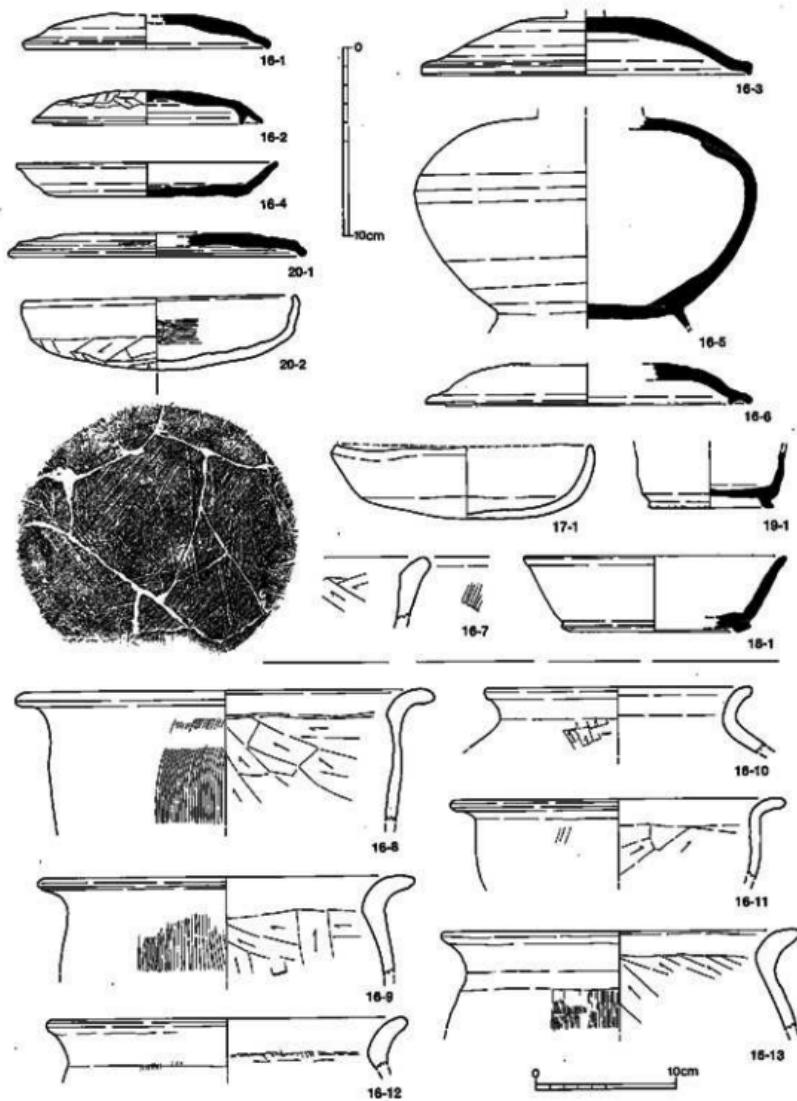
東壁の略中央部に付設した突出型カマドである。17・20号住居のカマドと隣接しており、また、多くの柱穴で切り刻まれていたので、形態の解明だけでなく先後関係も複雑であった。試掘トレンチを入れた結果、図のような形態になることが判明した。

堅穴部よりも60cm程突出した掘り方となり、粘土を貼付して壁体としているのは他の住居と同じである。積み上げられた壁体は30cm程堅穴部内に伸展している。火床面の規模は不詳となり、支脚及び抜き取り跡も検出していない。

出土遺物（図版16、第29図）

覆土中の品と推定されるのは3と9で、カマド内及び周辺よりの出土品は7・8と10で、床面下層からの出土品は1・2・4と11である。図化した他の品は周辺部で出土したものだが、共伴するか否かは不明である。

須恵器（1～6） 1～3と6は杯蓋である。1は嘴状の口唇部で退化気味となる。復原口径12.9cmを測る。調整は回転ナデで一部ヨコナデとなる。胎土は精良で、焼成は良好。色調は灰色を呈す。2は内面のかえりが口縁端部よりも僅かに下方となる。復原基部径は16.4cm、器高1.8cmを測る。外面天井部は回転ナデ後に手持ちヘラケズリ、他は回転ナデ調整。胎土は砂粒が多く含む。焼成は良好で、暗灰色を呈す。3は直立気味な口唇部で、天井部が平滑となり、ツマミを欠損する。体部の外面は回転ヘラケズリとなる。胎土は精良で、焼成は良好。橙褐色の色調である。復原口径17.7を測る。6は復原基部径17.2cmを測る。かえりが口縁端部よりも僅に下方となる。4は口唇部が僅かに外反する皿である。復原口径が14cmを、復原底径が11cmを、器高が1.2cmを測る。内外面とも灰かぶりで暗灰色を呈す。5は頸部より上方を欠損した壺であろう。外面の胴下半部と底部が回転ヘラケズリ。胎土は精良で、焼成も良好。青灰色ないし暗灰黄色を呈す。胴部最大径は18.2cmを測る。



第23図 16~20号住居跡出土遺物実測図 (1/3・1/4)

土師器 (7~13) 7と11は鉢と考えられるが、他は甕である。調整は、口縁部の内外面がヨコナデ、外面が刷毛目、内面がヘラケズリを施すが、10の外面はナデとヨコナデの後に一部ヘラケズリを施す。胎土は砂粒の他に雲母と赤褐色粒を含む。焼成は8と11が甘く、他は良好。復原口径は、8が[†]30.0cm、9が[†]27.0cm、10が[†]17.0cm、11が[†]23.9cm、12が[†]26.0cm、13が[†]25.6cmを測る。

17号竪穴住居跡 (図版 21~23 図)

16号住居と略重複していること、そして、16号住居でも述べた様に遺存状況が不良となる地点でもあり、カマド部のみ検出した住居跡である。

カマドは突出型と推測されるが、壁体は遺存せず、掘り方と焼土面のみが把握出来た。掘り方は幅80cm程を測り、やや幅広な感を抱く。焼土面の一部は16号住居下方にも伸展しており、長軸が50cm以上の火床面となろう。

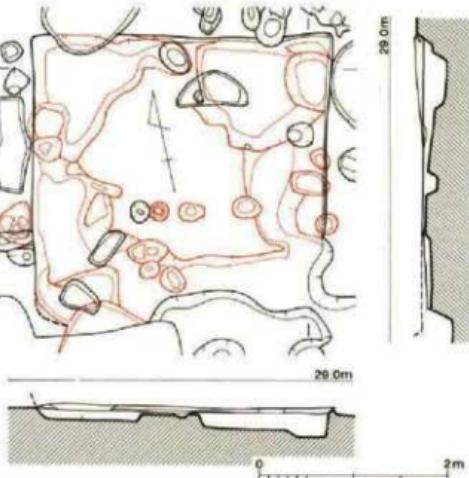
出土遺物 (図版 16, 第 23 図)

土師器 (1) 一杯である。底部はやや丸みを有し、口縁部は直立気味となる。口径が[†]13.7cm、底径が[†]11.6cm、器高3.8cmを測る。底部外面がヘラケズリ、口縁部内外面がヨコナデ、他はナデ調整となる。胎土精良で、雲母と赤褐色粒を含む。焼成は甘く、橙褐色を呈す。

18号竪穴住居跡 (図版 7~3, 第 23・24 図)

大半以上は9E区に属し、南半部は床面を喪失するが、床面下層の遺構で全容が知れる住居跡である。しかし、後世の柱穴や土壤に到る所削平されていた。

竪穴部の規模は、東西の辺長が3.1m前後を測り、南北の辺長が3m前後と推定され、小型の部類に属しよう。平面形態は隅円方形と推定される。壁高は残りの良い北壁側で10cmを測り、壁面下には壁小溝は存しない。遺存する床面は略水平である。床面下層には、不整形な掘り込みが巡るが、北東隅が一段と深くなっている。壁隅土



第 24 図 18 号住居跡実測図 (1/60)

横になる可能性もある。長軸が1.4m程で、短軸が1.1m前後となり、不整形な椭円形を呈す。主柱穴は竪穴部内に見当たらず不明となり、カマドも不明である。

出土遺物（第23図）

覆土中と床面下層より若干出土したが、図化した品は床面下層から出土した。

須恵器（1） 高台付きの杯身で、口縁部は僅かに外反気味となり、高台は外方に踏ん張る形状を呈す。底部内面がナデの他は回転ナデ調整である。胎土は精良であり、焼成も良好で、青灰色の色調である。復原口径が14.0cm、器高が4.05cm、復原底径が8.9cmを測る。

19号竪穴住居跡（図版7-3、第23・25図）

9E区は8軒の住居が重複している場所で、当住居跡がその真中に位置している。特に集中する19～23号住居の5軒に関しては、壁高を有しない程に遺存状態が不良であり、カマド跡と床面下層遺構でもって全容の一端を知り得た。

竪穴部の規模は、東西の辺長が2.1m前後、南北の辺長が2.5m前後を測り、小型でも小さい部類と言える。平面形態は隅円方形を呈す。床面は略水平で、厚さ10cm弱の貼床である。床面上において壁小溝は存しない。床面下層において数多くの柱穴を検出したが、主柱穴と考えられる柱穴は見当たらない。床面下層遺構も煩雜を極め、どの遺構が当住居に伴うかも判断しえなかつた。主軸方位はN85°W前後をとると考えられる。

カマド（図版8-1）

西壁中央部に付設した突出型カマドである。竪穴部より40cm程突出した掘り方で、壁面に粘土を貼付して壁体としているが、左袖は竪穴部内に50cm程伸展していた。火床面については不明な点が多くあり、規模と形状も不詳で、支脚も遺存していない。

出土遺物（第23図）

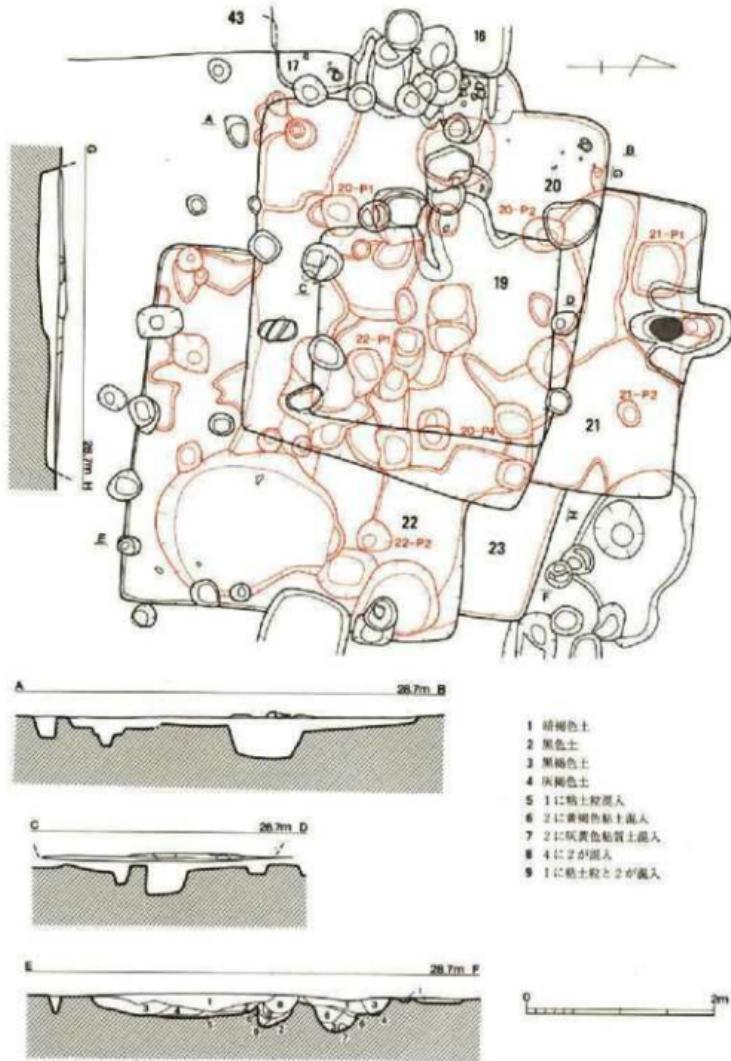
図化した品は覆土中より出土したものである。

須恵器（1） 小型の高台付き杯身である。口縁部を欠損しているが、高台はやや外側に踏ん張り、底座部はやや直立気味となる。底部の内外面がナデ、他は回転ナデ調整である。胎土は砂粒を若干含むが精良で、焼成は良好である。色調は青灰色を呈す。復原底径は6.2cmを測る。

20号竪穴住居跡（図版7-3、第22・23・25図）

19号住居が当住居内にすっぽりと収まっており、大半以上が削平されている。また、北西隅部で僅かに壁高を有するも、遺存状況が不良な住居跡である。

竪穴部の規模は、南北辺が3.15～3.7mを、東西辺が3.5～4.2mを測り、中型の部類に属す。平面形態は亞な隅円方形を呈している。床面は若干凹凸が有るも略水平で、厚さ10cm弱の貼床



第25図 19~23号住居跡実測図 (1/60)

である。床面上において壁小溝を検出していない。主柱穴は図示した柱穴が該当すると考えているが、P3が不明となる点や、P2とP4が壁際に寄り過ぎている等の差し引く材料があり、断定するのは差し控えておく。主軸方位はN70°W前後をとると考えられる。

カマド（図版8-2、第22図）

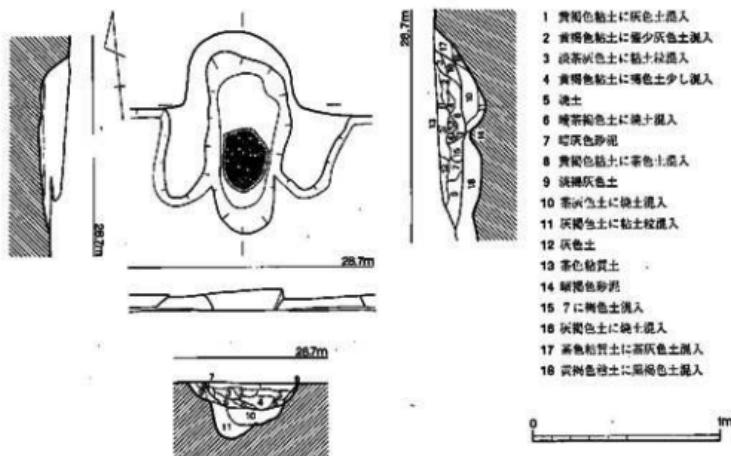
西壁中央のやや北寄りに付設した突出カマドである。突出部の先端を16号住居に切られているものの、約40cm程突出した掘り方と推定される。壁体の構築は他の突出型カマドと同じであり、壁穴部内にも若干伸展している。火床面は一部不明となるが、支脚は僅かに押し倒された状況で遺存している。柱状の石を5cm程埋め込み、床面より13cm程の高さとなる。

出土遺物（図版16、第23図）

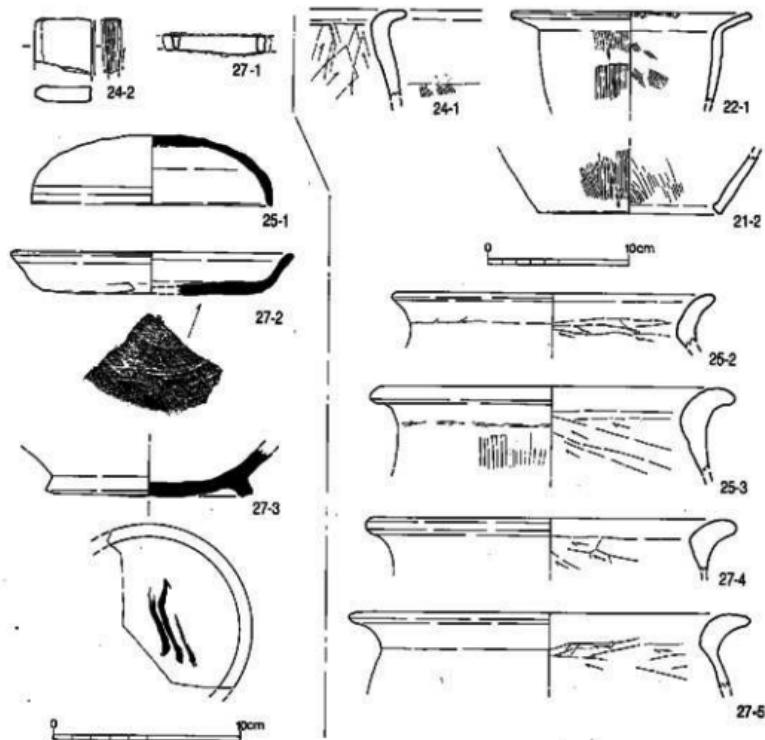
図化した1は床面下層より、2は北西隅の床面上より出土した。カマド内の土器は図化出来なかった。

須恵器（1） ツマミを欠損した杯蓋である。口唇部は外側に開いて丸みを有し、扁平な天井部となる。復原口径は16cmを測り、器高は1.3cm以上となる。天井部外面が回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整となる。胎土は精良で、焼成は良好である。色調は赤橙色を呈す。

土師器（2） 略完形の杯である。底部は若干丸味を有し、直立気味に立ち上がる口縁部に統き、口唇部は内厚する。口径が14.8cm、器高が4cmを測る。底部外面はヘラケズリ、同内面がナデ、他はヨコナデ調整となり、内面にハケ目状の工具痕が残る。胎土は砂粒を多く含み、



第26図 21号住居跡カマド実測図 (1/30)



第27図 21・24・25・27号住居跡出土遺物実測図 (1/3・1/4)

21号堅穴住居跡 (図版7-3, 第25・27図)

南半部を20号住居に切られて、カマドを含めた北半部のみ検出した住居跡である。

堅穴部の規模は、東西辺が3.2m程を測ることから、床面積が10m²前後になろう。最大壁高は6cmを測るが、壁面下に溝は存しない。床面は略水平であり、厚さが10cm強の貼床である。主柱穴には示したP1とP2が該当するかもしれない。床面下層造構では、西側が一段深くなっているので、下層土壙の可能性もあるが、南側が削平されている以上不詳と言わざばなるまい。主軸方位はN10°E前後をとる。

カマド (図版8-3, 第26図)

北壁中央に付設した突出型カマドである。竪穴部より40cm程突出した掘り方で、壁面に粘土を貼付して壁体としているが、竪穴部内にも50cm強伸展して両袖となる。袖の幅は30cm強を測る。火床面は、長軸が75cm弱を、短軸が30cm程を測り、平面形態は梢円形を呈す。床面より5cm程窪み、僅かに舟底状を呈す。この火床面の中央部、すなわち竪穴部の延長線上に粘土が焼土化しているのを検出し、この場所が支脚位置に相当しよう。

出土遺物（第27図）

國化した品は床面下層より出土した。

土師器（1・2） 1は復原口徑が17.1cmの甕で、下半部を欠損するが小型品であろう。口縁部は直線的に大きく外反し、胴部は尻卒みの形状となる。口縁部は内外面共にヨコナア、外面は荒い刷毛目、内面は刷毛目後にナデ調整で、口縁部の内面にも刷毛目が残る。胎土は細砂粒を多く含み、雲母と赤褐色粒も含む。焼成は良好で、色調は暗黄褐色を呈す。2は甕の下半部で、復原底径が12.9cmを測る。底部の内外面がヨコナア、内面が刷毛目後にナデ、外面が刷毛目調整となる。胎土は砂粒の他に雲母と赤褐色粒を含む。焼成は良好で、色調は茶褐色を呈す。

22号竪穴住居跡（図版7-3、第25図）

20号住居跡に半分程を切られ、23号住居を切ってはいるが、21号住居との先後関係は不明である。カマド跡は削平されたと考えられ、壁高が全くない遺存状況不良な住居跡である。

竪穴部の規模は、東西の辺長が3.8m、南北の辺長が3.6mを測り、中型の部類に属す。床面は略水平であり、床面上に壁小溝は存しない。床面下層で掘り込みと土壤を検出した。土壤は、長軸が1.95mを、短軸が1.5m前後を測り、床面上より25cm前後の深さとなる。平面形態は円形を呈す。主柱穴は図示したP1とP2が該当するかもしれない。

出土遺物は國化可能な品は存じなかつた。

23号竪穴住居跡（図版7-3、第25図）

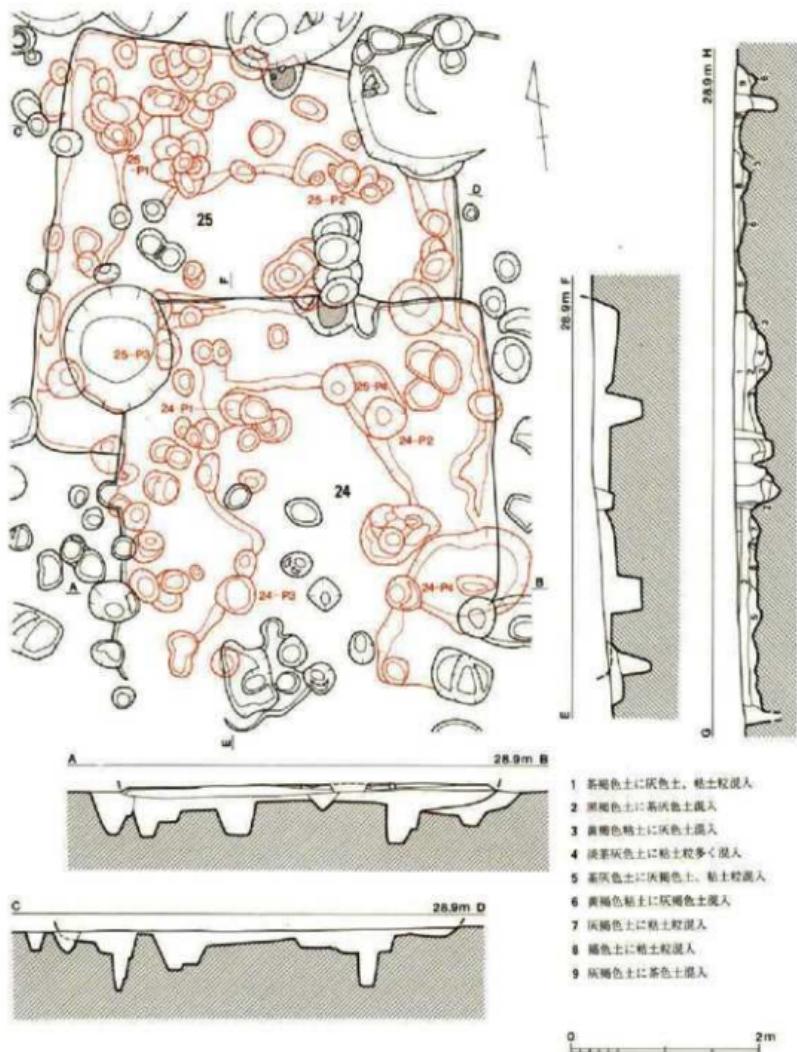
前述した4軒の住居に削平され、北東隅部のみ検出したが、検出面は貼床部であろう。床面下層には掘り込みが存在するものの、主柱穴やカマド等の遺構については全く不明である。

出土遺物も皆無に等しく、國化可能な品は存しない。

24号竪穴住居跡（第28図）

10D区で2軒の住居を検出したが、南側の新しい住居跡である。北西隅と南東隅部が後世の土壤に切られ、南壁側が不詳となるも、住居の概略は窺い知れる。

竪穴部の規模は、東西の辺長が3.9m前後を測り、南北の辺長が4m程になろう。中型の部類に属す。平面形態は梢円方形となろう。壁面は北壁で最大5cm程の壁高を測り、壁面下には壁



第28図 24・25号住居跡実測図 (1 / 60)

小溝は存しない。床面は北側がやや高くなるが、南半部は削平されていた。主柱穴は図示した柱穴が該当すると考えられ、竪穴部の平面形と相似する関係である。

床面下層には、南北以外で明瞭な掘り込みを検出したが、深さは均一ではない。主軸方位はN7°Eをとる。

カマド（図版9-1）

北壁中央に付設している。突出型と想定されるが、後世の柱穴で削平されて不明となる。竪穴部内に40cm程の袖が伸展しており、竪穴部外に突出した場合でも40cm前後になろう。

出土遺物（図版16、第27図）

図化した2点は床面下層より出土した品である。

土師器（1） 大きく外反し、やや短い口縁部の壺で、胴部はやや膨らむ。口縁部の内外面はヨコナデ、内面は継位のヘラケズリ、外面は刷毛目調整となる。胎土は砂粒の他に雲母と赤褐色粒を含み、焼成は甘い。色調は橙褐色を呈す。

石器（2） 貝岩製の薄手な砥石である。両面は良く使い込まれている。

25号竪穴住居跡（第28図）

南側を24号住居に切られ、北東隅部とカマド周辺部も後世の土塹に削平されている。

竪穴部の規模は、辺長が4.4m前後を測り、中型の部類に属す。平面形態は少し歪つな隅円方形と推定される。検出面が床面であり、壁高は全く存せず、壁小溝も見当たらない。床面は略水平で、厚さ5~10cmの貼床である。主柱穴は図示した柱穴を考えているが、竪穴部の平面形と相似な配置となろう。

床面下層には掘り込みが巡っているも、24号住居と重複する場所は不明となる。主軸方位はN10°Eをとり、24号住居と略同じとなる。

カマド（図版9-1）

北壁中央に付設しているが、大半以上を土塹に削平されている。火床面の一部のみ検出したもので、カマド形態は不詳となる。

出土遺物（第27図）

図化した3点では、2が復土中よりの出土品で、他は床面下層から出土した。

須恵器（1） 天井部がやや丸味を有する杯蓋で、口縁部は少し外に開く。復原口径が13cmを、器高が3.7cmを測る。天井部外面がケズリ、同内面がナデ、他は回転ナデ調整となる。胎土は精良で、焼成は良好である。内面が薄橙色を、外面が赤橙色を呈す。

土師器（2・3） 2点とも壺の口縁部片である。頸部で大きく屈曲し、口縁部は大きく外反するが、3の口唇部は反り気味となる。胎土は砂粒の他に雲母を含み、焼成は普通である。色調は2が橙褐色を、3が黄褐色を呈す。復原口径は2が23.1cm、3が26cmを測る。

26号竪穴住居跡（第29図）

9C区で検出したが、大半以上が調査区外に伸展する住居跡である。また、検出面は南側が床面となり、遺存状況は極めて悪い。西壁で2m程の辺長となり、竪穴部の規模は小型の部類に属すと推定される。平面形態も若干歪つな隅円方形になろう。西壁で5cm強の壁高を測るが、壁小溝は存しない。床面は略水平となり、厚さ5cm弱の貼床である。床面下層で中央土壤と覺しき遺構を検出したが、これも調査区外に伸展している。カマドと主柱穴は検出していない。

遺物も同化可能な品は出土しなかった。

27号竪穴住居跡（第30図）

C7区周辺に3軒の住居が重複して所在し、その中で最も西寄りで、新しい住居跡である。後世の土壤と溝に削平されているものの、旧態は窺い知れる。

竪穴部の規模は、東西の周辺が3.4m前後を、南北の辺長が3.3m前後を測り、中型でも小さい部類に属しよう。平面形態は隅円方形を呈す。壁面は遺存状況の良い北壁で8cm程の壁高を測り、壁面下で壁小溝を検出しなかった。床面は硬化が認められ、略水平である。主柱穴は図示したP1とP4が該当すると考えているが、他の柱穴は検出し得なかった。主柱穴の深さは20~30cm強である。主軸方位はN4°E前後になろう。

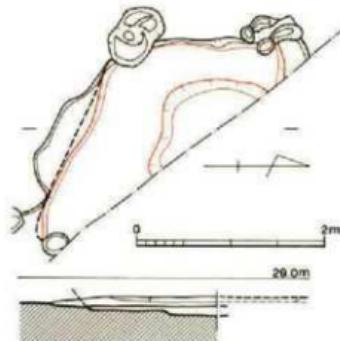
床面下層には、不整形な掘り込みが万遍なく存し、土壤状の遺構も2基検出した。北側の土壤は、長軸が1.35mを、短軸が1m前後を測り、最深部で30cm程となる。長梢円形の平面形となる。中央部の土壤は、長軸が1m弱を、短軸が70cm程を測り、最深部で40cm程となる。同じく梢円形の平面形となる。南西隅部にも土壤を検出したが、28号住居に付随すると思われる。

カマド

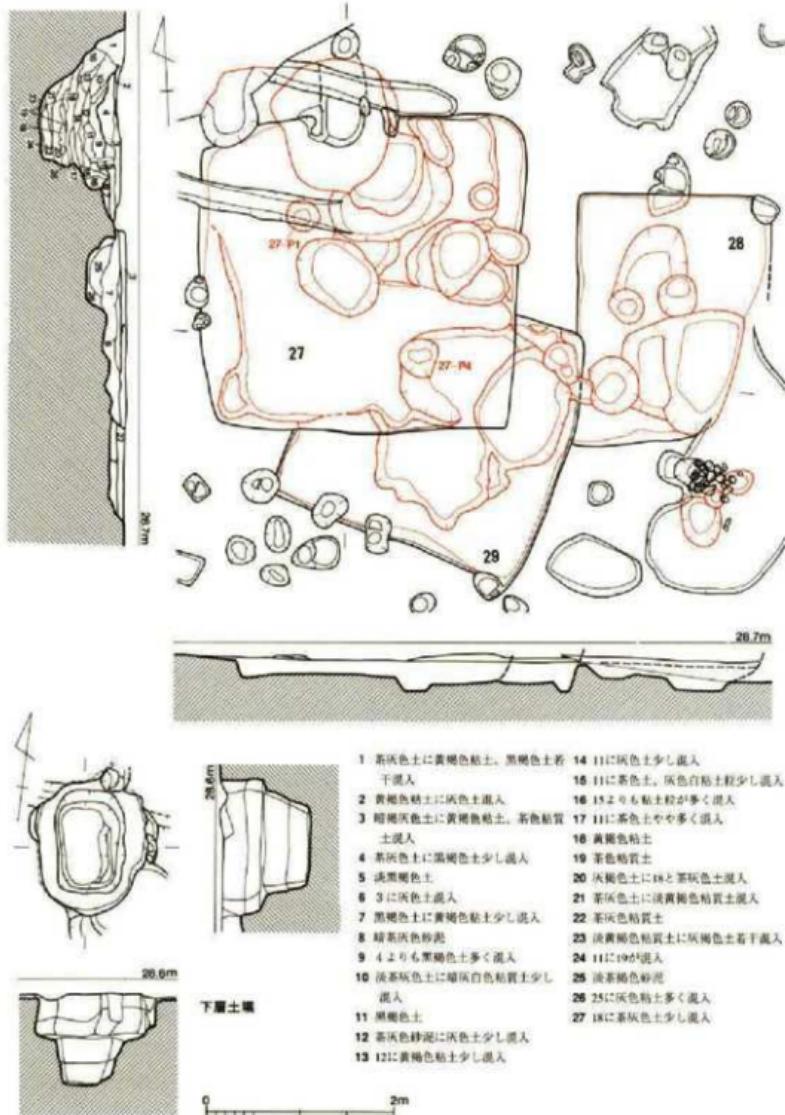
北壁中央部のやや西寄りに付設した突出型カマドである。突出部の先端が新しい溝で削平されているが、竪穴部よりも50cm程突出した掘り方と推定される。構築法は他の突出型カマドと同様であったと推定されるが、壁体は竪穴部内に35cm程遺存する。火床面は先端部が不明となるも、梢円形の平面形になろう。支脚部及び同抜き取り跡も検出していない。

下層土壤（図版9-2）

カマドの直下に遺存する土壤で、住居に付隨する遺構とは考えていないが、この項で報告し



第29図 26号住居跡実測図 (1/60)



第30図 27~29号住居跡実測図 (1/60)

ておく。上端の規模は、長軸が1.45mを、短軸が1.1mを測る。隅円長方形の平面形を呈す。壇内は二段掘りとなり、上端より40cm強の所で略水平なテラスを有するが、壁面はオーバーハング気味になる。テラスより急勾配な壁面で壇底に続くが、深さは50cm程度である。壇底の規模は、長軸が0.8mを、短軸が0.35～0.45mを測る。隅円長方形の平面形で、略水平な床面である。

覆土に堅穴住居と同様の土を含むことから、堅穴住居とは極端な時期差を有するとは考えられない。平面形と形態は階穴造構に類似するが、上記の事項から断定するまでは至らない。現段階では性格が不詳とすべきであろう。

出土遺物（第27図）

図示した品は、1・3・5が覆土中より出土し、2は床面下層から、4は床面下層の中央部の土塚から出土した。

須恵器（2・3） 2は皿である。底部は平坦で、口縁部は外方につまみ出す。復原口径14.8cm、同底径11.8cm、器高2.2cmを測る。底部外面が回転ヘラケズリ、同内面がナデ、他は回転ナデ調整である。胎土は精良で、焼成は良好。内面が橙色を、外面が橙色ないし灰色を呈す。3は上半部を欠損する杯身で、外に聞く高台を付す。底部は内外面ともナデ、外側の高台周辺は回転ナデ調整となる。復原底径は10.1cmを測る。胎土は精良で、焼成は良好である。色調は灰白色を呈す。底部外面に墨書きが認められる。

土器（4・5） 大きく外及する口縁部の壺である。調整は、口縁部がヨコナデ、内面の頸部下方はヘラケズリとなる。4は復原口径26.5cmを測り、やや甘い焼成で、暗黄橙色を呈す。色ないし橙褐色を呈す。胎土は2点とも砂粒の他に雲母と赤褐色粒を含む。

鉄器（1） 現存長5.8cmを測る刀子である。刃部は3.9cmが遺存し、関部は不明瞭である。身の最大幅は1cmで、先端側に向かって細くなる。

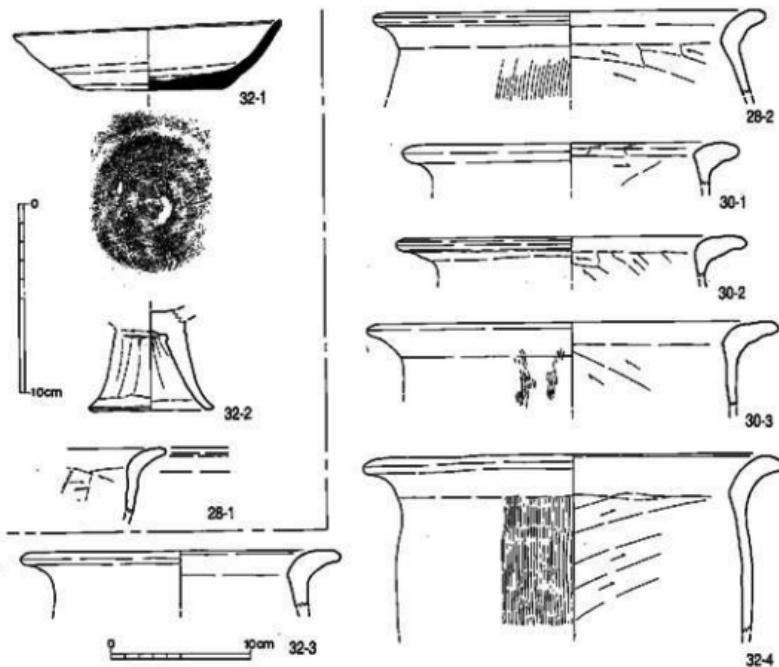
28号堅穴住居跡（第30図）

27号住居に北西部の大半を切られ、29号住居と僅かに重複しているが、当住居が新しくなる。堅穴部の規模は、東西の辺長が2.8m前後に、南北の辺長が2.7m前後を測り、小型の部類に属する。壁面は全く壁高がなく、壁小溝も検出していない。床面は略水平で、硬化が認められる。主柱穴は隅部の柱穴を想定しているが、断を下し得ない。カマド跡は27号住居に削平されたと考えられ、北壁か西壁に付設していたのである。

床面下層において3基の土壙を検出したが、深さに若干の違いがあるものの一基と考えるべきであろう。長軸の最大値は2.2mを、短軸の最大値は1.9mとなり、深さは床面より25cm程度を測る。

出土遺物（第31図）

図示した2点とも床面下層より出土した品である。



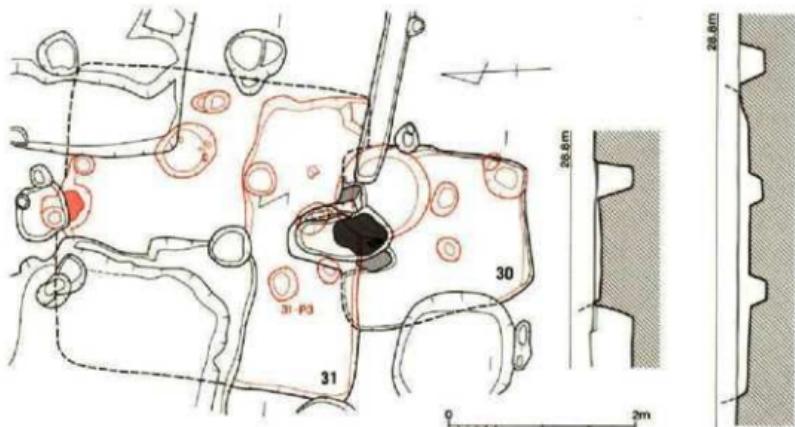
第31図 28・30・32号住居跡出土遺物実測図 (1/3・1/4)

土師器 (1・2) 1は体とすべき小破片である。大きく外及する口縁部で、頭部から頸部にかけてすぼむ形状となる。内面にヘラケズリが認められるが、他は磨滅している。胎土は砂粒の他に雲母と赤褐色を含む。焼成は普通で、淡橙褐色を呈す。2は復原口径28.0cmを測る甕で、胎土と色調は1と同じで、焼成は甘い。口縁部がヨコナデ、内面がヘラケズリ、外面が粗い刷毛目調整となる。

29号竪穴住居跡 (第30図)

南東側が土塁に削平されて不明となり、検出面が床面より下方の貼床部と考えられる住居跡である。竪穴部の規模は、東西の辺長が2.05m前後に、南北の辺長が2.65mを測り、小型の部類に属す。平面形態は隅円長方形になろう。主柱穴は全く不明である。

床面下層には二段掘りの土壌を検出したが、平面形態はダルマ形を呈す。最深部で床面から30cmの深さとなる。カマド跡も検出していないし、固化可能な遺物も出土しなかった。



第32図 30・31号住居跡実測図 (1/60)



第33図 30号住居跡カマド実測図 (1/30)

30号竪穴住居跡（図版9-3、第32図）

6C区で検出した住居跡で、今報告の中で最も小さな竪穴部となる。北東隅が溝に、西壁の中程を土壇に切られたいるが、31号住居を切っている。

竪穴部の規模は、南北の辺長が2.0mを、北壁の辺長が1.85mを、南壁の辺長が1.2mを測り、床面積が3m²前後となる。平面形態は逆台形状を呈す。壁高は2cm前後しか遺存せず、壁面下に溝は存しない。床面は略水平で、硬化した貼床である。主柱穴に関しては不詳となり、南東隅の柱穴が伴うのか、床中央部の柱穴2個が伴うのか、判断し難い。

カマド（図版10-1、第33図）

北敷の中央部に付設した突出型カマドである。竪穴部より55cm突出した掘り方となり、壁面に粘土を貼付して整体としている。竪穴部内にも65cm程伸展して袖となり、袖の幅は最大35cmを測る。火床面は、長軸が90cmを、短軸が25~45cmを測り、不整形な長楕円形を呈す。火床面は亦変していたが、床面より5cm程度窪み、断面は先底状を呈す。支脚及びその抜き取り跡を検出していない。

出土遺物（第31図）

図示した3点ともカマド内より出土した品である。

土師器（1~3） 3点とも頸部で鋭角に屈折して略水平となる口縁部に統く。口縁部の内外面がヨコナデ、内面がヘラケズリ、外表面が刷毛目調整となる。胎土は砂粒の他に雲母と赤褐色粒を含む。1は復原口径が24cmを測り、焼成は普通で、淡黄褐色を呈す。2は復原口径25cmを測り、焼成はやや甘く、うすい茶色を呈す。3は復原口径28.1cmを測り、焼成は良好で、薄茶褐色を呈す。

31号竪穴住居跡（第32図）

30号住居の北側に位置する住居跡である。北東隅と北西隅を土壇に大きく削平され、遺存状況は劣悪である。

竪穴部の規模は、辺長が3.2m前後に復原される。平面形態は隅円方形になろう。床面は略水平で、硬化が認められる貼床である。床面下層で柱穴を確認したが、主柱穴を構成する妥当な柱穴はP3のみであった。その他の床面下層遺構では、南壁側で明瞭な掘り込みを検出した。

カマド

北壁中央部に付設しているが、後世の柱穴に先端部を削平されており、突出型カマドの可能性が大である。火床面が一部遺存するのみで、床面より僅かに窪む。

固化可能な遺物は出土していない。

32号竪穴住居跡（図版10-2・3、第34図）

6D区に所在する住居跡で、南西隅を土壤に削平され、住居内を後世の溝2条が走る。

竪穴部の規模は、東西の辺長が3m前後を、南北辺では東壁が3.25mを、西壁が2.6m前後を測る。平面形態は隅円台形状を呈す。壁面は最も良好な北壁で5cmの壁高を測り、壁面下には壁小溝は存しなかった。

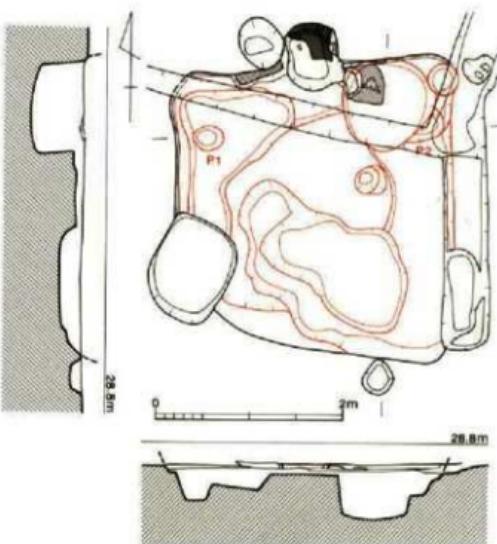
床面は略水平で、硬化が認めらる貼床である。主柱穴は図示したP1とP2が該当すると考えているが、P3とP4は検出していない。

床面下層には、掘り込みが万遍なく巡る。土壤は北東隅部に壁隅土壤を検出した。径1mの円形を呈し、約50cmの深さとなる。南壁近くの土壤状遺構は床面よりは15cm程とやや浅い。

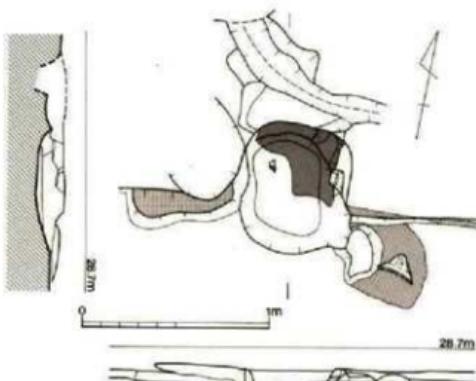
カマド（図版11-1、第32図）

北壁中央部に付設した突出型カマドである。竪穴部より45cm突出した掘り方となり、他の突出型カマドと同じ構築法をとるが、竪穴部の東西両壁面に粘土を貼付し、長さは60cmにも及ぶ。

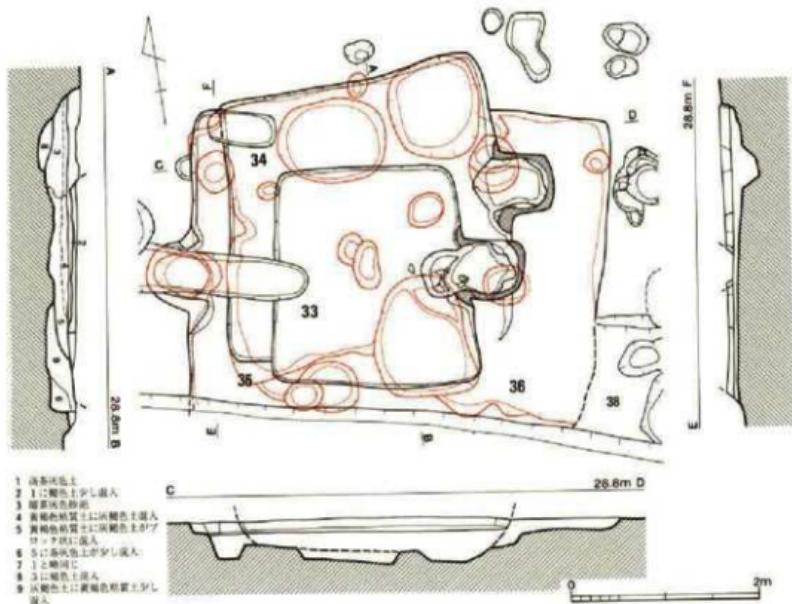
通常の袖とは異質な性格で、右袖が若干遺存していることから、袖部の補強を目的とした施設



第34図 32号住居跡実測図 (1/60)



第35図 32号住居跡カマド実測図 (1/30)



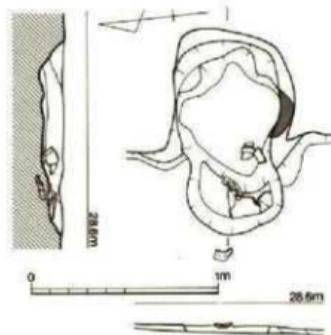
第36図 33~36号住居跡実測図 (1/60)

と考えられる。火床面は、長軸が50cm弱を、短軸が35cm程を測り、少し歪つな隅円長方形を呈す。床面より8cm程窪み、断面は舟底状を呈す。支脚は遺存しなかった。

出土遺物 (図版16、第31図)

国示した4点で、3がカマド内より、2と4がカマド右側の床面直上、1が土壤内の出土。

須恵器 (1) 底部が平らな皿で、体部が僅かに内縁気味となり、少し外反する口縁部に統く。底部外面がヘラ切りで未調整、他は回転ナデ調整、胎土は精良で、焼成は良好であり、橙褐色を呈す。復原口径が14.35cmを、底径が7.3



第37図 33号住居跡カマド実測図 (1/30)

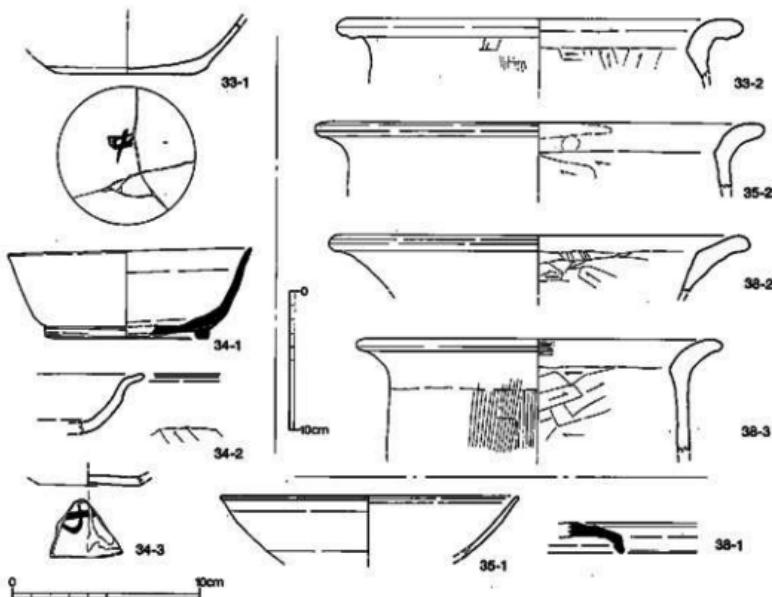
cmを器高3.3cmをはかる。

土器器（2～4） 2は高杯の胸部で、復原底径が6.7cmを測る。調整は、内面が横位のヘラケズリ、外面が縱位のヘラケズリ、端部はヨコナデを施す。胎土は精良で、焼成は良好。内外面ともに橙色を呈す。3と4は甕である。3は復原口径23.0cmを測り、薄黄褐色を呈す。4は復原口径が30cmを測り、肩部は僅かに膨らむ。内外面の口縁部はヨコナデ、内面はヘラケズリ、内面は荒い刷毛目調整となる。橙褐色を呈す。2点とも焼成は普通で、胎土は砂粒の他に雲母と赤褐色粒を含む。

33号堅穴住居跡（図版11-2、第36～38図）

6C区で4軒の住居が重なり合って重複しているが、真中でもって、最も小さく新しい住居跡である。西壁の中央部を後世の溝で切られているが、旧態は充分窺い知れる。

堅穴部の規模は、東西の辺長が1.9～2.2mを、南北の辺長が2.2～2.3mを測り、極めて小型の部類に属す。平面形態は亜つた隣円方形となる。壁面は急勾配な立ち上がりで、壁高が10cm前



第38図 33～35・38・39号住居跡出土遺物実測図（1/3・1/4）

後を測る。壁小溝は全く見当たらない。床面は略水平で、硬化が認められる貼床である。主柱穴は全く不明であり、床面下層の遺構も重複しているので判然としない。

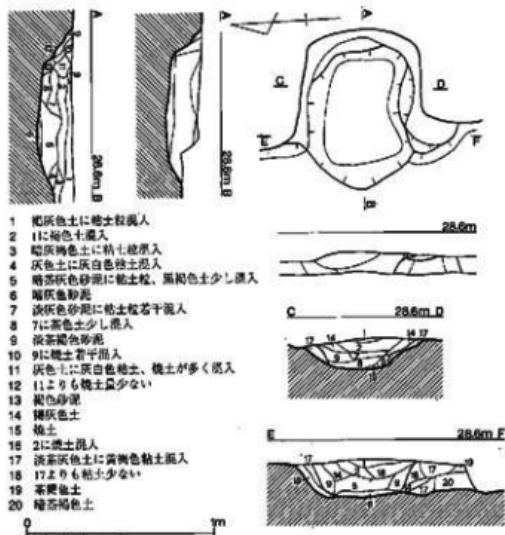
カマド（図版11-3, 第37図）

東壁の中央部に付設した突出型カマドである。竪穴部より60cm程突出した掘り方をなし、平面形態は少し歪つてある。壁体の構築は他の突出型カマドと同じで、竪穴部内に伸展する袖は僅かに遺存する。火床面は煙道側が最も深く、焚口に向かって順次高くなる。壁体が崩れているので歪つな形状を呈しているも、本来は隅円長方形であったろう。支脚は遺存していない。

出土遺物（図版16, 第38図）

図示した1は南西隅の床面上より出土し、2はカマド周辺の床面下層より出土した。

土器類（1・2） 1は「中」とも読める墨書がある杯で、平坦な底部である。底部外面がヘラケズリ、同内面がナデ、他はヨコナデ調整となる。底径7.4cmを測る。胎土は精良だが、雲母と赤褐色粒を含む。焼成は良好で、橙褐色を呈す。2は復原口径29cmを測る甕で、口縁部の内外面をヨコナデ、内面がヘラケズリ、外縁部が荒い刷毛目調整となる。胎土は砂粒の他に雲母と赤褐色粒、角閃石を含む。焼成は普通で、黄橙色を呈す。



第39図 3-4号住居跡カマド実測図 (1/30)

34号竪穴住居跡 (第36図)

大半以上を33号住居に切られているが、35・36号住居を切っている。図示した平面図で、33号住居と当住居とは、竪穴部の形態とカマド位置等が相似しており、縮小しつつ平行移動したのではと考えられるほど類似している。

竪穴部の規模は、東西の辺長が2.7~3m程に、南北の辺長が2.7m前後を測る。平面形態は少し歪つな隅円方形になろう。壁面は遺存状況良好な北壁で12cm程を測り、急勾配の立ち上がりである。壁面下には壁小溝は存在しなかった。床面は略水平となり、床面下層で土壌を2基検出したが、北京隅が当住居に伴い、その西側が36号住居に伴うと考えている。壁隅土壌と呼称している遺構で、各々の土壌は各住居の隅部に位置している。当住居の土壌は、1m前後の隅円形であり、床面から30cm程の深さである。当住居の主柱穴は不詳となる。

カマド (第39図)

東壁の中央部に付設した突出型カマドである。60cm弱突出した掘り方となり、構築法は他のカマドと全く同じで、右袖部が25cm遺存していた。火床面は、長軸が55cm、短軸が30~40cmを測り、少し歪つな隅円長方形を呈す。床面より8cm程深くなり、断面は舟底状を呈す。支脚は遺存しない。

出土遺物 (図版16、第38図)

図示した2がカマド内より出土し、他は床面下層から出土した品である。

須恵器 (1) 復原口径13cmを測る杯身で、直立の高台を付し、口縁部は少し外反する。底径8.7cm、器高4.6cmを測る。底部内面がナデ、他は回転ナデ調整となる。微砂粒をやや多く含み、暗橙色を呈す。焼成は良好である。

土師器 (2・3) 2は鉢であろうか。口縁部は長くて水平に近い。調整は丁寧なナデ、胎土も精良である。橙色を呈し、焼成は良好。3は底部外面に墨書きがある。胎土と焼成は2と同じで、明褐色を呈す。

35号竪穴住居跡 (第36図)

33・34号住居に大半以上削平され、南壁も後世の溝で喪失した住居跡である。竪穴部の規模は3m強と推定され、33号住居の下層で検出した土壌が当住居の壁隅土壌になろう。

壁面は急勾配の立ち上がりで、最大壁高は10cm程となる。床面は検出した範囲では略水平であった。主柱穴に関しては全く不詳である。壁隅土壌は長軸が1.2mを、短軸が1mを測り、深さは床面より40cm弱で、隅円形を呈す。

カマド

西壁の略中央に付設した突出型カマドであるが、中央部を後世の溝で削平されている。竪穴部より45cm程突出し、壁面に粘土を貼付して積み上げた整体は25cm程竪穴部内にも伸展してい

る。火床面は、長軸が45cmを、短軸が35cm程を測り、椭円形の平面形態となる。

出土遺物

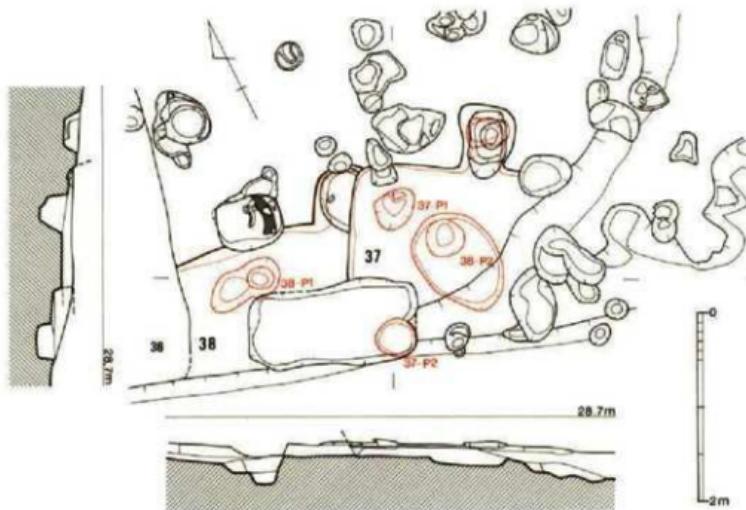
図示した2点とも床面下層より出土した。

土師器（1・2） 1は杯または碗となる。薄手の造りで、口唇部は僅かに外反する。丁寧な横位のミガキを施し、胎土は精良で、焼成は良好である。色調は橙色を呈す。復原口径16cmを測る。2は復原口径32cmの壺で、頸部で大きく屈曲し、肥厚な口縁部は水平に近い。口縁部の内外面がヨコナデ、内面はヘラケズリとなる。胎土は砂粒の他に雲母と赤褐色粒を含む。焼成は良好で、色調は茶色ないし赤褐色を呈す。

36号堅穴住居跡 （第36図）

34号住居跡等に削平されて、北東部のみが遺存する住居跡である。34号住居で説明した土壤が当住居の埋蔵土壤に相当すると、辺長が3.5m前後の規模に復原される。検出面が床面であり、壁高は全く存しない。主柱穴やカマドも検出していない。また、図化可能な遺物も出土しなかった。

37号堅穴住居跡 （第40図）



第40図 37・38号住居跡実測図 (1/60)

36号住居の東側に位置し、38号住居を切るも、後世の溝等半分以上削平されていた。

竪穴部の規模は辺長が2.7m前後に復原され、平面形態は隅円方形になろう。壁面は急勾配な立ち上がりで、最大壁高7cm程を測る。壁面下で壁小溝は検出していない。床面は略水平となり、厚さ10cm程の貼床である。主柱穴は図示したP1とP3が該当すると思われるが、不確かな要素も含んでいる。

カマド（図版12-1, 第41図）

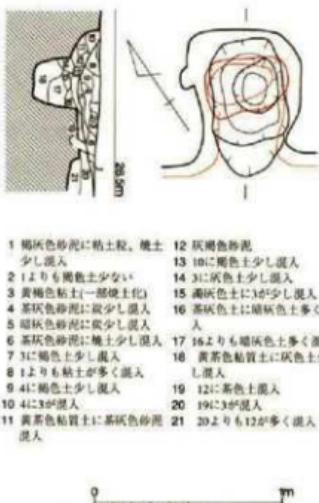
北壁に付設した突出型カマドであるが、壁体は全く遺存しない。竪穴部より70cm程突出しており、掘り方は隅円長方形を呈す。火床面は、長軸が45cm弱を、短軸が30cm程を測る。隅円長方形の平面形となる。中央部に僅かな窓みを検出したが、支脚の抜き取り跡かもしれない。

図示可能な遺物は何ら出土しなかった。

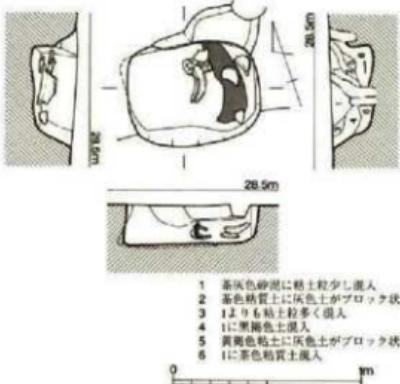
38号竪穴住居跡（第40図）

37号住居に東半部を切られ、南側は後世の溝で削平されていた。36号住居との切り合い関係は遺存状態が悪くて判然としない。住居の南側は、検出面が床面ではなく貼床部に相当し、37号住居と同じく25号土壤にも削平されており、遺存状況は劣悪である。

規模と形状は推測の域を出ないが、辺長は3m以上になるかもしれない。壁面は北壁で3cm程の壁高を測るが、壁小溝は存在しない。主柱穴は図示したP1とP2が伴うかもしれないが、確かであるとは言い難い。床面下層では特筆する遺構は検出しなかった。



第41図 37号住居跡カマド実測図 (1/30)



第42図 38号住居跡不明溝実測図 (1/30)

カマド

北壁に付設した突出型カマドであるが、東半部を37号住居に削平されている。堅穴部より60cm程突出した掘り方となるが、壁体は全く遺存しなかった。火床面は床面より僅かに窪む。

不明遺構（第42図）

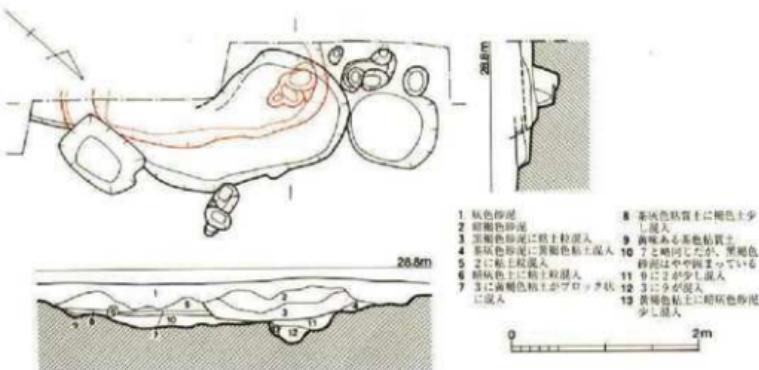
カマドの西30cmに位置する遺構で、堅穴部の壁面際から外方に伸展する掘り方となる。長軸が70cmを、短軸が55cmを測り、垂直な壁面でもって20cm前後の深さとなる。平面形態は隅円方形を呈す。床面に赤変した部分が認められた事とカマドに隣接している点を勘案すると、火種置場等の遺構を想起したが確証を得ない。カマド移築による古いカマド跡との推論も可能だが、形態や覆土等は否定資料を多く含む。類例として宮原遺跡^(注3)でも検出されており、後の節で、再検討する次第である。

出土遺物（第38図）

図示した品で、1は床面下層より出土し、2はカマド内、3は不明遺構より出土した。

須恵器（1）杯蓋となる小破片だが、丸味を有して直立気味な口唇部である。ナデ及び回転ナデ調整で、一部の天井部は回転ヘラケズリである。精良な胎土で、焼成も良好。色調は白灰色を呈す。

土師器（2・3）2は鉢であろうか。復原口径30cmを測り、頸部は極端に屈曲しない。口縁部は内外面ともヨコナデ、内面はヘラケズリを施す。胎土は砂粒の他に雲母と赤褐色粒を含み、焼成は普通で、色調は橙褐色を呈す。3は復原口径26cmを測る。調整は2と略同じだが、外面は粗い刷毛目調整となる。胎土と焼成も2と同じで、色調は橙褐色ないし茶色を呈す。



第43図 39号住居跡実測図 (1/60)

39号竪穴住居跡（第43図）

4D区の調査区端で検出した住居跡で、北東壁の一部のみ調査した。検出した北東壁の大部分も後世の土壤で削平されていたが、床面下層の掘り込みを確認したので旧態の一部が窺い知れた。竪穴部の規模は3m以上となり、隅円方形の平面形になると推定された。カマドは検出してないが、北西壁か南東壁にならう。

出土遺物

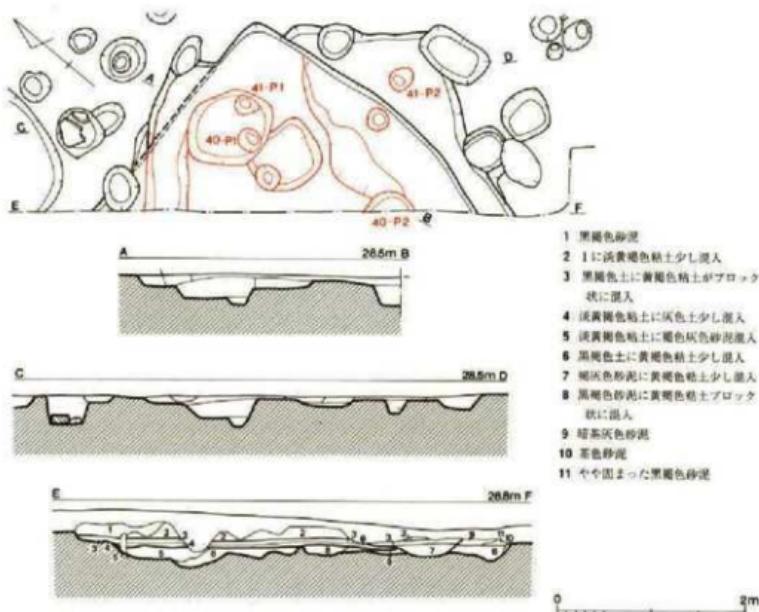
ガラス小玉（第44図） 径3.6mmを測り、少し歪つな球状を呈す。孔径は1.2mmであり、色調はスカイブルーを呈す。

40号竪穴住居跡（第45図）

3C区の調査区端に2軒の住居が重複しており、西側に位置した新しい住居跡である。辺長が



第44図 39号
住居跡出土遺物
実測図（実大）



第45図 40・41号住居跡実測図（1/60）

3m以上の規模となるが、壁高は全く存しなかった。床面は略水平で、硬化が認められる貼床である。主柱穴は図示したP1とP2が考えられる。カマド跡は検出していないし、遺物で図化可能な品は出土していない。

41号堅穴住居跡（第45図）

40号住居跡に切られているが、床面下層遺構の掘り込みで、旧態の一部が判明した。辺長が3.2m前後を測り、中型の部類に属すかもしれない。壁面は全く存しない。主柱穴は図示したP1とP2を想定している。カマドは検出していないが、西壁に付設していた可能性が大であろう。図化可能な遺物は出土していない。

42号堅穴住居跡（図版12-2・3、第13・14図）

9G区に所在する34~7住居の下層で検出した住居跡で、これらの住居と土壤で削平されてしまいものの、深く掘り込まれた遺構ゆえに旧態が残された。

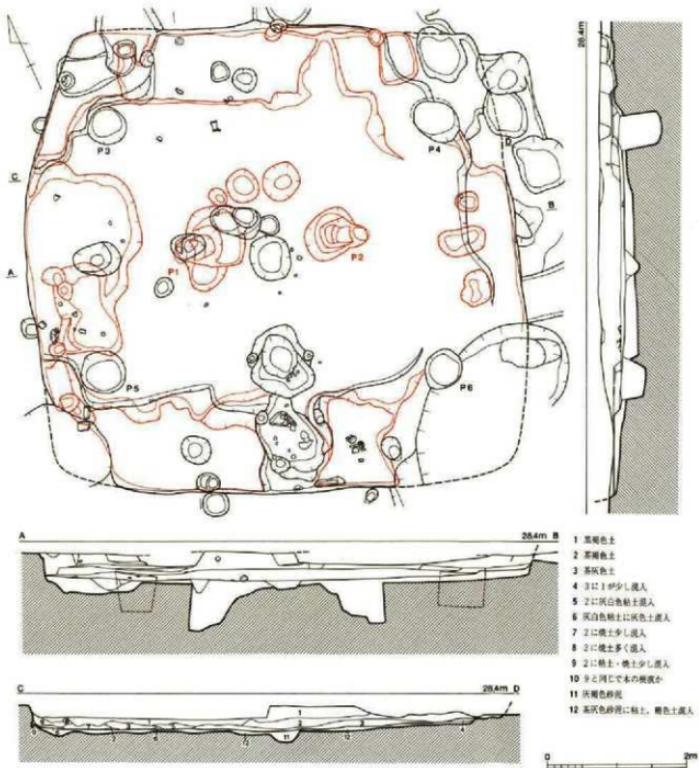
堅穴部は、辺の中程が膨らむ形状となり、東西では最大7.0mを、南北では最大6.6mを測る。壁面は垂直に近い立ち上がりで、壁面は30cm前後を測り、壁面下に溝は遺存しない。床面は略水平であり、5~10cm程の貼床であった。北西隅部と南西隅及び東壁側にベット状遺構が構築されており、一部壊されているものの、幅が1m前後で10cm程の高さになろう。

主柱穴はP1とP2が相当し、柱穴間は2.6mを測る。しかし、P3~P6の柱穴配置形態は堅穴部の平面形態と相似形となることから、これらの柱穴が補助柱穴になるかもしれないだけ付記しておく。主柱穴P1とP2間の中程に、浅い窪みを検出したが、赤変及び炭・灰の堆積が認められず、炉址とは断定し難い。長軸方位はN70°W前後をとる。

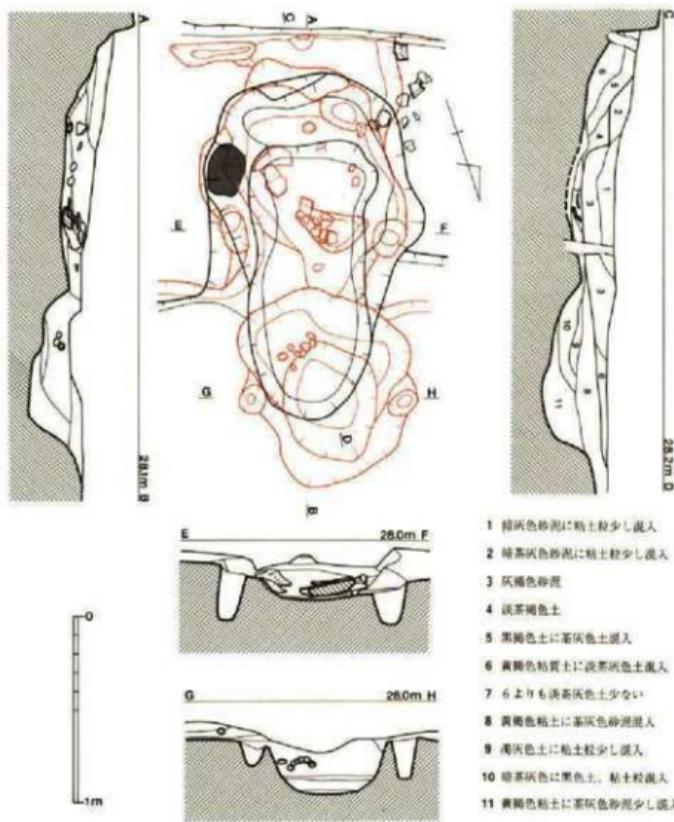
南壁中央部に屋内土壇を検出した。検出時は黒線で図示した平面形の遺構が考えられ、この面で若干踏み固まつた状況であり、それを図化したものである。壁際20cm程がテラス状になり、その内側より土壤が内方に伸展し、上端の平面形は長辯円となる。壇内は二段落ちで、20cmの中段を経て、略水平な壇底に至る。形状及び検出状況から判断して、屋内土壤ではなく出入り口施設と考えるべきであろう。その後、完掘した状況を赤線で図示しているか、土壤状を呈する遺構が壁際より1.3m程内側で検出した。長軸が1m前後を、短軸が0.8m前後を測り、不整形な形状で、二段掘りである。築造時に掘られたものであろうか、性格は決め難い。また、小さな柱穴を4個検出したが、南壁と平行に2個づつ並列した状態である。出入口施設に伴うものかもしれない。

出土遺物（図版17、第48図）

6~8~10が床面直上より出土し、3と7が屋内土壤内及び周辺からの出土で、他は覆土中より出土した品と考えられる。

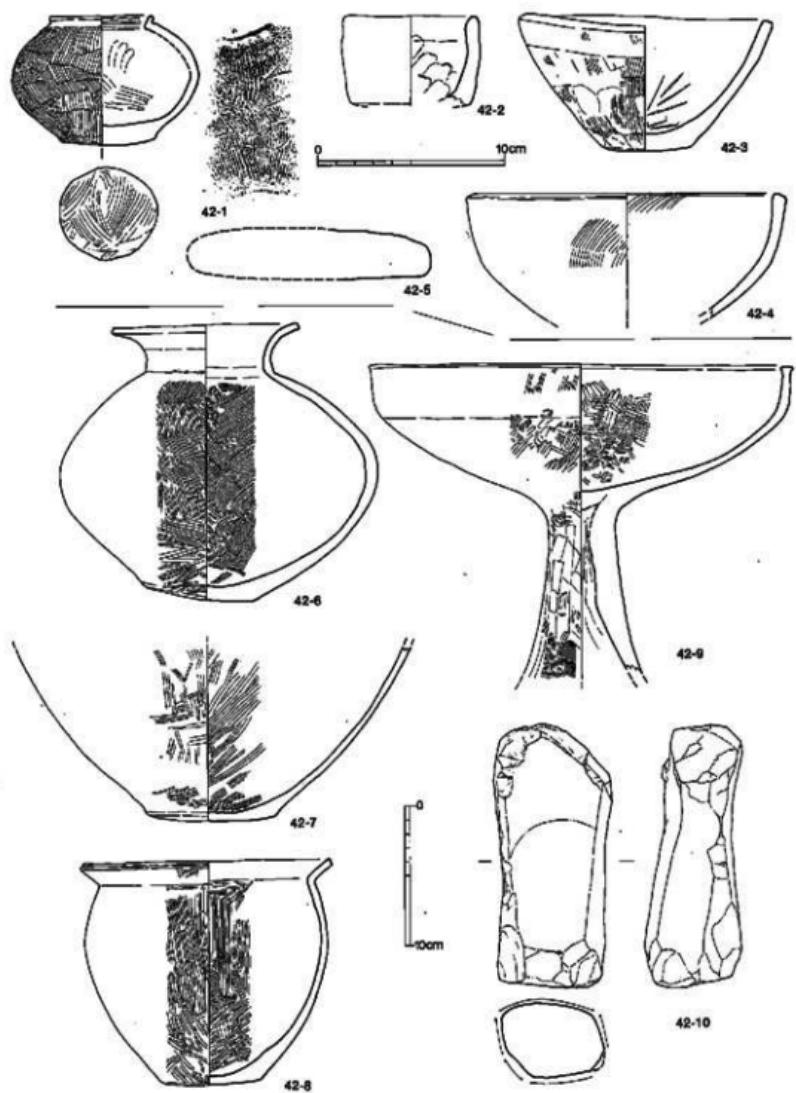


第46図 42号住居跡実測図 (1/60)



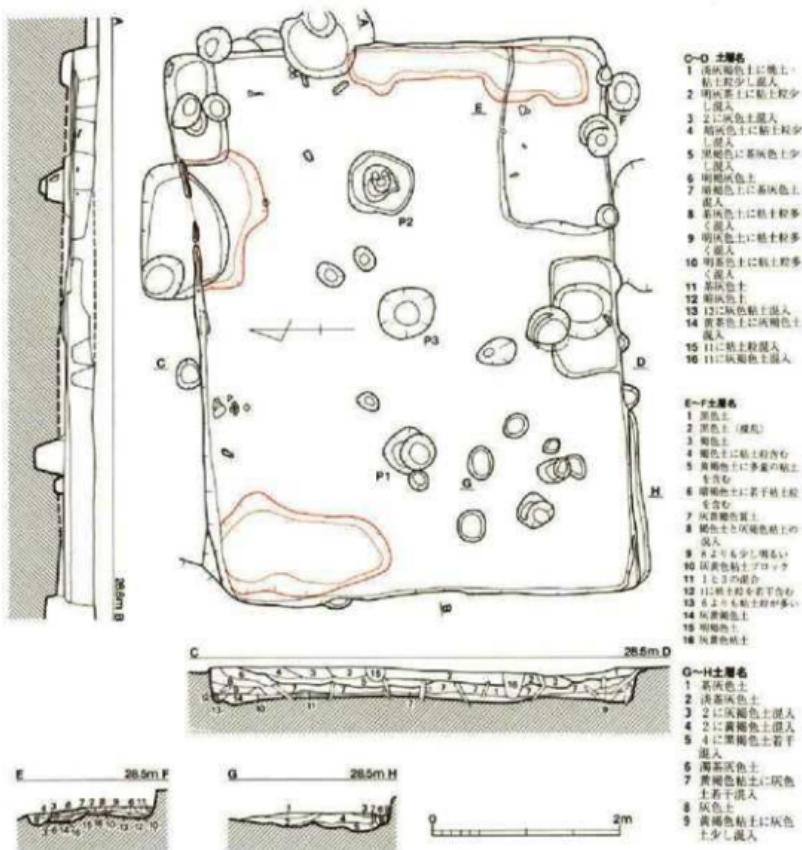
第47図 42号住居跡地内土壤実測図(1/30)

土 器 (1~9) 1は完形の小壺で、口縁部は極めて短く、胴部は球状を呈す。調整は内面がナデ後ミガキで、外面は刷毛目、口縁部はヨコナデで、内面に刷毛目が残る。口径が5.5cm、器高が6.9cm、底径が5.1cmを測る。胎土は砂粒の他に雲母と角閃石を含み、焼成は良好。黄灰褐色を呈す。2は手捏風の椀で、復原口径が6.8cmを測る。3と4は椀で、3は口径が13.6cm、器高が7.3cm、底径が4.8cmを測る。外面が刷毛目、内面が工具によるナデ。口縁部はヨコナデ調整。



第46図 42号住居跡出土遺物実測図 (1/3・1/4)

4は復原口径が17.1cmを測る。口縁部がヨコナデで、内面に刷毛目が残り、内面は工具によるナデ、外面は刷毛目とナデ調整。5は厚さ2.7cmの土板で、ナデ調整である。焼成は普通で、胎土は土器と変わらない。6と7は壺である。6は復原口径が13.4cm、器高19.6cm、底復8.3cmを測る。頸部から口縁部はヨコナデ、内外面とも刷毛目調整で、下半分はミガキである。7は底径が9.5cm、刷毛目後にミガキを施す。8は「く」字状口縁の甕。口縁部がヨコナデ、内外面は刷毛目後にミガキ、下半部はミガキとなる。口径が17.9cm、器高が15.9cmを測る。8は脚部を欠損



第49図 43号住居跡実測図 (1/60)

する高杯で、復原口径が30.3cmを測る。口縁部は刷毛目後ヨコナデ、杯の内外面は刷毛目後にミガキ、柱部外面も同じ。

砥石(9) 良く使い込んだ砥石で、石材はアブライト質砂岩である。

43号聚穴住居跡（図版15、第49図）

9E区で検出した住居跡で、上面には土壁や住居が數多く重複していた。

聚穴部の規模は、長軸が5.8m前後を、端輪が4.4m前後を測る。平面状態は長方形を呈す。

壁面は垂直な立ち上がりで、壁高は30cm前後を測る。壁面下に壁体の痕跡を確認したが、犬竹遺跡(註4)の20号住居と同様の施設になるとを考えている。壁体の痕跡は、厚さ3cm程度で、深さは10cm程度となり、土層間に掲載している。床面では、南東隅が若干高くなっている、2~5cm程の高さだがベット状造構であろう。幅が1.1m、長さが1.9mを測る。床面は略水平であり、厚さ5~10cmの貼床である。

主柱穴はP1とP2が相当し、柱間は2.9mを測る。主柱穴の中程にP3を検出したが、8cm程の浅い窪みである。赤変していないし、炭や灰も認められず、炉址とは認定し難い点もあるが、炉址の可能性があるに止めた。

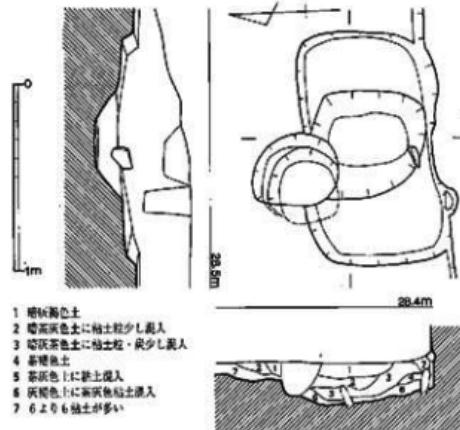
南壁の中央部壁際で屋内土壤状の造構を検出した。長軸が1.25m、短軸が0.7mを測り、平面形態は隅円長方形を呈す。二段掘りの形状で、上端より5cm程に平坦なテラスとなる。中央部

が最も深くなり、幅が55cm、深さ12cmを測り、隅円方形の形態となる。出入口の施設と考えられるが妥当ではなかろうか。長軸方位はN82°Eをとる。

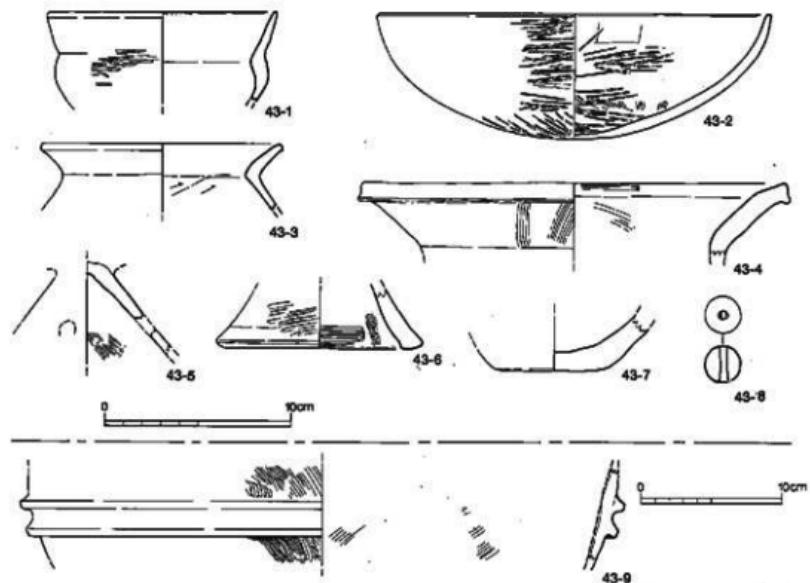
出土遺物（図版17、第51図）

1・2と5が床面直上から出土し、他は覆土中より出土した品である。

土器(1~7・9) 1は底部を欠損する鉢で、復原口径が12.2cmを測る。口縁部は直線状に外斜し、ヨコナデとナデ調整である。外面の頸部下方はミガキを施す。胎土は精



第50図 43号住居跡屋内土壤実測図 (1/30)



第51図 43号住居跡出土遺物実測図 (1/3・1/4)

良である。2は大型の碗で、口径が21.0cm、器高が6.7cmを測る。薄手の造りで精良品。口縁部はヨコナデ、他はミガキを施す。3は「く」字状口縁の甕で、復原口径が13.0cmを測る。口縁部はヨコナデで、内面に工具痕あり。頸部下方の内面はヘラケズリとなる。4mmも甕片で、復原口径が22.6cmを測る。ヨコナデ調整だが刷毛目も残る。5は高杯の柱状部で円形の透しを有す。内面に刷毛目が認められる。6は器台型土器で、底径が11.0cmを測る。端部はヨコナデで、他は刷毛目調整となる。7は底部片で、底径が5.8cmを測る。9は甕の胸部片で、復原胸部径が43.2cmを測る。2条の凸帯を貼付し、刷毛目後にヨコナデ調整。

土玉 (8) 径が1.9cmで、径4mm程の孔を穿つ。胎土は土器と同じである。重量は7.1g。

註1. 福岡県教育委員会「九州横断自動車道関係埋文化財調査報告—17—」 1990

註2. 註1と同じ。

註3. 福岡県教育委員会が調査を実施した宮原(追跡D地区)。

註4. 三輪町教育委員会 「大竹遺跡」 1985

2. 積穴住居の諸問題について

報告した43軒の住居跡について検討するが、大半以上の住居跡は遺存状況が極めて悪く、しかも、固化可能な遺物が出土した住居は約半数であり、各住居の時期が決め難い点など多くの支障をもたらした。けれども、調査区外に伸展する住居以外は、数軒が重複もしくは隣接しており、この特性を重視して、積穴住居の問題点や集落の有り様を検討して行く。

I. 集落について

住居・住居群の有り方

弥生時代の住居跡は42・43号の住居の2軒で、遺存状況も良好であり、遺物が出土量も古墳時代以後の住居に比べると一際多い。この2軒の住居については別の項目で触れるので、当項では古墳時代以後の住居に限定して論を進めて行く。

古墳時代後期から八世紀代までの住居は41軒にも達するが、遺物が明確な出自であり時期比定が可能な住居は十数軒である。まず、これらの住居を検討して行き、残る住居については別の手立てと切り合い関係等から、大まかな時期を推測することにする。

(i) 時期について

最も古い時期の遺物は25号住居の須恵器である。杯身の蓋で、全体的に浅い器形となり、口唇部は丸く仕上げており、六世紀後半頃よりも六世紀末頃に比定すべき品と考えられよう。この時期をⅠ期とする。

これに後続する時期の遺物は16号住居周辺より採集した品であり、内面にかえりを有す大型の須恵器杯蓋で、七世紀後半頃である。16号住居内の2は小型の須恵器杯蓋で、前出の品と同時期か若干古い時期が考えられ、16号住居周辺の住居群に該当期の住居が存在する可能性がある。この時期をⅡ期とする。

後続する八世紀以後の遺物は土師器の杯と甕が主であり、細分化すべきだが資料不足の点は否めない。取えて試みると、38号住居遺物が八世紀前半～中頃に納まる。須恵器の杯蓋は小破片だが、垂直に折り曲げた口縁端部があり、牛頭窓(注1)のⅡ期に相当しよう。共伴する土師甕は大きく外反する口縁部で、胴部が直立気味な器形である。この時期をⅢ期とする。

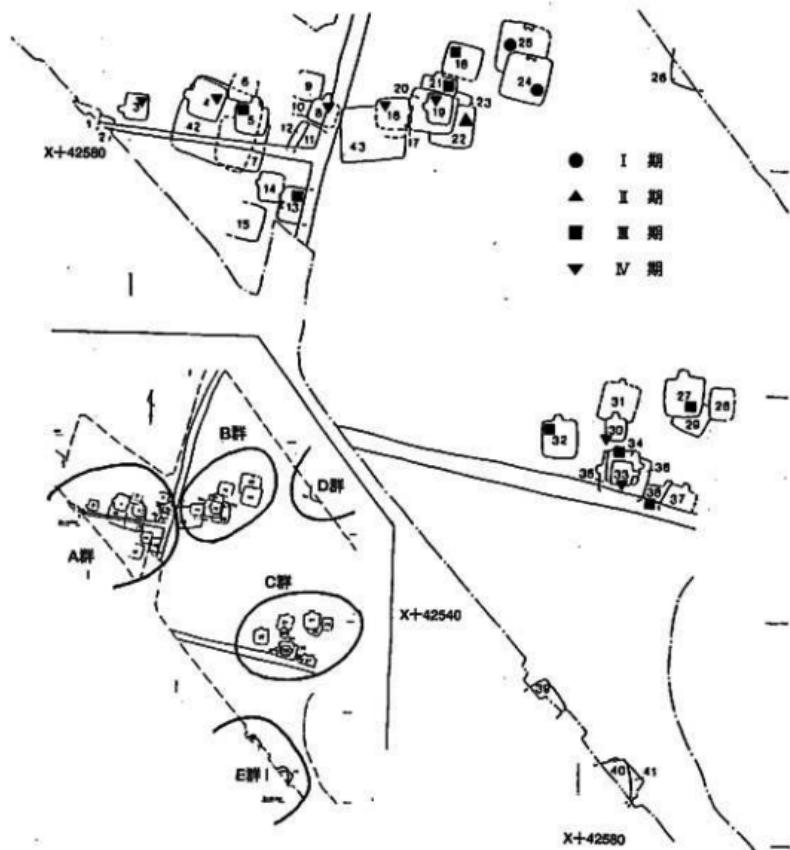
更に後出する土器には16号住居の品が挙げられる。須恵器の杯蓋は口縁端部が退化して、断面三角形と表現するよりも少しつまみ出した程度であり、天井部外面には回転ヘラケズリが認められない。土師器の甕は、口縁部が大きく外反するが水平に近い。調整は38号住居の甕と同じであり、この器種で変化を捉えるのは難しい。この時期をⅣ期として、八世紀後半頃である。問題となるのが3号住居の土師器杯である。底部外面にヘラケズリを施している20号住居の杯に比べ、ナデとヨコナテ調整であり、扁平な底部で、口縁部が内縫する器形となる。若干後出

する要素を有しており、九世紀前半頃まで下るかもしれない。以上の四時期に大別した。

(ii) 群構成と集落の有り様について

前述した出土遺物より、七世紀前半から八世紀初頭にかけての時期に伴う遺物は僅少で、この時期の住居が稀少であったかもしれない。この点を留意して、集落全体を観察して行く。

まず、住居の配置状況を考えると、第52図に図示した5群に大別されるが、D・E群に関しては他の3群の状況から推測して、調査区外に相当数の住居が存在するかもしれない。他の3群



第52図 群構成と集落の有り様

は10~15軒の住居で構成しているものの、各群構成における個々住居の配置状況を異にしており、群単位における住居形態の相異や時期差等も含めて考えてみる。

A群については、西端の1・2号と7号住居が当集落では大型規模に属し、他の7軒の住居は辺長3m前後の規模となり、突出型カマドを付設する。一方、住居の重複は2~3軒が切り合い関係をなしており、群の広さも考慮にいれると、同時に2軒が存在し得る可能性も考えられる。例えば、IV期の時期と考えている3号住居と8号住居であり、両者間は14m程離れている。その他にも二軒が同時に併存することも可能であり、この点がA群の特徴として挙げられる。

B群では、I期の25・26号住居と17号住居が少し離れて所存しているものの、他の7軒は重なり合って一ヶ所に密集する。カマド方位は南以外の3方向と不揃いとなるが、新しい住居の方が小規模な竪穴部になる傾向が窺える。それに、16~21号住居はIII~IV期の時期内に納まると考えられ、70~80年に6軒が営まれたことになる。これらの状況から、B群内では2軒が同時に併存する可能性は少なく、A群との相違が窺取される。

最後のC群の配置状況は、A・B群の特徴を併せ持ち、27~32号住居が拡散する配置をとり、33~37号住居が集中する形態を示す。このC群の時期はIII~IV期と考えられるが、各住居間の距離から判断して、最大で3軒の住居が同時併存することも充分可能となる。この他には、33号住居の有り様はB群の19号住居と同じで、重なる住居群内で最も規模が小さくなる。

簡単に3群の説明を行ったが、これらに認められた特徴が当遺跡の性格を決定する要因になるかもしれない。まず1点目は、遺跡の広さに比較して、住居が営まれているスペースがあまりにも狭小なことである。仮に、掘立柱建物等に居住する人々が存在し、その建物が相当数に及ぶとしても、竪穴住居を造る場所が限定されているもの事実である。限定された場所で、埋め戻したり、または、埋まつた場所に住居を造り続けていることに変わりはない。衆人間における相互規制や、狭い空間に2~3軒を1単位とする大家族を形成していたのか、住居周辺に必要な物（例えば畑や林等）が存在したのか、等の条件が存した結果と言えなくはない。けれども、この問題は様々な要素を内包しており、当遺跡の資料だけでは解明するまでには至らない。

2点目は、前述した事項であるが、辺長が2m程の小型住居が点在し、かつ、重複する住居群では最も新しくなる点である。その代表例として、19・30・33号住居が挙げられ、その他にも3号住居が該当する。この種の造構に多くの見解が出されているものの、筆者は普通の竪穴住居として考えているのは、第52図に図示した配置状況や最も新しい住居となる点を考慮したものである。この件については、後章で検討する。

以上の他に、III~IV期に属す住居が大半以上も占めている点を挙げねばなるまい。出土遺物が少なく、判断資料には成り得ぬ品も存したが、住居の時期は図示した様になろう。時期が確定しない住居も切り合い関係より大略推定され、その結果として、当集落跡は八世紀代の住居が大半を占めると言える。それと、B・C群の有り様から判断して、1軒の住居の存続年数は

10数年と言えよう。この八世紀以前の、特に七世紀代の住居が極めて少ないので特徴であろう。

II. 壁穴住居の構造に関して

1. 小型住居跡について

古墳時代以後の住居跡41軒で、壁穴部の面積が明らかに5m²以下となる住居跡は、3・19・30・33号住居の4軒を数える。この種の住居については様々な見解（註2）が示されており、主な見解として、カマヤ説であり、壁穴部を土間的空間とする住居（平地式住居も含む）であり、車近な例として伊崎俊秋氏のHG住居説等（註3）が挙げられる。

まず、伊崎氏のHG住居説について述べると、塔ノ上遺跡37号住居（註4）の有り様は特異である。同遺跡は奈良時代の集落跡で、住居跡は総数74軒を検出している。その内の73軒は複雑に切り合い、重複して存在しているが、氏はこれを大きく9群に分け、時期も四つに大別している。これら73軒は略平行となる溝2条の西側に所在するが、問題の37号住居のみ溝の東側に所在する。伊崎氏はこの状況を重視して、成人女性がひと月に一度は籠る住居と想定している。筆者も塔ノ上遺跡37号住居については、伊崎氏の説を率直に受け入れられる。

ここで問題にするのは、当遺跡における小型住居の現象面である。3・19・30・33号住居に限定すると、3・19と30または33号住居が25~30mの間隔で点在すること。それと、19・33号住居が5~6軒の住居が重複する中で最も新しくなる点である。これらの状況は、塔ノ上遺跡37号住居の状況と相異する。その他にも、重複する住居群において、後出する住居が壁穴部の規模も小さくなる傾向が強く、一部に逆の場合があるものの、大半以上は前述の関係となる。これらの事象から、時代が下るに従い、辺長が4m前後の壁穴部が順次縮小し、最終的に辺長が2m程になったと言えよう。

以下は、若干の推測も混じて論を進める。壁穴住居の構造上の変化を考えると、古墳時代の住居は24・25号住居の様に主柱穴の4木が中央部に位置するのが一般的である。七世紀後半~八世紀代の時期には、主柱穴が壁穴部の四隅に配置されるタイプ（註5）も出現し、当遺跡の4号住居等が該当する。この種の主柱穴配置だと、住居の壁体は壁穴部外に所在する可能性が高くなろう。この事象は、構造上の変化とだけに止まる問題ではなく、壁穴部の概念的変化も促すと考えられる。強いて言うならば、壁穴部が土間としての機能を果たしたのではなかろうか。

この構造上・概念上の変化は、当遺跡の小型住居に辿りつくには重要な要素である。単に必要な土量（周囲もしくはカマドを構築するに足る量）を獲得するために壁穴部を掘削したと推測されるが、上記の変化なしでは詫られない。更に推し進めると、壁穴部が土間及び炊事場とするならば、その他の空間は壁穴部外に求められ、主柱穴も同様となろう。この種の住居に主柱穴を確認出来ない場合が多いのも、上記の推論ならば必然の帰結である。

推測も含めたものであり、砂上の櫻閣であることも事実だが、当遺跡における住居の現象面的変化から推し測ったものである。この件については、資料の再検討を行い、他の機会に論を進めて報告したいと考えている。本文では、この小型住居も一般的な住居に属すとだけに止める。

2. 古墳時代以後の住居について

36号住居の不明造構を検討する。この住居には突出型のカマドが付設されている。県内では1住居にカマドが2基同時併存した例は報告されていないし、不明造構内に焼土が検出されているが、カマドと認定する資料に乏しいのも明白である。

この造構の性格を推測する上で手懸りとなるのは、竪穴部外に伸展していることと、カマドの横に位置すること、そして、境内に焼土と灰等が存在していることである。この様な条件を満たした類例に、末報告書ではあるが宮原遺跡（註6）D地区で2例ほどを知る。

上記の手懸りから、カマドに関連する性格の造構と考えるのが安直である。ではどの様な性格になるかだが、火種を置く施設と考えれば、カマドの横に位置し、竪穴部外に伸展する掘り方で境内に焼土等が認められるなどの条項は至極納得出来る。また、類例が存在することは、住居に伴うと考えるべき造構であり、上記の仮説を補強するものとなる。

この他にもカマドと関連する性格には、カマド祭祀に伴った造構とも考えられる。火移しの祭事において、カマド製造段階の仮の火種置場であるのか、または、カマド使用時における荒神様の安息場所であるのか、等である。しかし、38号住居の時期である八世紀代のカマド祭祀は、古墳時代後期と形態を異にする可能性が高く、祭祀具を使用する例も極めて少なくなる。けれども、カマド祭祀は形態を変えつつ現代まで存続しており、途絶えるとは考え難い。

以上2つの性格を考えているが、火種置場との考に重きを置いているのは、造構が常に開口していた可能性が高い点であり、火鉢の灰の中に炭火を火種としていたのを想起したからである。一方の性格については、境内より祭祀遺物が出土した時点で再考すべきであろう。兎にも角にも、この種の造構の増加が待ち望まれる。

次に、床面下層の土壌を考える。当遺跡には数多くの土壌が存在するのも事実で、その時期は中世に求められる。このことは、貼床面の下層に所在する土壌は前述の土壌と明らかに異なる。また、竪穴部の隅部で、壁に沿った状態の壁際土壌が住居に伴うのは明白である。類例として宮原遺跡A I地区に求められ、時期に関しては略合致する。

中央に所在する土壌に関して同じであり、位置の相違で性格が異なるとは考え難い。けれども、常に貼床面の下層から検出されるのは早計であり、生活時に掘削する場合も考えねばなるまいし、様々な例が輩出することにより性格が窺い知れよう。

以上の2点に関して述べたが、性格を断定する資料を持ち合わせておらず、類例の増加と特徴ある造構が出土することを期待したい。

3. 弥生時代の住居について

弥生時代の住居は42・43号住居の2軒で、時期は42号が後期中頃～後半に、43号が終末頃であろう。両者を比較すると、竪穴部の平面形態も異なり、42号住居が正方形で、43号住居が長方形となる。また、主柱穴は2本で同じとなるが、42号住居に4本の補助柱穴が考えられる。この2点を考慮すると、43号が古い様相を有すと考えられるが、出土遺物の時期は逆を示している。

前述した補助柱穴について若干補足すると、完掘した段階では2軒が重複しているとも考えた。主柱穴2本でもって、竪穴部が長方形となる古い住居と、竪穴部が報告の通りで、主柱穴が4本となる新しい住居である。しかも、出入口施設が各々に付随する状況も考られた。けれども、土層観察のベルトにも何ら変化が見られなかつたし、図示した遺物の接合は上記を否定する関係を示しており、この点を留意すると単独の住居と判断せざるを得ない。若干の疑念を抱きつつも、4本の柱穴を補助柱穴として報告した次第である。

出入口施設に関しては、42号住居を完掘した面を重視するならば、粘土等を主体とした段状造構の様な構造よりも、小柱穴が有機的に保わった梯子状の構造になるのかもしれない。43号住居の施設も遺存状況が悪く、上記を決定するには至らなかつた。しかし、前述した様な構造であった可能性が高いのではなかろうか、と止めておきたい。

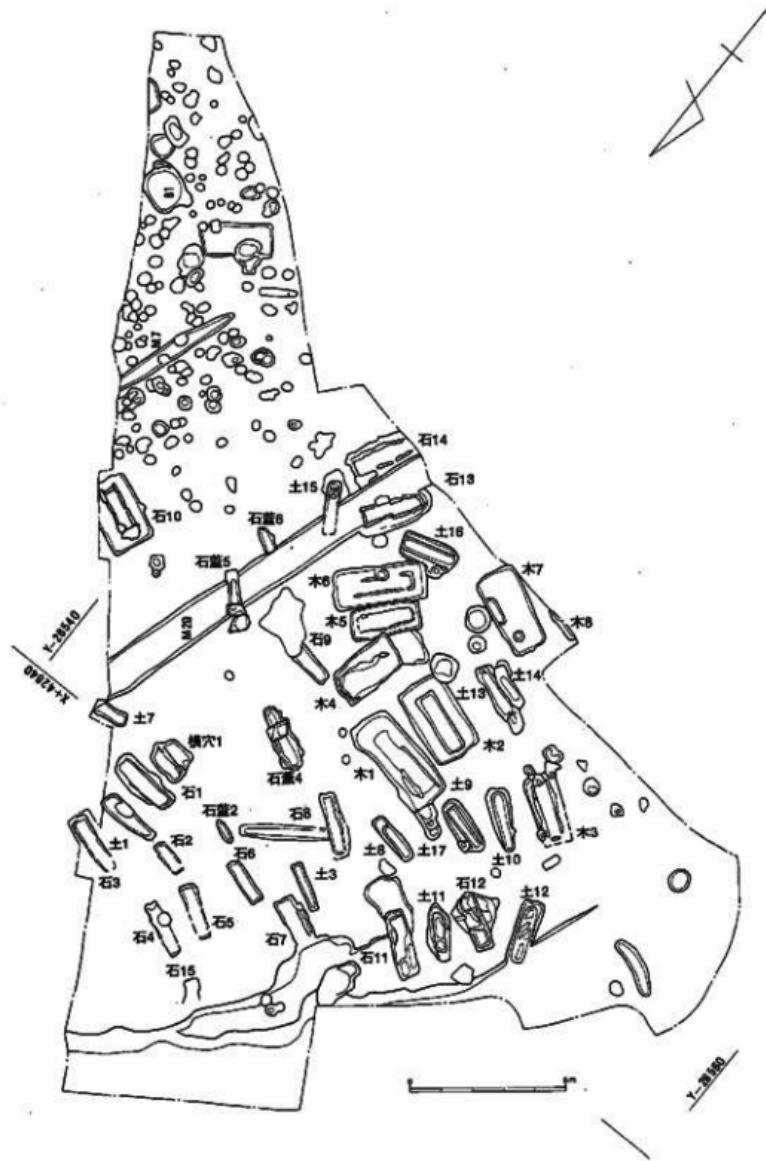
最後となるが、壁体の痕跡について触れると、壁小溝に認められた痕跡は大竹遺跡(註8)で検出された壁體と略同じであり、化粧壁が存在したのかもしれない。

おわりに 問題点のみ提起して、何ら解答とはならない様な文章となつたが、これらは筆者の認識不足に因るものであり、反省しつつ今後に備えて研鑽して行く次第であります。

- 註1. 福岡県教育委員会 「牛頭窓跡調査」 1989
- 註2. 石野博信著 「日本原始・古代住居の研究」 吉川弘文館
- 註3. 福岡県教育委員会 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—9—」 1987
- 註4. 註3と同じ。塔ノ上遺跡は当遺跡の2、5km西に位置する。
- 註5. 福岡県教育委員会 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—8—」 1986
- 註6. 福岡県教育委員会が調査を実施したが、整理中である。
- 註7. 福岡県教育委員会 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—17—」 1990
- 註8. 三輪町教育委員会 「大竹遺跡」 1985

参考文献

- 九州歴史資料館 「大宰府史跡 昭和58年度発掘調査報告」 1984
- 九州歴史資料館 「大宰府史跡 昭和59年度発掘調査報告」 1985



第53図 北側調査区墓地配置図 (1/180)

V 弥生～古墳時代の墓地遺構と遺物

弥生時代後期ないし古墳時代前期頃の遺構では、墓地遺構の石棺墓・木棺墓・石蓋土塚墓・土塚墓などが発見された。これら墓地遺構は、調査区域のうち北西隅部にまとまって占地する。

1. 石棺墓

石棺墓は、15基発見した。

1号石棺墓（図版 20-1・2, 第 54 図）

15F・15G 区域の南端にあり、主軸方向は N86°W をとる。緑色片岩の扁平石を用いた石棺墓であるが、東側小口石とこれに接する東側両側壁の2石ずつ残るもの、これ以外の蓋石・壁石は抜き取られて残らない。しかしながら、壁の部分には板材の抜き痕が確認でき、北側壁に4枚・南側壁に3枚の扁平石が並べられていて、隙間に小さな石を補っていたことが分かる。また、小口石は両側壁に挟まれるものほとんど隅が接するような構造で、掘り方ぎりぎりに立て並べられていることも分かる。棺内法は、長さ182cm、西側の幅44cm、東側の幅32cm、検出面から床面までの深さ20cmの規模である。棺内は全体に搅乱された状態であったが、東半分は床面よりも約30cm深くまで搅乱されていた。

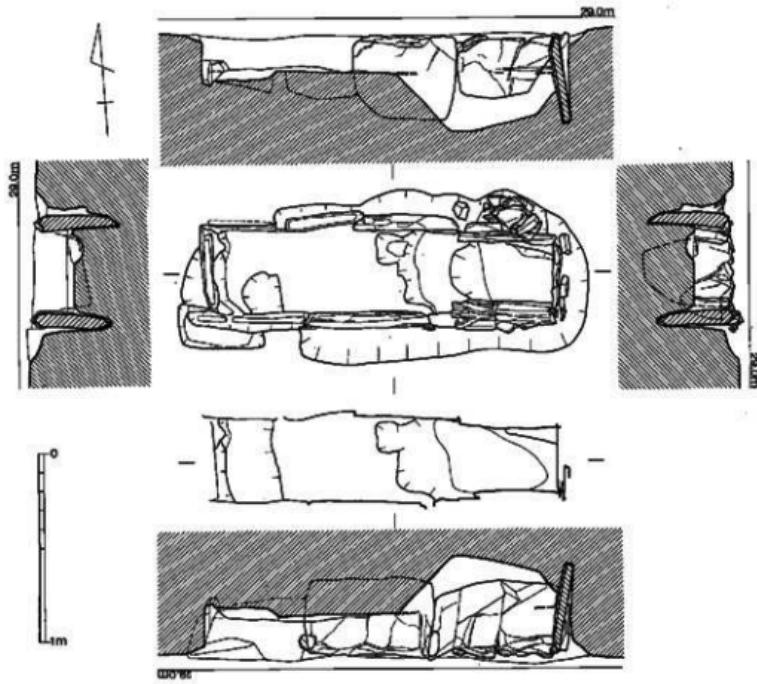
東半分に残されていた石材は高さ30～50cmで、地山にめり込んだかのような状態であった。これに対して西側の抜き痕をみると、石材下端の検出面からの深さは25～35cm前後であり、西側の棺内幅の広さなどから西に被葬者の頭を埋置したと推定されるが、後世に石材を抜けない部分を重機で踏み込まれた可能性もある。棺内堆積土から土錐が1点出土した。

出土遺物（図版 35-2, 第 60 図）

土錐(1)両端を若干欠損するが、現存長4.0cm、直径1.8cm、孔径0.5cmの管状土錐で、重量は10.7gを測る。胎土に砂粒・褐色粒・雲母を含み、焼成は良好である。

2号石棺墓（図版 20-3, 第 55 図）

1号石棺墓の北西側に近接する。主軸方向は N75°10'W をとる。削平が激しく、石材の抜き痕のみ確認される状態である。北側壁4枚・南側壁3枚と、四隅を合わせるようにして挟まれる両小口に各1枚の、扁平石が並べられていたものと推定される。検出面は既に床面を削平された面ながらも、抜き痕は5～10cmの深さを有していて、底は狭い。棺内法は、長さ約100cm、西

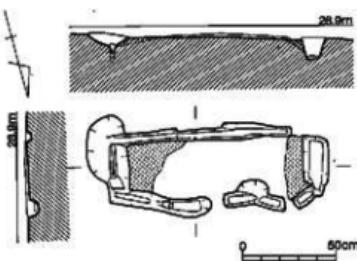


第 54 図 1号石棺墓実測図 (1/30)

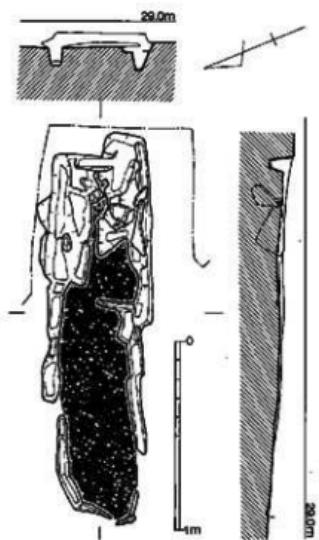
個の幅30cm強、東側の幅25cm前後の広さである。顔料の痕跡はみられなかった。

3号石棺墓（図版 21、第 56・57図）

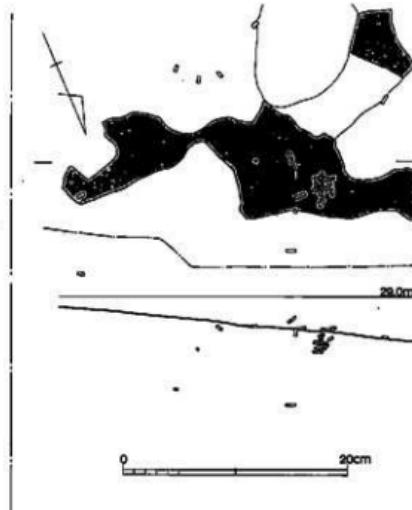
1号石棺墓の北側に、1号土塙墓を挟んで位置する。主軸方向はN $67^{\circ} 20' W$ をとる。前平が激しく、ほとんど床面より上部は残らない。石材の抜き痕と、側壁に使用された緑色片岩の石材のごく一部が残るのみである。北側壁4ないし5枚・南側壁5ないし6枚と、西隅を合わ



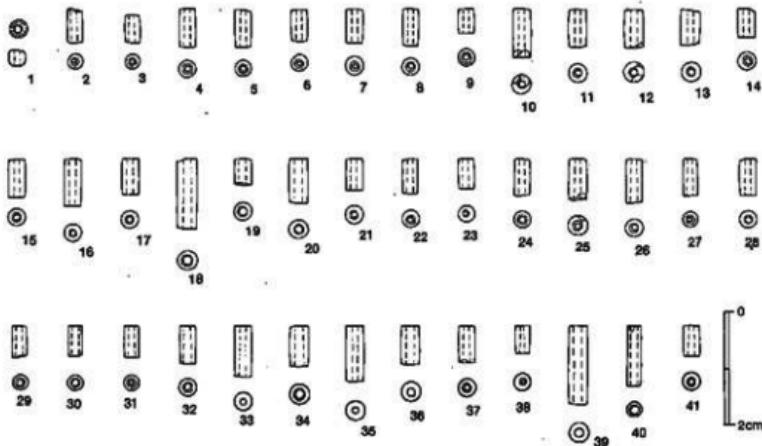
第 55 図 2号石棺墓実測図 (1/30)



第56圖 3号石棺墓実測図 (1/30)



第57圖 3号石棺墓内玉類出土状況実測図 (1/15)



第58圖 3号石棺墓出土玉類実測図 (実大)

表1 3号石棺墓出土玉類一覧表

NO.	長さ	外 径	孔 径	色	形	備 考	NO.	長さ	外 径	孔 径	色	形	備 考
1	2.6	2.9	1.2	青いスカイブルー	ガラス小玉		2 2	6.0	2.8	1.0~1.5	グリーン	グリーンタフ 翡翠	
2	3.9	2.6~2.7	1.3~1.5	グリーン	グリーンタフ 翡翠		2 3	5.3	3.0	1.0	*	*	
3	4.7	3.8	1.5~1.6	*	*		2 4	6.4	3.0	0.9~1.6	*	*	
4	6.5	3.7	1.1~1.6	*	*		2 5	7.0	3.1	1.0~1.6	青いスカイブルー	グリーン	一孔欠損
5	6.3	2.8	1.0~1.3	*	*		2 6	7.8	3.0	1.1~1.4	グリーン	*	
6	5.5	2.8	1.0~1.3	*	*		2 7	6.3	2.7	1.0~1.6	*	*	
7	3.9	3.0~3.1	1.0~1.5	*	*		2 8	6.6	3.0	0.9~1.1	*	*	
8	6.4	2.8	1.1~1.35	*	*	-45度斜	2 9	5.5	2.5	1.0~1.6	*	*	
9	4.6	2.9	1.1~1.6	*	*		3 0	5.3	2.6	1.3~1.6	青いスカイブルー	グリーン	一孔欠損
10	6.6	3.3	1.1~1.3	青いスカイブルー	グリーン	-45度斜	3 1	5.6	2.7	1.2~1.7	グリーン	*	
11	6.9	3.3	1.1~1.4	*	*	-45度斜	3 2	6.8	2.8	1.0~1.9	*	*	
12	6.7	3.6	1.4	*	*	-45度斜	3 3	9.2	3.0	1.0~1.6	青いスカイブルー	グリーン	
13	4.1	3.6	1.4	青いスカイブルー	グリーン		3 4	7.3	3.6	1.7~2.0	青いスカイブルー	グリーン	
14	5.0	3.3	1.4	青いスカイブルー	グリーン	-45度斜	3 5	9.9	3.2	1.0	青いスカイブルー	グリーン	-45度斜
15	6.9	3.1	1.0~1.4	グリーン	*		3 6	6.8	3.3	1.3~1.4	*	*	-45度斜
16	6.7	3.1	1.0~1.4	青いスカイブルー	グリーン		3 7	6.2	3.2	1.0~1.6	青いスカイブルー	グリーン	-45度斜
17	6.5	3.2	1.0~1.5	青いスカイブルー	グリーン	-45度斜	3 8	5.0	2.8	0.5~1.0	青いスカイブルー	グリーン	
18	12.8	3.6	1.0~2.1	*	*	-45度斜	3 9	13.9	3.3	1.3~1.6	グリーン	*	
19	4.6	3.3	1.2~1.5	*	*		4 0	10.7	2.7	1.3~1.5	青いスカイブルー	グリーン	-45度斜
20	8.0	3.3	1.5~1.6	グリーン	*		4 1	5.4	3.0	1.0~1.3	グリーン	*	
21	5.5	3.3	0.9~1.1	青いスカイブルー	グリーン								

すようにして挟まれる両小口に各1枚の、扁平石が並べられていたものと推定される。抜き痕は5~10cmの深さを有していて、底は狭い。棺内法は、長さ約190cm、西側の幅35cm、東側の幅40cm弱の広さである。東側の床面は木の根などの搅乱もあり、西側はやや床面が削られているが、全体に赤色顔料の痕跡が確認された。棺内東側床面部分から、グリーンタフ製の管玉がまとまって出土した。

出土遺物（図版35-2、第58図）

ガラス小玉（1） うすいスカイブルーの色調を呈する、外径2.9mm、長さ2.6mm、孔径1.2mmの大きさのガラス玉である。

管玉（2~41） グリーンタフ製の淡い灰緑色を呈する管玉である。長さ4.6mm~13.6mm、外径2.2~3.7mmの範囲で、長さにばらつきがあるものの5.0~6.0mm程の例が多い。孔径1.1~1.6mmの孔が穿たれている。

4号石棺墓（図版22-1、第59図）

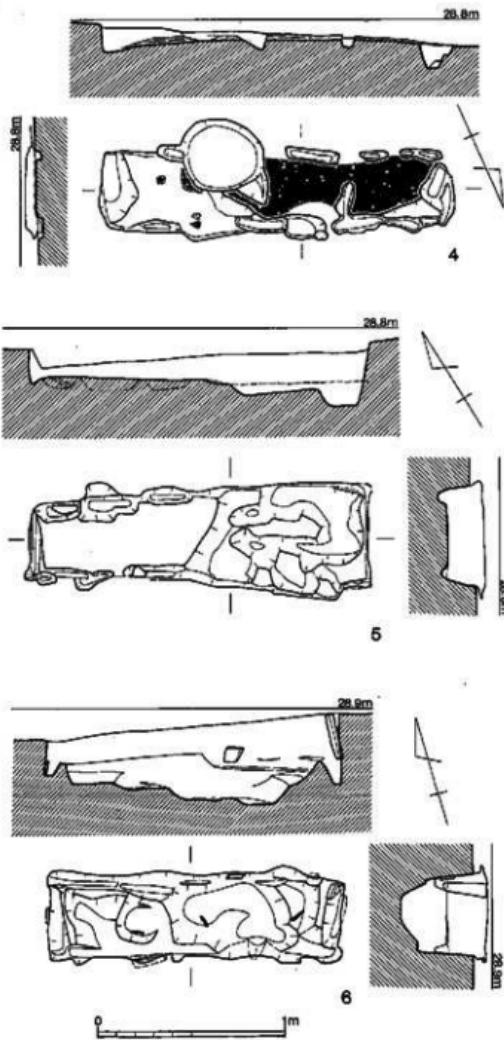
3号石棺墓の西側に位置する。主軸方向はN66°30'Wをとる。剖平が激しく、ほとんど床面より上部は残らない。石材の抜き痕と、側壁に使用された緑色片岩の石材のごく一部が残るのみである。北側壁4ないし5枚・南側壁4ないし5枚と、四隅を合わせるようにして挟まれる両小口

に各1枚の、扁平石が並べられていたものと推定される。抜き痕は5~10cmの深さを有していて、底は狭いが、小口部はやや広めである。検出面での掘り方全体では長さ190cm、幅45cm程の広さだが、棺内は長さ約170cm、西側の幅30cm、東側の幅35cm弱の広さである。南側壁中央部に葡萄棚支柱の擾乱があり、西側にかけてやや床面が削られているが、全体に赤色顔料の痕跡が確認された。

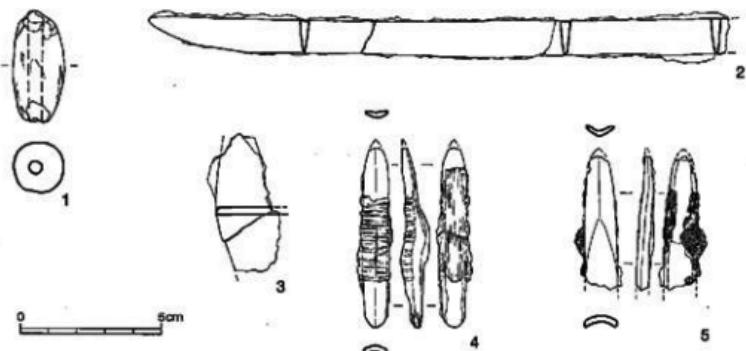
5号石棺墓

(図版22-2、第59図)

4号石棺墓の南側に位置する。主軸方向はN58°10'Wをとる。削平が激しく、ほとんど床面より上部は残らない。石材の抜き痕と、側壁に使用された緑色片岩の石材のごく一部が残るのみである。側壁各5枚程と、四隅を合わせようとして挟まれる両小口に各1枚の、扁平石が並べられていたものと推定される。抜き痕は5~10cmの深さを有していて、底は狭い。検出面での掘り方全体では長さ183cm、幅62cmの広さだが、棺内は長さ約170cm、西側の幅30cm、東側



第59図 4~6号石棺墓実測図 (1/30)



第60図 石棺墓出土土製品・鉄製品実測図 (1/2)

の幅40cmの広さである。赤色顔料の痕跡は確認できなかった。

6号石棺墓 (図版22-3, 第59図)

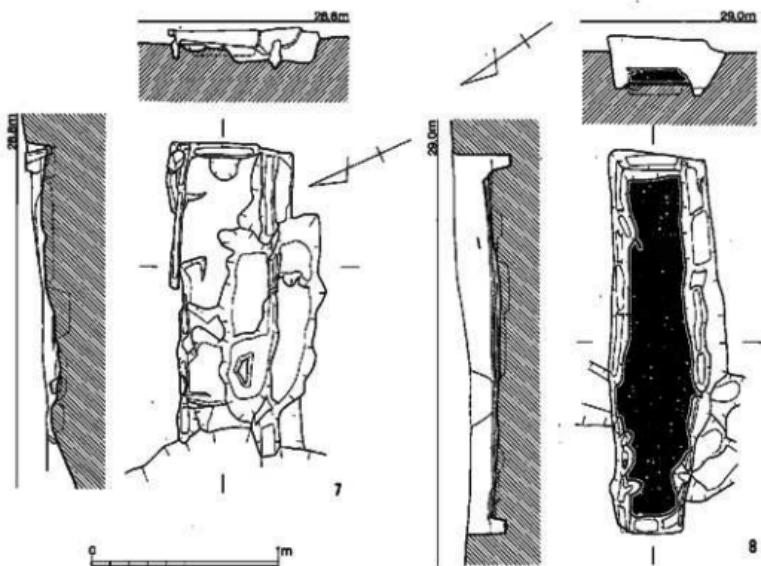
15G区南部にあり、5号石棺墓の南側に位置する。主軸方向はN $74^{\circ}30'W$ をとる。削平が激しく、ほとんど床面より上部は残らない。石材の抜き痕と、側壁に使用された緑色片岩の石材のごく一部が残るのみである。側壁各5枚程と、四隅を合わすようにして挟まれる両小口に各1枚の、扁平石が並べられていたものと推定される。抜き痕は5~10cmの深さを有していて、底は狭い。検出面での掘り方全体では長さ155cm、幅45cmの広さ。棺内は長さ約140cm、西側の幅30cm、東側の幅30cmの広さで、深さは15~20cmある。棺内床面は東側が擾乱を受けているが、鐵器片が3点出土した。なお、赤色顔料の痕跡は確認できなかった。

出土遺物 (図版35-2, 第60図)

鉄刀子 (2) 離れて出土した3点の破片が接合したが、現存長20.7cm、幅1.2cm、厚さ0.3cmの大きさで、基部側を欠く。基部側破損面は、刃部か茎部かはっきりしない。

7号石棺墓 (図版23-1, 第61図)

15G区南端部にあり、6号石棺墓の西側に位置する。主軸方向はN $65^{\circ}30'W$ をとる。削平が激しく、ほとんど床面より上部は残らず、西端部は崖の削平で失う。石材の抜き痕と、側壁に使用された緑泥片岩の石材のごく一部が残るのみである。側壁各5枚程と、四隅を合わすようにして挟まれる小口に1枚の、扁平石が立て並べられていたようである。抜き痕は5~15cmの深さを有していて、底は狭いが、南側では抜き取り時の擾乱を受けてか広くなっている。検出



第 61 図 7・8 号石棺墓実測図 (1/30)

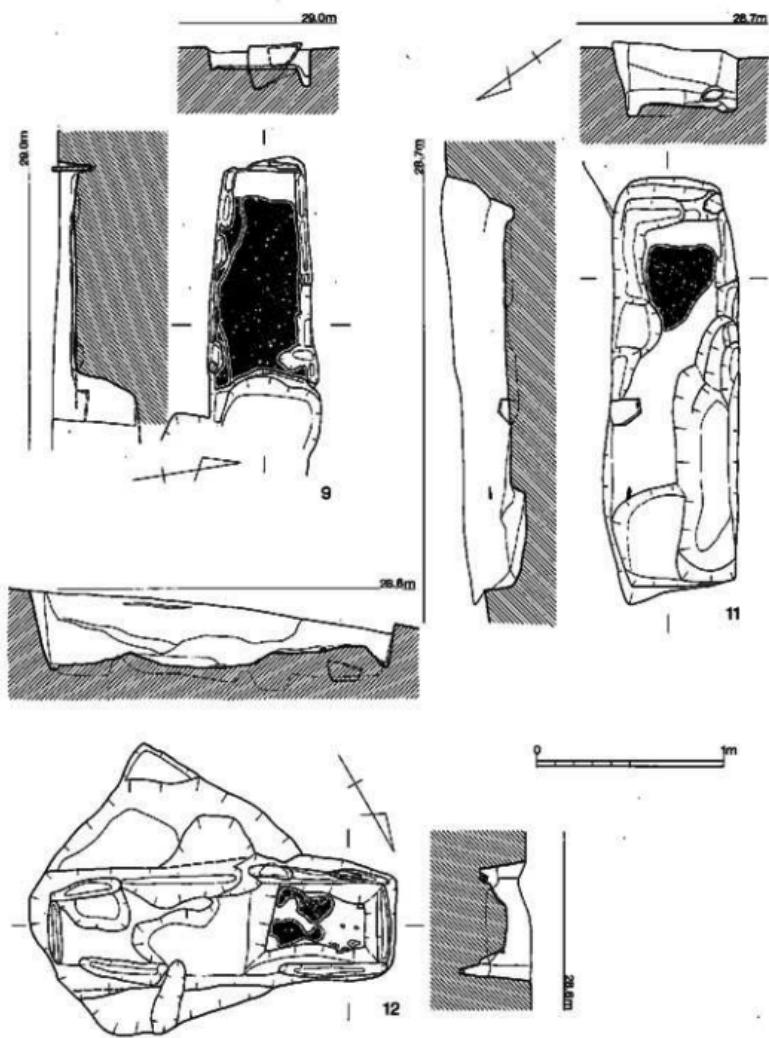
面での掘り方全体では長さ165cm以上、幅80cmの広さ。棺内は長さ $160\text{cm} + \alpha$ 、幅40cmの広さで、最大10cm程の深さがある。棺内床面は搅乱を受けているが、赤色顔料の痕跡がわずかに確認された。

8号石棺墓 (図版 23-2, 第 61 図)

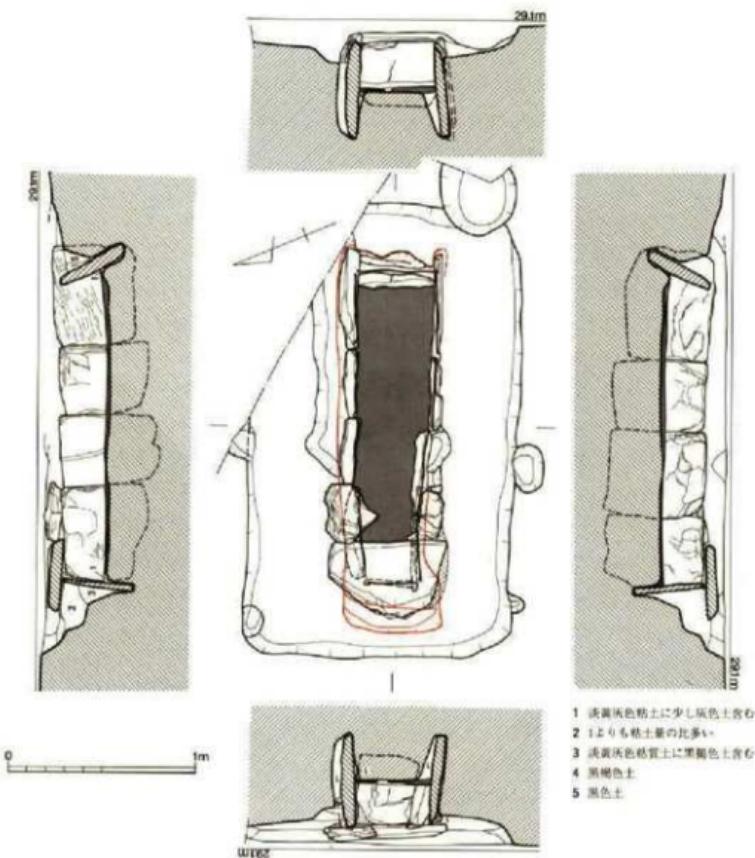
14G区北寄りにあり、3号土壙墓を挟んで、6・7号石棺墓の南側に位置する。主軸方向はN 53°30' Wをとる。削平がすみ、掘り方内部の石材は抜き取られて、抜き痕と、取り残された縁泥片岩の石材が一部残る。側壁各4~5枚程と、四隅を合わせるようにして挟まれる両小口に各1枚の、扁平石が立て並べられていたようである。抜き痕は5~15cmの深さを有していて、底は狭い。検出面での掘り方全体では長さ204cm、幅60cmの広さ。棺内は長さ185cm、東側の幅30cm強、西側の幅25cm、中央部での幅35cm程の広さで、最大で20cm程の深さがある。棺内床面には赤色顔料の痕跡が確認され、北東部で鉄器片が出土した。

出土遺物 (図版 35-2, 第 60 図)

鉄 斧 (4) 先端部をわずかに欠損するが、現存長6.4cm、幅1.1cm。木質の锈着する部分



第62図 9・11・12号石棺墓実測図 (1/30)



第63図 10号石棺墓実測図(1/30)

が大半を占め、厚みでも0.8cmのうち、体部の厚みは0.3cm。

不明鉄器片(3) 厚さ0.3cm弱の扁平な板状を呈している。

9号石棺墓(図版23-3, 第62図)

14G区東端部にあって、4号土塚墓を挟んで、8号石棺墓の南東側に位置する。主軸方向はN 81°10' Wをとる。東端部は擾乱坑によって失う。全体に削平がすみ、掘り方内部の石材はほ

とんど抜き取られ、小口に緑色片岩の1枚が残る。側壁は隅を合わすようにして小口石を挟み、抜き痕からみて、それぞれ4~5枚の扁平石が立て並べられていたようである。抜き痕は5~10cmの深さを有していて、底は狭い。検出面での掘り方全体では長さ140cm以上、幅60cmの広さ。棺内は長さ130cm+α、東側の幅40cm弱、西側の幅30cm強の広さで、深さは10~15cmである。棺内床面には赤色顔料の痕跡が確認された。

10号石棺墓（図版 24-1・2、第 63 図）

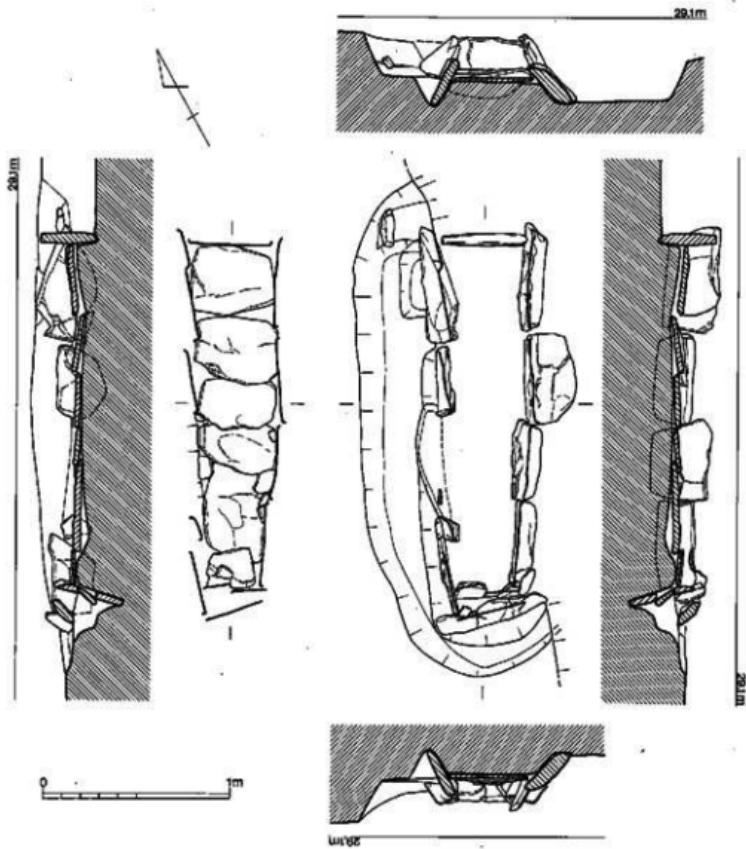
14F区中央部にあって、調査区内ではもっとも東端に位置する該期墓地である。主軸方向はN67°30'Wをとる。比較的遺存状態がよいが、南東隅部に柱穴状ピットが重複し、北東隅部は調査区域外に相当する。検出面での掘り方は長さ242cm、幅141cm、深さ10cm前後。石棺は、墓壙床面を掘り込んだ下部土壙に、緑色片岩の扁平石を用いて構築される。長さ190cm、東側の幅60cm弱、西側の幅40cm強の下部土壙内の周囲をさらに石材の厚み程に掘り込み、側壁は四隅を合わせるように、側壁石各4枚が両小口石を挟む。使用される石は40cm×50cm前後の大きさで、厚さ5~7cm程の大きさである。棺内は、現況では東側小口石などが内傾しているが、もともと長さ165cm、東側の幅42cm、西側の幅30cm弱、深さ23~25cmの空間である。蓋石は西端の1枚が完全に、その次の石が中程を欠いて残る。おそらく5~6枚の蓋石で覆われていたと推定できる。蓋石と蓋石との隙間には粘土が充填されていて、蓋石全体に粘土の目張りが施されていた可能性が高い。なお、棺内床面には赤色顔料の痕跡が確認されたが、遺物の出土はみられなかった。

11号石棺墓（図版 24-3、第 62 図）

14G区と15H区の境目にあり、主軸方向はN55°Wをとる。前平を受け、掘り方内部の石材はほとんど抜き取られ、隙間を充填していたと思われる石材がわずかにが残る。検出面での掘り方は長さ220cm、幅68cm、深さ30cm前後。土壙内の周囲をさらに石材の厚み程に掘り込み、側壁各4~5枚と、四隅を合わせるようにして挟まれる両小口に各1枚の、扁平石が立て並べられていたようである。棺内は、西側の床面が乱れていて詳らかではないが、長さ180cm前後、幅40cm程であろうか。深さ25~30cmである。棺内東側の床面で40cm×40cmの広さに赤色顔料の痕跡が確認された。なお、西寄りの北側壁際に相当し、床面から5cm程浮いた位置から鉄器片が出土した。

出土遺物（図版 35-2、第 60 図）

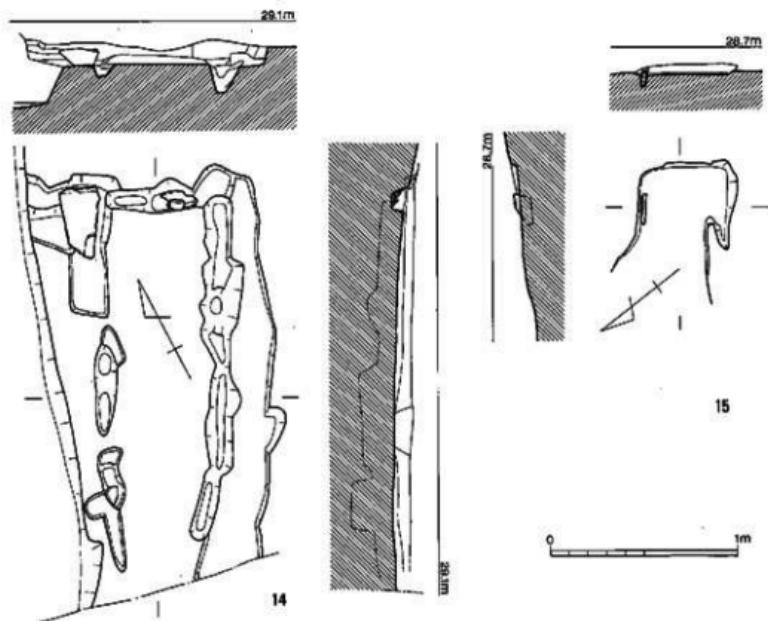
鉄 瓶 (5) 先端部破片で、現存長4.7cm、幅1.2cm、厚さ0.4cmの大きさ。先端側2.2cmの部分は縫をもち、断面が緩やかなV字形をなす。基部側には布が誘着しており、巻き付けられていた状況が窺える。



第 84 図 13 号石棺墓実測図 (1 / 30)

12号石棺墓（図版 25-1, 第 62 図）

11号石棺墓の南西側に、11号土槨墓を挟んで、位置する。主軸方向は N $60^{\circ}30'W$ をとる。削平を受け、掘り方内部の石材はほとんど抜き取られ、隙間を充填していたと思われる石材がわずかに残る。検出面での掘り方は長さ 195cm、幅 68cm、東側での深さ 40cm。石材を抜き取っ



第65図 14・15号石棺墓実測図 (1/30)

た際の擾乱坑が東側半分を占めるが、土塚内の周囲をさらに石材の厚み程に掘り込み、側壁各3ないし4枚と、四隅を合わせるようにして挟まれる両小口に各1枚の、扁平石が立て並べられていたようである。棺内は、長さ160cm強、西側の幅40cm前後、東側の幅30cm強である。深さは10~30cmである。棺内床面は東側が擾乱を受けてはっきりしないが、西側床面に赤色顔料の痕跡が確認された。

13号石棺墓(図版25-2・3、第64図)

13G区北東隅にあり、20号溝によって東側を削られている。主軸方向はN29°Eをとる。削平を受けているものの、比較的石材の遺存状態は良い。検出面での掘り方は長さ260cm、幅100cm+α、深さ約20cm。石棺は、墓塚床面を掘り込んだ下部土壌に、緑色片岩の扁平石を用いて構築される。長さ210cm+α、幅70cm程の下部土壌内の周囲を石材の厚み程に掘り込み、側壁は、側壁石が両小口石を挟む構造で、床に敷石がある。両側壁には、40~50cm×30cm程の広さ、厚さ6cm程の大きさの石が、それぞれ4枚使用され、隙間は小さな石で補われている。

南側小口では、東側壁との隅がつき合せたように接して、小口を外側から覆う扁平石がみられる。棺内には6枚の扁平石を並べて敷いた敷石があり、棺内は長さ182cm、北側の幅47cm、南側の幅30cm強、深さ15cm強の空間であるが、赤色顔料は確認できなかった。

14号石棺墓（図版26-1、第65図）

13F区北西隅にあり13号石棺墓の東側に近接するが、南端部は調査区外に続き、西側は20号溝によって削られるなどの削平を受けて、掘り方内部の石材はほとんど残らない。検出面での掘り方は長さ230cm+ α 、幅125cm+ α 、深さ約10cm。主軸方向はN27°30' Eをとる。石棺は、墓壙床面に、緑色片岩扁平石の据える部分のみ掘り下げて、側壁石が小口石を挟む構造に構築される。棺内は、長さ205cm+ α 、北側の幅60cm前後、南側の幅40cm前後の広さであるが、赤色顔料は確認できなかった。

15号石棺墓（第65図）

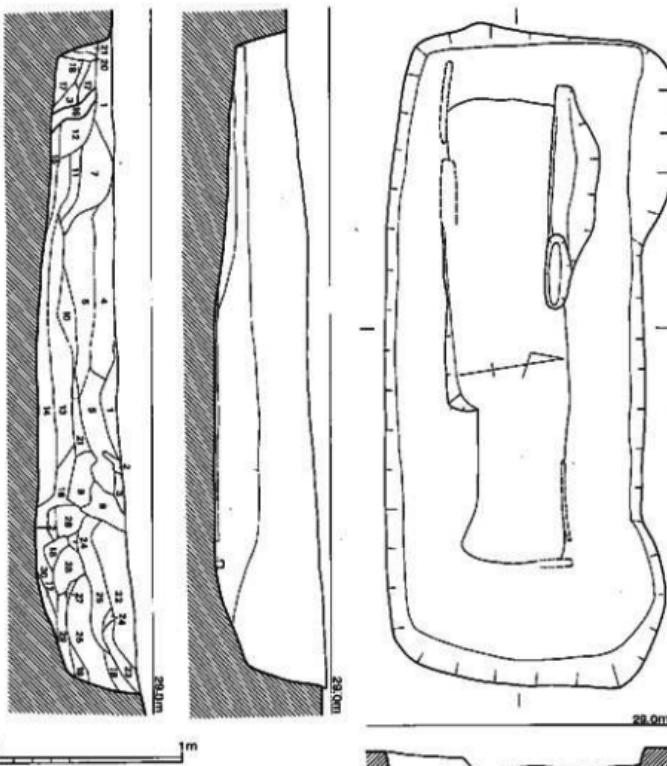
15G区中央部にあり4号石棺墓の西側に近接するが、西側の崖に近いためか、削平が激しくてわずかに掘り方の一部と縁泥片岩の石材の一部が残る程度である。検出面での掘り方は長さ75cm+ α 、幅52cm、深さ5cm以下。主軸方向はN52°10' Wをとる。小口石と側壁石がつきあわせる構造であろうが、棺内の幅は35cm前後であろうか。赤色顔料は確認できなかった。

2. 木棺墓

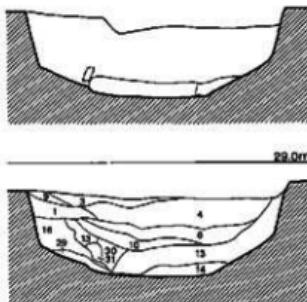
木棺墓は、1~8号木棺墓の、8基発見された。いずれも、石棺墓と酷似した形態ながら、後述するように、小破片すら石材が遺存しないこと、堆積土の状況からみて、棺材が腐食した可能性も高いことから、木棺墓？として区別することにした。

1号木棺墓（図版26-2、第66図）

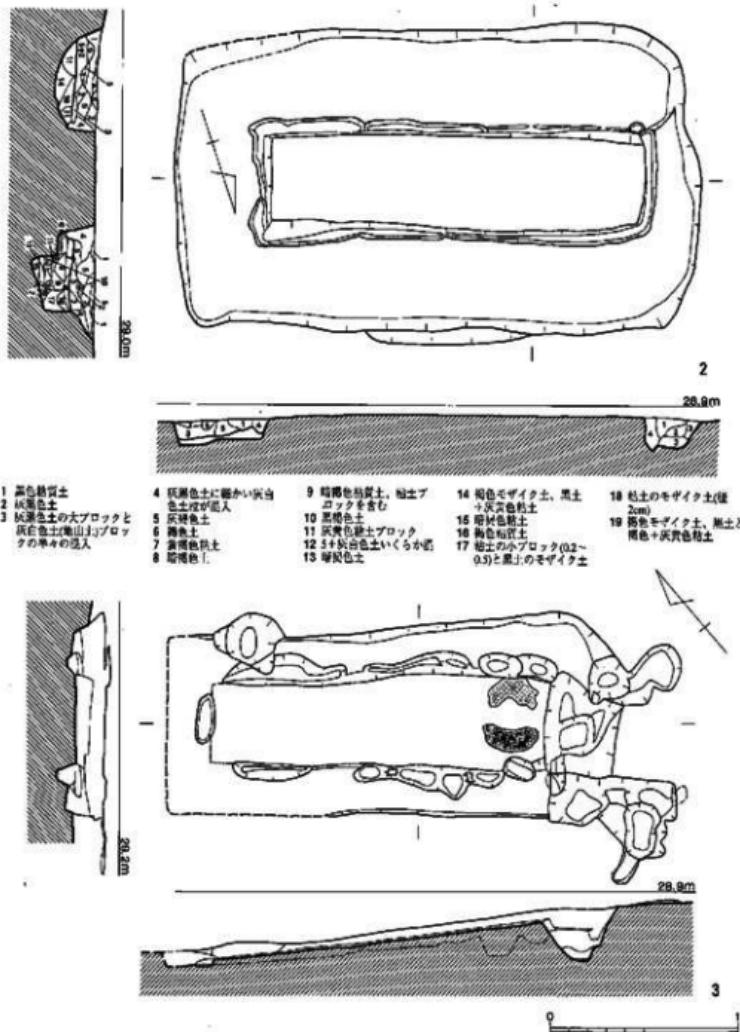
14G区中央にあり、8号石棺墓の南側に位置し、先行する17号土塚墓と一部重複する。検出面での墓壙プランは、長さ350cm、幅150cmの隅丸長方形で、深さは最大55cm。壙内の堆積土は暗灰褐色・黒褐色土などで、床面付近では黒色土部分が帯状に続いていたが、この黒色土部分は黄灰色粘土の床面にいたっても、明瞭に確認でき、掘り込みを伴うことから、石棺墓の石材が抜き取られたものと思われた。しかし、小破片すら石材が遺存しないこと、堆積土の状況からみて、棺材が腐食した可能性も高いことから、木棺墓？として区別することにした。主軸方向はN81°Wをとる。側板が小口板を挟む構造に構築される。棺内は、長さ245cm、西側の幅55cm、東側の幅45cm前後であるが、赤色顔料は確認できなかった。墓壙内から弥生後期



- 1 岩めの泥炭粘土上
2 黄褐色粘土
3 灰灰褐色土
4 灰褐色粘土、灰白色帶灰
5 灰白色帶灰土ブロック
を含む心灰粘土土
6 灰白色帶灰土ブロック
を少し含む灰褐色土灰
色地盤を含む合む
7 灰灰褐色土を含む少
の泥灰褐色土
8 手い灰褐色土
9 灰白色帶灰土ブロック
を含む土
10 灰白色帶灰土、黄褐色
土
11 灰褐色土
12 可燃性土
13 灰白色帶灰土
を若干含む無層構
造
14 流れの跡の泥灰
色地盤を含む合む
15 岩めの暗灰褐色土
16 灰褐色土を含む
り灰褐色土
17 泥灰褐色土
18 黑褐色土
19 手い灰褐色土
20 黄灰褐色土を含む
く心灰粘土
21 10+灰褐色土は少なり
22 泥灰褐色土、灰白色帶灰土
23 黑褐色土
24 黄褐色帶灰土
25 灰白色
26 灰白色帶灰土ブロック
を若干含む無層構
造
27 泥灰褐色土
28 黄褐色土ブロック
を含む
29 黑褐色土
30 黄褐色土
31 黑褐色土



第 66 図 1 号木樁基底測図 (1 / 30)



第67図 2・3号木棺墓実測図 (1/30)

ないし古式土器らしい土器片が数点出土した。

出土遺物（第 69 図）

楕（1・2） 1は復原口徑13.0cmの大きさで、器壁は薄めである。内外面共にハケ目調整されるが、外面の下半部にはヘラケズリが加わっている。胎土に雲母・角閃石・細砂粒を含み、暗黄褐色に焼成されている。2は小破片のため器形は不確実で、高杯の脚部の可能性もある。僅かに膨らみをもしながら開き、復原口徑14.7cm程の大きさ。外面はハケ目調整のあとヘラ磨きが加わり、内面はヨコナデ調整されている。胎土に雲母・細砂粒を含み褐色ないし暗褐色に焼成されている。

2号木棺墓（図版 27-1, 第 67 図）

14G区中央にあり、1号木棺墓の南側に近接する。土塚に南東隅を一部切られるが、検出面での墓壙プランは、長さ280cm、幅167cmの隅丸長方形で、深さは最大15cm。壙内の堆積土は暗灰黒色・灰褐色・黒褐色土などで、中央部に棺台状の高まりがある。この高まりに沿った床面には灰白色土粒が混入する灰黑色土部分が帯状に続き、この部分は黄灰色粘土の床面を少し振り込んでみられる。これも小破片すら石材が遺存しない。主軸方向はN71°30' Wをとる。側板と小口板がつきあわせた構造に構築される。棺内は、長さ200cm、幅50cm前後であるが、赤色顔料は確認できなかった。

出土遺物

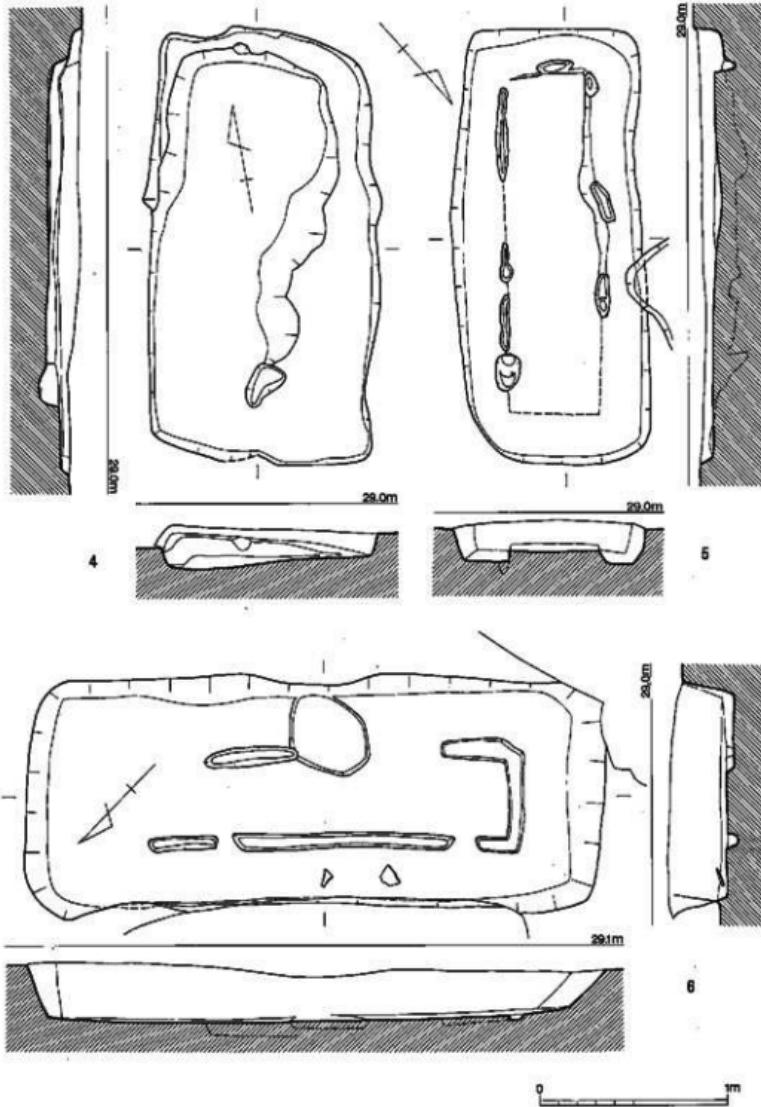
墓壙内から、外面がナデ消し調整で内面にハケ目調整のみられる、弥生後期後半と推定される壺の胴部破片が1点出土したが、小破片で図示しえない。

3号木棺墓（図版 27-2, 第 67 図）

2号木棺墓の西側にある。削平されて南東側の輪郭は不明だが、検出面での墓壙プランは、長さ240cm+α、幅120cmの隅丸長方形で、深さは最大でも10cm弱。壙内の堆積土は暗灰黒色・黒褐色土などで、中央部に棺台状の高まりがある。この高まりに沿った床面には黒色土部分が帯状に続き、この部分は黄灰色粘土の床面を少し振り込んでみられる。これも小破片すら石材が遺存しない。主軸方向はN50° Wをとる。側板と小口板がつきあわせた構造に構築される。棺内は、長さ180cm、東側の幅50cm前後、四側の幅45cm前後で、東側には赤色顔料が確認された。

4号木棺墓（図版 27-3, 第 68 図）

1号・2号木棺墓の東側にある。5号木棺墓と一部重複するが、5号より後出する。検出面での墓壙プランは、長さ235cm、幅123cmの隅丸長方形で、深さは15cm程度。壙内の堆積土は暗灰



第68図 4~6号木棺墓実測図 (1/30)

黒色・黒褐色土などで、中央部はやや深い。小破片すら石材が遺存しなくて、他の例と同様な墓壙規模を有しているので、木棺墓に含めた。主軸方向はN10°50' Eをとる。墓壙内では赤色顔料は確認されなかった。

出土遺物（第69図）

墓壙内から数点の弥生土器が出土した。高杯片のみ図示する。

高杯（3～5）3・4は別個体だが、3は復原口径37.6cmの大きさになる口縁部、4は杯下半部である。内面の杯上半部はハケ目調整のあと縦方向のヘラ磨きで下半部は縦方向のヘラ磨きがみられる。外面の杯上半部はハケ目調整のあとヨコナデされ、下半部は雑なヘラ磨き調整である。また5は脚裾部破片で、内面がハケ目調整、外面が雑なヘラ磨き調整である。いずれも胎土に雲母・細砂粒を含み、3には角閃石もみられる。

5号木棺墓（図版28-1, 第68図）

4号木棺墓の南東側にあり、4号木棺墓墓壙に一部切られる。検出面での墓壙プランは、長さ232cm、幅102cmの隅丸長方形で、深さは5～10cm。壙内の堆積土は暗灰黒色・黒褐色土などで、中央部に棺台状の高まりがある。この高まりに沿って、黄灰色粘土の床面に掘り込まれる黒色土部分が帯状に続き、壙内には石材が小破片すらみられない。主軸方向はN41°10' Eをとる。棺内は長さ180cm前後、南側の幅45cm。墓壙内では赤色顔料は確認されなかった。

出土遺物（第69図）

数点の土器片が出土した。高杯片のみ図示する。

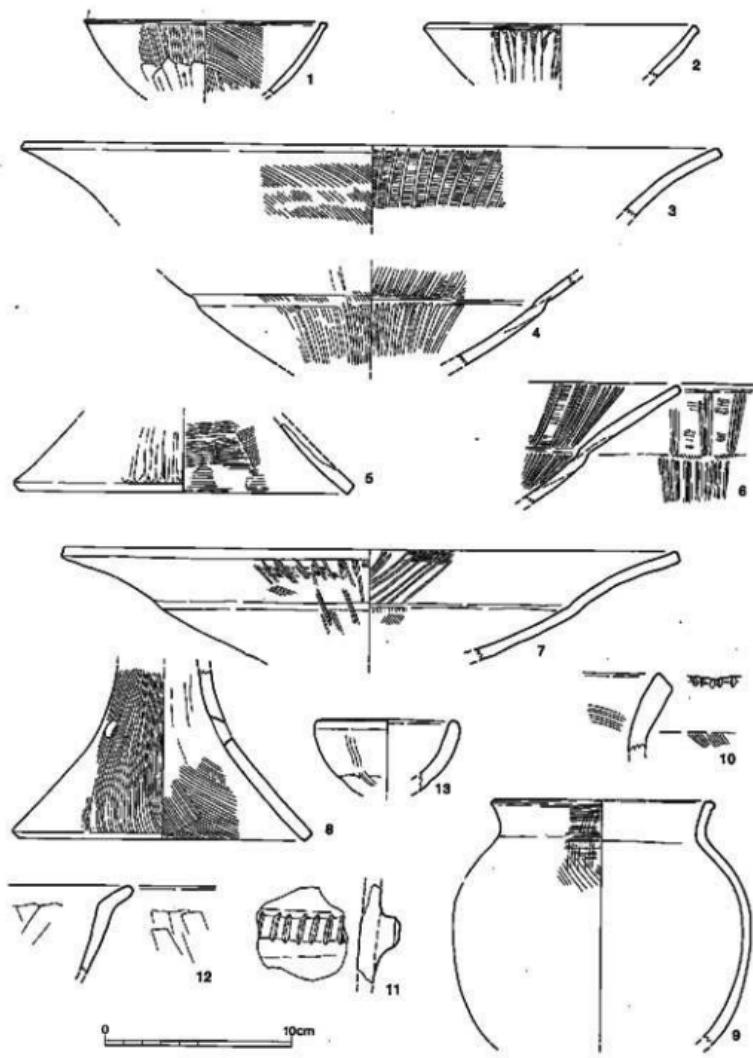
高杯（6）接合しない破片から杯部のみわかるものの口径は測定できない。外面は横方向のハケ目調整のあと、上半部が疎らな縦方向ヘラ磨き、下半部が雑なヘラ磨き調整である。内面はハケ目調整のあと、縦方向にヘラ磨き調整され、下半部が密である。胎土に雲母を含み淡明褐色に焼成されている。

6号木棺墓（図版28-2, 第68図）

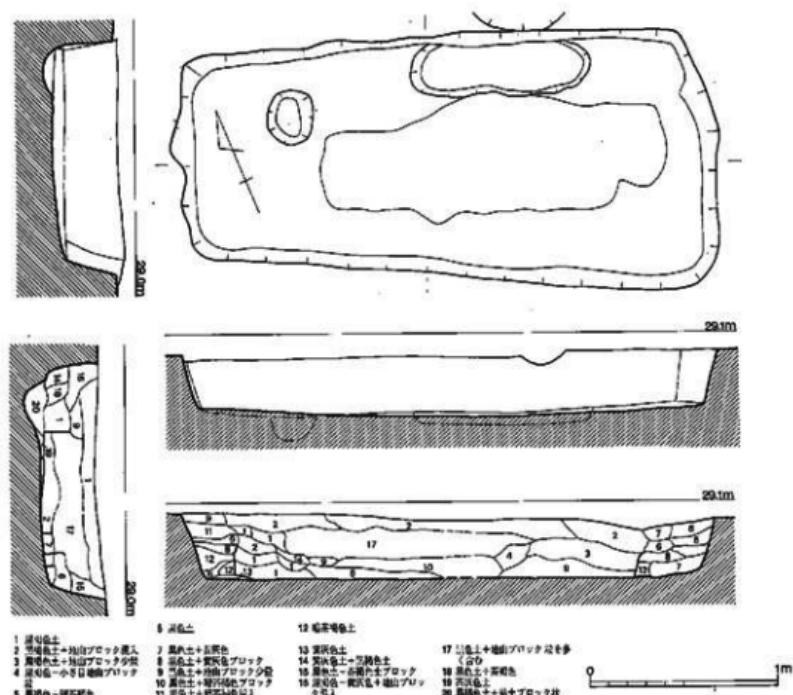
5号木棺墓の南東側に隣接し、5号木棺墓墓壙に一部切られる。検出面での墓壙プランは、長さ307cm、幅125cmの隅丸長方形で、深さは30cm前後。壙内の堆積土は暗灰黒色・黒褐色土などで、黄灰色粘土の床面に掘り込まれる黒色土部分が帯状に続き、壙内には石材が小破片すら存在しない。主軸方向はN44°30' Eをとる。棺内は長さ190cm前後、南側の幅40cm、北側の幅35cm前後。墓壙内で赤色顔料は確認されなかったが、棺外西側の床面よりわずかに浮いて土器片が出土した。

出土遺物（第69図）

墓壙内から数点の土器小片が出土した。高杯のみ図示する。



第69図 木柄基出土土器実測図 (1/3)



第70図 7号木棺墓実測図(1/30)

高杯(7・8) 7は復原口径33.0cmの大きさの口縁部破片で、内外面共にハケ目調整のあとヘラ磨き調整されて暗文状を呈しているが、杯部内面の屈曲部にハケ目原体の小口圧抜がみられる。胎土に雲母・砂粒・赤褐色鉱を含み暗黄褐色に焼成されている。8は復原胎径16.0cmの脚部破片で、内外面共にハケ目調整されるが柱状部内面には絞り痕がみられる。胎土に雲母・褐色粒・砂粒を含み暗黄褐色ないし明褐色に焼成されている。

7号木棺墓(図版28-3, 第70図)

2号木棺墓の南側に13号・14号土壙墓を挟んで位置する。検出面での墓壁プランは隅丸長方形で、長さ290cm、東側の幅138cm、西側の幅110cmと東側が広く撥状を呈する。深さは30cm余り。擴内の堆積土は黄灰色粘土粒などを含む黒褐色土・暗茶褐色土などで、石材は小破片すらみられない。堆積土の観察によって、長さ213cm、中央部での幅64cmを測る部分が棺内と判

断できる。主軸方向はN $67^{\circ}30'W$ をとる。墓壙内で赤色顔料は確認されなかったが、棺外北側の床面を掘り込むビットと土坑がみられる。

出土遺物（第69図）

墓壙内からほとんど胴部破片ながら弥生土器裏片と、鉢・椀などの破片も出土した。

壺（9～11）が緩やかに外反しながら短く立ち上がり、壠部はさほどシャープではない。胴部は内外面共にナデ調整されているが、頸部付近にはハケ目が残る。細砂粒と雲母を含む胎土で、暗黄灰色の色調を呈している。10は壠部に刻み目が施される壺の口縁部破片で、内外面共にハケ目が残る。胎土に雲母・砂粒を含み、暗黄灰褐色に焼成されている。11は胴最大径位の凸帯部らしい破片で、やや幅広な凸帯上に刻み目がみられる。内面にはハケ目の痕跡がある。他の破片では、外面がハケ目ないしナデ調整で、内面はハケ目調整されている。

鉢（12） 口縁部が短めに外反する口縁部破片である。体部内外面共にヘラ状工具によるナデもしくはヘラ削り調整されている。胎土に雲母・角閃石・赤褐色粒を含み黄橙色に焼成されている。

椀（13） 復原口径7.8cm、残存器高3.8cmの小形椀で、外面の一部にハケ目がみられる。砂粒を含み淡黄灰色に焼成されている。

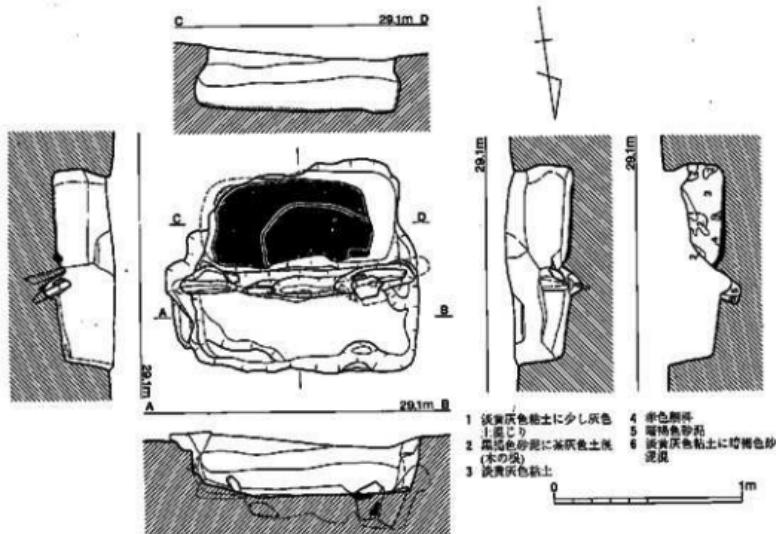
8号木棺墓（付図2）

7号木棺墓の南側に近接するが、ほとんどが調査区域外にあり、一部のみ確認した。壙内には黄灰色粘土粒などを含む黒褐色土・暗茶褐色土などが堆積している。

3. 石蓋横穴土壙墓

1号石蓋横穴土壙墓（図版29、第71図）

1号石棺墓の南側に近接して位置する。当初、検出面では長さ132cm、幅70cm弱の隅丸長方形プランの、石材がほとんど抜き取られた石棺墓であろうと判断していた。少し掘り下げたところ、石材の位置が不自然であった。そして、すぐ横に接していた植木の根で搅乱された穴を精査したところ、搅乱と重複して、地山の陥没した部分があり、この陥没部分と当初検出していた墓壙が繋がっていることも明らかとなった。堅穴の墓壙は深さ30cmで、主軸方向N $82^{\circ}30'W$ をとる。横穴部分は墓壙内南壁に取り付き、主軸方向は平行である。いわゆる棺内にあたるこの部分は長さ110cm、奥行55cmで、床面は墓壙床面よりやや低く赤色顔料が確認された。なお、横穴部分はおそらく30cm前後の高さを有していたと思われる。蓋石は、4枚の緑泥片岩扁平石で、横穴部分を斜めに覆うように設置されていたものと推定されるが、抜き取られていて、補強として使用された石や、割れた石材が残るのみである。棺内の北西隅部と、その近くの蓋



第71図 1号石蓋横穴土塚墓実測図 (1/30)

石の間から、それぞれ鉄片が出土した。

出土遺物

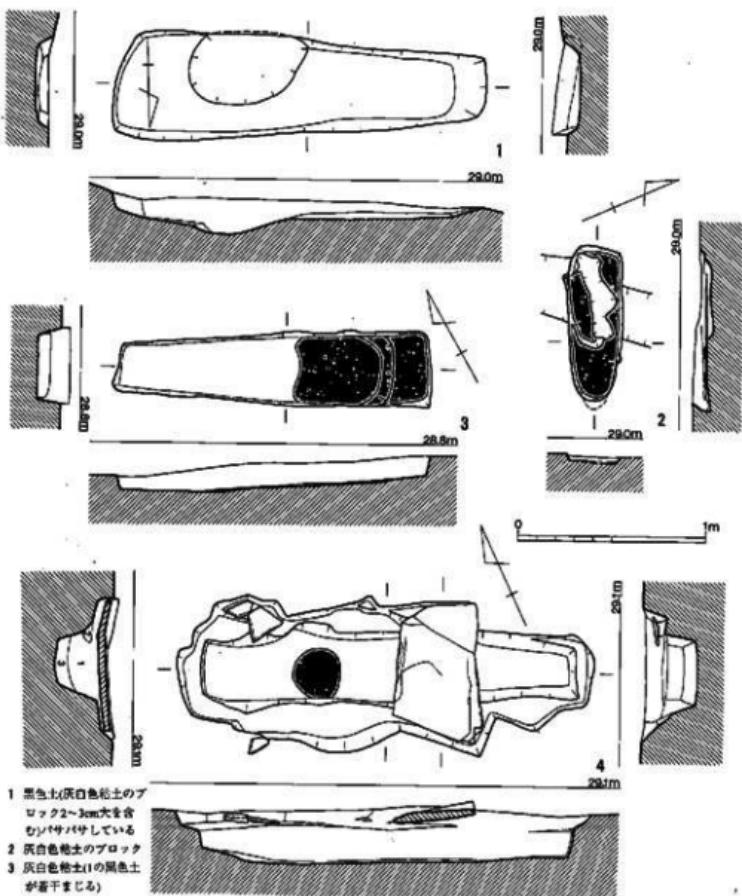
鉄片のうち1点は鉄斧らしい形状であったと記録されているが、紛失して分からぬ。調査時の鈍化した土塊上で長さ8cm、幅4cm、厚さ3cmほどの塊であった。また他の1点も紛失して分からぬが、長さ5cm、幅4cm、厚さ3cmほどの塊であった。

4. 土塚墓

石蓋を伴う「石蓋土塚墓」は、2基発見した。なお蓋石のないものは単に「土塚墓」と呼称したが、調査区内全体が削平を受けてるので、本来蓋石を伴っていたにもかかわらず石材を削平時に除去されてしまった可能性もある。土塚墓は15基である。ここでは石蓋土塚墓・土塚墓を区別せずに番号を付して、1~17号とした。

1号土塚墓 (図版30-1, 第73図)

1号石棺墓の北側に近接して位置する。長さ200cm、東側の幅59cm、西側の幅36cmの撥形の



第72図 1~4号土塚墓実測図 (1/30)

平面プランで、主軸方向はN87°30'Wをとる。深さは約10cmで、床面に擾乱坑があり、赤色顔料の痕跡は確認できなかった。

2号土塚墓（図版30-2, 第72図）

6号石棺墓と1号石蓋横穴土塚墓に挟まれて位置し、畝状の浅い溝に貫かれる。長さ82cm,

東側の幅20cm、西側の幅28cmの砲弾形の平面プランで、主軸方向はN66°Wをとる。深さは、5~8cm。床面に搅乱坑が及ぶものの、全体に赤色顔料の痕跡が確認された。

3号土壙墓（図版30-3、第72図）

7号石棺墓と8号石棺墓に挟まれて位置する。長さ170cm、東側の幅40cm、西側の幅25cmの橢形の平面プランで、主軸方向はN60°Wをとる。深さは10cm前後で、東側の床面に赤色顔料の痕跡が確認された。

4号石蓋土壙墓（図版31-1、第72図）

8号石棺墓の東側に位置する。検出面での長さ222cm、幅80cmの不整楕円形の平面プランで、蓋石の緑泥片岩1枚と割れた蓋石材片が残る。石の大きさは長さ75cm、幅45cm、厚さ5cmであるが、蓋石に5~6枚の扁平石が使用されていたと推定される。下部土壙は、長さ200cm、東側の幅30cm、西側の幅40cmで、主軸方向はN65°Wをとる。深さは15~20cmで、東寄りの床面に赤色顔料の痕跡が確認された。

5号石蓋土壙墓（図版31-2・3、第73図）

9号石棺墓の東側に位置し、20号溝に貫かれる。20号溝の肩部分で偶然取り外されずに残った蓋石が2枚ある。緑泥片岩の扁平石で、溝内に落ち込むように残った石は長さ60cm余り、幅45cm、厚さ8cmで、もう1枚の石は長さ70cm、幅50cm、厚さ9cm。蓋石は全体で6枚前後であったものと推定される。下部土壙は長さ185cm、北側の幅62cm、南側の幅33cmを測る橢形の平面プランで、床面に向かってやや広がる。主軸方向はN46°40'Wをとる。深さは35~40cmで、床面と腰壁の一部に赤色顔料の痕跡が確認された。中央よりやや北寄りで、鉄器片が出土した。

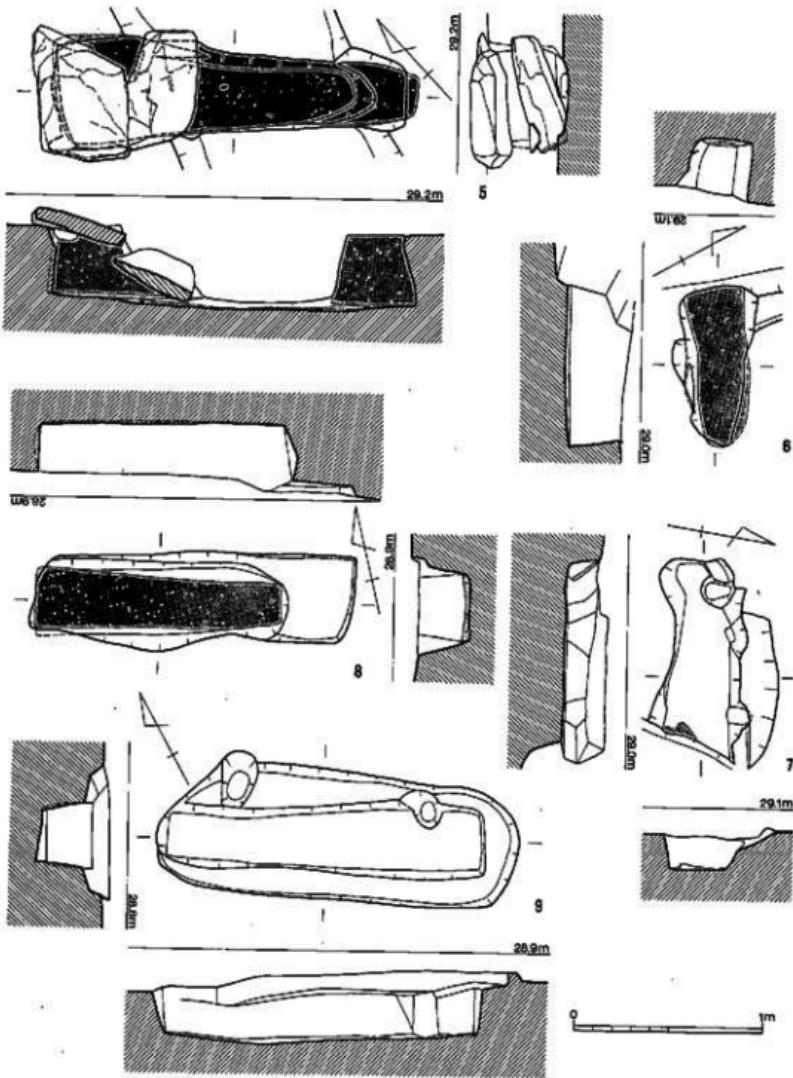
出土遺物（図版35-2、第77図）

鉄刀子（1）基部側を欠失するが残存長8.9cm、幅1.6cm、厚み0.3cmをはかる。先端部に12mm幅の布が鎧着している。おそらく布で巻かれていたのであろう。

鉄 鐵（2）基部側を欠失し全体の形状は不明だが、無基の鐵であろう。身中央部が中空になる。残存長2.2cm、幅1.6cm、厚み0.2cmを測る。

6号土壙墓（図版32-1、第73図）

5号石蓋土壙墓の南側に位置し、近世溝によって西側を失う。土壙は長さ84cm+α、幅25~42cmの砲弾状に残るが、下部土壙の足位側であろうか。床面に向かってやや広がる様子は、5号石蓋土壙墓に似る。主軸方向はN61°20'Wをとる。深さは30~35cmで、床面に赤色顔料の



第73圖 5~9號土槨墓実測図 (1/30)

痕跡が確認された。

7号土壙墓（図版 32-2, 第 73 図）

1号石蓋横穴土壙墓の東側に位置し、20号溝によって西側を失う。土壙は長さ 106cm + α, 幅 35~45cm の砲弾状に残るが、下部土壙の足位側であろうか。主軸方向は N80°E をとる。深さは 20cm 余りで、床面に赤色顔料の痕跡が確認された。

8号土壙墓（図版 32-3, 第 73 図）

8号石棺墓の南西側に位置する。検出面では長さ 173cm, 幅 45cm の長方形プランを呈しているが、5cm 程掘り下げたところ、長さ 87cm, 西側の幅 45cm, 東側の幅 35cm 程の撥形を呈する下部土壙が現れ、主軸方向は N76°30'W をとる。深さは 25~35cm で、床面に赤色顔料の痕跡が確認された。

9号土壙墓（図版 32-1, 第 73 図）

8号土壙墓の南西側に 17号土壙墓を挟んで位置し、柱穴状ピットによって一部搅乱される。検出面では長さ 194cm, 幅 70cm の長方形円形プランを呈していたが、10cm 程の深さで、長さ 175cm, 西側の幅 33cm, 東側の幅 39cm の撥形を呈する下部土壙が現れ、主軸方向は N73°W をとる。土壙は深さ 20~25cm だが、床面に赤色顔料の痕跡は確認できなかった。墓壙内からは土器片が 1 点出土した。

出土遺物（第 78 図）

甕（1）「く」字形に外反する口縁部破片である。内外面共にヨコナデ調整されている。胎土に雲母・角閃石・赤褐色粒を含み、淡黄褐色に焼成されている。

10号土壙墓（図版 33-2, 第 74 図）

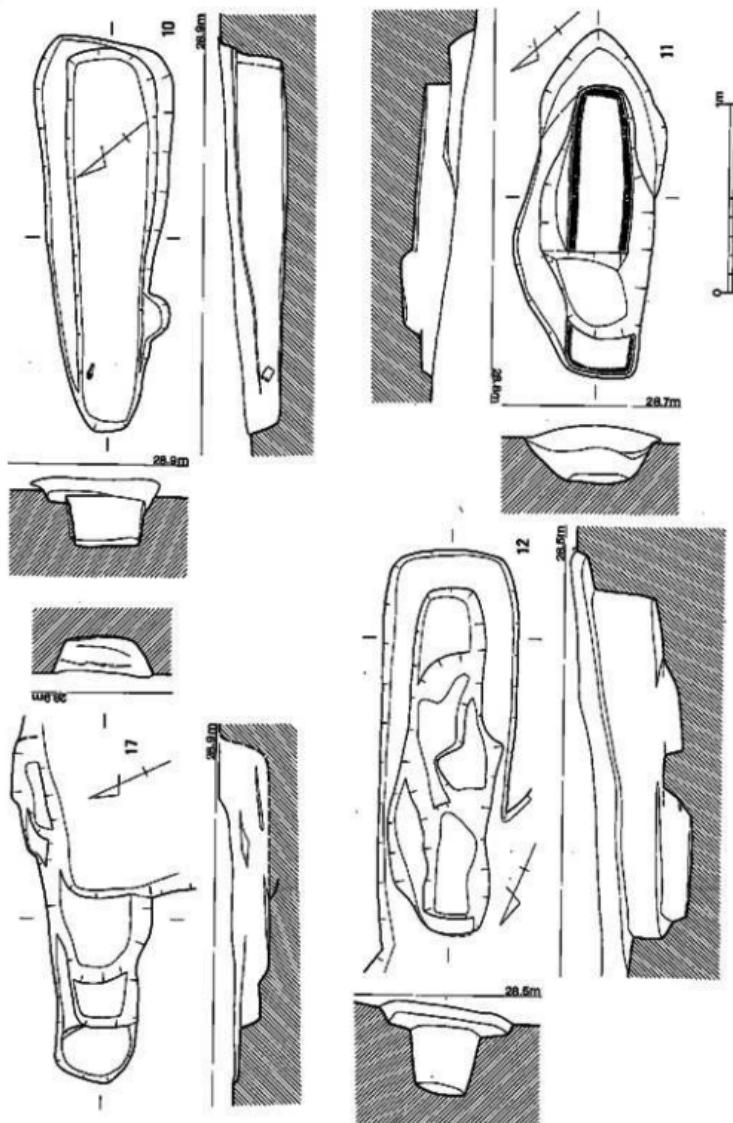
9号土壙墓の南西側に位置する。検出面では長さ 207cm, 南側の幅 75cm, 北側の幅 35cm の撥形プランを呈していたが、5cm 程の深さ。下部土壙は長さ 202cm, 南側の幅 47cm, 北側の幅 33cm の撥形で、主軸方向は N50°W をとる。土壙は深さ 15~25cm だが、床面に赤色顔料の痕跡は確認できなかった。

出土遺物（図版 35-2, 第 75~77 図）

墓壙内北側の床面から浮いた位置で鉄斧が 1 点出土したほか、三角凸帯をもった壺頭部破片などが出土した。

甕（第 78 図 2）凸帯の剥がれた破片が一番大きい。外面は縱方向のハケ目調整した後に凸帯を貼り付けている。内面は磨滅し、調整手法はわからない。角閃石・雲母を胎土に含み、

第74図 10~12・17号土壁基実測図 (1/30)



暗黄灰色に焼成され、外面に煤が付着している。

鉄斧（第75図） 刃部側の銹化が進んだために、彫れて壊れている。残存長6.4cm、刃部側幅4.7cm。袋部はこのうち5.2cmの長さを占め、幅3.7cm、厚み1.9cmを測る。発掘時には布目痕が確認できたが、銹化のためか現況ではわからない。

11号土塗墓（図版33-3, 第74図）

11号石棺墓と12号石棺墓に挟まれた位置にある。検出面では長さ185cm、幅70cmの不整格円形プランを呈していたが、10cm程の深さで、長さ155cm、南側の幅30cm、北側の幅40cmの複数を呈する下部土壙が現れ、主軸方向はN49°30'Wをとる。土壤は深さ10~25cmで、床面には赤色顔料の痕跡が確認された。

12号土塗墓（図版34-1, 第74図）

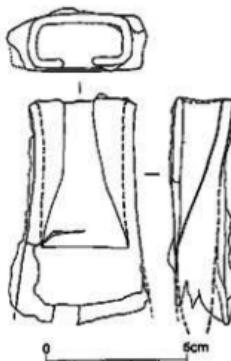
12号石棺墓の西側に近接して位置し、北西側の上部は段落ちで失う。検出面では長さ210cm+α、幅72cmの隅丸長方形プランを呈し、10cm程の深さ。下部土壙は、長さ185cm、幅37cmの隅丸長方形で、主軸方向はN23°Wをとる。土壤は深さ20~30cmで、搅乱を受けたらしい凹凸のある床面では赤色顔料の痕跡は確認されなかった。

13号土塗墓（図版34-2, 第76図）

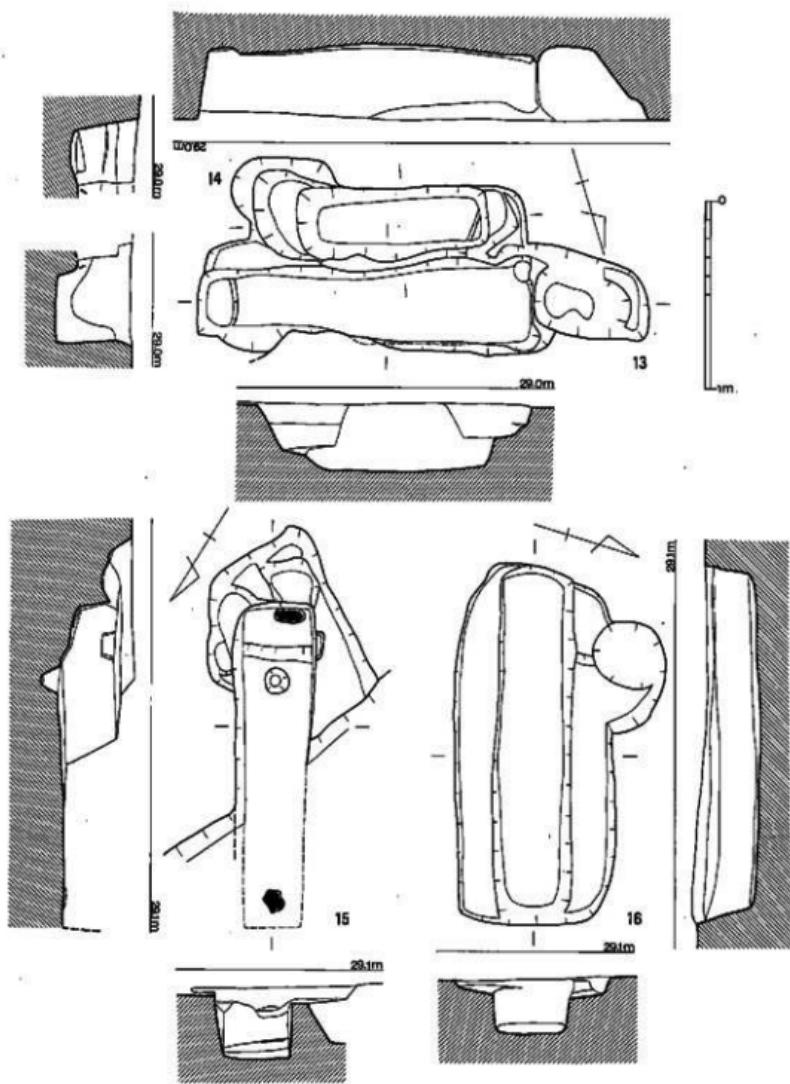
2号木棺墓の南側に近接して位置し、14号土塗墓と並列するが、先後関係は不明。西端は柱穴状ピットが切っているようだ。検出面では長さ190cm余り、西側の幅60cm、東側の幅50cmの隅丸長方形プランを呈し、5cm程の深さでは東側の幅が35cmに狹まる。主軸方向はN72°Wをとる。土壤は深さ35cm前後で、東端のみ2~3cm深い。床面では赤色顔料の痕跡は確認されなかった。

14号土塗墓（図版34-2, 第76図）

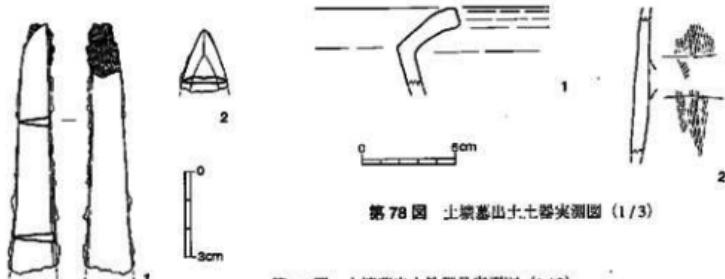
7号木棺墓の北側に近接して位置し、13号土塗墓と並列するが、先後関係は不明。検出面では長さ146cm、幅40cm程の隅丸長方形プランを呈する。主軸方向はN75°Wをとる。深さ35cm前後で達する床面では赤色顔料の痕跡は確認されなかった。



第75図 10号土塗墓出土鉄製品実測図 (1/2)



第76図 13~16号土器基実測図 (1/30)



第77図 土壙墓出土鉄製品実測図 (1/2)

15号土壙墓 (図版34-3, 第76図)

14号石棺墓の北側に近接して位置し、北西側は20号溝で失う。検出面では長さ150cm+α、幅70cm程の不整形だが、おそらく石蓋の外された痕跡であろう。下部土壙は、長さ115cm+α、南側の幅44cmだが、北側にかけてわずかに狭くなるようである。主軸方向はN32°Wをとる。土壙は深さ25~30cmで、床面南端には奥行き30cm弱の枕状突起がみられる。床面には一部擾乱穴もあるが、枕状の段の上と、段から130cm程北側の位置で赤色顔料の痕跡が確認された。

16号土壙墓 (図版35-1, 第76図)

6号木棺墓の南側に接し、墓壙を一部切る。検出面での墓壙プランは、長さ192cm、幅85cmの隅丸長方形を呈すが、柱穴状ピットに一部壊される。深さ5cm余りの中央に、東側の幅42cm、西側の幅39cmの隅丸長方形の下部土壙が現れる。主軸方向はN72°Eをとる。土壙は深さ20~25cmで、床面では赤色顔料の痕跡は確認されなかった。

17号土壙墓 (第74図)

1号木棺墓の西側に接し、墓壙の東側を失う。検出面での墓壙プランは、長さ180cm前後、幅55cm程の隅丸長方形ないしは、擬形であろう。深さ10cm余りで西端部などを残して、下部土壙が現れるが、主軸方向はN65°Wをとる。土壙は深さ20cmで、床面では赤色顔料の痕跡は確認されなかった。

5. 墓地周辺出土の遺物

遺構検出時に出土した遺物に、玉類がある。また、調査区域外の近代墓地改葬時に出土した土師器壺もある。この土器について、石棺墓や木棺墓及び土壙墓からなる当該墓地群



第79図 墓地周辺出土玉類実測図 (実大)

に伴う可能性が高い。

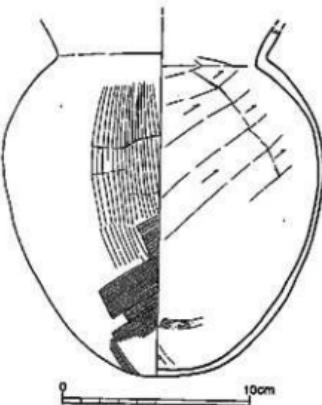
玉類（図版35-2、第79図）

勾玉（1）スカイブルーの色調を呈するガラス製の勾玉。長さ14.6mm、幅8.5mm、厚さ3.8mmの大きさで、頭部と尾部はほぼ対称。頭部に1.2mm×1.8mmの孔が穿孔されている。

管玉（2）グリーンタフ製で、長さ11.5mm、外径3.2mm、孔径1.0~1.2mmを測る。

出土土器（図版35-2、第80図）

土部器壺 口縁部を欠く、残存高18.6cm、復原胴最大径17.1cmの大きさの壺である。最大径は胴上部にあり、底部はごく僅かに凸レンズ状を呈する。体部外面はハケ目調整、内面を頸部までヘラケズリ調整されて器壁は薄い。胎土に雲母・角閃石・赤褐色粒を含み、外面は黒色に、内面は茶褐色に焼成されているが、内面に赤色顔料が厚めに付着している。顔料を詰めていたものであろう。



第80図 墓地周辺出土土器実測図（1/3）

6. 小 結

孤塚南遺跡の北部調査区では約350m²の範囲で、石棺墓15基、木棺墓8基、石蓋横穴土壙墓1基、土壙墓（石蓋土壙墓を含む）17基の、合計41基の墓地群を調査した。西側は丘陵斜面端部に相当し、東側端との間は約20mを測るが、南北には調査区域外にも続くので、全貌は分からぬ。石棺墓は、13号石棺墓を除いて敷石を有さないが、石棺の内法では次のように分けられる。

第1群 長さ100cm・幅25~30cm・深さ20cm前後の規模。 2号

第2群 長さ140cm・幅25~30cm・深さ20cm前後の規模。 5号・6号

第3群 長さ160cm・幅30~40cm・深さ20cm前後の規模。 4号・10号・11号・12号

第4群 長さ180cm・幅30~50cm・深さ20cm前後の規模。 1号・3号・8号・13号・14号

検出面では、石棺墓は他の石棺墓や木棺墓・土壙墓などと墓構の重複はみられないが、至近の位置に配置する例は多く、全体に削平を受けていることを考慮すれば、墓構の上部が一部重複していたものもある。擾乱坑を伴うなど、既に石材を抜き取られた例が多く、出土遺物も少ないが、3号石棺墓ではガラス小玉とグリーンタフ製の管玉が擾乱坑の間から出土している。

また赤色顔料を塗布した例は3・8～11号にみられる。主軸方向は傾斜に平行する例がほとんどだが、13・14号が直交する方向に設けられている。

木棺墓は、南寄りの部分に集中するが、木棺の内法では、石棺墓の第4群に相当する3号～5号と、長さ200cmないしそれ以上の群として1号・2号・6号・7号の例がある。木棺墓の墓壙は他の墓壙と一部重複する例があり、1号→17号土壙墓 16号土壙墓→6号→5号→4号のような新旧関係にある。

木棺墓から出土した遺物では、弥生時代後期後半～古墳時代初期頃の土器片が若干含まれ、その中では高杯片がめだつ。3号にのみ赤色顔料の痕跡がみられた。

土壙墓には、削平を受けて上部構造が不明な例もあるが、石蓋を有する例として、1号石蓋横穴土壙墓と、4号・5号がある。壙内の規模では、石棺墓の第1群より小さな2号、第2群よりやや小さな8号、第4群に相当する1号・9号・10号・12号と、これよりやや長めな4号・5号の例がある。なお2～8・11号には赤色顔料が確認され、5号から鉄刀子・鉄鎌、10号から鉄斧が出でている。鉄鎌は弥生時代的な様相の先端部破片で、出土した位置からすると遺体に刺さっていた可能性もある。

これらからみて、土壙墓は弥生時代後期から古墳時代前期にかけて構築され、石蓋土壙墓は弥生時代に限定される可能性が高いであろう。また、木棺墓は、これらの時期幅の中に含まれることになるが、類例は目下のところ確認していない。石棺墓から出土する玉類も弥生時代後期に普遍的にみられる種類のものであり、3号石棺墓も弥生後期後半を前後する時期とみてよいだろう。

墓から、直接発見されなかったが、北部調査区の南側外での改葬時に発見された土器には、赤色顔料が厚く付着していて、顔料を詰めていた可能性もある。土器はいわゆる庄内式期の特徴を備えている。これらの墓地群の時期が、庄内式土器の年代に近いことを示唆するものでもある。

隣接する治部ノ上遺跡や座禅寺遺跡では、この時期に近接した周溝墓などが発見されているが、狐塚南遺跡では墓に伴う溝も検出されなかった。被葬者クラスに差異のあったことも考えられる。狐塚南遺跡の墓地群は、先行する墓壙を大きく壊さない程度の、それぞれが小さな盛土なりの墓標施設を有した共同墓地といった色彩が強い。

VI 歴史時代の遺構と遺物

1. 掘立柱建物

遺構配置図に図示するように、調査区域内には無数の柱穴状ピットが発見された。これらのピットのうち掘立柱建物を構成していたものも少なくはないと思われるが、その組み合わせについて現地で確認できたものは皆無に等しい。図面上の操作によって建物を想定することも可能ではあるが、検討する時間的余裕もなく、本来建物ではなかったものまで建物として誤認する危険性も高いので、ここでは省略することにしたい。

2. 土塚墓

土塚墓と推定される遺構は33基発見し、おもに調査区内の中央部に集中しているが、これの中にはやや不確実な例も含まれていることも否めない。また後述する土塚の中にも墓に使用されたものが無いとは断言しえない。

1号土塚墓（図版 37-1, 第 81 図）

調査区中央部の7D区北東寄りにある。主軸方位はN29°Eで北東側が頭位と推定される。検出面での平面形は隅丸長方形を呈し、長さ158cm、幅73cm。床面は長さ128cm、北東側の幅56cm、南西側の幅55cmの広さで、深さ30cmを測る。

2号土塚墓（図版 37-2, 第 81 図）

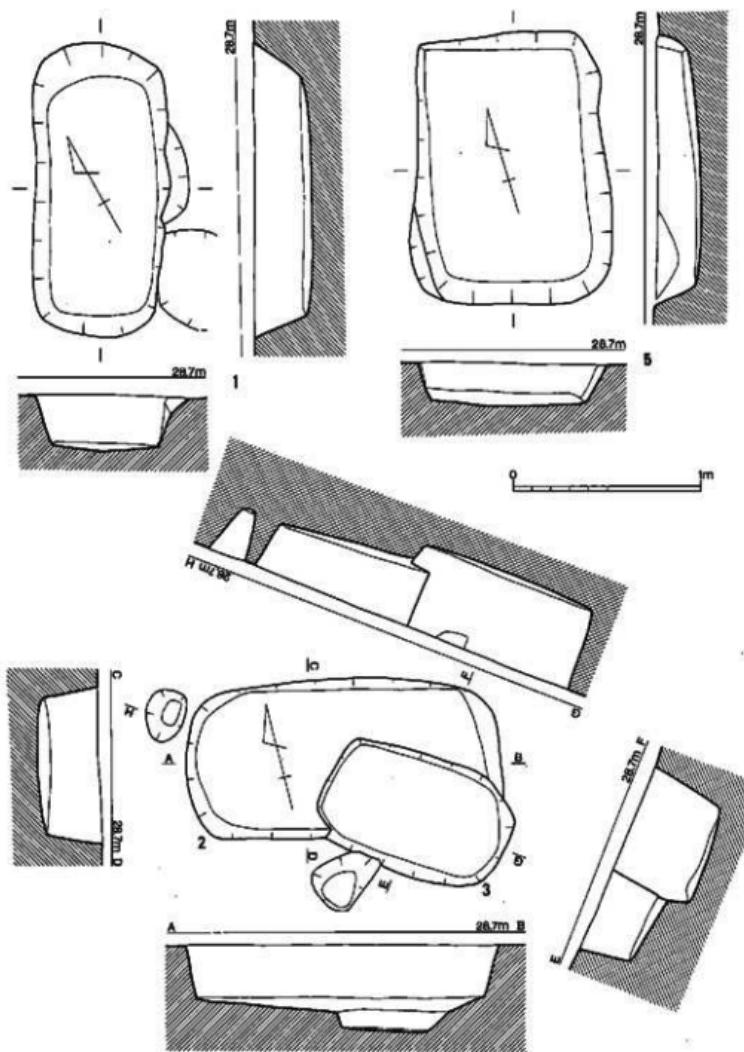
1号土塚墓の西側に接し、3号土塚墓と重複するが、後出する。主軸方位はN76°50'Wで東側が頭位と推定される。検出面での平面形は隅丸長方形を呈し、長さ169cm、幅86cm。床面は長さ156cm、西側で幅74cmだが、東側がやや広めである。深さは35cmを測る。

出土遺物（第 83 図）

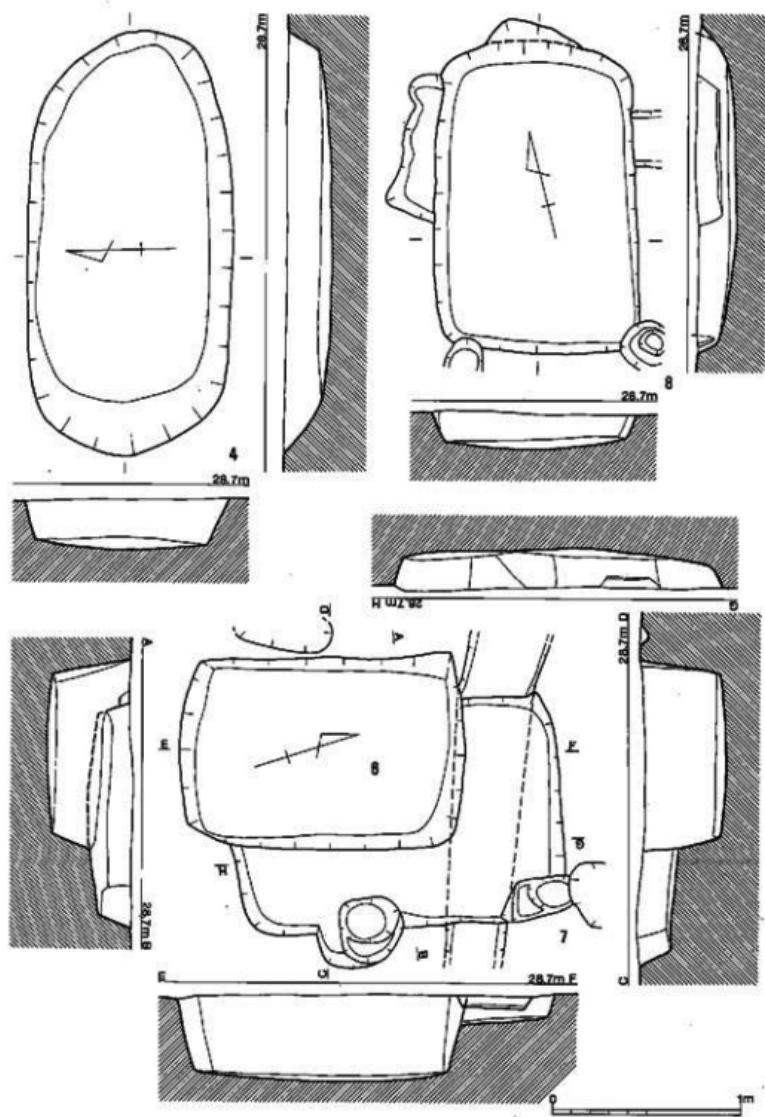
磁器（1・2）1は小破片だが、うすい緑色の釉を呈する龍泉窯系の青磁碗であろう。2は高台部を欠くが、復原口径10.0cm、残存器高1.8cmの白磁皿である。

瓦質土器（3）鉢の口縁部小破片で、端部外面が肥厚する。内面はハケ目調整されている。

3号土塚墓（図版 37-2, 第 81 図）



第81図 1~3・5号土塚墓実測図 (1/30)



第82図 4・6~8号土壤墓実測図 (1/30)

2号土塚墓と重複し2号より先行する。主軸方位はN $55^{\circ} 30' W$ で南東側が頭位と推定される。検出面での平面形は隅丸長方形を呈し、長さ130cm、幅65cm。床面は長さ116cm、北西側で幅52cm、南東側で53cmで、深さは46cmを測る。

4号土塚墓（図版37-3、第82図）

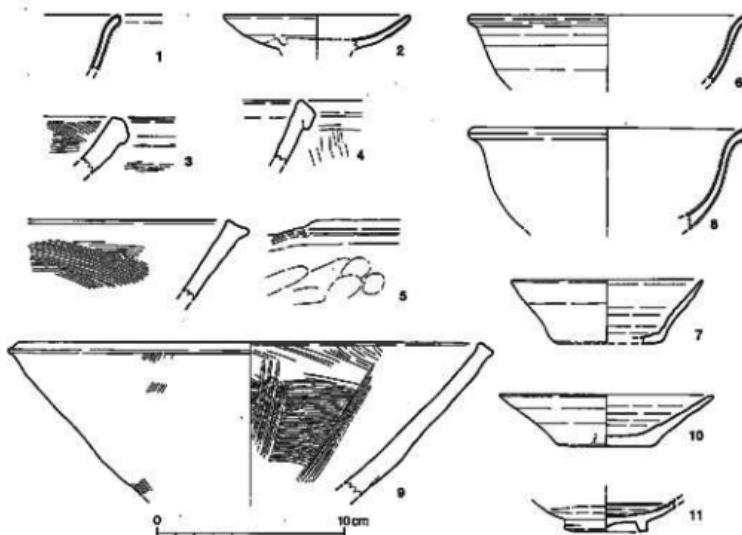
1号土塚墓の北側に近接する。主軸方位はN $88' W$ で西側が頭位と推定される。検出面での平面形は長梢円形を呈し、長さ226cm、幅111cm。床面は長さ187m、西側の幅87cm、南北側の幅67cmの広さで、深さ24cmを測る。上部の堆積土は粘土粒を多く含む黒褐色土で、下半部堆積土は粘土塊を多く含み、炭化物も多くみられた。

出土遺物（第83図）

土師器（4） 体の口縁部破片で、端部外面は折り疊んだように肥厚する。粗いハケ目調整痕の残る外面に煤が付着している。

5号土塚墓（図版38-1、第81図）

調査区中央部の8D区東寄りにある。主軸方位はN $16' E$ をとる。検出面での平面形は隅丸



第83図 土塚墓出土土器実測図（1/3）

長方形を呈し、長さ146cm、幅106cm。上部が茶褐色、下部が黄灰色粘土の堆山に掘り込まれている。床面は長さ124cm、北側の幅81cm、南側の幅83cmの広さで、深さ24cmを測る。

6号土壙墓（図版38-2、第82図）

8D区中央にあり、7号土壙墓と重複するが6号が新しい。主軸方位はN11°30' Eで南側が頭位であろうか。検出面での平面形は隅丸長方形を呈し、長さ154cm、幅103cm。床面は長さ136cm、北側の幅86cm、南側の幅90cmの広さで、深さ46cmを測る。

7号土壙墓（図版38-3、第82図）

6号土壙墓と重複し6号に切られる。主軸方位はN6°30' Eで南側が頭位であろうか。検出面での平面形は隅丸長方形らしい形で、残存部での長さ178cm、幅122cm。床面は長さ166cm、北側の幅115cmで、深さは22cmを測る。東壁部で重複する柱穴状ピットとの先後関係は確認しえなかつた。

8号土壙墓（図版39-1、第82図）

8D区北東寄りにあり、7号土壙墓の北東に近接する。主軸方位はN14° Eで南側が頭位であろう。検出面での平面形は隅丸長方形を呈し、長さ167cm、幅109cm。13号溝と柱穴状ピットで一部壊されている。床面は長さ150cm、北側の幅86cm、南側の幅99cmの広さで、深さ20cmを測る。

出土遺物（第83図）

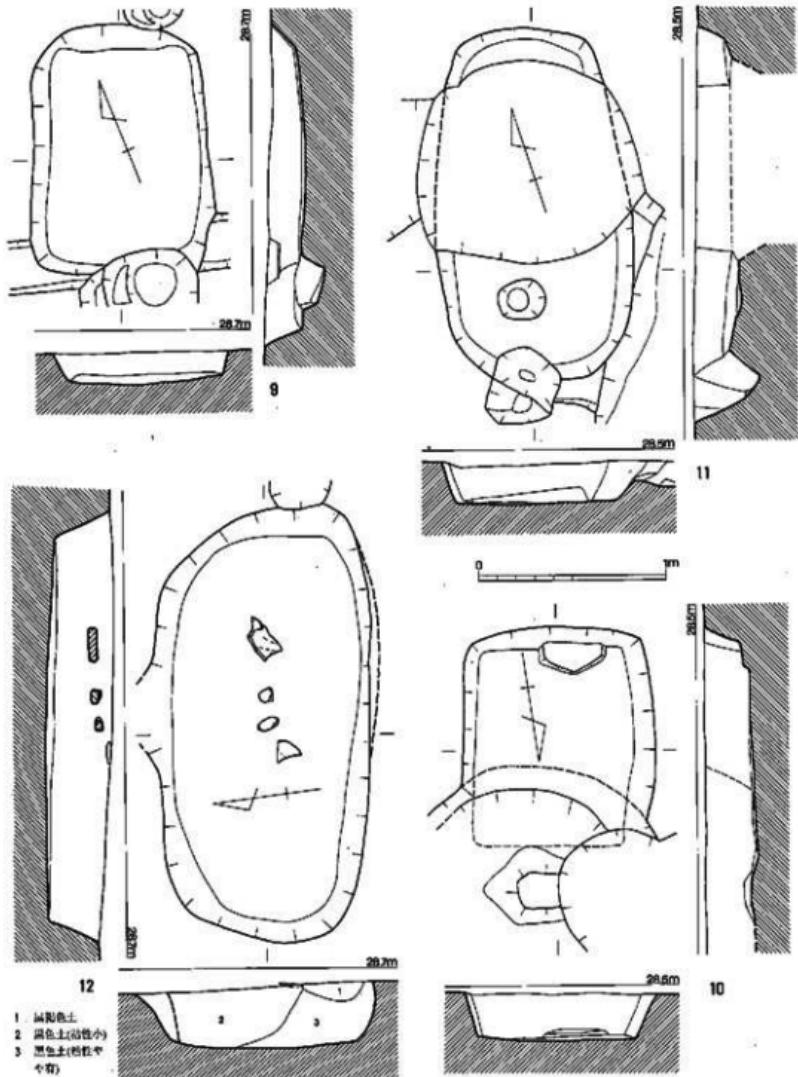
土師質土器（5）鉢の口縁部破片で、片口の一部がみられる。口縁端部は外方につまみ出したように肥厚する。外面は指頭の痕跡が残るナデ調整、内面はハケ目調整されている。胎土に砂粒・雲母を含み、黄橙色に焼成されている。

9号土壙墓（図版39-2、第84図）

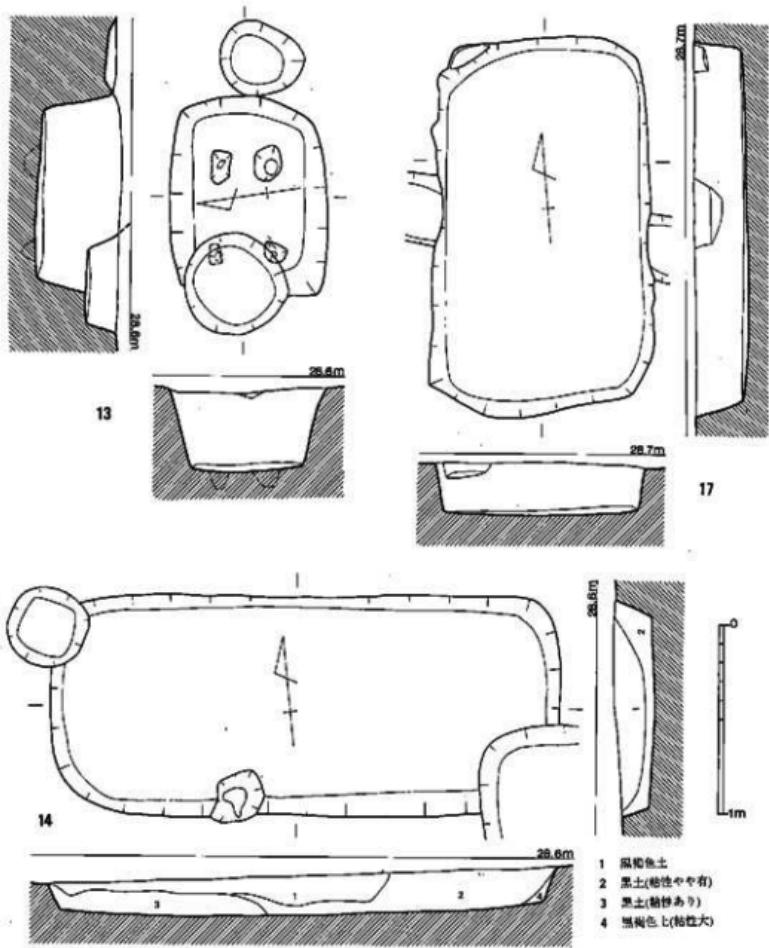
8号土壙墓の北に近接する。主軸方位はN21°30' Eをとる。検出面での平面形は隅丸長方形を呈し、長さ133cm、幅98cm。12号溝と柱穴状ピットで一部壊されている。床面は長さ115cm、北側の幅77cm、南側の幅78cmの広さで、深さ20cmを測る。西側の堆積土は東側のものより粘土粒が粗く、粘土塊状のものも多い。

10号土壙墓（図版39-3、第84図）

調査区中央部の6D区南西隅にある。主軸方位はN8° Eをとるが、北側を植木穴の搅乱で失



第84図 9~12号土塚墓実測図 (1/30)



第85図 13・14・17号土壙墓実測図 (1/30)

う。検出面での平面形は隅丸長方形らしく残存長115cm、幅103cm。床面は残存長97cm、南側での幅80cm、中央部の幅84cmの広さで、深さ25cmを測る。南端の床面に削り出しの枕状突起がみられる。

土壤内から出土した土師器小皿片は小破片で図示しえない。

11号土塚墓（図版 40-1, 第 84 図）

10号土塚墓の西側にあり、主軸方位は N17° 30' E をとるが、中央部北側を植木穴の攪乱で失い、南端部では柱穴状ピットが壁を壊している。なお南西側に重複する26号土塚より後出する。検出面での平面形は隅丸長方形で長さ 186cm、幅 104cm。床面は長さ 172cm、南側での幅 81cm だが北側では幅がやや狭くなる。深さは 23cm を測り、南側床面の中程に浅いくぼみがある。

土壤内から土師器片が出土したもの、小破片で図示しえない。

12号土塚墓（図版 40-2, 第 84 図）

8D 区南西隅にあり、主軸方位は N82° 30' W をとる。検出面での平面形は隅丸長方形で長さ 234cm、幅 116cm。床面は長さ 207cm、西側での幅は 72cm だが東側では幅 82cm とやや広めである。深さは 36cm を測る。墓壇の中央部上位に扁平石と円碟が点在している。

出土遺物（図版 56, 第 86 図）

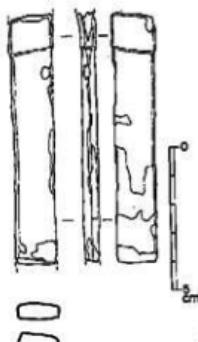
不明青銅製品 鎏金化が進み、端部が本来のままなのか、破損しているのか判断に苦しむが、図の上下端は明らかに欠損している。扁平な棒状で、上端部付近は一段幅広且つ肉厚になっている。断面形は上側が隅丸長方形、下側が二等辺三角形である。現存長 8.8cm、幅 1.4~1.5cm、厚さ 0.5~0.6cm を測る。刀子に形状は似ている。

13号土塚墓（図版 40-3, 第 85 図）

9D 区にあり、9号土塚墓の北に近接している。主軸方位は N80° 30' W をとる。西側を柱穴状ピットで壊されているが、検出面での平面形は隅丸長方形で、長さ 106cm、幅 85cm。床面は長さ 88cm、幅 58cm で、深さ 45cm を測る。床面の四隅に相対する小ピットが掘り込まれている。土壤内西側の下部堆積土には黒色土に黄灰色の粘土塊が多く混じる。

14号土塚墓（図版 41-1, 第 85 図）

8D 区西寄りにあり、6・7号土塚墓の西側に近接する。南西隅で 153 号土塚と重複し、切られる。主軸方位は N84° W をとり、平面形は隅丸長方形。検出面での長さ 274cm、幅 119cm。床面は長さ 260cm、幅 101cm で、深さ 22cm を測る。土壤内西側の下部堆積土には黒色土に黄灰色の粘土塊が多く混じる。



第 86 図 12 号土塚墓出土青銅製品実測図 (1/2)

15号土壙墓（図版 41-2, 第 87 図）

7D区南端にあり、16号土壙墓と重複し16号を切るが、後出するピットや土壙で上部を失う。主軸方位はN12° Eで、平面形は隅丸長方形を呈する。検出面での長さ165cm、幅105cm。床面は長さ123cm、南側の幅68cm、北側の幅75cmで、北側がやや広く、地山は南側が灰黄色粘土で、北側半分が灰黄色粘質砂層である。南端部で深さ61cmを測る。堆積土のうち下部は灰黄褐色粘土・暗褐色土などで、上部は黒色土がめだつ。

土壙内から土師器片、龍泉窯系とみられる青磁片、白磁片が出土したものの、小破片で図示しない。

16号土壙墓（図版 41-2, 第 87 図）

15号土壙墓と重複し南側を失うが、主軸方位はN87° Wをとる。平面形は長楕円形を呈する。検出面での長さ181cm、幅は80cm前後であろう。床面は長さ161cm、幅60cm程度で、北北西側がやや広く浅めで頭位であろうか。床面から10cm程度浮いた位置に扁平石がほぼ水平にみられるが標石の可能性もある。深さは37cmを測る。なお床面の上に5cm厚さで灰黄褐色粘土を主とする硬くしまった堆積土がある。

17号土壙墓（図版 41-3, 第 85 図）

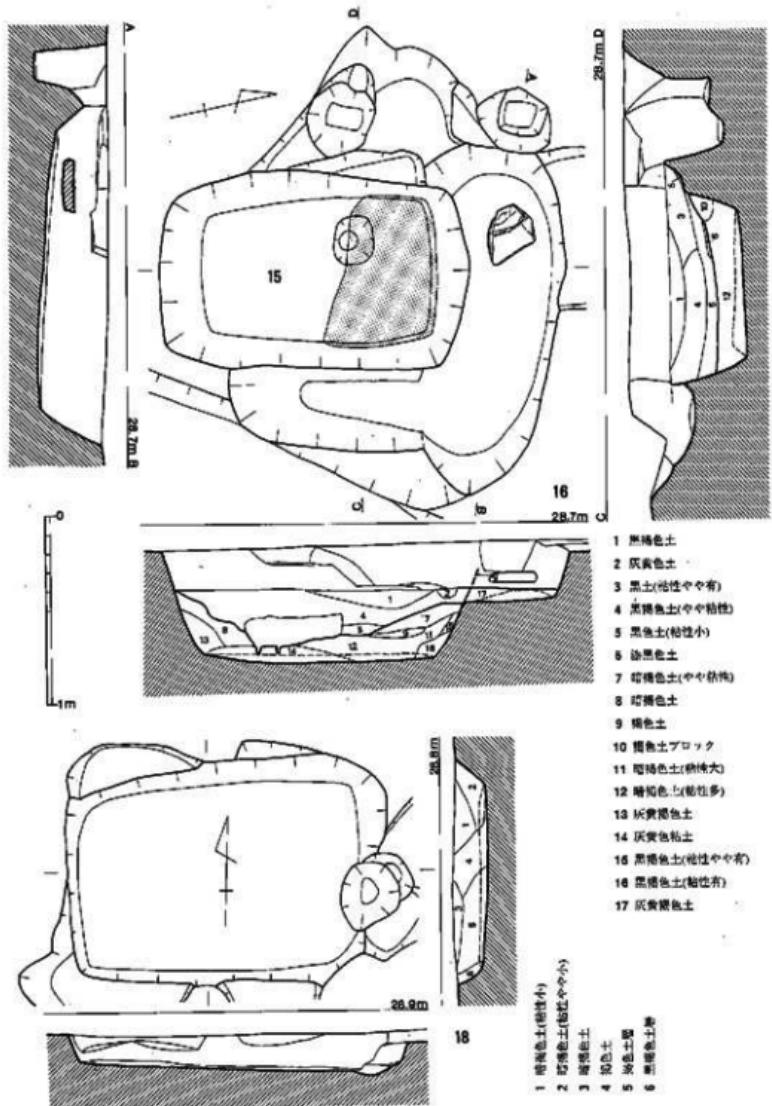
8C区北東寄りにあり、11号溝が中央部を横断して切る。主軸方位はN5° Eをとり、平面形は隅丸長方形。検出面での長さ201cm、幅119cm。床面は長さ187cm、北側の幅100cmで、南側は幅104cmでわずかに広い。深さは29cmを測る。床面から2~5cm厚さに黒色土が堆積し、その上に若干の黒色土と多量の灰黄色粘土の混じった堆積土がみられる。

18号土壙墓（図版 42-1, 第 87 図）

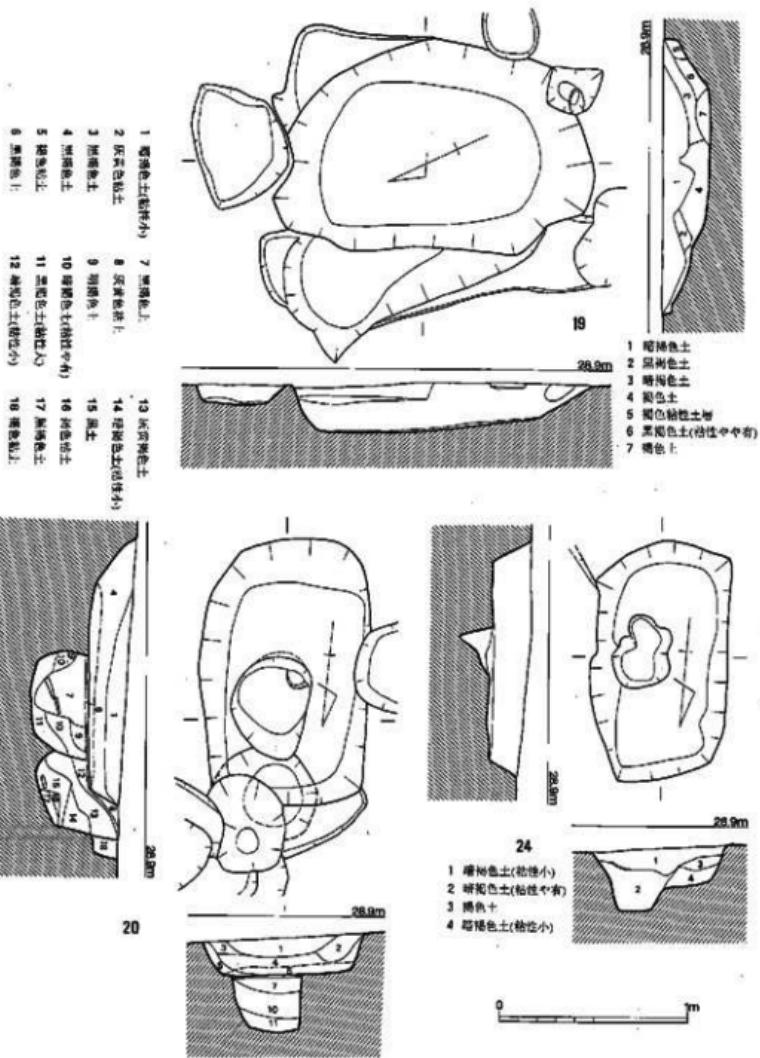
9C区中央にあり、柱穴状ピットなどに切られている。主軸方位はN88° 20' Eをとり、平面形は隅丸長方形。検出面での長さ172cm、幅123cm。床面は長さ150cm、西側の幅90cmで、東側は幅93cmでわずかに広い。深さは20cmを測る。

19号土壙墓（図版 42-2, 第 88 図）

9C区にあり、18号土壙墓の北東方に位置するが、土壙状ピットなどに切られている。主軸方位はN25° Eをとり、平面形は長楕円形。検出面での長さ168cm、幅112cm。床面は長さ118cm、南側の幅62cmで、北側は幅69cmとわずかに広い。深さは26cmを測る。上部堆積土は暗褐色土で、下層は褐色・黒褐色の粘性土が堆積している。



第 87 図 15・16・18 号土壤剖面図 (1/30)



第 88 図 19・20・24 号墳墓実測図 (1/30)

20号土壙墓（図版 42-3, 第 88 図）

10D区東南隅で、19号土壙墓の西北西に約7m離れている。柱穴状ピットなどと重複するが、主軸方位はN5° 40' Eをとり、平面形は隅丸長方形。検出面での長さ143cm、幅90cm。床面は長さ110cm、南側の幅67cmで、北側は幅59cm。深さは22cmを測る。土壙中央から北側にかけて先行する3つの柱穴状ピットと重複するが、この部分には貼り床が施されている。

土壙内から土師器系切り底皿片、土師質鏡片が出土したものの、小破片で図示しない。

21号土壙墓（図版 43-2, 第 89 図）

20号土壙墓の西側に近接し、重複する23号土壙墓よりも後出する。主軸方位はN89° 50' Eをとり、平面形は隅丸長方形。検出面での長さ172cm、幅121cm。床面は長さ151cm、東側の幅106cmで、西側の幅は確認しえなかった。深さは27cmを測る。土壙北西部に重複する土坑があり、ほぼプランを同じくする23号土壙墓と重複するが、この部分には貼り床が施されているので、両者よりも後出することがあきらかである。壙内北側のやや上位から銅錢が出土した。

出土遺物（第 83 図）

磁 器（6） 口縁端部が丸みをもって外反する、にぶい緑色の釉調の青磁碗である。復原口径15.0cm、残存器高3.6cmの大きさ。

銅 錢 脆弱で、約1/4のみ現存する。表面に太めの楷書体で「通」字のみが読めるが、背面側は不明。北宋錢か南宋錢あるいは明錢の可能性もある。

22号土壙墓（図版 43-3, 第 89 図）

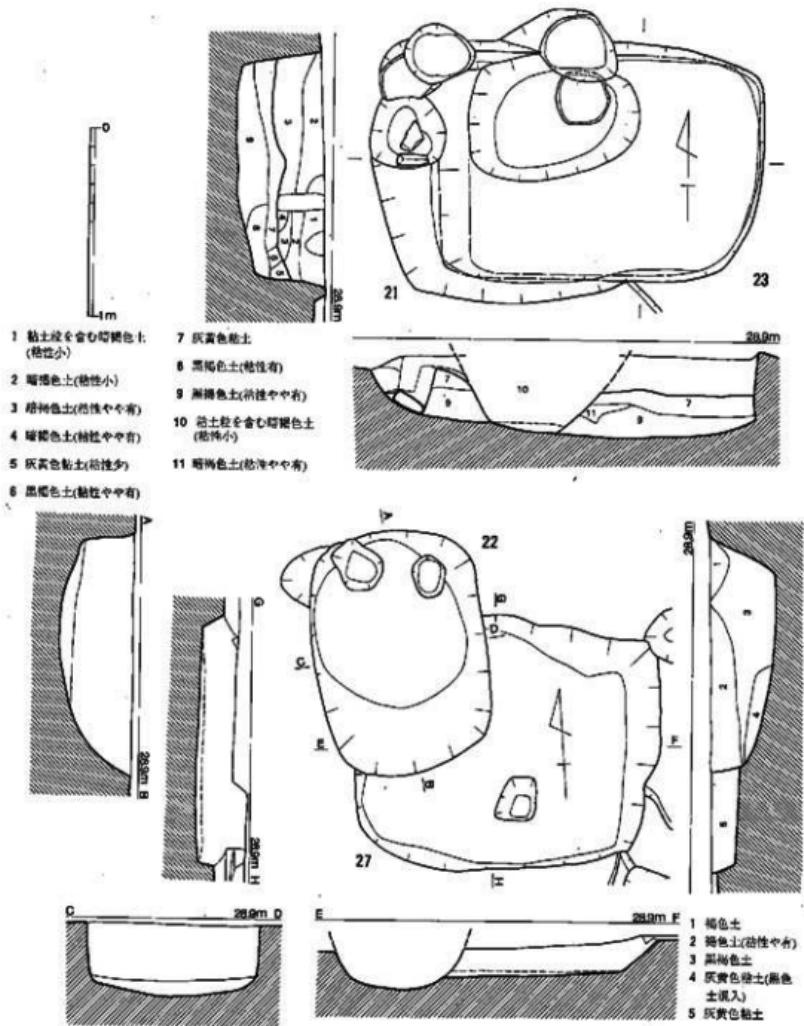
10D区北東寄りにあり、21号土壙墓の約5m北に位置する。27号土壙墓と重複し、これより後出する。主軸方位はN5° Wをとり、平面形は隅丸長方形。検出面での長さ131cm、幅93cm。床面は長さ91cm、幅77cm、深さ39cmを測る。壙内北側に床面を掘り込む柱穴状ピットが2つあるが、土壙墓より後出する。

出土遺物（第 83 図）

土師器（7） 復原口径10.2cm、器高3.4cm、底径8.0cmの大きさの杯で、底面は磨滅している。

23号土壙墓（図版 44-1, 第 89 図）

21号土壙墓と土坑・柱穴状ピットなどによってその大半を失う土壙墓で、主軸方位はN87° Eをとり、平面形は隅丸長方形。検出面での長さ209cm、幅133cm。床面は長さ176cm、幅は東側107cmで、西側109cm。深さは46cmを測る。



第89図 21~23・27号土壤調査実測図 (1/30)

出土遺物（第 83 図）

磁 器 (8) 口縁端部が丸みをもって外反する、やや黄色味を帯びた深緑色の釉調の青磁碗である。復原口径15.0cm、残存器高5.5cmの大きさ。釉はやや厚めに掛かる。

24号土壙墓（図版 44-2, 第 88 図）

10D区中央部にあり、22号土壙墓の約3m西に位置する。主軸方位はN5° Wをとり、平面形は隅丸長方形。検出面での長さ127cm、幅73cm。床面は長さ105cm、幅は北側45cmで、南側50cm。深さは20cmを測る。床面の中央東側に柱穴状ピットが掘り込まれているが後出する可能性が高い。土壙内堆積土には炭化物や焼土などは含まれていない。

出土遺物（第 83 図）

土師質土器 (9) 復原口径26.0cm、残存器高8.2cmの大きさの指鉢で口縁端部は面をなす。外面は縱方向のハケ目が残るものナテ調整で、内面は主に横方向のハケ目調整の後に4条単位の齒歯状の目が付けられている。砂粒・雲母・褐色粒を胎土に含み、うす茶色に焼成されている。

25号土壙墓（図版 44-3, 第 90 図）

6C区南東寄りにあり、土壙墓群のなかではもっとも南西端に相当する。主軸方位をN69° Wにとる、隅丸長方形の平面プランである。検出面での長さ185cm、幅88cm。床面は長さ167cm、幅は東側75cmで、西側70cm。深さは17cmを測る。下層に竪穴住居跡が重複しているものの、土壙墓床面に貼床施設は確認できない。

26号土壙墓（図版 45-1, 第 90 図）

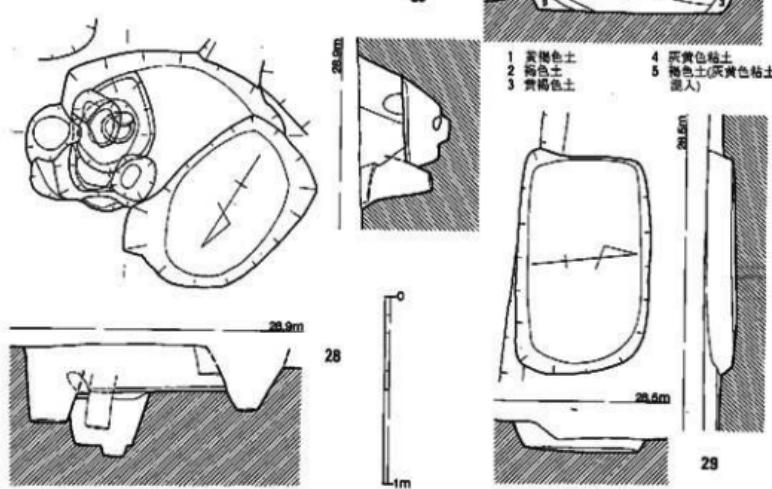
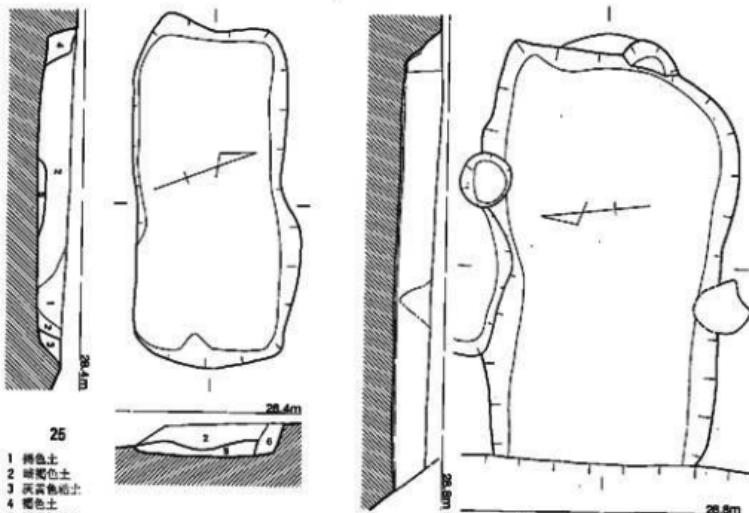
10E区南端部にある。主軸方位を83° 30' Wにとる、隅丸長方形の平面プランだが、西端部は溝2によって失う。検出面での残存長220cm、幅135cm。床面は残存長205cm、幅は東側113cmで、西側95cm。深さは20cmを測る。壙内堆積土に、焼土や炭化物は含まれていない。

27号土壙墓（図版 45-2, 第 89 図）

22号土壙墓によって北西側を失う土壙墓で、主軸方位はN83° 50' Wをとる。隅丸方形に近い平面プランをなしている。検出面での長さ162cm、幅135cm。床面は長さ140cm、幅は西側125cmで、東側95cm。深さは20~28cmを測る。

28号土壙墓（図版 45-3, 第 90 図）

10D区中央部にあり、24号土壙墓の南西側に近接する。柱穴状ピットと搅乱坑によって切ら



第90図 25・26・28・29号土壤剖面測定図 (1/30)

れるが、主軸方位N58° Eをとる、梢円形プランらしい土壙墓である。検出面での長さ120cm、幅85cm。床面は長さ100cm弱、幅は約70cm。深さは25cmを測る。床面下の先行する柱穴状ピットの部分には粘土による貼床が施されている。

29号土壙墓（第90図）

6E区中央部にある。主軸方位N84° Wをとる、平面プランが隅丸長方形の土壙墓である。検出面での長さ117cm、幅70cm。床面は長さ110cm、幅は東側55cmで、西側60cm弱。深さは14cmを測る。

土壙内から土師器片が出土したものの、小破片で図示しない。

30号土壙墓（第91図）

6E区にあり、29号土壙墓の北側に近接する。主軸方位N72° 10' Wをとる、平面プランが長方形の土壙墓で、西端部は柱穴状ピットによって切られる。検出面での長さ125cm、幅70cm。床面は長さ110cm、幅は東側58cmで、西側50cm。深さは19cmを測る。

土壙内から土師器小皿片が出土したものの、小破片で図示しない。

31号土壙墓（第91図）

7E区南西隅にあり、30号土壙墓の北西側約2mの位置にある。主軸方位N77° 10' Wをとる、平面プランが隅丸長方形の土壙墓で、南西部の一部は柱穴状ピットなどに切られる。検出面での長さ189cm、幅132cm。床面は長さ170cm、幅は東側80cmで、西側85cm、中央部110cm強。深さは33cmを測る。

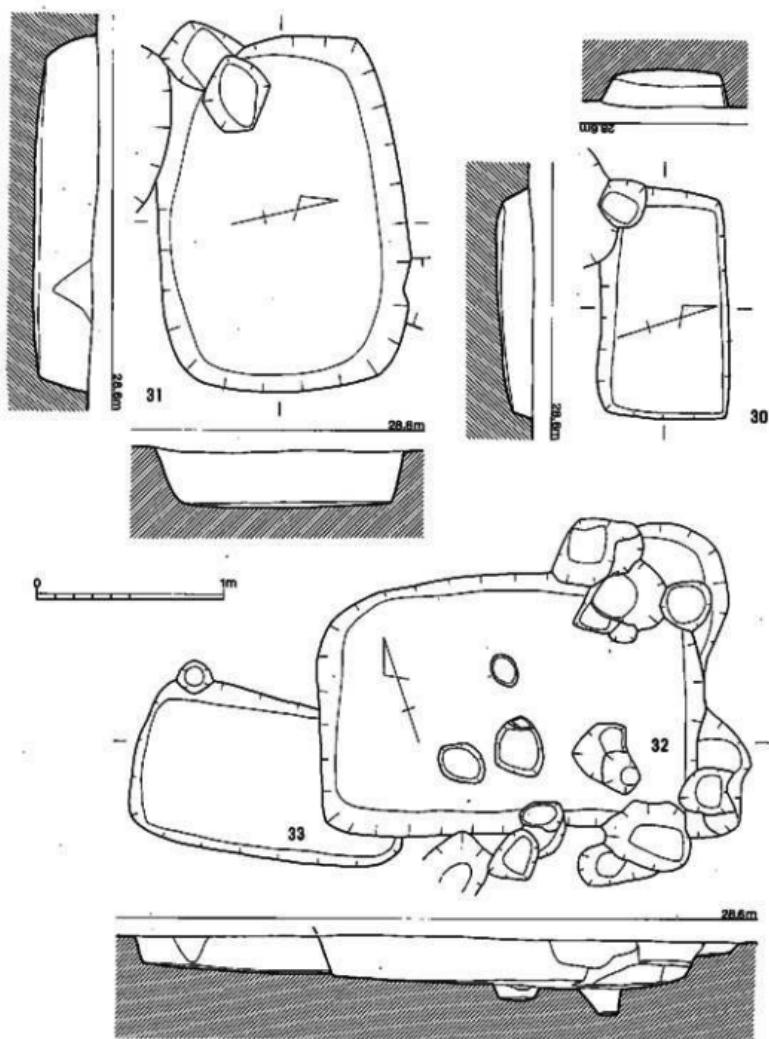
土壙内から土師器小皿片、龍泉窯系らしい青磁片が出土したものの、小破片で図示しない。

32号土壙墓（第91図）

7E区にあり、31号土壙墓の北側に近接する。主軸方位N70° 30' Wをとる、平面プランが隅丸長方形の土壙墓で、いくつかの柱穴状ピットによって切られるが、西側に重複する33号土壙墓より新しい。検出面での長さ208cm、幅137cm。床面は長さ186cm、幅は東側116cmで、西側113cm。深さは25cmを測る。

出土遺物（第83図）

土師器皿（10） 口縁部が直線的に開く皿で、復原口径11.4cm、器高2.8cm、底径5.3cmの大きさ。外底面には糸切り痕が残り、口縁部内外はヨコナデ調整される。胎土に細砂粒・雲母を含み、暗黄褐色に焼成されている。



第91図 30~33号土坡墓実測図 (1/30)

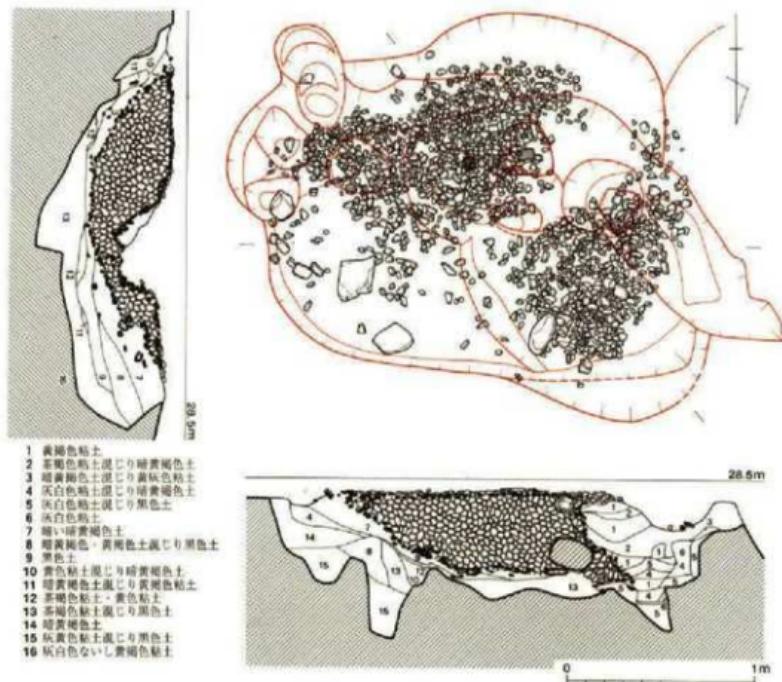
33号土壌墓（第91図）

7E区にあり。32号土壌墓の西側に重複し、切られる。主軸方位N $65^{\circ} 30' W$ をとる。平面プランが隅丸長方形の土壌墓である。検出面での長さ150cm、幅87cm。床面は長さ140cm、幅は東側70cm強で、西側70cm弱。深さは20cmを測る。

出土遺物（第83図）

白磁皿（11） 口縁部を欠く。高台外径4.5cmの大きさで、盤付けは外側が浮く。外面の底部は露胎だが、乳白色味のある灰白色の釉がかかり、重ね焼きの際の盤付けの触れる内底部分の釉は搔き取られている。胎土は黒色粒を含む灰白色を呈し精良である。

3. 集石土壌



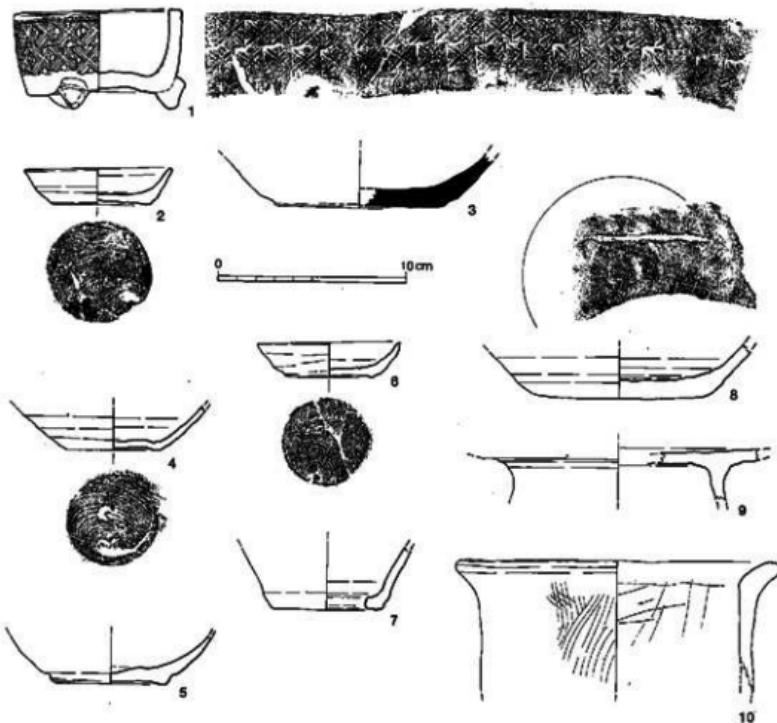
第92図 1号集石土壌実測図 (1/30)

1号集石土壙 (図版 46・47-1, 第 92 図)

8F 区北東寄りにあり、8号溝と重複して、西端部を削られる。主軸方向を N82° 30' W にとる不整規円形プランで、長径260cm + α、短径150~200cm の広さで、土壙内に玉砂利程度の石を主体にし、拳大前後の石や人頭大程の石を含んだ集石が発見された。

集積は上面で約40cm幅の空白が北東-南西方向の帯状にあり、南東側と北西側に分かれた状況で、周辺に大きな石が点在していた。また集石の比較的上部で香炉などの土器が出土している。

集石部分を切断して堆積状況を観察すると、土層図 a-b の右側、即ち土壙内の南西部に石



第 93 図 集石土壙出土土器実測図1 (1/3)

の抜けた堆積土があり、上面で東西90cm、南北70cm程の摺鉢状の穴が掘削された後に、粘土質の土を主体にして埋没していることが分かる。この穴は約50cmの深さで、底面の直径約30cmを有していて、中途に20cm四方程の扁平石も埋まっていた。柱穴として機能したことも考えられよう。

また、土層図c-dでは上面でみられた石の空白部分が溝状に集石を削っていて、本来一つの集石であったことも分かる。

集石は中央部で厚さ45cmを測り、長軸方向170cm、短軸方向120cm規模で丸底様に堆積していて、ほとんど土砂を挟まないが、北西側から北側の周縁部ではやや土砂の混入がみられる。

集石を除去した部分には黒色土が堆積し、周縁部には暗黄褐色土が挟まる。また、黒色土の下には黒色土と灰白色粘土が混じて堆積する。

土壟の周壁は、集石底面ほど緩やかではなく、やや傾斜をもつ。床面は、220cm×120cm程の広さで北東側が浅めであり、東西方向に柱穴状ピットが集中する。土層図に表れるように柱穴状ピットが集石の下側にあって、時期的に先行するが、それぞれ30cm程の深さを有している。また、西側には床面より深く、細長いピットもみられた。

出土遺物（図版56、第93図）

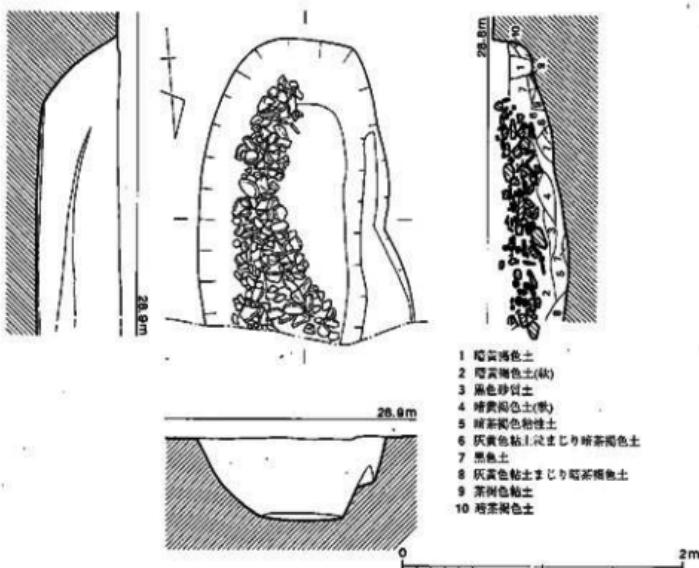
瓦質香炉（1）一部欠損するがほぼ完形である。底部から内窓気味ながらも直立する直口縁の器形で3つ脚が貼り付けられる。口径10.0cm、高さ4.4cm、底径7.7cmの大きさの体部に、太さ1.5cm、高さ0.7~1.0cmの脚が付く。底部はやや上げ底氣味で、ナデ調整される。口縁部はヨコナデ調整され、三本線の斜行する※形印刻文が2段押捺されて外面を巡る。精良な胎土で、黒色ないし暗黄褐色に焼成されているが、口縁端部に煤が付着する。

土器小皿（2）口径7.9cm、器高1.9cm、底径5.5cmの大きさ。外底面には糸切り痕が残り、短く開く口縁部はヨコナデ調整される。精良な胎土で、淡茶褐色に焼成されているが、煤も付着している。

須恵器杯（3）口縁部を欠き、器面も磨滅するが、復原底径9.0cmの底部破片。胎土に繊砂粒を含み、淡灰色に焼成されている。流入品であろう。

2号集石土壙（図版47-2、第94図）

12E区にあり、北側は調査区域外に続く。8号溝の西側肩部に続く傾斜面に掘り込んだ土壙内の東半分で、やや柔らかな暗黄褐色土が堆積した部分にのみ、主に拳大前後の石で集積されている。土壙は、主軸方向をN4°30'Eにとり、長さ210cm+α、幅100~150cmの広さで、深さは60cmである。このうち、集石は幅30~60cm、長さ180cm+α、深さ20~25cmを測るが、やや弧を描くかにみられる。土壙内に時期を決定しうるような遺物は出土しなかつたが、1号集石の例でみた堆積土や、後述する土壙内堆積土よりも、柔らかな堆積土であり後述する5号



第94図 2号集石土壤実測図 (1/40)

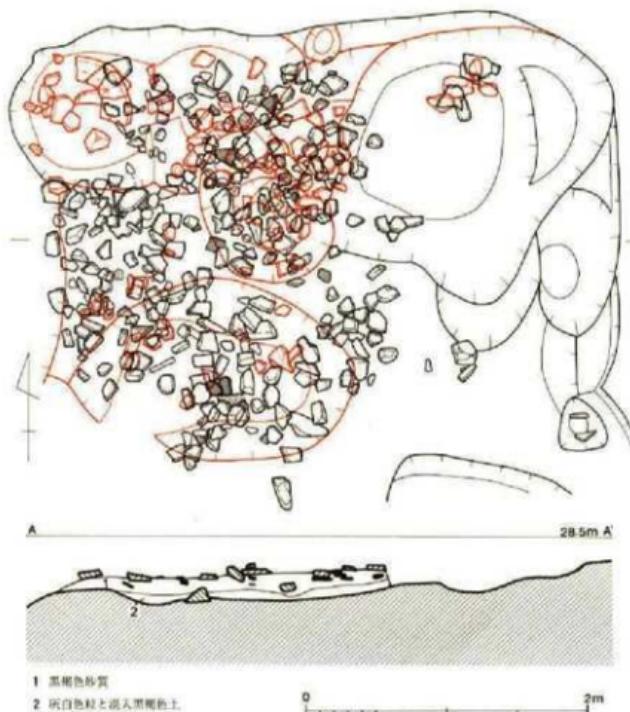
溝堆積土に近い。時期的に下降する可能性が高いであろう。

3号集石土壤 (図版47-3, 第95図)

8E区南西隅にあり、3号溝の北東肩部に相当する。溝の上層堆積土よりも先行するが、下層堆積土とは前後関係を判別しえない。主に拳大から人頭大程の片岩質の塊石が、南北280cm、東西240cmの広さの不整方形に集積している。深さは10~20cmだが、周縁部は浅めである。集石を含む堆積土は黒褐色砂質土で、西側を削られるが、東西400cm+α、南北430cmの隅丸方形形状のプラン内全体にみられた。この土壤の深さは35cm前後で、床面には、浅い5つの梢円形プラン小土壤状落ち込みがあつて凹凸をみせる。

出土遺物 (図版56・58, 第93図)

土師器皿 (4~7) 4~5は、口縁部を欠くが若干内嚙気味に開く皿。外底面は糸切り痕で、口縁面はヨコナデ調整される。底径5.0cm・6.0cmの大きさ。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒などを含み、淡橙色に焼成されている。6は、口縁部が内嚙気味に開く小皿。ヨコナデ調整で端部が薄く整えられ、外底面は糸切り痕が明瞭に残る。口径7.6cm、器高1.9cm、底径4.8cmの大



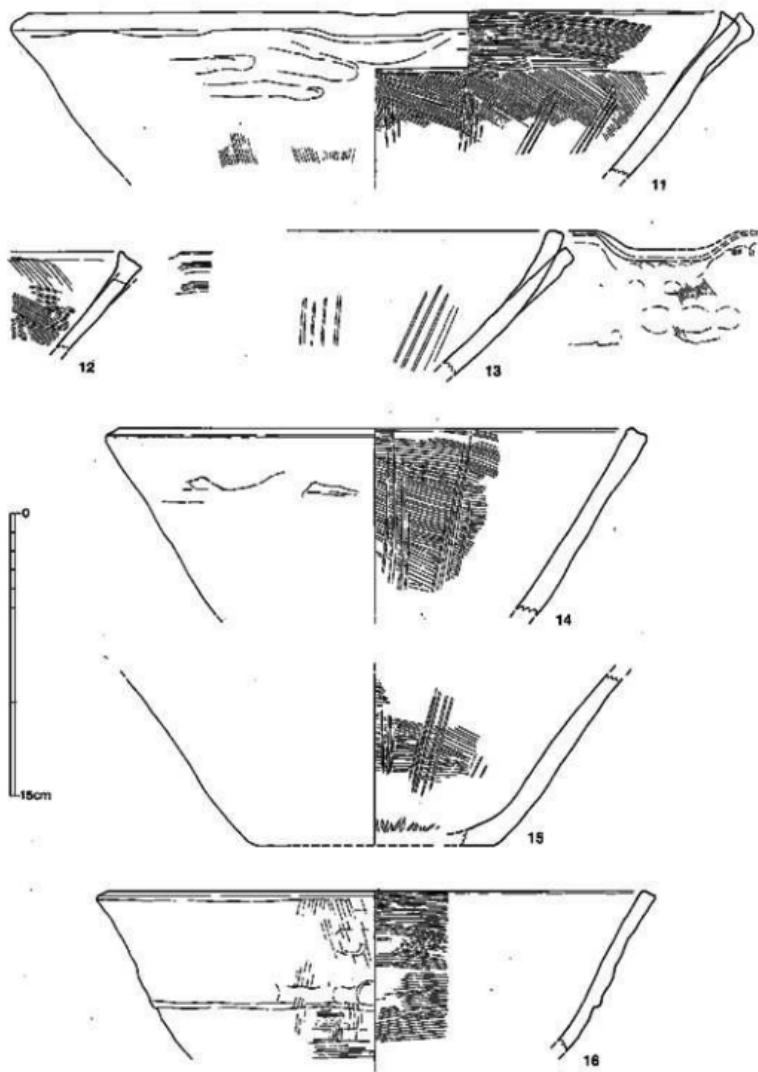
第95図 3号集石土壌実測図(1/40)

きさで、胎土に微細砂・雲母を含み、淡橙色に焼成されている。7は口縁端部を欠くが、ヨコナデ調整される口縁部が直線的に伸びて深さをもつものの、あまり開かない皿で、底面に焼成前の穿孔がある。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み、橙褐色に焼成されている。

土師器杯 (8) 口縁部を欠くが、底径9.2cmの大きさで、外底面はヘラ切りされて、口縁側はヨコナデ調整。内底面に、単直線のヘラ記号らしい痕と、「中」字の可能性のあるヘラ書き文字がある。胎土に雲母・赤褐色粒・細砂粒を含み、黄橙色に焼成されている。

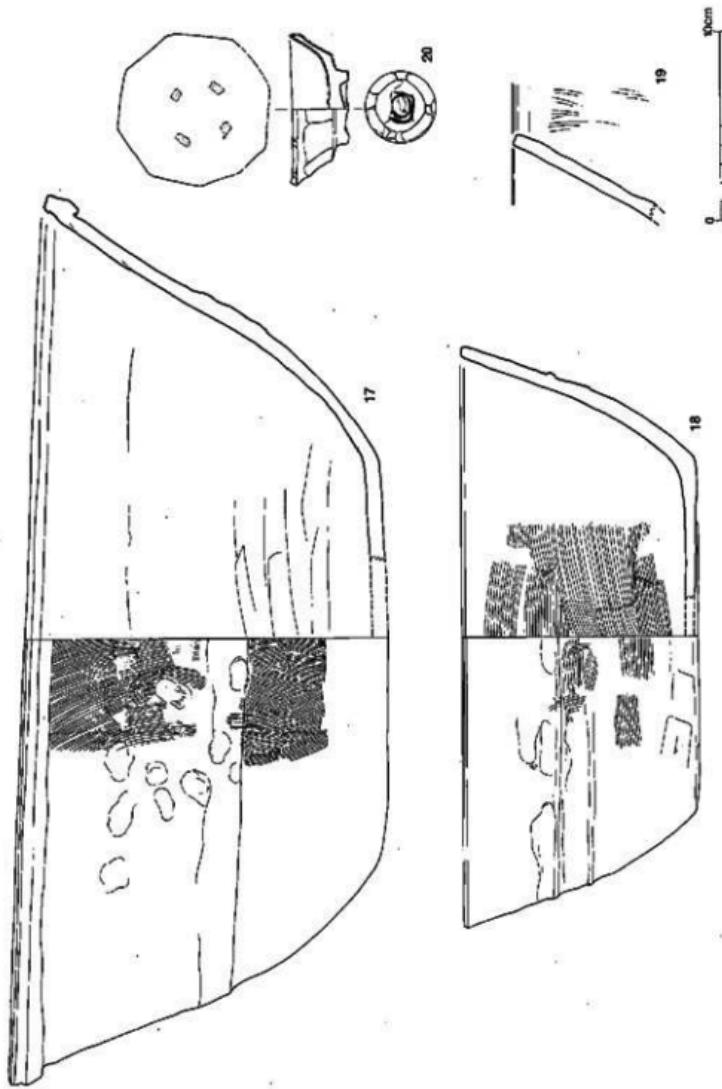
土師器托 (9) 全体の大きさや器形は不明だが、脚の付く底部破片で、托の可能性がある。内外面ともにヨコナデ調整されている。胎土に赤褐色粒を含み、淡橙色に焼成されている。

土師器甕 (10) 口縁部が肥厚して短く外反する小形甕で、胴部は頸部からほとんど膨れない。



第96図 集石土坡岸土土巣実測図 2 (1/3)

第97圖 素石土器出土土器測量圖 3 (1/3)



復原口径17.4cmの大きさで、口縁部はヨコナデ調整、胴部外面はハケ目調整、胴部内面はヘラ削りされている。胎土に雲母・赤褐色粒・角閃石を含み、淡茶褐色に焼成されている。

土師質摺鉢（11～15） 11・12は口縁部が直線的に開き、端部でやや肥厚しながら、口唇内面をつまみ上げる器形の摺鉢で、片口が付く。外面はハケ目の痕跡を残すがナデ調整され、内面はハケ目調整の後に御歯状の目が刻まれている。雲母・細砂粒を含み、淡橙色ないし灰色に焼成されている。土師質より、むしろ瓦質に近い。

13は口縁部が直線的に開くがほとんど肥厚せず、端部がやや内側する。口縁部に付く片口部分は、内側せずに直に伸びる。14は口縁部が直線的に開き、端部はほとんど肥厚せずに、口唇内面をややつまみ上げる器形の摺鉢。復原口径29.0cm、残存器高9.9cmの大きさ。また68は口縁端部を欠くが、直線的に開く摺鉢の底部破片で、復原底径12.6cm、残存器高9.0cmの大きさ。13の外面にはハケ目の痕跡があるものの14・15の外面にはみられない。いずれも、内面には4条単位の目が刻まれていて、胎土に雲母・赤褐色粒・細砂粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。

土師質鍋（16～19） 16は口縁部が直線的に開き、端部で肥厚しないで僅かに外反する器形の鍋。口縁端面は平らに整えられる。復原口径30.0cm、残存器高8.5cmの大きさ。口縁の約6cm下に凸帶条の段がある。胎土に雲母・細砂粒を含み、暗橙色に焼成されているが、外面には煤が付着している。

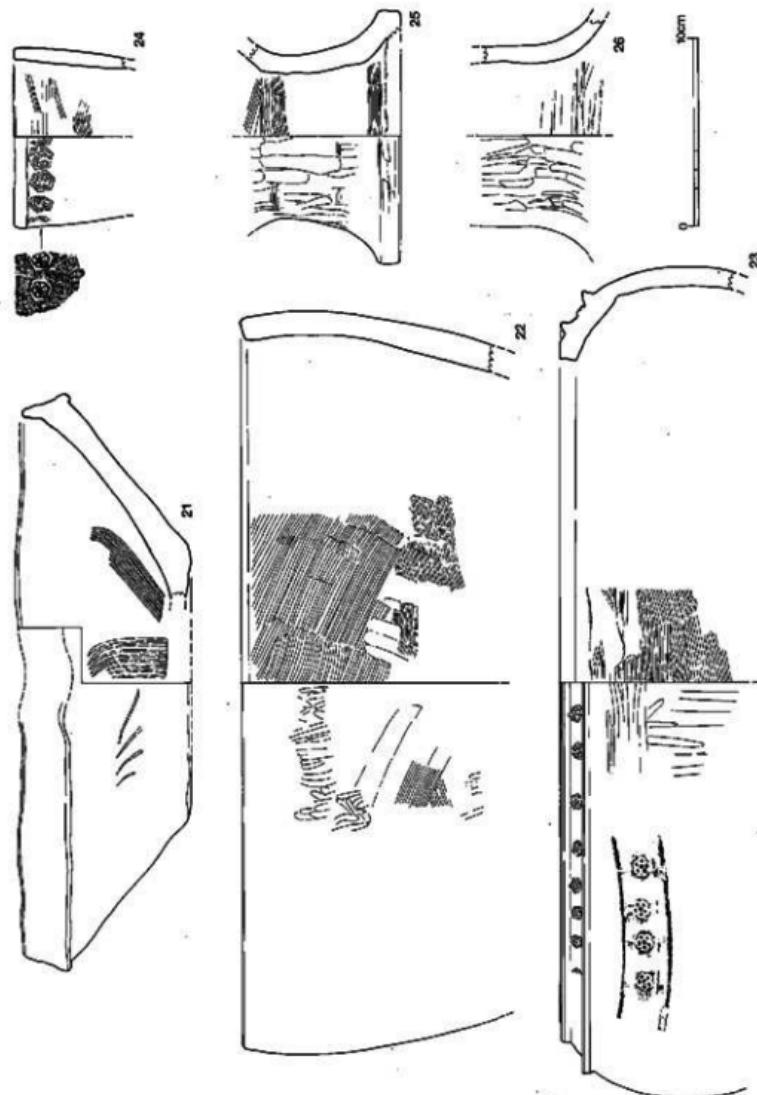
18・19も口縁部が直線的に開き、端部で肥厚しないで端面を平らに整えるが、外反しない。18は復原口径31cm、器高12.5cm、底径19.0cmの大きさで、凸帶条の段が約5cm下にある。外面にハケ目が残り、内面はハケ目調整される。19は口径を復原しえないものの段は約8cm下にある。外面にハケ目が残るもの内面にはみられない。胎土に雲母・細砂粒を含み、暗橙色に焼成されている。18では内面に焦げ付き、外面に煤が付着している。

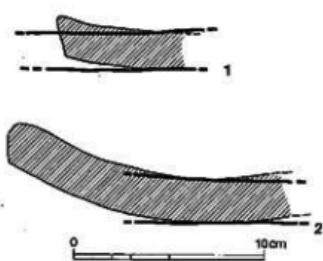
17は口縁部が直線的に開き、僅かに外反気味だが、端部は折疊んだように肥厚して外側に垂れ気味になっている。また口唇内面は僅かにつまみ上げられる。底部はやや丸みのある平底である。口径47.2cm、器高20.4cm、底径約20.0cmの大きさで、凸帶条の段は約12cm下にある。外面はハケ目調整されるが、口縁端部と、段の部分および底部はヨコナデないしナデ調整される。内面はナデ調整だが、胴下半に板状工具によるナデの痕跡もみられる。胎土に細砂粒・雲母を含み、茶褐色に焼成されているが、外面に煤、内底面に焦げ付きがみられる。

白磁皿（20） 口径8.0cm、器高3.1cm、高台外径3.8cmの大きさの、面取り輪花皿である。輪花の面は均一でなく9面ずつだが、高台の削りは4面である。精良な乳灰白色の胎土で、黄色味を帯びた乳白色の釉がかかり、高台の削り面の間から高台内部まで釉が垂れ、内底面には重ね焼きの痕跡が残る。なお、外底の高台内面には、丸と四角形が墨書きされている。

陶器摺鉢（21） 復原口径29.2cm、口縁外径30.8cm、器高9.3cm、底径15.0cmの大きさで、

圖 96 圖 集石土槨出土器物測量圖 4 (1/3)





第99図 球石土塙出土瓦実測図(1/3)

口縁部は直線的に開き、内側気味に肥厚する端部は、上下に拡張して外側を平らに整えられる。浅めの鉢だが、外底面は未調整でやや上げ底を呈する。体部はヨコナデないしナデ調整されるが、内面に8条単位の櫛歯状の目が刻まれる。胎土に若干砂粒を含み、灰褐色ないし赤褐色で焼成されている。備前系の摺鉢であろう。

瓦質火鉢(22・23) 22はやや内側する直口縁の火鉢で、復原口径39.0cm、胴最大径39.7cm、残存器高13.6cmの大きさ。口縁端部は肥厚せずに上面を平らに整えられる。外面はハケ目で残る雑なヘラ磨き、内面はハケ目調整される。胎土に雲母と砂粒を若干含み、暗黄灰色ないし黒色で焼成されている。

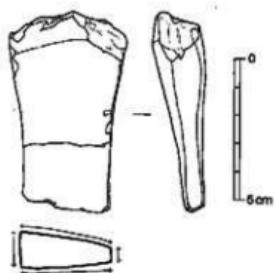
23はやや器壁が薄く、口縁部は彫れた洞部からそのまま内側する。口縁端部は内面・上面とともに平らに整えられ、外面に巡る2条の縦状凸凹間に梅花形の印刻文が押捺される。体部外面はヘラ磨き、内面はハケ目調整され、口縁部はヨコナデ調整。復原口径内径34.0cm、胴最大径44.0cmの大きさ。胎土に雲母と砂粒を若干含み、灰白色ないし黒色で焼成されている。

瓦質土器(24~26) 24は復原口径9.6cm、残存器高6.0cmの口縁部破片で、僅かに聞く直口縁の筒状である。平らな口縁端部の下に巡る1条の細い沈線に沿って、亀甲形の印刻文が押捺される。内面にハケ目が残り、外面はヨコナデ調整らしい。

25は鼓形に上下が外反して開く、底部あるいは幅らしい破片である。復原幅径14.4cmで、くびれ部径8.6cm。下端の内面側が破損しているが、L字形の縁であろうか。外面はヘラ磨き、内面はハケ目とナデ調整される。26も同様な反り方の破片だが、25とともに全体の形は不明。瓶であろうか。雲母を含むが、精良な胎土で、暗灰色で焼成されている。

瓦(第99図) いずれも平瓦の縁部破片である。緩やかに弯曲するが、外面は磨滅して調整手法は不明。内面はナデられて、縁はヘラ削りされている。胎土に砂粒・雲母・角閃石を含み、暗灰褐色ないし灰色で焼成されている。

石製品(第100図) 凝灰岩製の砥石で、淡めの黄褐色を呈する。かなり使い込まれて、使用面の4面とも弯曲する。長さ7.1cm、幅4.2cm、厚さ1.9cmを測る。



第100図 球石土塙出土石製品実測図(1/2)

4. 土 墓

総計150基の土壙が発見された。1号から164号の番号を付したが、このうち23・25・33・39・43・45・46・54・82・83・98・122・127・156号は欠番である。なお、土壙のうち、調査中に土壙墓に変更したものも欠番とした。残余の土壙にも土壙墓の可能性を否定しえない例もある。

1号土壙（第102図）

11E区南端にある、主軸方向をN $30^{\circ} 30'$ Wにとる不整格円形の土壙。長さ135cm、幅110cm、深さ25cmを測る。

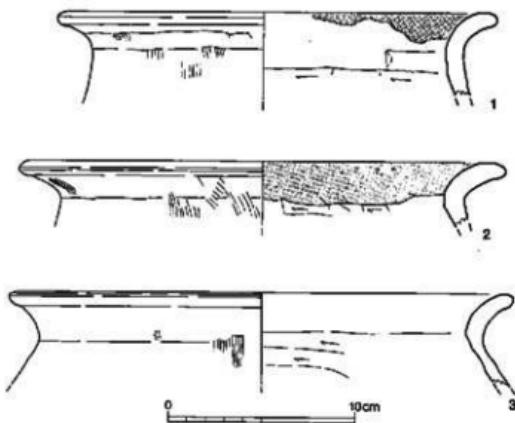
2号土壙

10E区北西隅と11E区南西隅にかけて位置する。東側の輪郭は確認できたが、西側で8号溝と重複して不明瞭であった。不整形プランで南北165cm、東西40cm+αの規模である。

平瓦片が1点出土したが、小破片のため図示しない。

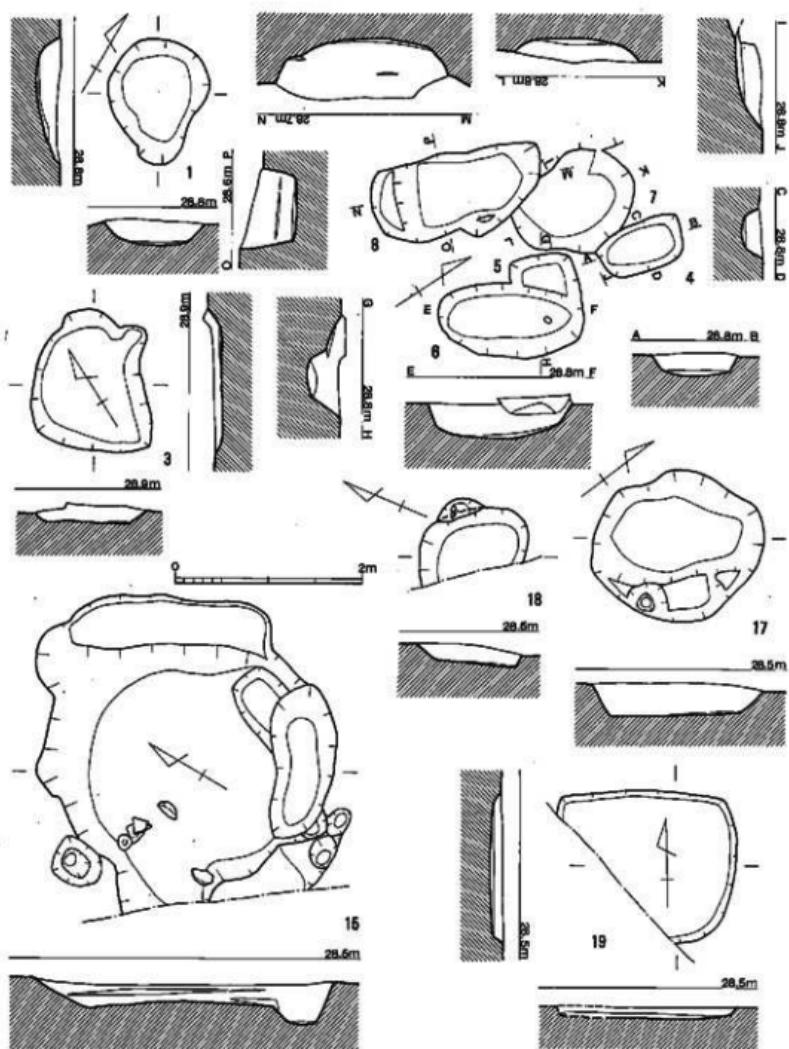
3号土壙（第102図）

11E区南寄りで、1号土壙の1.5m東側の位置にある。主軸方向をN $32^{\circ} 10'$ Eにとる不整形プランの土壙。長さ149cm、幅125cm、深さ17cmを測る。



第101図 土壙出土土器実測図1 (1/3)

出土遺物（第101図）
土器器種（1～3）いずれも口縁部が僅かに肥厚して外反する甕で、体部側の内外面に煤状の炭化物が付着し、1・2は口縁内面側に丹塗りと思われる赤色顔料の付着もみられる。胎土に雲母・角閃石・赤褐色鉱を含み、焼成はやや良好。それぞれの復原口径は25.0cm。



第102図 土壌実測図1 (1/60)

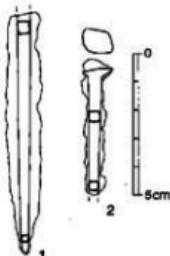
26.0cm・27.0cm。糸切り底の土師器小皿の小破片も出土した。

4号土壌（第102図）

1号土壌の2m程南側に位置する。主軸方向をN15° 20' Eにとる、楕円形プランの土壌である。検出面での長さ92cm、幅52cm、深さ22cmを測る。

出土遺物

糸切り底の土師器小皿片が出土したが、小破片で図示しえない。



第103図 土壌出土鉄
製品実測図1 (1/2)

5号土壌（第102図）

4号土壌の0.3m程南側に位置し、6号土壌と1号溝に東側を切られる。主軸方向をN67° Wにとる、隅丸方形？プランの土壌である。検出面での残存長50cm、幅70cm、深さ20cmを測る。

出土遺物（図版63、第103図）

鉄製品(1・2) 1は端部を欠くが残存長8.5cm、幅・厚さ0.4cm程度で片方が尖り氣味になる棒状を呈している。2は先端側を欠くが残存長4.5cmで、1cm四方程の頭部をもつ角釘。体部の幅・厚さは0.3~0.4cmを測る。

6号土壌（第102図）

4号土壌の0.4m程南側に位置し、5号土壌を切るが、1号溝によって上部を削られている。主軸方向をN33° 30' Eにとる、楕円形プランの土壌である。検出面での長さ155cm、幅78cm、深さ36cmを測る。

出土遺物

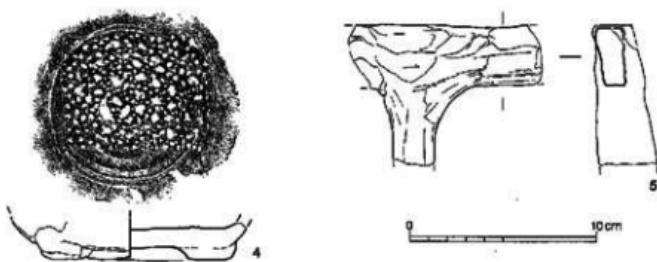
土師器杯の小破片が出土したが、図示しえない。

7号土壌（第102図）

4号土壌の西側に隣接し、8号土壌と8号溝によって西側を切られている。主軸方向N6° Eの、楕円形プラン土壌である。検出面での長さ135cm、残存幅110cm、深さ26cmを測る。

出土遺物（図版57、第101図）

土師器(4・5) 4は口縁部を欠くが、底径11.0cmの糸切り底の外底面に3つの突起を貼り付けて脚付きにした杯。内底面には、細い沈線で8cm×6.5cm程度の区画を描き、杯内をヘラ先のような物で突いて凸凹を施している。おろし皿の機能をもたせたものであろうか。雲母・褐色粒



第104図 土塼出土土器実測図2 (1/3)

を含む精良な胎土で、にぶい黄橙色に焼成されている。

5は鉢の脚台部破片であろうか。雲母・細砂粒を含む胎土で、暗橙色に焼成されている。

8号土塼 (第102図)

7号土塼の南西側に重複し、8号溝によって西側を切られている。主軸方向N23° Eの、梢円形プラン土塼である。検出面での長さ184cm、残存幅85cm、深さ64cmを測る。

出土遺物

底径7.5cm程の土師器小皿らしい糸切りの底部破片などが出土したが、図示しえない。

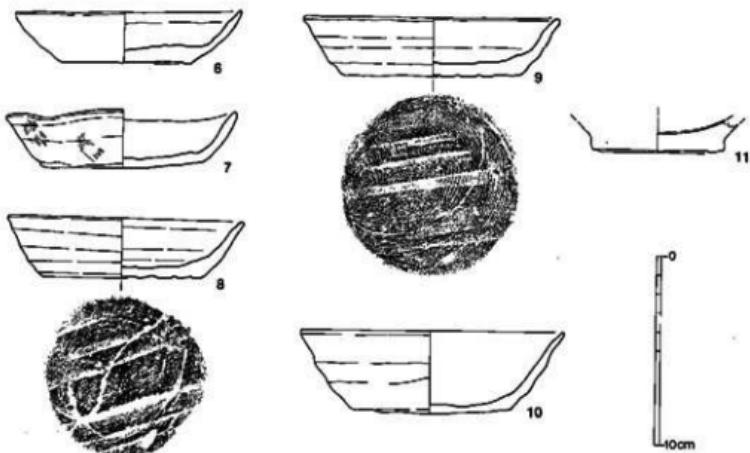
9号土塼 (第107図)

10E区中央部にあり、9号溝に上部を削られる。主軸方向N39° 30' Eをとり、検出面での長さ350cm、幅130cmで、深さ52cm。南西寄りが深く、床面の長さは160cmである。

出土遺物 (図版57、第105図)

土師器杯 (6~10) 磨滅の進む6以外はいずれも外底面を糸切り離しされ、板状圧痕が付けられ、8・9の圧痕が明瞭である。口縁部はヨコナデ調整されている。6は復原口径12.0cm、器高2.8cm、底径6.8cmの大きさ。雲母を含んだ胎土で、黄橙色に焼成されている。7は口径12.3cm、器高3.1cm、底径8.5cmの大きさ。雲母・赤褐色粒を含んだ胎土で、淡明褐色に焼成されている。8は口径12.6cm、器高3.1cm、底径8.4cmの大きさ。砂粒・赤褐色粒を含んだ胎土で、黄橙色に焼成されている。9は復原口径13.6cm、器高3.1cm、底径9.3cmの大きさ。雲母・赤褐色粒を含んだ胎土で、黄褐色に焼成されている。10は復原口径14.0cm、器高4.5cm、底径8.6cmの大きさ。赤褐色粒を含んだ胎土で、橙色に焼成されている。

白磁碗 (11) 底部破片で、外面の口縁部側面と内面に白灰色の釉がみられる。底部は厚いが、高台は極めて低い。



第105図 土壌出土土器実測図3 (1/3)

10号土壤 (第108図)

10D区北西隅にあり、11号土壤・131号土壤に切られる。直径260cm前後、深さ20cm程の落ち込み状を呈していて、南東側縁の上部に10個程の円錐の集石がみられる。

出土遺物 (図版57・58、第106・109図)

磁器・土師器などの土器片と、砥石、総量823gの鉄滓が出土している。

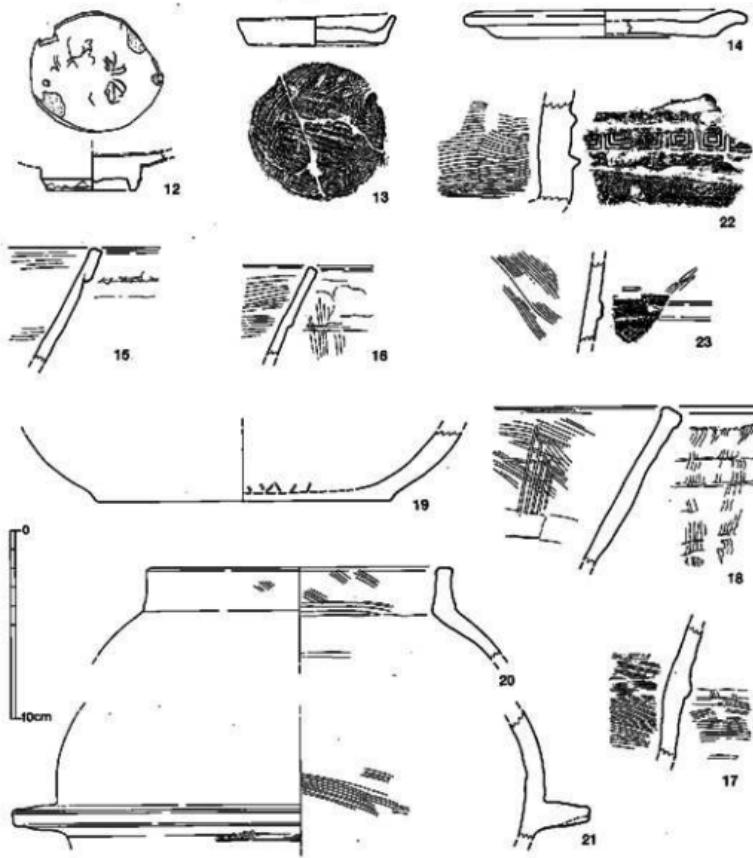
青磁碗 (12) 龍泉窯系青磁碗の底部破片で、内底面に花文がみられる。高台径5.4cmの大きさである。

土師器小皿 (13) 糸切り底の小皿で、復原口径8.4cm、底径7.3cm、器高1.5cmの大きさで、外底面には板状圧痕がみられる。赤褐色粒・雲母を含む胎土で、黄橙色に焼成されている。

土師器皿 (14) 器面が風化して調整は分からぬが、復原口径15.0cm、器高1.4cmの大きさで、細砂粒・雲母・赤褐色粒を含む胎土で、暗灰褐色に焼成されている。

土師器鍋 (15~17) 口縁下に段を有するもの。15は折り返して肥厚したような形状で、外面ナデ調整、内面ハケ目調整である。16は内外面共にハケ目調整され、外面の段より下はハケ目が明瞭で、口縁部はヨコナデないしナデ調整される。胎土に雲母・砂粒を含み暗橙色に焼成されている。内外面に煤が付着している。17も鍋であろうか。外面の段より上側はナデ調整されるが、下側と内面は横方向にハケ目調整される。内外面共に煤が付着している。

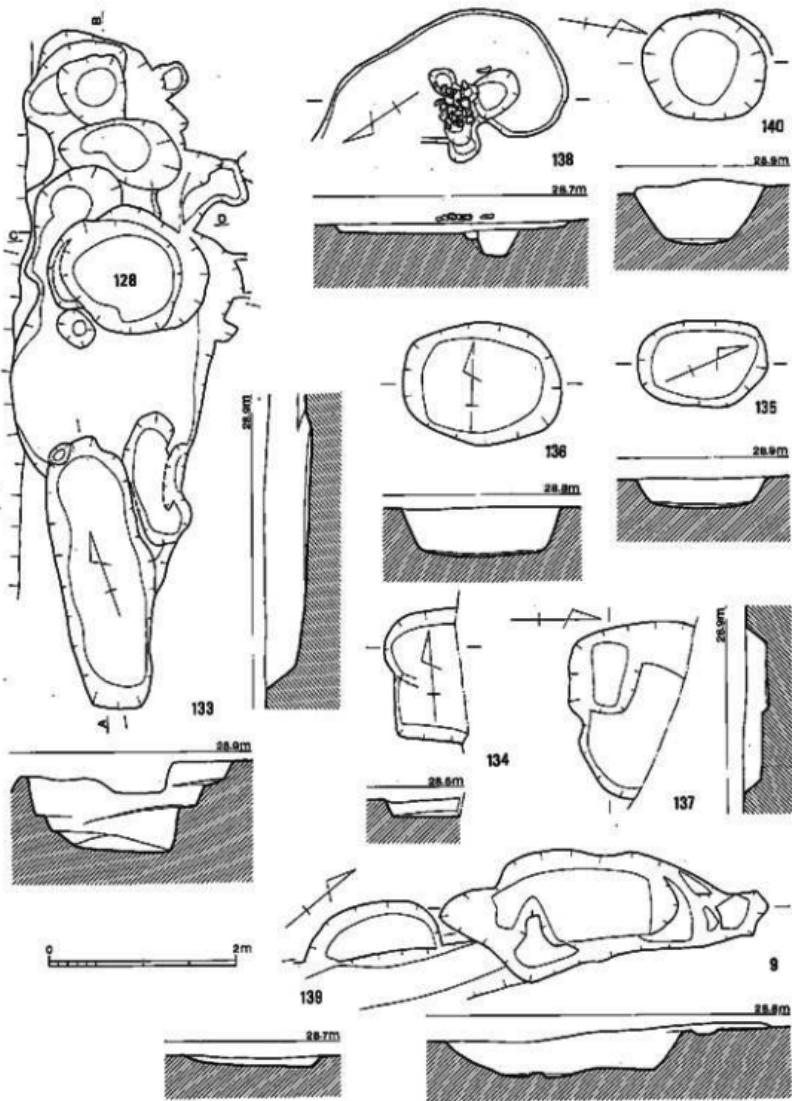
瓦質摺鉢 (18・19) 18は口縁がやや肥厚し、ナデ調整されるが、外面に繼ぎ目がめだつ。



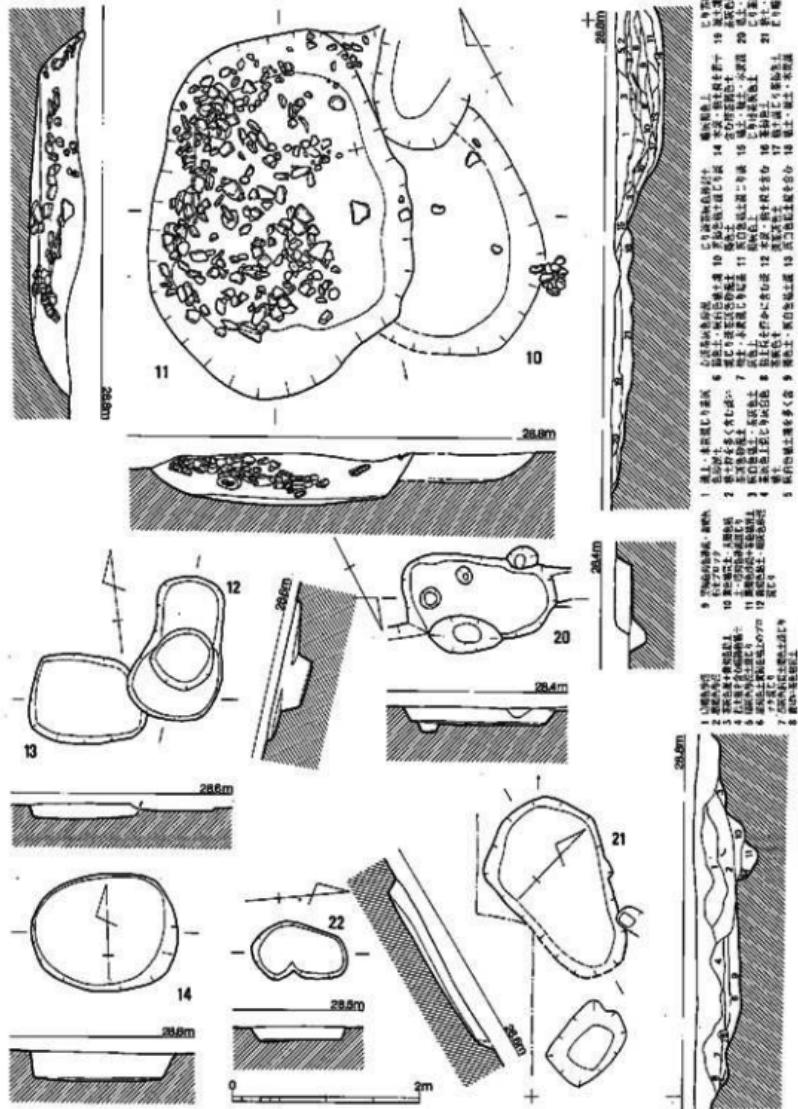
第106図 土壙出土土器実測図4 (1/3)

内面はハケ目調整され、5条単位の目が刻まれる。粗砂粒や雲母を含む胎土で灰色に焼成されている。19は底部破片で、剥落した内底面に目の痕跡がみられる。粗砂粒や雲母を含む胎土で青灰色に焼成されている。

湯釜(20・21) 潛最大径部分に錐状凸帯が付き、内寄した肩部から口縁が直立する器形で、器面はハケ目調整の後ナデ調整される。細砂粒・雲母・赤褐色粒を含む胎土で、22は黒灰色ないし暗灰色、21は暗橙色に焼成されている。



第107図 土壌実測図2 (1/60)



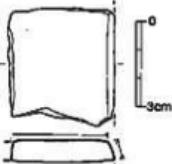
第108図 土壌実測図3 (1/60)

火鉢 (22・23) 火鉢ないし火舍の脇部破片であろう。

凸帯の巡る外側はヨコナデないしヘラ磨き調整され凸帯間に連續押捺文様がみられる。

石製品 (第109図) 肌理の細かな砂岩製の砥石片で、厚さ0.8cmと薄い。

鉄滓 総量823gの鉄滓が出土した。



第109図 土壙出土石製品
実測図1 (1/2)

11号土壙 (第108図)

10E区と11E区にかけての東端にあり、10号土壙・131号土壙・2号溝を切る。検出面では長さ391cm、幅281cmの楕円形プランを呈していて、深さ58cmの床面は270cm×210cm程の広さである。主軸方向N28°30' 午をとり、西側を中心として集石がみられるものの、意図的な配置ではないようである。なお集石は床面より浮いた位置でみられる。このため出土遺物のうち、集石より下から出土したものには下層出土遺物として区別した。北東隅部の上層から硯(図版)が、南側縁の上層から石臼が出土している。

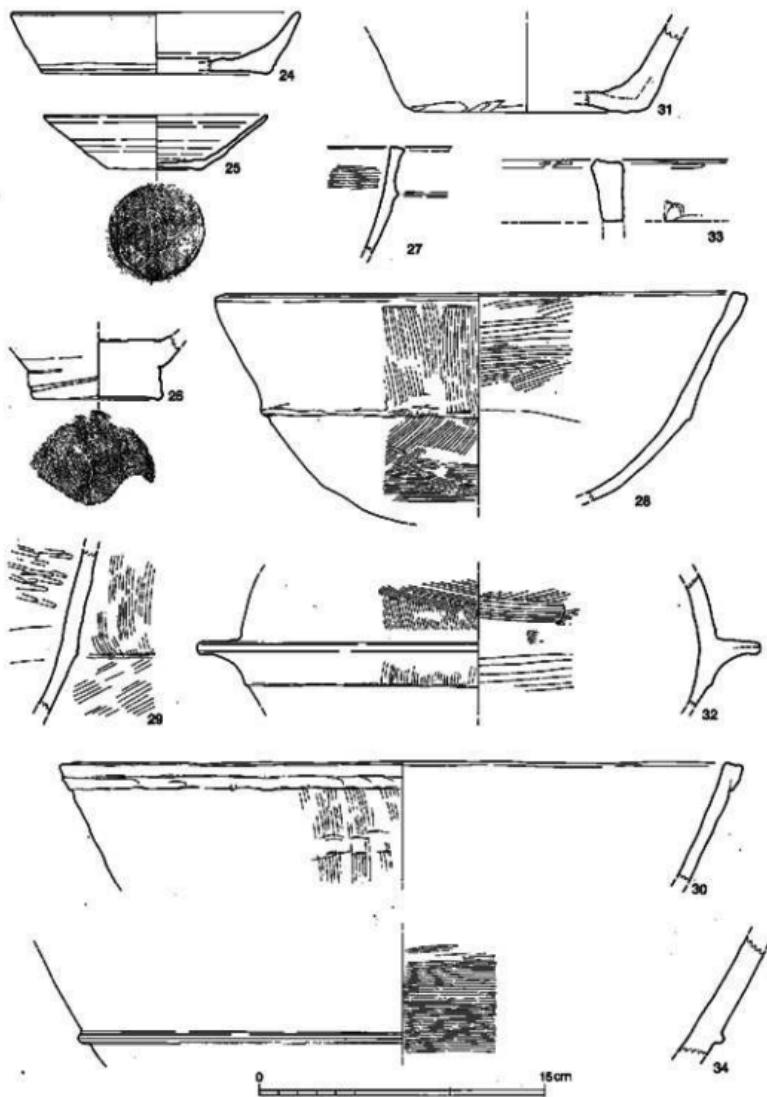
上層出土遺物 (図版57・64、第110・111図)

土師器杯 (24・25) 24は復原口径15.2cm、器高3.1cm、底径12.1cmの大きさの杯。25は復原口径11.8cm、器高2.8cm、底径5.0cmの大きさの糸切り底の皿。砂粒・赤褐色粒を胎土に含み黄褐色に焼成されている。26は外底面に糸切り離し痕をもつ厚みのある底部で、復原外径は7.0cm前後。内面および体部外側は磨滅して調整手法はわからないが、底部はナデ絞ったような痕跡がみられる。砂粒・雲母・角閃石を胎土に含み、淡茶褐色に焼成されている。

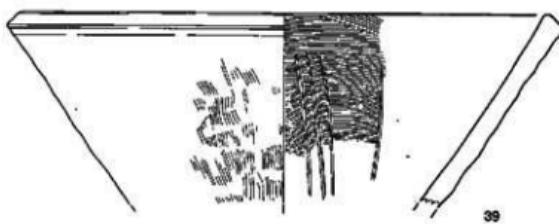
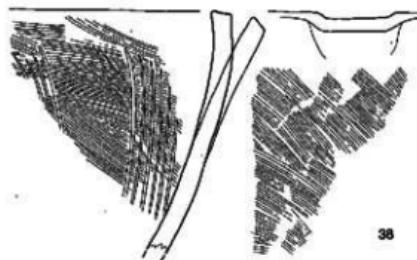
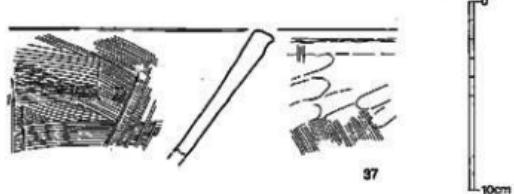
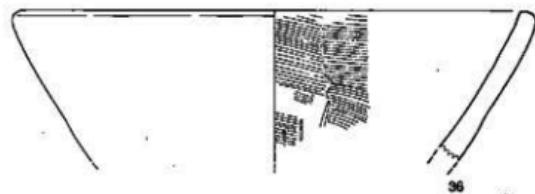
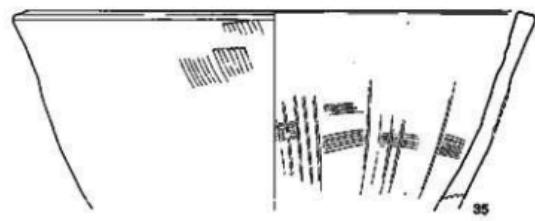
土師質鍋 (27~30) 27は口縁部が外側に肥厚して、三角凸帯状をなすもので、口縁端部は上面が平らにつくられる。内面の上部には横方向のハケ目がみられる。外側には煤が付着している。砂粒・雲母を胎土に含み、橙色に焼成されている。

28は復原口径28.0cm、残存高11.9cmの大きさの鍋で、口縁部は僅かに内彎気味に立ち上がる。脇部に凸帯状の段が巡り、脇下半は丸みをもって底部に向かう。外側の凸帯状の段より上は縦方向のハケ目調整、下半は横方向及び斜め方向にハケ目調整されていて、段の部分はヨコナデ調整が加わる。内面の上部は主に横方向のハケ目調整、下位はナデ調整されている。細砂・雲母を胎土に含み橙色に焼成されているが、外側には煤、内面には焦げ付きがみとめられる。29は同様の脇部に凸帯状の段を有する破片だが、内面の調整はヘラ磨き調整のようである。胎土や色調はよく似ている。

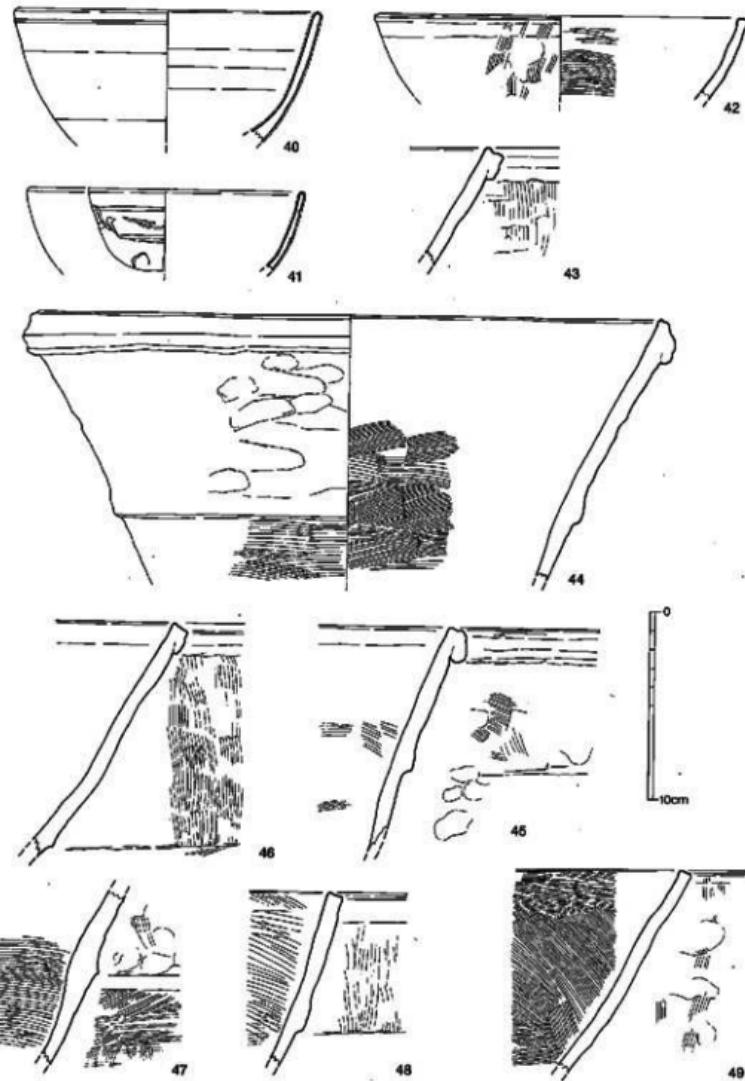
30は復原口径36.0cm、残存高6.4cmの口縁部破片で、口縁端部は外側に折り疊んだように肥厚し、端部上面は平らにつくられている。外側は縦方向のハケ目調整の後にナデが加わる。細砂・雲母を胎土に含み橙色に焼成されているが、外側には煤が付着している。



第110図 土壙出土土器実測図 5 (1/3)



第111図 土壠出土器実測図6 (1/3)



第112図 土塹出土土器実測図 7 (1/3)

土師質摺鉢 (35~39) 35~39は、土師質の摺鉢である。35は口縁部付近が僅かにくびれ気味に広がり、端部上面がナデられて窪む。外面は風化し剥離が進んでいるもののハケ目が一部にみられる。内面も風化するが横方向のハケ目の後に櫛齒状の目が刻まれる。細砂・雲母・角閃石を胎土に含み黄灰色に焼成されている。復原口径28.0cmの大きさ。37も同様な特徴を有しているが、口縁部外面に指痕痕が残る。36は口縁部が内側気味に広がり端部も丸味がある。外面はナデ調整、内面は横方向のハケ目の後に櫛齒状の目が刻まれる。細砂・雲母・赤褐色粒を胎土に含み黄灰色に焼成されている。

38・39は、瓦質の摺鉢である。口縁部は直線的に開き、端部上面はナデで僅かに窪む。外面はハケ目の後ナデられ、内面はハケ目の後に櫛齒状の目が刻まれる。

38は片口部分の破片で、39は復原口径29.8cm、残存器高10.1cmの大きさ。胎土に雲母を若干含み、淡い灰色に焼成されている。

陶器鉢 (31) 備前系の鉢底部破片で、復原底径は11.5cmの大きさ。底部付近はケズリ調整がみられる。砂粒をほとんど含まない胎土で、褐色を呈している。

湯釜 (32) 鋼状凸帯を有する胴部破片である。ハケ目調整の後にヨコナデ調整されて貼り付けられる凸帯部分は復原外径28.6cmを測る大きさで、少し下に凸帯状の段が巡る。内巻する上部は内外面共に主に横方向にハケ目調整される。

砂粒をほとんど含まない精良な胎土で暗灰色を呈しているが、外面全体に煤が付着している。

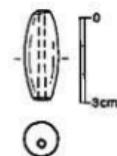
火鉢 (33~34) 33は直立気味に立ち上がる口縁部破片で、透かし部分であろう。

34は胴下半部の破片で細く丸い凸帯が巡る。内面にはハケ目がみられ、ナデ調整も加わる。

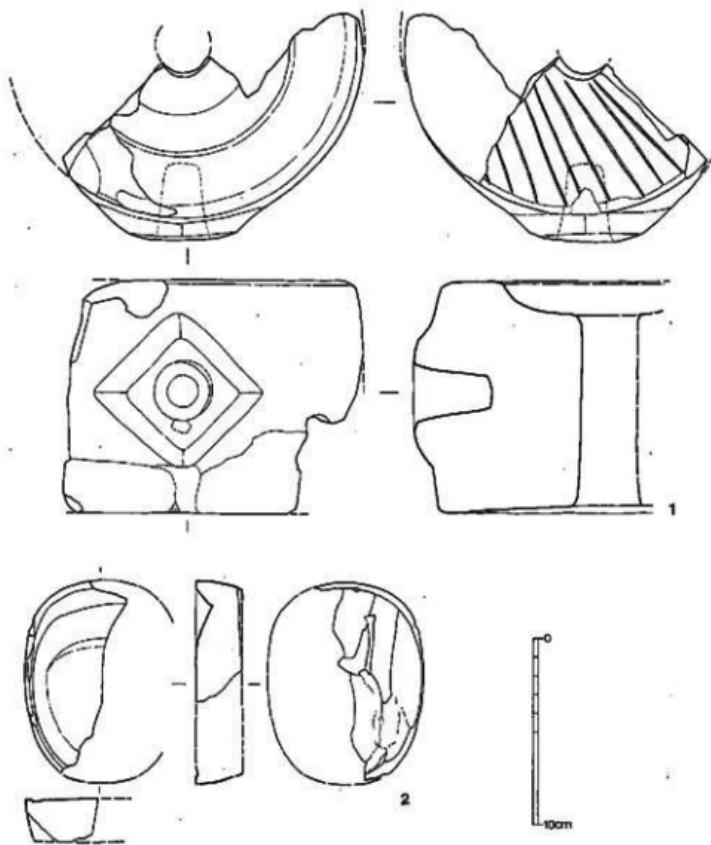
胎土に砂粒と雲母・赤褐色粒を若干含み、黄灰色ないし暗灰色を呈している。

土製品 (第 113 図) 長さ3.2cm、直径1.3cmの管状土錘で、重さ3.8gを測る。胎土に砂粒を含むが、淡い灰黄色に焼成されている。

石製品 (第 114 図) 1は、花崗岩質の石材を用いた石臼の上臼である。1/3ほどの破片だが、芯棒孔を確認でき、回し棒用の差し込み孔の部分はよく残っている。復原外径は19.0cm前後で、高さ12.4cmの大きさ。差し込み孔の施設は高さ・幅ともに8.0cmほどの菱形に1.5cmほど突出させた中央に穿たれて、4.0cmほどの奥行きで径1.6~3.0cmの空間がある。上面で幅3.0cmの縁をまわし、中央にある復原径3.0cmの芯棒孔にかけて1.7cmの深さに緩やかに凹こむ。下面の目は10条確認できるが単位や目的の分割方法は不明。2は、アズキ色をした輝緑岩質の硯の半欠資料である。復原すると上面で長径10.8cm、短径8.3cmの楕円形で、高さ2.4~2.5cmの下側にすばまる。上面を3~4mm幅の縁を残して1~2mmの深さに溝をまわし、一方の端に最大幅2.5cm、深さ0.9cmの海を設けている。底の部分は径6.0cm前後の広さになる。裏面は剥落が進む。



第113図 土壌出
土土製品実測図1
(1/2)



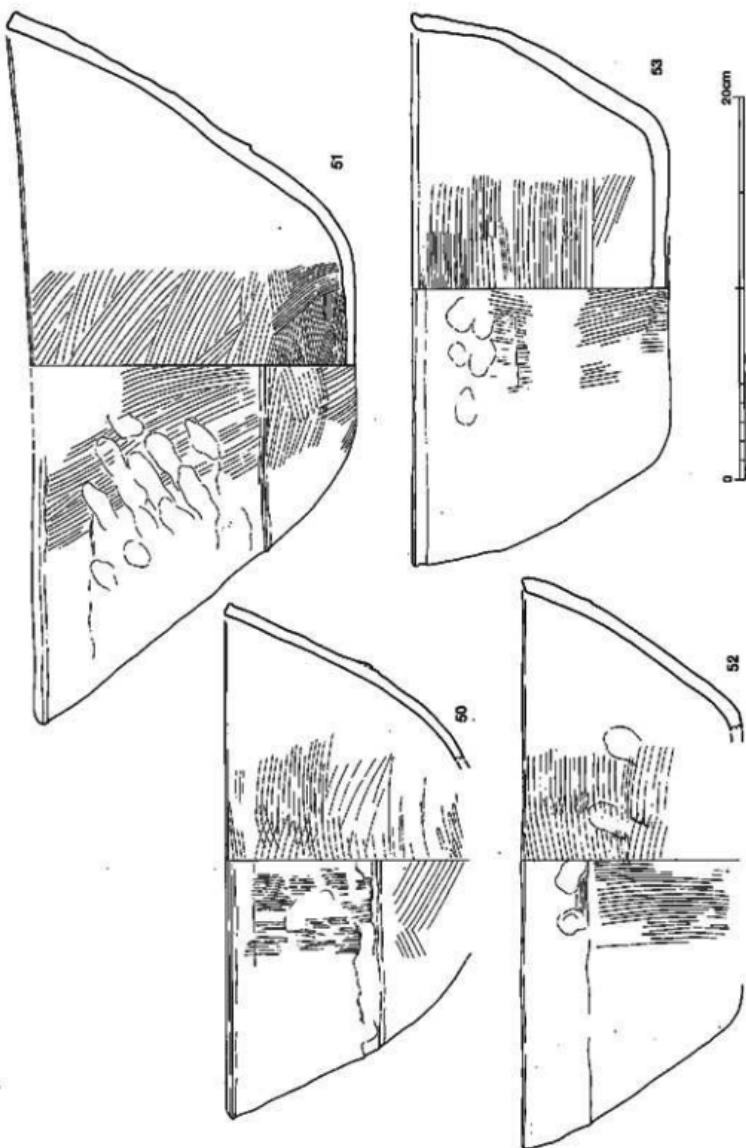
第114図 土塚出土石製品実測図2 (1/3)

鉄 津 上層からは総量384gの鉄滓が出土した。

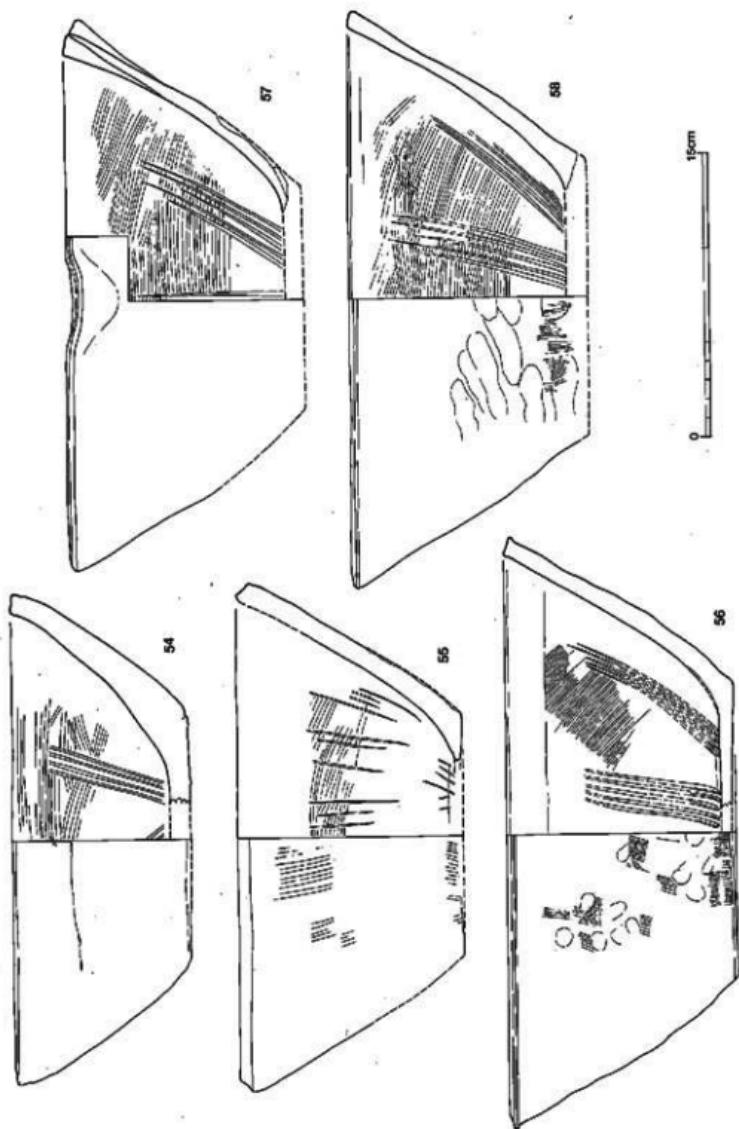
下層出土土器 (第112~116図)

青磁碗 (40・41) ともに龍泉窯系の青磁碗で、40は復原口径16.5cm、残存器高6.9cmほどの直口縁の椀。口縁直下に1条の沈線が巡る。灰色の厚めの胎土で黄緑色の釉薬である。41は復原口径15.0cmほどの椀で、直口縁の外面に雷文風の文様を巡らす。白灰色の胎土で、灰色

圖115 上海出土十器米圖 8 (1/3)



第116圖 土壤出土十種器物測量圖 9 (1/3)



を帯びた淡黄緑色の釉が厚めにかかる。

土師質鍋（42～53） 42は復原口徑20.0cmほどの小形の鍋である。口縁直下がわずかにくびれ気味で、端部は特に肥厚しない。外面は縱方向のハケ目のあとナデられ、内面は横方向のハケ目調整される。胎土に雲母を含み橙褐色に焼成されている。

43～46は口縁端部を外面に折り返して肥厚させた鍋である。44・45は肥厚の度合いが強く、垂れ気味の凸帯になっているが、43・46では四角形に近い。いずれも口縁部内面はハケ目調整の後ナデ調整されるが、44の下位には横方向のハケ目が残る。43・46は外面に縱方向のハケ目が残るが、44・45は雑なナデ調整が加わり指頭痕がめだつ。胎土には砂粒と雲母が含まれ、橙色ないし茶褐色に焼成されているが、いずれも外面には煤が付着している。44は復原口徑34.7cm、残存器高14.0cmの大きさで、胴部の下位に凸帯状の段が巡る。46でもこの特徴は同様であるが、45ではこれに比して高い位置に凸帯状の段が巡る。なお、段より下側の調整では、44が横方向のハケ目、45がナデ調整という差異もみられる。47はおそらく口縁端部が肥厚する鍋の胴部であろう。

48～53は口縁端部がほとんど肥厚しない鍋である。いずれも、胎土に雲母を含み、橙褐色に焼成されているが、口縁部内面はハケ目調整される。外面の凸帯状の段より上部の口縁部側はハケ目調整の後ナデ調整が加わり指頭圧痕もみられるが、下の底部側はハケ目調整のままである。49では口縁部下でくびれ気味だが、口縁端部から凸帯状の段までが長い例に、このような現象をみうける。ほぼ完形にまで復原できる例からすると、51は復原口徑37.3cm、器高16.8～18.3cm、底径7.5cmの大きさで、50は復原口徑27.0cm、残存器高12.4cmの大きさで、口徑と器高の比率が2：1弱である。また、53は復原口徑29.0cm、器高13.4cm、底径14.4cm、52は復原口徑30.0cm、器高12.0cm弱の大きさで、比率は2：1強である。また底径では前者より後者が二倍近くになっていて、深く底の狭い器形と、浅く底の広い器形という差異がある。

摺鉢（54～58） 54・56は口徑に比して器高の低めで浅い器形の摺鉢である。54は復原口徑26.0cm、器高9.6cm、底径13.0cmの大きさで、器壁は厚い。口縁部は内彎気味に開き、口縁端部は上面を平につくる。外面はナデ調整で、内面はハケ目調整の後4条単位の目が刻まれる。胎土には赤褐色粒・雲母・角閃石を含む。56は復原口徑31.6cm、器高12.2cm、底径15.7cmの大きさで、器壁は薄め。口縁部は直線的に開き、口縁端部は上面を平坦にして、わずかに内外に広がる。外面はハケ目調整のあとナデられ指頭圧痕がみられるが、内面はハケ目調整の後5条単位の目が刻まれる。胎土に赤褐色粒・雲母・細砂粒を含み明橙色に焼成されている。

55・57・58は器高が高めで深い器形の摺鉢である。55は復原口徑27.1cm、器高11.9cm、底径13.0cmの大きさで、口縁部は直線的に開き、口縁端部は斜めに面をつくる。外面はハケ目の後ナデられ、内面はハケ目調整の後4条単位の目が刻まれる。胎土に砂粒・雲母を含み、灰色ないし茶褐色に焼成されている。57は底部付近で剥落しているが、復原口徑28.6cm、残存器高

11.5cmの大きさで、口縁部はやや内彎気味に開く。口縁端部はヨコナデ調整で上面を平坦につくられ、片口をもつ。外面はナデ調整され、内面はハケ目調整の後5条単位の目が刻まれる。胎土に雲母を含み橙色に焼成されている。58は底部を欠くが、復原口径36.0cm、残存器高12.2cmの大きさで、口縁部は直線的に開き、口縁端部はヨコナデ調整で上面を平坦につくられている。外面は底部付近にハケ目を残すが、ナデ調整で指頭圧痕がめだつ。内面はハケ目調整の後5条単位の目が刻まれる。胎土に雲母・赤褐色粒を含み淡橙色に焼成されている。

鉄 淬 下層からは総量195gの鉄滓が出土した。

12号土壤（第108図）

9D区の西端部にあり、13号土壤を切る。検出面では長さ153cm、幅96cmの不整形プランを呈していて、深さ10cmの床面は144cm×85cm程の広さである。主軸方向N19° Eをとる。中央部に柱穴状ビットが重複している。

土壤内から、糸切り底の土師器小皿らしい破片などが出土した。小破片のため図示しない。

13号土壤（第108図）

9D区の西端部にあり、12号土壤に東端を切られている。検出面では長さ122cm、幅92cmの不整形プランを呈していて、深さ18cmの床面は110cm×80cm程の広さである。主軸方向N82° 50' Wをとる。

土壤内から、糸切り底の土師器小皿らしい破片や、高台付の杯の破片などが出土した。小破片のため図示しない。

14号土壤（第108図）

8E区の西寄りにあり、60号土壤を切る。検出面では長さ155cm、幅124cmの楕円形プランを呈していて、深さ32cmの床面は135cm×15cm程の広さである。主軸方向N88° Wをとる。

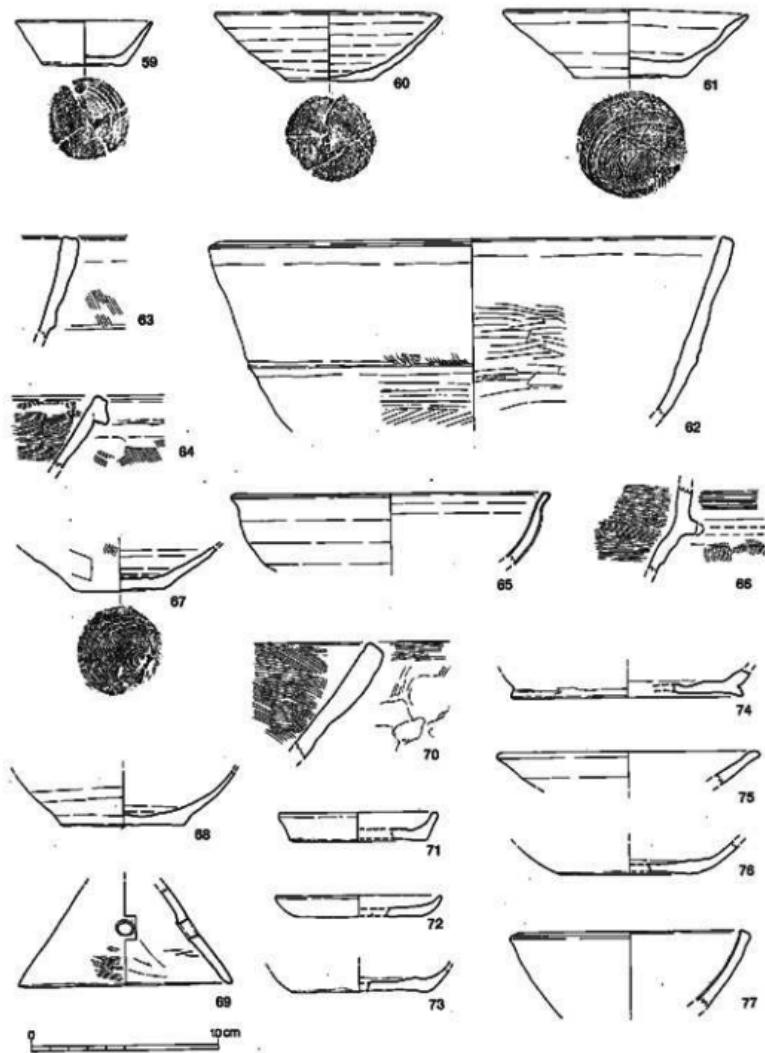
土壤内から、土師器小皿の破片や、土師器亮片などが出土したが、ほとんど小破片である。

出土遺物（第117図）

土師器小皿（59） 口径7.3cm、器高2.4cm、底径4.4cmの大きさの皿で、外底面には糸切り痕がみられる。雲母を含むが精良な胎土で、橙色に焼成されている。

15号土壤（第102図）

3C区の東端にあり、一部調査区域外に続く。検出面では長さ330cm+α、幅318cmの不整形プランを呈していて、深さ30cmの床面は210cm×200cm程の広さである。主軸方向N60° Eをとる。北東部にテラス、南東部に細長いビットがある。



第117図 土壌出土土器実測図10 (1/3)

土壤内の西端部で床面より少し浮いた位置に、土師器小皿と扁平な碟、土師質鍋片などが接近して出土している（図版 50-1）。

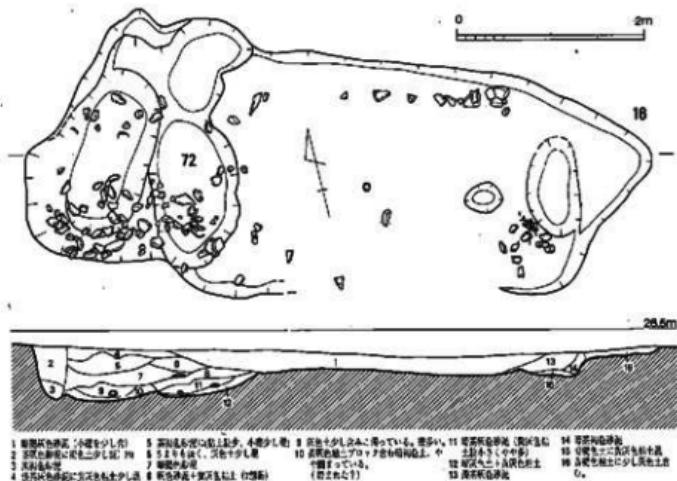
出土遺物（第 117 図）

土師器杯（60・61） 60は復原口径12.3cm、器高3.6cm、底径4.5cmの大きさの皿で、外底面には糸切り痕がみられる。雲母・赤褐色粒・石英粒を若干含むが精良な胎土で、淡明褐色に焼成されている。61は口径13.1cm、器高3.6cm、底径5.8cmの大きさの皿で、外底面には糸切り痕がみられる。雲母・赤褐色粒を若干含むが精良な胎土で、暗黄褐色に焼成されている。

土師質鍋（62） 口縁部がわずかに外反気味で、口縁端部が肥厚しない鍋。胴部に凸帯状の段が巡る。外面は段の上がハケ目その後ナデ調整、下は粗めのハケ目がみられる。内面にはハケ目と板状工具のナデ痕がみられる。胎土に細砂粒と雲母を若干含み橙色に焼成されているが、外面には煤が付着して、光沢を有する部分もある。

16号土塹（図版 49-1, 50-3, 第 118・119 図）

10F 区の南西端にあり、西側で72号土塹と一部重複するが、16号土塹が後出する。検出面では長さ523cm、幅263cmの不整長方形プランを呈しているが、本来は長さ440cmほどで東側の飛び出し部分は別の造構であったかも知れない。深さ20cmの床面は390cm×240cm程の広さである。主軸方向N76°Wをとる。東端部に長椭円形の浅いピットと円形の深いピットがある。



第118図 土塹実測図 4 (1/60)

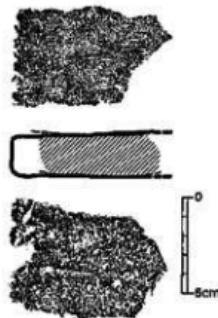


第119圖 16号土壤遺物出土狀況剖面圖 (1/15)

土壟内では、周辺部などから、土師器壺片と土師質鍋片、龍泉窯系の磁器片および瓦片などが出土したものの、ほとんど小破片である。また長楕円ピットの脇で管状土錘がまとまって出土した（第119図）。

出土遺物（圖版 63、第 117·121·122 圖，表 2）

土師質鍋 (63 : 64) 63は口縁部がわずかに外反気味ながらも内畫して、ほとんど配達しな

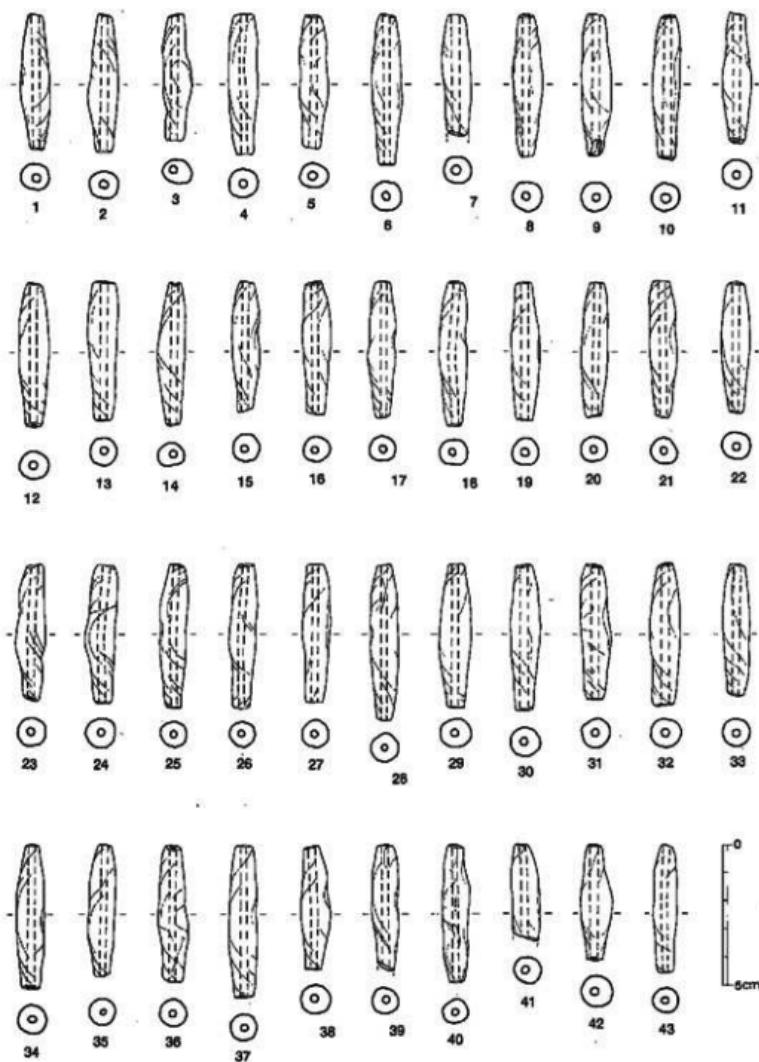


第120圖 土壞出土瓦拓影
(1/3)

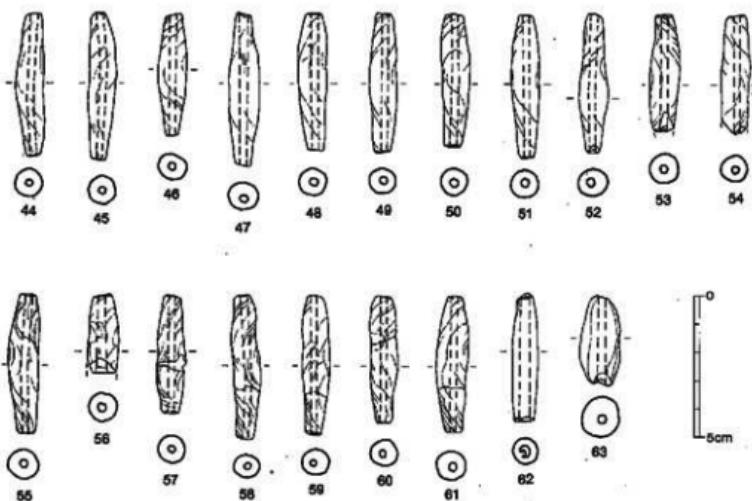
表2 16号土壤出土土饼一览表

(单位mm·s)

NO	品名	外箱	内箱	成数	成数	取苗状态	根数	茎数	叶数	花数	果数	乳化	变色	虫害	有虫	缺苗
1	46	11	3	3.6		健壮	2.2	6.1	11	3	4.4		微弱			
2	49	10	3	2.2		健壮	2.9	4.7	10	2	3.5		微弱			
3	45	10	2	2.6		健壮	3.4	5.2	10	3	4.1		微弱			
4	49	10	2	4.6		健壮	3.6	4.7	9	2	3.3		微弱			
5	47	10	3	2.7		健壮	3.6	4.9	10	2	4.0		微弱			
6	93	10	3	4.9		健壮	3.7	8.4	10	2	5.1		微弱			
7	43	10	3	(2.2)		弱苗	2.8	4.3	10	2	3.6		微弱			
8	59	10	3	4.3		健壮	3.9	6.5	9	2	(3.3)		微弱			
9	50	10	2	(4.3)		弱苗	4.0	4.9	9	2	3.7		微弱			
10	51	10	3	3.6		健壮	4.1	4.4	10	2	(3.3)		微弱			
11	46	10	3	3.6		健壮	4.2	4.1	11	2	3.4		微弱			
12	51	11	3	4.6		健壮	4.5	4.6	9	2	3.6		微弱			
13	49	10	2	4.4		健壮	4.4	5.1	10	2	3.6		微弱			
14	51	10	3	(3.5)		弱苗	4.5	5.3	10	2	4.0		微弱			
15	46	10	2	3.6		健壮	4.6	4.3	10*	2	3.2		微弱			
16	47	10	2	3.5		健壮	4.7	5.5	11	2	4.6		微弱			
17	49	10	2	3.4		健壮	4.8	4.9	10	2	4.1		微弱			
18	51	10	2	4.2		健壮	4.9	5.0	10	2	4.1		微弱			
19	49	10	3	2.8		弱苗	5.0	4.7	10	3	4.6		微弱			
20	48	9	2	3.5		健壮	5.1	5.1	10	3	4.1		微弱			
21	49	10	2	3.4		健壮	5.2	4.9	10	3	3.5		微弱			
22	47	10	3	3.5		健壮	5.3	4.1	10	3	(4.1)		弱苗			
23	48	10	3	3.6		健壮	5.4	4.2	9	2	(3.1)		弱苗			
24	49	11	2	5.0		健壮	5.5	4.9	11	2	5.1		微弱			
25	51	9	2	4.2		健壮	5.6	(2.8)	10	2	5.5		半失			
26	51	9	2	3.7		健壮	5.7	4.2	10	2	(3.7)		弱苗			
27	49	10	2	3.8		健壮	5.8	5.1	9	2	3.3		微弱			
28	56	10	2	4.7		健壮	5.9	5.0	10	2	5.5		微弱			
29	51	11	3	5.1		弱苗	6.0	4.5	10	2	5.5		微弱			
30	52	11	3	5.6		健壮	6.1	4.9	11	2	4.7		微弱			
31	48	10	3	4.4		健壮	6.2	4.5	9	2	3.9		微弱			



第121図 土壙出土土製品実測図2 (1/2)



第122図 土壌出土土製品実測図3 (1/2)

い口縁端部につづく器形の鍋で、比較的胴上部に凸帯状の段が巡る。外面は段の上がハケ目の後ナデ調整、内面は器面が剥落して不明瞭である。胎土に細砂粒と雲母を若干含み赤橙色に焼成されているが、外面には煤が付着してやや黒い。64は口縁端部が折り返されて肥厚する鍋で、外面はハケ目調整の後ナデが加わり指頭圧痕がみられる。内面は口縁端部までハケ目調整される。胎土に細砂粒・雲母を含み橙色に焼成されるが、外面は煤が付着して黒い。

瓦(第120図) 平瓦片で、上面にヘラナデの痕跡が残り、下面は器面が磨滅して不明。胎土に細砂粒・雲母・角閃石を含み灰色ないし黒色に焼成されている。

管状土錐(第111・112図、表2) 総数62点出土した。このうち(62)の1点のみが土壤内西寄りからの出土で、他のすべては第一圖に図示したように接近して出土した資料である。これらは、軸棒に粘土を巻き付けて成形されたようで、粘土の捻れた痕跡がみられる。中程の膨れた形を呈するが、細めで、長さ5cm前後、外径1cm前後の大きさのものが多い。重量は3g~5gに集中する。ほとんどが胎土に雲母粒を若干含み、橙色や淡茶褐色の色調を呈している。62はさらに細めで、胎土に若干角閃石を含み暗灰色を呈している。

鉄 淬 総量で82gの鉄滓が出土している。

17号土壌（第 102 図）

2B区の東寄りにあり、調査区域内の土壌では最も南東端に位置する。検出面では長さ182cm、幅162cmの不整円形プランを呈し、深さ36cmの床面は140cm×75cm程の不整梢円形である。主軸方向N38° Eをとる。南側にテラスと浅いピットがある。

土壌内から土師器壺片と土師質鍋片、磁器片など出土したが、ほとんど小破片である。

出土遺物（第 117 図）

白磁椀（65）復原口径17.0cmの大きさの椀で、口縁部はやや外反する。黒色粒を含む灰白色の胎土で釉は灰白色の色調を呈している。

湯釜（66）錫状の凸帯部破片である。内外面ともにハケ目調整されるが、外面の凸帯より下は継方向のハケ目がみられる。素母を含むが精良な胎土で黒灰色に焼成され、外面には煤が付着する。

18号土壌（第 102 図）

2C区の北東隅で、15号土壌の南側にあるが、調査区域外に続く。検出面では長さ113cm、幅64cm+αの不整円形？プランで、深さ20cmの床面は長さ80cm程である。主軸方向N22°30' Wをとる。遺物は確認できなかった。

19号土壌（第 102 図）

3C区の北西隅にあり、調査区域外に続く。検出面では長さ188cm、幅162cmの隅丸方形プランらしく、深さ13cmの床面は175cm×150cm程である。主軸方向N85° Wをとる。

土壌内では、糸切り底の土師器小皿片、須恵器杯片、白磁片など出土したが、小破片で図示しえない。

20号土壌（第 108 図）

5C区の北寄りにあり、溝によって北側の上部を削られている。検出面では長さ163cm、幅84cmの長梢円形プランで、深さ18cmの床面は145cm×75cm程である。主軸方向N63° 40' Wをとる。4つの柱穴状ピットに切り込まれている。

土壌内では、糸切り底の土師器小皿片などが出土したもの、小破片で図示しえない。

21号土壌（第 108 図）

4D区の中央にあり、住居跡造構と重複するが、住居跡覆土を切り込んで構築されている。検出面では長さ200cm、幅130cmの長梢円形プランで、深さ20cmの床面は180cm×110cm程である。主軸方向はN72° 20' Wをとる。住居跡を含めた土層の観察では、耕作土下に30cm程

の深さを有していたことがわかる。

土壙内では、土師器杯片、陶器片、土錘などが出土した。陶器は小破片で図示しえない。

出土遺物（図版 59、第 117・112 図）

土師器杯（67） 口縁部を欠くが、底径4.8cmの糸切りの底部から口縁部に向かって大きく開く器形であろう。精良な胎土で、黄褐色に焼成されている。

土錘（第122 図 63） 管状土錘で、1点のみ出土した。端部を欠き、現存長3.2cm、外径1.4cm、孔径3mm、重量5.6gを測る。胎土に褐色粒・細砂粒を含み、暗黄褐色に焼成されている。

22号土壙（第 108 図）

5D区の東寄りにある。検出面では柱穴状ピットが2つ重複したようなプランで、長さ101cm、幅53cm、深さ14cm。主軸方向はN6° Eをとる。

土壙内では、土師器片、須恵器片など出土したが、小破片で図示しえない。

24号土壙（第 123 図）

6D区の南西隅にあり、10号土壙墓と重複するが、東西ともに植木穴の搅乱に切り込まれて前後関係は不明。検出面では楕円形プランを呈し、長さ138cm、幅78cmの大きさで、深さ55cm。主軸方向はN83° Wをとる。なお、23号土壙は10号土壙墓、25号土壙は11号土壙墓に改称した。

土壙内では、糸切り底の土師器小皿、杯片、白磁・青磁片、総量47gの鉄滓などが出土した。いずれも小破片で図示しえない。

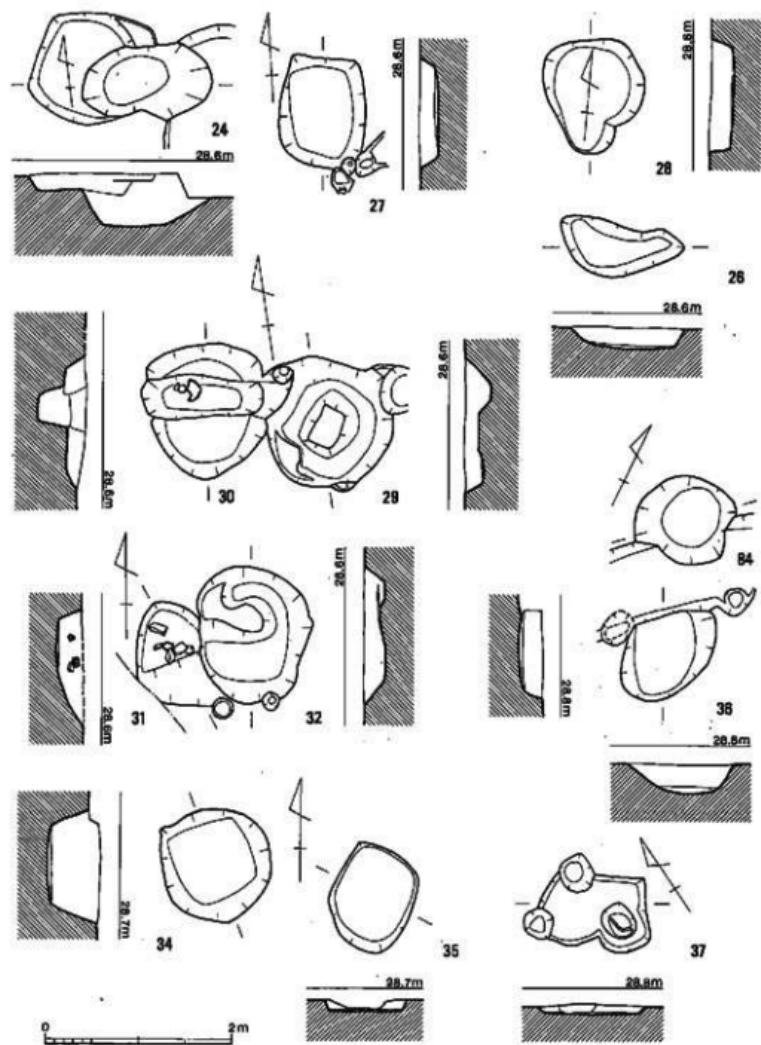
26号土壙（第 123 図）

5E区の北東隅にあり、11号土壙墓と重複するが、11号土壙墓より先行する。検出面では不整形プランだが、長さ124cm、幅60cmの大きさで、深さ20cm。主軸方向はN21° 30' Eをとる。

土壙内では、糸切り底の土師器杯片、土師質鍋片などが出土したもの、ほとんどが小破片で図示しえない。

出土遺物（第 117 図）

土師器杯（68） 底径6.6cmの糸切りの底部から、幾分丸みをもって開くが口縁部を欠く。残存器高は2.9cm。胎土に褐色粒を若干含み、淡明褐色に焼成されている。



第123図 土壌実測図 5 (1 / 60)

27号土壤（第123図）

5E区から6E区にかけて位置する。検出面では不整方形プランだが、南東隅部は柱穴状ピットに一部切られる。長さ117cm、幅93cmの大きさで、深さ20cm。主軸方向はN5°Eをとる。

土壟内では、土器小皿？片、陶器片などが出土したものの、小破片で図示しない。

28号土壤（第123図）

6E区にあり、27号土壤の約2m北東に位置する。検出面では瓢形のプランで、長さ121cm、幅107cm、深さ30cm。主軸方向はN5°Wをとる。

出土遺物（第117図）

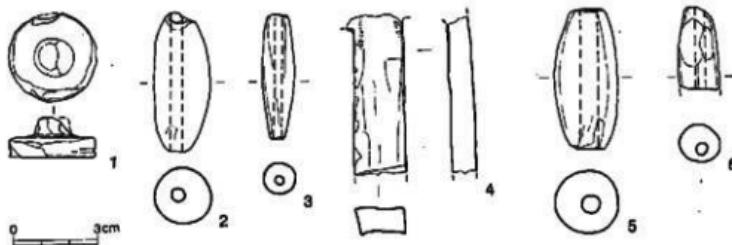
土器高杯（69）脚台部破片であろう。口径11.4cm、残存器高5.3cmの大きさで、直線的に開くが、中途に円孔が穿たれる。外面にはヘラ磨きの痕跡、内面にはヘラ削りの痕跡が残る。胎土に角閃石・赤褐色粒・砂粒を含み、黄灰色に焼成されている。

29号土壤（第123図）

6E区にあり、27号土壤の約3m北に位置する。検出面では不整円形のプランで、長さ140cm、幅134cm、深さ26cm。主軸方向はN0°をとる。床面の中央部が浅く5~10cm高い。土壤内では土製品が1点出土したのみである。

出土遺物（図版63、第124図）

土製品（第124図1）直径3.1cm、厚さ0.8cmの円板中央に、直径1.3cm、厚さ0.6cmのつまみ状突起が付いたようなもので、突起と反対側の面は糸切り痕がある。周縁にヘラ先の痕跡を残すが、ナテ調整される。胎土に砂粒・霰母を含み、明褐色に焼成されている。用途は不明。



第124図 土壤出土土製品実測図4(1/2)

30号土壙（第 123 図）

6E区にあり、29号土壙の西に接して位置する。検出面では不整円形のプランで、長さ142cm、幅125cm、深さ40cm。主軸方向はN7°Wをとる。床面の中央部北寄りに一段深いピット（P135）があり、長さ120cm、幅42cmで、15cmほどの深さがある。土壙内では遺物は確認されなかったが、ピット内で土師質土鍋の半欠片が出土した（第 192 図 38）。

31号土壙（第 123 図）

6E区にあり、30号土壙の西に32号土壙を挟んで位置するが、32号より先行する。検出面では不整円形のプランで、長さ123cm、幅80cm+a、深さ27cm。主軸方向はN27°20'Wをとる。土壙内では、堆積土の中間に角礫が数個集まっていたが、遺物は土師器杯・小皿らしい小破片のみであった。

32号土壙（第 123 図）

6E区にあり、30号土壙の西に31号土壙との間に挟まれて位置するが、31号より後出する。検出面では不整円形のプランで、長さ147cm、幅120cm、深さ23cm。主軸方向はN0°をとる。土壙内では床面の北寄りでやや床の浅い部分もみられた。遺物は土師器小皿らしい小破片を確認したのみであった。

34号土壙（第 123 図）

6D区中央部にあり、溝に上部を削られる。検出面では不整円形のプランで、長さ124cm、幅118cm、深さ55cm。主軸方向はN19°50'Wをとる。床面は84cm×82cmの広さで隅丸方形に近い。土壙内の遺物は土師器小皿・杯片などを確認した。

出土遺物（第 117 図）

土師器小皿（71～73）71は復原底径7.2cmの底部から直線的に口縁部が立上がる小皿で、復原口径8.4cm、器高1.5cmの大きさ。外底面は糸切り痕と板状圧痕がみられる。胎土に細砂粒・雲母を含む。72・73は底部から口縁部へ内側して立上がる小皿。細砂粒を胎土に含む。72は復原口径8.8cm、器高1.1cmの大きさ。73は口縁部を欠失している。外底面には糸切り痕と、板状圧痕がみられる。

土師器杯（74） 底部破片である。外底面には糸切り痕が明瞭に残るが、体部との境にへラ先で押さえ込んで高台を意識したような屈曲になっている。

土師質鍋（70） 口縁部がわずかに外反して、内側気味に立上がる鍋である。外面はハケ目その後ナテ調整が加えられ指頭圧痕がめだつ。内面はハケ目調整で、口唇端部もハケ目がみられる。胎土に細砂粒を含み、淡灰色に焼成されている。

35号土壙（第123図）

6D区中央部にあり、34号土壙の約1m東側に位置する。検出面では不整円形のプランで、長さ106cm、幅87cm、深さ13cm。主軸方向はN $26^{\circ} 30'$ Eをとる。床面は92cm×77cmの広さ。

土壙内の遺物は土師器小皿片などを確認したが、小破片のため図示しない。

36号土壙（第123図）

6D区北端にあり、35号土壙の約3m北側に位置し、溝で上部を削られている。検出面では不整円形のプランで、長さ90cm+α、幅94cm、深さ25cm。主軸方向はN 26° Wをとる。床面は90cm×64cmの広さ。

土壙内の遺物は土師器片、焼土塊などを確認したが、小破片がほとんどである。

出土遺物（第117図）

土師器杯（75・76）同一個体の可能性が高いものの、接合しない。75では復原口径14.0cm、76では復原底径7.1cmの大きさで外底面はハラで削られている。この杯はおそらく2.5cm程の器高であろう。胎土に細砂粒を含み暗茶褐色に焼成されている。

37号土壙（第123図）

7D区南寄りにあり、15号土壙墓の約1m西側に位置する。検出面では不整形プランで、長さ113cm、幅67cm、深さ10cm。主軸方向はN $55^{\circ} 10'$ Wをとる。3つの柱穴状ピットと重複しているが、ピットより古い。

土壙内では土師器小皿片、須恵器片などを確認したが、小破片がほとんどで図示しない。

38号土壙（第125図）

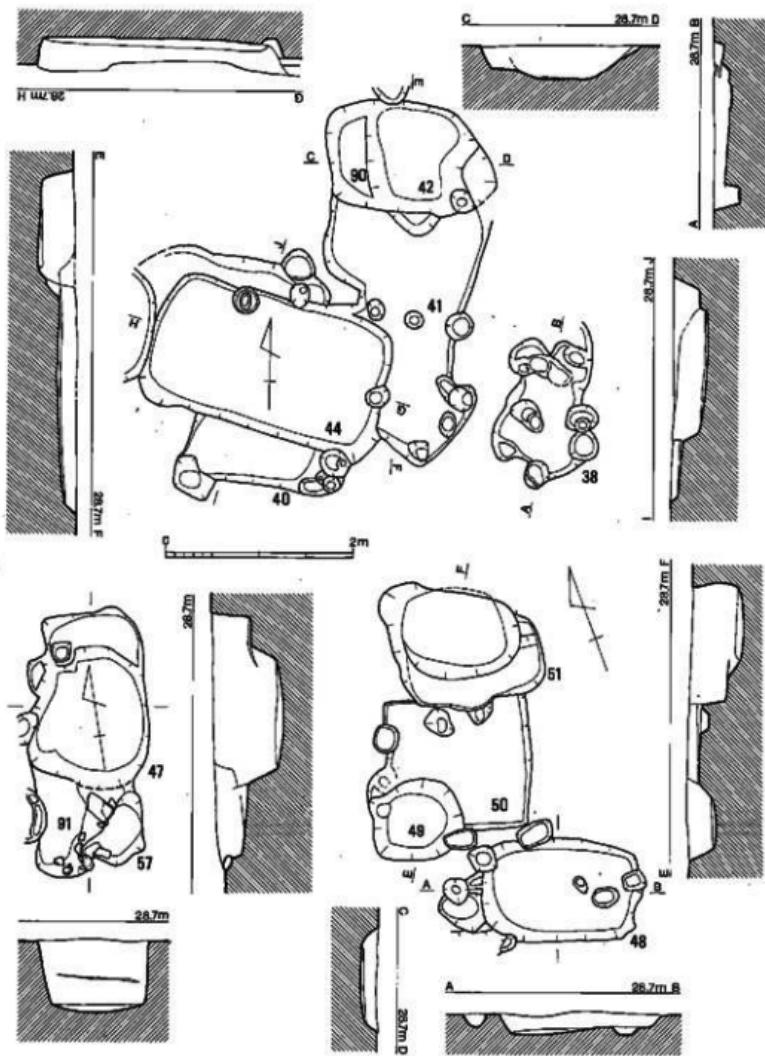
6E区北端にあり、37号土壙の約5m西南西側に位置する。検出面では不整形プランで、長さ180cm、幅80cm、深さ16cm。主軸方向はN $9^{\circ} 20'$ Eをとる。6つの柱穴状ピットと重複しているが、ピットより古い。

土壙内では糸切り底の土師器小皿片などを確認したが、小破片で図示しない。

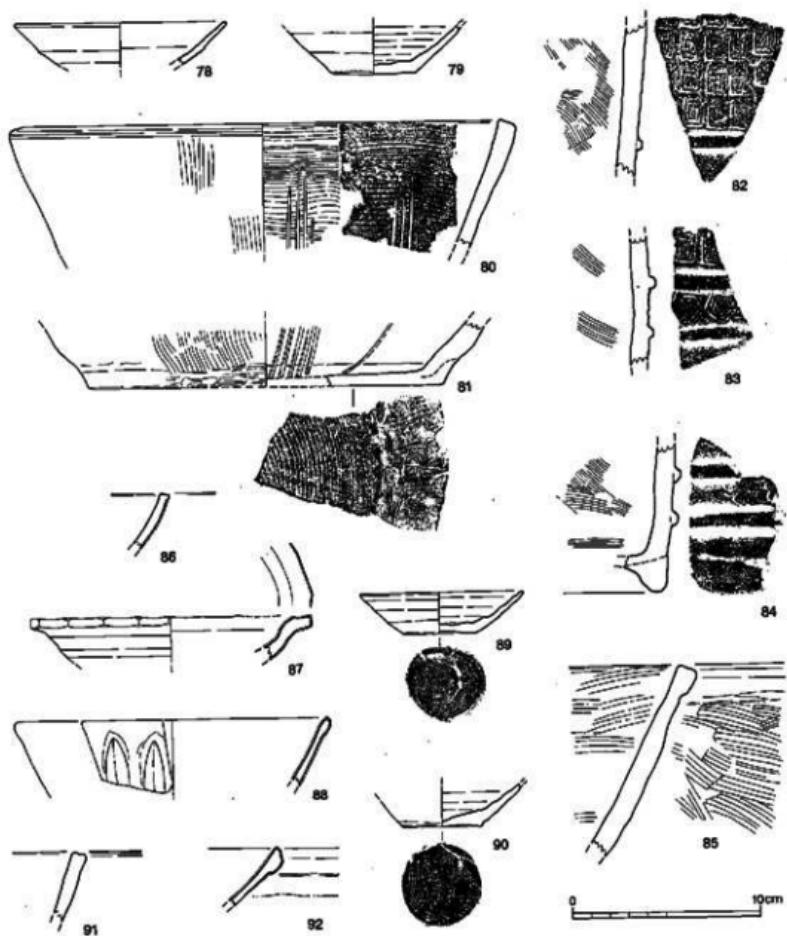
40号土壙（第125図）

6E区北端にあり、38号土壙の約2m西側に位置する。検出面では44号土壙に切られていて不確定だが不整形プランであろうか。長さ172cm、幅58cm+α、深さ9cm。主軸方向はN 81° Wをとる。東側で柱穴状ピットと重複しているが、ピットより古い。

土壙内では糸切り底の土師器小皿片、土師器甕片、焼土塊などを確認したが、小破片で図示



第125図 土壌実測図6 (1/60)



第126図 土壌出土土器実測図11 (1/3)

しえない。

41号土壙（第125図）

6E・7E区にあり、38号土壙のすぐ西側に位置する。検出面では42号・44号土壙に切られていて不確実だが不整形プランで、長さ270cm+ α 、幅170cm、深さ20cm。主軸方向はN3° E

をとる。

土壤内では糸切り底の土師器小皿片、土師器裏片、須恵器片、陶器片などを確認したが、ほとんど小破片で図示しえないが、陶器片のみ図示する。

出土遺物（第 117 図）

陶磁器椀（77） 復原口径13.0cm、残存器高4.3cmの大きさの椀で、器壁は厚い。直口縁の端部は面取りされるが、内面に釉がよくかかる。細砂粒を胎土に含み、灰色に焼成されるが、釉は褐色を呈している。

42号土壤（第 125 図）

7E区にあり、41号土壤の北側に重複して、41号・90号土壤を切る。検出面では不整形プランで、長さ140cm、幅119cm、深さ37cm。主軸方向はN89° Wをとる。

土壤内では糸切り底の土師器杯片、土師質招鉢片、瓦質土器片、焼土塊などを確認した。

出土遺物（第 126 図）

土師器杯（78・79） 78は底部を、79は口縁部を欠くが、いずれも薄い器壁で直線的に開く器形の杯であろう。胎土に細砂粒・雲母を含み、暗黄褐色ないし暗灰茶褐色に焼成されている。78は復原口径11.2cm、79は底径4.4cmの大きさで、ともに器高は3.5cm弱であろうか。

土師質招鉢（80・81） 80は口縁部が直線的に開く鉢で、外面はハケ目調整の後ナデ調整が加わる。内面は横方向のハケ目の後に目が刻まれている。胎土に雲母・赤褐色砂・砂粒を含み、橙褐色に焼成されているが、外面には煤が付着している。81は糸切り底の底部破片である。細かなハケ目が残る内底面から体部にかけて目が刻まれ、体部外面は横方向のハケ目調整がみられる。雲母・細砂粒を胎土に含み、淡黄褐色に焼成されている。

火鉢類（82～84） 土師質とも瓦質とも区別しがたいが、火鉢と思われる破片がいくつかある。82と83には四角の渦の印刻文様があり、同一個体の可能性もある。83には五角の渦の印刻文も蒲鉾形断面の凸帯列の間に連続押捺される。また84は底部に脚が付く部分の破片である。凸帯間には五弁花の印刻文が押捺されて、低い脚が貼り付けられる。内面はいずれもハケ目調整されている。胎土は細砂粒と少量の雲母を含み、暗黄褐色に焼成されている。

44号土壤（第 125 図）

6E・7E区にあり、41号土壤の西側、40号土壤の北側に重複して、両者を切っている。検出面では隅丸の長方形プランで、長さ267cm、幅150cm、深さ35cm。主軸方向はN70° Wをとる。床面は240cm×130cmの広さで、南西側がわずかに高めだが、平坦である。また柱穴状ピットは土壤より新しい。

土壤内では糸切り底の土師器小皿片、土師質鍋片、磁器片などを確認したが、土師器は小破

片で図示しない。

出土遺物（第 126 図）

土師質鉢（85） 口縁部がわずかに外反気味で、端部が少し肥厚する鉢である。凸帯状の段はあまり明瞭ではないが、破片の下端あたりが段の部分であろう。外面は粗いハケ目調整で、ナデが加わる。また内面は口縁端部までハケ目調整されている。胎土に細砂粒・雲母を含み、橙色に焼成されているが、外面には煤が付着して黒変している。

褐釉椀（86） 器壁は厚い枕で、口縁端部は面取りされ、外側につまみだしたようになっている。細砂粒を胎土に含み、灰色に焼成されるが、釉は褐色を呈している。41号土壙出土例と同一個体の可能性が高い。

青磁杯（87） 大きく外反する口縁部破片で、端部は多面になっている。復原口縁外径 15.0cm、残存器高 2.4cm の大きさ。精良な灰色の胎土で、灰味のある黄緑色の釉がかかる。

青磁椀（88） 復原口径 17.0cm の大きさの椀で、外面には蓮弁文がみられる。黒色粒を含む灰色の胎土で、うすい黄緑色の釉がかかる。龍泉窯系の青磁であろう。

白磁皿（89） 高台部の破片で、外面は素胎だが、内面には黄色味のある灰色の釉がかかり、内底の一部は釉を搔き取っている。重ね焼きの際に高台が重なるためであろう。黒色粒を含む灰白色の胎土が使用されている。

47号土壙（第 125 図）

6E 区北西隅にあり、57号・91号土壙と南側で重複し、両者を切っている。検出面では隅丸の長方形プランで、長さ 186cm、幅 123cm、深さ 75cm。主軸方向は N9° 40' E をとる。北側にテラスがあり、床面は 115cm × 100cm の広さ。

土壙内では糸切り底の土師器皿片、磁器片、滑石製石鱗片、焼土塊などを確認したが、小破片が多い。

出土遺物（図版 59、第 126 図）

土師器皿（89・90） 89は復原口径 8.7cm、器高 2.2cm、底径 3.8cm の大きさの皿。外底面は糸切り痕が明瞭に残る。精良な胎土で、淡茶褐色に焼成されている。90は底径 4.3cm の大きさで口縁部を欠くが残存器高が 2.3cm あり、89 より一回り大きい。胎土に雲母を含み淡橙色に焼成されている。

土師質鍋（91） 端部が肥厚しない口縁部破片である。細砂粒・雲母を胎土に含み淡褐色に焼成されている。

白磁椀（92） 玉縁の白磁碗の口縁部破片である。黒色粒を含む灰白色の胎土で、やや黄色味のある灰白色の釉がかかっている。

48号土壙（第 125 図）

6F 区北東隅にあり、47号土壙の西側に近接している。検出面では隅丸の長方形プランで、長さ170cm、幅110cm、深さ20cm。主軸方向はN $69^{\circ} 20'$ Wをとる。いくつかの柱穴状ピットに切られるが、床面は148cm×88cmの広さで、南側がわずかに高めである。

土壙内では土師器片を確認したが、小破片で図示しない。

49号土壙（第 125 図）

7F 区南東隅にあり、48号土壙の北西側に近接している。50号土壙を切り込み、検出面では不整円形プランで、長径96cm、短径88cm、深さ30cm。主軸方向はN 71° Eをとる。柱穴状ピットに切られるが、床面は径60cm～68cmの広さである。

土壙内では土師器壺片を確認したが、小破片で図示しない。

50号土壙（第 125 図）

7F 区南東隅にあり、49号土壙の北東側に重複し、その北東側にある51号土壙との両方から切られる。検出面では方形プランで、長さ155cm、幅143cm、深さ13cm。主軸方向はN $72^{\circ} 30'$ Wをとる。柱穴状ピットに切られるが、床面は平坦である。

土壙内では土師器片と焼土塊を確認したが、小破片で図示しない。

51号土壙（第 125 図）

7F 区にあり、50号土壙の北東側を切る。検出面では不整形プランで、長さ185cm、幅123cm、深さ53cm。主軸方向はN 66° Wをとる。南側にテラスがあり、北側が一段深くなっている。

土壙内では土師器小皿片なども確認したが、小破片で図示しない。

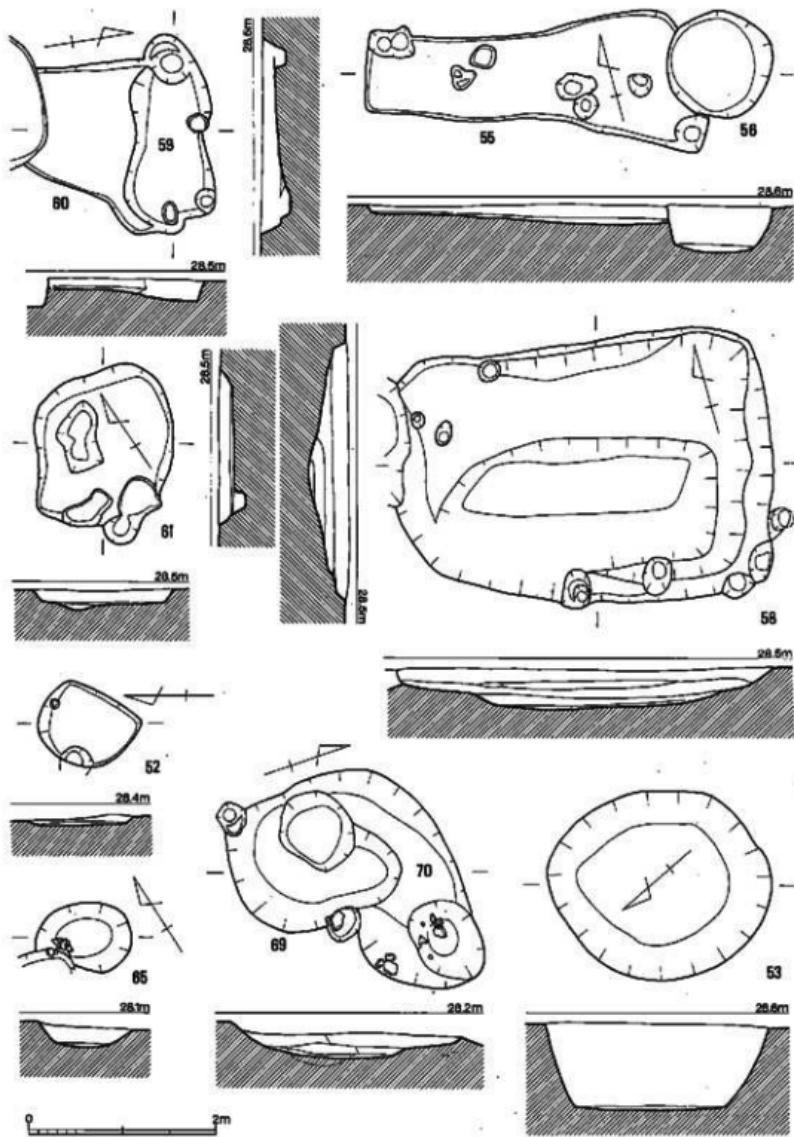
出土遺物（第 128 図）

土師質鍋（93） 体部が直線的に開き、口縁端部が外側に三角形状に肥厚する鍋である。凸帯状の段より口縁部側はハケ目調整の後にナデ調整が加わり、底部側はハケ目が顕著に残る。内面は全体にナデ調整される。胎土に細砂粒・雲母を含み、にぶい橙色に焼成されている。

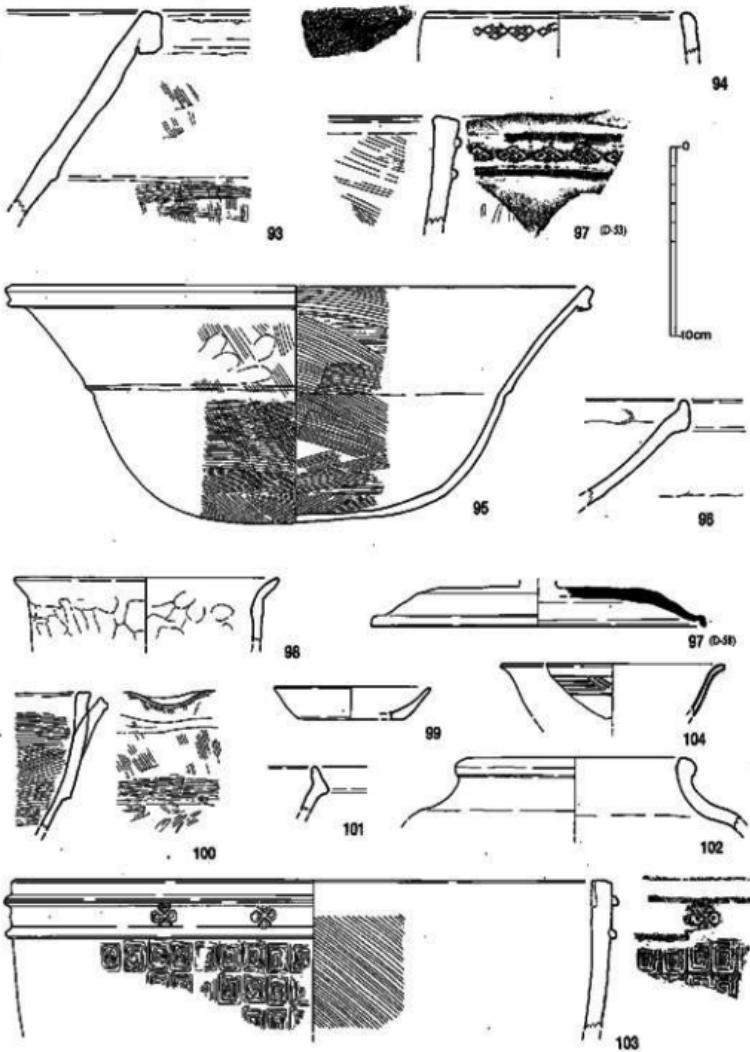
土師質香炉（94） 復原口径14.0cmの口縁部破片で、内傾気味に立つが、口縁部より下を欠く。器面はヨコナデ調整され、外面には四菱形の印刻文が連続押捺される。胎土に雲母を若干含み黄灰褐色ないし灰茶色に焼成されている。

52号土壙（第 127 図）

7F 区にあり、49号・50号土壙の西側にある。検出面では不整梢円形プランで、長さ110cm、幅87cm、深さ10cm。主軸方向はN 20° Eをとる。



第127図 土壌実測図7 (1/60)



第128図 土壌出土土器実測図12 (1/3)

土壤内では土師器小皿片を確認したが、小破片で図示しない。

53号土壙（第127図）

7F区にあり、51号土壙の北西側にある。検出面では不整楕円形プランで、長さ238cm、幅204cm、深さ91cm。主軸方向はN41°10' Eをとる。床面は長径162cm、短径130cmの広さで、ほぼ平坦である。

土壤内では糸切り底の土師器小皿片、須恵器片、磁器片、天目茶碗片なども確認したが、小破片で図示しない。鍋と火鉢のみ図示する。

出土遺物（図版59、第128図）

土師質鍋（95） 丸底の底部から緩やかに外反しながら外に開く器形の鍋で、復原口径31.6cm、器高12.5cmの大きさ。器高と口径との比率は1:2強である。片口が付くのか否かはわからない。全体に薄めの器壁で、口縁部は緩く外反しながらも、端部で折り返したように肥厚し、外側を強くナデて端部下に三角凸帯を造らせたような形状になっている。外面は凸帯状の段より口縁部側がハケ目調整の後に指頭圧痕の残るナデで、底部側はハケ目調整のままである。内面は全体にハケ目調整されている。胎土に雲母・角閃石・赤褐色粒を含み、黄色味を帯びた橙色に焼成されているが、外面には煤が多量に付着している。

須恵質鉢（96） わずかに内擣気味に開く口縁部破片で、端部は外方に引き出しながら上に折り曲げたような形状になっている。内外面ともにナデ調整だが、破片の外面下端にわずかな焼がみられる。胎土に細砂粒を含み、暗灰色に焼成されている。

火鉢（97） 直立する口縁部で、外面に2条の蒲鉾形断面の凸帯間に四菱形の印刻文が連続押捺される。外面にはヘラ磨き痕もみられるが、内面にはハケ目がみられる。雲母を含むものの精良な胎土で、暗黄褐色に焼成されている。

55号土壙（第127図）

7E区にあり、32号・33号土壤墓の北側にある。56号土壤に切られるが、検出面では不整長方形プランで、長さ267cm、幅138cm、深さ21cm。主軸方向はN74°30' Wをとる。床面は西側が高めだが、ほぼ平坦である。

土壤内では土師器小皿・甕片、須恵器片、焼土塊などを確認したが、小破片で図示しない。

56号土壙（第127図）

7E区にあり、55号土壙を切るが、検出面では不整円形プランで、長径115cm、短径113cm、深さ50cmの規模である。

土壤内では土師器片を確認したが、小破片で図示しない。

57号土壙（第125図）

6E区にあり、47号土壙の南側にある。91号土壙とともに47号土壙に切られるが、91号土壙の方が新しい。検出面では不整形プランで、長さ82cm+a、幅65cm+a、深さ35cm。土壙内では角礫が散在しており、遺物では土師器片などは確認したが、小破片で図示しない。

58号土壙（第127図）

8E区南東部にある。検出面では不整長方形プランで、長さ400cm、幅285cm、深さ42cm。主軸方向はN $74^{\circ} 20'$ Wをとる。床面は北側・南側とともに緩やかに内側に傾斜している。

出土遺物（図版59、第128図）

須恵器杯蓋（97） 扁平なつまみが付く杯蓋であろうが天井部中央を失う。復原口径18.0cm、残存器高2.1cmの大きさで、鳥嘴状の口縁端部をもつ。外天井部は回転ヘラ削りされている。胎土にはほとんど砂粒を含まずに、灰色っぽく溼った橙色に焼成されている。

土師器甕（98） 復原口径14.0cmの小形甕で、口縁部はほとんど肥厚せずに外反する。体部外面はヘラ状工具によるナデ調整、内面は指痕痕の残るナデで調整されている。胎土に若干砂粒を含み、明褐色に焼成されている。

土師器小皿（99） 復原口径8.3cm、器高1.7cm、底径5.5cmを測る、糸切り底の小皿で、胎土には雲母・細砂粒を含み、淡明褐色に焼成されている。

土師質鍋（100） 口縁部が内輪気味に開き、凸帯状の段が巡る鍋の破片で、片口が付く。口縁端部はヨコナデ調整で面取りされ、内面と外面の段より上にはハケ目がみられ、外面の段より下はヘラ磨きのような痕跡がみられる。胎土に雲母・細砂粒を含み、淡橙色に焼成されているが、外面は黒変している。

須恵質鉢（101） く字形に屈折した端部をもつ口縁部破片である。内面と口縁端部外面に釉がかかったような黒っぽい色調を呈している。

陶器壺（102） 内傾しながら立上がる口縁部破片で、口縁端部は玉縁になっている。復原口径13.0cmの大きさ。胎土に砂粒を含み、暗茶褐色に焼成されているが、鉄釉壺であろうか。

火鉢（103） 直立気味に立上がる口縁部破片で、復原口径32.2cmの大きさ。口縁端部は面取りされ、口縁下に巡る2条の断面蒲鉾形の凸帯間に四葉形の印刻文が間を空けて、凸帯下に角渦巻状の印刻文が連続押捺されている。内面にはハケ目がみられる。胎土に雲母・赤褐色粒を含み、黄色味を帯びた灰色ないし黒灰色に焼成されている。

59号土壙（第127図）

8E区北西部にある。検出面では不整円形プランで、長さ210cm、幅97cm、深さ23cm。主軸方向はN80°10'Wをとる。60号土壌を切り、柱穴状ピットと重複している可能性もあるが、床面は東側が高めで西側に緩やかに傾斜している。

土壌内からは、土師器杯ないし小皿片と壺片が出土したものの、小破片で図示しない。

60号土壌（第127図）

8E区北西部にある。14号土壌に南側、59号土壌に北側を切られて、検出面では長さ60cm+α、幅150cm、深さ15cm。主軸方向はN14°Eほどであろうか。

土壌内からは、土師器小皿片と壺片が出土したものの、小破片で図示しない。

61号土壌（第127図）

8E区南端で、55号土壌の南側にある。検出面では不整円形プランで、長さ167cm、幅146cm、深さ15cm。主軸方向はN34°20'Eをとる。柱穴状ピットとも重複しているが、床面はほぼ平坦である。

土壌内からは、糸切り底の土師器小皿片も出土したが小破片で図示しない。

出土遺物（第128図）

青磁小楕（104） 復原口径12.0cmの、口縁端部が外反して開く楕の口縁部破片で、外面に横線文様がある。黒色粒を含む灰色の胎土で、釉は淡い緑色を呈する。龍泉窯系の青磁楕であろう。

62号土壌（図版49-2、第129図）

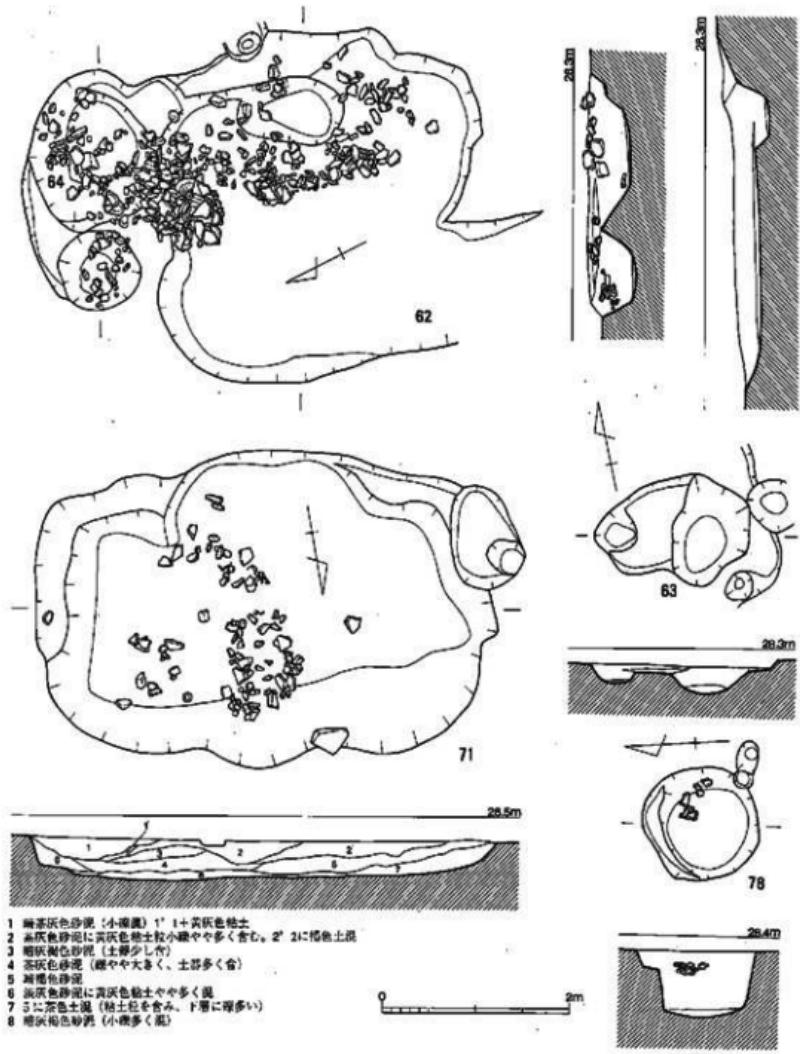
8G区東側にある。検出面では不整方形プランで、長さ371cm、幅342cm、深さ27cm。主軸方向はN63°10'Wをとる。南西側は削平を受けて不明瞭である。床面はほぼ平坦だが、東側にピットが穿たれている。

出土遺物（図版58・63・64、第130～132図）

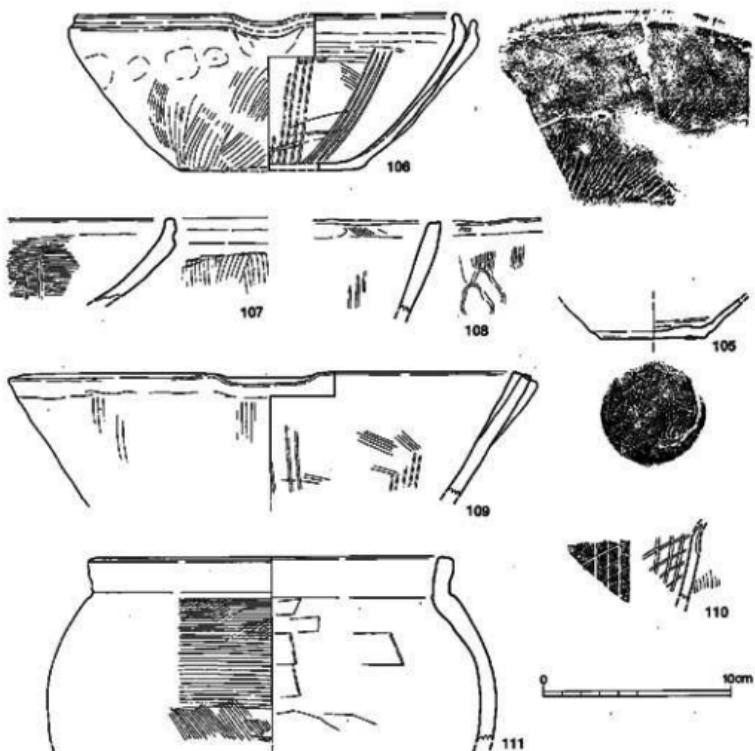
土師器皿（105） 糸切り底の皿で、口縁部を欠くが器高の高い類である。底径5.8cmの大きさ。細砂粒・赤褐色粒・雲母を胎土に含み、明橙色に焼成されている。

指鉢（106～110） 106は復原最大径21.3cm、器高8.2cm、底径10.0cmの大きさの、片口をもった瓦質の指鉢である。底部から内壁気味に開く器形で、口縁部は内傾させながら内外面をつまんで壅ませている。外面はハケ目の後にナデられて指頭圧痕が残る。内面はハケ目の後にナデられて、櫛歯状の目が刻まれる。胎土に細砂粒・雲母を含み、黒灰色に焼成されている。107も似た特徴を有する指鉢である。

108・109は直線的に開く器形で、口縁部はそのまま端部上面を平坦にされている。109では



第129図 土壌実測図 8 (1/60)

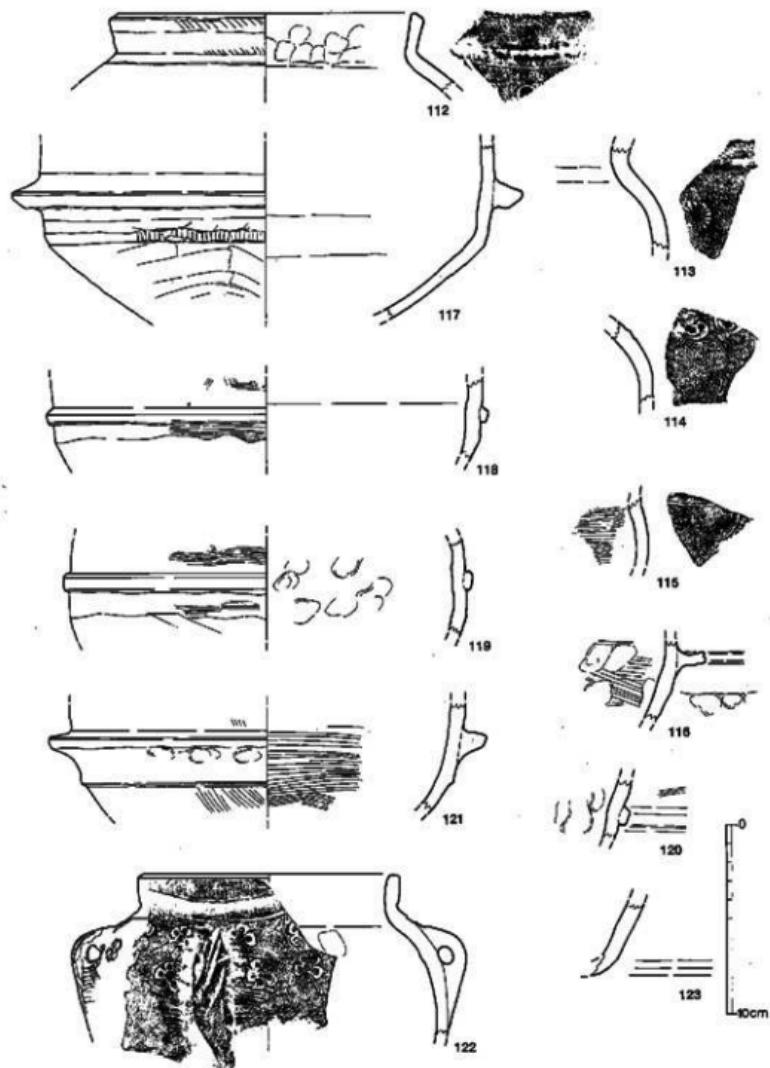


第130図 土壌出土土器実測図13 (1/3)

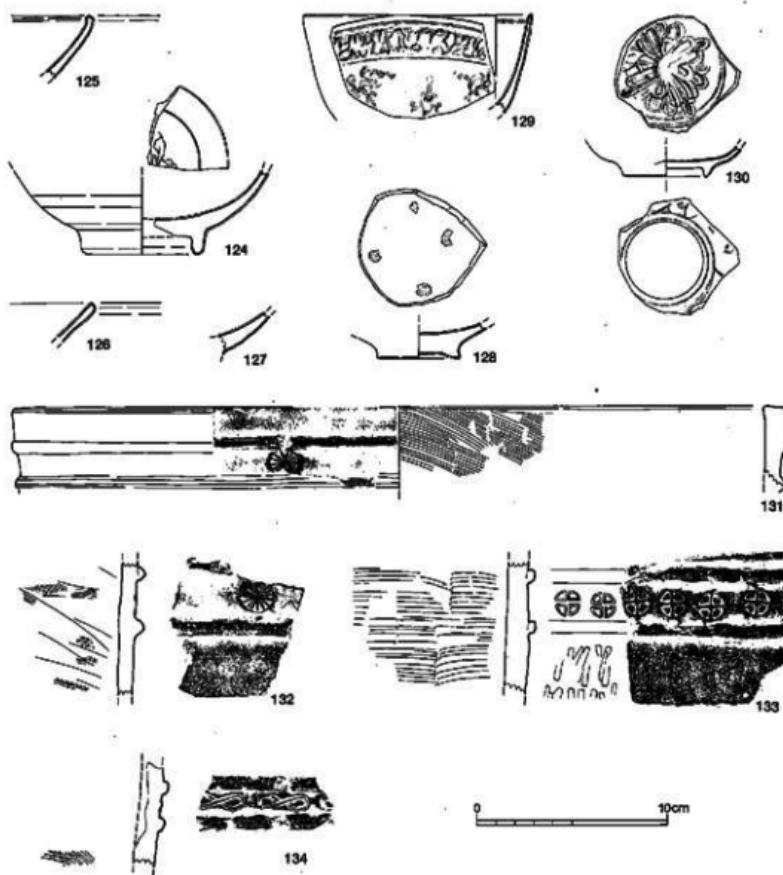
片口が付く。外面はハケ目調整の後ナデ調整されて一部に指頭圧痕が残る。内面にもハケ目が残り、櫛齒状の目が刻まれる。胎土に砂粒・赤褐色粒を含み、にぶい橙色に焼成されている。

110は小破片でよくわからないが、偶然に内面の目が交差した破片であろう。外面にはハケ目が残る。

湯釜 (111~123) 111は土師質釜の破片だが、釣手の有無は不明で、胴下半も欠く。口縁部は扁球形に膨れる胴部からそのまま直立し、端部上面は平坦につくられる。復原口径19.6cmで、胴最大径24.2cm。比較的厚めの器壁で、胴部外面はハケ目調整、内面はヘラ削りないしはヘラによるナデ調整である。112は土師質とも瓦質とも区別しがたいが、111と似た器形



第131図 土壙出土土器実測図14 (1/3)



第132図 土壙出土土器実測図15 (1/3)

の口縁部破片で、口縁部はやや外開きに直し、外面に斜方向のハケ目が残る。肩部に巡る沈線と押捺された印刻文の円弧の一部がみられる。内面はナデ調整で口縁部下に指頭痕が残る。復原口径15.6cmの大きさで、胎土には砂粒をほとんど含まない。122は復原口径14.0cm、胴最大径19.2cmの大きさで、口縁部が直立し、胴部が丸く膨れる器形。口縁部下の段は指先のナデで生じるが、沈線が1条巡る。肩部に釣手が貼付けられるが、ハケ目原体でナデ付けおよび外

面への刻み目を施した後に釣手に穿孔する。その後に梅花形の印刻文を2段に並べて押捺している。内面はナデ調整で指先圧痕がみられる。精良な胎土で、灰色に焼成されている。

113~115は肩部の破片で、いずれも土師質とも瓦質とも区別しえない。113は菊花状の、114は巴？らしい印刻文が押捺されている。115は2条単位の沈線と重張文が描かれている。115の内面にはハケ目が残る。

116・117と121は、鉢状の凸帯が付く破片である。116は幅広で扁平な凸帯、117・118は幅が狭く厚めの凸帯が付く。117では復原外径が27.0cmの大きさで、胴下半で屈曲して丸底の底部に移るようである。外面はハケ目調整の後に凸帯をナデおよびヨコナデで貼り付けて、117の例からして、底部付近はヘラ状工具による削りないしはナデ調整される。内面は116・118にハケ目が残るが、117ではナデ消されている。116では細砂粒・露母を若干含むが、概ね精良な胎土で、橙褐色ないし灰色系統の色調を呈している。なお凸帯より下側には煤が付着している。

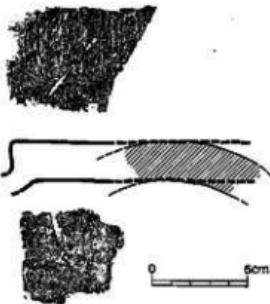
118~120は断面蒲鉾形の壺状の凸帯を貼り巡らす破片である。胴部外面はハケ目調整の後にナデないしはヨコナデで凸帯を貼り付けて、胴下部はヘラ削りされる。内面はナデ調整されるが指頭痕も残る。概ね精良な胎土で、橙褐色ないし灰色系統の色調を呈している。なお120の外面には煤が付着している。123は底部に近い破片であろう。外面はヘラ削りされる。

青磁碗（124） 口縁部と見込み中央部を欠く、高台付きの破片で、高台部まで灰色味を帯びた黄緑色の釉がかかる。龍泉窯系青磁碗であろう。

李朝青磁碗（125~128） 125・126は口縁部破片で端部は肥厚しないが、125の端部は内側する。胎土は白・黒色の斑点を含む灰色で、黄色味のある灰色系の釉調である。127・128は底部破片で、128では外径4.4cmの高台は低く、内底面には4ヶ所の目土痕がみられる。胎土は灰色ないし灰茶褐色で、釉は灰色ないし灰黄色を呈している。

染付碗（129・130） 129は底部を欠くが、復原口径12.0cm、残存器高5.2cmの大きさ。外面の口縁直下に帯状の、胴部に花柄の絵をコバルトブルーで描いている。釉の色調は乳白色で染付文様はややくすんでみえる。130は底部破片だが器壁は薄い。白青灰色の釉調で、コバルトブルーで内底面には菊らしい絵が描かれる。外面にも絵は描かれるが文様の種類はわからない。外径4.2cmの高台にまで釉はかかるが、外底面の釉は発色していない。

火鉢（131~134） 131は復原口径20.3cmの直立する口縁部破片で、口縁端部上面は平坦につくられ、直下に巡る2条の壺状凸帯間に菊花状の印刻文が押捺される。内面はハケ目調整される。132も壺状凸帯間に菊花



第133図 土焼出土瓦拓影2(1/3)

状の印刻文が押捺されるが、131とは凸帯間の幅が異なる。133・134も壇状凸帯間に印刻文が押捺されるが、133は四葉状文様を、134は∞字状文様を並べている。133の外面凸帯下はヘラ磨き、内面は横方向のハケ目がみられる。いずれも胎土は雲母を含むが精良で、暗灰色ないし黒灰色に焼成されている。

瓦（第133図） 丸瓦で、外側の面には叩き調整の痕跡があり、内面には布目压痕がみられる。細砂粒を胎土に含み、暗灰色に焼成されている。

土錘（第124図2） 端部を一部欠損するが、長さ4.9cm、外径2.0cm、孔径0.4cm、17gの重量を測る、ややすんぐりした管状土錘で、砂粒・褐色粒を胎土に含み、暗黄褐色に焼成されている。

石臼（第134図1） 玄武岩質の石材を用いた受け皿部分の縁部破片であろう。復原外径はやや不確実だが26~27cmであろう。内壁気味に開き、破片下部では厚さ3.4cmあるが、端部では厚さ2.0cmを測り、端部上面を平らにしている。外面には削り痕が凹凸をなしているが、内面はよく研磨されている。臼としては小形で、茶臼であろう。

古銭（図版64） 「朝鮮通寶」が1点出土した。直径2.4cmの大きさで、表面は肉太めの楷書体で、背面は無文である。朝鮮通寶は李朝銭で、1415年が初鋤年である。

鉄滓 総量30gの鉄滓が出土している。また炭化材もややまとまって出土した。

63号土壤（第129図）

8G区南東隅にある。検出面では不整格円形プランで、長さ165cm、幅115cm、深さ28cm。主軸方向はN79°Wをとる。柱穴状ビットが重複したような形で、中央部は浅い。

出土遺物（第135図）

土師器杯（135） 復原口径13.2cm、器高3.2cm、底径9.6cmの大きさの杯で、外底面は糸切り痕がみられる。胎土に細砂・雲母を含み、明褐色に焼成されている。

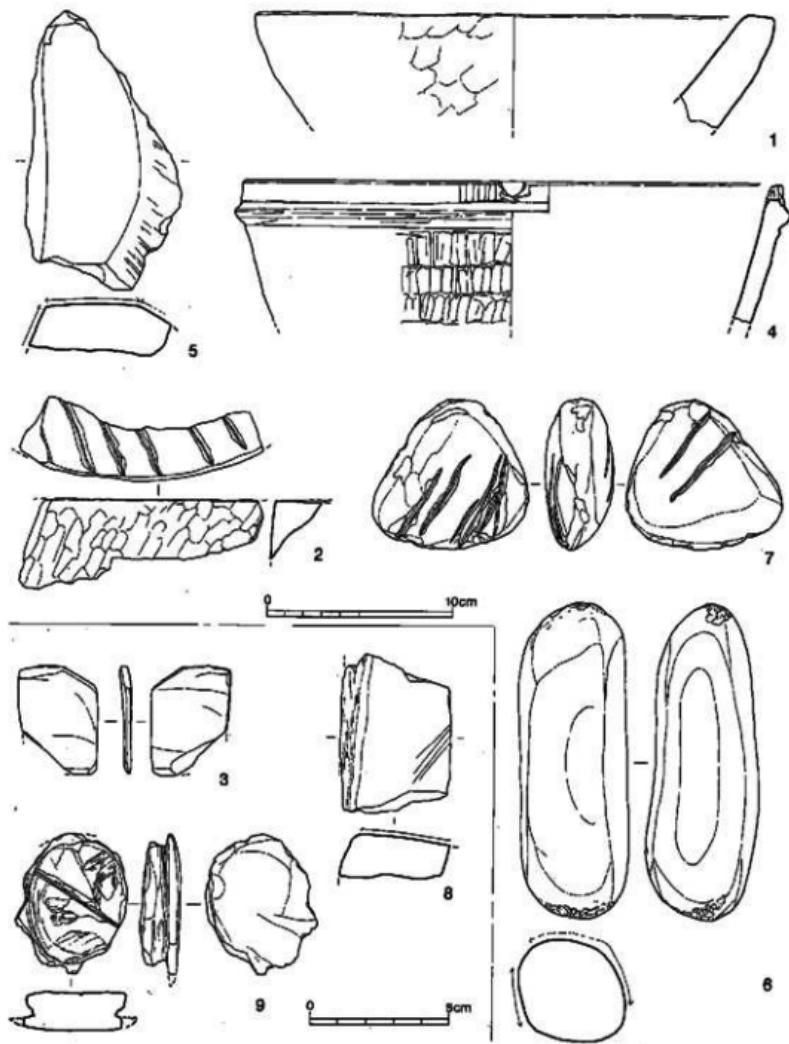
土師質攝鉢（136） 口縁部が直線的に開き、端部が面をつくる鉢で、片口が付く。内面はナデ調整で、目が刻まれている。外面にはナデの指痕痕がめだつ。胎土に雲母・角閃石・褐色粒・砂粒を若干含み、黄褐色に焼成されている。

64号土壤（第129図）

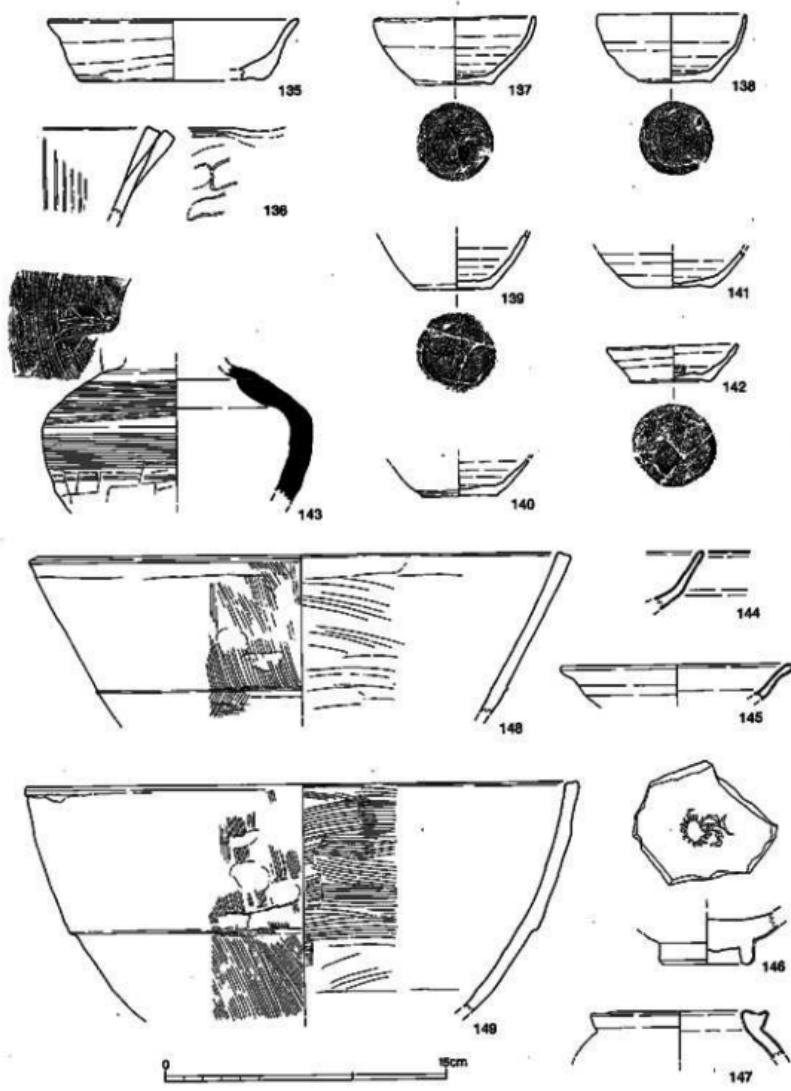
8G区東側にあり、62号土壤の北側に接する。検出面では不整格円形プランで、長さ255cm、幅160cm、深さ46cm。主軸方向はN64°10'Wをとる。大きめの柱穴状ビットが重複したような状態だが、上部に角礫などが集中していて、62号土壤の東側上部をも覆っている。

出土遺物（図版59・60・64、第135~138図）

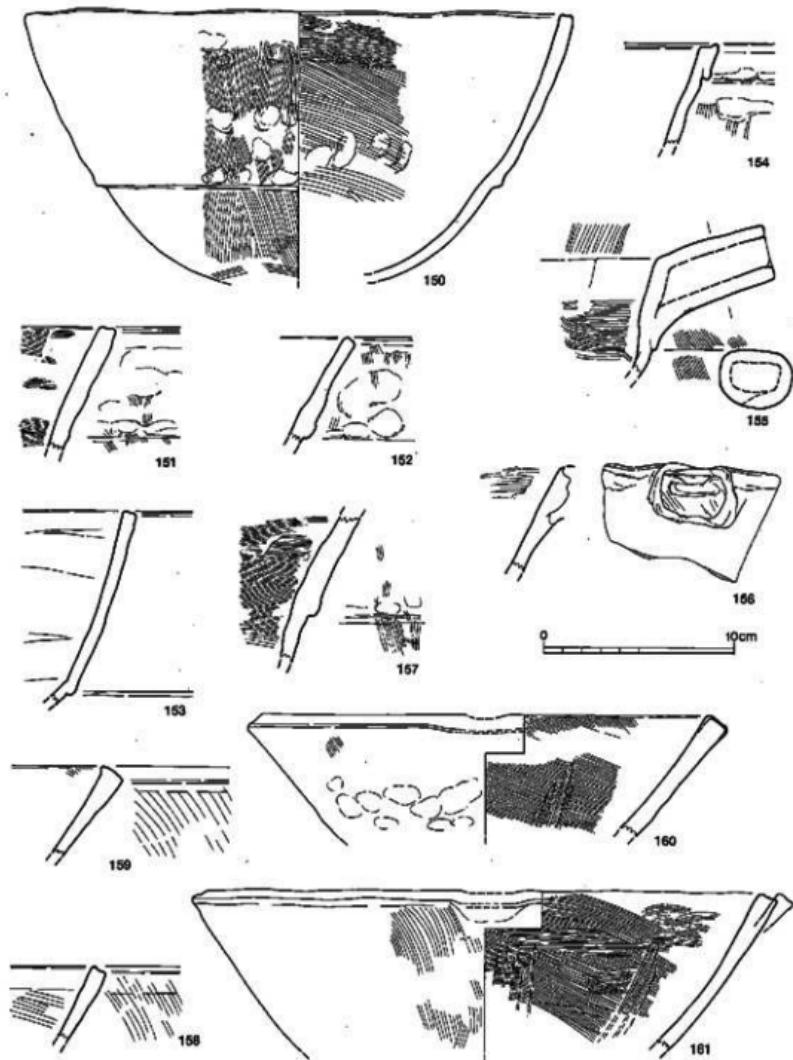
土師器皿（137~142） 137~138は深い皿で口縁部は内側する。137は口径8.6cm、器高



第134圖 土壞出土石製品實測圖 3 (1/2・1/3)



第135図 土壙出土土器実測図16 (1/3)



第136図 土壤出土土器実測図17 (1/3)

3.5cm, 底径4.1cm, 138は復原口径8.0cm, 器高3.6cm, 底径4.0cmの大きさ。いずれも外底面に糸切り痕が明瞭にみられる。雲母・赤褐色粒を含むが精良な胎土で、黄褐色に焼成されているが、煤が付着する。139~141は口縁部を欠き、口径・器高は不明ながら、底径は4.0cm前後で残存器高が2.0cmないしそれ以上であるので、137・138と同類であろう。胎土や色調もよく似ていて、139には火を受けたような痕跡と煤の付着がみられる。

142は浅めの皿で口縁部は直線的に開く。復原口径7.0cm, 器高2.0cm, 底径4.3cmの大きさ。胎土は精良で、淡橙色に焼成されているが、口縁の一部に煤が付着している。

須恵器壺（143） 胴最大径14.2cmの破片で、肩から胴部にかけてカキ目が施され、肩下部はヘラ削りされている。頸部には口頭部を繁いだ垂ぎ目があり、長頸壺であろう。肩部に花びら様のヘラ書きがみられる。細砂粒を若干含み、暗黄灰色に焼成されている。

白磁皿（144・145） 144はわずかに外反しながら聞く深めの口縁部破片、145は浅く外反して聞く口縁部破片である。黒色粒を含むやや乳白色っぽい灰色の胎土で、釉は黄色味を帯びた灰白色を呈している。

青磁碗（146） 高台部破片で、うす緑色の釉が高台外面までかかる。内底面には花柄らしい影り込みがみられる。高台外径は5.1cmを測る。

黒釉陶器壺（147） 復原口径9.4cmの大きさの口縁部破片である。端部は外側へ三角形に肥厚させて上面が中凹みの面をつくっている。胴部にかけては緩やかに膨れる。灰褐色の胎土で、内外面ともに黒褐色の釉がかかる。

土師質鍋（148~158） 148は口縁部がほぼ直線的に聞く鍋で、口縁端部は肥厚せずに平らに整えられている。復原口径29.0cmの大きさで、口縁部から胴部の段状凸帯までは7cm程の高さがある。外面はハケ目調整されるが、段より口縁側は指頭痕が残る。内面は口縁部下まで板状原体でナデられる。胎土に細砂粒・雲母を若干含み、暗橙色に焼成されるが、外面には煤が、内面には焦げ付きがみられる。

149・150・153は口縁部が内彎しながら聞く鍋で、口縁端部は肥厚せずに平らに整えられている。149は復原口径29.8cmの大きさで、口縁部から胴部の段状凸帯までは8cm程の高さがある。外面はハケ目調整されるが、段より口縁側は指頭痕が残る。内面は口縁部までハケ目調整される。胎土に細砂粒・赤褐色粒・雲母を若干含み、暗橙色に焼成されるが、外面には煤が付着し、内面には焦げ付きがみられる。150は復原口径29.0cm、底部を若干欠くものの、残存器高14.0cmの大きさのうち、口縁部から胴部の凸帯状の段までは9cm程を占める。外面はハケ目調整されるが、段より口縁側は指頭痕が残る。内面は口縁部までハケ目調整される。胎土に細砂粒・雲母を若干含み、淡橙色に焼成されているが、外面には煤が付着し、内底面付近には焦げ付きがみられる。153は口縁部から胴部の凸帯状の段までは9cm程の高さで、内面は板状原体でナデされる。胎土に細砂粒・雲母を若干含み、暗茶褐色に焼成されているが、外面には煤

が付着している。

151・152は口縁部が直線的ないし外反気味に開くが口縁端部は肥厚せず、凸帯状の段までの高さが比較的低い器形の鉢である。内面の調整は151がハケ目、152は板状原体によるナデ調整である。なお157は胴部の凸帯状の段部分の破片である。器壁は151のようにやや厚い。また158は凸帯状の段を確認できない口縁部破片である。いずれも胎土・焼成などは149・150などと大差がない。

154は口縁端部が外側に折り畳んだように肥厚する鍋の口縁部破片である。内面と肥厚部はナデ調整されている。胎土に細砂粒・雲母を含み、灰橙褐色に焼成されるが、外面には煤が付着している。

155・156は把手の付く破片で、鍋の口縁部付近に取り付けられたものであろう。155の鍋本体は内外面をハケ目、口縁部をナデ調整する。把手は、長さ5~6cm、横径4cm、縦径3cm程の梢円筒形で、口縁部に斜めに貼付けられるが、ハケ目のみられる上面以外ナデ調整される。把手の剥落した156の破片からして、梢円形ないし隅丸長方形の筒状の把手を鍋本体の口縁部外側に押し込み、ナデつけて接合されたのである。两者ともに、雲母を若干胎土に含み、暗灰色ないし暗橙色に焼成され、外面に煤が厚く付着している。

瓦質鉢（159） 直線的に開く口縁部破片で、肥厚気味の端部上面が平にされて、口唇部は内側に少し飛び出す。外面に粗めのハケ目、内面は口唇部にハケ目が残るが、磨滅している。胎土に雲母・角閃石・赤褐色粒を含み、茶灰色に焼成されている。

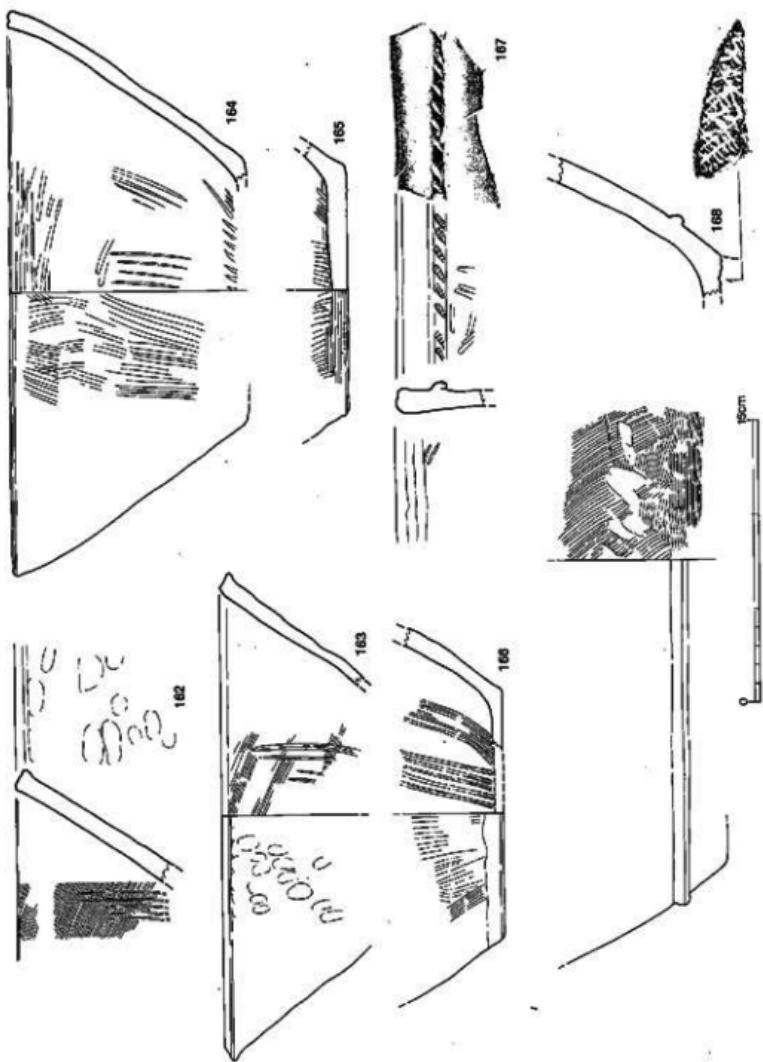
土師質掘鉢（160~166） 160・162・163は口縁部が直線的に開く掘鉢である。口縁端部は上面を平にして若干内外にはみ出し気味になる。外面にハケ目の痕跡はほとんどなく、指頭痕が残るもののがナデ調整されている。内面はハケ目の後に目が刻まれる。胎土に雲母・赤褐色粒・細砂粒を含み、橙褐色に焼成されている。160は復原口径25.0cmの大きさの口縁部破片で片口が付く。163は復原口径26.0cmの大きさの口縁部破片である。

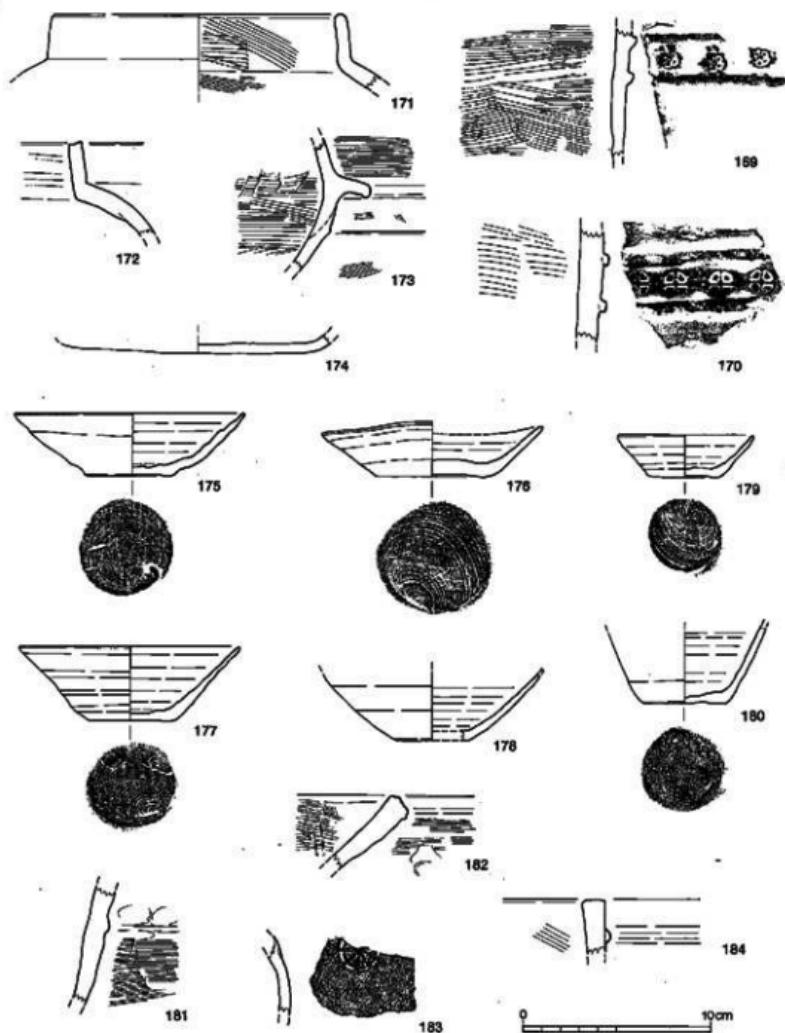
161・164は口縁部が内弯気味に開く掘鉢である。口縁端部は上面を凹み加減に整えている。外面は粗めのハケ目が残るがナデ調整されている。161は復原口径30.9cmの大きさの口縁部破片で片口が付く。内面は細かなハケ目で調整した後に目が刻まれる。胎土に雲母・赤褐色粒・角閃石・砂粒を含み、淡橙褐色に焼成されている。164は土師質より瓦質に近いが、復原口径30.0cm、器高12.7cmの大きさで、片口は確認できない。内面はハケ目調整され、4条単位の目が刻まれる。胎土に雲母・赤褐色粒を含み、黒灰色に焼成されている。

165・166は底部破片で、底径13.0cm前後の大きさ。外面に粗めのハケ目がみられ、胎土・焼成、調整手法とともに161と似る。

火鉢（167~170） 167は直立気味に立上がる口縁部破片で、端部はやや丸みをもつ。口縁下に断面蒲鉾形の凸帯が巡り、凸帯にハケ目原体と思われる小口で斜めの刻み目が付けられ

第137圖 土壤出土土器米測圖18 (1/3)





第138図 土壌出土土器実測図19 (1/3)

る。内外面はヨコナデないしヘラ磨き調整されている。胎土に雲母を若干含み、淡黄灰色に焼成されている。

168は復原底部外径32.6cmの大きさの底部破片で、腹部へ内縫気味に開く。底面には格子状に刻み目が付けられ、脚の付いていた部分が剥離したとみられる。底より少し上側に断面蒲鉾形の縦状凸帯が巡る。体部外面はヨコナデないしヘラ磨き調整、内面はハケ目調整される。胎土に雲母を若干含み、暗茶灰色に焼成されている。

169・170は胴部破片で、外面に巡る断面蒲鉾形の縦状凸帯間に印刻文が並んで押捺される。169は器壁が薄めで、内面は細かなハケ目調整、印刻文は梅花状である。170は器壁が厚めで、内面は粗いハケ目調整、印刻文は四葉状である。雲母を胎土に含み、黒灰色ないし茶灰色の色調に焼成されている。

湯釜（171～174） 171は内縫気味に直立する口縁部破片で、外面はヨコナデ、内面はハケ目調整される。172は内縫気味に直立する口縁部で、外面はヨコナデ頭部に細い沈線が巡り、内面は粗いハケ目調整がみられる。173は錫状の約2.0cm幅の凸帯が付く胴部破片である。外面の凸帯より上はハケ目調整され、下はハケ目の後にナデが加わり、煤が付着している。また凸帯の2.0cm程度には凸帯状の段も巡る。なお内面はハケ目調整される。174はわずかに丸味のある底部破片で、内外面ともにナデ調整され、外面に煤、内面に焦げ付きがみられる。いずれも雲母を胎土に含み、黒灰色ないし暗灰色あるいは茶灰色の色調に焼成されている。

石臼（第134図2） 玄武岩質の石材を用いた挽面のある下臼破片で、復原外径は36.0cm前後であろう。挽面には6条の目が刻まれており、側面は削り痕が顕著にみられる。

65号土壤（第127図）

8G区北側にあり、66号土壤の北東側に接して、66号土壤に切られる。検出面では横円形プランで、長さ102cm、幅73cm、深さ20cm。主軸方向はN57°Wをとる。土壤内堆積土の西側に数点の石が混じっていた。

土壤内には、土師器小破片が出土したのみである。

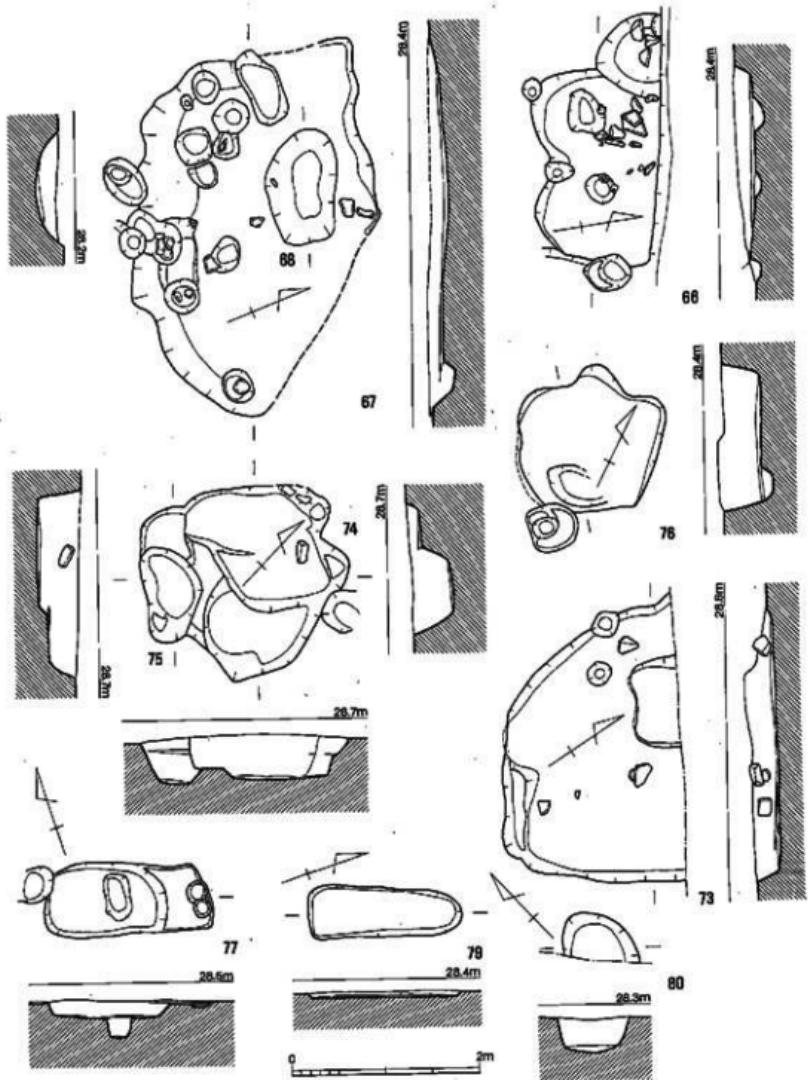
66号土壤（第139図）

8G区北側にあり、65号土壤の南西側に接し、65号土壤を切るが、北側の4号溝に削られていてプランは不明。長さ202cm+a、幅135cm+a、深さ20cm。土壤内床面を切り込む2つの柱穴状ピットとの前後関係はわからない。床面のすぐ上に角礫が散在している。

土壤内からは、須恵器片、土師器壺片なども出土したが、小破片で図示しえない。

出土遺物（図版59・60、第140図）

土師器杯（175～178） 175・176は、口径12.4・12.0cm、器高3.3・2.9cm、底径5.0・6.0cm



第139図 土壌実測図9 (1/60)

の大きさの杯で、口縁部は直線的に開き、ヨコナデ調整される。底面には糸切り痕がある。胎土に雲母・赤褐色粒・微細砂を含み、淡黄褐色に焼成されている。

177は口径11.9cm、器高4.0cm、底径4.5cmの大きさで、口縁部は直線的に開く。178は口縁端部を欠くが残存器高が3.7cmである。いずれも底面には糸切り痕があり、口縁部内外面はヨコナデ調整される。胎土に雲母・微細砂を含み、暗黄褐色に焼成されている。

土師器皿（179・180） 180は口縁端部を欠くが、残存器高4.1cmで、外径8.3cm、底径4.4cmの大きさで、口縁部は直線的に伸びるが余り開かない。内外面ともヨコナデ調整され、外底面には糸切り痕がある。胎土に雲母・微細砂を含み、淡茶褐色に焼成されている。

179は復原口径7.3cm、器高2.3cm、底径3.8cmの皿で、口縁部は直線的に開くが、端部はやや内湾する。内外面ともヨコナデ調整され、外底面には糸切り痕がある。胎土に微細砂を含み、茶褐色に焼成されているが、口縁部の一部に煤が付着している。

土師質鍋（181） 削部破片で、外面の凸帯状の段より下部はハケ目調整、上部はナデ調整される。内面はナデ調整らしい。胎土に砂粒・石英粒・雲母を含み、橙色に焼成されている。

瓦質摺鉢（182） 肥厚し、端部で外側にはみ出し気味になる口縁部破片である。口縁端部はヨコナデ調整、外面はハケ目とナデ痕、内面はハケ目の後に目が刻まれている。胎土に細砂粒を含み、白灰色に焼成されている。

瓦質湯釜（183） 器壁が0.6cm程の厚さの内側する破片で、外面はヘラ磨き？、内面はナデ調整され、外面に車輪状の印刻文が並んで押捺されている。胎土に雲母・赤褐色粒を含み、黒灰色に焼成されている。

延石（第134図3） 黄灰色を呈する肌理の細かな砂岩を用いている。破片の再利用によるのか、長さ3.9cm、幅2.8cm、厚さ0.3cmの大きさで、両面ともによく研ぎ込まれているが、側面は使用的痕跡がみられない。

67号土壙（第139図）

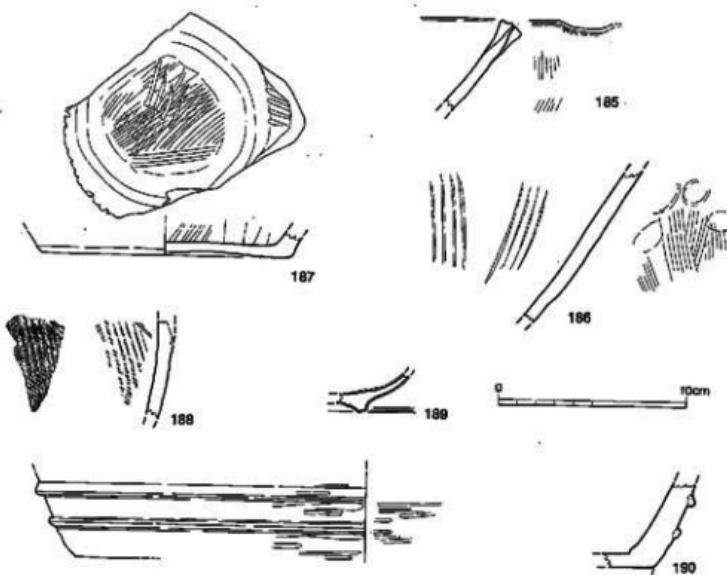
9G区南側にあり、4号溝と5号溝に挟まれ、5号溝に削られる。68号土壙と重複するが、66号土壙より新しい。検出プランは不整梢円形で、長さ378cm、幅250cm、深さ15cm。土壙内床面を切り込む柱穴状ピットとの前後関係はよくわからない。

土壙内からは、土師器小皿片、土師質鍋片なども出土したが、小破片で図示しない。

出土遺物（第138図）

瓦質火鉢（184） やや肥厚気味に直立する口縁部破片で、外面に断面蒲鉾形の線状凸帯が貼り付けられている。胎土に雲母・赤褐色粒・砂粒を含み、黒灰色に焼成されている。

68号土壙（第139図）



第140図 土壌出土土器実測図 20 (1/3)

9G区南側にあり、5号溝と67号土壌と重複するが、これらに先行する。検出プランは不整橢円形で、長さ121cm、幅78cm、深さ30cm。主軸方位をN70°Wにとる。床面は53cm×30cmの広さで、緩やかに中が凹む。

土壌内からは、土師器小皿片も出土したが、小破片で図示しない。

出土遺物（第140図）

土師質鍋（185） 片口が付く口縁部破片で、やや内唇気味に立上がり、端部は上面を凹ませている。外面は粗いハケ目調整の後にナデ、内面はナデ調整される。胎土に雲母・細砂粒を含み、橙色ないし灰褐色に焼成されている。

瓦質鉢（186・187） 186は胴部破片で、外面に指頭痕とハケ目が、内面にナデ調整痕と4条単位の目がみられる。胎土に雲母・細砂粒を含み、暗灰色に焼成されている。187は底径13.2cmの底部破片で、外面はナデ調整痕、内面はハケ目と4条単位の目がみられる。胎土に雲母・赤褐色を含み、黒灰色に焼成されている。

69号土壤（第127図）

8G区北東隅にあり、70号土壤より後出するが、境目は不明確であり、検出プランは不整格円形。長さ183cm、幅147cm、深さ26cm。主軸方位をN19°Eにとる。床面は145cm×90cmの広さで、柱穴状ピットとの前後関係も不明である。

土壤内からは、土師器片・瓦質土器片も出土したが、小破片で図示しない。

出土遺物（第140図）

土師賀鉢（188） 腹部破片で、外面はナデ調整、内面はハケ目の後に暗文状のヘラ磨き痕が目のように並ぶ。胎土に雲母・細砂粒を含み、茶灰褐色に焼成されている。

70号土壤（第127図）

9G区南東隅にあり、69号土壤に切られるが、プランは不整格円形であろう。長さ210cm、幅125cm、深さ16cm。主軸方位をN70°Eにとる。東側の柱穴状ピットにも切られる。

土壤内からは、土師器小皿片・摺鉢片も出土したが、小破片で図示しない。

出土遺物（第140図）

李朝青磁（189） 瓶の底部破片で、全体に灰緑色の釉がかかるものの、内底面と疊付きに目土の痕がみられる。胎土は精良で、灰色を呈している。

瓦質火鉢（190） 復原底径31.0cmの大きさの底部破片で、腹部へは内縁気味に開く。内外面ともにハケ目調整した後にヘラ磨きないしナデ調整されている。胎土に雲母・細砂粒を含み、黄灰色に焼成されている。

71号土壤（第129図）

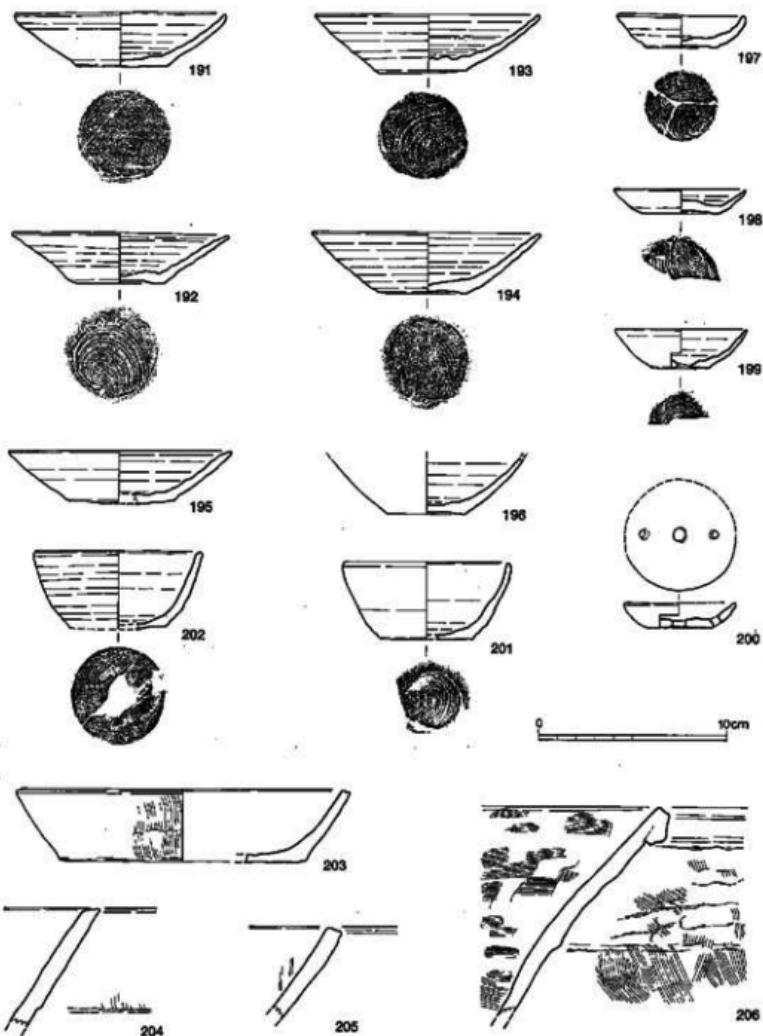
9F区北西隅にあり、検出プランは不整格円形である。長さ490cm、幅330cm、深さ40cm。主軸方位をN80°20'Wにとる。床面は400cm×240cmの広さで、南側がわずかに高めである。中央部東寄りの床面から少し上位に塊石などが集まる。

土壤内からは、須恵器壺片・土師器壺片・青磁片・白磁片なども出土したが、小破片で図示しない。

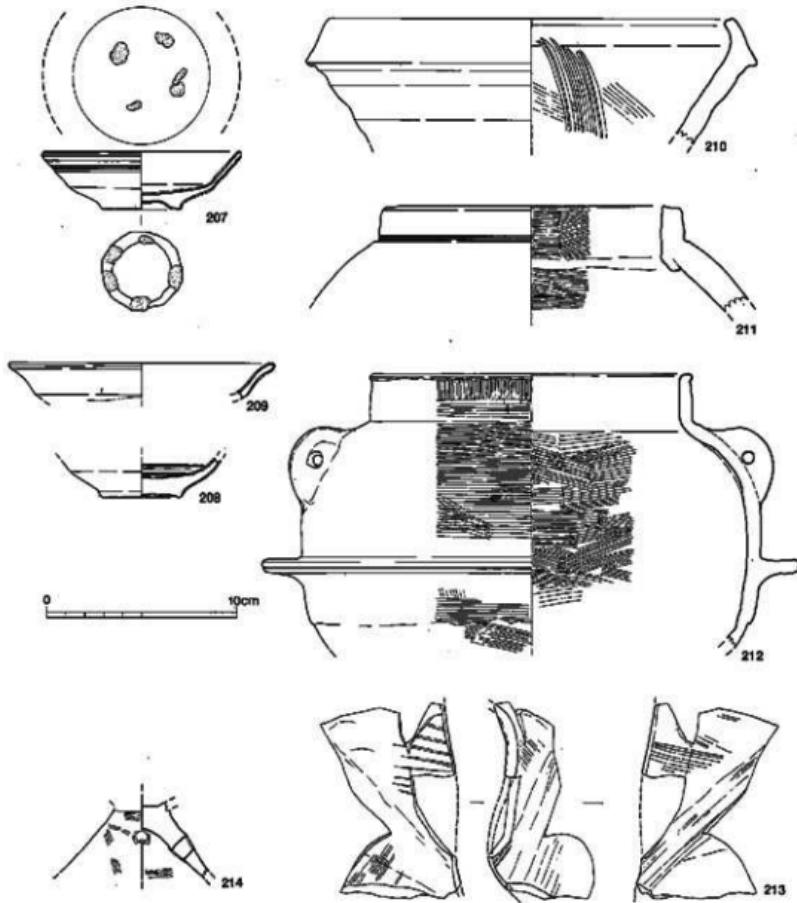
出土遺物（図版60・61・63、第141～143図）

土師器杯（191～196） 口径11.3～12.2cm、器高2.5～3.3cm、底径4.2～5.8cmの大きさの杯で、外底面には糸切り痕がある。口縁部は直線的に開き、端部が内縁気味になるものもある。胎土に雲母・赤褐色粒を若干含み、黄褐色ないし淡茶褐色の色調を呈している。191～194には煤が内面を中心に一部外面にも付着している。

土師器小皿（197～202） 197～200は、口径5.9～7.0cm、器高1.3～2.1cm、底径3.0～4.1cmの大きさの小皿で199がやや深い。外底面には糸切り痕があり、口縁部は内縁気味に開く。199



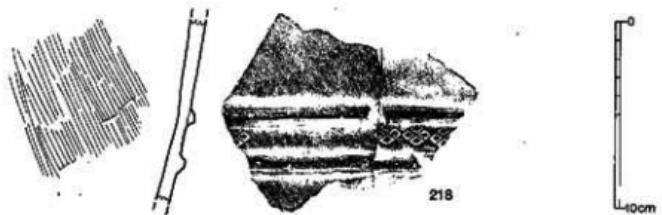
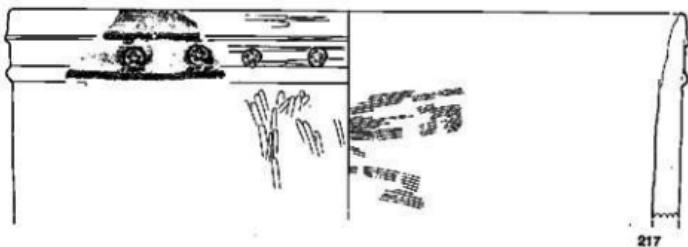
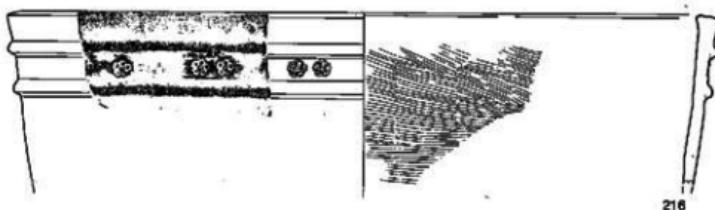
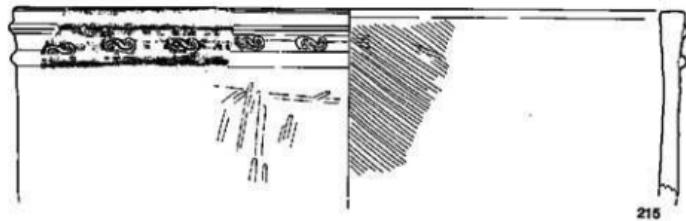
第141図 土坡出土土器実測図 21 (1/3)



第142図 土壌出土土器実測図 22 (1/3)

は底部中央に焼成後の穿孔がみられ、200は底部中央に径7mmの孔と、底部両端に径4mmの双孔が焼成前に穿孔されている。胎土に雲母・赤褐色粒を若干含み、黄褐色ないし淡茶褐色の色調を呈している。197の口縁部に煤が付着している。

201・202は、口径9.0cm、器高4.0~4.1cm、底径5.0~5.2cmの大きさの小皿で、外底面には糸切り痕があり、口縁部は内唇気味に立上がる。胎土に雲母・赤褐色粒を若干含み、黄褐色ない



第143図 土壌出土土器実測図 23 (1/3)

し暗褐色の色調を呈している。201では底部内外に煤が付着している。

土師器大杯 (203) 復原口径18.0cm, 器高3.9cm, 底径13.4cmの大きさで, 外底面は磨滅す

るが、口縁部は内側気味に開く。外面は縱方向のハケ目が残るが、ナデ、内面ヨコナデ調整される。

胎土に雲母・細砂粒を含み、暗橙褐色に焼成され、内外面に煤が付着している。

土師器高杯（214）柱状部破片で、裡に向かってラッパ状に開く。内外面ともにヘラ磨き調整され、4ヶ所の円孔が穿孔される。胎土に赤褐色粒・雲母・細砂粒を含み、淡黄褐色に焼成されている。混入品であろう。

土師質鍋（204～206）204は口縁部が直線的に開き、口縁の5cm程下に凸帯状の段がある。口縁端部は肥厚せず、上面は平らである。外面の一部にハケ目が残るが内外ともにナデ調整される。205は口縁部が内側気味に開き、口縁端部は肥厚せず、上面は平らである。内外面ともに磨滅している。206は口縁部が外反気味に開き、口縁端部は折り疊んだように肥厚して三角凸帯にも似る。内外面ともにハケ目調整されているが、口縁の8cm程下の外面に凸帯状の段があり、口縁部側は指頭痕の残るナデが加わっている。いずれも胎土に雲母・細砂粒を含み、橙褐色ないし暗橙褐色に焼成されている。

湯釜（211・212）211は器壁が厚めで、直立した口縁部は、端部で内面側につまんだように整えられて、復原口径15.7cmの大きさ。胴部にはなだらかに膨れる。内面はハケ目調整されるが、外面はヨコナデないしナデ調整される。胎土に赤褐色粒・雲母・角閃石・細砂粒を含み、淡黄褐色に焼成されている。

212は器壁が薄めの湯釜である。復原口径17.0cm、胴最大径24.2cm、錐状凸帯の外径28.4cm、残存高14.3cmの大きさ。口縁部は直立し、端部でわずかに外側に拡張される。肩部はなだらかに膨れ、胴最大径の位置に錐状の薄い凸帯が付けられ、その2cm程下に凸帯状の段があり、底部へすばまる。内外面ともにハケ目調整されるが、錐状凸帯部分と口縁部にヨコナデが加わる。肩に双耳の釣手が付けられ、径0.6cm程の円孔が穿孔されている。胎土に赤褐色粒・雲母・細砂粒を含み、淡橙褐色に焼成され、外面に煤が付着する。

器種不明（213）口縁部らしい部分もあるがS字状に捻れていて、破片のため全体の形は判断しない。器壁は0.5cm程の厚みで、曲げられた内面側は浅い叩き目が、外面にはハケ目がみられる。胎土に雲母・砂粒を含み、淡明褐色に焼成されているが、部分的に二次熱を受けて赤化している。

陶磁器皿（207～209）207・208は李朝青磁皿であろう。207の例では復原口径10.5cm、器高3.1cm、底径4.2cmの大きさで、口縁部は直線的に開き、端部下に浅い沈線状の段がみられる。高台底の一部を浅く削る部分もあるが、重ね焼きの際の目土痕が、内底面と高台底にみられる。灰色の精良な胎土で、全体にかかる釉は灰緑色を呈している。208も同様な胎土、釉調だが、高台が低く、内底に沈線が巡る。

209は、復原口径14.0cmの大きさの外反する口縁部破片で、灰白色の精良な胎土で、やや緑味

を帯びた灰色の釉がかかる。白磁皿であろう。

摺鉢 (210) 復原口縁外径23.8cmの大きさの備前系摺鉢で、直線的に開いた口縁部は、く字形に屈折して内傾し、外側に若干垂れたような形を呈する。外面はヨコナデ調整、内面はハケ目もわずかに残るがナデ消されて、7条単位の目が刻まれている。精良な胎土で、紫褐色に焼成されている。

火鉢 (215~218) 215~217は直立ないし直立気味に開く口縁部破片で、口縁の下に2条の断面蒲鉾形の縦状凸帯が巡る。口縁部端部は肥厚気味で上面を平に整え、凸帯間にはそれぞれ、蕨状S字形、梅花形、丸開き梅花形の印刻文が並べて押捺されている。外面はヘラ磨き調整で、内面はハケ目調整される。218は胴下部の破片であろう。やはり2条の縦状凸帯間に印刻文が押捺されるが、文様は四菱形である。これらの火鉢は器壁の厚みに差異があるものの、胎土に雲母・赤褐色粒などを若干含み、黒灰色ないし暗灰色や暗黃灰色の色調に焼成されている。

土鍤 (第124図3) 完形品で、長さ4.4cm、外径1.1cm、孔径0.3cm、重量4.2gを測る、比較的細い管状土鍤である。

土製硯 (第124図4) 円面観の脚破片である。幅1.9cm、厚さ0.8~0.9cmの、扁平な棒状で、5.4cm長さ分が残る。上端部に透かし切り込みの端が確認できる。外面にはハケ目の痕跡を残すがヘラ磨き調整されている。内面側は横方向にハケ目調整されている。少量の砂粒を含むが精良な胎土で、暗茶灰褐色を呈している。

鉄滓 総量40gの鐵滓が出土した。

72号土壤 (図版49-1・51-1・2、第118図)

10G区南東隅にあり、16号土壤の西側に重複して、16号土壤より先行する。検出プランは不整橢円形で、長さ284cm、幅207cm、深さ55cm。主軸方位をN22°Eにとる。床面は浅い土壤が集まつたように凹凸があり、東側がわずかに高めである。南寄りの床面から少し上位に塊石などが集まる。

出土遺物 (図版61、第144図)

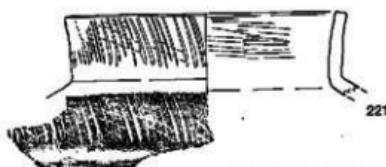
土師器杯 (219) 復原口径12.0cm、器高3.4cm、底径5.2cmの大きさの杯で、外底面には糸切り痕があり、ヨコナデ調整される口縁部は直線的に開く。胎土に雲母・赤褐色粒・微細砂粒を含み、黄褐色に焼成されるが、底面中央に焼成後の穿孔があり、底部を中心内外面に煤が付着している。

青磁碗 (220) 内縁気味に立上がる直口縁の破片で、復原口径15.0cmの大きさ。黑色粒を含む灰白色の胎土で、うす緑色の釉がかかる。

土師質釜 (221) 短く直立し、端部上面を平らに整える口縁部破片で、外面は縦方向の粗めのハケ目、内面は横方向のハケ目がみられる。胎土に雲母・細砂粒を若干含み、明橙褐色に



220



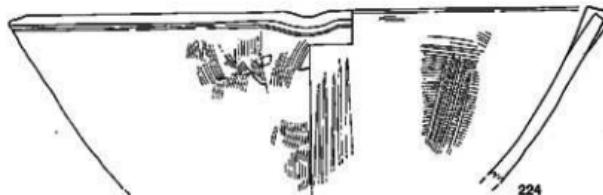
221



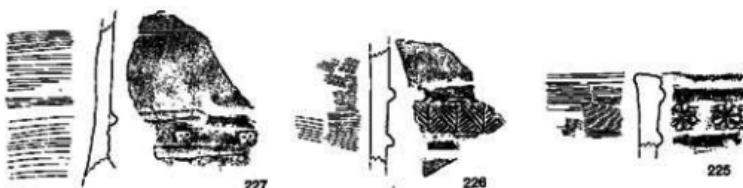
222



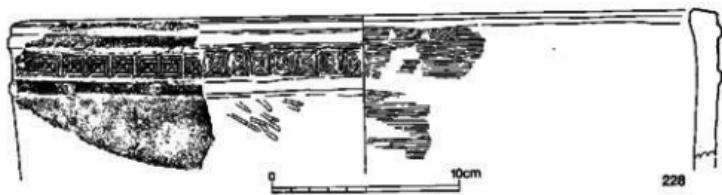
223



224



225



226

第144図 土塼出土土器実測図 24 (1/3)

焼成されている。

土師質鍋 (222) 直線的に開き、端部が折り疊んだように肥厚する口縁部破片で、口縁から7cm程度下に凸帯状の段がある。内外面ともにハケ目を残すが、ナデ消されている。胎土に雲母・細砂粒を含み、橙色に焼成されるが、外面は煤が付着し黒褐色を呈している。

土師質擂鉢 (223・224) 直線的に開き、端部上面を平らに整えた口縁部破片で、224では復原口径32.0cm、残存高9.3cmの大きさで、僅かに内縁気味な器形をなし、片口が付く。いずれも外面はハケ目と指頭痕の残るナデ調整で、内面はハケ目の後に目が刻まれる。胎土に雲母・細砂粒を含み、淡橙色ないし淡茶褐色に焼成されている。

瓦質火鉢 (225~228) 225・228は内縁気味に直立する口縁部破片で、口縁下に巡る2条の籠状凸帯間に、印刻文が並んで押捺されている。225は菊花状の8花弁形、228はX印が重なる二重樹形の文様である。226・227は胴部破片だが、やはり籠状凸帯間に印刻文が並んで押捺されている。226が斜内に向きの異なる斜線文、227が梅花形の文様である。これらの火鉢破片はいずれも、外面がヘラ磨き、内面がハケ目調整される。胎土に雲母を含み、黒灰色、暗灰色ないし暗黄灰色の色調に焼成されている。

鉄 淬 総量40gの鉄滓が出土した。

73号土壤 (第139図)

10G区南側にあり、72号土壤の北側に位置するが、調査区域外に統く。検出プランは不整円形状で、長さ300cm前後、幅190cm+ α 、深さ35cm。床面は東側がやや深めながらも、ほぼ平坦である。床面より浮いて角礫が散在する。

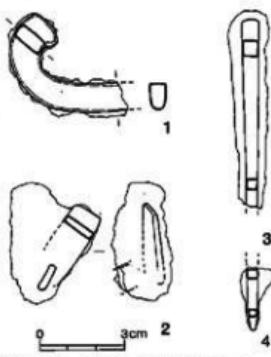
土壤内から、土師器小皿片・棗片なども出土したが、小破片で図示しない。

出土遺物 (図版 61・63、第145・146図)

土師質鍋 (231) 口縁端部を外側に折り疊んだように肥厚させ、三角凸帯状になる口縁部破片である。外面にハケ目が一部残り、内面は口縁端までハケ目調整される。胎土に雲母・細砂粒を含み、黄橙色を呈する。

瓦質擂鉢 (229・230) 内縁気味に開き口縁端部を上側につまむように整える器形の鉢である。外面には指頭痕が残り、内面はハケ目調整の後に目が刻まれている。229は復原口径27.8cmの大きさ、230は復原口径27.0cmの大きさで、片口が付く。胎土に雲母・角閃石・細砂粒を含み、淡青灰色ないし灰黄橙色を呈する。

瓦質火鉢 (232・233) 232は復原口径34.0cmの大きさの、



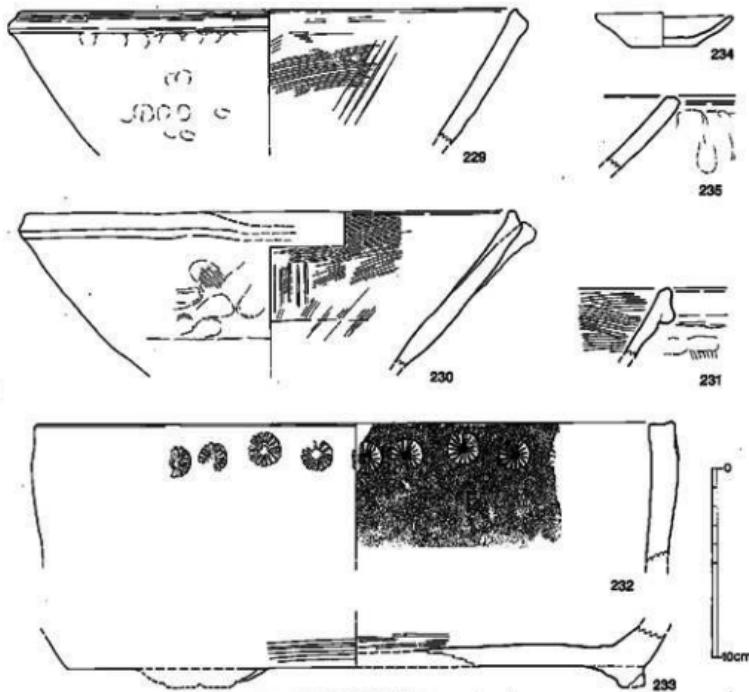
第145図 土壌出土鉄製品実測図2
(1/2)

口縁部が内輪気味に直立する口縁部破片である。口縁下に、菊花状の16花弁形の印刻文を並べて押捺している。233は脚台を付けた底部破片で、復原底外径31.0cmの大きさ。内外面ともにハケ目調整される平らな底面から胴部が内輪気味に彫れ、外面はヘラ磨き調整されている。脚台は雲形で、3ヶ所付けられていたものと推定される。胎土に雲母・角閃石・赤褐色粒・細砂粒を含み、暗灰色ないし黒灰色を呈する。

鉄製品（第145図1） 痕手状に曲がる端部をもつが、反対側を欠損する。幅1.0~1.2cm、厚さ0.5~0.6cmだが、欠損側で一方の側縁が尖り気味になることから、刀ないし刀子の柄部分の可能性もある。

74号土壙（第139図）

10G区中央部にあり、73号土壙の西側に位置するが、75号土壙を切る。不整方形プランで、



第146図 土壙出土土器実測図 25 (1/3)

長さ200cm、幅150cm、深さ50cm。主軸方位をN45°Wにとる。床面は2段ではほぼ平坦だが、北側が深い。

土壤内から、土師器小皿片が出土したものの、小破片で図示しえない。

75号土壤（第139図）

10G区中央部にあり、74号土壤の西側に重複するが、74号土壤に切られる。不整梢円形プランで、長さ144cm、幅65cm、深さ47cm。主軸方位をN44°30'Wにとる。床面は2段ではほぼ平坦だが、南東側が深い。土壤内から、土師器壺片も出土したが、小破片で図示しえない。

出土遺物（第146図）

土師器小皿（234） 復原口径7.3cm、器高1.6cm、底径3.4cmの大きさの小皿で、口縁部はやや内寄気味に開く。胎土に雲母・赤褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成されるが、内面に煤が付着している。

土師質鍋（235） 直線的に開き、口縁端部が肥厚しない鍋の口縁部破片である。外面は指頭痕の残るナデ調整、内面は丁寧にナデ調整される。胎土に雲母を含み、橙褐色に焼成されるが、内外面に煤が付着している。

76号土壤（第139図）

10G区南西隅から10H区南東隅にかけて位置する。不整円形プランで、長さ160cm、幅157cm、深さ40cm。床面は北東側にやや高く、南側に浅いピットがある。

土壤内から、土師器壺片、瓦質土器片、陶磁器の出土を確認したが、小破片で図示しえない。

77号土壤（第139図）

9H区北端から10H区南端にかかり、76号土壤の南西側に位置する。不整長方形プランで、長さ180cm、幅80cm、深さ15cm。主軸方向はN72°Wをとる。床面は2段で西側が深く、中央に深さ約20cmのピットがある。

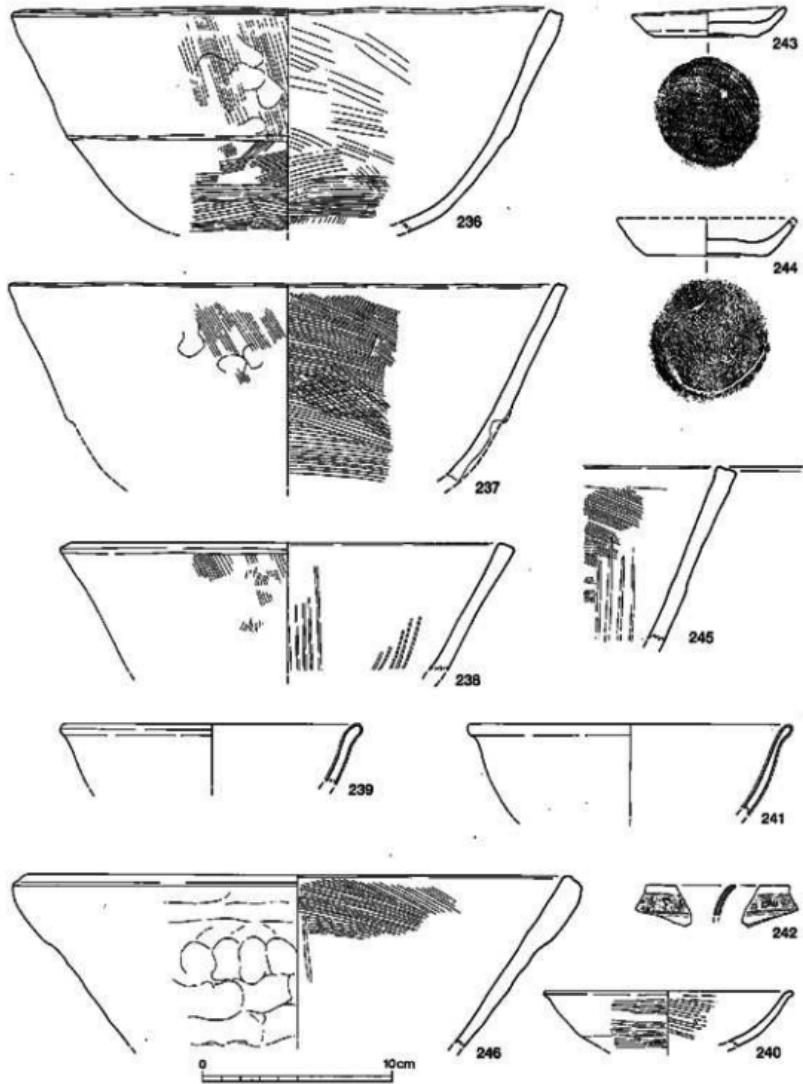
土壤内から、糸切り底の土師器小皿片の出土を確認したが、小破片で図示しえない。

78号土壤（第129図）

9G区北端と10G区南端にかかり、72号土壤の南西側に位置する。不整円形プランで、長径123cm、短径120cm、深さ70cm。床面はやや中凹みである。北東側の上部に土器類・塊石などがまとまって発見された。

土壤内から、須恵器壺、土師器壺、糸切り底小皿片も出土したが、小破片で図示しえない。

出土遺物（図版61、第147図）



第147図 土墳出土器実測図 26 (1/3)

土師質鍋 (236・237) 丸みのある胴下半から、凸帯状の段を介して、直線的に口縁部が開く器形の鍋である。口縁端部は肥厚せず、上面を平らに整えている。胎土に雲母・赤褐色粒を含み、橙褐色ないし茶褐色に焼成されるが、外面に厚く煤が付着する。236は復原口径29.0cm、残存器高11.7cmの大きさで、口縁から約7cm下に段があり、内外面ともにハケ目調整されるが、内面の上半部は板状原体によるナデ調整、外面の上半部は指頭痕がみられる。237は復原口径29.4cm、残存器高10.3cmの大きさで、口縁から約7cm下に段があり、内外面ともにハケ目調整されるが、外面の上半部は指頭痕が残り、下半部は剥落部分が多い。

土師質鋗鉢 (238) 復原口径23.8cm、残存器高6.8cmの大きさで、口縁部が直線的に開き、端部上面が平らに整えられている。外面は剥落・磨滅するがハケ目が残り、内面には目が刻まれている。胎土に雲母・赤褐色粒・砂粒を含み、淡橙褐色に焼成されている。

青磁楕 (239) 外反する口縁部破片で、復原口径は16.0cm。黒色粒を含む灰色の胎土で、淡く灰色がかった緑色の釉がかかる。

79号土壤 (第139図)

9F区西側にあり、71号土壤の南側に位置する。不整長方形プランで、長さ163cm、幅59cm、深さ5cm。主軸方位は $19^{\circ} 30' E$ をとる。床面はほぼ平坦である。

土壤内から、糸切り底小皿片も出土したが、小破片で図示しえない。

出土遺物 (第147図)

黒色土器楕 (240) 復原口径13.0cm、残存器高3.0cmの大きさの、口縁端部が外反する浅めの楕である。内外面ともに横方向にヘラ磨きされる。胎土は細砂粒・雲母を含むが精良で、黒色を呈する。

80号土壤 (図版49-2、第139図)

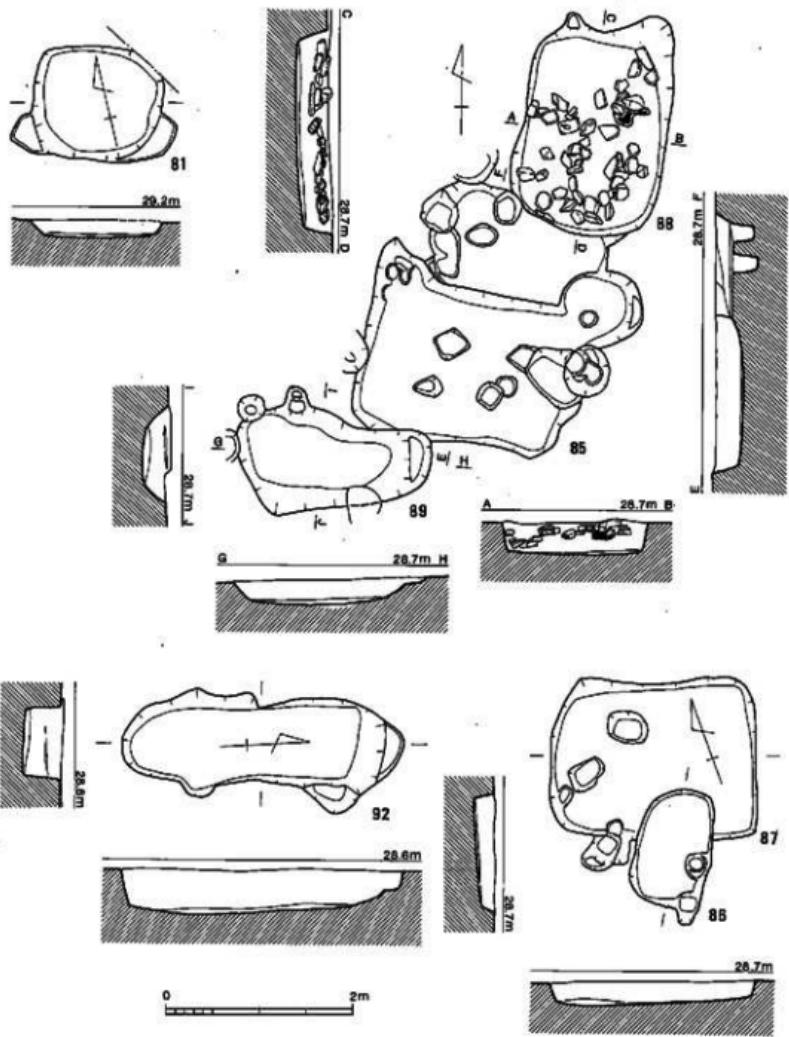
8G区中央部にあり、66号土壤の南側に位置するが、南側は調査区域外に統く。梢円形プランかと推定できるが、長さ85cm+α、幅65cm+α、深さ38cm。床面は中凹みである。

土壤内から、糸切り底小皿片、土師器壺片が出土したものの、小破片で図示しえない。

81号土壤 (第148図)

13E区西端にあり、歴史時代の土壤では最も北側に相当する。一部調査区域外に統くが、不整円形プランで、長さ140cm、幅118cm、深さ18cm。主軸方位はN $75^{\circ} W$ をとる。床面は平坦である。

土壤内から、糸切り底小皿片が出土したものの、小破片で図示しえない。



第148図 土壌実測図10 (1/60)

84号土壙（第123図）

7D区南端にあり、36号土壙の北側に位置する。溝に南側を削られているが、検出面では不整円形プランで、長さ110cm、幅96cm、深さ30cm。主軸方位はN42°30' Eをとる。床面は中凹みである。なお82号・83号土壙はそれぞれ15号・16号土壙墓に改称した。

土壙内から、糸切り底小皿片も出土したが、小破片で図示しない。

出土遺物（図版61、第147図）

青磁椀（241） 復原口径16.0cm、残存器高4.9cmの大きさの、口縁部端部が外反して僅かに肥厚気味になる。黒色粒を含む灰色の胎土で、にぶくやや灰色味のある緑色の釉がかかる。

染付碗（242） 外反する口縁部破片である。コバルトブルーで、外面に雷状文、内面に生垣状の文様を口縁に沿った帯状に描いている。乳白色の胎土で、白青灰色の釉がかかる。

85号土壙（第148図）

7E区東端にある。88号土壙に北端を、89号土壙に南端をわずかに削られるが、検出面では隅丸方形プランで、長さ276cm、幅241cm、深さ32cm。主軸方位はN10°30' Eをとる。北側が一段高い床面になり、南側の深い床面ともに平坦である。東側に柱穴状ピットと重複するが、おそらく後に掘り込まれたものであろう。

土壙内から、須恵器片、土師器片、青磁器片も出土したが、小破片で図示しない。

出土遺物（図版61、第147図）

土師器小皿（243） 口径8.1cm、器高1.6cm、底径5.5cmの大きさの、糸切り底小皿で、口縁部はヨコナデ調整で内縁気味に開く。胎土に雲母を含み、淡橙茶色に焼成されている。

86号土壙（第148図）

7D区北寄りにある。87号土壙を切り、検出面では不整格円形プランで長さ129cm、幅81cm、深さ22cm。主軸方位はN29° Eをとる。床面はほぼ平坦で、南側に柱穴状ピットがある。

土壙内から、土師器片が出土したもの、小破片で図示しない。

87号土壙（第148図）

7D区北端にある。86号土壙に南側の一部を切られるが、検出面では不整長方形プランで長さ220cm、幅167cm、深さ28cm。主軸方位はN70° Wをとる。床面はほぼ平坦だが、北側がわずかに高めで、柱穴状ピットが後から掘り込まれている。

土壙内から、須恵器片や、糸切り底小皿片などの土師器片が出土したもの、小破片で図示しない。

88号土壙（図版52-1, 第148図）

7D区西端と7E区東端にかけてあり、85号土壙を一部を切る。検出面では隅丸長方形プランで長さ220cm, 幅161cm, 深さ34cm。主軸方位はN $6^{\circ} 50'$ Eをとる。床面はほぼ平坦で、堆積土上位に塊石が散在していた。

土壙内から、土師器壺片、土師質鍋片、青磁・白磁片も出土したが、小破片で図示しえない。
出土遺物（図版61, 第147図）

土師器小皿（244） 復原口径9.5cm, 器高1.9cm, 底径6.5cmの大きさの、糸切り底小皿で、口縁部はヨコナタ調整される。胎土に雲母を含み、淡橙茶色に焼成されている。

土師質擂鉢（225） 直線的に開き、端部がほとんど肥厚せず、上面を平らに整える体で、外側はナタ調整、内面はハケ目調整の後に目を刻んでいる。胎土に雲母を含み、橙色ないし赤橙に焼成されている。

89号土壙（第148図）

7E区にあり、85号土壙を一部を切る。検出面では不整橢円形プランで長さ260cm, 幅117cm, 深さ26cm。主軸方位はN 86° Wをとる。床面はわずかに中凹みである。

土壙内から、土師器糸切り底小皿片、土師質擂鉢片、焼土塊が出土したもの、小破片で図示しえない。

90号土壙（第125図）

7E区にあり、41号土壙・42号土壙と重複して、42号に切られてプランなど不明瞭である。深さは22cmで、床面はほぼ平坦である。

土壙内から、土師器糸切り底小皿片と壺片が出土したものの、小破片で図示しえない。

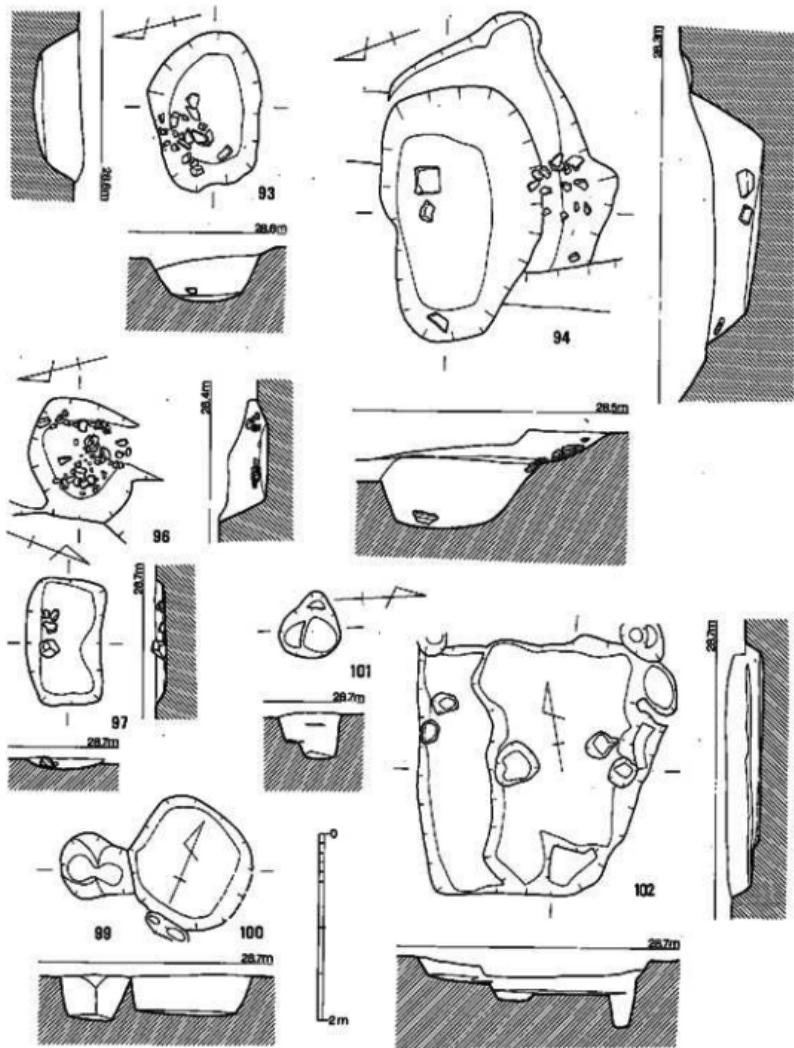
91号土壙（第125図）

6E区北西部にあり、47号土壙・57号土壙と重複して、57号に切られ、47号を切る。プランは不整長方形であろうか主軸方位もN 12° E前後であろう。長さ106cm+α, 幅110cm, 深さ33cmで、床面は中凹みである。

土壙内から、土師器糸切り底片も出土したが、小破片で図示しえない。

出土遺物（第147図）

土師質擂鉢（246） 口縁部が直線的に開き、端部付近で肥厚気味だが端面を平らに整えている。外側には指頭痕が顕著にみられ、内面は磨滅するがハケ目調整の後に刻まれた目がわかる。復原口径30.0cm, 残存器高9.0cmの大きさ。胎土に砂粒を含み、黄茶褐色に焼成されている。



第149 図 土被実測図11 (1/60)

92号土壙（第148図）

7E区中央部で、88号土壙の約3m西側の位置にある。不整長梢円形プランで、長さ302cm、幅113cm、深さ47cmの規模で、主軸方向はN3° Eをとる。床面は240×70cm程の広さで、中程が凹み気味ながらもほぼ平坦である。

土壙内から、土師器壺・小皿片、土師質鍋片、摺鉢片などが、出土したものの小破片ばかりで、図示しえない。

93号土壙（第149図）

7F区東端で、53号土壙の約3m北側に位置する。不整梢円形プランで、長さ171cm、幅120cm、深さ60cmの規模で、主軸方向はN75° 40' Wをとる。床面は115×80cm程の広さで、中凹みである。壙内の北側に塊石や土器片がややまとまって発見された。

土壙内から、土師器糸切り底皿片、摺鉢片、陶器片、焼土塊なども出土したが、いずれも小破片で図示しえない。

出土遺物（第150図）

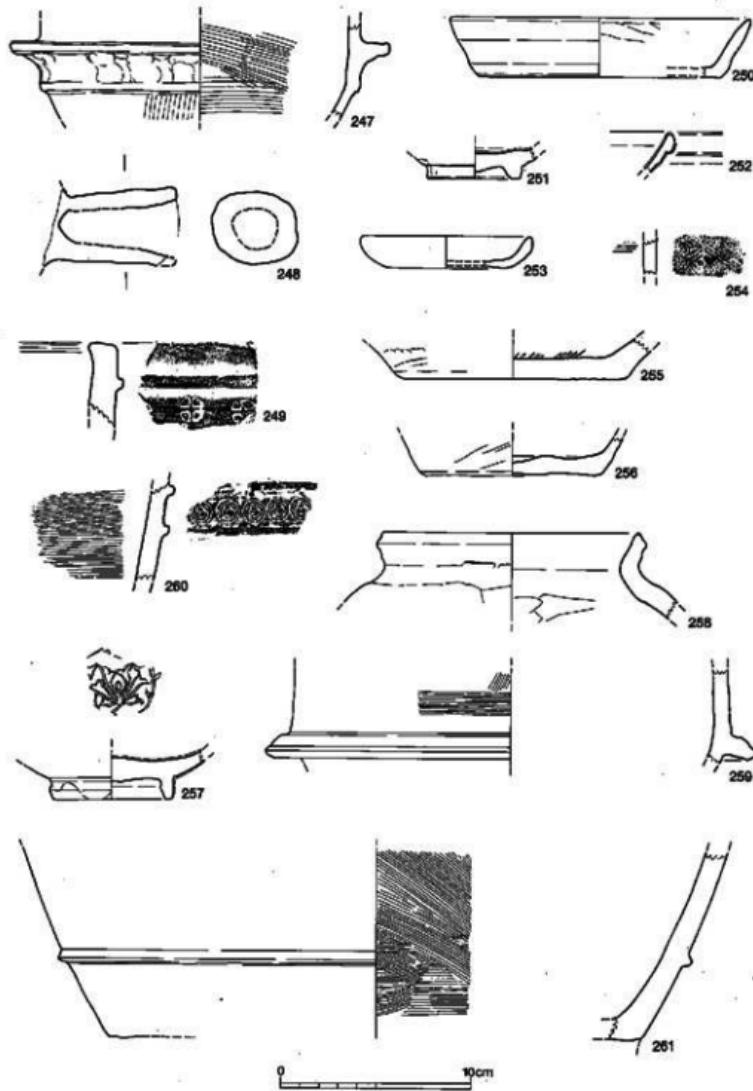
土師質湯釜（247） 復原胴最大径17.0cmの位置に、錐状の凸帯が付けられた胴部破片で凸帯の外径20.0cmの大きさである。凸帯下は指頭痕の残る部分があり、ナデられているが、2cm程下に凸帯状の段があり、これを介してすばまる底部側に移り、縱方向にハケ目調整される。内面は横方向ないし斜方向にハケ目調整される。精良な胎土で、淡黄橙色に焼成されているが、外面には煤が付着している。

土師質鍋（248） 口縁部から剥落したとみられる把手部分の破片である。長径4.1～4.8cm、短径3.3～4.1cm、厚み0.5～1.0cm、長さ6.3cm程の梢円筒状で、全体にハケ目調整の後にナデ調整されるが浅い凹凸がある。蓋母を含む胎土で、橙褐色に焼成されているが、外面には煤が付着している。

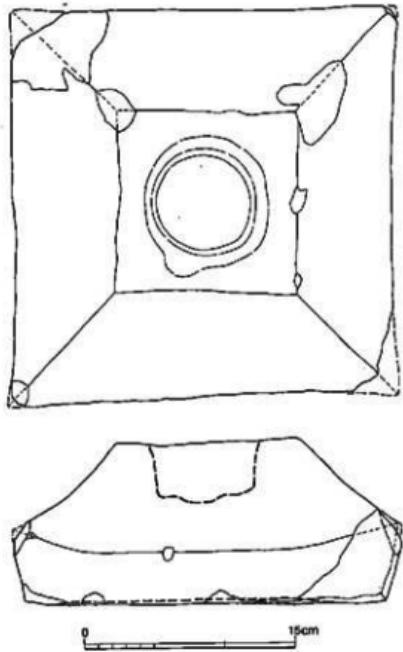
瓦質火鉢（249） 直に立上がる口縁部破片だが、ヨコナデ調整され、端部は内側気味にしつつ上面を平らに整えている。口縁部外面に蒲鉾形断面の椎状凸帯が巡り、その下に四葉文様の印刻文が、並んで押捺される。胎土に蓋母を含み、黄灰褐色に焼成されている。

94号土壙（図版51-3、第149図）

8F区南東隅にあり、93号土壙の約2m北側に位置する。3号溝に上部を削られるが、不整梢円形プランで、長さ270cm、幅173cm、深さ75cmの規模で、主軸方向はN70° Wをとる。床面は180×100cm程の広さで、北西側がやや高く、緩やかに東側に傾斜する。北側の床面より少し浮いた位置で石塔材、南側肩部に塊石などが散在していた。



第150図 土壌山土器実測図 27 (1/3)



第151図 土壌出土石製品実測図4(1/4)

土壌内から、土師器糸切り底皿片なども出土したが、小破片で図示しえない。

出土遺物(図版64、第134・151図)

石鍋(第134図4) 滑石製石鍋の直線的に開く口縁部破片。復原口径29.2cm、残存器高7.5cmの大きさ。器壁の厚みは約1.0cmで、口縁部外に断面三角形の凸帯が巡る。口縁端部は上面をほぼ平らに整えている。内面は研磨されて平滑な面を有するが、外面は長さ1.5~2.0cmで、0.5~0.8cm幅の単位で削り調整される。破損面では淡青灰色ないし淡灰褐色の色調を呈しているが、外面はともに煤が付着して黒変している。口縁部の一部に1cm幅程の切り込みがみられるが、穿孔に関わるものではなく、欠損部分を補整したものであろう。

五輪塔(第151図) 安山岩質の石材を用いた火輪で、軒隅部分を一

都欠損し、総高12.7cm、最大幅28.0cmの大きさ。頂上は13.0cm四方で、直径7.0cm、深さ4.0cmの円筒状ほぞ孔が穿たれる。降軒は緩やかだが反りをもって整えられる。軒幅は3.5cmを測るが、隅部で5.5cm高さを有して軒反りする。軒先は内傾気味に切り落とされる。下面は26.0cm四方の広さで、僅かに凹み加減だが、削り調整痕が明瞭に残る。

96号土壌(第149図)

8F区南東部にあり、94号土壌の約1.5m北側に位置する。南側は3号溝に削られるが、不整形プランを呈し、長さ126cm、幅115cm、深さ40cmの規模。主軸方向はN75°50'Wをとる。床面は径80cm程の広さで、ほぼ平坦である。床面からやや浮いて塊石などが散在している。

土壌内から、土師器焼片・糸切り底皿片など出土したが、小破片で図示しえない。

97号土壙（第149図）

7B区中央部に位置する。不整長方形プランを呈し、長さ132cm、幅81cm、深さ11cmの規模で、主軸方向はN $69^{\circ} 30'$ Eをとる。床面は115×60cm程の広さで、平坦だが、境内南側の床面に塊石などが発見された。

土壙内から、土師器系切り底小皿片など出土したが、小破片で図示しない。

99号土壙（第149図）

6C区北西寄りに位置する。不整円形プランで、100号土壙に一部切られる。長さ74cm、幅70cm、深さ30cmの規模。主軸方向はN 67° Eをとる。柱穴状ピットが2つ重複したような形状で、床面形は瓢形を呈すが、ほぼ平坦である。

土壙内から、土師器高台付き杯らしい破片が出土したものの、小破片で図示しない。

100号土壙（第149図）

6C区北西部にあり、99号土壙の東側に隣接して位置するが、これを一部を切る。不整円形プランで、長さ145cm、幅135cm、深さ42cmの規模。主軸方向はN 31° Eをとる。床面は、径100cm前後の広さで、ほぼ平坦である。

出土遺物（第150図）

土師器杯（250） 復原口径15.7cm、器高3.2cm、底径12.8cmの大きさの、直線的に開く口縁部をもつ杯である。内外面ともヨコナデ調整され、外底面は糸切り痕がみられる。胎土に細砂粒・雲母・褐色粒を含み、淡灰茶褐色に焼成されている。

青磁碗（251） 高台外径4.9cmの底部破片で、内底面と外面の一部に灰緑色の釉がかかるが、高台部分は露胎で灰色を呈している。胎土は精良。

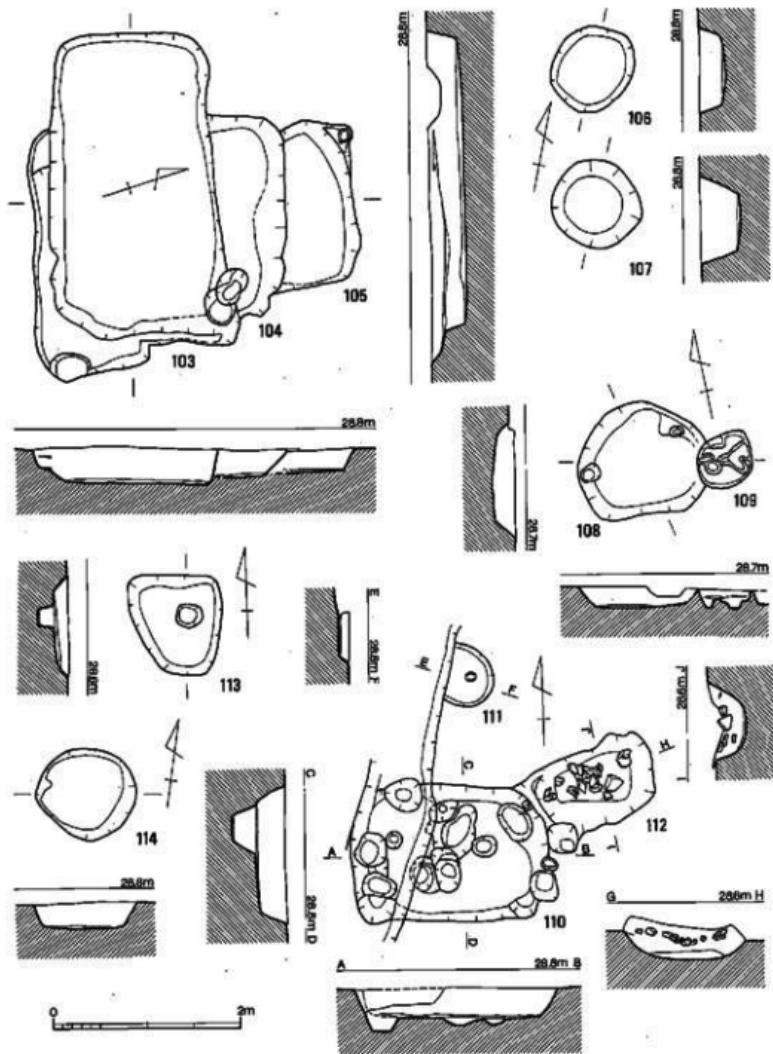
101号土壙（第149図）

6C区北端にあり、100号土壙の約3m北東側に位置する。不整円形プランで、柱穴状ピットが重複したような形状である。径66~69cm、深さ47cmの規模で、主軸方向はN 3° Eをとる。床面は、やや中凹みで、南と西側に狭いテラスがある。

土壙内からは、須恵器片、土師器壺片・小皿片、陶器片が出土したものの、小破片で図示しない。

102号土壙（第149図）

7C区南端にあり、101号土壙の北側に近接して位置する。不整方形プランで、長さ276cm、幅249cm、深さ37cmの規模である。主軸方向はN $14^{\circ} 30'$ Wをとる。境内では、西側に幅



第152図 土壤実測図12 (1/60)

60cm程で10cm程高いテラスがあり、床面は240×120cm程の広さでほぼ平坦である。床面を掘り込む柱穴状ピットとの前後関係はわからない。

土壙内から、須恵器片、土師器糸切り底皿片、瓦質土器片などが出土したものの、小破片で図示しえない。

103号土壙（第152図）

7C区南西隅にあり、102号土壙の西側に位置する。不整長方形プランで、104号土壙と重複してこれを切る。長さ354cm、幅145cm、深さ44cmの規模である。主軸方向はN73°40'Wをとる。床面は300×100~120cm程の広さでほぼ平坦である。

土壙内から、須恵器片、土師器糸切り底皿片、青磁碗片、焼土塊なども出土したものの、小破片で図示しえない。

出土遺物（第150図）

白磁碗（252） 玉縁の口縁部破片である。黒色粒を含む灰色の胎土をもち、黄色味を帯びた灰白色の釉がかかる。

104号土壙（第152図）

7C区南西隅にあり、102号土壙の西側に位置する。不整方形プランで、103号土壙と重複して、これによって大半を失う。長さ266cm、幅244cm、深さ30cmの規模である。主軸方向はN5°Eをとる。床面は250×200~250cm程の広さでほぼ平坦である。

土壙内から、須恵器片、土師器糸切り底皿片・亮片、焼土塊なども出土したものの、小破片で図示しえない。

105号土壙（第152図）

7C区南西部にあり、102号土壙の西側に位置する。不整方形ないし長方形プランで、104号土壙と重複して、これによって大半を失う。東西176cm、南北76cm+a、深さ25cmの規模である。床面は150×60cm程の広さが残され、ほぼ平坦である。

土壙内から、土師器糸切り底小皿片が出土したものの、小破片で図示しえない。

106号土壙（第152図）

8D区南寄りにあり、6号土壙の約2m南側に位置する。不整円形プランで、長径95cm、短径81cm、深さ30cmの規模である。床面はやや中凹みながらも、ほぼ平坦である。

土壙内から、土師器亮片、陶器片も出土したが、小破片で図示しえない。

出土遺物（第150図）

土師器小皿（253） 外底面に糸切り痕があり、口縁部は内彎しながら開く。復原口径9.0cm、器高1.6cmの大きさ。胎土に細砂粒・雲母を含み、淡明褐色に焼成されている。

107号土壙（第152図）

8D区南寄りにあり、106号土壙の南側に位置する。不整円形プランで、長径96cm、短径91cm、深さ44cmの規模である。床面は径60cm程度、やや中凹みながらも、ほぼ平坦である。
土壙内から、土師器壺片・杯片も出土したが、小破片で図示しえない。

108号土壙（第152図）

7C区北西寄りにあり、4号土壙墓の東側に位置する。16号溝に上部を削られ、109号土壙に一部を切られるが、不整円形プランで、長径134cm+α、短径120cm、深さ25cmの規模である。主軸方向はN78°Wをとる。周壁はやや緩やかで、床面はほぼ平坦である。
土壙内から、須恵器片、土師器小皿片、瓦質土器片も出土したが、小破片で図示しえない。

109号土壙（第152図）

7C区北西寄りにあり、108号土壙の東側に位置するが、108号土壙を一部切る。不整円形プランで、長径69cm、短径56cm、深さ11cmの規模である。床面には柱穴状ピットもあり、凹凸がある。
土壙内から、土師器壺片、片口のある土師質土器片も出土したが、小破片で図示しえない。

110号土壙（第152図）

7C区西寄りにあり、105号土壙の北側に位置する。16号溝に西側上部を削られ、112号土壙を一部切る。不整長方形プランで、長さ210cm、幅146cm、深さ40cmの規模である。主軸方向はN89°Wをとる。周壁はやや緩やかで、170×120cmの広さの床面はほぼ平坦だが、いくつかのピットが掘り込まれて凹凸がある。

出土遺物（第150図）

瓦質摺鉢（255） 底部外径12.2cmの大きさの、外底面にハケ目の残る破片で、体部側は開く。外面はヨコナデないしナデ調整され、内面は5条単位の櫛歯状の目が刻まれている。胎土に雲母・赤褐色粒・細砂粒を含み、淡灰色ないし黄灰色に焼成されている。

土師器杯（256） 口縁部を欠失するが、底部外径9.2cm、残存器高2.1cmの破片である。外底面は糸切り痕と板状圧痕がみられ、体部内外面はヨコナデないしナデ調整される。胎土に細砂粒を含み、淡橙色に焼成されている。

111号土壙（第152図）

7C区西寄りにあり、110号土壙の北側に位置する。16号溝に西側を削られるが、不整形円形プランであろうか。長さ50cm + α 、幅61cm、深さ10cmの規模である。主軸方向はN71°20' Wをとる。床面はほぼ平坦である。

土壙内から、土師器小皿片も出土したが、小破片で図示しない。

出土遺物（第150図）

青磁碗（257） 高台外径6.4cmの底部破片で、高台外下側は斜めに削られて面をなす。内底面には花柄が描かれる。高台内面及び疊付けと外面の一部に露胎部分を残すが、茶色味のある黄緑色の釉がかかる。胎土は精良で明るい灰色を呈している。龍泉窯系青磁碗であろう。

112号土壙（第152図）

7C区西寄りにあり、110号土壙の東側に隣接する。一部110号土壙に西端を切られるが、不整長方形プランで、長さ136cm + α 、幅85cm、深さ45cmの規模である。主軸方向はN68° Eをとる。床面は85×30~50cm程の広さで、やや中凹みだが、堆積土の中間に塊石などがまとまって発見された。

土壙内から、土師器小皿片、白磁片なども出土したが、小破片で図示しない。

出土遺物（第150図）

土師器壺（258） くびれる頸部から口縁部が短く肥厚せずに外反する壺の口頸部破片である。口縁端部は上方につまんだ様に少し尖り、復原口径13.4cmの大きさ。口頸部はヨコナナデ調整されるが、肩部は内外面ともヘラ削り痕がみられる。胎土に細砂粒・雲母・角閃石・赤褐色粒を含み、茶褐色に焼成されているが、外面の体部に煤が付着している。

土師質湯釜（259） 復原胴最大径23.2cmの位置に、錫状の凸帯が付けられた胴部破片で凸帯の外径26.0cmの大きさである。外面は横方向ないし斜方向にハケ目調整され、内面はナナデ調整される。精良な胎土で、黄褐色に焼成されているが、凸帯部の外面に煤が付着している。

火鉢（260） 脇部破片で、外面に巡る2条の薺鉢形断面の壠状凸帯の間に、牡丹花柄状の印刷文が並んで押捺されている。内面は横方向にハケ目調整される。精良な胎土で、黒灰色に焼成されている。

石製品（第134図5） 硬砂岩質の石材を用いた砥石で、長さ14.8cm、幅8.4cm、厚さ2.7cmの大きさ。肌理の細かな砥石で、研砥面はよく擦れて磨耗するが、内側氣味である。

113号土壙（第152図）

7C区中央部にあり、102号土壙の北側に近接する。不整形プランで、長さ122cm、幅110cm、深さ25cmの規模である。主軸方向はほぼ北を向く。床面は南側が僅かに高めながら平坦である。

土壤内から、土師器小皿片、白磁片、木炭塊なども出土したが、小破片で図示しない。

出土遺物（第150図）

火鉢（261）復原底部外径28.0cm、残存器高9.2cmの大きさの底部破片で、周部は直線的に開き、底から4cm上の外面に1条の薄鉢形断面の瘤状凸帯が巡る。器壁は厚めで、内面はハケ目調整される。底部に脚台が付いていたようだが、残らない。胎土に砂粒・雲母・角閃石・赤褐色粒を含み、茶橙色ないし黒色に焼成されている。

114号土壤（第152図）

8B区北東寄りにあり、17号土壤墓の約4m東側に位置する。不整円形プランで、長径109cm、短径100cm、深さ28cmの規模である。主軸方向はN83°Eを向く。床面は径80cm程で、ほぼ平坦である。土壤内からは、なんらの遺物も確認できなかった。

115号土壤（第153図）

8D区南東隅で、4号土壤墓・5号土壤墓の間に挟まれた位置にある。不整円形プランで、長さ112cm、幅103cm、深さ47cmの規模で、主軸方向はN36°Eをとる。

床面はほぼ平坦である。

土壤内から、土師器小破片以外の遺物は確認されなかった。

116号土壤（第153図）

10D区北東隅と11D区南東隅に跨って位置する。不整円形プランで、長さ188cm、幅120cm、深さ48cmの規模で、主軸方向はN77°30'Wをとる。床面は中央部で深く、中凹みである。

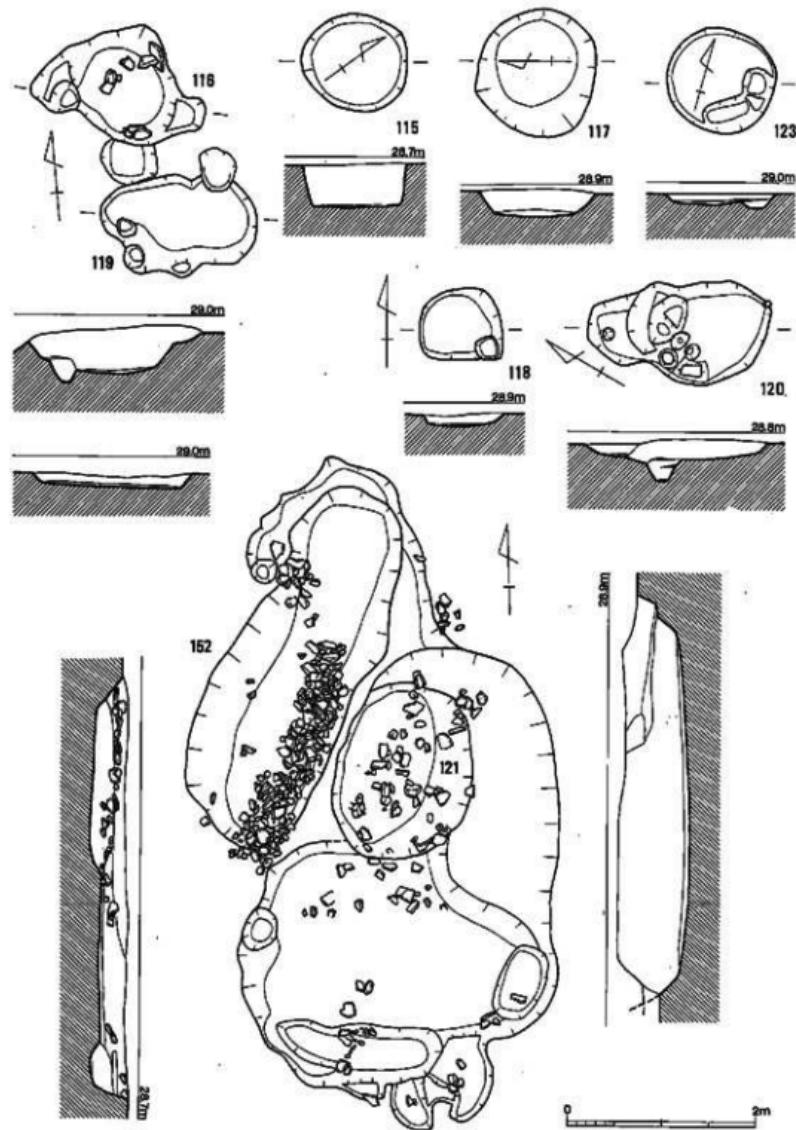
土壤内から、土師器糸切り底皿破片なども出土したが、小破片で図示しない。

出土遺物（図版61、第154図）

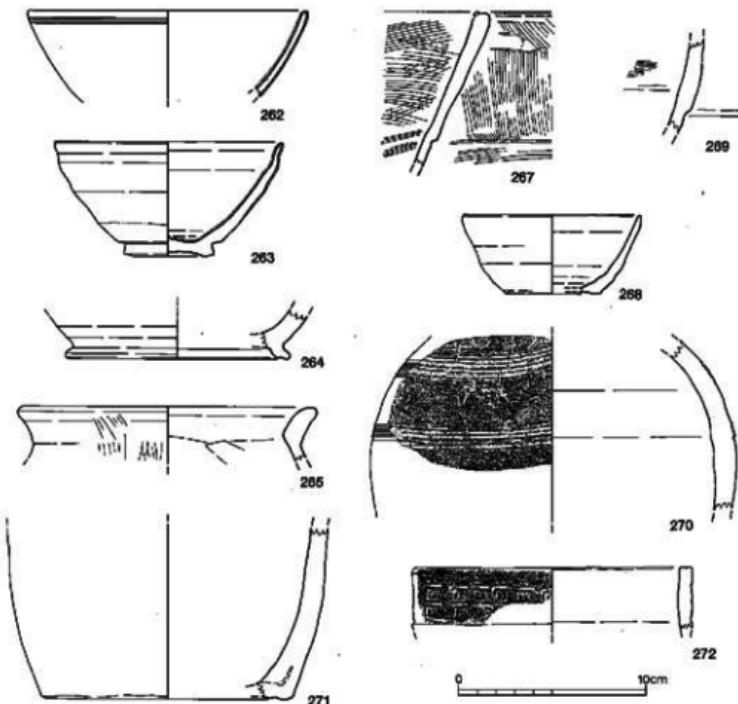
青磁碗（262）復原口径15.0cm、残存器高4.6cmの大きさの、内青気味に開く直口縁の碗である。口縁部外面に浅い2条の沈線が巡る。黒色粒を含む灰色の胎土で、淡いすず緑色の釉がかかる。

天目茶碗（263）復原口径12.1cm、器高6.0cm、高台外径4.8cmの大きさの、口縁部が内青気味に開いて端部で一度くびれる器形の碗である。高台は外側に踏み張るかのように少し開き、底面は内側を削りくぼめている。内外面に暗茶褐色の釉がかかり、外面底部付近は露胎で、精良な胎土でうす茶色に焼成されている。

陶器壺？（264）小破片のため本来の器形は不明だが、高台付き壺の底部であろうか。復



第153図 土壌実測図13 (1/60)



第154図 土壙出土器実測図 28 (1/3)

原すると12.0cm程の外径である。胴部側は内輪気味に開く。精良な胎土で、茶褐色に焼成されるが、外面は淡灰褐色に発色している。

土師器甕(265) 復原口径16.0cmの大きさの、肥厚して外反する口縁部破片である。胴部の外面はハケ目調整、内面はヘラ削りされる。胎土に雲母・赤褐色粒を含み、黄褐色ないし淡赤褐色に焼成されている。

117号土壙(第153図)

11C区中央部にあり、116号土壙の約3m北西側に位置する。不整円形プランで、長さ136cm、幅124cm、深さ25cmの規模で、主軸方向はN82°Wをとる。床面は直径90cm程の広さで中凹みである。

土壙内から、須恵器片、土師器系切り底皿片なども出土したが、小破片で図示しない。

出土遺物（第154図）

土師質鍋（267） 口縁部が内寄気味ながら直線的に開き、底部は緩やかに僅か肥厚するものの上面は平に整えられ、外面はハケ目調整されるが、口縁から7cm程度にある凸帯状の段の部分の上下で調整方向が異なる。内面も粗いハケ目で調整されている。

胎土に細砂粒・雲母を含み、黄褐色ないし茶褐色に焼成されるが、外面には煤が付着する。

118号土壙（第153図）

11D区南端にあり、117号土壙の約1.5m南側に位置する。不整円形プランで、長さ87cm、幅76cm、深さ15cmの規模で、主軸方向はN88°Wをとる。

床面は70×65cm程の広さで、中凹みである。

土壙内から、須恵器片、土師器系切り底皿片、陶磁器片など出土したが、小破片で図示しない。

119号土壙（第153図）

10D区北東隅にあり、116号土壙の南側に近接する。不整椭円形プランで、長さ169cm、幅103cm、深さ21cmの規模で、主軸方向はN88°Wをとる。

床面は70×65cm程の広さで、中凹みである。

土壙内から、土師器片など出土したが、小破片で図示しない。

120号土壙（第153図）

11D区北西寄りにあり、117号土壙の北西約2mに位置する。不整椭円形プランで、長さ195cm、幅110cm、深さ19cmの規模で、主軸方向はN29°30'Wをとる。床面は、北側にテラスがあり、南側部分の120×85cm程の広さが深く、中凹みである。

土壙内から、土師器小皿、土師質鍋、陶磁器などの破片が出土したもの、小破片で図示しない。

出土遺物（図版61、第154図）

土師器皿（268） 口径9.4cm、器高4.2cm、底径7.2cmの大きさの、口縁部が内寄気味に高く伸びる皿である。外底部には糸切り痕があり、口縁部はヨコナデ調整される。胎土に雲母を含み、うすい橙色に焼成されている。

土師質鍋（269） 外面に凸帯状の段のある胴部破片である。外面はナデ調整、内面はハケ目調整される。胎土に雲母を含み、うすい橙色に焼成されている。

陶器壺（270・271） 271は、肩部と副部に3条の単位で浅い沈線が巡る壺で、口頭部・肩下半を失うが、胴部の復原最大径は19.6cmを測る。内外面ともヨコナデないしナデ調整される。

胎土に細砂粒を若干含み、褐色ないし暗褐色に焼成されている。常滑系の三筋壺であろうか。

272は、胴部下半から底部の破片だが、復原底径13.4cmの大きさで胴部に向かって膨れる。内外面ともに、ヨコナデおよびナデ調整されて、細砂粒を含む胎土で、褐色に焼成されている。備前系の壺であろう。

瓦質火鉢（273） 復原口径15.0cmの大きさの直口縁で、内外面ともにヨコナデ調整され、口縁端部上面は平らに整えられる。外面には鈎渦巻の印刻文が2段に連続押捺され、破片の下端は凸帯が剥落している。胎土に微細砂と雲母を含み、明黄灰褐色に焼成されている。

砥石（第134図6） 花崗岩質の石材を用いているが、長さ16.9cm、幅5.5cm、厚さ6.2cmの大きさで、研紙に使用した3面は彎曲している。

鉄滓 総量35gの鉄滓が出土した。

121号土壺（第153図）

11D区西端にあり、一部11E区にわたるが、120号土壺の西に相当する。不整格円形プランで、長さ48.5cm、幅34.0cm、深さ45cmの規模で、主軸方向はN17°Eをとる。床面は、南側に広く浅いテラスがあり、北側にある165×90cm程の広さの部分が深くて中凹みである。テラスの床面に相応した高さで北側を中心に塊石などが散在している。

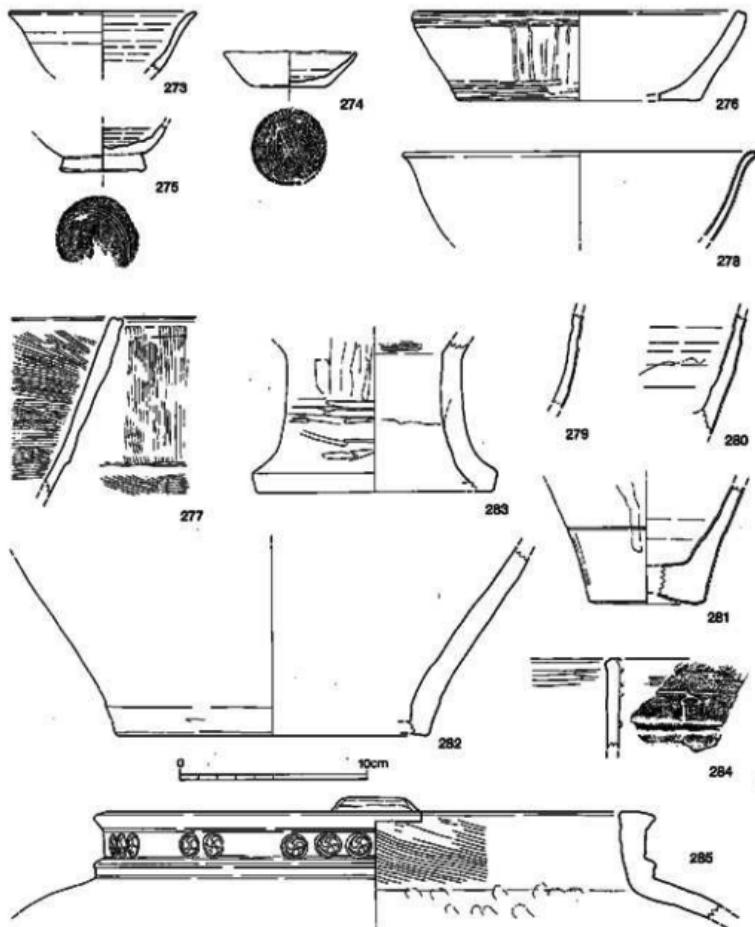
出土遺物（図版61、第153図）

土師器皿（273・274） 273は復原口径10.0cm、残存器高3.7cmの大きさの、長めに開いて外反する口縁部をもつもの。内外面ともヨコナデ調整される。胎土に細砂粒・雲母を含み暗灰黃褐色に焼成されている。274は、復原口径9.0cm、器高1.8cm、底径4.0cmの大きさの、内彎気味に開く口縁部をもつ小皿。底部は平坦で糸切り痕がある。胎土に細砂粒・赤褐色粒・雲母を含み、暗黄褐色に焼成されている。

土師器椀？（275） 底部が外径4.6cm、高さ0.8cmの円盤状の高台を呈していて、底面は糸切り痕を明瞭に残している。口縁部を大きくが、内彎気味に開くよう、内外面ともヨコナデ調整される。胎土は精良で、淡茶褐色に焼成されているが、内外面に煤が付着する。

土師器杯（276） 復原口径17.8cm、器高4.7cm、底径13.0cmの大きさで、口縁部が内彎気味に開き、器壁が比較的厚めの杯である。内面はヨコナデ調整されるが、外底面はヘラ削りらしい痕が残り、口縁部外面にも縱方向のヘラ磨きよりむしろヘラ削りらしい痕跡がある。また外面の口唇部と底部付近には横方向に暉文状のヘラ先痕が巡る。胎土に細砂粒・雲母を含み、暗橙色に焼成されている。

土師質鍋（277） 口縁部が直線的に開き、端部がほとんど肥厚せずに上面を凹ませて整えるもの。外面の凸帯状の段は口縁から8cm程度に亘り、段より上は縱方向のハケ目の後にナデ、下は横方向にハケ目調整される。内面は口縁付近までハケ目調整される。胎土に細砂粒・雲母



第155図 土壙出土土器実測図 29 (1/3)

を含み、橙褐色に焼成されているが、外面には煤が付着している。

青磁碗(278) 復原口径19.0cm、残存器高4.7cmの大きさの碗で、口縁部は外反する。黒色粒を含む灰色の胎土で、淡くにぶい深緑色の釉がかかる。龍泉窯系の青磁碗であろう。

黒釉壺 (279~281) 同一個体の可能性もあるが、接合しない。いずれも微砂粒を含む灰褐色の胎土で、暗褐色ないし黒褐色の釉がかかること。口頭部および肩部はないが、四耳壺の腹部および底部の可能性があろう。279は器壁が5mm前後の胴部破片で、ヨコナデないしナデ調整される内面に釉がかからない。280は器壁が厚い底部付近の破片で、281の底部と似ているものの281が内面全体に釉がかかることに対して280は中途まで釉が止まっている。

陶器鉢 (282) 底部付近の破片で、口縁部と底面を欠くが、復原底径16.6cmの大きさで直線的に胴部が開く。細砂粒を含む胎土で、内外面ともヨコナデないしナデ調整されて、褐色ないし暗褐色に焼成されている。備前系の鉢であろうか。

瓦質瓶 (283) 花瓶などの裾部から底部の破片であろう。底面内側が磨滅して破損面か木來の面か判断しがたい。残存器高8.0cmで、径9.4cmのくびれた部分から、外径12.8cmの裾に向かって反り端部で平らな面に整えられている。外面はヘラ磨き調整され、内面はナデ調整と一部にハケ目調整がみられる。胎土に雲母・細砂粒を若干含み、灰色ないし黒灰色に焼成されている。

瓦質火鉢 (284・285) 直立する口縁部破片で、口唇部外面とその下に巡らされた凸帯間に印刻文を押捺している。284は器壁が薄く、ヨコナデないしヘラ磨き調整された器面で、貼り付けた断面盾形の笠状凸帯が剥落して接合部の沈線が見える。印刻文は丸に尖菱形文様である。胎土に赤褐色粒・角閃石を含み、暗黄褐色に焼成されている。

285は、器壁が厚く、頭部から肩が大きく膨らむ。復原口径は30.0cm程で、口唇部内面側の上面に幅4~5cm、高さ7mm、厚さ5~8mm程の突起が付けられる。破片では1ヶ所だが、3ヶ所付いていた可能性が高い。外面の断面三角形凸帯間に巴形の印刻文が押捺されている。内外面ともナデ調整されるが、口縁部内面にハケ目が残り、頭部内面に指頭痕が残る。胎土に雲母・砂粒を含み、淡茶褐色ないし暗茶褐色に焼成されている。

鉄製品 (第145図2~4) 2は錆化が進み本来の形状は不明だが、幅1.0cm前後で、厚さ0.2cm前後の扁平な板状の体部の折損したものが、少なくとも2本錆着している。

3・4は接合しないが、同一個体の可能性がある。角棒状の破片で、3が残存長6.7cmで、幅・厚さ0.4~0.6cmと太め、4は残存長2.2cm、幅・厚さ0.2~0.4cmと細めで先端が尖る。

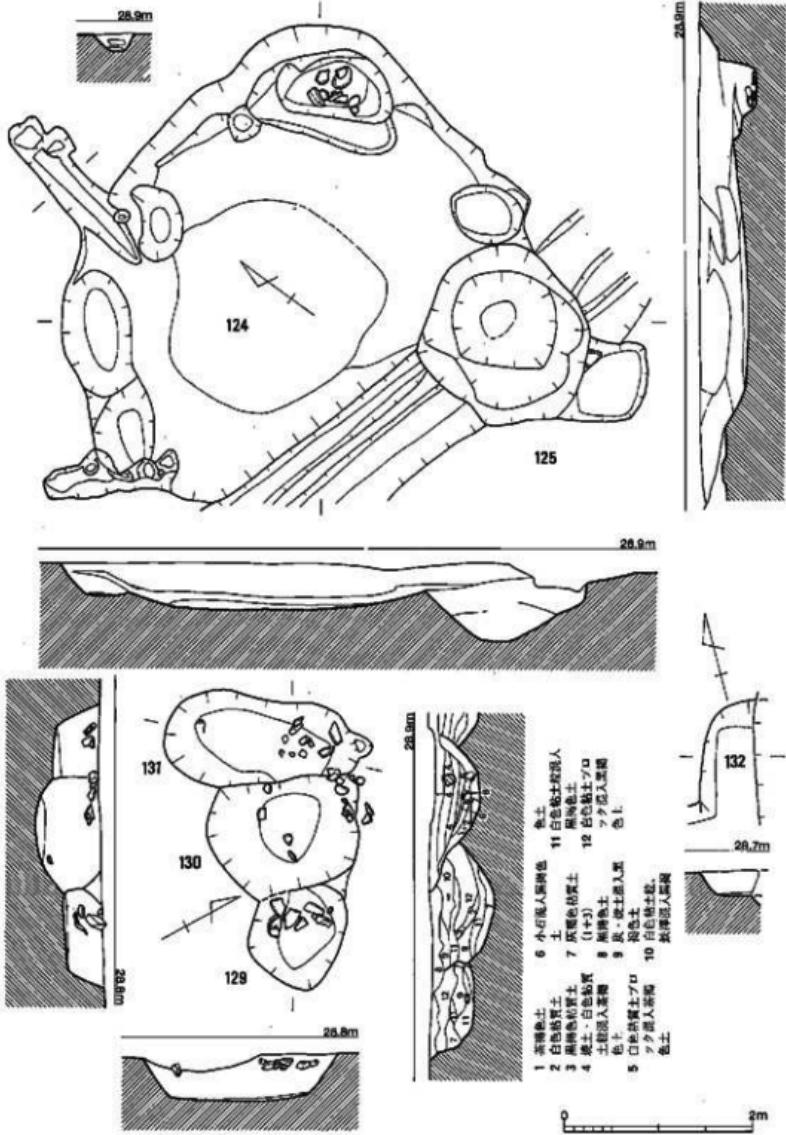
鉄 淬 總量50gの鉄滓が出土した。

123号土壤 (第153図)

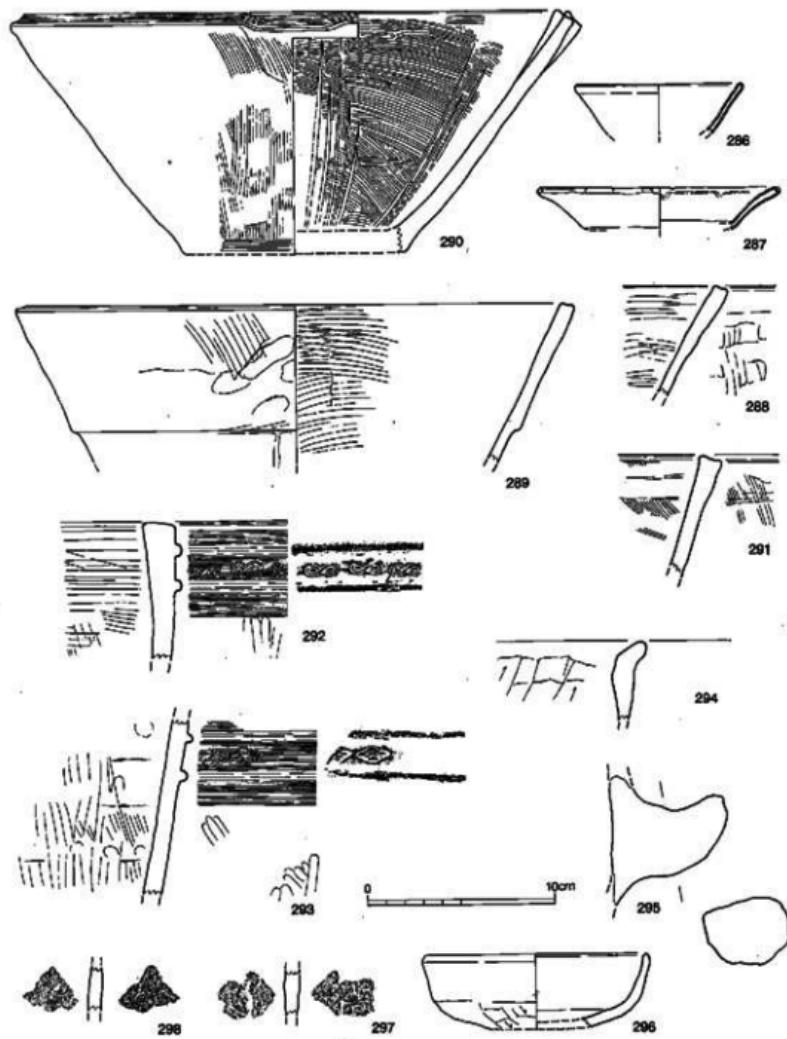
10C区西寄りにあり、20号土壤基の北東側に位置する。不整円形プランで、直径114~118cm、深さ13cmの規模。床面は、やや中凹みで、南東側に浅いピットがある。

土壤内からは、小さな鉄滓が1点出土したのみである。

なお122号土壤は20号土壤基に、127号土壤は22号土壤基と改称した。



第156図 土壤実測図14 (1/60)



第157図 土壤出土土器実測図 30 (1/3)

124号土壙（第156図）

9B区南西端と9C区南東端に跨って位置する。不整梢円形プランで、長さ518cm、幅480cm、深さ65cmの規模である。北側には幅40cmで、長さ200cm、深さ20cm程の溝がN10°E方向に取り付く。南側は歎状の溝と125号土壙によって削られ、切り込まれている。また北東隅には長さ156cm、幅104cm、深さ40cm規模の主軸方位N30°Wの不整梢円形プランの土壙があるほか、ピットなどもある。周壁は緩やかに傾斜し、床面は中央部に直径200~210cm規模の広さに平坦面がある。なお、前述した北東端の土壙内床面に接して塊石などがみられた。

土壙内から、土師器小皿片、青磁片なども出土したが、小破片で図示しない。

出土遺物（図版62、第157図）

陶磁器（286・287） 286は、復原口径9.0cm、残存器高2.7cmの、口縁部が直線的に伸びる皿で、灰色の胎土をもち、灰色の釉がかかる。287は、復原口径13.0cm、残存器高2.2cmの口縁部が外反しながら開く白磁皿。口唇外面を削り凹ませて、口縁部は花弁状を呈し、内面に浅い沈線をもつ。黒色粒を含む黄灰白色の胎土で、黄色味のある淡灰緑色の釉がかかる。

土師質鍋（288・289） 口縁部が直線的に開き、端部が肥厚せずに、端部上面を凹ませ気味に整っている鍋で、289では口縁の約7cm下に凸帯状の段がある。ともに外面は粗い縦方向ハケ目調整の後に指頭痕の残るナデ調整、内面は横方向にハケ目調整される。胎土に細砂粒・雲母を含み、橙褐色に焼成されているが、内外面に煤が付着している。

土師質鉢（290・291） 口縁部が直線的に開くが肥厚せず、端部は内側の縁をつまみ上げ気味にまとめている。290は復原口径30.0cm、器高12.8cm、底部外径11.8cmの大きさで、口縁部に片口が付く。外面はハケ目の後にナデ調整し、内面はハケ目の後に5条単位の目を刻んでいる。口唇部と底部縁にもハケ目がみられる。胎土に雲母・角閃石を含み、淡明褐色に焼成されている。291も内面に目を確認できないが、口縁部の形態、調整手法や胎土の状況などは同様である。

瓦質火鉢（292・293） 292は直立する口縁部破片で、内面が内粋気味に肥厚する。口唇部は上面が平らに整えられる。口縁部外面はヨコナデないし繩かにハケ目調整され、下位はヘラ磨き調整される。また蒲鉾形断面の縦状凸帯が2条巡り、凸帯間に∞字形の印刻文が押捺されている。胎土に雲母・細砂粒を含み、暗灰黄色に焼成されている。

293は、292と同様に調整された面をもつが、やや外開きの器形の胴部破片である。縦状凸帯間に四菱形の印刻文が押捺されている。胎土には雲母・赤褐色粒・細砂粒を含み、暗灰茶色に焼成されている。

125号土壙（第157図）

8B区北西端と9B区南西端に跨って位置する。124号土壙の南側を一部切るが、上部を畝状の溝で削られる。瓢形のプランを呈し、長さ248cm、幅191cm、深さ77cmの規模である。主軸方位はN14° Wにとる。南側は浅い柱穴状ピットと重複したような状況で、北側が深い。周壁は緩く傾斜し、摺鉢状を呈している。

土壙内から、土師器高台付底部片なども出土したが、小破片で図示しない。

出土遺物（第157図）

土師器甕（294・295） 294は口縁が肥厚し、短く外反する甕の口縁部破片で、内面の頸部以下はヘラ削りされる。胎土に雲母・砂粒を含み、黄橙色に焼成されているが、二次的な加熱を受けて外面の剥落が進んでいる。295は牛角状把手でナデ調整される。胎土に雲母・赤褐色粒を含み、橙色に焼成されている。

土師器杯（296） 復原口径11.8cm、器高4.0cmの大きさで、口縁部はヨコナデ調整され、内縁気味ながら直に伸びる。底部は丸みをもち、静止ヘラ削りされる。胎土に雲母を含み、淡橙色に焼成されている。

土師器塙臺（297・298） 接合しないが同一個体であろう。内面に布目圧痕が付き、外面はナデ調整されている。胎土に砂粒を若干含み、淡茶褐色に焼成されている。

126号土壙（第156図）

10D区北寄りにあり、24号土壙墓の北側に近接する。163号土壙に北西側を切られ、柱穴状ピットに南西端を切られる。楕円形プランで、長さ120cm、幅70cm、深さ25cmの規模である。主軸方位はN45° 30' Eにとる。

周壁は緩く傾斜するが、床面は85×40cmの広さで、ほぼ平坦である。

土壙内から、土師器甕片・糸切り底皿片なども出土したが、小破片で図示しない。また、鉄滓が総量で12g出土した。

128号土壙（第107・159図）

11E区北端にあり、133号土壙墓に続く溝状の土壙と重複するが、これを切る。楕円形プランで、長さ170cm、幅135cm、深さ52cmの規模である。主軸方位はN58° 40' Wにとる。周壁は階段状に傾斜するが、床面は110×80cmの広さで、ほぼ平坦である。

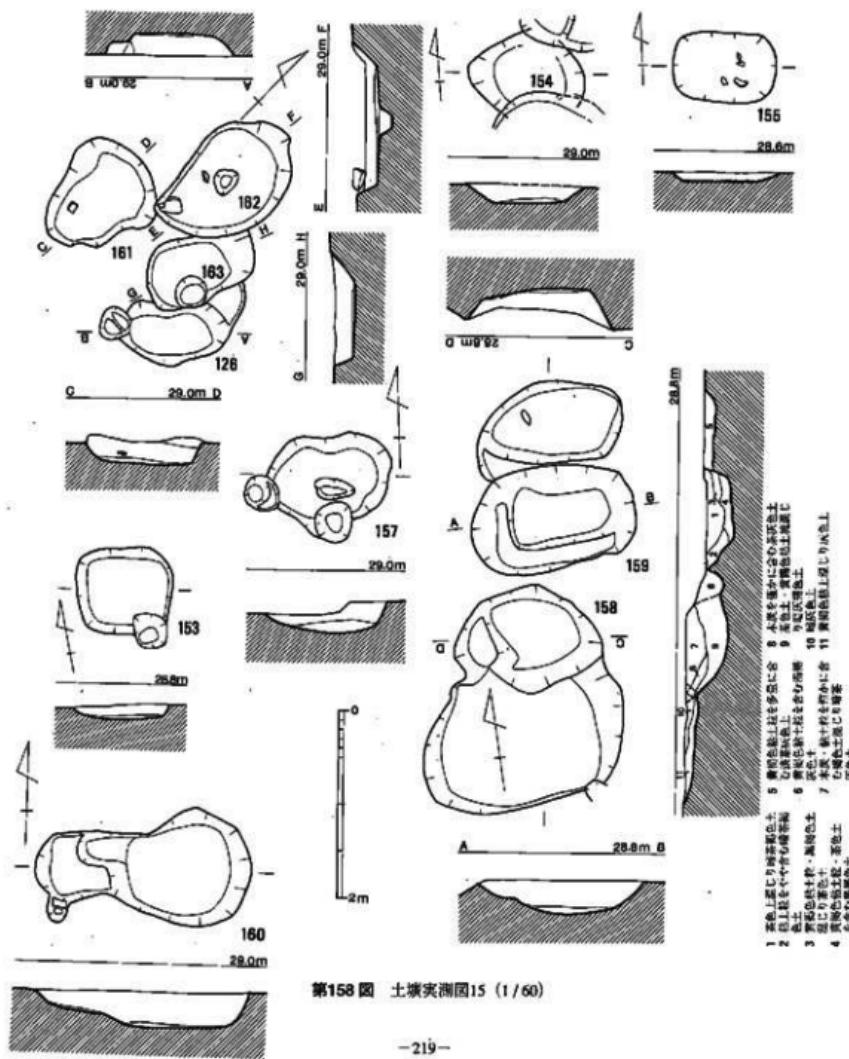
土壙内から、土師器片も出土したが小破片で図示しない。また、焼土塊も出土した。

出土遺物（第160図）

土師質鍋（299） 凸帯状の段を有する腹部破片である。段から口縁部側は直線的に伸びるが、ほとんど肥厚せずに、約8cmの長さがある。外面はハケ目調整の後にナデ調整され、内面にもハケ目調整の部分とナデの部分がある。胎土に雲母・角閃石を含み、暗橙褐色に焼成され

ているが、外面に煤が付着している。

129号土壤 (第156图)



第158回 土壤実測図15 (1 / 60)

10D区北端と、11D区南端に跨って位置する。130号土壌に北西側を一部切られるが、不整格円形プランで、長さ115cm、幅95cm、深さ45cmの規模である。主軸方位はN $50^{\circ} 40'$ Wによる。床面は85×60cmの広さで、ほぼ平坦である。堆積土の中間に、塊石と土器が北側から傾斜した状況に発見された。

土壌内から、土師器小皿片、白磁片も出土したが小破片で図示しない。また、焼土塊と鉄滓も出土した。鉄滓は総量280gに及ぶ。

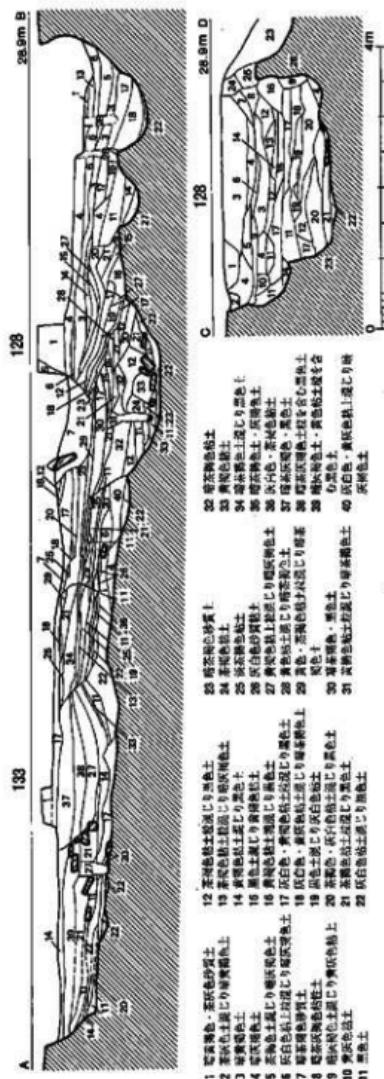
出土遺物（図版62、第160図）

土師質擂鉢（300） 口縁部が僅かに内寄気味ながらも直線的に削ぎ、肥厚せずに端部上面を平らに整える鍋である。口縁部には、対称的位置に2ヶ所片口が付く。底部を失うが、復原口径29.4cm、残存高11.3cmの大きさ。

外面は縱方向のハケ目と指頭痕が、内面はナデ調整の後に5条単位の目が刻まれるが、内底付近は磨耗して目が消え、凹んでいる。胎土に雲母・細砂粒を含み、茶褐色に焼成されているが、外面に煤が付着している。

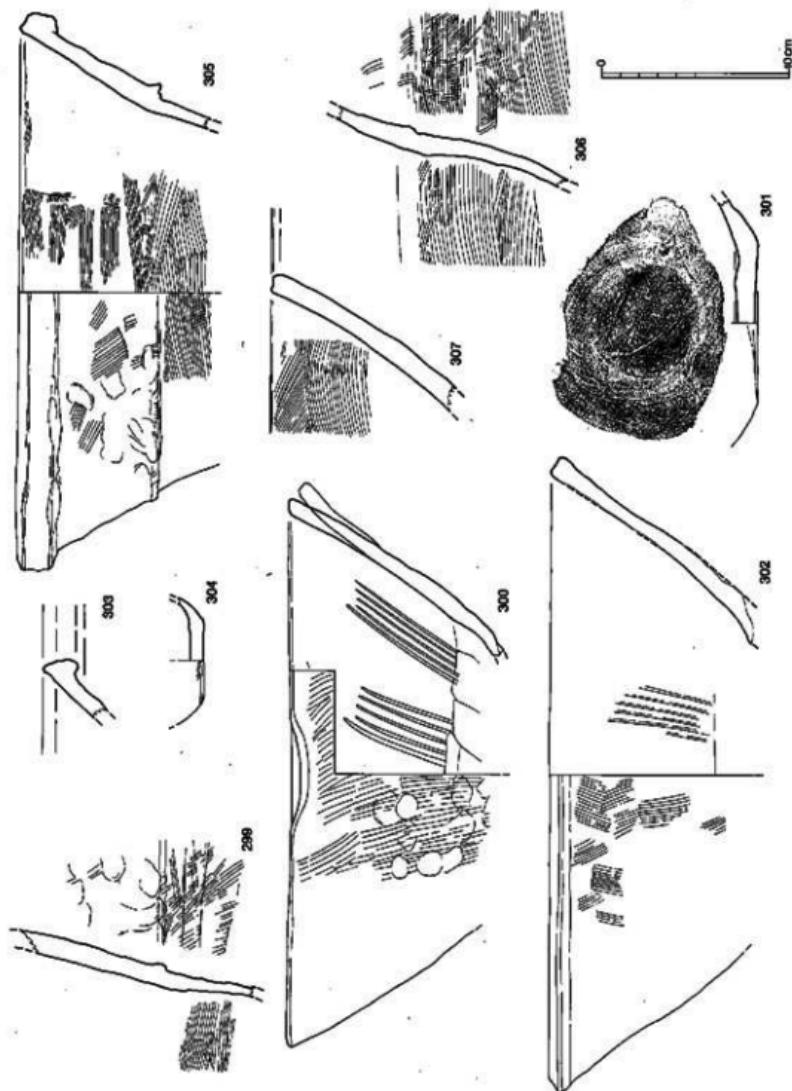
130号土壌（第156図）

11D区南端にあり、129号土壌の北西側に位置する。129号土壌を一部切るが、反対側に位置する131号土壌に北西側を削られる。不整円形プランで、長さ167cm、幅163cm、深さ70cmの規模である。主軸方位はN 62° Wによる。床面は



第159図 土壌実測図16 (1/40)

第160図 土器出土実測図31 (1/3)



70×60cmの広さで、やや内凹みである。

土壙内から、土師器小皿片も出土したが小破片で図示しえない。また、鉄滓が総量535g分出土した。

出土遺物（第160図）

土師器杯（301） 底径8.5cmの大きさの杯だが、口縁部を欠く。外底面は糸切り痕が明瞭で、内底面はナデ調整されて中央にヘラ先の傷が緩い弧を描くが単沈線様に付いている。口縁部は外方に開くようで、内外面ともヨコナデ調整される。胎土に雲母を含み、淡橙色に焼成されているが、外面には煤が付着している。

131号土壙（第156図）

11D区南西隅にあり、130号土壙の西側に位置する。130号土壙と、反対側に位置する11号土壙に一部重複するが、これらより後出する。不整円形プランで、長さ206cm、幅102cm、深さ50cmの規模である。主軸方位はN39°30' Eにとる。床面は150×60cmの広さで、やや内凹みながらもほぼ平坦である。北側の肩部に塊石などが散在している。

土壙内から、土師器片も出土したが小破片で図示しえない。また鉄滓が総量145g分出土した。

出土遺物（第160図）

土師質櫛鉢（302） 脊部が僅かに内巻気味に膨れながらも直線的に開き、口縁部は外反気味に若干肥厚して端部上面を平らに整えている鍋である。口縁部には片口が付いていた模様である。底部を失うが、復原口径34.0cm、残存器高10.8cmの大きさ。外面は縱方向のハケ目と指頭痕が、内面は底部付近を中心に磨滅し、剥落も進むが5~6条単位らしい日が残る。胎土に雲母・角閃石・細砂粒を含み、淡茶褐色に焼成されているが、二次加熱を受けた痕跡もある。

132号土壙（第156図）

10F区北東隅にあり、7・8号土壙の西側に位置する。東側を8号溝に、南側を溝の可能性のある落ち込みによって削られて、大半を失う。南北110cm+α、東西55cm+α、深さ35cmの規模である。周壁はやや緩やかで、床面はほぼ平坦である。

土壙内から、土師器片、瓦質土器片などが出土したもの的小破片で図示しえない。

133号土壙（図版52-2・3、第107・159図）

11E区北寄りにあり、128号土壙の南側に位置する。北側に溝状の土壙が続き、128号土壙はこれを掘り込む。133号土壙は長方形プランで、長さ292cm、幅104cm、深さ55cmの規模で、主軸方位はN11°Eにとる。床面は250×75cmの広さで、南側がやや高めだがほぼ平坦である。南よりに塊石の堆積がみられたが、北側は二次的な掘削を受けて塊石はみられなかった。

溝状土壙は不整長楕円形プランで、長さ710cm、幅200cm、深さ50~60cmの規模で、主軸方位はN19°Eにとる。数次にわたる掘削と埋立整地を繰り返して、溝状に成了った可能性がある。縦断土層の観察では、南側の堆積が古く、北側が新しい傾向をみれるが、133号土壙は南側の最も古い堆積をみせる部分である。128号土壙は上部で最も新しい堆積だが、下部は少なくとも3段階古い堆積である。発掘時に遺物等の混亂があり、この各段階での土壙としての区別をなし得なかった。なお、128号土壙の下層堆積と、133号土壙の南部堆積には2段階の差があり、勿論133号土壙側が古い。

出土遺物（図版62、第160図）

須恵質鉢（303） 直線的に開いた口縁部破片である。端部は三角凸帯状に肥厚し、口唇内側を強めにナデて凹ませている。胎土に細砂粒を含み、暗灰色に焼成されている。

土師器小皿（304） 口縁部を欠くが、底径4.4cmの大きさで、口縁部側へは内側して開く。外底面には糸切り痕があり、体部はヨコナデ調整される。胎土に細砂粒・雲母を含み、暗青褐色に焼成されている。

土師質鍋（305・306） 305は底部を失うが、復原口径29.6cm、残存器高10.3cmの大きさで、片口の有無は不明。胴部からやや外に反って直線的に口縁部が開き、端部が外側に折疊んだように肥厚する器形の鍋である。口縁部から7.5cm下に凸帯状の段が巡る。外面の段から上はハケ目の後にナデ調整、口縁端部付近はヨコナデ調整され、段より下は横方向中心にハケ目調整される。内面は上部が細かなハケ目、下部が粗めのハケ目調整である。胎土に細砂粒・雲母を含み、橙褐色に焼成されているが、内外面に煤の付着がみられる。306は胴部破片で、凸帯状の段を介して底部側が彎曲気味で、屈曲したように見える。口縁部側は内外面ともナデ調整、底部側は内外面ともハケ目調整される。胎土に細砂粒・雲母・角閃石を含み、灰橙褐色に焼成されているが、外面に煤の付着がみられる。

土師質擂鉢（307） 内身氣味ながら直線的に開く口縁部破片で、端部は肥厚せずに上面を凹ませ気味に整えている。外面と内面の下半分は磨滅していて、内面の目も不明だが、口縁部内面はハケ目調整される。胎土に細砂粒を含み暗橙褐色に焼成されている。

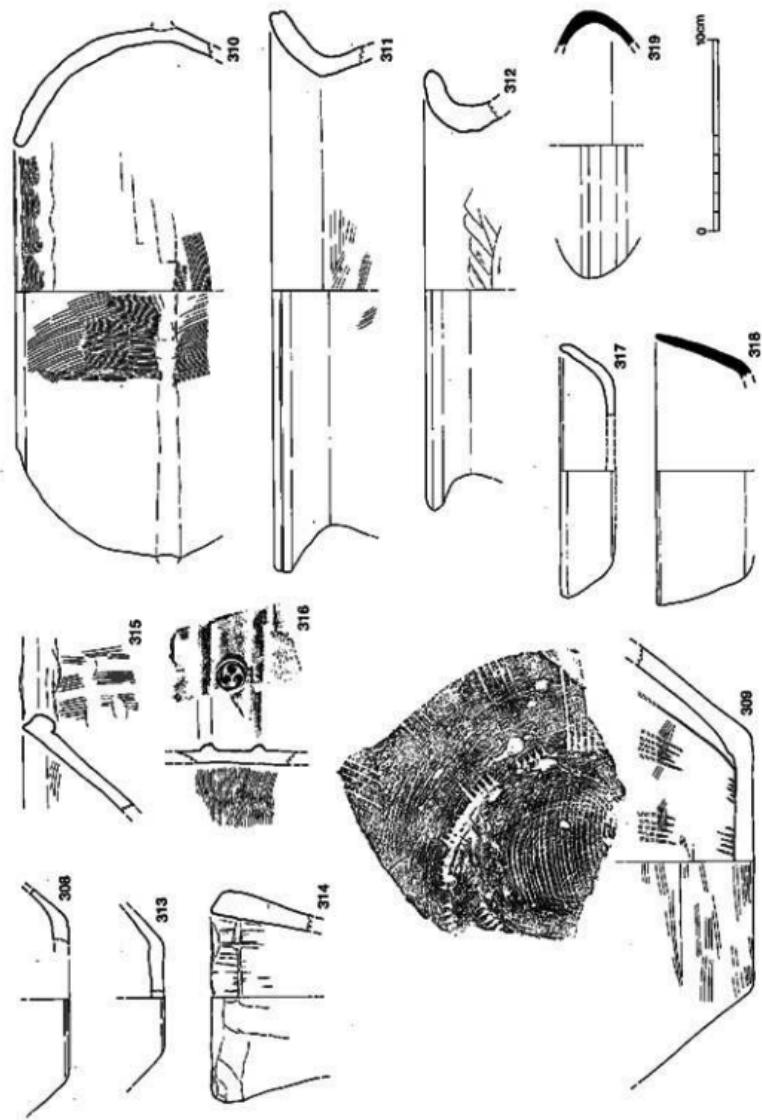
134号土壙（第107図）

10H区四寄りにあり、東側は調査区域外に続く。不整形プランで南北140cm、東西78cm+α、深さ18cmの規模だが、北半部のみでみれば幅80cm余りの楕円形プランの可能性もある。床面は南側が僅かに高めだが、ほぼ平坦である。

土壙内から、土師器片が出土したもの的小破片で図示しえない。

135号土壙（第107図）

第161圖 土壤山土層剖面圖 32 (1/3)



10H区西端にあり、134号土壙の北西側に位置する。楕円形プランで長径138cm、短径91cm、深さ32cmの規模。主軸方向はN23°20' Eをとる。床面は110×70cmの広さでほぼ平坦である。土壙内から、瓦質土器片が出土したものの小破片で図示しない。

136号土壙（第107図）

10H区西端と10I区東端に跨り、135号土壙の南側に位置する。楕円形プランで長径159cm、短径130cm、深さ50cmの規模。主軸方向はN88° Eをとる。床面は130×100cmの広さで、僅かに内凹みながらもほぼ平坦である。

出土遺物（第161図）

土師器皿（308） 口縁部を欠くが、復原底径8.3cmの大きさの皿である。外底面は糸切り痕があり、体部はヨコナデ調整される。胎土に雲母を含み、淡茶褐色に焼成されているが、外面に煤が付着する。

137号土壙（第107図）

10I区東端にあり、136号土壙の北西側に位置するが、北側が調査区域外に接する。調査区域内では最も西に占地する土壙である。不整円形プランで東西190cm、南北125cm+α、深さ25cmの規模。主軸方向はN88°10' Wをとる。周壁はやや緩やかで、床面は平坦だが、南西部に浅いピットがある。

土壙内から、土師質鍋片も出土したが、小破片のため図示しない。

出土遺物（第161図）

土師質擂鉢（309） 口縁部を欠くが、平坦な底部から体部が直線的に開く鉢形である。体部の外面はハケ目調整の後にナデ調整、内面はハケ目の後に5条単位の目が刻まれるもの、底部付近は磨耗して目が消えている。復原底径13.0cm、残存器高 6.2cmの大きさ。胎土に雲母・繊維を含み、茶褐色に焼成されている。

138号土壙（第107図）

6B区北西部に位置する。北側で28号住居跡と重複し、これを切ると思われるが、削平を受けて輪郭が不明瞭である。不整楕円形プランで長径252cm、短径141cm、深さ12cmの規模。主軸方向はN33°30' Eをとる。床面は平坦だが、南部に柱穴状ピットがあり、上部に塊石などが集中していた。

土壙内から、糸切り底の土師器小皿片や同安窯系とみられる青磁片が出土したものの、小破片のため図示しない。

139号土壤（第107図）

10E区西寄りにあり、9号土壤の南西側に位置する。南東側は9号溝で削られて失う。不整楕円形プランで長径144cm、短径55cm + α 、深さ15cmの規模。主軸方向はN30°30' Eをとる。床面はほぼ平坦である。

土壤内から、糸切り底の土師器小皿片が出土したものの、小破片のため図示しえない。

140号土壤（第107図）

9D区北端に位置する。不整楕円形プランで長径138cm、短径116cm、深さ62cmの規模。主軸方向はN10°Wをとる。周壁はやや緩やかで、床面はほぼ平坦である。

土壤内から、須恵器片、糸切り底の土師器小皿片も出土したが、小破片のため図示しえない。
出土遺物（図版62、第161図）

土師質壺（310）復原口径16.0cm、復原胴最大径27.8cm、残存器高10.4cmの大きさで、扁球形に膨れる。外面はハケ目調整されるが、胴最大径の位置に凸帯の剥落したような凹線状のナデ部分がある。内面は口縁付近などにハケ目がみられるものの、大半はヘラ削りとナデであろう。内面上部は煤が厚く付着している。胎土に雲母・角閃石・赤褐色粒・細砂粒を含み、茶褐色ないし淡茶褐色に焼成されているが、黒変する部分も多い。

141号土壤（第162図）

8A区南西隅にあり、調査区域内では最も東に位置する。南東側は崖状の落ち込みで削られるが、不整楕円形プランで長さ348cm、幅135cm、深さ35cmの規模。主軸方向はN84°Wをとる。境内は西側から3段の階段状に深くなるが、西側は狭くて小さなテラス状。東側の床面は5~10cmの段差があるものの、240×100cmの広さで、ほぼ平坦である。

土壤内から、土師器片が出土したものの、小破片のため図示しえない。

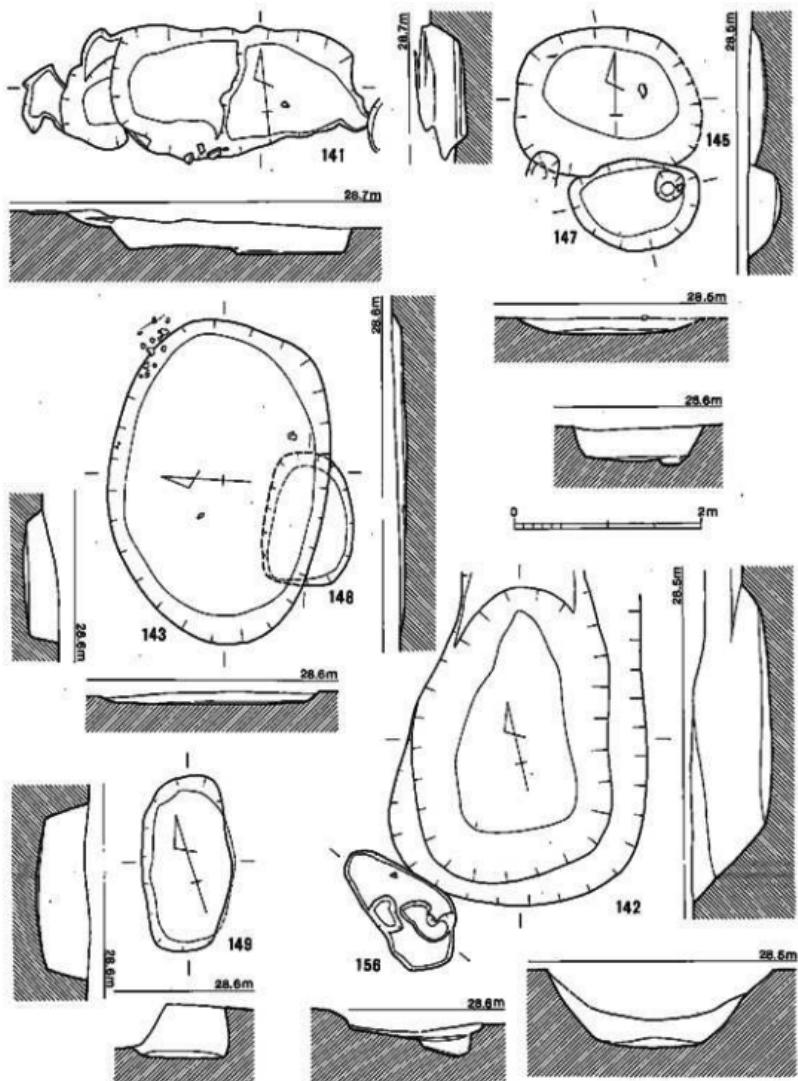
142号土壤（第162図）

9E区北端と10E区南端に跨り、9号土壤墓の南西側に位置する。上部を2号溝で削られるが、不整楕円形プランで長さ338cm、幅253cm、深さ80cmの規模。主軸方向はN13°Eをとる。周壁は緩傾斜で、235×120cmの広さの床面は、やや中凹みながらもほぼ平坦である。

土壤内から、須恵器片、土師器支脚片も出土したが、小破片のため図示しえない。

出土遺物（第161図）

土師器壺（311・312）311は、く字形に外反する口縁部破片で、端部はほとんど肥厚しない。復原口径28.8cmの大きさで、口縁内外はヨコナデ調整、胴部にはハケ目がみられる。胎土に雲母・角閃石・赤褐色粒を含み、淡黄褐色に焼成されている。312は復原口径23.0cmの大きさ



第162図 土壌実測図17 (1/60)

さで、口縁部があまり肥厚せずに外反する変で、胴部内面はヘラ削りされる。胎土に雲母・赤褐色粒を含み、明黄褐色に焼成されている。

143号土壤（第162図）

9E区西寄りにあり、142号土壤の南側に位置する。不整精円形プランで長径343cm、短径237cm、深さ22cmの規模。主軸方向はN86°Eをとる。周壁は緩傾斜で低く、295×195cmの広さの床面はほぼ平坦である。

出土遺物（図版62・63、第124・161図）

土師器小皿（313） 口縁部を欠くが、復原底径5.8cmの大きさの糸切り底をもち、ヨコナデ調整される体部は直線的に開く。胎土に褐色粒・雲母を含み、淡明褐色に焼成されている。

土師器壺壺（314） 円筒状で、復原口径11.0cmの大きさ。器壁は1.0cm前後だが、口縁部は肥厚し僅かに外反する。外面はナデ調整されるが、内面には圧痕による低い腰起帯がある。胎土に砂粒と褐色紋を含み、淡明褐色に焼成されている。

土師質鍋（315） 口縁部が直線的に開き、端部は外側に折疊んだように肥厚する。口縁端部はヨコナデ調整されるが、外面は指頭痕の残るハケ目とナデ調整、内面にも部分的にハケ目がみられる。胎土に雲母を含み、暗橙色に焼成されているが、内外面とも煤が付着する。

瓦質火鉢（316） 脇部破片で、ヨコナデ調整される外面は、蒲鉾形の籠状凸帯間に巴模様の印刻文が押捺される。内面はハケ目調整され、胎土に雲母を含み、灰黒色に焼成される。

土製品（第124図5） 長さ5.0cm、外径2.2cm、孔径0.6cm、重量19.4gを測る、管状土綫である。胎土に砂粒・褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。

144号土壤（第163図）

9E区西端にあり、143号土壤の約2m南側に位置する。隅丸長方形プランを呈し、主軸方向はN1°Eをとる。長さ88cm、幅66cm、深さ10cmの規模で、床面はほぼ平坦である。

土壤内から、土師器片および糸切り底の小皿らしい破片が、出土したもの的小破片で図示しえない。

145号土壤（第162図）

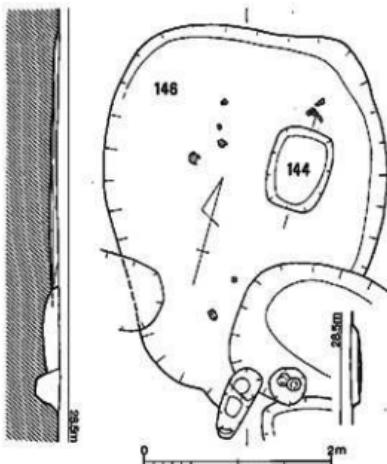
9E区南西部にあり、147号土壤に南側を一部削られる。不整精円形プランで長径196cm、短径153cm、深さ11cmの規模。主軸方向はN89°30'Eをとる。周壁は緩傾斜で、140×90cmの広さの床面はやや内凹みである。南側肩部に147号土壤よりも後出する浅いピットがあり（図版55-1、第163図）、土師器杯が2点並ぶが、これについては後項266頁で触れる。

出土遺物（第161図）

土師器杯（317） 復原口径13.2cm、
器高2.9cm、底径10.0cmの大きさ。口
縁端部はやや内側気味に整えられる。
外底面はヘラ削りされ、体部はナ
デ・ヨコナデ調整される。

須恵器壺（318） 復原口径14.2cm、
残存器高5.0cmの大きさ。口縁部は直
線的に立上がり、端部はやや薄く整
えられるが、内外面ともヨコナデ
調整される。胎土に砂粒を含み、暗
灰色に焼成されている。

須恵器壺（319） 復原最大径
13.9cmの大きさで、口頸部・底部を
欠く。胴部は脇球形に膨れるが、肩
が少し張り気味である。ヨコナデ調
整され、胎土に若干砂粒を含んで、
灰褐色にややあまく焼成されている。



第163図 土塙実測図18 (1/60)

146号土塙（第163図）

9E区西端と9F区東端に跨って位置する。145・147号土塙に南東側を削られ、155土塙に西
側の一部を削られ、144号土塙に北東部の上層から掘り込まれる。不整規円形プランで長径390
~410cm、短径300cm、深さ15cmの規模。主軸方向はN16°Wをとる。

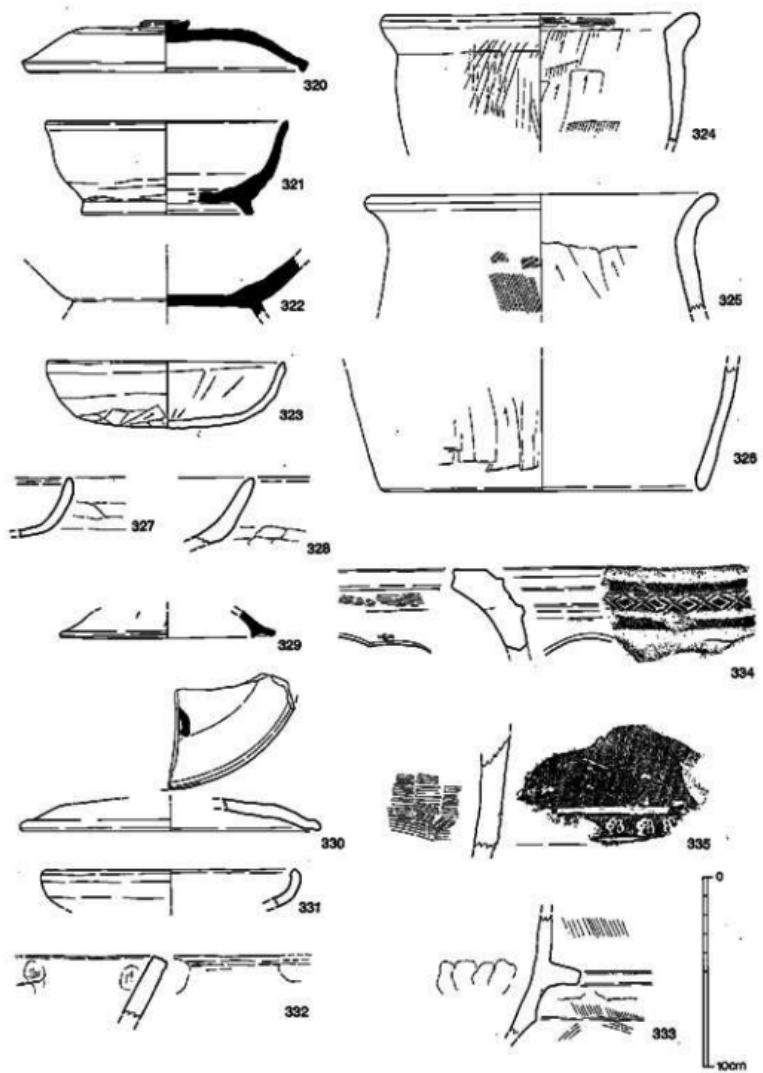
周壁は緩傾斜で、南側ではプランと床面の差がない程に検出面と床の高低差がなく、床面は
ほぼ平坦である。

出土遺物（図版62、第164図）

須恵器杯蓋（320） 鳥嘴状の口縁部をもち、回転ヘラ削りされる外天井に扁平なつまみが
付く器形で、口径14.9cm、器高2.7cm、つまみ径2.6cmの大きさ。細砂粒を胎土に含み、暗灰色
に焼成されている。

須恵器杯身（321） 口径13.0cm、器高4.9cm、高台外径9.20cmの大きさ。口縁部は若干外反
し、高台は底部に踏張るように付けられる。体部は概ね内外面ともヨコナデ調整されるが、底
部付近にヘラ削りの部分がある。胎土に砂粒を含み、暗褐色にあまく焼成されている。

須恵器壺（322） 底部の破片で、胴部より上側を欠くが、高台は外側に踏張るように付く。
ヨコナデ調整され、胎土に若干砂粒を含んで、黒灰色に焼成されている。



第164図 土壤出土土器実測図 33 (1/3)

土師器杯 (323) 口径12.8cm, 器高3.5cmの大きさ。口縁部は内輪気味に開き、底部は丸みをもつ。口縁部外面はヨコナデ調整されるが、内面に板状工具の痕がある。外底部付近は静止ヘラ削りされる。胎土に砂粒を含み、茶褐色に焼成されている。

土師器甕 (324・325) 324は口縁部が肥厚して短く外反し、内面に稜をもつ。頸部から胴部へはほとんど膨れずに移行する。胴下半を欠くが、復原口径17.0cm、残存器高7.0cmの大きさ。口縁部内面と胴部外面がハケ目調整、胴部内面はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・雲母・褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成されているが、胴部外面に煤が付着する。

326は口縁部が肥厚せずに緩やかに外反する。頸部から胴部へ膨れるが、胴部以下を欠き、復原口径19.0cmの大きさ。胴部外面はハケ目調整、内面はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・雲母を含み、黄褐色に焼成されている。

土師器甕 (326) 胴部より上側を欠くが、復原底径17.6cm、残存器高 6.6cmの大きさで、底から胴にかけて僅かに内彎して膨れる。外面はヘラ削りないしヘラによるナデ調整で、内面はヨコナデ調整される。

胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。

147号土壙（第162図）

9E区南端にあり、145・146号土壙の南東側に位置して、両者の一部を削っている。不整楕円形プランで長径137cm、短径99cm、深さ38cmの規模。主軸方向はN78° 30' Eをとる。床面はやや内凹みである。

出土遺物（第164図）

土師器杯 (327・328) いずれも口径を復原しえない程の破片である。胎土に雲母・褐色粒を含み、淡明褐色ないし淡茶褐色に焼成されている。327は口縁部が内輪気味に開き、底部付近の外面は静止ヘラ削りされる。328は口縁部が直線的に開き端部が外反気味である。こちらも底部の外面付近は静止ヘラ削りされる。

148号土壙（第162図）

9E区西寄りにあり、143号土壙の南側で重複して、北側を削られている。不整楕円形プランで長径141cm、短径94cm、深さ38cmの規模。主軸方向はN88° 10' Eをとる。16号住居跡の北西側隅とも重複していて、住居跡床面との区別が明瞭ではなかったが、床面はやや内凹みながらもほぼ平坦である。

出土遺物（第164図）

須恵器杯蓋 (329) 身受けのかえりを有する杯蓋で、天井部を欠くが、復原外径11.6cm、残存器高1.4cm、かえり部径9.6cmの大きさ。細砂粒を胎土に含み、暗灰色に焼成されている。

土師器杯蓋 (330) 退化した鳥嘴状の口縁部をもち、外天井は回転ヘラ削りされているが、つまみの有無は不明。復原口径16.2cm、残存器高1.7cmの大きさ。細砂粒・褐色粒・雲母を胎土に含み、淡明褐色に焼成されているが、外天井に墨書きの一部がみられる。

土師器杯 (331) 復原口径13.6cm、残存器高2.0cmの大きさ。口縁部は内彎気味に立上がり、底部側は丸みをもち、ヨコナデ調整される。胎土に細砂粒・褐色粒を含み、茶橙色に焼成されている。

149号土壙 (第162図)

9F区南東部にあり、8号溝に西側を削られている。不整椭円形プランで長径188cm、短径97cm、深さ56cmの規模。主軸方向はN17° Eをとる。東側の周壁は僅かにオーバーハングするが、床面は160×85cmの広さで、やや内凹みながらもほぼ平坦である。

土壙内からは、土師器糸切り底の皿らしい破片が出土したもの、小破片で図示しない。

150号土壙 (図版53-1・2、第165図)

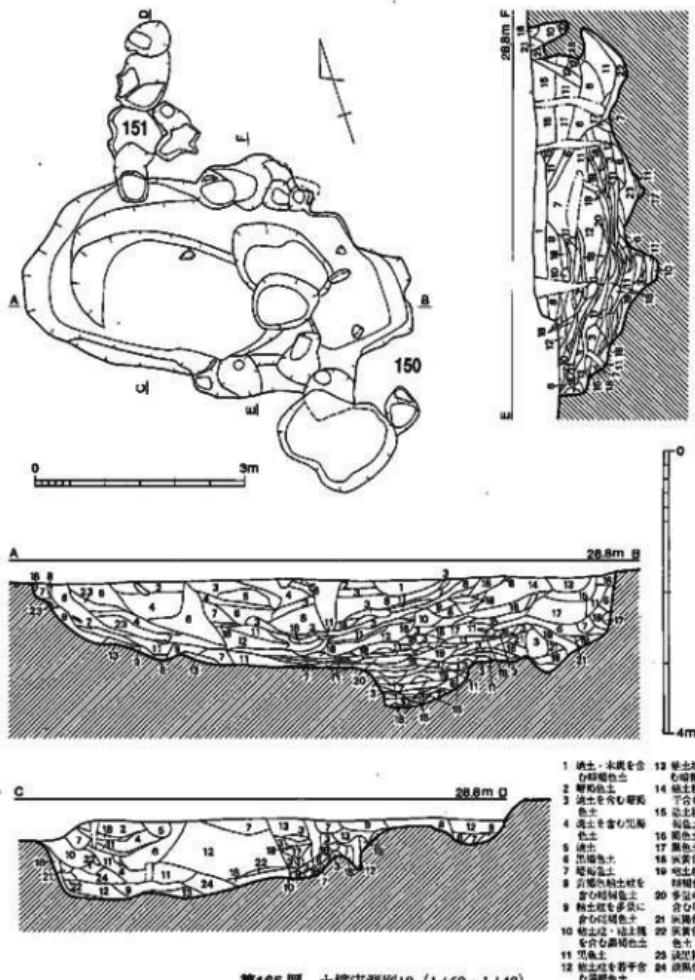
9C区西端と9D区東端に跨って位置し、斬状の溝に南側の上部を削られ、北側で151号土壙にも切られる。不整椭円形プランで長径420cm、短径220cm、深さ110cmの規模。主軸方向はN70° 40' Wをとる。全体では幅256cmを測り、平面では検出できなかったが、断面土層の観察からして、北側に幅100cm程の掘り込みが後出していて、この幅全体が一つの土壙とするには躊躇する。また長軸方向では南東側端から308cmの位置までが粘土の堆積が顕著で、意図的に埋め立てられた部分と判断しうる。従って複数段階の掘削がこの部分にあったことになるが、北西側の下部堆積層では遺物が確認できていない。それ以外では発掘時に、出土遺物を含めて明確に範囲を充分に検討していない。なお、南東寄りの土壙とした際の床面では中央部に30cm程深いピットを伴っている。

出土遺物 (図版62、第168図)

土師器甕 (336~339) 336・337は、くびれた頸部から口縁部が強めに外反し、肩部もかなり膨れるが胴部以下を欠く。口縁部はあまり肥厚せず、縫部は丸みをもつ。口縁内外と縫部はヨコナデないしナデ調整され、内面の頸部以下はヘラ削りされる。復原口径は26.0cmと22.4cmの大きさで、胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み、赤茶褐色・黄褐色に焼成されているが、外面を中心に煤が付着している。

338は底部破片で、底面は平らだが丸みをもつ。外面はハケ目調整され、内面はヘラ削りされる。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒・角閃石を含み、淡茶褐色に焼成されるが、外底面は黒色を呈している。

339は頸部から口縁部が大きく外反し、肩部があまり膨れずに胴部に移行する。器壁が薄め



第165図 土壌実測図19 (1/60・1/40)

で、口縁部も肥厚しないが、磨滅して調整手法は不明。復原口径21.4cm、残存器高 6.7cmの大きさ。胎土に雲母・赤褐色粒を含み、淡橙色に焼成される。

土師器杯 (340) 復原口径16.0cm, 器高3.5cmの大きさ。ヨコナデ調整される口縁部は内弯して立上がり、外底部を静止ヘラ削りされる底部は丸みをもつ。胎土に雲母・赤褐色粒を含み、淡茶橙色に焼成されている。

土師器皿 (341) 復原口径21.9cm, 器高2.3cmの大きさ。胴部は内弯気味に立上がるが、口縁部が大きく外反して内弯気味に開く。外底部は静止ヘラ削りされるが底面を失う。胎土に赤褐色粒を含み、黄褐色に焼成されている。

151号土壤 (図版 62, 第165図)

9C区西端にあり、150号土壤の北側に位置して、これを切る。150号土壤の断面土層観察などからして、不整横円形プランで長径175cm、短径92cm、深さ44cmの規模。主軸方向はN 19° Eをとるが、深さを有する部分は長軸方向でも南西側から100cm弱で、北東側は浅いピットが重複した状態である。床面も凹凸がある。

土壤内からは、なんらの遺物も確認できなかった。

152号土壤 (第153図)

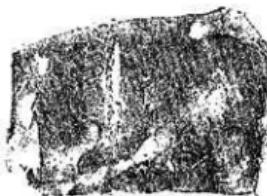
11D区西端と11E区東端にあり、121号土壤の北西に隣接する。塊石などを集積させた1号溝・2号溝の合流部が上部をけざるが、主軸方向をN $22^{\circ}30'$ Eにとる長横円形プランを呈し、長さ400cm、幅150cm、深さ70cmの規模である。床面は360×80cmの広さで舟底状に凹む。

出土遺物 (第164図)

土師質鉢 (332) 直線的に開くが、肥厚せずに端部を平らに整える口縁部破片である。内外面とも磨滅するがナデ調整であろう。指頭痕が残る。胎土に雲母・赤褐色粒を含み、淡橙色に焼成されている。

土師質釜 (333) 鍔状の凸帯をもつ胴部破片である。胴部外面はハケ目調整され、ヨコナデで凸帯が貼付けられる。鍔状凸帯の少し下に凸帯状の段があり、底部に移行する。内面は指頭痕の残るナデ調整である。精良な胎土で、橙褐色に焼成され、鍔状凸帯の下には煤が付着する。

瓦質火鉢 (334・335) 334は大きく内弯する口縁部破片で、端部は内面・上面ともに平らな面をつくる。



第166図 土壤出土拓影品3 (1/3)

外面の壇部下に巡る2条の輪状凸帯間に菱形の印刻文が押捺されている。この破片では下部に菱形らしい透かし穴の面がある。335は胴部破片で外面にある2条の沈線間に梅花形の印刻文が押捺されるが、沈線部分は輪状凸帯が貼付けられて剥落したのであろう。いずれも内面にはハケ目調整痕がみられる。胎土に雲母を含み、暗黄灰色ないし暗灰色に焼成されている。

瓦（第166図） 内彎する面に布目压痕、外彎する面に叩き目を残す瓦で、厚み1.5~3.0cm、幅は13.5cmで、両端に割り面がある。胎土にほとんど砂粒を含まず、灰色に焼成されている。

砥石（第134図7） おむすび形をした安山岩質凝灰岩円礫のやや平らな面に刻まれた溝が砥面にされている。溝は一方の面に6条と反対の面に2条ある。大きさは8.4cm×8.0cmの広さで、3.7cmの厚みがあり、溝の長さは5.0cm前後である。

153号土壤（第159図）

8D区の中央部にあり、14号土壤墓の南東隅と重複して、これを切り込む。不整方形プランを呈し、長さ105cm、幅92cm、深さ16cmの規模で、主軸方向N78° 10' Wにとる。南側で柱穴状ピットに切り込まれるが、床面は僅かに内凹みである。

土壤内から土師器小皿片が出土したものの、小破片で図示しない。

154号土壤（第158図）

10D区中央部にあり、28号土壤墓の南西に隣接するが、擾乱坑によって南北両側を切られる。主軸方向をN85° 10' Wにとる不整格円形プランを呈し、長さ125cm、幅85cm+α、深さ20cmの規模である。周壁は緩やかに傾斜し、床面は平坦である。

土壤内から土師器片が出土したものの、小破片で図示しない。

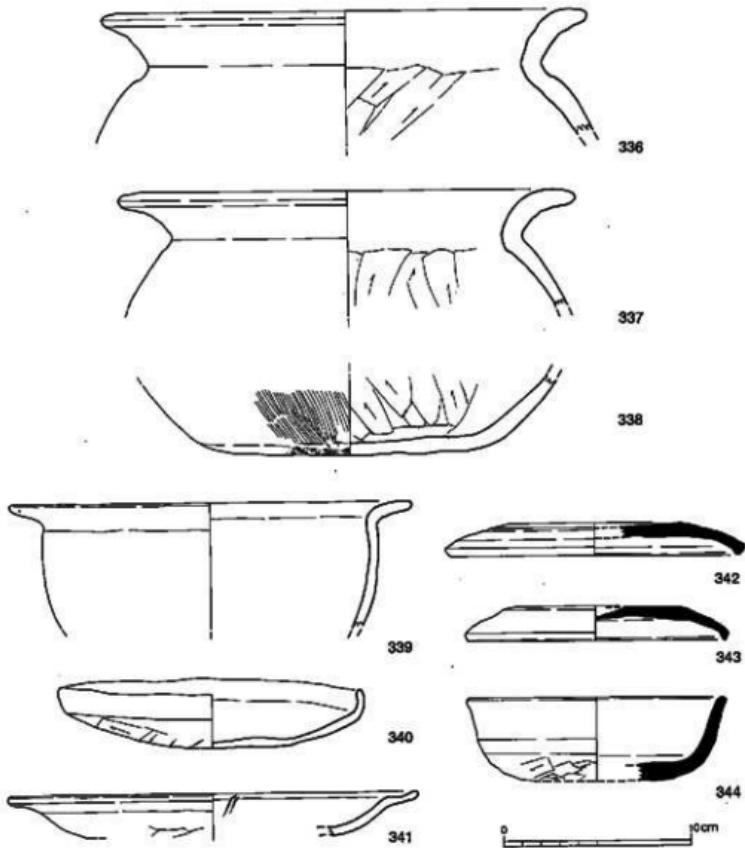
155号土壤（第158図）

9F区の東端にあり、146号土壤の南西部と重複して、これを切り込む。隅丸方形プランを呈し、長さ110cm、幅75cm、深さ10cmの規模で、主軸方向をN87° 40' Wにとる。壇内は全体に緩やかな内凹みになっている。

土壤内から土師器片、瓦賀火鉢片が出土したものの、小破片で図示しない。なお、火鉢には薔薇花状の印刻文が押捺されていた。

157号土壤（第158図）

9D区の北東寄りにあり、150号土壤の北西に位置する。柱穴状ピットに一部切り込まれるが不整格円形プランを呈し、長さ130cm、幅91cm、深さ32cmの規模で、主軸方向をN86° 30' Wにとる。周壁は緩く傾斜し、床面は内凹みである。



第167図 土壌出土土器実測図34 (1/3)

土壌内から土師器片、土師質鏡片などが出土したものの、小破片で図示しえない。

158号土壌（第158図）

10E区の中央部にあり、26号土壌墓の北に位置する。不整梢円形プランを呈し、長さ232cm、幅205cm、深さ43cmの規模で、主軸方向をN7°30'Eにとる。周壁は緩く傾斜し、床面は2段

になる。170×120cmの広さの南側床面は、北西側がやや低いもののやや平坦で一段高い。北側は緩やかな内凹みの床面である。

出土遺物（第167図）

須恵器杯蓋（342・343） 退化した鳥嘴状の口縁部をもつ杯蓋である。回転ヘラ削りされる外天井に付くつまみを欠く。342は復原口径16.0cm、残存器高1.8cm、343は復原口径13.8cm、残存器高1.9cmの大きさ。胎土に細砂粒を含み、淡茶褐色・淡橙色にあまく焼成されている。

須恵器杯身（344） 復原口径13.8cm、器高4.5cmの大きさで、ヨコナデ調整の口縁部はやや外反する。外底部は静止ヘラ削りされる。胎土に細砂粒を含み、黄灰色に焼成されている。

159号土壙（第158図）

10E区の中央部にあり、11号土壙の南側に位置する。158号土壙とともに2号溝の東側にあって、158号土壙の北側に隣接する。北側に浅い土壙があり、これより後出しているが、不整格円形プランを呈する。長さ175cm、幅111cm、深さ25cmの規模で、主軸方向をN90°Wにとる。周壁は緩く傾斜し、床面は内凹みである。

土壙内からは、なんらの遺物も出土しなかった。

160号土壙（第158図）

10E区の東端にあり、154号土壙と158号土壙の間に位置する。瓢状の不整格円形プランを呈する。長さ221cm、幅124cm、深さ38cmの規模で、主軸方向をN90°Wにとる。西側に緩傾斜のテラスをもち、床面は110×95cmの広さでほぼ平坦である。

土壙内から土師器片が出土したもの、小破片で図示しない。

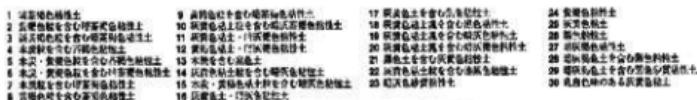
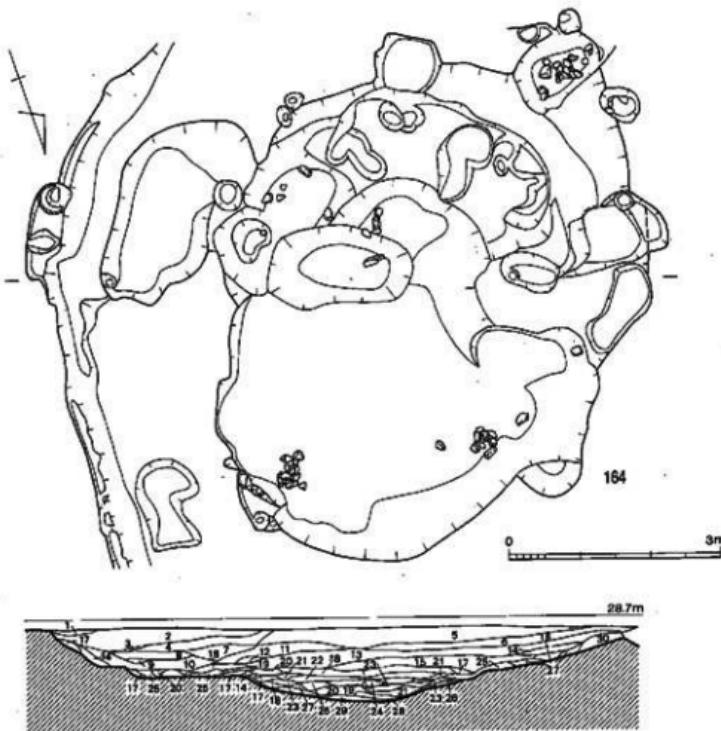
161号土壙（第158図）

10D区の北部にあり、24号土壙の北側に位置する。不整格円形プランを呈し、長さ125cm、幅111cm、深さ25cmの規模で、主軸方向をN1°Eにとる。床面は105×60cmの広さで僅かに内凹みながらほぼ平坦である。

土壙内からは、扁平石以外なんらも出土しなかった。

162号土壙（第158図）

10D区の北部にあり、24号土壙の北側に位置するが、161号・163号土壙の一部を切る。不整格円形プランを呈し、長さ157cm、幅106cm、深さ30cmの規模で、主軸方向をN6°10'Eにとる。床面は125×85cmの広さでほぼ平坦だが、中央に柱穴状ピットをもつ。南肩部付近に塊石がみられた。

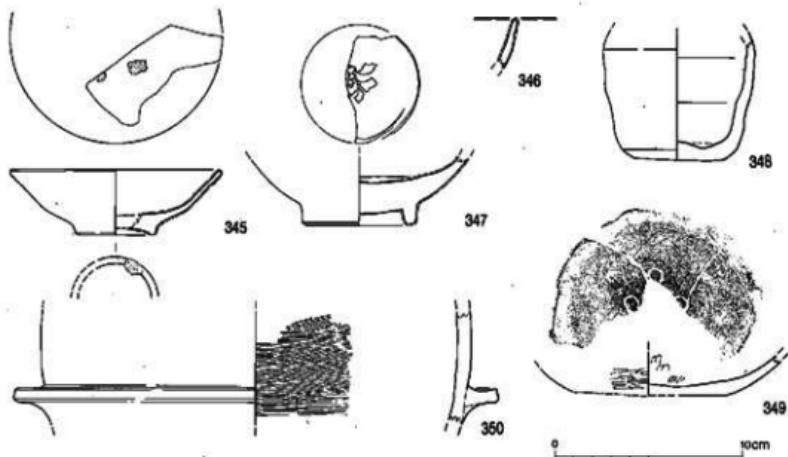


第168図 土壌実測図 20 (1/80)

土壤内からは、なんらの遺物も出土しなかった。

163号土壌（第158図）

10D区の北部にあり、24号土壌墓の北側に位置するが、126号土壌の北縁を切り、162号土壌に一部を切られる。不整梢円形プランを呈し、長さ121cm、幅71cm、深さ29cmの規模で、主軸方向をN20°Eにとる。床面は80×60cmの広さではほぼ平坦だが、東側に柱穴状ピットをもつ。



第169図 土壌出土土器実測図 35 (1/3)

土壤内からは、土師器片が出土したものの、小破片で図示しえない。

164号土壤 (図版 53-3, 第168図)

7C区の北東部にあり、108号土壤・112号土壤に南側と南西側の一部を削られる。不整円形プランで長径880cm、短径860cm、深さ105cmの規模だが北側は近世溝に削られて不明瞭であり、南西側も土壤や柱穴状ピット群などがあって、輪郭を確定するのが困難であった。東側から南側にかけて幅150~200cmのテラスがあるものの、北側から西側の周壁は緩やかに傾斜している。

壁内周壁や床面には、いくつかの小規模な土壤やピットが重複していて、凹凸をなしているが、調査時にはこれらをすべて一括して大型の土壤として掘り下げるため、特に別個の遺構として区別しなかった。なお、北側には塊石のやや集中する部分もある。

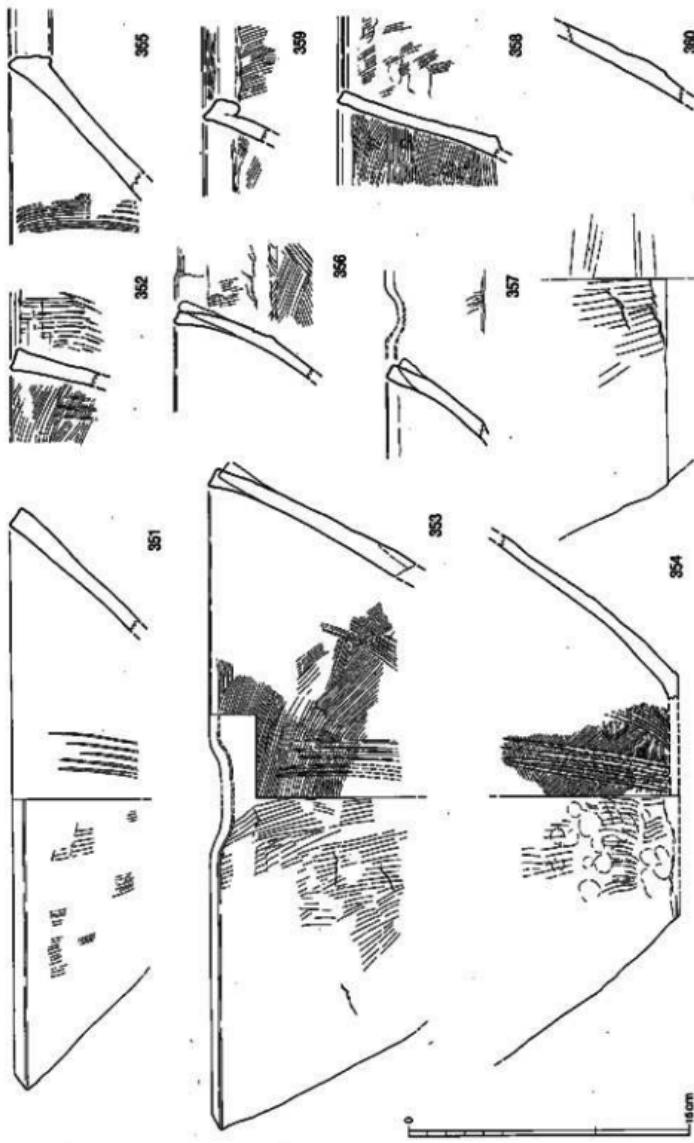
土壤内からは、糸切り底の土師器小皿片なども出土したが、小破片ばかりで図示しえなかった。また、鉄滓が総量で1565g分出土した。

出土遺物 (図版 62~64, 第169・170図)

青磁皿 (345) 口縁部が直線的に開く皿で、復原口径11.3cm、器高3.4cm、高台外径4.4cmの大きさ。疊付け以外は灰色味のあるオリーブ色の釉がかかり、内底面と疊付けに日土痕がみられる。砂粒を若干含むが精良な胎土である。李朝系青磁であろう。

青磁碗 (346・347) 346は直口縁の李朝系青磁碗らしい口縁部破片である。精良な胎土で、

第170圖 土壞出土器物剖面圖 36 (1/3)



緑灰色の釉がかかる。347は内底面に花柄の彫られた底部破片である。復原高台径6.0cmの大きさで、高台まで淡灰緑色の釉がかかる。

龍泉窯系青磁であろう。

土師器小壺（348） 口頸部を欠くが、残存器高6.9cm、底径4.4～5.2cm、胴最大径8.3cmの大きさで、胴部は底部から僅かに膨れる。外底面はナデ調整され、胴部もヨコナデないしナデ調整されるが、底部付近に回転ヘラ削り痕がみられる。胎土に細砂粒を含み、黄灰色に焼成されている。

土師器杯（349） 口縁部を欠くが、外底面をヘラ削りし、内外面にヘラ磨き痕のある杯で、底径8.2cmの大きさ。内底面に円形押捺が3つあるが、本来は4つであろう。胎土に雲母・赤褐色粒を含み、橙褐色に焼成されている。

土師質湯釜（350） 鍋状の凸帯をもつ胴部破片で、胴部最大径23.2cm、凸帯外径26.0cmに復原される。内面はハケ目調整され、外面はヨコナデないしナデ調整される。精良な胎土で、茶褐色に焼成されるが、外面には煤が付着している。

土師質摺鉢（351～354） 351の復原は傾きすぎかも知れないが、復原口径31.0cmの大きさで、口縁部が直線的に開き、肥厚気味の端部は平らに整えられる。352も直線的に開くが、353は口縁端部が内弯気味で、口唇部内面がつまみ上げられたような形につくられ、片口が付く。復原口径35.3cmの大きさ。354は口縁部を欠くが、比較的器壁が薄い摺鉢である。復原底径13.2cmの大きさ。いずれも、外面は縱方向ハケ目の後にナデ調整され、指頭痕が残る。内面はハケ目調整された後に、351・353は5条、354は4条単位の櫛齒状の目が刻まれる。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒などを含み、橙褐色ないし淡茶褐色に焼成されているが、352・354の内面に焦げ付きと、351の外面に煤が付着している。

陶器摺鉢（355） 口縁部は直線的に開くが、端部が外側に垂れるように肥厚する。内外面ともにナデ調整され、内面に8条単位の櫛齒状の目が刻まれる。胎土に細砂粒を含み、褐色に焼成されている。備前系の摺鉢であろう。

土師質鍋（356～360） 口縁部が内彎する356・357と、外反気味ながら直線的な358は端部が肥厚せずに口唇内面をややつまんだように整えられる。前者は口縁から5cm程下に凸帯状の段があり片口が付くが、後者は8cm余り下に段がある。外面はハケ目調整の後にナデ調整されるが、前者の内面がナデられるのに対し、後者の内面はハケ目調整される。胎土に細砂粒・雲母を含み、橙褐色ないし暗橙色に焼成されているが、外面には煤が付着する。

359は直線的に開いた口縁部破片だが、端部は外側に折疊んだように肥厚し、口唇内面が上につままれたように整えられる。内外面と口縁端部上面にハケ目がみられるが、端部内外面はヨコナデ調整される。精良な胎土で、淡橙色に焼成されている。

360は凸帯状の段の有る胴部破片だが、外面のハケ目調整が雑で、内面は板状工具によるナ

テ調整であろう。胎土に雲母・細砂粒を含み、橙褐色に焼成されている。

土製品（第124 図6） 管状土錘の半欠資料である。現存長2.9cm、外径1.3~1.5cm、孔径0.4cm、重量4.6gの大きさ。胎土に砂粒を含み、灰黄褐色に焼成される。

石製品（第134 図8・9） 8は片岩質砂岩製の砥石片で、9は滑石製石鍋片を再利用した整形具である。整形具は周縁を欠損するが、つまみ部分は4.4×3.5cmの広さがある。

古 錢（図版 64） 「洪武通寶」が1点出土した。直径2.3cmの大きさで、表面は太めの楷書体、背面は無文である。洪武通寶は明錢で、初鑄年代は1368年である。

5. 溝状造構

1号溝

10区北西部から11D区北西隅にかけて発見されたが、調査区域外の12D区方向に続き、区内では約16mの長さを確認した。暗茶褐色土を中心に堆積する溝である。幅0.5m~0.8m、深さ0.1~0.2mの規模をもち、2号溝より新しく、3・5・6・152号土壤も切る。

出土遺物（図版 65・67、第171図）

須恵器壺（1） 壁部を欠く口縁部破片であり。外面はヨコナデ調整され、小口による刺突と波状文が描かれる。胎土に細砂粒を含み、茶灰色に焼成されている。

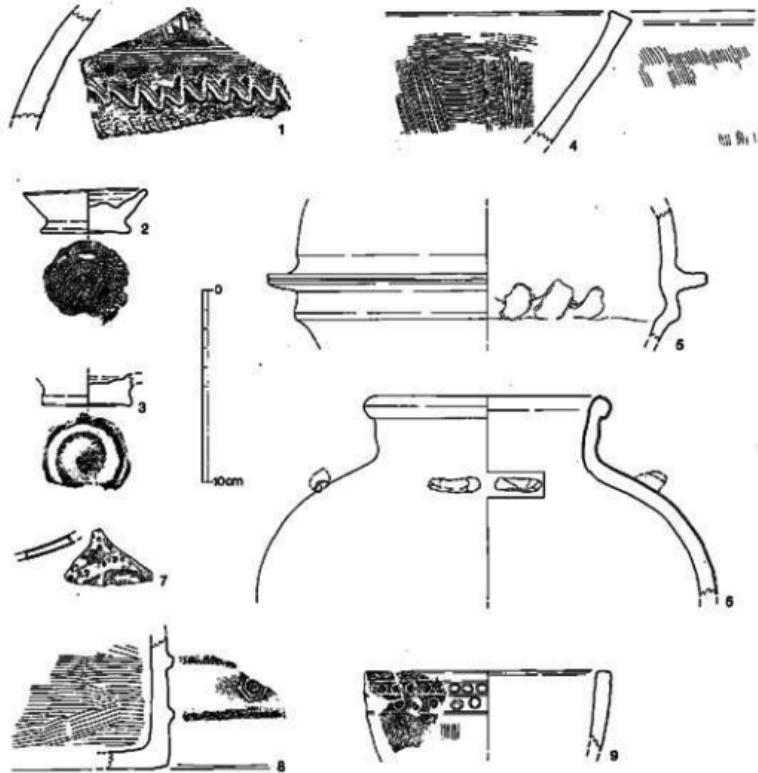
土師器小皿（2・3） 2は、復原口径6.5cm、器高2.3cm、底径6.7cmの大きさで、底部は台状をなし1.5cm程の厚みをもつが、糸切り底である。口縁部は短く、直線的に開く。胎土に雲母・赤褐色粒を含み、黄褐色に焼成されている。3は口縁部を欠くが、やはり台状の底部をもつ。底径4.7cmで、底面はヘラ切り離しである。精良な胎土で、淡橙色に焼成されている。

罐鉢（4） 備かに内身気味ながら直線的に口縁部が開き、端部内外を拡張気味にし、上面を平らにする。外面はハケ目の後にナデ調整が加わり、内面はハケ目の後に横歯状の目を刻む。

胎土に雲母・赤褐色粒・細砂粒を含み、黒灰色に焼成される、瓦質罐鉢である。

湯釜（5） 鍋状の凸帯をもつ胴部破片で、復原胴最大径20.2cm、凸帯外径23.0cmの大きさ。胴部と底部の境目の凸帯状の段は、凸帯貼付けの際に内面側での力が強く、指痕を明瞭に残して、外面では突出したような形状を呈する。雲母を含むが精良な胎土で、灰色に焼成される、瓦質に近い器壁である。

陶器壺（6） 復原口径13.0cm、胴最大径24.0cmの大きさの備前系四耳壺ないし双耳壺であろう。直立口縁で、端部は玉縁状に肥厚する。耳は横方向に貼付けられるが、橋状部分を欠く。胎土に細砂粒・砂粒を含み、褐色に焼成されているが、部分的に自然釉らしい黄緑色の釉がかかる。

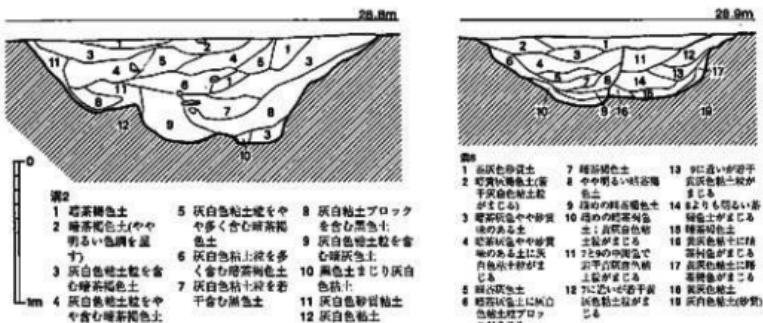


第171図 溝出土土器実測図1 (1/3)

染付(7) かなり傾斜が緩やかな破片であるが、内面には文様がみられない。外面にはコバルトブルーの色調で唐草文様などが描かれている。胎土・焼成ともに良好である。明の染付であろうが、蓋かも知れない。

火鉢(8) 底部破片であろう。底面は平坦で、胴部は直角に立上がり、外面に瘤状の凸筋が巡り、凸筋間に亀甲形の印刻文が押捺されている。内面はハケ目調整される。胎土に雲母・細砂粒を含み、淡茶褐色ないし灰色に焼成されている。

鉢(9) 復原口径13.0cmの口縁部破片である。直口縁で、弯曲気味にやや開くが、端部は平らに整えられて、外面に3条の沈線が巡る。沈線間に円形文が押捺される。胎土に雲母・



第172 図 2号溝・8号溝断面土層図 (1/20)

赤褐色粒を含み、淡橙褐色に焼成されている。

瓦 (第182図1) 呼き目と布目压痕を明瞭に残す平瓦片で、細砂粒・赤褐色粒を胎土に含み、橙茶色に焼成されている。

石製品 (第175図1) 花崗岩質の石材を用いた石臼の上臼だが、全体の1/5程の遺存状況である。高さ5.8cm、直径24~25cm程の大きさであろう。上縁は幅4.5~5.5cm、高さ1.5cm程に削り出されている。孔の部分は不明である。挽面は分割法で目が刻まれている。

2号溝 (第172図)

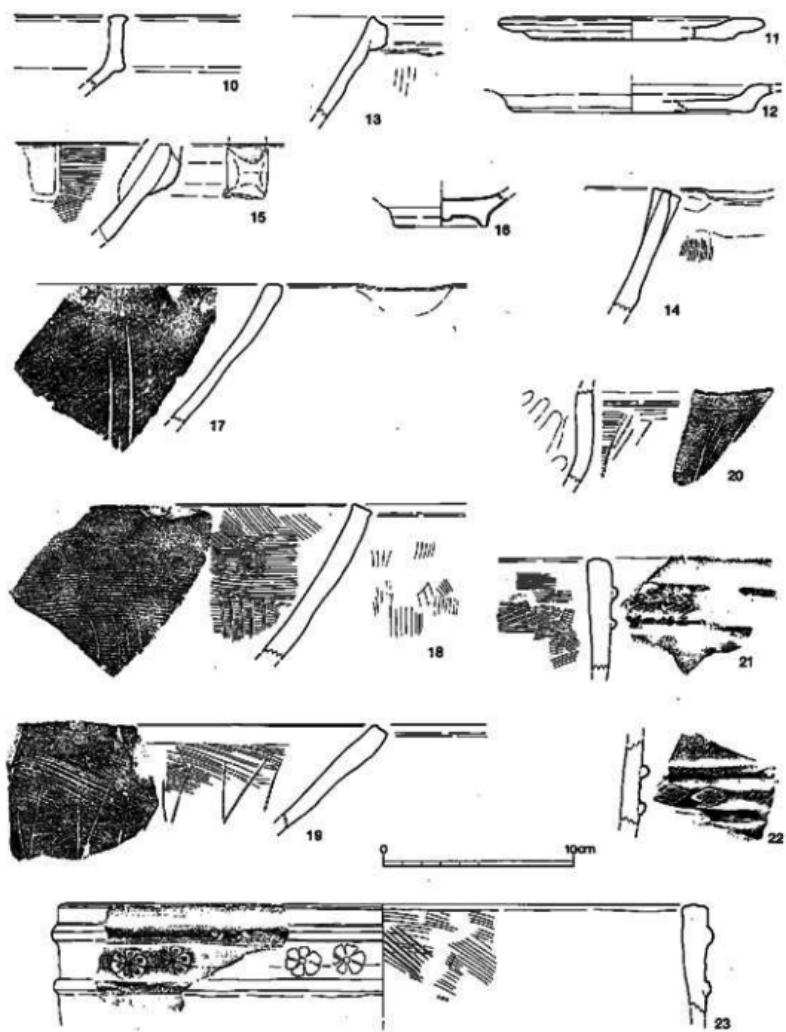
10D区南端から12D区南西隅にかけて発見されたが、調査区域外に続く。区内では約23mの長さを確認した。11E区東端で1号溝と合流するが、堆積土でみると、1号溝が後まで流れていったようである。幅2.5m、深さ0.8mの規模をもつ。なお、図示する土層図は26号土壤墓の北西側での堆積状況である。

出土遺物 (図版66・67、第173図)

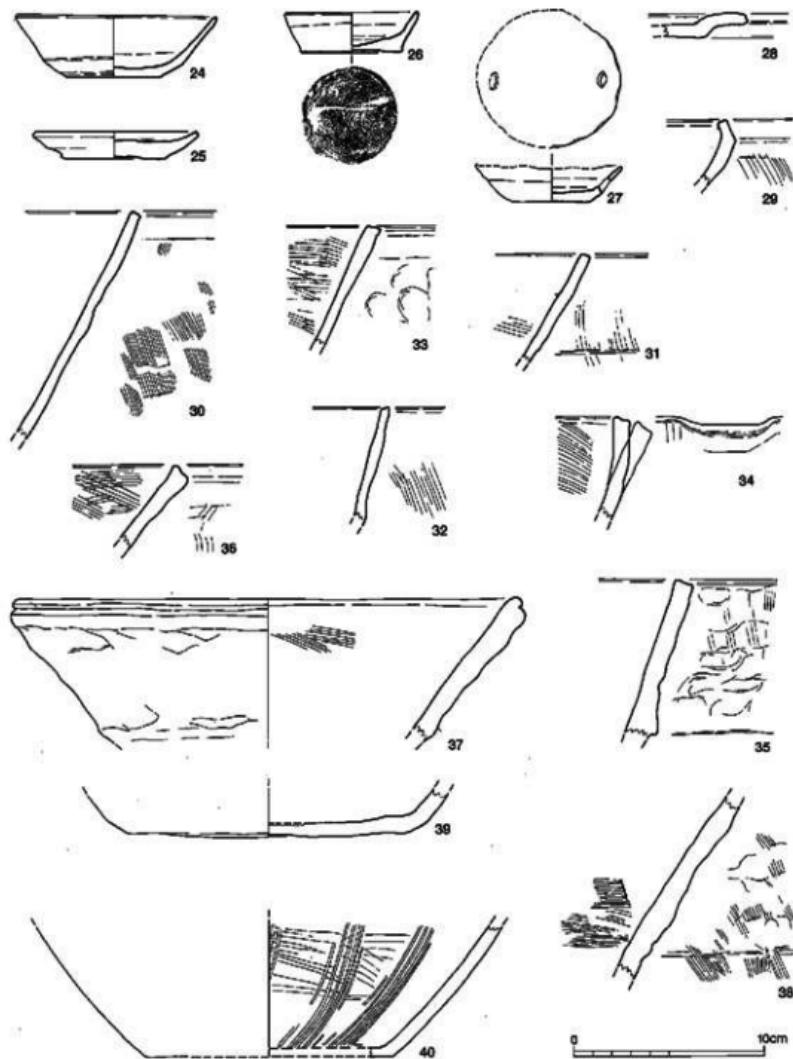
土師器壺 (10) 複合口縁の破片で、ヨコナデ調整されるが、口縁端と肩曲部は僅かに突出する。胎土に、細砂粒・雲母・角閃石・赤褐色粒を含み、淡黄褐色に焼成されている。

土師器皿 (11-12) 底部から口縁部が強く外反する低平な皿で、口縁部の器壁は厚めである。底部はヘラ切り離しられた後にナデられている。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み、茶褐色と灰黒色に焼成されている。11は復原口径14.0cm、器高1.2cm、底径11.7cmの大きさで、12は底径が13.0cmに復原される。

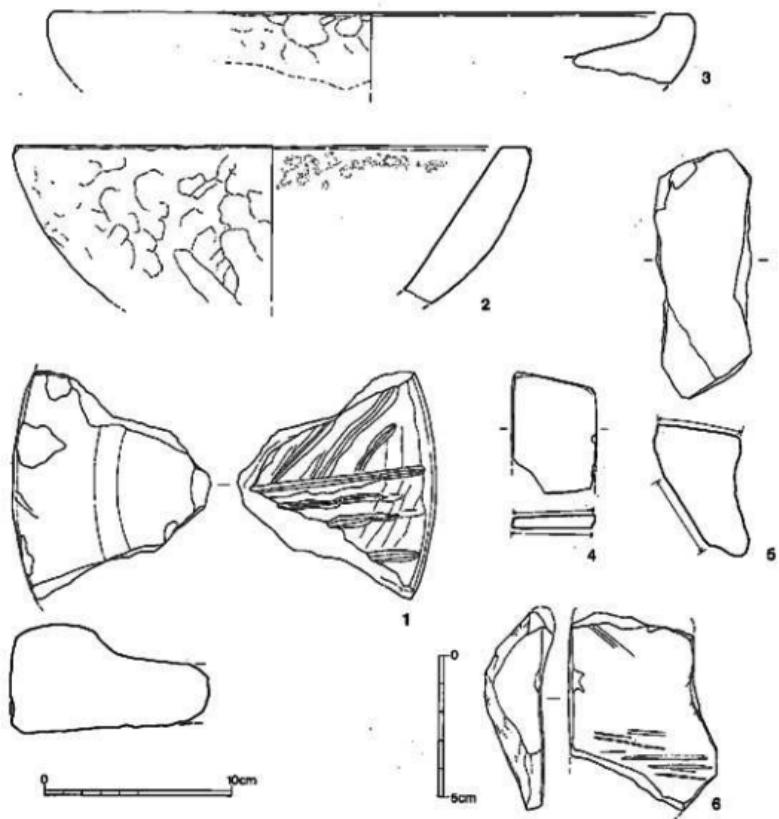
土師質鍋 (13~15) 13は、口縁部が内擣気味ながらも直線的に開き、端部が外側に折疊んだように肥厚する。ヨコナデないしナデ調整されるが、外面にハケ目の痕が残る。胎土に細砂



第173圖 溝出土土器実測図 2 (1/3)



第174図 溝出土器実測図 3 (1/3)

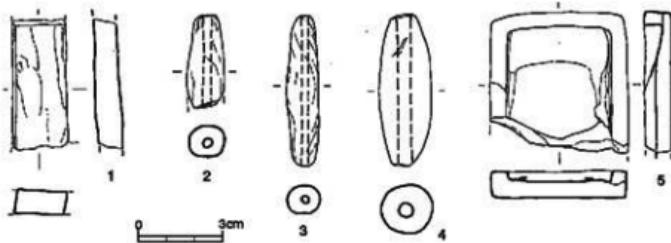


第175図 漢出土石製品実測図 (1/2・1/3)

粒・雲母を含み、橙褐色に焼成されているが、外面に煤が付着する。

14は、口縁部が内彎気味ながらも直線的に開き、端部がほとんど肥厚せずに端部上面を平らに整えられる。口縁部には片口が付く。ヨコナデないしナデ調整されるが、外面に少しハケ目が残る。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み、橙色に焼成されている。

15は、口縁部が内彎気味ながらも直線的に開き、端部がほとんど肥厚せずに端部上面を平らに整えられ、口縁部に小さな把手が付く。外面はナデ調整、内面はハケ目調整される。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み、淡橙褐色に焼成されているが、内面に焦げ付きがみられる。



第176図 濃出土製品実測図 (1/2)

焰焼の把手部分であろうか。

青 磁 (16) 高台外径5.0cmの大きさの皿ないしは茶碗であろう。釉は高台部分にもかかるが疊付けは露胎である。精良な胎土で、灰色の色調を呈している。

擂 鉢 (17~19) 17は、口縁部が直線的に開き、肥厚せずに端部でやや内凹し、片口が付く。内外面ともナデ調整され、内面に櫛齒状の目が刻まれる。雲母・赤褐色粒を胎土に含み、橙褐色に焼成されている。18は、やや器壁が厚めで、口縁部は内凹気味に開き端部が平らに整えられる。外面はハケ目後にナデ調整、内面はハケ目の後に櫛齒状の目が刻まれる。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み、暗灰黄色に焼成されている。19は、口縁部が直線的に開き、ほとんど肥厚せずに口唇内面が軽くつまみ上げられる。外面はナデ、内面はハケ目の後に目が刻まれる。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み、黒灰色に焼成されている。

湯 釜 (20) 瓦質湯釜の肩部破片で、外面に板小口压痕が付けられ、内面に指頭痕が残る。胎土に細砂粒・雲母・角閃石を含み、明灰色に焼成されている。

火 鉢 (21~23) 21・23は、直に立上がる口縁部破片で、端部にかけてやや肥厚気味に整えられている。内面にはハケ目が残る。22は肩部破片で内面はナデ調整される。それぞれ外面に2条の帯状凸帯が巡り、凸帯間に印刻文が押捺される。21・22は四菱形、22は6弁の花模様である。胎土に細砂粒・赤褐色粒・雲母を含み、黄灰褐色ないし黒灰色に焼成されている。

土製品 (第176図1・2) 1は、円面視の脚部分の破片である。上下両端を欠き、残存長4.6cm、幅1.8~1.9cm、厚み0.8~0.9cmの扁平な棒状で、側面はヘラで切り込まれて透かし窓部分になる。外面はヘラ磨きされ、内面にハケ目が残る。精良な胎土で、暗灰茶褐色に焼成されている。2は、管状土錐で、一端を欠くが、残存長3.3cm、外径1.3cm、孔径0.3cm、重量4.7gを測る。胎土に砂粒を含み、暗灰色に焼成されている。

石製品 (第175図2・3) ともに玄武岩質の石材を用いているが、2は石臼の下白で受け鉢部であろう。復原外径35.0cm、残存高3.8cmの大きさで、上縁は1.7cm幅である。内面はよく研磨されているが、外面には凹凸がある。3は石臼の下白の一部とすれば径が小さいので茶臼で

あろうが、石製の鉢かもしれない。復原外径28.0cm、残存高8.3cmの大きさで、上縁は1.7cm幅である。内面は上縁付近を除いてよく研磨されている。外面は凹凸がめだつ。

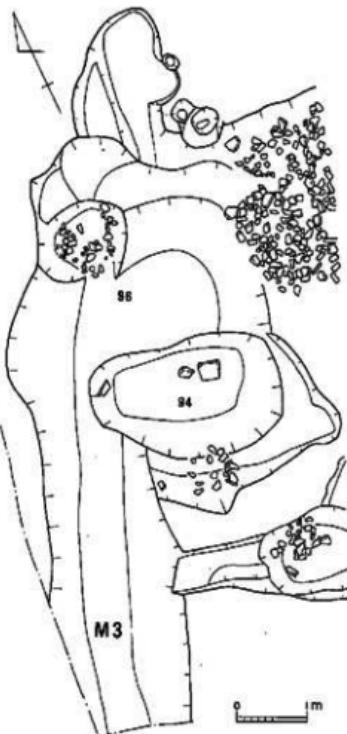
3号溝（図版54-1, 第177図）

7F区東半と8F区東半にある溝で、N23°E前後の方に伸び、溝柵区域外に続くが、約14mの長さを確認し、南端までは掘りえていない。上縁での幅は2mを越すが、1号集石土壙の東側あたりで北側の端になる。溝底の傾斜は緩やかで、南側では深さ0.5mに達し、断面形はU字形である。溝内には暗茶褐色の砂質粘性土が堆積していて、94号・96号土壙の上部を削平している。また、3号集石土壙の上層とは堆積土が近似し、3号集石土壙の西側では溝の幅が3.5mにも達しているので、溝の端部で排水のための何らかの施設があった可能性もある。

出土遺物（図版65～67, 第174・178～180図）

土器皿（24～27）24は、口縁部がやや長めで直線的に開く皿である。底部は糸切り離しされ、口縁部はヨコナデ調整される。復原口径10.7cm、器高3.2cm、底径4.9cmの大きさ。胎土に雲母・赤褐色粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。25は、口縁部が低く直線的に開く皿である。底部は糸切り離しで、口縁部はヨコナデされる。復原口径8.7cm、器高1.5cm、底径5.6cmの大きさ。底部は厚めで約1cmある。胎土に雲母を含み、黄桜褐色に焼成されている。26は、口縁部が直線的に開く皿で、底部は糸切り離しで、口縁部はヨコナデされる。復原口径7.0cm、器高2.1cm、底径5.4cmの大きさ。胎土に細砂粒を含み、淡橙色に焼成されている。27は、口縁部が直線的に開く皿だが、中途に焼成前の円孔が穿孔されていて、双孔かもしれない。底部は糸切り離しで、口縁部はヨコナデ調整される。口縁部が部分的に削られ、内外面に煤が付着する。復原口径7.6cm、器高1.9cm、底径4.0cmの大きさ。精良な胎土で、橙褐色に焼成されている。

土器皿（28） 口縁部が強く外反する皿の破片で、器高が1.3cmと低い。底面は磨滅して



第177図 3号溝実測図 (1/80)

調整手法が不明。口縁部はヨコナデ調整される。胎土に雲母・赤褐色粒を含み暗灰色に焼成されているが、外面と口縁部に煤が付着する。

瓦質鉢 (29) 口縁部破片で全体の形は分からないが、口縁部が稜をもって屈曲する鉄鉢形であろうか。

外面にハケ目がみられる。胎土に細砂粒を含み灰色に焼成されている。

土師質鍋 (30~39) 30~32は、口縁部が直線的に開き、肥厚せずに端部が整えられる鍋で、30では不明瞭だが、凸帯状の段が口縁から6~7cm下にある。段より上側はハケ目をナデ消すが、段より下の底部側はハケ目調整される。内面はハケ目の残る部分もあるがナデ調整される。胎土に細砂粒・雲母を含み、暗橙色に焼成され、外面に煤が付着する。33は、ほぼ同様の口縁部だが、端部がやや肥厚気味で上面を平らに整えている。

34は、片口付きの口縁部が内側に軽く、口唇内面がつまみ上げられ、内面はハケ目調整される。

35は、口縁部がやや厚めで直線的に開き、口唇内面がつまみ上げられる。凸帯状の段は約7cm下に巡り、内面はナデされる。36も、口唇内面がつまみ上げられるが、内面はハケ目調整される。いずれも胎土に細砂粒・雲母を含み、暗橙色に焼成されているが、36は灰色が強く瓦質に近い。

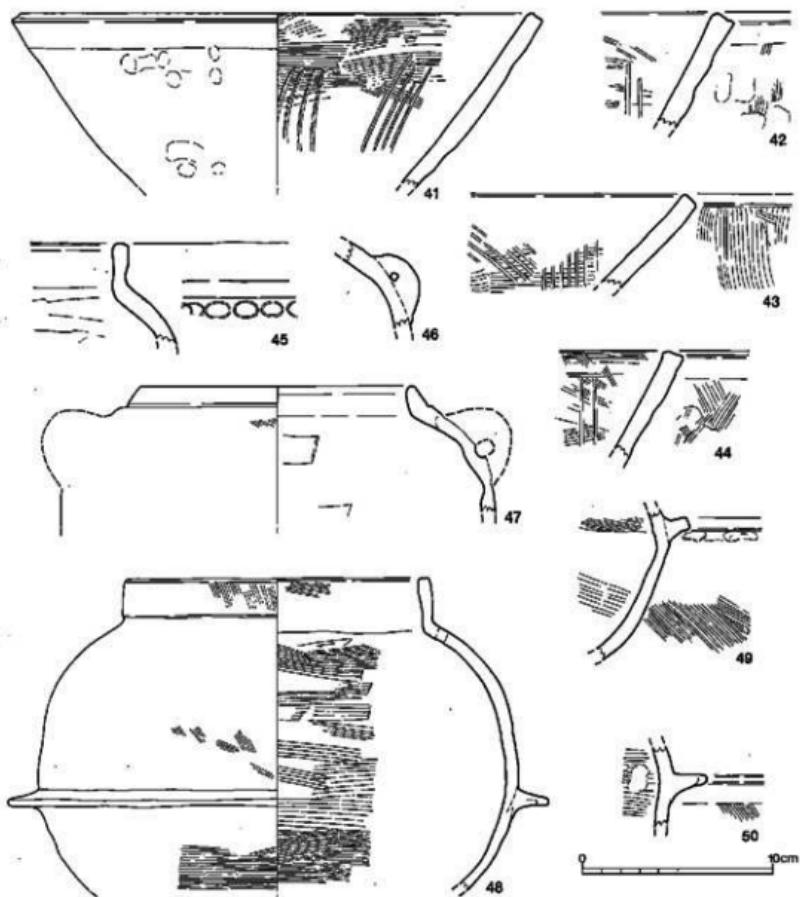
37は、復原口径27.0cm、残存器高7.5cmの大きさで、口縁部はやや厚めで直線的に開く。口縁端部はヨコナデ調整されるが段をもつ。底部との境目にある凸帯状の段は口縁から約7cm下に巡る。外面はナデ調整、内面は磨滅するが、ハケ目が残る。胎土に細砂粒を含み、淡橙色に焼成されている。

38は凸帯状の段をもつ胴部破片で、直線的に開く口縁部の長さが長めである。内外面にハケ目が残り、煤も付着する。39は復原底径15.0cmの大きさの底部破片で、外面はナデされるが、内底面に放射状のハケ目がみられる。細砂粒・雲母を胎土に含み、暗灰色に焼成されているが、外面に煤、内面に焦げ付きが付着する。

掘鉢 (40~44) 40は、復原底径13.0cmの大きさで、体部が直線的に開く。外面は凹凸のあるナデで、内面はハケ目の後に5条単位の櫛齒状の目が刻まれる。胎土に雲母・角閃石・細砂粒を含み、淡茶褐色に焼成されているが、外面は二次加熱を受けている。

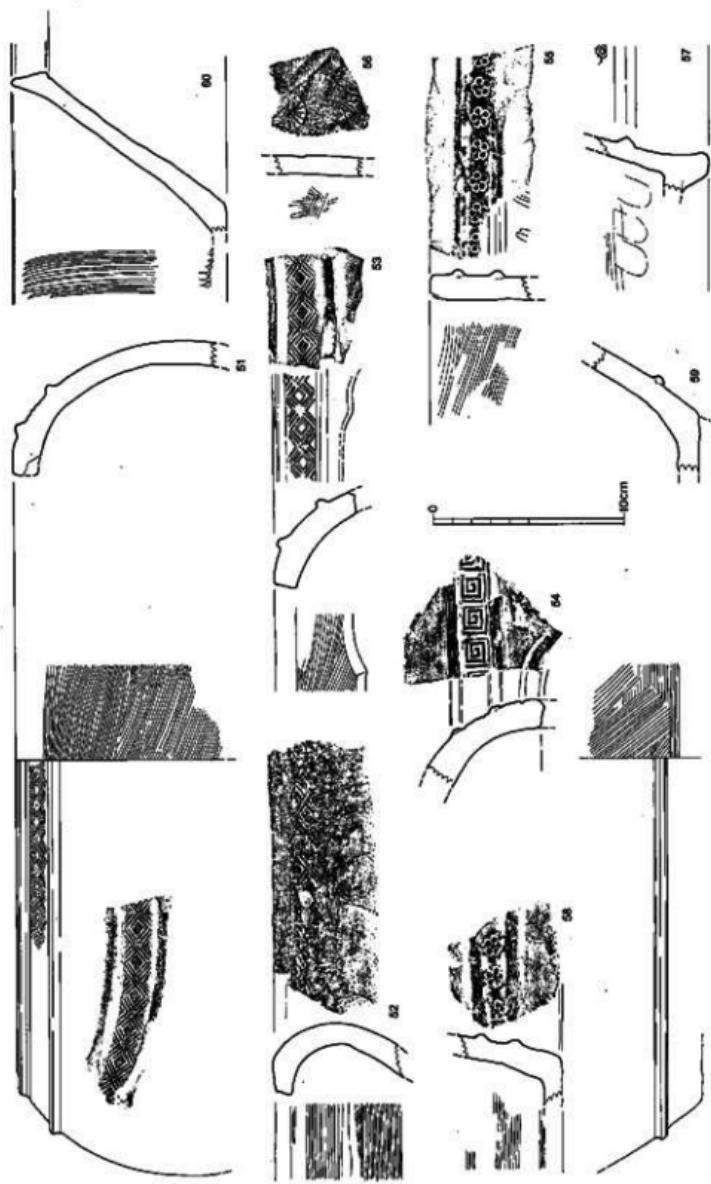
41は、復原口径28.0cm、残存器高9.1cmの大きさで、口縁部は直線的に開き、端部は肥厚せずに上面が平らに整えられる。外面は指頭痕の残るナデ、内面はハケ目の後に4条単位の櫛齒状の目が刻まれる。胎土に雲母・角閃石・細砂粒を含み、灰黄橙褐色に焼成されている。42は、41とほぼ同様の特徴を有するが器壁がやや厚めで、瓦質である。43も瓦質に近い掘鉢で、口縁部は肥厚せず、外面に縱方向のハケ目がみられる。

44は、直線的に開く口縁部で、口唇内面が拡張気味になる。胎土に細砂粒・雲母を含み、暗橙色に焼成され、内面に焦げ付きがみられる。

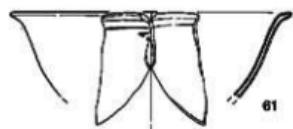


第178図 湿出土器実測図4 (1/3)

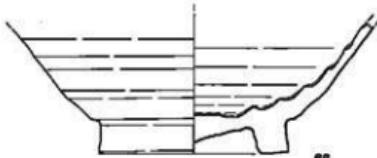
湯釜 (45~50) 45は、直口縁で端部がやや肥厚する口縁部破片で、肩部に巡る沈線に沿って円形文が押捺される。胎土に細砂粒を含み、灰黒色に焼成されている。47は、口縁部が短く内傾気味に立上がり、頸部に沈線がめぐる。肩部に鉤手が付くようである。復原口径14.6cm、胴最大径23.0cmの大きさで、胴部内面に板状工具のナデ痕が残る。胎土に雲母・細砂粒を含み、



第179圖 蕭山土器實測圖(1/3)



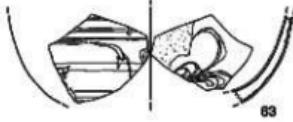
61



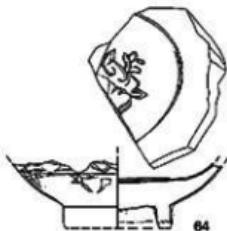
66



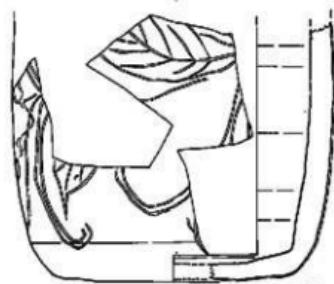
62



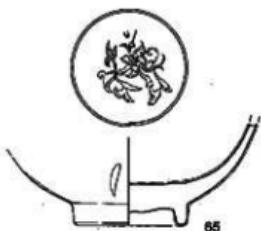
63



64



65



65



67



0 10cm

第180 図 滋出土土器実測図 6 (1/3)

淡茶褐色に焼成されている。46は、釣手部分の破片である。47に残された孔の痕跡に比して、孔径が狭い。

48は、底部を欠くが、口縁から胴下部まで残る破片である。復原口径16.2cm、胴最大径25.3cm、残存器高16.3cm、鉢状の凸帯外径28.6cmの大きさ。口縁部は直口縁で、やや内傾気味に立上がり端部は僅かに肥厚する。胴部は丸く膨れ、胴最大径の部分に凸帯が貼付けられる。内外面ともにハケ目調整されるが、外面の胴部以上はナデ消される。頭部は強めにヨコナナデされて低い段を生じるが、頭部下に1孔の円孔が確認される。胎土に細砂粒・赤褐色粒・雲母を含み、黄褐色に焼成され、凸帯の下面に焼が付着する。

49・50は鉢状の凸帯を有する胴部破片である。内外面ともハケ目を部分的にナデ消している。鍋などにみられる、凸帯状の段はみられない。胎土に細砂粒・赤褐色粒・雲母を含み、淡橙褐色に焼成されるが、外面に焼が付着する。

火鉢（51～59） 51～54は口縁部が内凹するもの。51・53は、口縁部の形態や口縁下に巡る2条の瘤状凸帯間に押捺される文様が略似しており、同一個体の可能性が高いものの接合しない。51は、復原口径内径30.0cm、胴最大径43.9cm、残存器高10.7cmの大きさで、外面はヘラ磨き、内面はハケ目調整される。53は凸帯下の肩部に透かし窓らしい整形面がある。透かし窓は雲形の可能性がある。51・53に押捺される印刻文は4本単位のX印と菱形が交互になる。胎土に雲母を含み、暗黄灰色ないし灰色に焼成されている。54も、透かし窓らしい整形面を有する破片である。透かし窓に沿って沈線が刻まれる。2条の瘤状凸帯間に角渦文様の印刻文が押捺される。胎土に雲母を含み、淡黄灰色に焼成されている。52は、外面の剥落が進んで分かりにくいか、51・53と同様な口縁部形態で、印刻文・胎土・色調も似ている。

55は直に立上がる直口縁で、外面の瘤状凸帯間に梅花形の文様が押捺される。内面はハケ目調整である。胎土に雲母を含み、黒灰色に焼成されているが、内面に焼が付着している。56は胴部破片で花模様の印刻文が押捺される。57～59は、底部破片で、底部に沿って瘤状凸帯が巡り、57・58には四葉形・梅花形の文様がみられる。57は底に脚が貼付けられている。また59では底面にハケ目がみられるが、脚の剥がれたような痕跡がある。胎土に角閃石・雲母を含み、灰黄褐色に焼成されている。

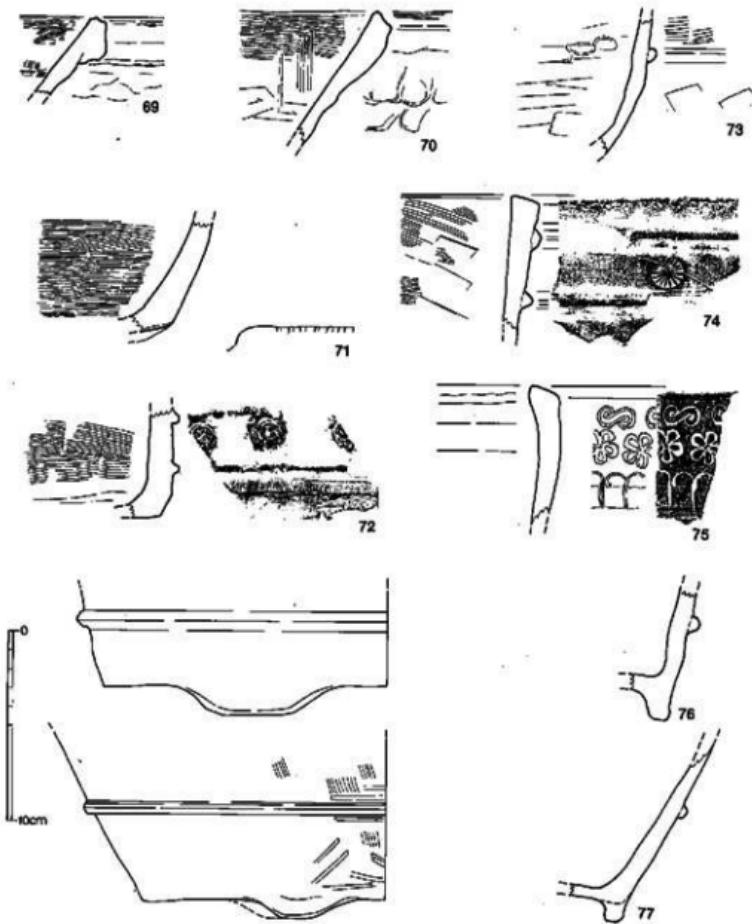
陶製壺鉢（60） 口縁部が直線的に開き端部は僅かに内凹してつまみ上げたような三角形に整えられる。内外面はヨコナナデ調整され、内面に櫛齒状の目が刻まれる。細砂粒を胎土に含み、暗褐色に焼成されている。唐前系の壺鉢であろう。

陶磁器（61～68） 61は乳白色の釉調で、コバルトブルーの染付のある、外反口縁の碗である。62～65は、龍泉窯系の青磁碗である。内外面に花柄文様などが描かれ、黄緑色や灰黄緑色の釉が全体にかかるが、64・65の高台内部は露胎で輪の搔き取りもみられる。

66は、黒釉壺の底部破片である。外径10.1cmの大きさの頑丈な高台が付き、僅かに内凹気味

ながら直線的に開いて腹部に移行する。外面は露胎で精良な乳白色の胎土、内面の釉は暗茶褐色と黒褐色の色調を呈している。

67は、底径4.6cmの大きさで、体部が開く碗か皿であろう。綠灰色の胎土で灰緑色の釉がかかるが、疊付けと内底面に3ヶ所の目土痕がみられる。李朝青磁であろう。



第181図 溝出土土器実測図 7 (1/3)

68は、樽形らしいが半分程しか復原出来ない。復原胴径17.2cm、底径12.8cm、残存器高13.8cmの大きさで、胴部には草花らしい文様が描かれ、底面=側面?には菊花状の文様が描かれる。砂粒を若干含むが精良な胎土で、乳白灰色に焼成され、釉は黄緑色を呈している。黄色瀬戸の湯たんぽらしい。

瓦（第182図2・3） 崩壊が進み調整手法は不明だが、平瓦で、2は胎土に細砂粒を、3は細砂粒・雲母・角閃石を含む。

土製品（第176図3） 管状土糞で、長さ5.8cm、外径1.2cm、孔径0.2cm、重量6.0gを測る。精良な胎土で暗黄褐色に焼成されるが、粘土を巻き付けた痕跡は明瞭に残る。

石製品（第175図4～6） 4は、頁岩質の石材を用いた砥石で、現存長4.3cm、幅3.0cm、厚さ0.5cmの大きさ。平坦面は全面がよく使用されていて、側面は擦り切りで切断されている。

5は、凝灰岩質の石材を用いた肌理の細かな砥石で2面が使用されている。6は、下層から出土したが、凝灰岩質の石材を用いた肌理の細かな砥石で、よく使用されて内擣している。

4号溝

8G区の北端部にあり、東端には64号土塹が位置している。東西方向で、主軸方向はN76°W前後だが、西端は調査区域外に続く。長さ11.5m、幅0.9～1.5m、深さ0.2m規模で、断面が浅いU字形の溝内には、灰色がかった淡めの暗茶褐色砂質粘性土が堆積していた。

出土遺物（第181図）

土師質鍋（69） 口縁端部が外側に折疊んだように肥厚して、垂れ気味の断面三角形凸帯のようになる。外面はナデ調整、内面はハケ目調整され、胎土に細砂粒・角閃石を含み、暗橙色に焼成されている。

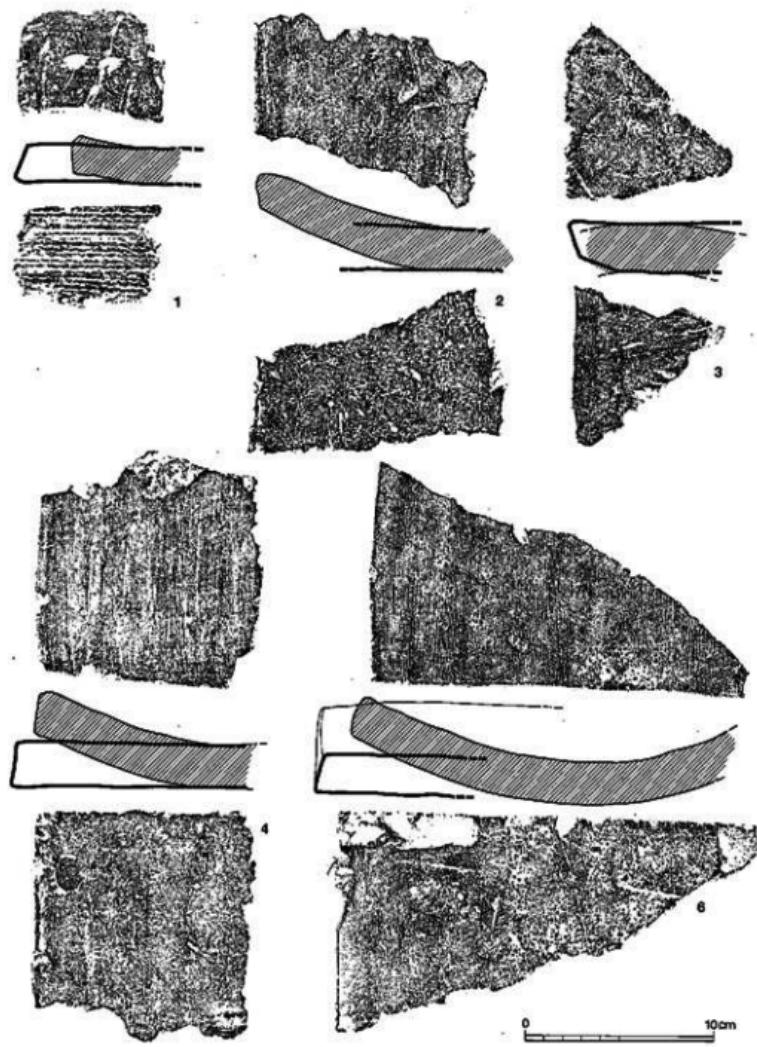
擂鉢（70） 口縁端部が肥厚して、口唇内面をつまみ上げるように整えるもの。外面はナデ調整、内面はハケ目調整の後に目が刻まれる。胎土に細砂粒を含み、灰黄色に焼成されている。

火鉢（71・72） 底部破片で、71の底面には叩き調整痕があり、脚も付くが、脚を貼付けた部分はヘラ先の切り込みを施している。また、72の外面には2条の瘤状凸帯が貼付けられ、凸帯間に巴形の文様が押捺されている。いずれも内面はハケ目調整される。胎土に雲母を含み、黒灰色ないし淡黒灰色に焼成されている。

瓦（第182図4） 平瓦片で、胎土に砂粒・角閃石を含み、灰色に焼成されている。

5号溝

9F区から9H区にかけてその南部にある溝で、4号溝の約2m北側にほぼ平行して位置する。主軸方向はN83°W前後だが、東端は8号溝に接続し、西端は調査区域外に続く。長さ19.4m、



第182圖 漢出土瓦拓影1 (1/3)

幅0.6~1.2m、深さ0.2m規模で、断面が浅いU字形の溝内には、灰色がかった淡めの暗茶褐色砂質粘性土が堆積していた。

溝内から、土師器小皿片、土師質土器片などが出土したが、小破片で図示しない。

6号溝

11H区にあり、両端が調査区域外に続く。主軸方向はN75°W前後だが、長さ5.3m、幅1.2~1.7m、深さ0.3m規模で、南側肩部は緩やかだが、北側の肩部は急傾斜になっている。溝内には、灰色がかった淡めの暗茶褐色砂質粘性土が堆積していた。

出土遺物（第181図）

湯釜（73） 脇部破片で全体の器形は分からぬが、外面に断面蒲鉾形の縦状凸帯が貼付けられる。鉢状の凸帯より下側の部分であろうか。外面の縦状凸帯より上側はハケ目、下側は板ヘラ削りされ、内面は板状工具によるナデ痕がみられる。精良な胎土で、暗灰色に焼成される、瓦質土器である。

火鉢（74~77） 74は、直口縁で、縁部にかけて肥厚するが、上面は平らに整えられる。外面に縦状凸帯が巡り、凸帯間に菊花状の文様が押捺される。75は、内側して端部が肥厚する口縁部で、外面に凸帯はみられないが、S字形・梅花形の文様が押捺され、さらに半円形と短直線の組合わせた文様などが帶状に施文されている。雲母を含むが精良な胎土で、暗灰色ないし淡灰色に焼成されている。

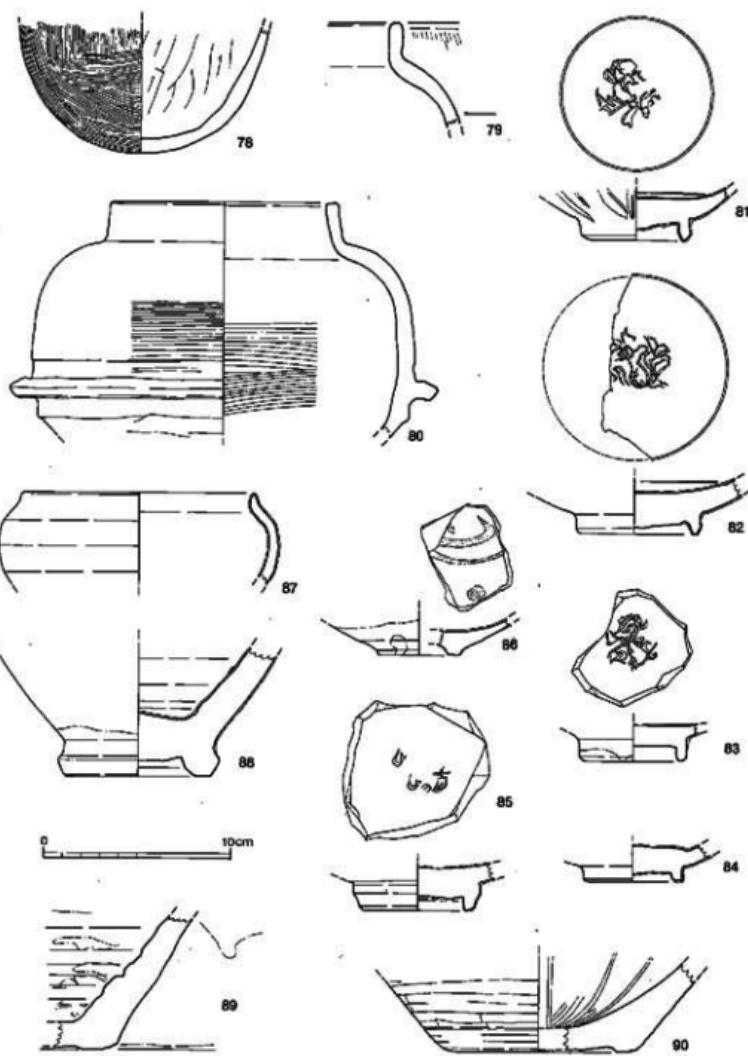
76・77は底部破片である。底部外面に縦状の凸帯が巡り、底隅に脚が貼付けられるが、脚は3ヶ所らしい。76は復原底径30.0cmで、脇部へ直立気味に移行するが、77は復原底径25.6cmで、脇部がやや直線的に開いている。胎土に雲母・角閃石を含み、灰色に焼成されている。

7号溝

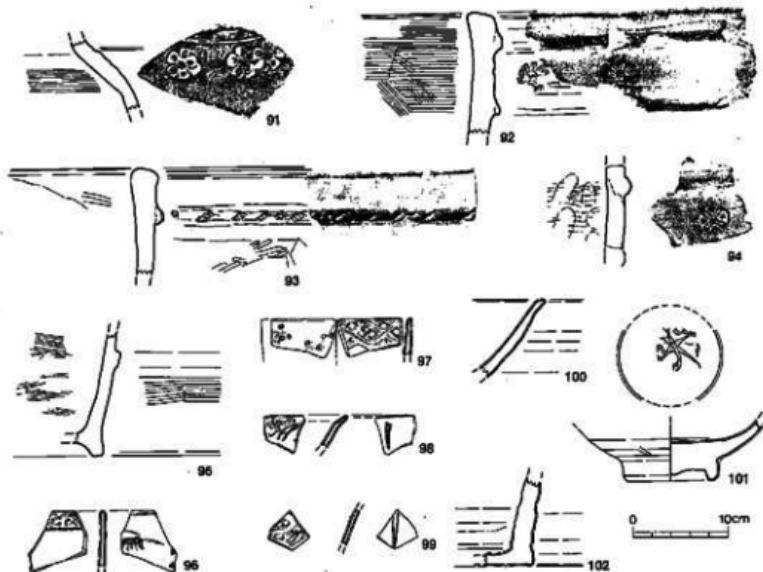
13F区北東部から14F区南東部にかけて発見された溝で、北側は調査区域外に続く。主軸方向N19°Eにとり、長さ4.4m、幅0.2~0.4m、深さ0.2mの規模。特に遺物の出土はみられなかった。

8号溝

8F区から12E区にかけて発見された溝で、南北両端は調査区域外に続く。南部では主軸方向N15°E前後に向けるが、10E区と10F区の境あたりから北側はN25°E前後の方向にやや東に偏る。調査前に農道敷の有った部分とほぼ重なる位置でもあり、南北方向に長さ44.5m分を発掘したが、幅1.2~1.8m、深さ0.4~0.5mの規模で、逆梯形の断面形に掘り込まれている。南北端での底面の高低差は0.3mで、北側が高い。溝内堆積土は、第172図に133号土壙の西側



第183図 溝出土上器実測図 8 (1/3)



第184図 溝山土器実測図9(1/3)

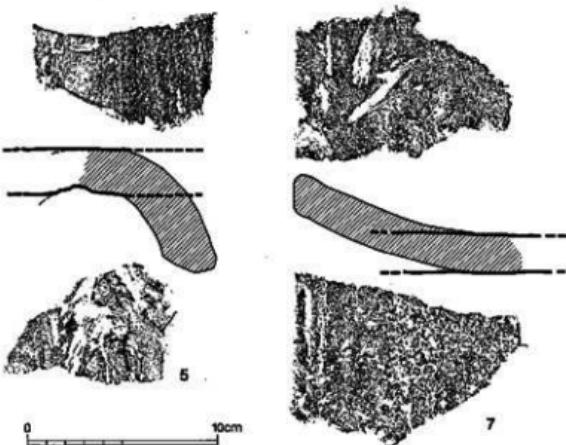
側での堆積状況を図示するが、東側の堆積よりも西側の堆積土の色調が暗めで新しく、東半を占める堆積土で半ば埋没した後に再掘削されたことも考えられる。.

出土遺物(図版66、第183・184図)

86・91・92は古段階の堆積土から出土した。

土師器臺(78) 脊部より上側を欠くが、丸底で、外面をハケ目、内面をヘラ削り調整する。胎土に雲母・赤褐色粒・細砂粒を含み、茶褐色に焼成されているが、外面に煤が付着する。溝と重複する住居跡から招来したものであろう。

湯釜(79・80・91) 口縁部は直口縁で、79は直立、80は直立よりやや内傾する。80では復原口径22.3cm、胴最大径20.6cm、鈎状の凸帯外径23.0cm、残存器高12.5cmの大きさ。頸部から肩部へは大きく膨らみ、鈎状凸帯の下に凸帯状の段があり、底部へすぼまる器形をなす。内外面ともに脇部にハケ目が残るが、ヨコナデおよびナデ調整され、底部脇外面はヘラ削りされる。精良な胎土で、暗灰色に焼成されている。なお、79の色調は橙褐色を呈している。91は肩部破片であろうか。頸部外面に巡る1条の沈線に沿って梅花形の文様が印押捺される。内面は



第185図 溝出土瓦拓影2 (1/3)

ハケ目調整とナゲ調整がみられる。精良な胎土で、灰色に焼成されている。

陶磁器 (81~89) 81~84は、使用による磨滅が進むものの、内底面に花柄文様を描く椀の底部破片である。淡明灰色で精良な胎土で、灰色がかった黄緑色の釉は内外面にかかるもの、高台内側は露胎で、81~84には、外面に蓮弁状の文様があり、高台内面に焼き台片らしい付着物がある。いずれも龍泉窯系青磁碗であろう。

88は、復原底径7.9cmの大きさの厚みの有る底部破片で、体部が内彫気味に膨れるが器壁は厚い。灰色の精良な胎土で、淡緑灰色の釉が内外面にかかり、高台部分は露胎。龍泉窯系青磁壺であろうか。

85は、高台外側が削られる椀の底部破片で、内底面に細かな凹凸があって文様は不明瞭である。淡褐色の精良な胎土で、灰色味のある黄緑色の釉が内外面にかかり、高台内面は露胎。

86は、淡褐色の精良な胎土で、内面と外面の一部にやや綠色味のある灰色の釉がかかり、鉄釉で絵が描かれる。上げ底気味の高台で、体部へ緩やかに開く。内底面に胎土目土痕がみられる。唐津系の壺であろう。

87は、復原口径12.6cm、胴最大径15.0cmの大きさの口縁部破片。淡茶褐色の精良な胎土で、内外面に灰色の釉がかかる。瀬戸系の壺形であろうか。

89は、肩部にかけて直線的に開く底部破片。淡褐色の細砂粒を若干含む胎土で、内外面の上部に褐色の釉がかかる。備前系の陶器であろう。

擂 鉢 (90) 復原底径10.2cmの大きさで、直線的に体部が開く。外面はヘラ削り、内面は放射状に目が刻まれている。雲母・細砂粒を含むが精良な褐色の胎土で、赤褐色に焼成される。

火 鉢 (92~95) 92・93は、直に立上がる口縁部破片で、口縁下の外面に瘤状の凸帯が巡る。92ではやや内側に口唇部内面を突出させる。2条の瘤状凸帯間にには菊花状の文様が押捺され、内面はハケ目調整される。93では口唇部にやや丸みをもつが、凸帯にハケ目原体の小口圧痕が付される。94は、瘤状凸帯間に葉状の凹葉形の文様が押捺される。95は、上げ底の底部破片で外面に瘤状凸帯が巡り、内外面ともハケ目がみられる。これらの火鉢は、雲母を含むが精良な胎土で、黄灰色ないし暗灰色に焼成されている。

瓦 (第182・185図5~7) 5は丸瓦で、内面に布目压痕、外面は板状原体のナデ調整、端部はヘラ削りされる。6・7は平瓦である。胎土に細砂粒・角閃石などを含み、暗灰色に焼成される。8は古段階の堆積土から出土した。

土製品 (第176図4) 完形の管状土錐で、長さ5.3cm、外径1.8cm、孔径0.5cm、重量15.4gを測る。砂粒を含むが、灰黄褐色に焼成されている。

9号溝

10E区にあり、1号溝と2号溝に挟まれて発見された。溝というよりはむしろ溝状の土壠とした方が妥当であろう。

9号土壠の上部を削り、その南南西側に続く。主軸方向をN27°E前後にとり、長さ4.4m、幅0.6~0.8m、深さ0.3mの規模で、砂混じりの暗灰茶褐色粘性土が堆積していた。

10号溝

8B区北端から9E区にかけて発見された溝で、東側は調査区域外に続く。124号・125号・150号土壠などを削るが、主軸方向をN73°W前後にとり、検出面では0.6~1.3mの幅で、ほぼ直線に34.5mの長さを確認した。西側は住居跡群の埋没土と区別しがたい部分もあるが、削平で消滅するようで、東側に深い。深さの最大値は0.4mを測るが、底面は2段で、低い方は中央部で幅0.3m、深さ0.1m程度である。堆積土は灰茶褐色の弱粘性の砂質土である。

出土遺物 (図版66、第184図)

陶器 (96~102) 96・97は、直口縁で、コバルトブルーの文様があり、口縁部内面にも帶状に文様が描かれる。釉は透明度のある明灰色を呈する。98は、外反口縁で端部内面が凹む。やや緑味のある色調で内外面に文様が描かれ、釉は乳白色っぽい。99は、胴部片で色調は97に近い。明の染付茶碗であろう。

100は、外反口縁で、端部が僅かに折れる碗の口縁部片。灰色の胎土で、釉も灰色を呈する。101は、内底面に花柄文様のある碗の底部破片。淡灰色の胎土で、灰色っぽい黄緑色の釉が内

外面にかかるが、高台内面は露胎である。龍泉窯系青磁碗であろう。

102は、灰褐色の胎土で、暗褐色の釉がかかる底部破片である。釉は内外面にかかるが、内面に掻き取りがみられる。黒釉の類であろう。

土製品（第176図5） 長方形を呈する観で、陸側の端を失うが、現存長4.9cm、幅4.9cm、厚さ1.0cm弱の大きさ。0.6cm幅の縁があり、海の部分は緩斜面に削られて端側で0.6cmの深さがある。陸部分は使用による磨耗が進みやや中凹みになっている。胎土に細砂粒を含み、暗灰褐色に焼成されているが、陸部分などは白っぽい。

11～14号溝

10号溝の南側に1.2～1.5mの間隔をおいて平行する溝で、幅0.4m、深さ0.1m程の、浅いU字形断面を呈する。耕作土下の堆積土と近似した、淡灰茶褐色の弱粘性砂質土が堆積する。特に時期を知る遺物の出土はみられなかった。短いが同様な溝は6C区・7C区でも数条発見された。煙の鉢に関わる溝であろうか。

15号溝

8C区にあり、14号溝の南側に位置し、主軸方向をN87°W前後をとるが、東側の端は164号土壠の堆積土の中に消える。暗茶灰褐色土が堆積していた。幅0.5～1.3m、深さ0.2～0.3mの規模である。西端部で16号溝に切られる。遺物は明かでない。

16・17号溝

6D区から8C区にかけて発見された。16号溝は、15号溝の西端部で交差して、主軸方向N15°E前後をとり17号溝の延長部分に重なるが、105号土壠の西側辺りで西側に曲がる。0.6～0.8m幅で、深さ0.1～0.2m。淡灰茶褐色土が堆積する。17号溝は色調が僅かに黒めで、幅0.4～0.5m、深さ0.1～0.2m。特に遺物の出土はみられなかった。

18号溝

5B区北西隅から6F区東側にかけて発見された。東側は段落ちの崖に消え、西側は調査区域外に続く。約34.0mの長さで、主軸方向をN76°Wにとり、幅1.5～2.0m、深さ0.2mの規模をもつ。耕作土下の堆積土と近似した、淡灰茶褐色の弱粘性砂質土が堆積する。

19号溝

18号溝の南側に1.0～1.5mの間隔をおいてほぼ平行する。長さ約14.0mで、東側は崖に消える。幅1.3m、深さ0.1～0.2mの規模で、淡灰茶褐色土が堆積する。

20号牌

13G区北東隅から14F区にかけて発見された溝で、南北両端は調査区域外に続く。主軸方向をN16°Eにとり、長さ12.8m、幅1.0~1.2m、深さ0.4mの規模で、14号・15号石棺墓、5・6・15号の石蓋土壙墓を切る。

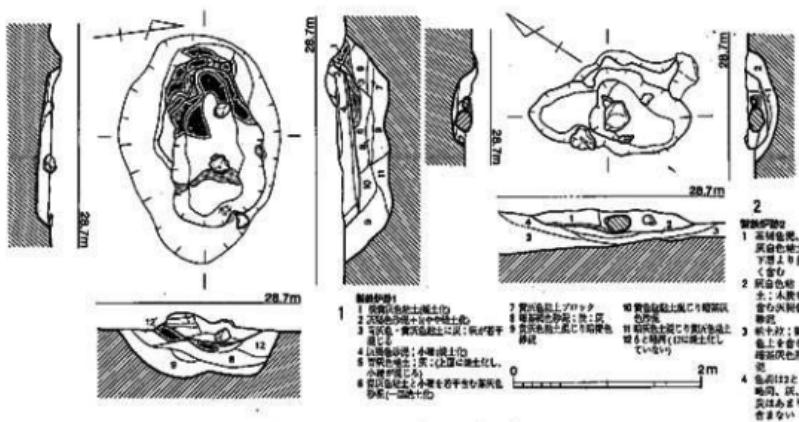
溝内から、土師器片・土師質土器片・須恵器片などが出土したもの、小破片ばかりで図示しえない。

6. その他の遺構

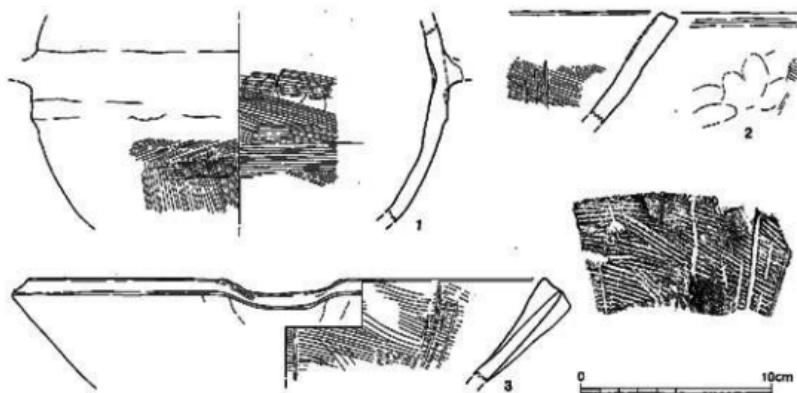
1号製鉄炉跡（第186図）

24号中世土墳墓の西側、28号中世土墳墓の北側で発見された。主軸方向を $N83^{\circ} 30' W$ にとり、長径 0.43m、短径 0.25m の椭円形の範囲が赤く焼土化して、皿状に凹む。長軸線の東側には焼土が抜けた部分があり、送風のための羽口を挿入していたものと判断される。これより西側は焼土化が著しく、西端部には小さな礫が含まれる。この炉部分は、長径 0.62m、短径 0.43m、深さ 0.13m の不整椭円形の土壇に、砂泥・粘土が堆積した上に粘土と礫などを用いて、除湿を考慮した炉を構築したのであろう。

壇内から、鐵滓が総量60g出土した。



第186図 鋼鉄炉跡実測図 (1 / 15)



第187図 2号製鉄炉跡付近出土土器実測図 (1/3)

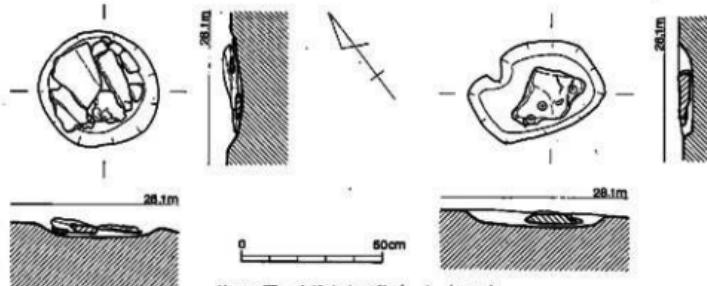
2号製鉄炉跡 (第186図)

9号土壙の南側で発見された。主軸方向を N43°30' Wにとり、長径0.43m、短径0.21mの楕円形の範囲が赤く焼土化して、0.05mほど皿状に凹む。南東側が焼けて赤化し、鉄滓が残っている。炉跡部分は156号土壙の上部にあり、壁は砂泥・粘土で固められている。

出土遺物 (第187図)

壙内から、鉄滓が総量185g出土したが、周辺の整地面から出土した土器を紹介する。

湯釜(1) 鋼状の凸帯をもつ胴部破片だが、凸帯の縁側を失う。復原胴最大径22.0cmの大きさで、鋤状凸帯の下には、凸帯貼付けの際の凹凸が残り、底部との境に凸帯状の段がある。内外面はハケ目と、ナデ調整される。胎土には細砂粒・雲母・赤褐色粒・角閃石を含み、橙褐色に焼成される、土師質の湯釜である。



第188図 古鉄出土石彫ビット (1/10)

摺鉢 (2・3) 2は口縁部が直線的に開くが、肥厚せずに端部を整えられる。外面には指彫圧痕が残り、内面にはハケ目の後に歯状の目が刻まれる。胎土に砂粒を含み、灰色ないし暗灰色に焼成されている。3は復原口径29.0cmの大きさで、口縁部は内側して開き、片口が付く。端部は肥厚して口唇内面をつまみ上げたように整えられている。胎土に雲母・赤褐色粒・繊砂粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。

古錢出土石巻ビット（図版55-2, 第188図）

8B区南寄りにある。1.6mの間隔をおいて、2つの柱穴状ビット内に片岩が敷かれ、一方の敷石の下から古錢が出土した。直径0.40m、深さ0.05m程の、北西側の柱穴状ビットでは6個の小さな石が並べて敷かれる。南東側の直径0.33~0.48m、深さ0.05mの柱穴では、1枚の石の下に6枚の古錢が埋置されていた。

なお、これらの柱穴が、どのように掘立柱建物を構成するのかは不明である。

古錢（図版67） 6点は脆弱ながらも、文字の読める例は4点ある。配置から全体を判別できる例は3点あるが、径2.5cmで楷書体の「祥符通寶」、径2.4cmで篆書体の「嘉祐元寶」、径2.4cmで篆書体の「元符通寶」が分かるものの、1点は右側に「通」の字が読めるのみである。いずれも北宋錢で、初鑄年代は1008年・1056年頃・1098年である。

土器埋納ビット（図版55-1）

145・147号土壙と重複して、直径0.34m、深さ0.17mに掘り込まれたビット内で、土師器杯が2点埋納された状態で出土した。

出土遺物（図版67, 第189図）

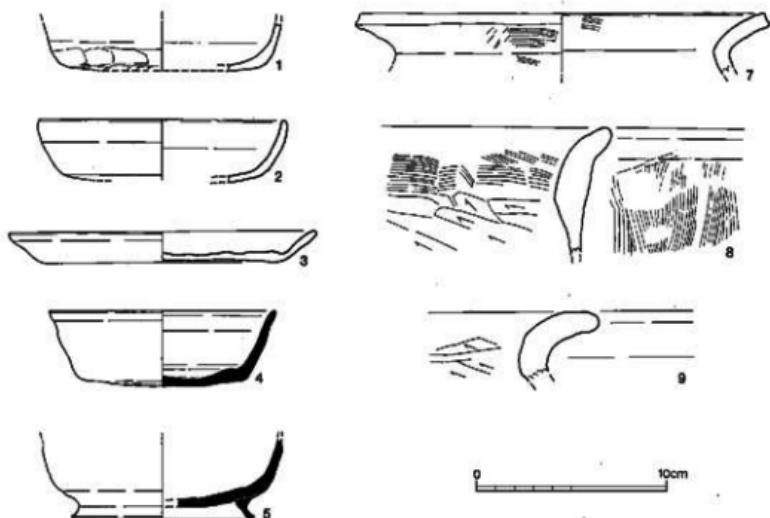
土師器杯 (1・2) 1は、口径13.8cm、器高4.3cm、底径8.1cmの大きさの杯で、体部は内側気味に開き、口縁部は直線的に伸びる。外底面はヘラ削り、体部はヨコナデ調整される。胎土に砂粒・雲母を含み、淡灰色に焼成されている。2は、口径14.2cm、器高3.4cm、底径7.0cmの大きさの杯で、体部は内側気味に開き、口縁部は直線的に伸びる。外底面はヘラ削り、体部外面はヘラ磨き、内面と口縁部はヨコナデ調整される。胎土に赤褐色粒・雲母を含み、淡黄褐色に焼成されている。



第189図 埋納土器実測図 (1/3)

柱穴状ビット出土の遺物（図版67~70, 第190~198図）

この項では、柱穴状のビットなどから出土した遺物について紹介する。古墳時代・奈良時代墳の遺物を含む例もあるが、一括して取り扱う。



第190図 ピット出土土器実測図1 (1/3)

土師器杯 (1・2) 1・2は、外底面がヘラ削りされ、ヨコナデで調整される口縁部は内萼気味に開く。

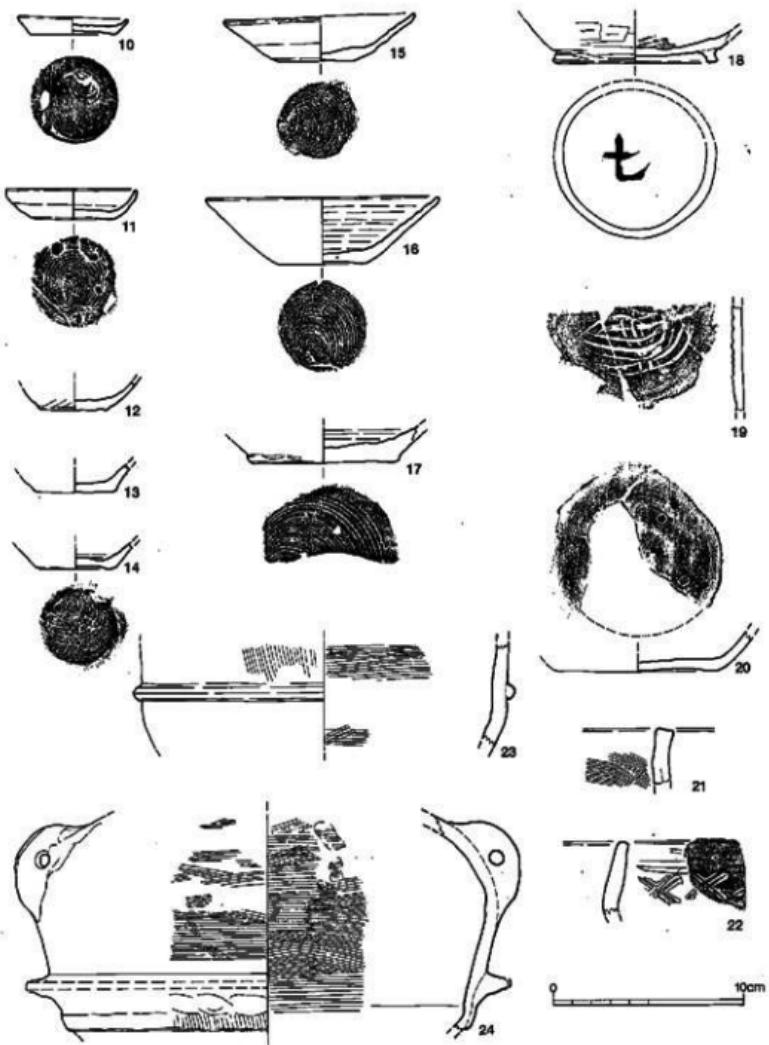
1はP271から、2は P581から出土した。復原口径13.0cm、器高3.3cm、底径10.6cmの大きさで、胎土に赤褐色粒・雲母を含み、橙褐色に焼成されている。

土師器皿 (3) 復原口径16.2cm、器高1.6cm、底径12.3cmの大きさで、内外底面はヘラ磨きされ、短く開く口縁部はヨコナデ調整される。精良な胎土で、茶褐色に焼成されている。P562から出土した。

須恵器杯 (4・5) 4は、復原口径12.0cm、器高4.0cm、底径9.0cmの大きさで、内外底面はナデ、外反する口縁部はヨコナデ調整される。精良な胎土で、淡灰色に焼成されている。P566から出土した。

5は、踏張るような高台の付く杯で、口縁端部を欠く。復原高台径9.7cm、残存器高4.2cmの大きさで、底部はナデ、口縁部はヨコナデ調整される。精良な胎土で、明灰色に焼成されている。P558から出土した。

土師器甕 (7~9) 7は口縁部が肥厚せずに外反し、端部は上側につまんだように整えられる復原口径21.8cmの大きさの甕。内面は磨減するが、外面にハケ目がみられる。細砂粒・赤褐色粒・雲母・角閃石を胎土に含み、黄灰色に焼成されている。P235から出土した。



第191図 ピット出土土器実測図2 (1/3)

8は肥厚する口縁部がほとんど外反せず、9は肥厚した口縁部が強く外反する。口縁部はヨコナデ、胴部内面はヘラ削りされるが、8ではハケ目調整がみられる。雲母・赤褐色粒を含み、明橙褐色・茶褐色に焼成されている。8はP380、9はP102から出土した。

土師器小皿（10～15） それぞれP427・P79・P473・P65・P451・P266から出土した。いずれも外底面は糸切り離して、口縁部はヨコナデ調整される。雲母や赤褐色粒を含むが精良な胎土で、淡橙色ないし淡橙褐色に焼成されている。

10は、口縁部が短く聞く小皿で、復原口径5.8cm、器高0.9cm、底径4.6cmの大きさ。11は、口縁部が内彎する小皿で、復原口径6.9cm、器高1.6cm、底径4.2cmの大きさ。

12～14は、口縁部を欠くが、底径が3.3～4.1cmと小さく、口縁部が長めに聞く器形であろう。14の内面には煤が付着する。

15は口径10.1cm、器高2.3cm、底径4.0cmの大きさで、口縁部は長めに聞く。やや細砂粒を多めに含む。

土師器皿（16） P235から出土した、口縁部が長く直線的に聞く皿で、復原口径12.2cm、器高3.5cm、底径4.6cmの大きさ。雲母・赤褐色粒を胎土に含み、暗黄褐色に焼成されている。内面に煤が付着する。

土師器杯（17・19・20） 17は、P218から出土した。口縁部を欠くが、復原底径8.0cmの大きさで糸切り底である。胎土に雲母を含み、明茶褐色に焼成されている。

19は、P484から出土した底部破片で、内面に3条単位の櫛齒状の目が交差する。指鉢の底部である可能性がある。胎土に細砂粒・赤褐色粒を含み、橙褐色に焼成されている。

20は、P385から出土した底部破片で、内面に3つの円形刺突があり、本来4つであろう。底径8.6cmの大きさで、胎土に赤褐色粒・雲母を含み、淡茶色に焼成されている。

土師器高台付橈（18） P562から出土した。口縁部を欠くが、復原高台径8.6cmの大きさで、高台内面に「七」字の墨書がある。体部外側はヘラ削り、内面はヘラ磨きされる。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色を含み、橙褐色に焼成されている。

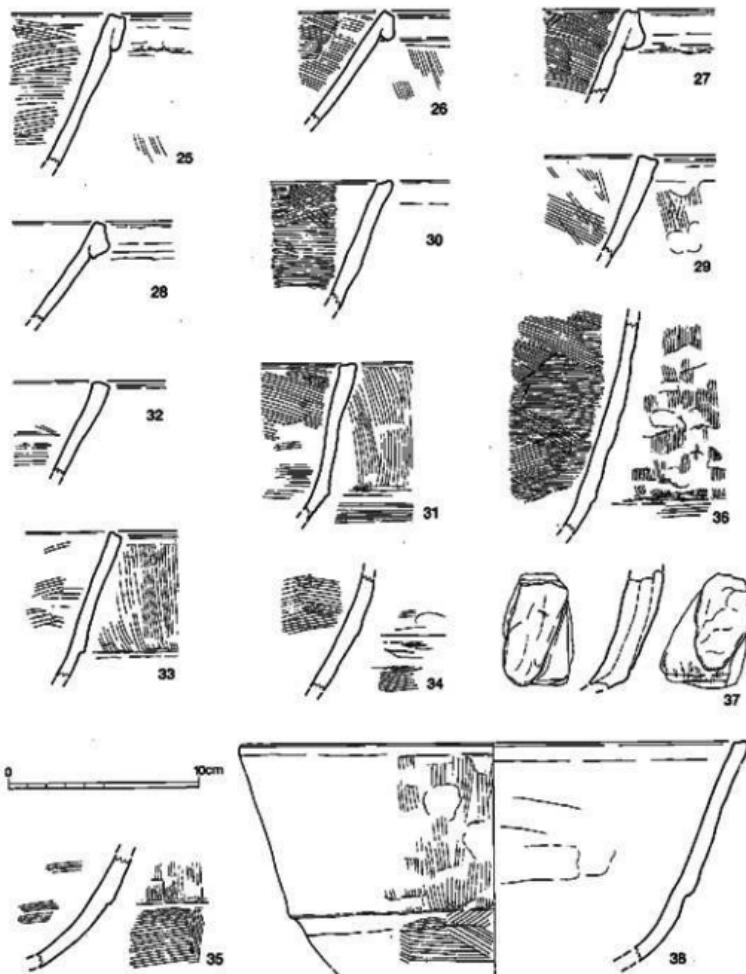
湯釜（21～24） 21・22は、P235・P445から出土した、やや外反する直口縁の口縁部破片である。21は内面がハケ目調整され、雲母・細砂粒を含む胎土で、茶褐色に焼成されている。22は外面上に3条単位の×字形文様が押捺される。精良な胎土で、瓦質の黒灰色を呈する。

23は、P66から出土した。兼状の凸帯が巡る胴部破片である。復原胴最大径は19.3cmの大きさで、内外面にハケ目が残る。精良な胎土で、黒灰色に焼成されるが、凸帯より下側に煤が付着している。瓦質である。

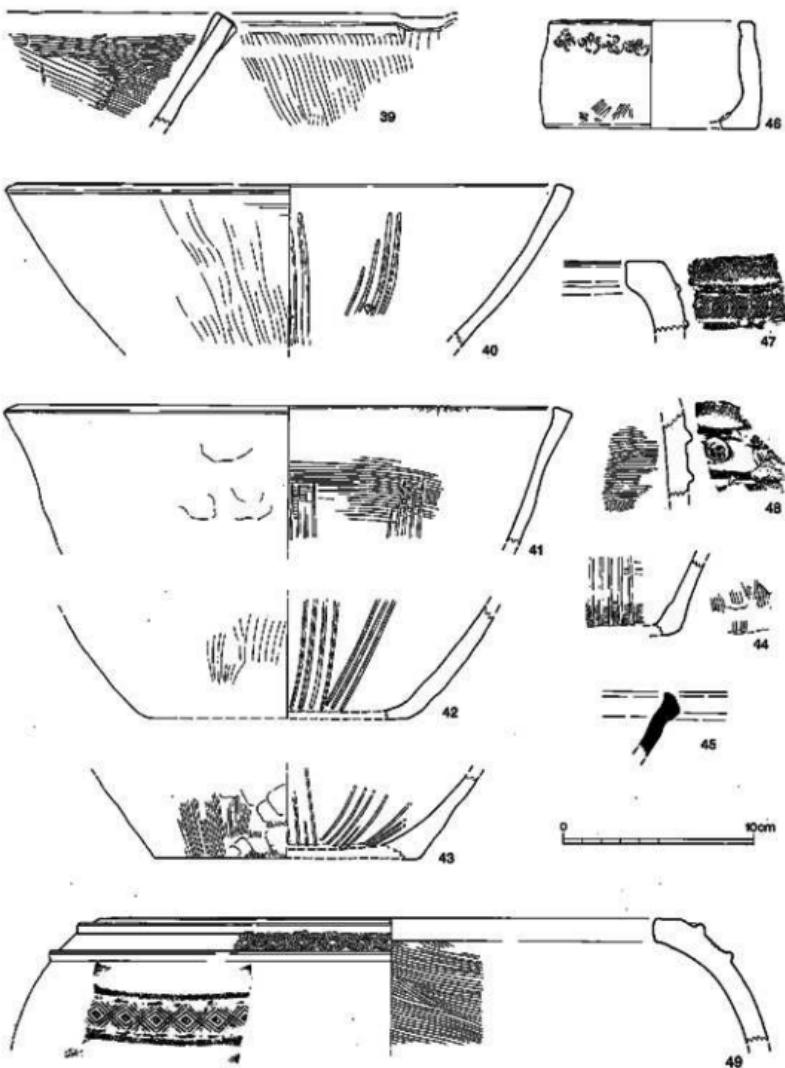
24は、口縁部と底部を欠くが、復原胴最大径24.2cm、錫状凸帯の復原外径25.5cmの大きさで、残存器高10.5cm。P430から出土した。体部は肩が張り、錫状凸帯下に凸帯状の段がある。内外面ともハケ目調整され、肩には双耳の釣手が付けられる。胎土に赤褐色粒・雲母を含み、淡

橙茶色に焼成されているが、外面は煤が付着する。土師質である。

土師質鍋（25～38） 順に、P40・P599・P509・P429・P331・P462・P416・P453・P446・P438・P447・P477・P529・P135から出土した。



第192図 ピット出土土器実測図 3 (1/3)



第193図 ピット出土土器実測図4 (1/3)

25~28は直線的に開いた口縁部破片で、端部が外側に折疊んだように肥厚するもの。25はさほど突出しないが、他は垂れ気味ないし断面三角形の凸帯状を呈する。28にはみられないが、外面にハケ目が残り、細砂粒・雲母を胎土に含み、淡橙色ないし茶橙色・橙褐色に焼成されているが、外面に煤が付着する。

29は、直線的に開く口縁部が肥厚気味で、端部上面を平らに整えたもの。淡橙色を呈する。

30~33は、直線的に開く口縁部が外反気味だが、肥厚せずに端部は口唇内面をつまんだようにするもの。32では端部が僅かに内縫気味である。30では4.5cm程、31・33では6.5cm程口縁より下の位置に凸帯状の段がある。内外面ともハケ目調整され、胎土に細砂粒や雲母を含み、橙褐色ないし暗橙褐色などの色調に焼成されているが、31などの外面には煤が付着している。

34~36は凸帯状の段がある胴部破片である。36では口縁部までの長さがある。調整手法・胎土・焼成はほぼ同様で、外面に煤が付着し、35・36では内面に焦げ付きがみられる。

37は口縁部に付く把手部分であろう。上部を欠くが、口縁内外を跨ぐように粘土紐を貼付けたもので、外面に凸帯状の段がある。

38は、口径26.8cm、残存器高11.3cmの大きさで、口縁部下8.0cm程の位置に凸帯状の段がある。口縁部は直線的に開き、肥厚しない。段から下側は丸みのある底部に移行する。外面はハケ目調整されるが、口縁部外面は部分的にナデられ、内面は横方向にナアられる。細砂粒・雲母を胎土に含み、茶橙褐色に焼成されているが、外面は煤、内面に焦げ付きが付着している。

溜鉢（39~46）順に、P286・P7・P448・P53・P202・P69・P343から出土した。

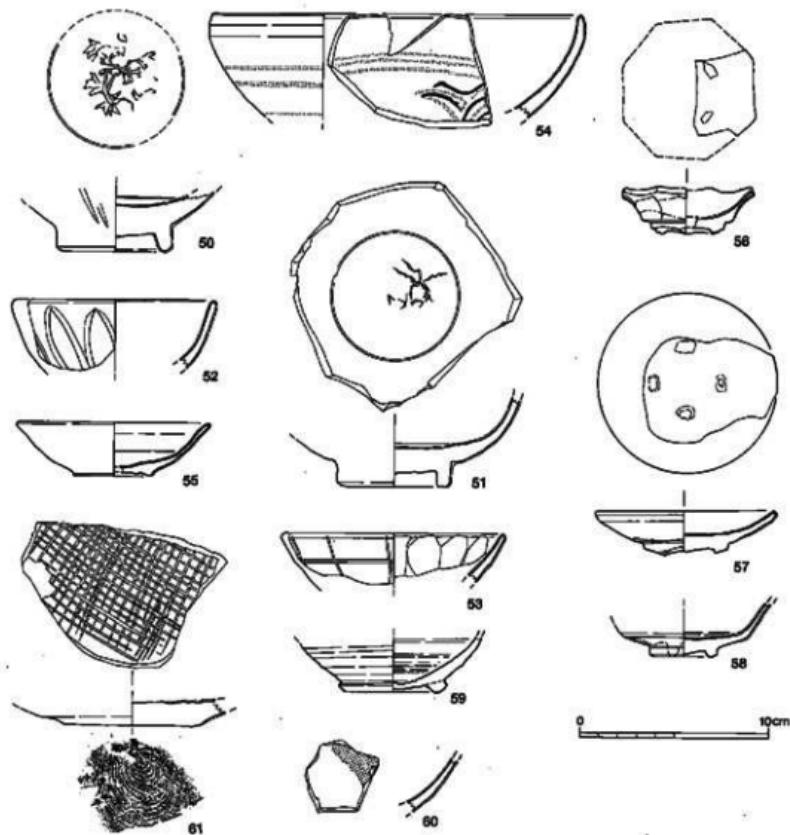
39~41は、肥厚気味の口縁端部を平坦にして、口唇部がはみ出したように拡張される。口縁部は直線的に開くが、39には片口が付き、40は内縫気味、41はやや外反気味である。42~44は、底部破片である。外面はハケ目調整された後にナデられるが、41ではハケ目がみられない。内面はハケ目調整の後に、柳歛状の目が刻まれる39・41・44の例と、ハケ目がなくて柳歛状の目が刻まれる40・42・43の例がある。41・42では赤褐色粒も含むが、いずれも胎土に雲母・細砂粒を含み、39~41は黄橙褐色、42~44は暗灰色に焼成されている。39は陶器に近い焼成である。40の外面には一部煤が、43の内面には赤色顔料が付着する。

45は、直線的に開く口縁部で、端部がくびれて上側につまみ上げたように肥厚する。内外面はナア調整される。胎土に細砂粒を含み、暗灰色に焼成されている。須恵質の鉢である。

香炉（46）復原口径10.8cm、器高5.6cm、胴最大径11.6cm、底径11.0cmの大きさ。平底で下膨れで内縫気味の体部をもつ。器壁は厚めで、口縁部はつまみ上げるように薄めになり、端部はやや内傾する。外面はヘラ磨き調整され、口縁部に沿って花柄文様が押捺される。胎土に雲母・赤褐色粒・角閃石・細砂粒を含み、明橙褐色に焼成されている。内外面に二次加熱による赤変がみられる。P302から出土した。

火鉢（47~49）P11・P229・P322から出土した。

47・49は、口縁部が内側する火鉢で、端部の上・内面は平坦に整えられる。口縁部に2条の瘤状凸帯が巡り、凸帯間に※形格子状の文様が押捺される。49では復原口縁内径27.7cmの大きさで、胴部は大きく膨らみ、外面はヘラ磨き、内面はハケ目調整される。胎土に雲母・細砂粒を含み、黒灰色ないし暗茶褐色に焼成されている。



第194図 ピット出土土器実測図5 (1/3)

青 磁 (50~55) P597・P429・P185・P58・P154
から出土した。

50・51は、高台内面が白灰色の露胎になるものの、内外面に青緑色の釉がかかる碗で、内底面に花柄模様が描かれ、50の外面には蓮弁の一部がみられる。

52は外面に蓮弁がみられる直口縁の口縁部破片で、復原口径13.0cmの大きさだが、灰色味のある黄緑色の釉がかかる。龍泉窯系の青磁碗であろう。

53は、復原口径12.0cmの大きさの、内外面を輪花状にした小碗である。灰白色の胎土で、灰色味のある黄緑色の釉がかかる。

54は、復原口径20.0cm、残存器高5.5cmの大きさの碗で、灰褐色の精良な胎土で、黄味灰色の釉がかかり、象牙色・黒色で文様が描かれる。李朝の象嵌青磁碗であろう。

55は、復原口径10.4cm、器高2.8cm、底径4.3cmの大きさの李朝青磁皿で、口縁端部は僅かに外反する。精良な胎土で、淡緑灰色の釉が全面にかかり、内底面に目土痕がみられる。

白 磁 (56~58) 56は、復原口径7.9cm、器高2.9cm、底径3.9cmの大きさの輪花皿で、8面に削りだされ、高台も面をなして削られる。精良な胎土で、内面と口縁部外面に乳白色の釉がかかるものの、内底面と蓋付けに重ね焼きの痕がみられる。P450から出土した。

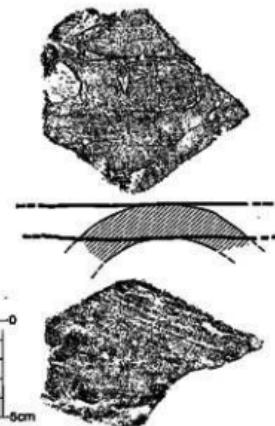
57は、復原口径9.8cm、器高2.3cm、底径4.5cmの大きさの内縁気味に開く皿である。高台下面は4面に削られる。精良な胎土で、内面と口縁部外面に乳白色の釉がかかり、底部外面は露胎だが、内底面に重ね焼きの痕がみられる。P354から出土した。

その他の陶磁器 (58~61) 58は、口縁部を欠くが、底径3.6cmの大きさの皿で、口縁部は外反するようである。精良な灰色味のある乳白色の胎土で、体部内外面に渦乳白色の釉がかかり、外底部は露胎。P331から出土した。

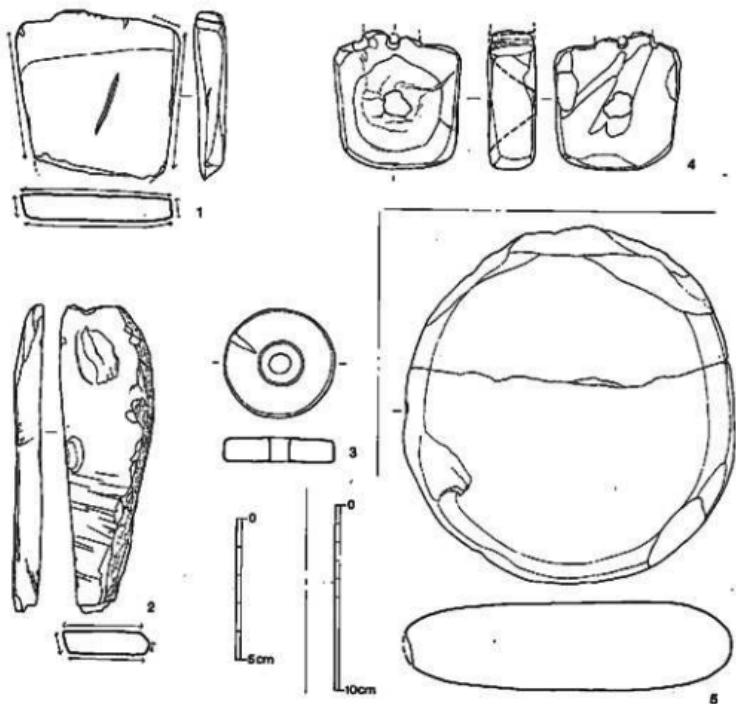
59は、外径5.8cmの踏張り気味な高台が付く底部破片である。体部へは内縁しながら膨れる。精良な胎土で、淡橙色を呈するが、蓋の底部であろう。P249から出土した。

60は、P138から出土した碗の胴部破片である。灰色の精良な胎土で、綠味のある灰色の釉がかかるが、内面に暗褐色釉の部分がある。唐津窯の鉄絵であろう。

61は、P602から出土した底部破片で、体部は皿状に開くようである。内底面はヘラ先で格子目が刻まれている。精良な対土で、淡灰褐色の釉が内外面にかかるものの、糸切り難し底の



第195図 ピット出土瓦拓影 (1/3)



第196図 ピット出土石製品実測図 (1/2 · 1/3)

外底面は露胎で部分的に釉が及ぶ。施釉の鉢皿である。

瓦 (第195図) P496から出土した。丸瓦片で、外面はへらないし板状工具によるナド調整、内面は布目压痕がみられる。細砂粒を含むが精良な胎土で、灰色に焼成されている。

石製品 (第196図) 1~5はそれぞれ、P284・P350・9405・P316・P414から出土した。

1は、砂岩製の砥石。一部を欠くが現存長 6.4cm、幅5.8cm、厚さ1.2cmの大きさで、各面が砥面に使用される。2は、粘板岩質の石材を用いた砥石で、現存長10.9cm、幅3.4cm、厚さ1.0cmの大きさ。平坦な面と側面が砥面に使用される。

3は、箱雲母片岩製の紡錘車である。外径3.9cm、厚さ0.9cm、孔径0.7cm、重量25.5gを測る。扁平で、周縁も平らに整えられるが、片面の中央部に円文が刻まれている。

4は、滑石製石鍋片の転用品であろう。現存長4.9cm、幅4.4cm、厚さ1.7cm、重量59.8gを測

るが、円孔が穿孔される幅2.0cmの把手部分を折損する。四角形の面の中央には径3.2cm程の円錐筒状の凹みが設けられている。墨や顔料などの液体容器であろうか。

5は、玄武岩質石材の扁平な円盤を利用したすり石ないし作業台である。一部を欠くが、長径18.3cm、短径18.2cm、厚さ4.8cmの大きさで、両面ともに平坦にすり減る。

金属製品（第197図）1はP80、2はP437から出土した。

1は、やや脆弱な青銅製品で、現況で長さ6.2cm、幅1.1cm、厚さ0.3cmの大きさ。径0.2cmの円孔が幅広側の部分に穿孔されている。

2は、一方の端を失うが、扁平な板状の鉄製品。端部が幾分反り気味だが、隅の丸い形状を呈する。幅5.5cm、現存長4.5cm、厚さ0.3cmの大きさである。

玉類（第198図）ガラス小玉で、P296から出土した。淡いスカイブルーの色調を呈し、外径4.4mm、厚さ2.7mm、孔径1.3mmの大きさ。

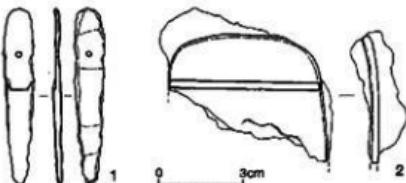
包含層出土の遺物（図版70、第199～206図）

本来、遺構に伴っていた可能性もあるが、遺構検出に手間取り、徐々に掘り下げた際に出土した遺物などを、一括して取り扱うこととする。

須恵器杯蓋（1・2）9F区から出土した。身受けのかえりをもつ杯で、天井部を欠く。かえり部は口縁端部とほぼ同じ高さである。1では復原外径17.5cmの大きさで、外天井が回転ヘラ削りされる。細砂粒を胎土に含み、明灰色ないし灰色に焼成されている。

須恵器杯身（3～5）3は、10E区北東部出土の、蓋受けのかえりのある杯身で、底部を欠く。復原口径12.6cm、外径15.0cmの大きさで、細砂粒を胎土に含み、暗青灰色に焼成されている。4・5は、高台を有する杯身で、9F区などから出土した。4の高台は踏ん張るように、5の高台は四角に近い。体部はヨコナデないしナデ調整され、細砂粒を若干含む胎土で、灰色ないし明灰色に焼成されている。4は復原口径13.0cm、器高3.8cm、底径9.6cmの大きさ。

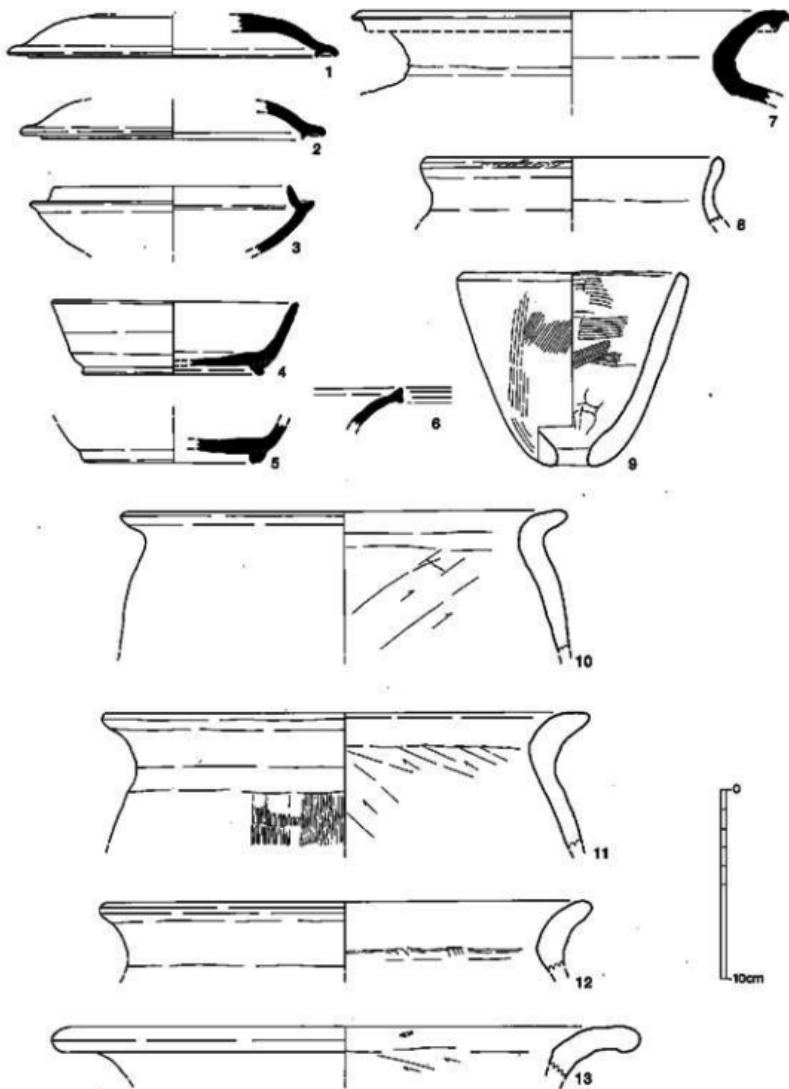
須恵器壺（6）口縁部破片で、薄い器壁を有するやや小形の壺であろうか。外反する口縁部が、端部で内外両面と端面を強くヨコナデして、つまみ上げたように広がる。砂粒を若干含み、灰色に焼成されている。



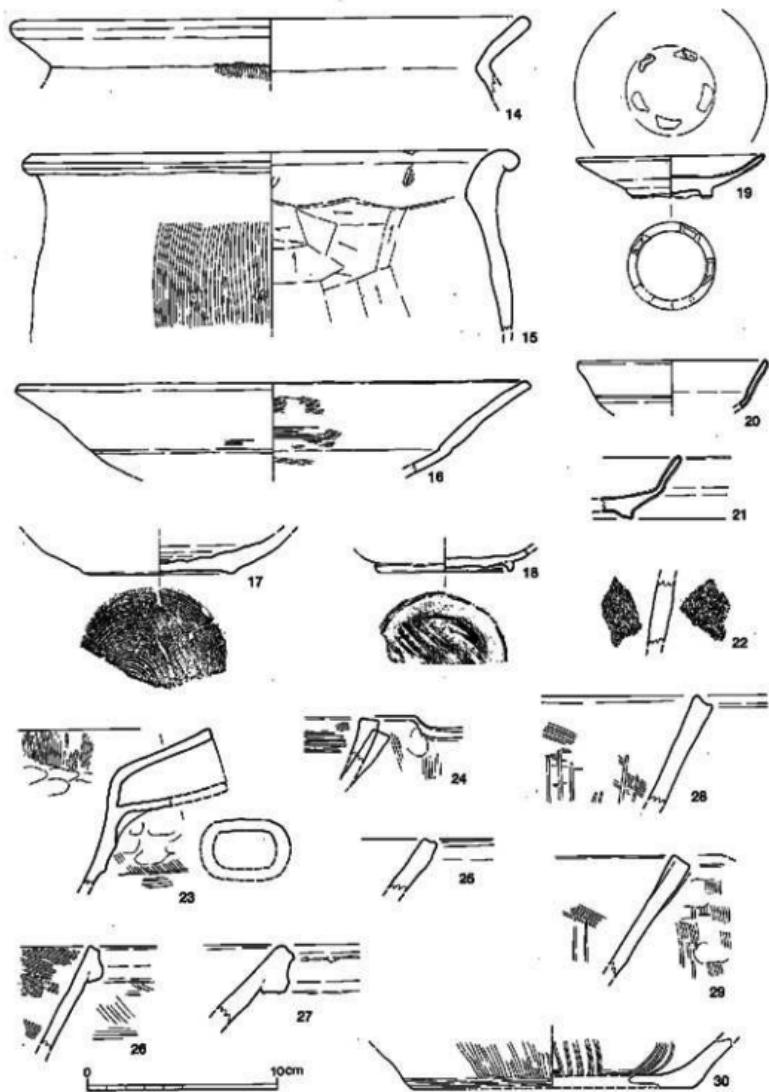
第197図 ピット出土金属器実測図（1/2）



第198図 ピット出土玉類実測図（実大）



第199圖 包含層出土土器実測図1 (1/3)



第200圖 包含刷出土器實測圖2 (1/3)

須恵器甕 (7) 口縁部が強く外反して、端部を強くナデて三角凸帯を下側に付けたような形になっている。腹部の外面は平行叩き、内面は同心円の當て具痕がみられる。復原口径22.4cmの大きさ。砂粒を若干含むが、灰色ないし黒灰色の色調を呈する。

土師器小形甕 (8) ほとんど肥厚せずに外反する口縁部破片で、端部は内青氣味に立つ。ヨコナデ調整され、復原口径は16.0cmの大きさ。雲母・赤褐色粒を胎土に含み、黄褐色に焼成されている。

土師器瓶 (9) 復原口径12.2cm、器高10.2cmの大きさで、底部が丸く、砲弾状よりも開く器形で、底部中央に直径1.6cmの孔が1つある。直口縁で、内外面をハケ目調整し、内面の胴下部から底部は指頭痕の残るナデ調整される。細砂粒・赤褐色粒・雲母を胎土に含み、茶色に焼成されている。

土師器甕 (10~15) 10~12はくびれた頸部から口縁部が外反する器形である。口縁部は短く、やや肥厚するが、10の反り方がやや強め。11は復原口径23.6cmの大きさを測る。胴部外面はハケ目調整、内面は頸部から下をヘラ削り調整する。13・14は口縁部がやや長めで強く外反するが、14の頸部は棱をもち、く字形に屈曲する。また、15は頸部のくびれが弱く、肥厚した口縁部はさらに端部で短く外反し、復原口径26.0cmの大きさ。いずれも、胎土に細砂粒・赤褐色粒・雲母を含み、橙褐色ないし淡赤褐色・淡橙茶褐色に焼成されている。

土師器高杯 (16) 杯部破片で、復原口径27.0cmの大きさ。口縁部は緩やかに外反し、杯底部との境は余り明瞭でない。内外面ともにハケ目が残る。細砂粒・雲母・赤褐色粒を胎土に含み、淡黄灰色に焼成されている。

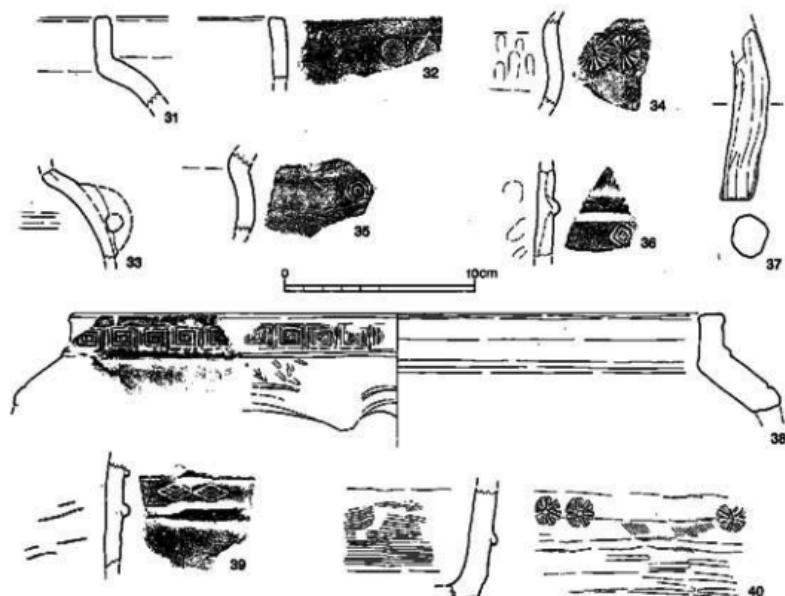
土師器杯 (17) 口縁部を失うが、復原底径8.0cmの糸切り離し痕の明瞭に残る底部から、体部が内青氣味に開く。胎土に細砂粒・雲母を含み淡明褐色に焼成されている。

瓦器桶 (18) 底部のみの破片で内外面・胎土ともに黒色を呈すが、板状压痕のある外底面に復原外径7.4cmの低い高台が付く。内底面はヘラ磨き調整される。精良な胎土で、漆黒色に焼成されている。

白磁皿 (19) 口縁部が内青氣味に開く皿で、高台は5ヶ所透かされる。口径9.8cm、器高2.0~2.3cm、高台外径4.5cmの大きさ。淡黄白色の釉が内面と外面の口縁部にかかるが、露胎の外底部で明灰色の精良な胎土がみえる。重ね焼きされて、内底面に5ヶ所の目が残り、高台疊付けに釉が付着する。3号集石土壤の南側から出土した。

青磁皿 (20・21) 20は復原口径12.0cm、残存器高2.5cmの、口縁部が外反気味に開く。緑がかった灰色の胎土で、灰緑っぽい釉がかかる。21も同様な口縁部を有するが、高台部分は上げ底状をなす。胎土は緑がかった灰色で、淡綠灰色の釉がかかり、内底面と、疊付けに目土らしい痕跡がある。李朝系の青磁皿であろう。

土師器塩壺 (22) 小破片だが、外面をナデ調整され、内面に布目压痕が明瞭に残る。胎土



第201図 包含窯出土土器実測図3 (1/3)

に砂粒・雲母を含み、淡灰茶褐色に焼成されている。8F区で出土した。

土師質鍋 (23~27・37) 23は口縁部に取り付けられた把手部分の破片である。中空梢円筒状の握りを貼り付けている。握り部分と体部外面はハケ目調整、体部内面はナデ調整される。また、口縁部の約5cm下に凸帯状の段がある。24・25は口縁部が僅かに肥厚気味だが、直線的に開き、端部を平らに整えるもので、24には片口が付く。内外面ともにナデられるがハケ目が残る。26・27は直線的に開く口縁部が、端部で折疊んだように肥厚して、垂れた凸帯のようになるもの。内外面ともナデされるが、26にはハケ目が残る。いずれも、細砂粒を胎土に含み、橙褐色などの色調に焼成されているが、外面に煤の付着する例が多い。

37は、鼎のような3足の付く鍋の足であろう。接合部でもない部分で欠損しているが、現存長8.8cmで、径2.0cm前後の棒状を呈し、全体にナデ調整される。細砂粒を胎土に含み、黄褐色に焼成されている。

掘 鍋 (28~30) 28・29は直線的に開く口縁部で、端面もナデられ、口唇端がつままれたように広がる。磨滅も進むが内外面にハケ目が残り、内面に梯歯状の目が刻まれる。30は底部

破片で、復原底径14.8cmの平らな底から、体部が直線的に開く。いずれも胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒などを含み、暗橙色などに焼成されている。

湯釜 (31・32) 31は土師質の口縁部破片で、内燃氣味ながら直に立ち上がる。32は土師質の肩部破片で、欠損するが釣手の痕跡がある。胎土に細砂粒・雲母を含み、淡橙褐色に焼成されている。

火鉢 (33~36・38~40) 33は角火鉢の口縁部であろう。扁平な板状で、口縁に沿って1条の沈線と菊花形の文様が押捺される。34・35は肩部破片で、湯釜のような器形も想定しうるが、沈線に沿った菊花状の文様や、亀甲形の文様が押捺される。35の胴部にはハケ目がみられる。

36は瘤状の凸帯と菱形の文様が押捺される。また39では2条の瘤状凸帯間に四菱形の文様が押捺される。

38は口縁部破片で復原口径34.4cmの大きさだが、胴部から肩部が内傾して、口縁部は折れて直立する。口縁部では、上面を整えて凸帯状に拡張し、頸部に低い凸帯を巡らせていて、この凸帯間の空間に角渦形の文様を連続押捺する。また、肩部下側には透かし窓があり、窓の縁に沿って弧状の沈線が刻まれるようである。40は底部破片で、瘤状の凸帯に沿って菊花状の文様が押捺される。外面の下端部はヘラ磨きされ、内面はハケ目が残る。これらの火鉢は、概ね雲母を含むが精良な胎土で、黄灰色や暗灰色などの色調に焼成されている。

瓦 (第202図) 111号土塼の北側で出土した、軒丸瓦の下端部破片である。縁に沿って珠文が並び、中央の文様は巴文であろうか。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を含み、淡橙褐色に焼成されている。

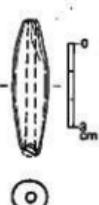
土鍤 (第203図) 管状土鍤で、1・2・9号溝に挿まれた部分から出土した。端部を若干欠くが、長さ4.9cm、外径1.3cm、孔径0.3cm、重量5.7gを測る。胎土に褐色粒・雲母を含み、暗黄褐色に焼成されている。

石製品 (第204図) 表採資料であるが、片岩質砂岩製の砥石で、現存長9.3cm、幅7.0cm、厚さ3.9cmの大きさで、上面のみが砥面にされている。

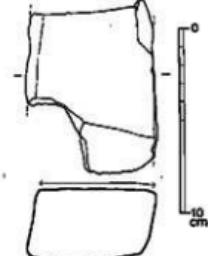
鉄製品 (第205図) 1・2は、刃部片で、1は鉄の刃部片であろう。2は刃の付き方が逆向きらしく、用途不明だが鉄の可能性もある。



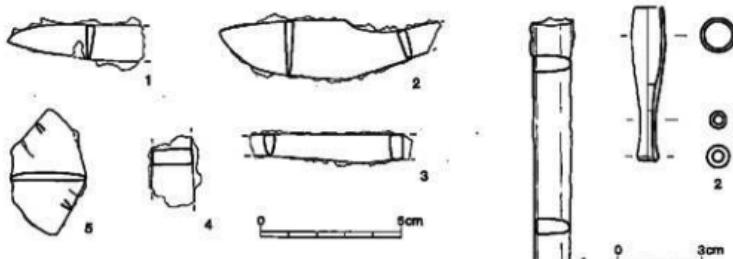
第202図 包含層出土瓦拓影 (1/3)



第203図
包含層出土土
製品実測図
(1/2)



第204図 包含層出土土
製品実測図 (1/3)



第205図 包含層出土鉄製品実測図 (1/2)

3はやや扁平度のある棒状だが、鈍い刃部らしい部分もある。

2のような道具の基部側の可能性もある。7C区南東隅部から出土した。

4は扁平な角棒状だが、両端側ともに欠損し用途不明。5は薄い変形で、縁部は刃の可能性がある。いずれも10D区で出土した。

青銅製品 (図版206) 1は、12E区で出土した。鋸化が進み、端部が本来のままか不確実で、扁平な棒状で、断面形は砲弾形である。現存長8.9cm、幅1.3~1.4cm、厚さ0.6cmを測る。芯地に鉄が使われているようである。用途は不明。

2は、6C区北東部で出土し、キセルの雁首である。長さ5.5cm、外径0.6~1.2cmの大きさで、吸口部は外径0.8cm、孔径0.4cm、接合部は外径1.0cm、孔径0.8cm、深さ2.7cmである。

古銭 (図版70) 9D区北東部から出土した銅銭は、直徑2.4cmの大きさで、表面下に楷書体の「元」、左に「寶」のみ判読できる。9D区東寄りから出土した例は、半欠資料だが文字は読みない。1号土壙の東側で出土したが、直徑2.4cmの大きさで、表面は楷書体の「洪武通寶」、背面は無文である。洪武通寶は初鋳年代が1368~98年間の明銭である。

7. 小結

土壙墓・土塚や溝状造構などから出土する遺物をみると、一部に古墳時代から奈良時代などに含まれる遺物もみられるが、主体となるのは中世の遺物である。そして、これらは、次のように、大きく4つの時期に大別できる。

- 第1期 玉縁の白磁や、龍泉窯系の青磁を中心に、糸切り離しの後に板状圧痕をつける土師器皿・杯が盛んに用いられる。13世紀前後の時期である。
- 第2期 口禿口縁の白磁や、龍泉窯系の青磁に代表される、14世紀前後の時期である。土師器皿や杯は直線的に開く部をもつ。
- 第3期 李朝青磁や明代の青磁、染付などの陶磁器を中心とする。備前系統の陶器も盛んに

用いられる。15世紀代頃の時期であろう。

第4期 鉄軸の古唐津などをはじめとする国産陶磁器が盛行する。16世紀以降の時期であろう。

土壙墓では、2号土壙墓・21~23号土壙墓・32・33号土壙墓の出土土器は第2期を中心とした時代であり、他の土壙墓もこれを前後する時期の可能性が高いものの、重複関係もみられるので、第3期に属する例もある。

集石土壙では、3号集石土壙出土の備前系摺鉢の特徴は15世紀代に含まれるもので、重ね焼きの目痕のみられる白磁皿などの存在にもおおきな矛盾はない。

土壙も重複関係をもつものが多めあり、時期的に単純でないことは明らかである。溝状造構との重複では土壙が先行する例がほとんどで、土壙墓との関係では土壙がほとんど後出する。

土壙では、9号土壙は出土土器器杯の特徴から13世紀中頃の年代が与えられ、このほか第1期に属す土壙として、34号土壙や37号土壙・103号土壙があげられよう。10号・11号土壙は14世紀代で、このほかに第2期に属す土壙として、36号土壙・42号土壙・58号土壙・62号土壙・63号土壙・66号土壙などがあげられる。11号土壙は15世紀に入るであろうが、第3期に属すると思われる例として、15号土壙・44号土壙・53号土壙・70~73号土壙・75号土壙・85号土壙・164号土壙などがあげられる。また第4期に属す例では、14号土壙・121号土壙があげられ、84号土壙・88号土壙・106号土壙・120号土壙も第4期に近い時期であろうか。

なお、125号土壙・145号土壙・146号土壙・148号土壙では、第1期以前の平安時代に属すとみられる土器類などが出土している。

溝状造構では、1号溝は第3期の遺物を中心に包含していく、2号溝では第2期の遺物を中心に包含している。また、3号溝では第2期を中心とした遺物がみられる。8号溝には第4期の遺物が含まれ、10号溝からこれよりも後出する国産陶磁器の出土がみられる。8号溝と4・6号溝は連結していて、10号溝と11~15号溝・18~20号溝には暗灰色の砂質土が堆積していく同様な時期に堆積した可能性があり、むしろ調査区域内での居住区域の終焉によって埋没したものと解しておきたい。なお、18号と20号溝は主軸方向が直角の向きであり、農地区画に係わる溝かもしれない。

ピット出土遺物では、奈良・平安時代に含まれる遺物も多数みられたが、主体となる中世の例で、第1期から第4期までにわたってみられる。また製鉄造構もこれらの時期幅に含まれるであろうが、細かな時期決定はなしえない。古錢埋納ピットは、出土古錢の初鑄年代との関係からして第1期とは考え難く、15世紀ないし16世紀頃に想定すべきであろう。

包含層などでも、第1期から第4期にわたる遺物がみられるものの、傾向としては14世紀以降16世紀にかけての時期に集中している。そして17世紀以降の遺物は極少量にかぎられている。

VII 狐塚南遺跡出土の赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター 本田光子
宮内庁正倉院事務所 成瀬正和

狐塚南遺跡の石棺墓、石蓋横穴土壙墓および墓地改葬中出土の赤色物が何であるかを知るために、顕微鏡観察、X線分析を行った。出土例に関する今までの知見に寄れば、墳墓出土の赤色物は鉛物質の顔料であり、酸化第2鉄を主成分とするベンガラと、硫化水銀（赤）を主成分とする朱の2種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主体とする鉛丹がある。これら3種類の赤色顔料を考えて分析を行った。試料の一覧・分析結果とそれにより推定される赤色顔料を表に示した。

試料

No1, 3は埋葬施設の底部内出土の土、ほとんど土と化した有機物（遺骸）全体が赤く、赤色物の凝集した小塊が多数混じた状態である。この赤色物の小塊はベンガラと思われるが、これを実体顕微鏡下で調整（混入土砂、骨片等夾雜物の除去）し、針先に付く程度を採りプレパラートを作成し、残りをX線分析に供した。No2はNo1を調整中に全体に赤く染まった土の中に朱のように見えた赤色物を含む土砂である。朱と思われる赤色物は非常に微量であったためそれだけを分離抽出することができなかったので土砂のままで試料とした。No4は1, 3と同様に調製し試料とし、No5は土器片のままで測定した。

顕微鏡観察

光学顕微鏡により透過光・落射光40~400倍で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類・粒度等を観察するものである。古代の赤色顔料三者は特に微粒のものが混在していないければ、粒子の形状、色調等に認められる特徴の違いから、検鏡により経験的に見極めがつく。No1, 3, 4, 5に赤色顔料としてベンガラ粒子を認めた。試料のベンガラは破碎されたような大きな粒子も僅かに認められるが、大半はやや偏平で明度の高い非常に細かい（約1, 2 μ m以下）粒子からなる母集団に、いわゆるパイプ状を呈する透明感の強い管状粒子（約10~100 μ m）が多量に含まれるベンガラである。No2に、赤色顔料としてベンガラとその他に朱の特徴を持つ粒子を認めた。やや角張った形状、落射光観察時に認められる独特の反射・光沢、透過光観察時の透明度および赤色の濃淡の調子等から判断した。

蛍光X線分析

赤色物の主成分元素の検出を目的として、理学電機工業（株）製蛍光X線分析装置を用い、X線分析装置を用い、X線管球；クロム対陰極、印加電圧；40kv、印加電流；20mA、分光結

No	試 料	蛍光X線分析		X線回折		顕微鏡観察	赤色顔料の種類	挿 図
		鉄	水銀	赤鉄鉱	辰砂			
1	10号石棺墓	+	-	+	-	ベンガラ	ベンガラ	第63図
2	10号石棺墓	+	-	+	-	ベンガラ・朱	ベンガラ・朱	第63図
3	1号石蓋横穴土塚墓	+	-	+	-	ベンガラ	ベンガラ	第71図
4	墓地改葬中出土土器 内の赤色物	+	-	+	-	ベンガラ	ベンガラ	第79図
5	墓地改葬中出土土器	+	-	+	-	ベンガラ	ベンガラ	第79図

表 赤色物の分析結果と鑑定される赤色顔料の種類

品；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲(2θ)；10~65°、走査速度；2θ 8°/分、時定数；0.5秒の条件で測定を行った。赤色顔料の主成分元素としては朱であれば水銀、ベンガラであれば鉄であるので、2種の元素の有無のみ表中に記した。全資料から鉄のみが検出された。この他主として混入の土砂部分に由来する元素は省略した。ただし、鉄は土砂部分にも必ず含まれているので、赤色顔料由来のものとの区別は蛍光X線強度から判断した。全試料とも鉛は検出されなかった。

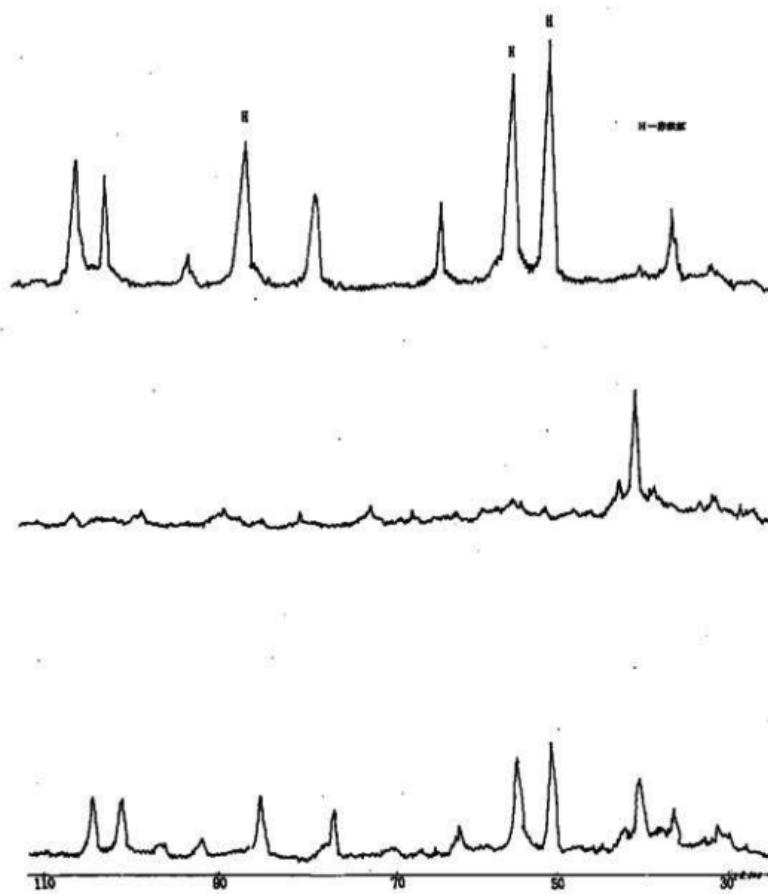
X線回折

赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的として、理学電機(株)製文化財測定用X線回折装置を用い、X線管球；クロム対陰極、フィルター；バナジウム、印加電圧；25 kV、印加電流；10 mA、検出器；シンチレーション計数管、発散および受光側スリット；0.34°、照射野制限マスク(通路幅)；4 mm、ゴニオメーター走査範囲(2θ)；30~66°、走査速度2θ 4°/分、時定数；2秒の条件で測定を行った。赤色顔料の主成分鉱物としては、朱であれば辰砂、ベンガラであれば赤鉄鉱である。No2, 3には赤鉄鉱が同定された。

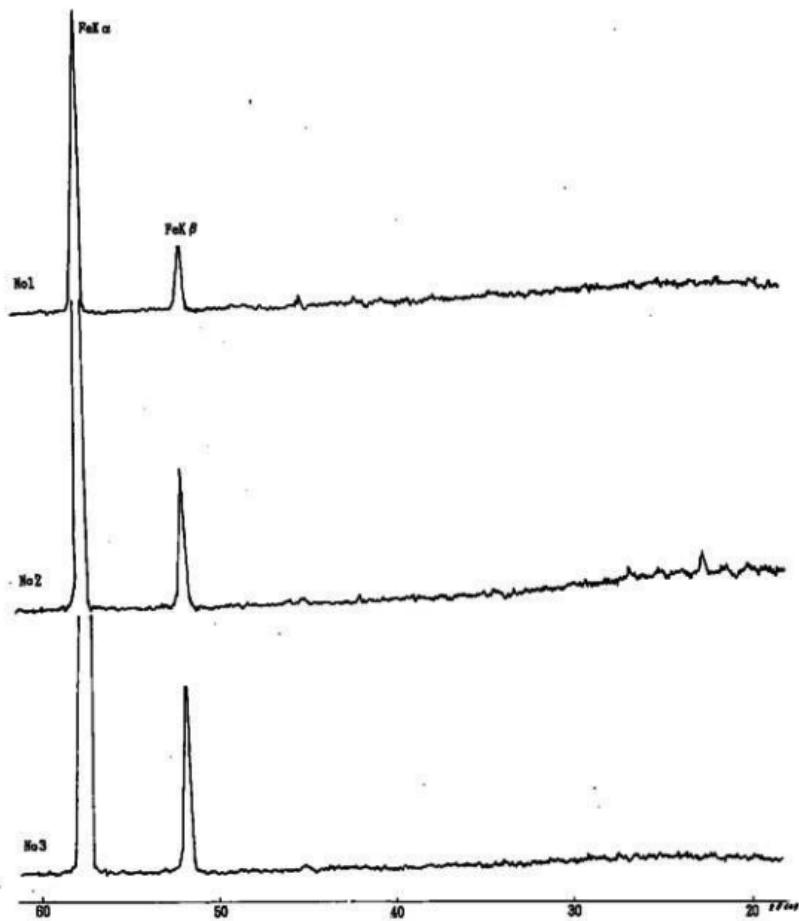
まとめ

- 以上の結果から狐塚南遺跡出土の赤色顔料については下記のように考えられる。
- ① 10号石棺では埋葬施設の床面あるいは遺骸の上にベンガラが大量に施されていたと考えられる。また、遺骸そのものには朱が微量ではあるが使われていたものと推定できる。
 - ② 1号石蓋横穴土塚墓では10号石棺墓同様埋葬施設の床面あるいは遺骸の上にベンガラが大量に施されていたと考えられる。遺骸への朱使用の有無については、今回の採取試料から見る限りでは無かったものと考えられる。
 - ③ 墓地改葬中に出土した土器内の赤色顔料はベンガラである。

今回調査の機会を頂きました福岡県教育委員会小池史哲氏に感謝致します。



第207図 蛍光X線スペクトル図



第208図 X線回折図

VII おわりに

狐塚南遺跡では、縄文時代早期の押型文土器・手向山式土器と、前期の曾畠式に先行する時期の土器や、石器類の出土がみられ、遺構は確認されないものの縄文時代から生活の舞台になっていたことが分かる。

弥生時代では、後期中環の住居跡がある。長方形と正方形プランの住居跡が各1軒あり時期的に近接している。

弥生後期からは古墳時代前期の頃には、石棺墓・木棺墓・石蓋土壙墓や土壙墓などで構成される墓地が、段丘端部に相当する北端部で群をなしている。削平を受けるなど破壊された墓が多いものの、玉類や鉄製品を伴出する例や、棺内に赤色顔料の痕跡を有する例もみられた。擾乱されて良好な例が少なかったが、採集できた赤色顔料の分析ではベンガラ（酸化第二鉄）が多く、朱（流化水銀）も一部検出された。

古墳時代から古代にかけては、カマドを付設する方形プラン住居跡群があげられる。全体に中世の遺構などで搅乱されたり、削平を受けて遺存状況が悪いものの、住居跡は6世紀末から9世紀にわたって42軒が確認された。調査区域外にも展開するものと考えられるが、調査区域内では重複していてA～C群に区分しうる。おそらく、数軒単位で構成される住居群であろう。特に8世紀の住居跡が多いものの同じような位置に建て替えられていることになり、ある程度集落のなかでの規制として引き継がれてきたものと推測されるとともに、同じような集落景観が100年近くは続いているものと推定されよう。なお、住居跡のなかに一辺が2m程の小型住居がみられ、時期的に下降する傾向が見受けられた。

中世の遺構では、土壙墓33基、集石土壙3基、土壙150基などと、20条の溝・多数の柱穴状ピットが発見された。

その重複関係などからみて、調査区域内の大半が13世紀から16世紀にかけて連続と使用され、土壙掘削と埋立を繰り返していたことは明らかで、無数の柱穴状ピットの存在や、製鉄遺構、古銭埋納ピットなどの存在から、墓地を伴う居住区域に使用されていたことが、推定されよう。

溝の配置については、調査区域の割約もあって充分に検討できない側面もあるが、方形区画溝を構成していた可能性もある。

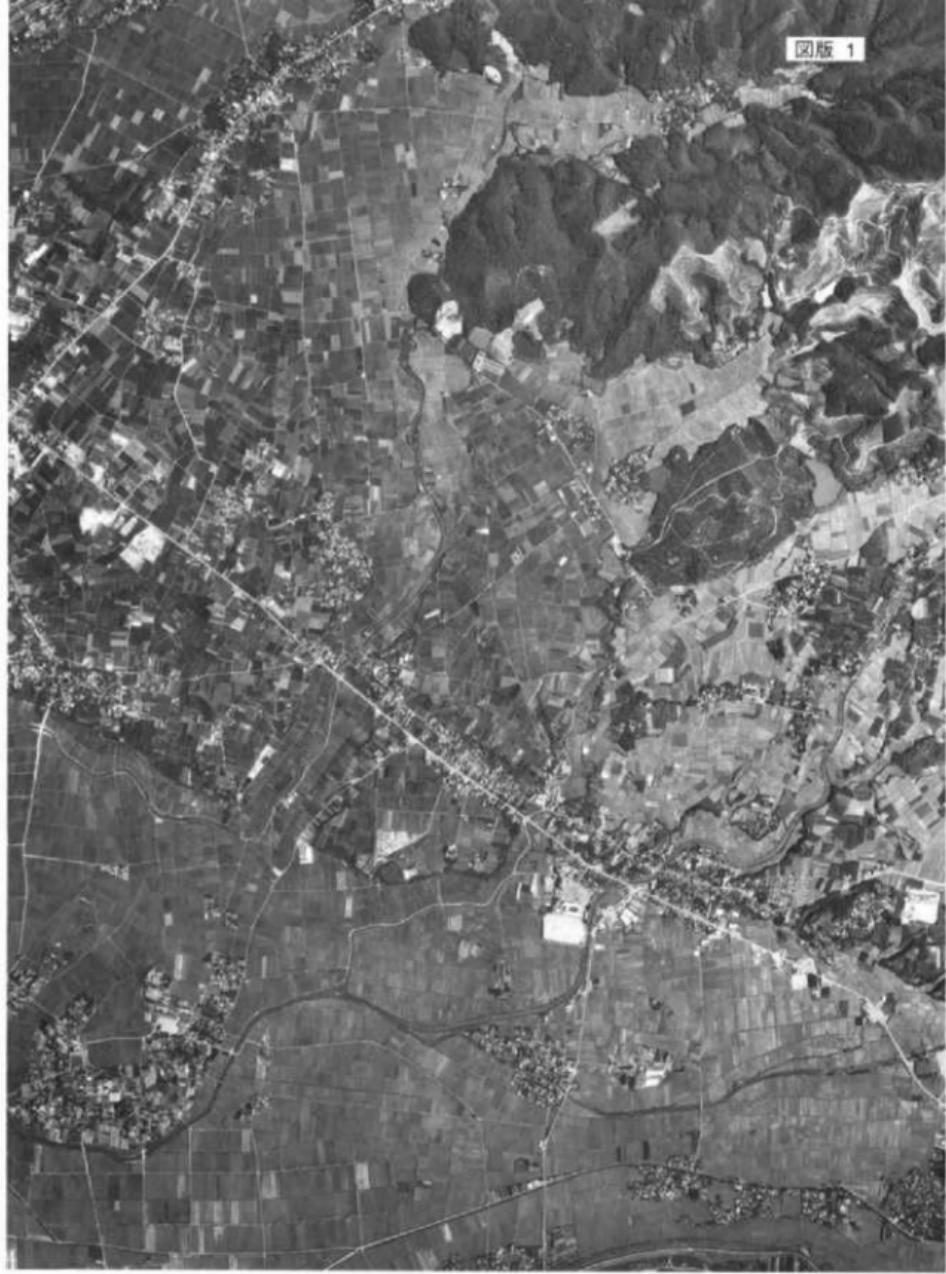
出土遺物の構成などは、輸入陶磁器や国产陶磁器を有すること、硯、火鉢、少量ながらも瓦が出土することなどから、農村の一般住民クラスの人たちの生活とはややかけ離れた種類の遺物が多く、中世都市の博多などと直接的なつながりをもったクラスの人たちの生活地であった可能性が高いと言えよう。

ところで、北部九州の13世紀後半には蒙古襲来があり、これに関連して守護の大移動があつ

たとされている。そして、1285年の岩門合戦を介した恩賞地配分もあった。この恩賞地の一つに筑前国長瀬荘があげられている。長瀬荘は上座郡に属し現在の朝倉町長瀬の地名と関連が深い。狐塚南遺跡と現在の長瀬集落との距離はわずかであり、この遺跡がこの時の恩賞地と関係があることも想像され、領主層の居館ならずとも名主など領主に近い有力農民クラスの居住する居館であった可能性もある。

一方、この居館の終焉には、16世紀末後半の豊臣秀吉の太閤検地などの検地による、半領主的な立場を否定したことと、16世紀末の「文禄・慶長の役」による出兵に関係したか、直接・間接的な農村への負担が契機になった可能性も考えておきたい。そして、18・20号溝などの状況からみて、17世紀後半からの福岡藩による土地の支配体制の再編整備と、新田開発の推進の頃に農地として整備されて削平されたのであろう。

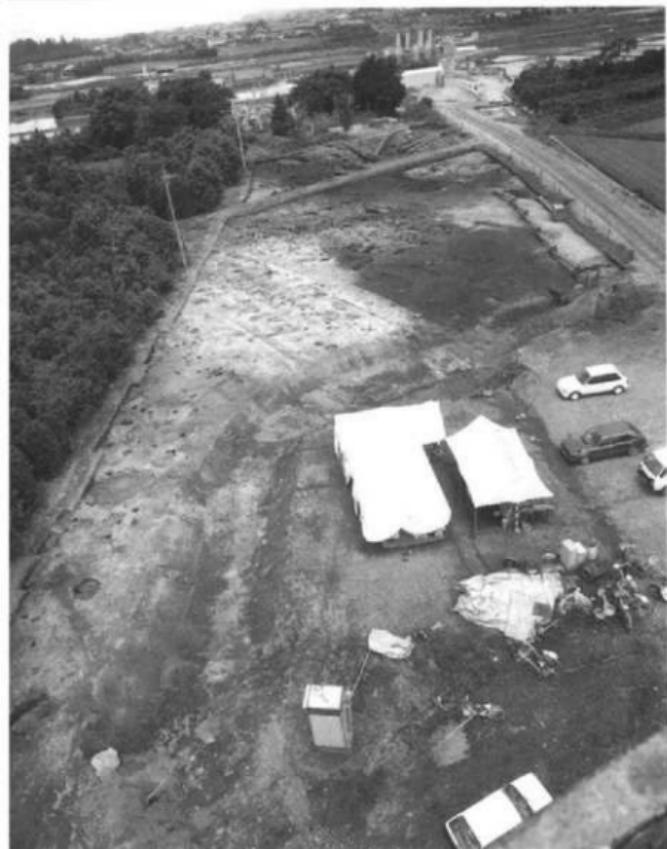
図 版



福塚南道路周辺航空写真



1



1 狐塚南道路周辺遠景
(西から)

2 狐塚南道路全景
上空写真 (北東から)

2

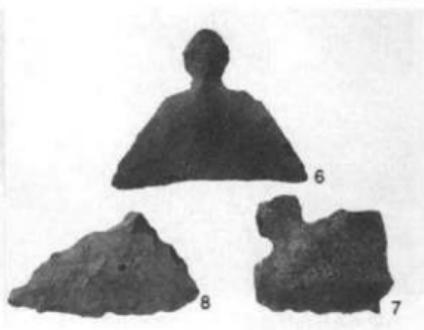
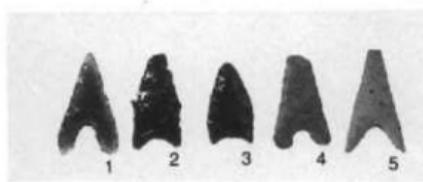
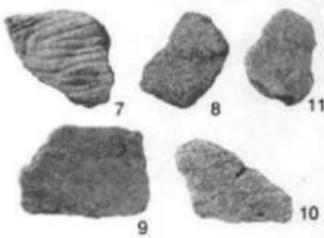
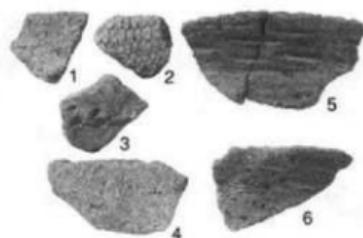
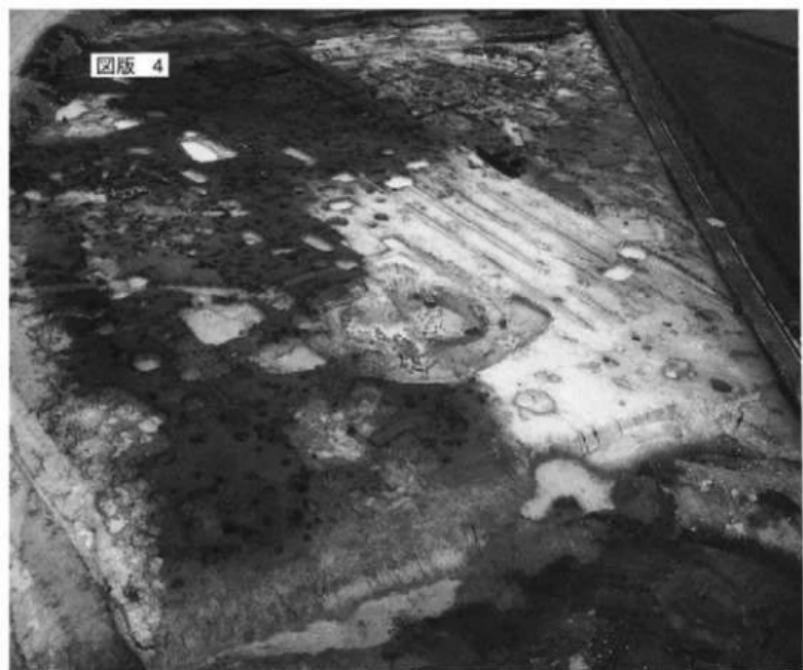


1



2

1 狐塚南道路南側調査区全景（南東から） 2 狐塚南道路南側調査区全景（北西から）



1 南側調査区全景（南東から）

2 出土縄文時代の遺物

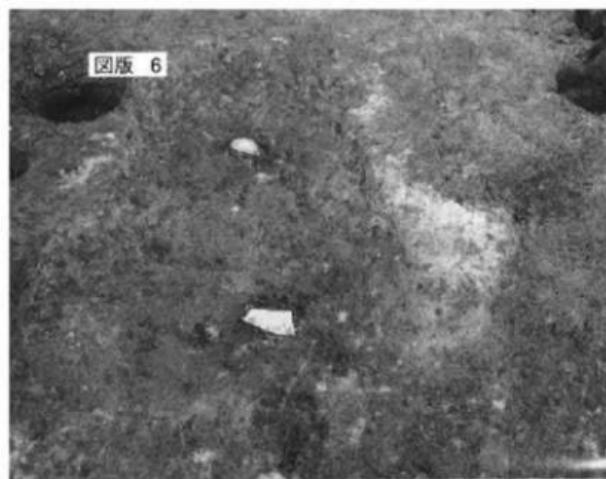


1



2

1 調査中の住居跡群 2 西側調査区全景（色調の黒い部分は住居跡）



1



2

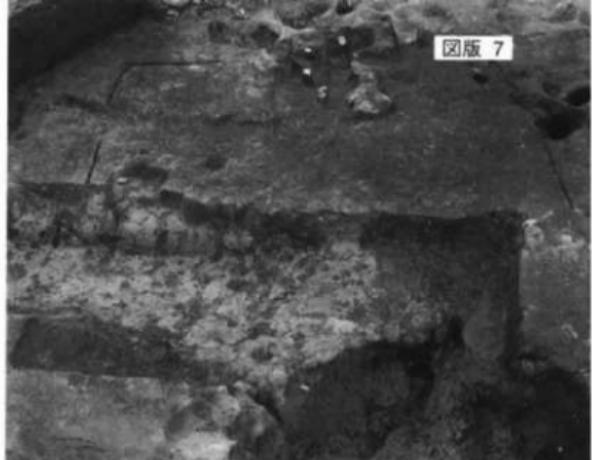


3

1 4号住居跡カマド

2 5号住居跡カマド

3 8号住居跡カマド



1

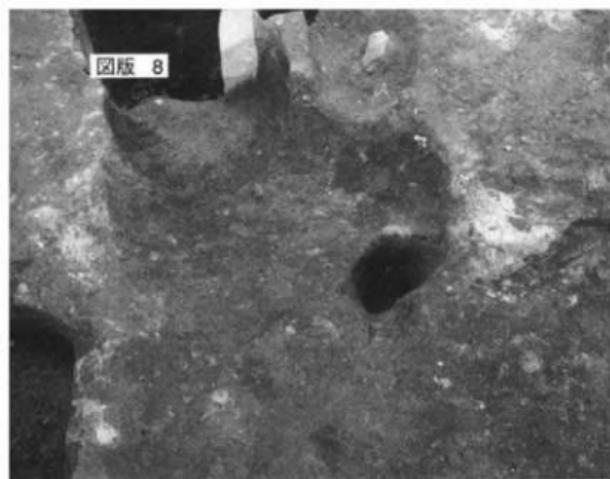


2



3

- 1 14号住居跡
- 2 14号住居跡カマド
- 3 18~23号住居跡



1



2

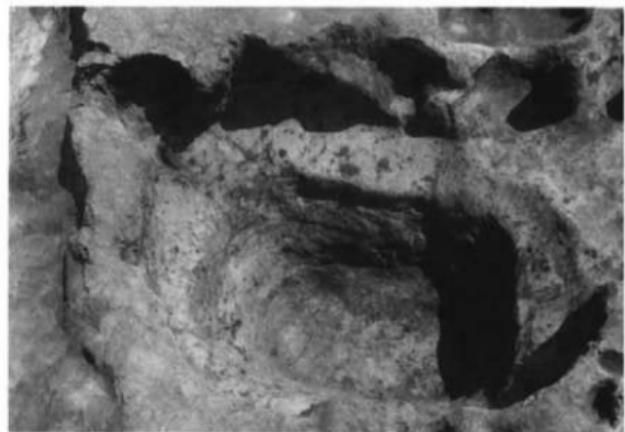
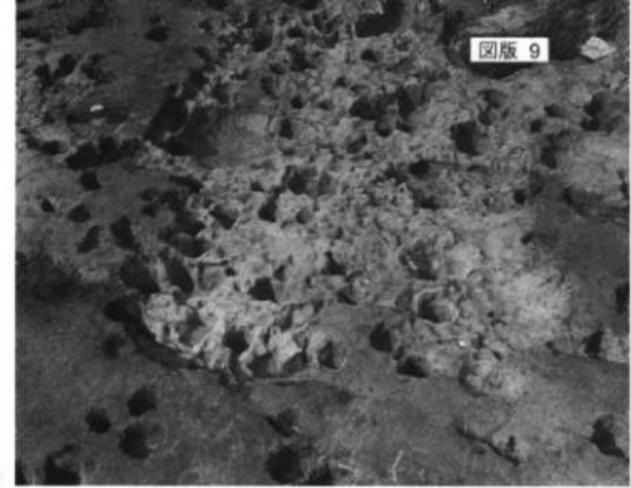


3

1 19号住居跡カマド

2 20号住居跡カマド

3 21号住居跡カマド

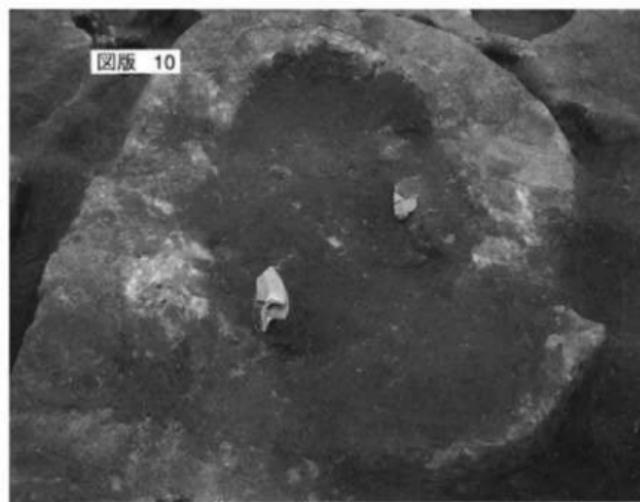


1 24・25号住居跡

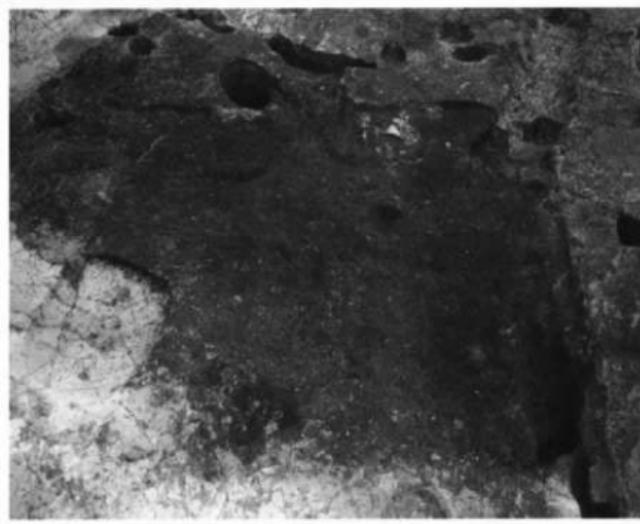
2 27号住居跡内

下層土壤

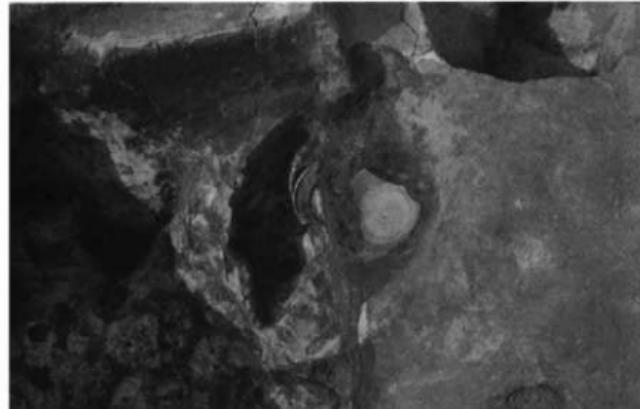
3 18~23号住居跡



1



2



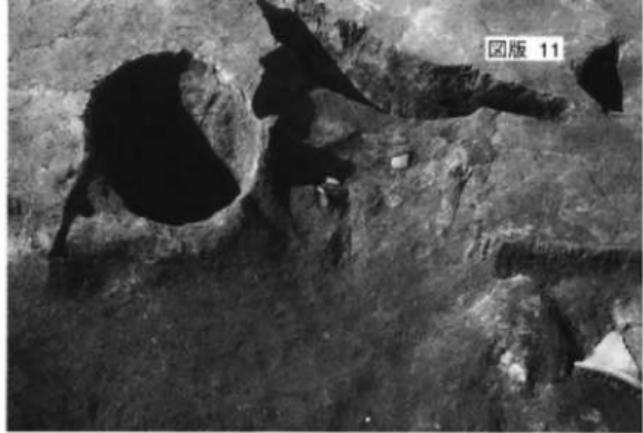
3

1 30号住居跡カマド

2 32号住居跡

3 32号住居跡

遺物出土状況



1



2

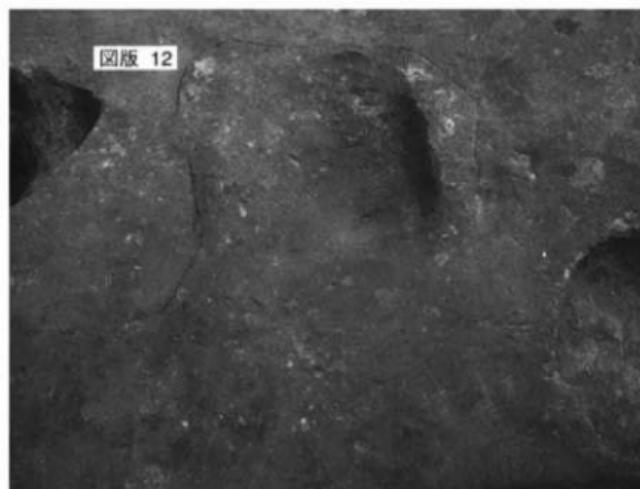


3

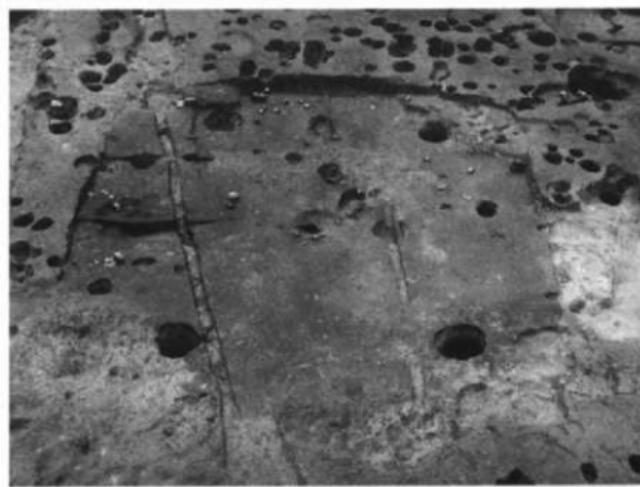
1 32号住居跡カマド

2 32号住居跡（周辺は34・
35号住居跡）

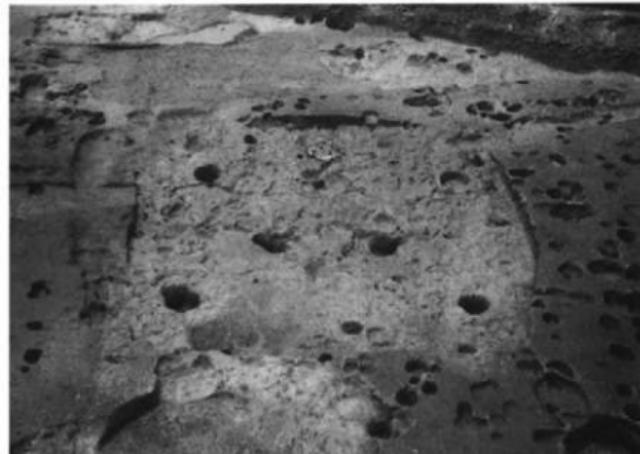
3 33号住居跡カマド



1



2

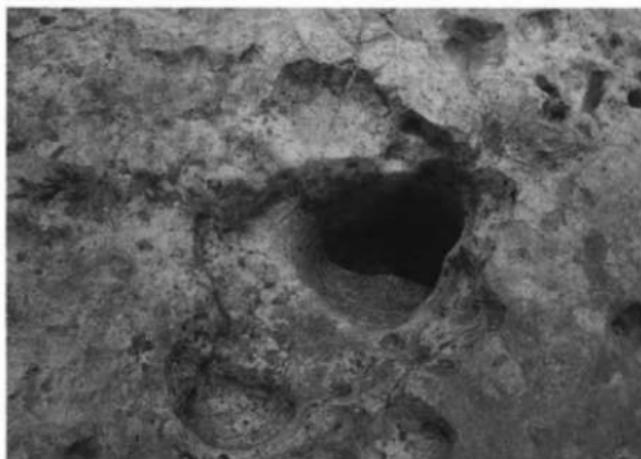


3

1 37号住居跡カマド
2 42号住居跡
3 42号住居跡



1



2

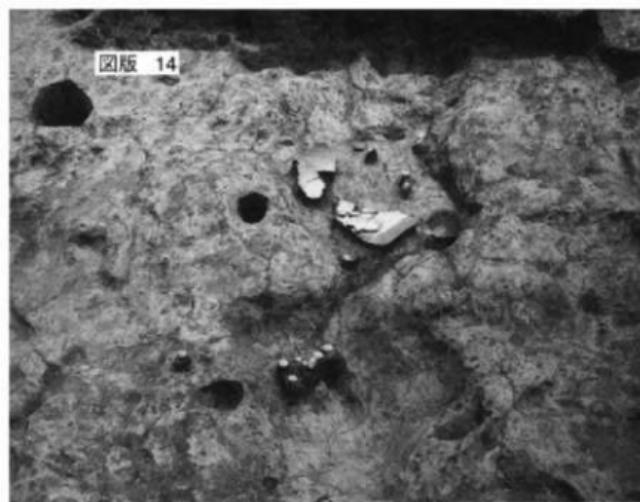


3

1 42号住居跡柱穴

2 42号住居跡柱穴

3 42号住居跡入口部



1



2

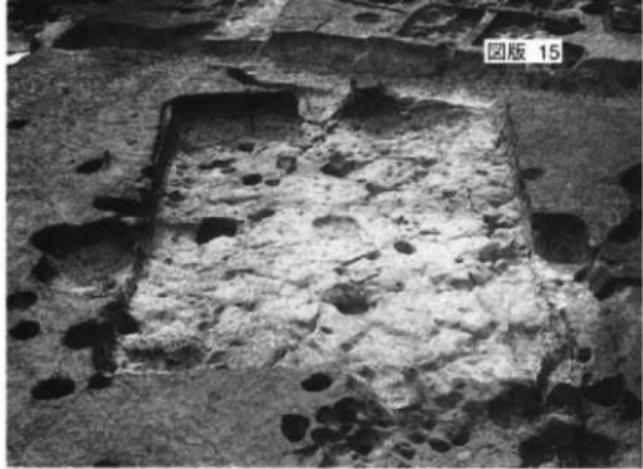


3

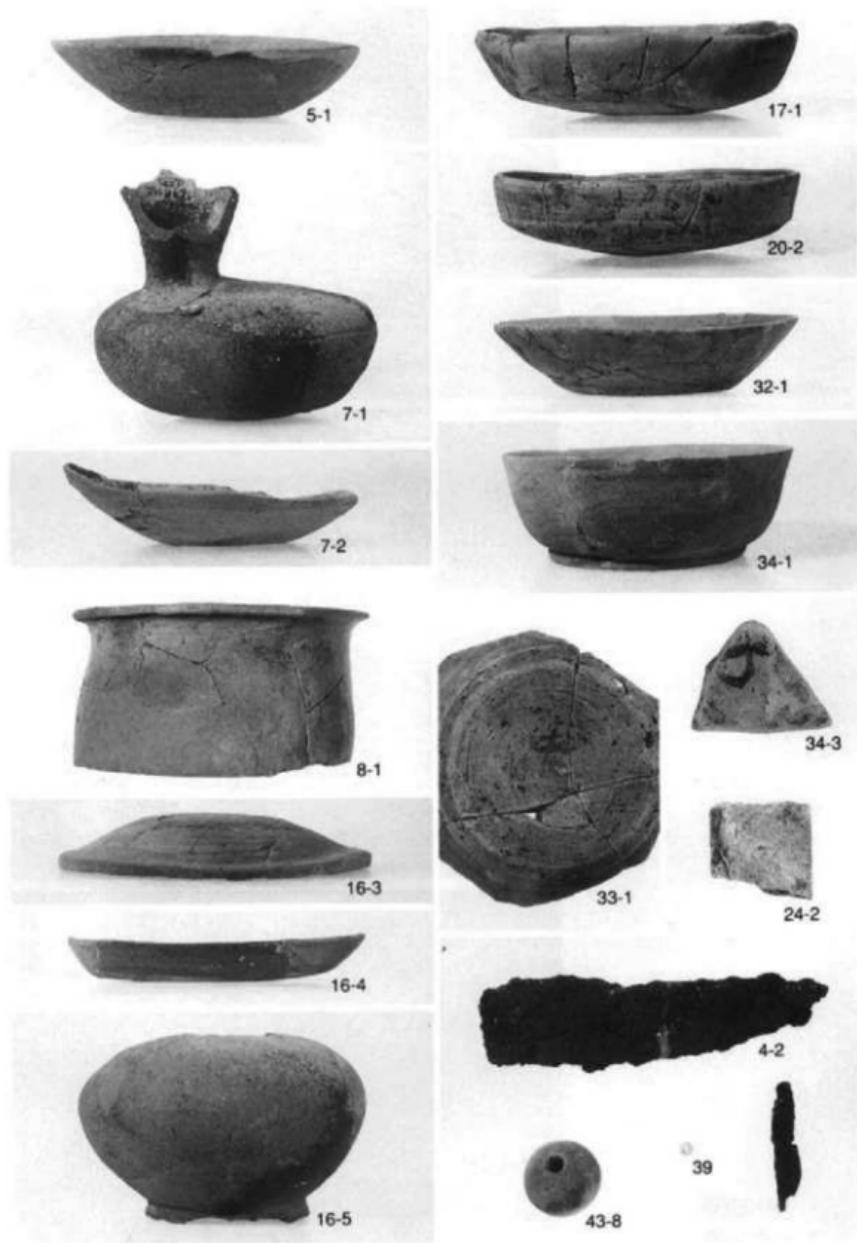
1 42号住居跡入口部分

2 42号住居跡
遺物出土狀況

3 42号住居跡
遺物出土狀況



1 43号住居跡
2 43号住居跡
3 43号住居跡入口部





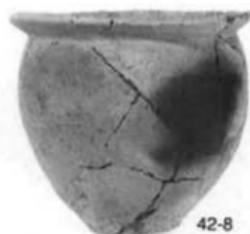
42-1



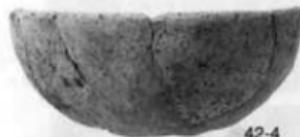
42-7



42-3



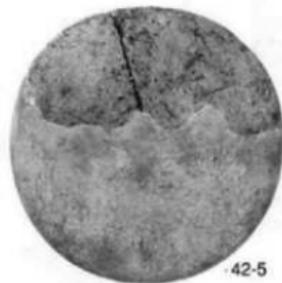
42-8



42-4



42-9



42-5



43-2



42-6



42-10



1



2

1 北部墓地群南半全景
(西から)

2 北部墓地群南半近景
(東から)



1

1 北部墓地群北半全景
(西から)

2 北部墓地群北半全景
(東から)



2



1



2

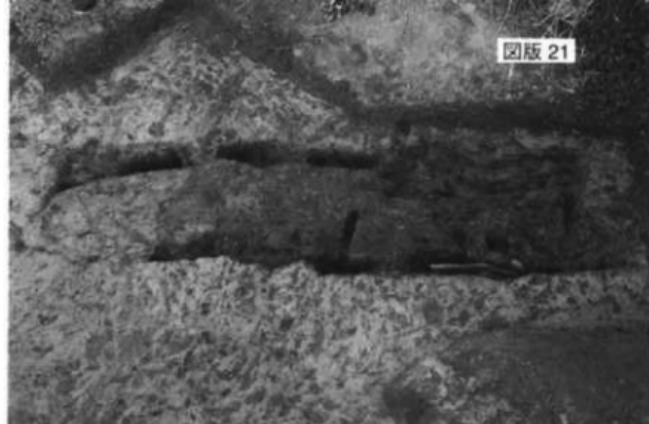


3

1 1号石棺墓

2 1号石棺墓

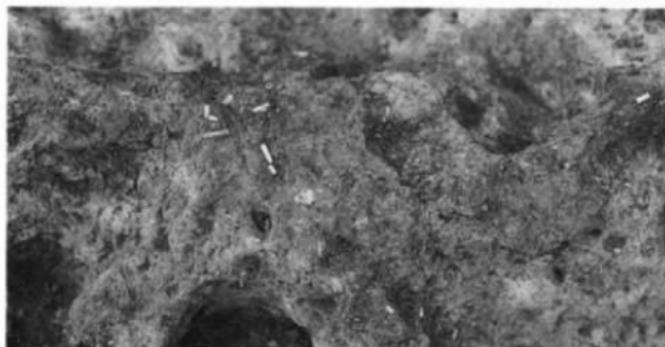
3 2号石棺墓



1

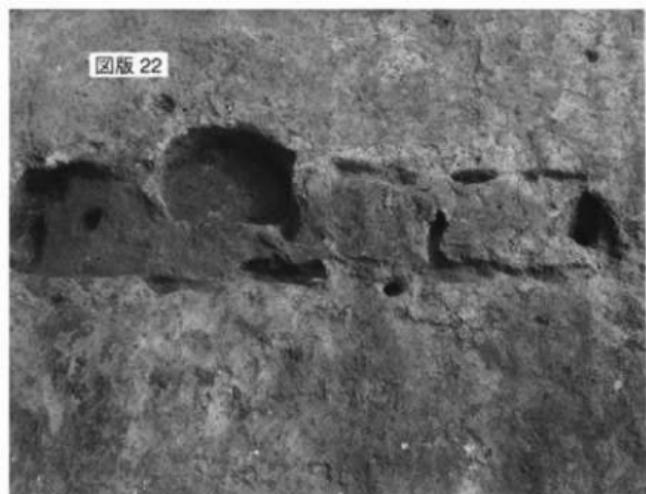


2



3

1 3号石棺墓
2 3号石棺墓
3 3号石棺墓
遺物出土状況



1



2

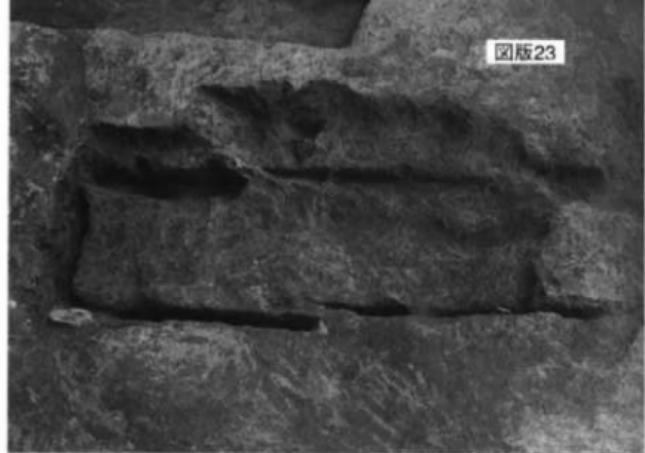


3

1 4号石棺蓋

2 5号石棺蓋

3 6号石棺蓋



1



2



3

1 7号石棺墓

2 8号石棺墓

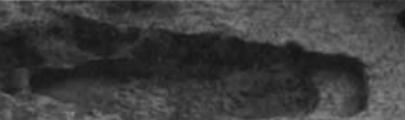
3 9号石棺墓



1

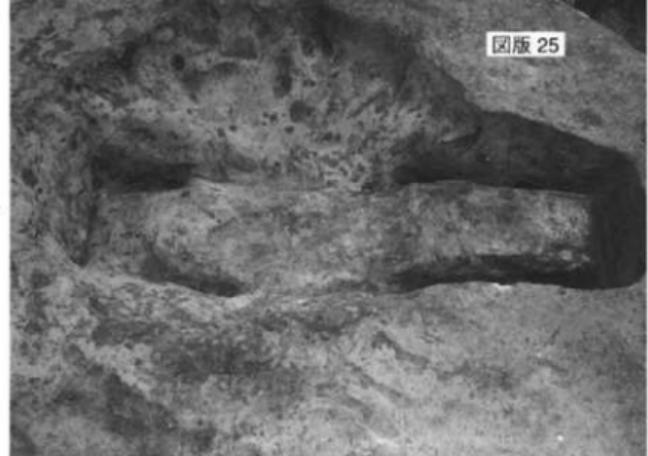


2



- 1 10号石棺墓
- 2 蓋石除去後の
10号石棺墓
- 3 11号石棺墓

3



1



2

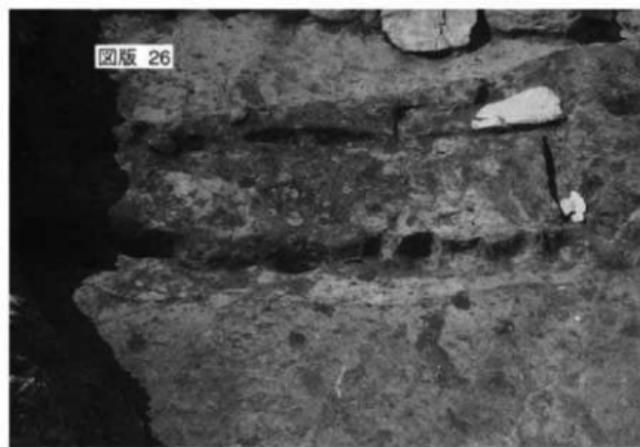


3

1 12号石榴墓

2 13号石榴墓

3 13号石榴墓



1



2



3

1 14号石棺墓
2 1号木棺墓
3 1号木棺墓



1



2

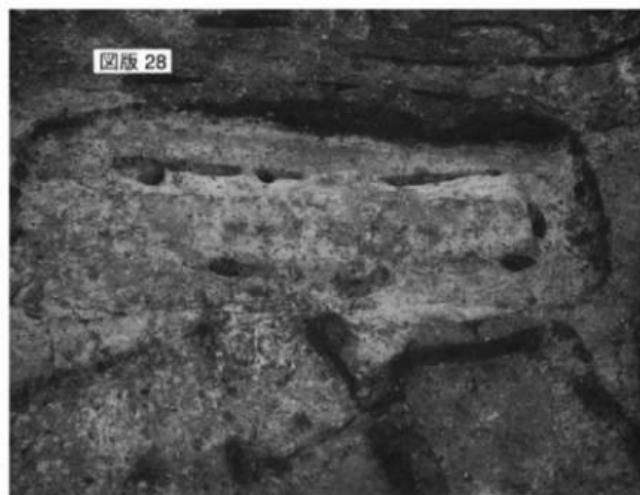


3

1 2号土棺墓

2 3号土棺墓

3 4号土棺墓



1



2



3

1 5号木棺墓

2 6号木棺墓

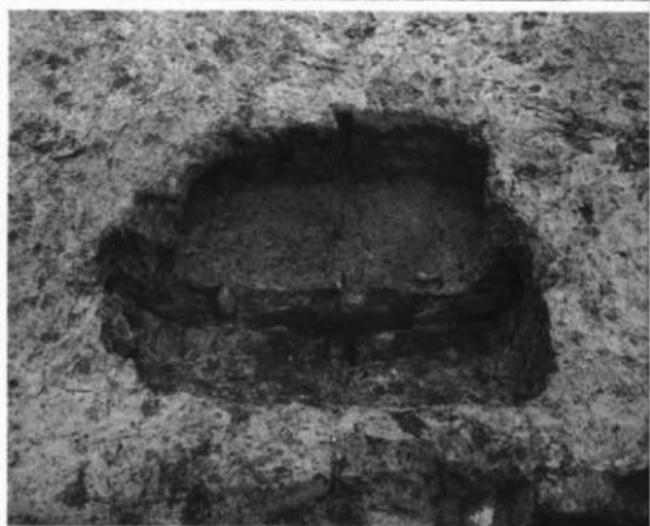
3 7号木棺墓



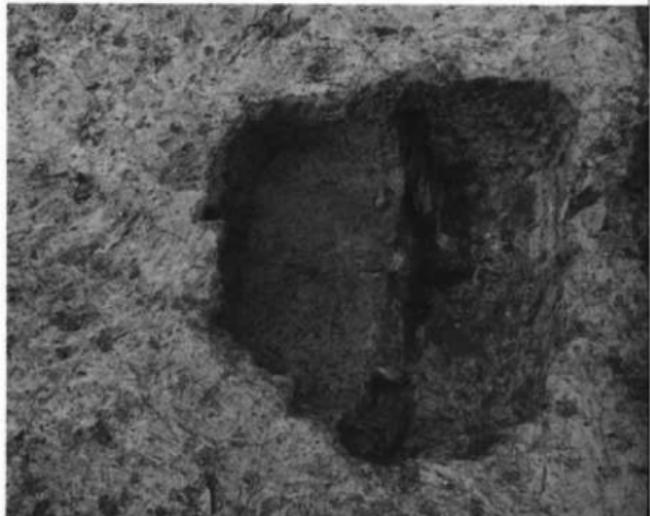
1



4



2



3

- 1 検出時の1号
石蓋横穴土塚墓
- 2 1号石蓋横穴土塚墓
- 3 1号石蓋横穴土塚墓
- 4 同鉄製品出土状況

1

2

3

- 1 1号土壤幕
2 2号土壤幕
3 3号土壤幕



1



2



4



3

1



2

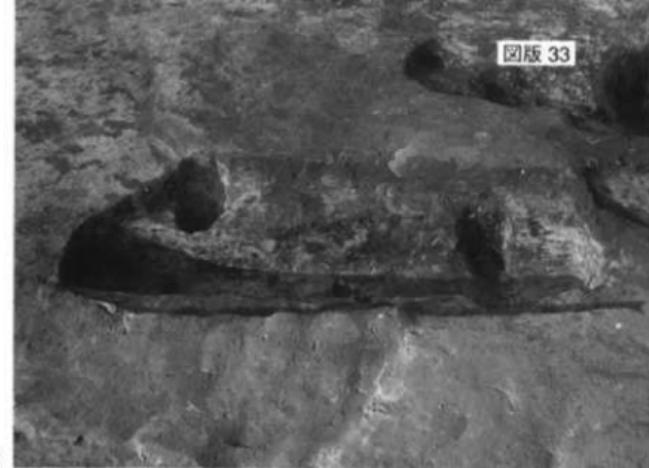


1 6号土壙墓（西から）

2 7号土壙墓（南から）

3 8号土壙墓（南から）

3



1



2



3

1 9号土壤墓（南から）

2 10号土壤墓（北東から）

3 11号土壤墓（北東から）



1



2

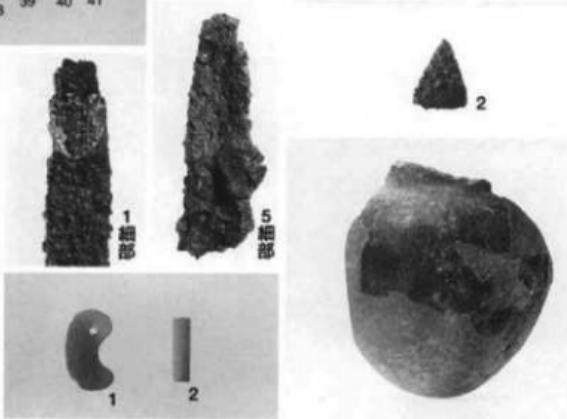
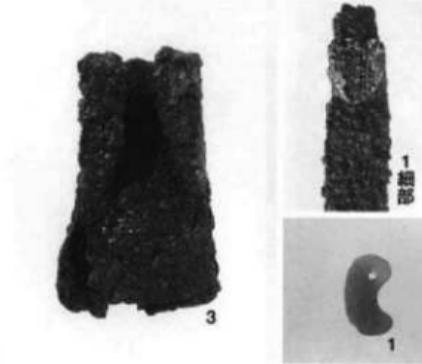
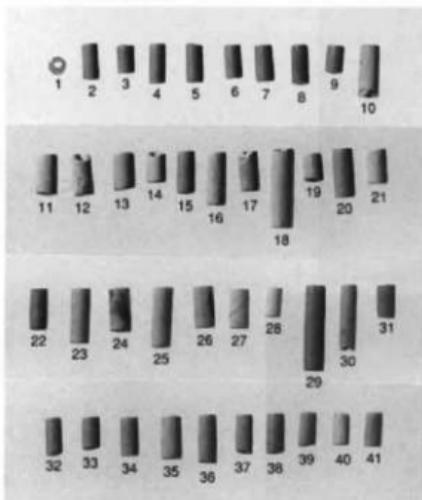
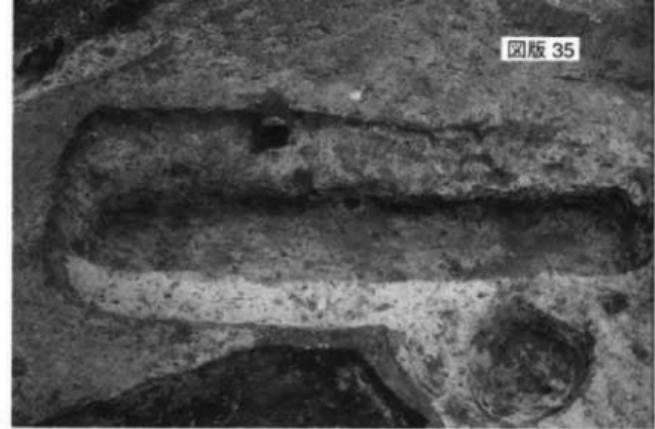


3

1 12号土壤墓（西から）

2 13・14号土壤墓（南から）

3 15号土壤墓（北東から）



2

1 16号土壤墓（北から）

2 墓地群出土遺物



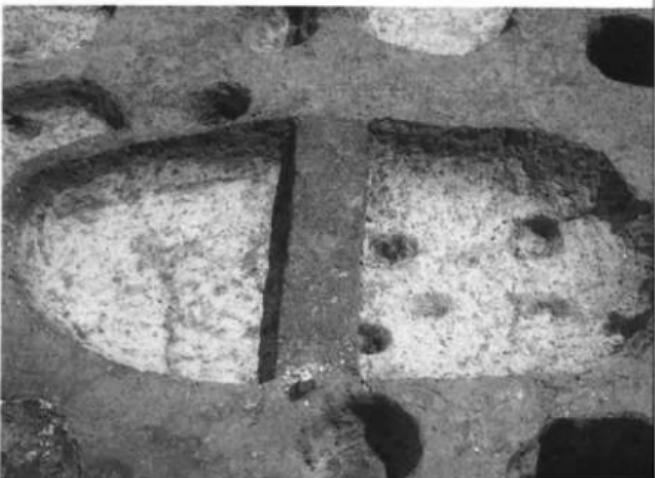
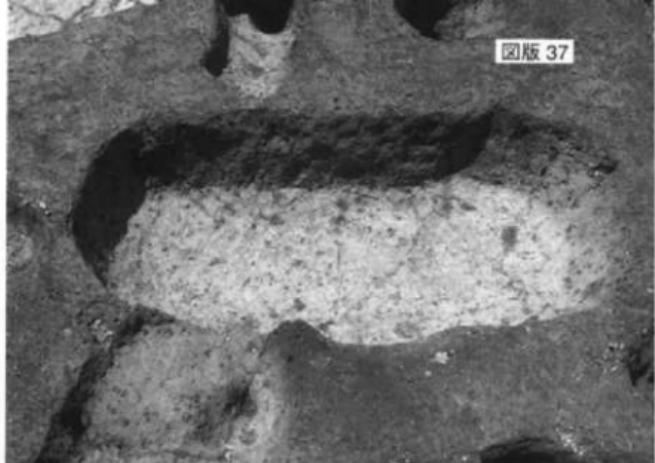
1



2

1 歴史時代の遺構群（北西から）

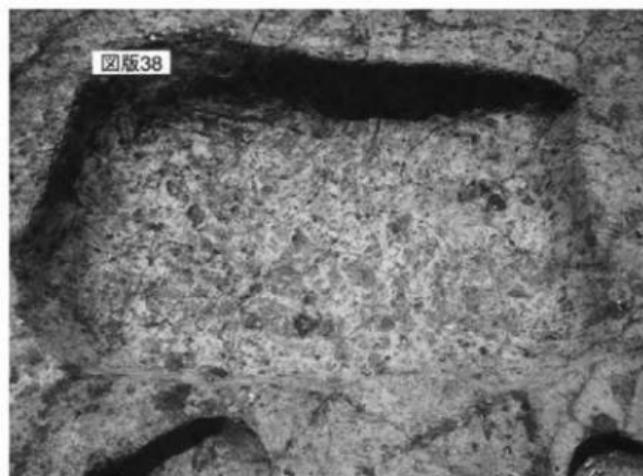
2 歴史時代の遺構群（東西から）



1 1号土壤基（東から）

2 2・3号土壤基（北から）

3 4号土壤基（北から）



1



2

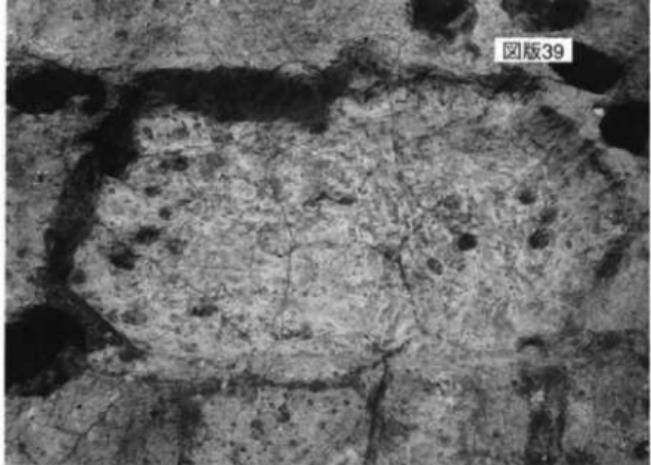


3

1 5号土壤墓（東から）

2 6号土壤墓（東から）

3 7号土壤墓（東から）



1

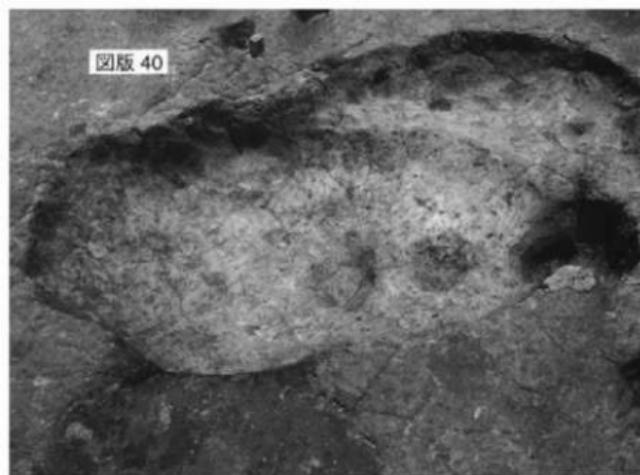


2



3

- 1 8号土壤墓（東から）
- 2 9号土壤墓（東から）
- 3 10号土壤墓（西から）



1



2

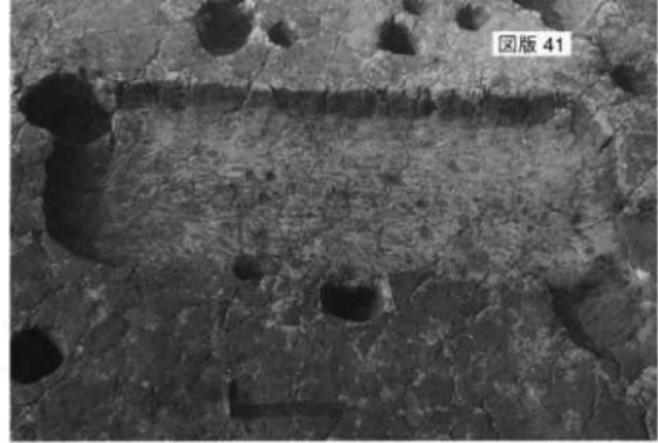


3

1 11号土壤墓（西から）

2 12号土壤墓（北から）

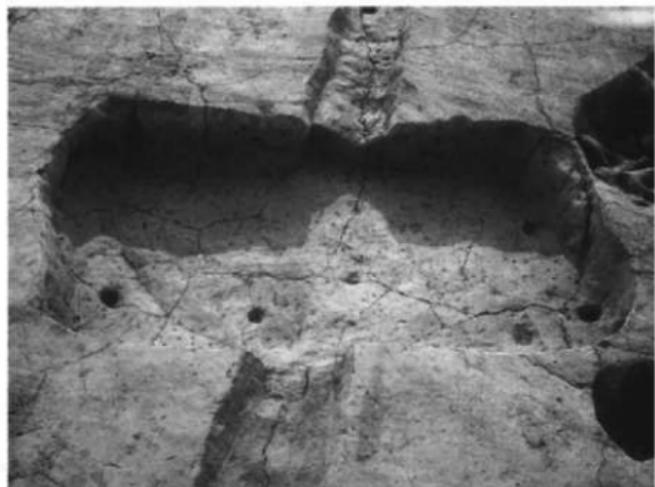
3 13号土壤墓（北から）



1



2

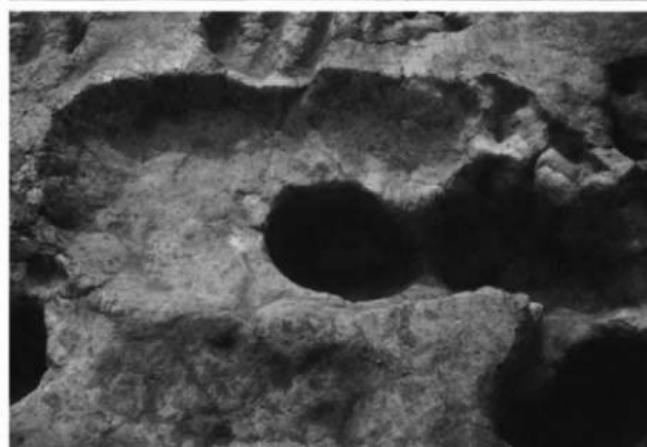
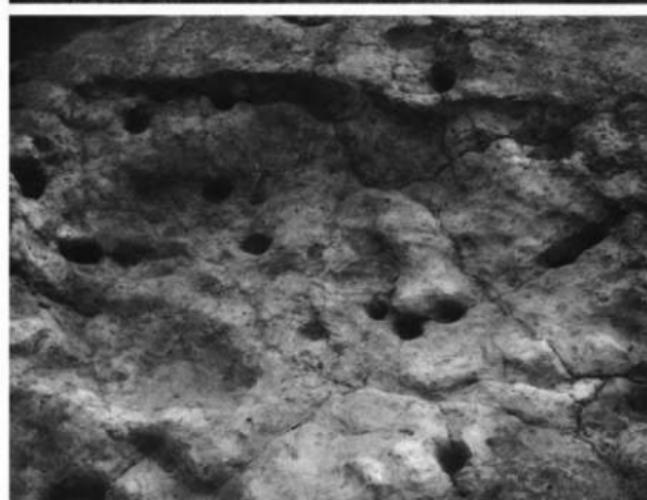
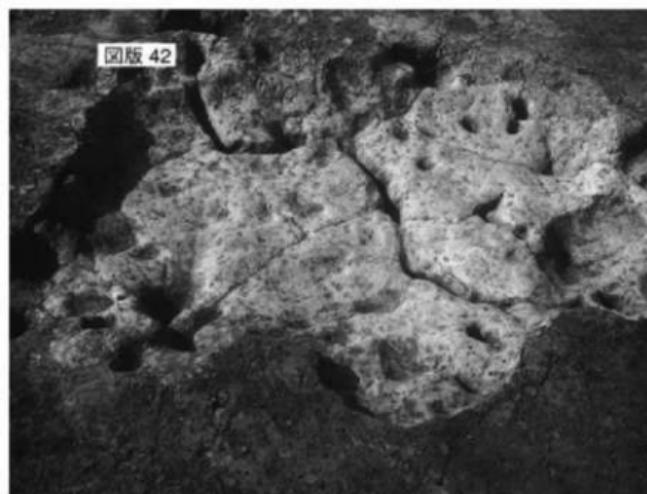


3

1 14号土壙墓（南から）

2 15・16号土壙墓（東から）

3 17号土壙墓（東から）



1 18号土壤墓（南から）
2 19号土壤墓（西から）
3 20号土壤墓（東から）



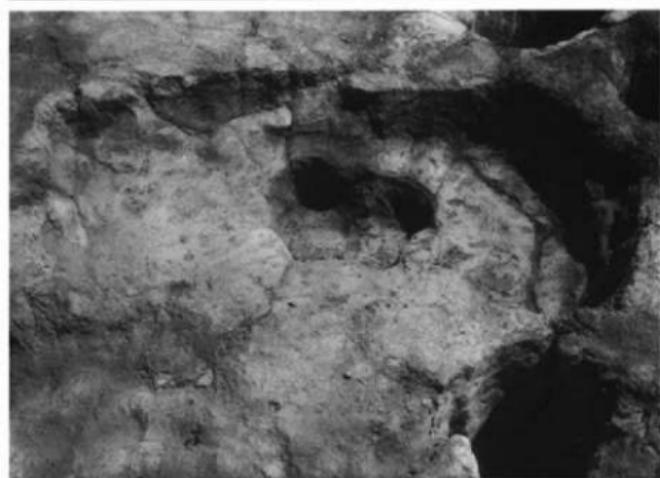
1 21・23号土壙墓（南から）

2 21号土壙墓（南から）

3 22号土壙墓（東から）



1



2

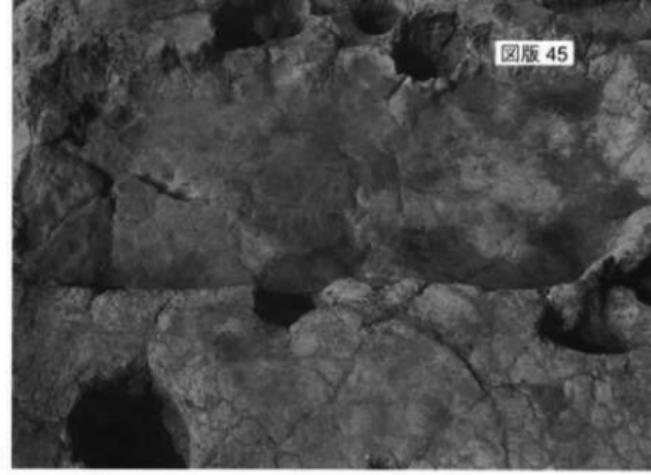


3

1 23号土壤墓（南から）

2 24号土壤墓（西から）

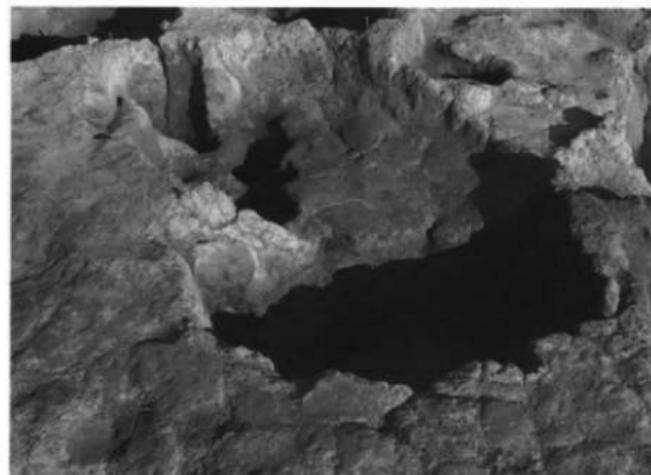
3 25号土壤墓（南から）



1



2

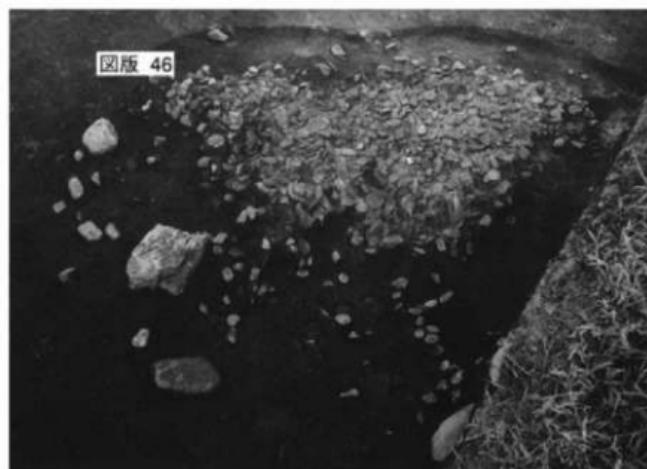


3

1 26号土壤墓（南から）

2 27号土壤墓（南から）

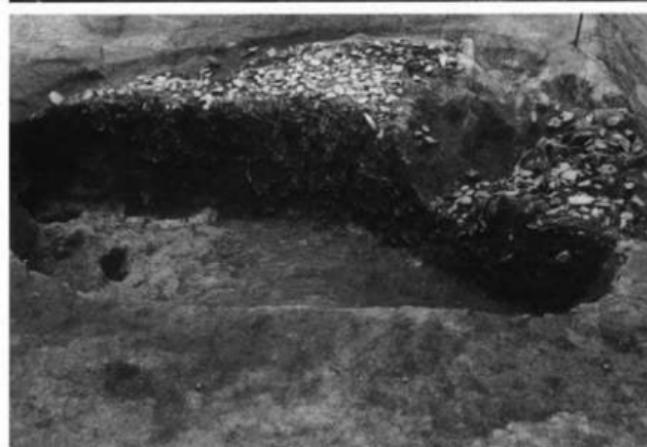
3 28号土壤墓（西から）



1



2



1 検出時の1号集石土壤

2 1号集石土壤（北から）

3 1号集石土壤堆積状況

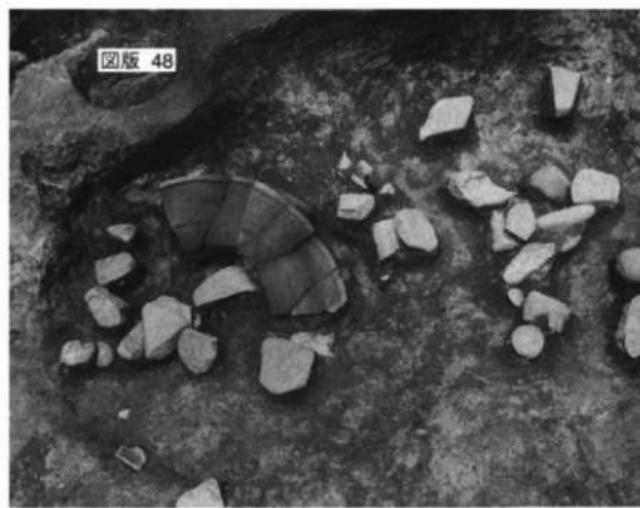
3



1 1号集石土壙堆積状況

2 2号集石土壙（西から）

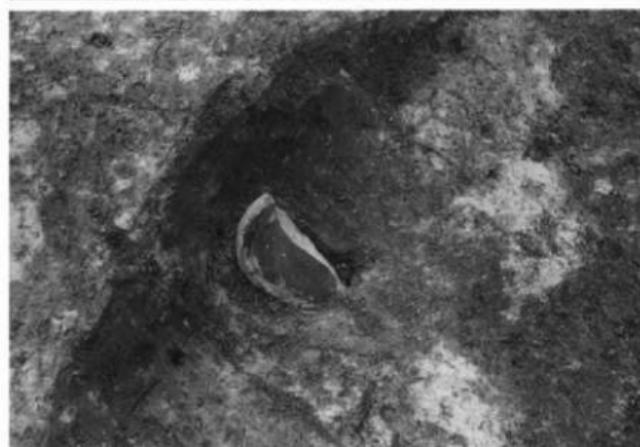
3 3号集石土壙と3号溝（西から）



1



2



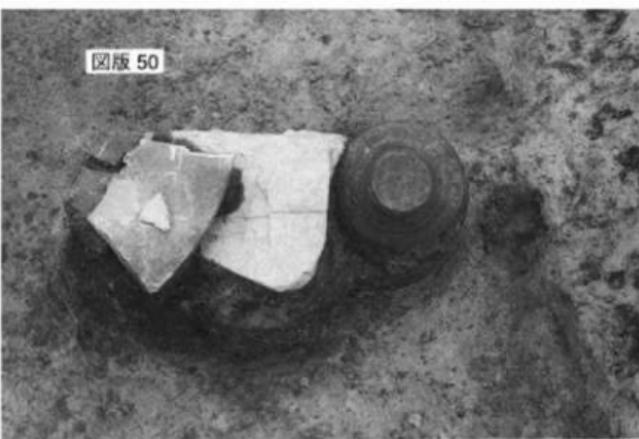
3

- 1 3号集石土壤遺物出土状況
- 2 11号土壤遺物出土状況
- 3 11号土壤遺物出土状況



1 16・71・72号土壤

2 62・70・80号土壤



1



2



1 15号土壤遺物出土状況
2 16号土壤遺物出土状況
3 16・71・79号土壤

3



1



2

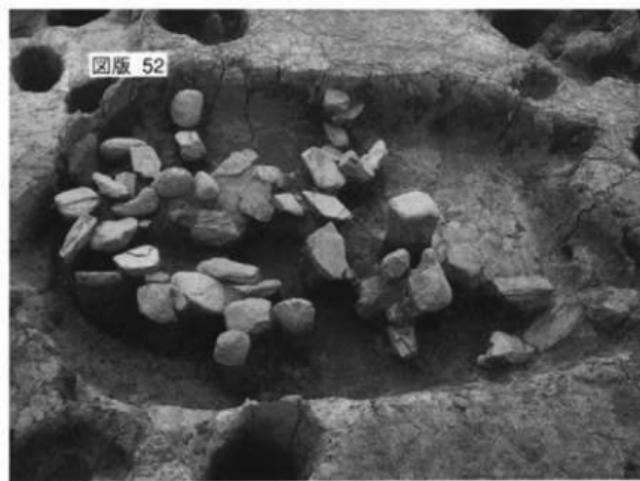


3

1 72号土壤遗物出土状况

2 72号土壤遗物出土状况

3 94号土壤遗物出土状况



1



2



1 88号土壤（東から）
2 133号土壤（南東から）
3 133号土壤堆積状況
(東から)

3



1

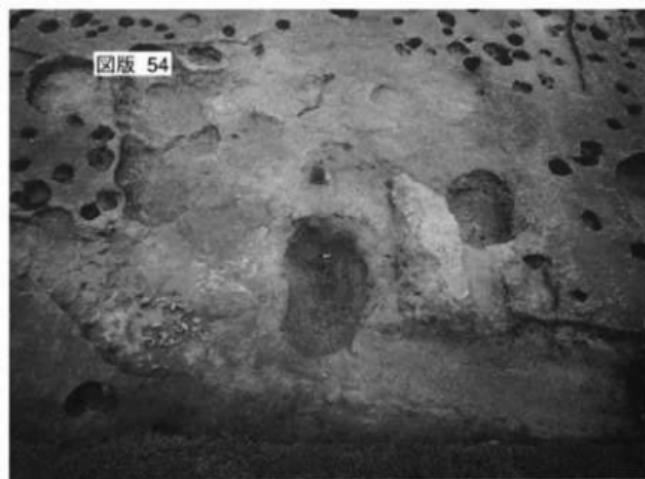


2



3

- 1 150・151号土壤（南から）
- 2 150号土壤堆積状況
- 3 164号土壤（北から）



1



2



1 3号溝と93・94・96号土壤

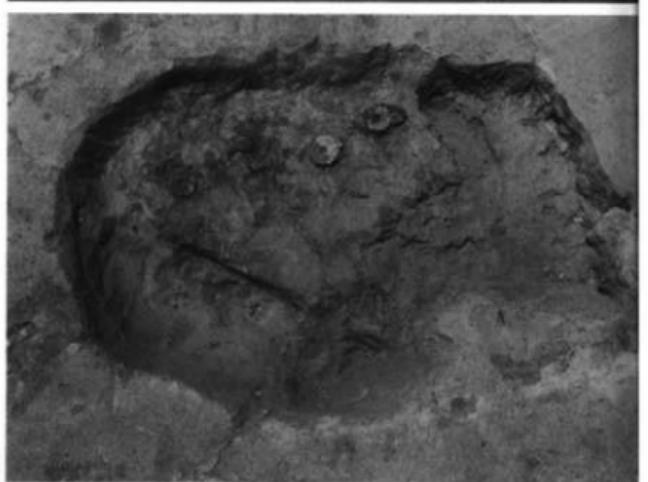
2 1号製鉄炉跡

3 2号製鉄炉跡

3



1

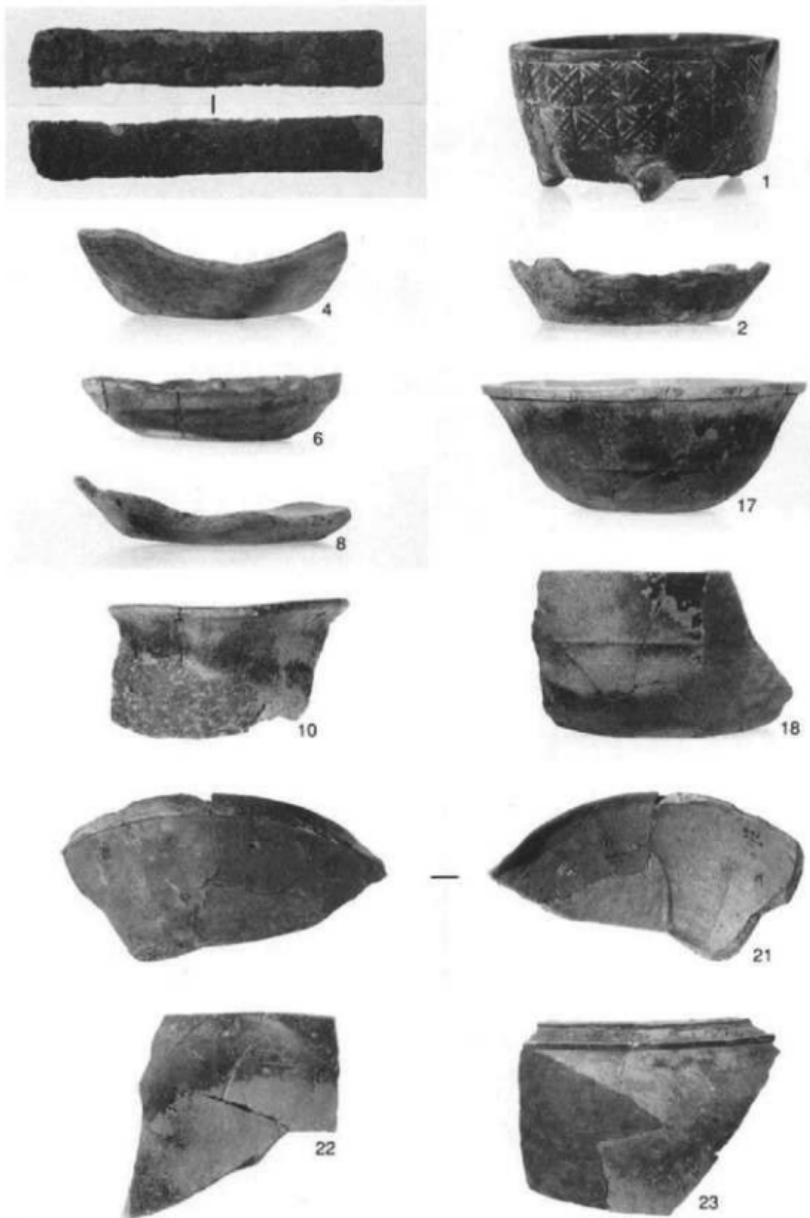


2



3

- 1 土器埋納ビット（南から）
- 2 古銭埋納ビット
- 3 西端調査区（東から）



土壤墓出土銅製品、集石道構出土土器



4



6



7



10



8



13



9



25



28



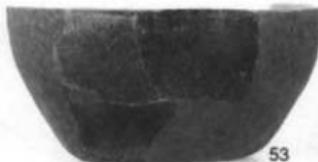
44



51



52



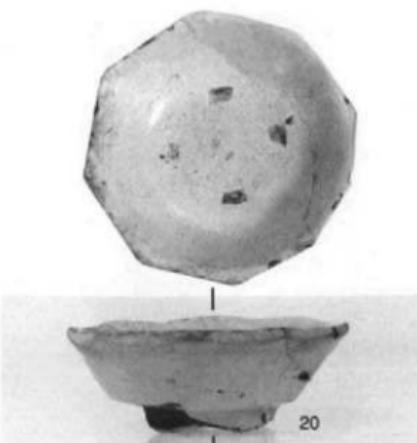
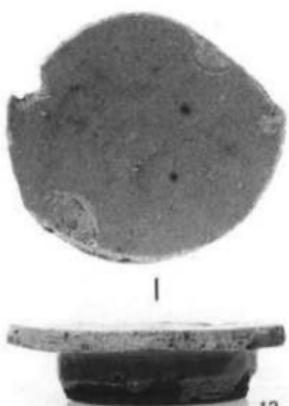
53

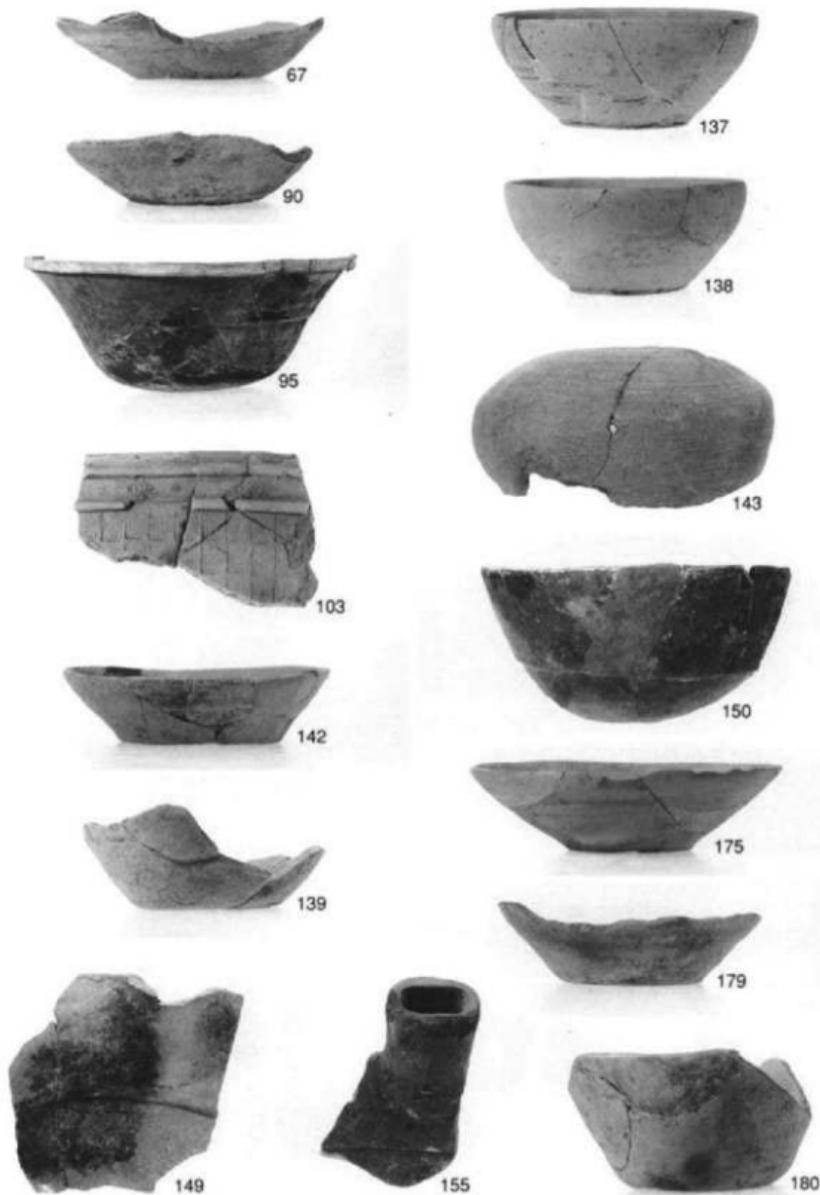


60



61







176



177



191



192



193



194



195



197



200



I



146



324



202



207



213



242



216



243



244



219



263



232



270



234



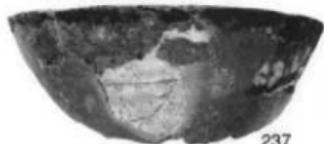
282



236



285



237



297



289



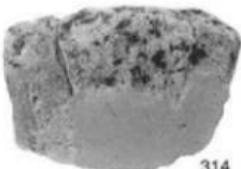
305



300



310



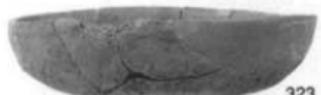
314



320



340



323



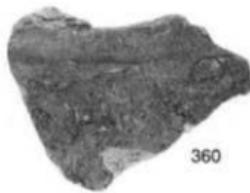
345



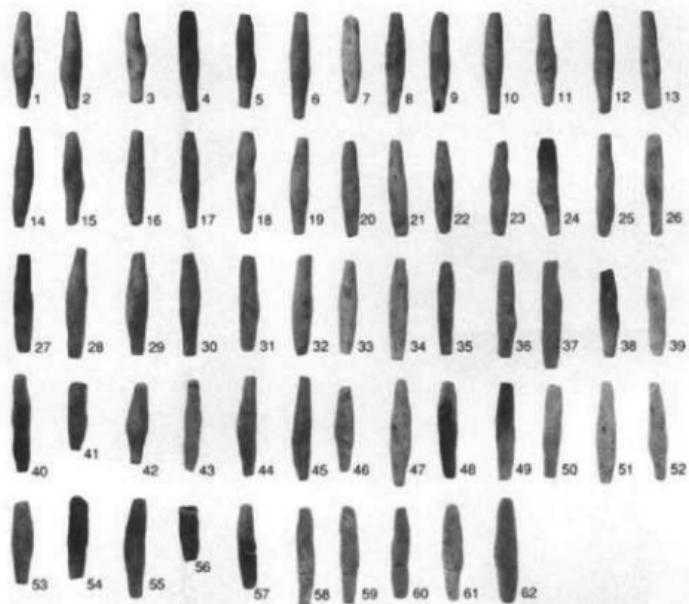
348



349

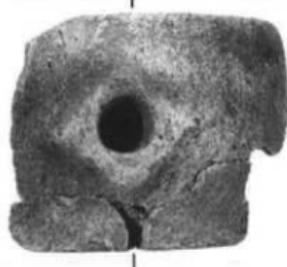


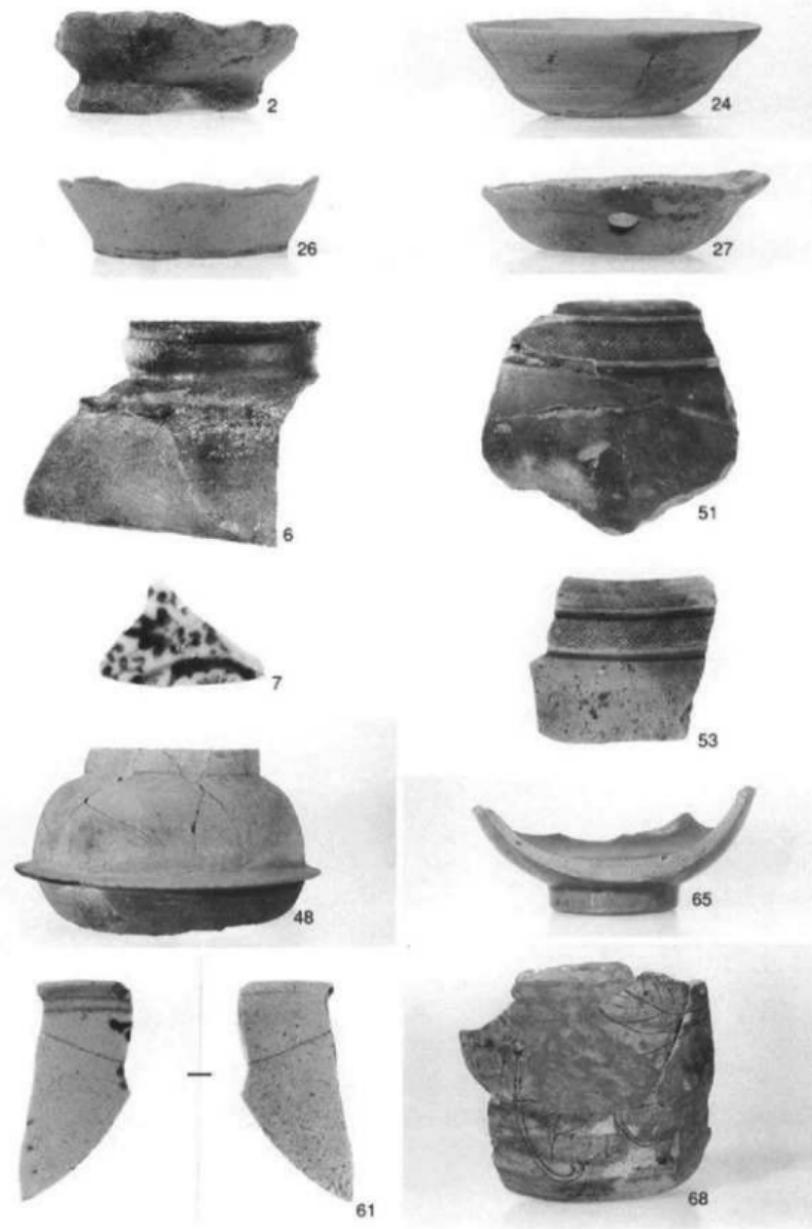
360



集石土壤出土石製品

土壤出土土製品・鐵製品





溝状道構出土土器 I



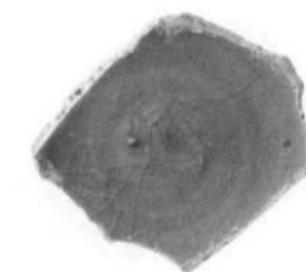
66



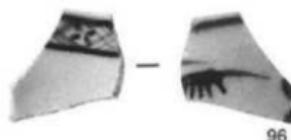
78



88



81



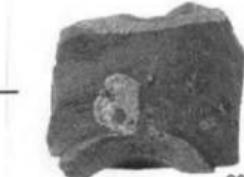
96



97



86



98



99



1



2



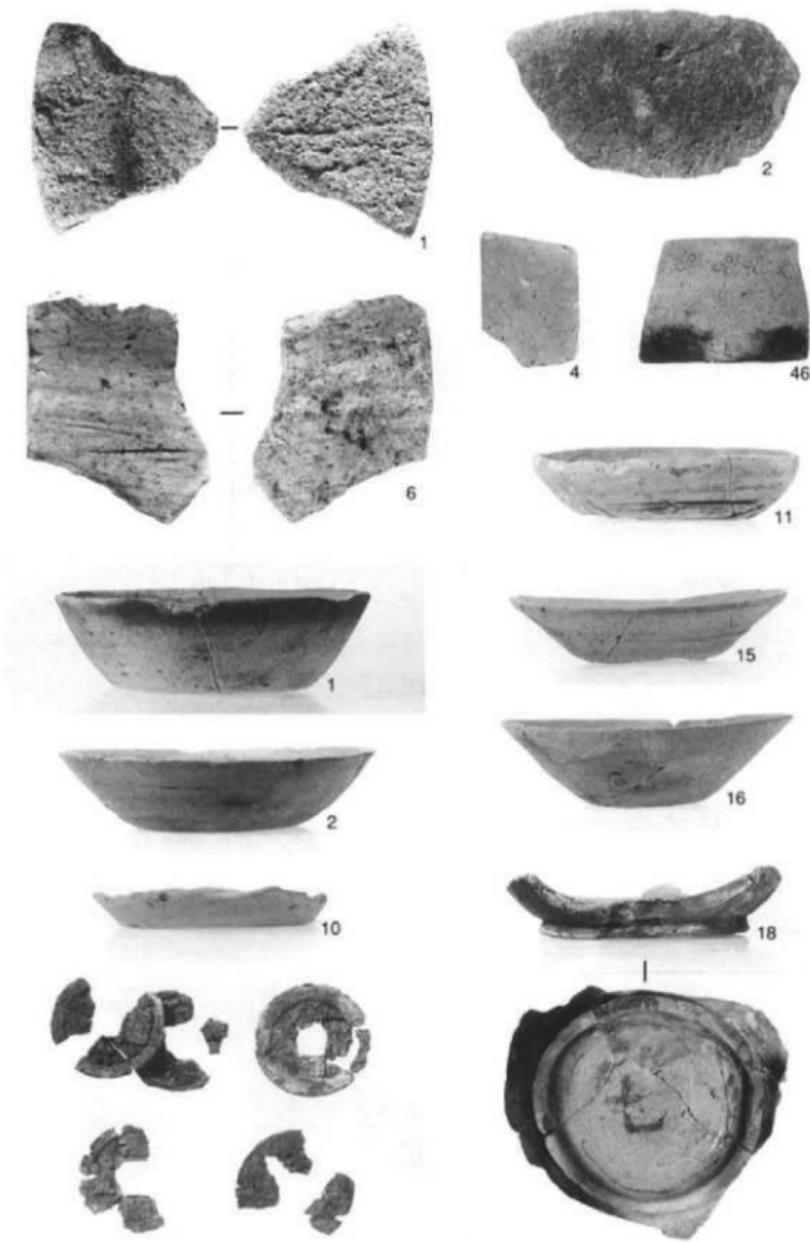
3



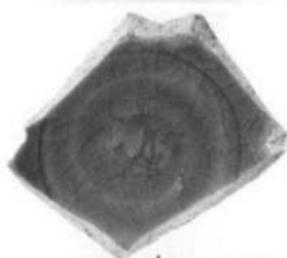
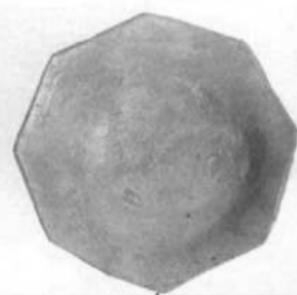
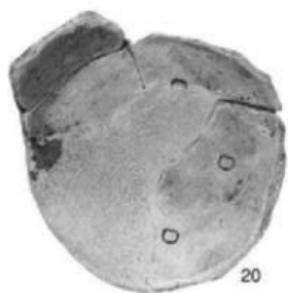
4

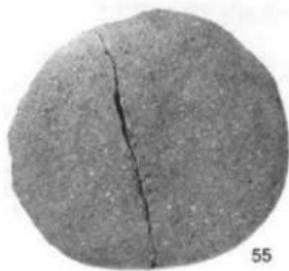
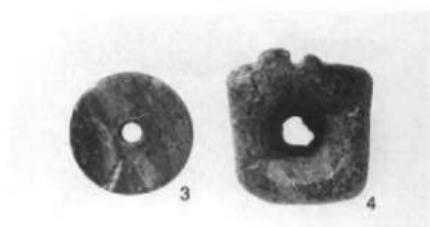
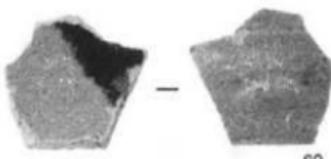
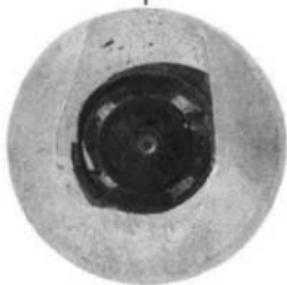
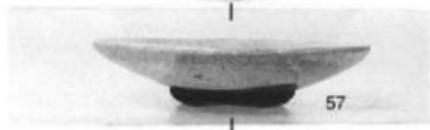
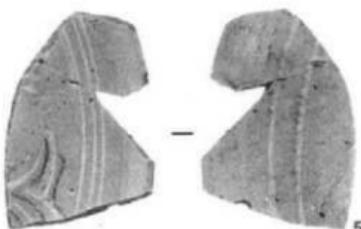


5

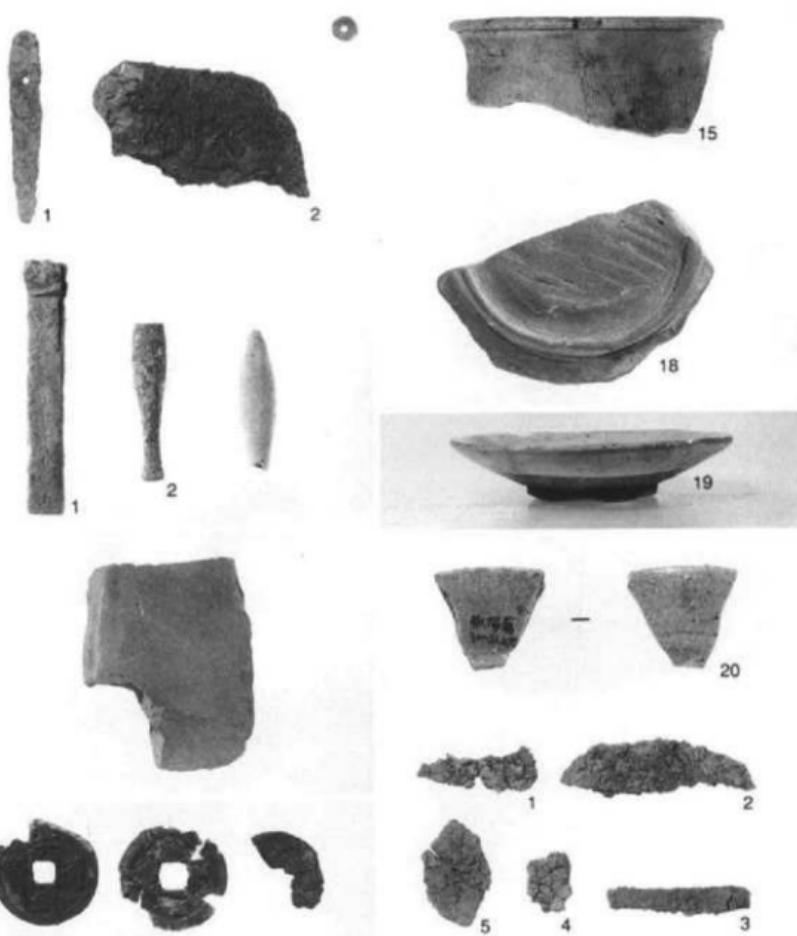


溝状遺構出土石製品、ピット内出土土器・古錢





ビット出土土器 3、石製品



ピット出土金属器・玉類、包含層出土土器・土製品・金属器・石製品



調査風景

報告書抄録

フリガナ	アサ克拉クンアサ克拉マチショモイキツネフカミナミセキノチヨウモ						
書名	朝倉郡朝倉町所在狐塚南遺跡の調査						
副書名							
卷次							
シリーズ名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	-28-						
編集者名	小池史哲						
編集機関	福岡県教育委員会						
所在地	〒812 福岡市博多区東公園7-7						
発行年月日	西暦 1994年 3月31日						
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村: 遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
キツネヅカミナミ 狐塚南	アサクラマチオオアサ 朝倉町大字 イタシアキツネヅカミ 入地字狐塚 2738, 2739 751シテアソヒ 宇治部/上2693 ~2697・2699 2712~2715	404420 570379	33°26'57"	130°42'53"	1985.5.2 1985.9.24	3420m ²	九州横断道建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
狐塚南		弥生~古墳 15~16世紀 17世紀以降	住居跡 43 石棺墓 15 木棺墓 8 石蓋横穴土壙墓 1 石蓋土壙、土壙墓 17 柱穴状ピット 土壙墓 33 土壙 150 集石土壙 3 溝 柱穴状ピット 溝	繩文土器、石器 弥生土器、石器 土師器 須恵器 鉄器、玉類 土師質土器 瓦質土器 瓦器 瓦 輸入陶磁器 国产陶磁器 铁器、石製品			

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所區コード 2133051
登録年度 H5	登録番号 1

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—28—
平成6年 3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号
印刷 隆文堂印刷株式会社
北九州市門司区畠田町1番1号

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

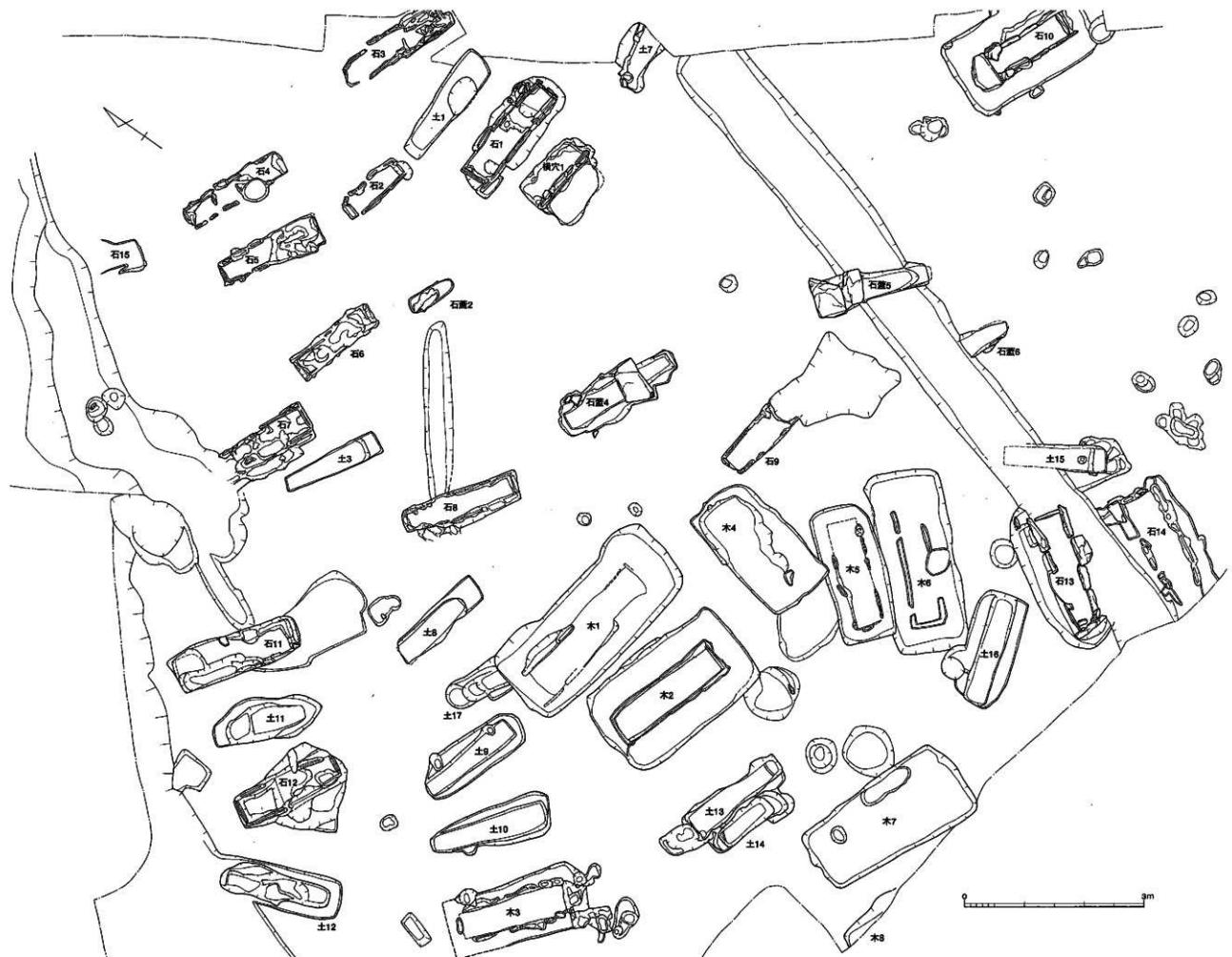
— 28 —

朝倉郡朝倉町所在狐塚南遺跡の調査

付 図



付図1 狐塚南遺跡遺構配図(1/200)



付図2 狐塚南遺跡弥生時代～古墳時代墓地群配置図（1/60）